

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第189集

松原市

三宅西遺跡

一般府道住吉八尾線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—遺構・遺物編—

2009年3月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第189集

松原市

三宅西遺跡

一般府道住吉八尾線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—遺構・遺物編—

財団法人 大阪府文化財センター



調査地遠景(三宅西遺跡から池内遺跡、大和川今池遺跡を望む)(東から)



弥生集落の一部遠景(11区東半部)(西から)



5・6区 3128流路出土縄文土器



1区 3009流路出土遺物

序 文

三宅西遺跡が所在する松原市域は、古くは河内国に属しており、その中でもとは丹比郡と称されていた地域にあたります。その後、丹比郡は三分割され、そのうちの丹北郡に属することになりました。

この三宅西遺跡の周辺には、北に瓜破遺跡、西に大和川今池遺跡などの著名な遺跡があります。これらの遺跡は、古くから調査がおこなわれており、瓜破遺跡は弥生時代、大和川今池遺跡は古墳時代を中心とした遺跡であることが知られています。特に、大和川今池遺跡では、古代の官道である「難波大道」の一部が確認されており、古くからの交通の要所であったことがわかります。また、三宅西遺跡の東側にある三宅集落は、その名から古代の「屯倉」が起源と考えられており、朝廷の直轄地であった可能性も指摘されています。これに対し、三宅西遺跡の周辺は、遺跡の存在は知られていましたが、本格的な発掘調査はおこなわれておらず、実態をつかむまでには至っていませんでした。

さて、大阪府南部では、既存の幹線道路、特に東西方向の道路の混雑が著しくなっており、都市圏の広域化を考えた場合、これに対応できる道路整備が重要になってきています。また、都心部に流入する阪神高速1号環状線の混雑が慢性的であることから、新たな路線として大和川線が計画されました。さらに、近年の大阪バイエリアの開発に伴い、ますます大和川線に対する重要度が増してきました。

この計画路線が、三宅西遺跡や池内遺跡を横切るかたちとなったことから、これらの遺跡調査が必要となりました。ちょうど大和川の南側に東西方向の大規模なトレンチを入れたことになり、この地域の遺跡の実態を把握することができました。全面調査となったことから、対象となる調査区の面積も広く、掘削土量も多くなりましたが、本報告書の刊行により調査の終了となりました。

今回の調査では、縄文時代後期の土器の出土や弥生時代中期前葉の集落の検出、古墳時代の堰の検出、百済土器の出土など、多くの成果をあげることができました。縄文時代後期の土器は、非常に残存状況の良好な一括資料で、一時期を表す標式的な土器群となる可能性をもつほどです。また、弥生集落からは多量のサヌカイトチップや剥片がみつかっており、石器製作の場として機能していたことがわかります。いわゆる松菊里型の竪穴住居もみられ、他地域との交流も考えられます。さらに百済土器である瓶形土器は、日本での出土があまりないもので、貴重なものです。

最後に、調査の実施にあたり、地元自治会、大阪府富田林土木事務所松原建設事業所をはじめ、大阪府教育委員会、松原市教育委員会、(財)大阪市文化財協会の関係各位の方々より、多大なご指導やご協力を得ることができ、心から感謝の意を表します。今後とも、当センターへのご支援を賜りますようお願いいたします。

平成21年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1、本書は、大阪府松原市三宅西地内に計画された、一般府道住吉八尾線外 建設に伴う、三宅西遺跡の発掘調査報告書である。

2、本調査地は、松原市三宅西5丁目から7丁目にかけて所在する。一般府道住吉八尾線外（都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線）の調査であるため、狭長な調査区となっている。調査対象地は、国道309号線から今井戸川までの区間（三宅西工区）である。また、この事業に付帯する工事として、「一般府道住吉八尾線外の建設工事に伴う今井戸川取水施設整備工事」に先立って実施した調査成果も合わせて掲載している。

3、本調査は、大阪府富田林土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、（財）大阪府文化財センターが実施した。現地における発掘調査事業は、平成16～19年度におこなった。基本的な整理作業は、これらの発掘調査事業と並行して実施したほか、本格的な遺物整理事業は、現地調査終了後の平成18～20年度に南部調査事務所でおこなった。各年度の事業体制に関しては第1章に記したとおりである。

4、遺物の写真撮影は、南部調査事務所副主査立花正治（平成20年3月まで）および調査員久禮孝志がおこなった。さらに平成18～20年度の整理作業においては、同所調査第一係および第二係員の協力を得た。平成21年3月の報告書の刊行をもって、すべての作業を完了した。

5、調査の実施にあたっては、大阪府土木部富田林土木事務所および松原建設事業所をはじめ、関係諸機関や下記の方々の援助を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

〈調査指導〉 玉井功・橋本高明・山上弘（大阪府教育委員会）、京嶋覚・田中清美・趙哲済・寺井誠（（財）大阪市文化財協会）、禰亙田佳男・水ノ江和同・渡辺丈彦（文化庁）、足立俊彦・岡本武司（松原市教育委員会）、泉拓良（京都大学）、千葉豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）、山中章（三重大学）、矢野健一（立命館大学）、西山要一（奈良大学）、村上恭通（愛媛大学）、山本直人（名古屋大学）、工藤雄一郎（名古屋大学年代測定総合研究センター）、成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）、浜中邦弘（同志社大学）、宇田津徹朗（宮崎大学）、菅榮太郎（武庫川女子大学）、大下明（雲雀丘学園高校）、今尾文昭・千賀久・岡田憲一（奈良県立橿原考古学研究所）、福永信雄（東大阪市教育委員会）、川端清司（大阪府立自然史博物館）、木下哲夫（あわら市教育委員会）、田部剛士（鈴鹿市教育委員会）、粟田薫（富田林市教育委員会）、上峯篤史・吉村駿吾（同志社大学大学院）、渋谷綾子（総合研究大学院大学）

6、本書の作成・編集は、南部調査事務所調査第一係係長（調査第二係係長：平成20年3月まで）中村淳磯が担当した。本文に関しては、調査担当者による執筆のほか、調査担当者の見解をもとに中村がまとめた部分もある。執筆分担に関しては、目次に記載している。なお、全体に関わる層序に関して

は、同所調査第二係技師小倉徹也（平成18年度）が執筆した。縄文時代の石器に関しては吉村氏、弥生時代の石器に関しては上峯氏が整理作業に関わっており、実測図作成や事実報告などの協力を得た。

7、本調査に関わる遺物、写真、カラスライド、実測図などの各種記録類は、（財）大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1、本書中のレベルはすべてT.P.（東京湾平均海面）を用いている。本書中における座標値は、国土座標系に基づいており、すべてkm単位とする。なお、測量法の改正により、測量基準が日本独自の日本測地系から世界標準の世界測地系へ変更されたことに伴い、当センターでは平成14年度以降の現地調査は、新たな座標系（測地成果2000）で測量をおこなっている。

2、本書中の方位は、すべて国土座標第Ⅵ座標系（原点：東経136° 00′ 00″、北緯36° 00′ 00″）の座標北を示している。調査地で座標北は、磁北より東へ6° 30′、真北より西へ0° 20′ 振れる。

3、現地調査および遺物整理は、（財）大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』（2003）に準拠している。

4、土色の記述は、最終的には小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖20版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修(2006)に準拠した。ただし、調査期間が長期にわたったため、現地調査では、なるべく最新版の『新版標準土色帖』を使用するようにした。

5、実測図の縮尺は、遺構平面図1/400・1/500（付図は1/400）、基本層序断面図1/40・1/200、個別の遺構は平面図1/60、断面図1/40・1/20、遺物実測図は土器1/4（縄文土器は1/3）、石器2/3を原則とするが、紙面の制約上、必要に応じて縮尺を変えたものもある。

6、遺構番号は、全体を通じてではなく、調査時の工区ごとに番号を付けている。必ずしも時代順にはなっていないため、時期の前後するものもある。また、調査時期の違いにより、隣接していても順序だっていない場合がある。第3章で詳述するが、このように遺構番号の付け方が統一されていないため、整理段階で調査時の番号を踏襲しつつ、新たに番号を付けるようにした。竪穴住居や掘立柱建物に関しては、調査時の番号を使わず、新たに番号を付けている。

7、遺物番号は、挿図・写真ともに一致する通し番号である。

8、写真の縮尺は任意である。

目 次

第1分冊（遺構・遺物編）

巻頭カラー図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査にいたる経緯と経過	（中村）	1
第2章 位置と環境		6
第1節 位置と周辺の遺跡		6
1 地理的環境	（中村）	6
2 瓜破台地の地形と地質の概要	（小倉）	7
3 歴史的環境	（中村）	9
第2節 文献による歴史的記録		13
第3章 調査の方法	（中村）	18
第1節 現地調査		18
第2節 整理作業		20
第4章 調査成果の概要		23
第1節 基本層序	（小倉）	23
第2節 遺構・遺物の概略	（中村）	27
第5章 調査成果		33
第1節 1区の成果	（中村・村上・池田・清水）	33
1 層序		33
2 古墳時代以前の遺構・遺物		34
3 古代以降の遺構・遺物		57
4 小結		61
第2節 2～4区および13・14区の成果	（中村・村上・池田・清水）	63
1 層序		63
2 縄文時代の遺構・遺物		69

3	古墳時代の遺構・遺物	70
4	古代以降の遺構・遺物	88
5	小結	97
第3節	5・6区の成果 (中村・大野・村上・池田・清水)	98
1	層序	98
2	縄文時代の遺構・遺物	101
3	古墳時代以降の遺構・遺物	131
4	小結	132
第4節	7～9区および15～17区の成果 (中村・村上・池田・小倉・清水)	134
1	層序	134
2	縄文時代の遺構・遺物	145
3	弥生～古墳時代の遺構・遺物	150
4	古代以降の遺構・遺物	192
5	小結	200
第5節	10～12区および18～20区、04-1区、07-1・2調査の成果 (中村・村上・森井・河端・清水)	201
1	層序	201
2	弥生時代の遺構・遺物	209
3	古墳時代以降の遺構・遺物	382
4	小結	402

第2分冊 (分析・総括・観察表編)

第6章	各種分析	403
第1節	大和川下流域における遺跡形成過程の総合調査 (三宅西遺跡) (財団法人 大阪市文化財協会)	403
第2節	三宅西遺跡の種実同定分析および樹種同定分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	443
第3節	大阪府松原市三宅西遺跡から出土した縄文時代後期の土器付着物の ¹⁴ C年代測定 (名古屋大学 工藤雄一郎・山本直人)	464
第4節	三宅西遺跡から出土した赤色顔料関係遺物 —大阪府下における縄文時代の赤色関係遺物— (清水)	471
第7章	総括	477
第1節	三宅西遺跡における自然科学分析の評価 (清水)	478
第2節	縄文土器および古墳時代の土器について (清水)	480
第3節	弥生時代中期の集落について (森井)	481

第4節	三宅西遺跡出土の弥生土器	（森井）	486
第5節	弥生時代中期の石器について	（村上）	490
第6節	3009流路の木組みについて	（中村）	493
第7節	まとめにかえて	（中村）	495

遺物観察表

遺物観察表

3128流路出土縄文土器観察表

打製石器観察表

磨製石器観察表

竪穴住居19出土サヌカイト観察表

参考文献一覧

報告書抄録

第3分冊（写真図版編）

目次

写真図版

挿 図 目 次

図 1	松原市の位置	1
図 2	大阪都市再生環状道路計画図	1
図 3	大和川線道路計画図	2
図 4	調査区位置図（1/10,000）	3
図 5	地形分類図（『大和川今池遺跡（その1・その2）』より）	6
図 6	瓜破台地西部の東西地質断面図（趙原図）	8
図 7	周辺の遺跡（1/25,000）	10
図 8	周辺に残る条里地割（『松原市史』第一巻 足利健亮氏原図より改変）	12
図 9	調査地の東西地質断面図	25
図 10	調査区配置図（1/4,000）	28
図 11	1区 南壁断面図	35・36

図 12	1区 第3～5面遺構平面図	37
図 13	3107流路、第7層 出土遺物	38
図 14	1区 第2面遺構平面図	39
図 15	1区 第2面ピット・土坑 断面図	40
図 16	3018・3179土坑 出土遺物	41
図 17	3179土坑 平・断面図	41
図 18	1区 第2面溝・流路 断面図	42
図 19	3009流路内木組み 平面図	43
図 20	3009流路 出土遺物(1)	45
図 21	3009流路 出土遺物(2)	46
図 22	3009流路 出土遺物(3)	47
図 23	3009流路 出土遺物(4)	49
図 24	3009流路 出土遺物(5)	50
図 25	3009流路 出土遺物(6)	51
図 26	3009流路 出土遺物(7)	52
図 27	3009流路 出土遺物(8)	53
図 28	3002流路 断面図	54
図 29	3002流路 出土遺物	55
図 30	3014流路 断面図	56
図 31	1区 古墳時代包含層 出土遺物	56
図 32	1区 第1面遺構平面図	58
図 33	1区 第1面土坑・井戸 断面図	59
図 34	1区 第1面溝 断面図	60
図 35	1区 古代以降 出土遺物	61
図 36	日本と韓国の瓶型土器比較	62
図 37	2～4区 南壁断面図	65・66
図 38	13・14区 南壁断面図	67・68
図 39	3・4区 出土遺物	70
図 40	2～4区、13・14区 第4面遺構平面図	71・72
図 41	掘立柱建物31 柱穴断面図	73
図 42	掘立柱建物32 平・断面図	74
図 43	掘立柱建物33・34 平・断面図	75
図 44	13・14区ピット 断面図	77
図 45	3596・3608土坑 平・断面図	78
図 46	3596・3597・3608土坑 出土遺物	79
図 47	3362・3363・3366土坑 出土遺物	80
図 48	2～4区土坑 断面図	81
図 49	3129・3134土坑、3027井戸 断面図	83

図 50	13・14区土坑 出土遺物	84
図 51	3130・3131井戸 断面図	85
図 52	13・14区井戸 出土遺物	86
図 53	3350溝 出土遺物	87
図 54	3350・3352溝 断面図	87
図 55	2～4区、13・14区 古墳時代包含層 出土遺物	88
図 56	2～4区、13・14区 第3面遺構平面図	89
図 57	2～4区ピット（古墳時代） 断面図	90
図 58	3293溝（3581流路） 断面図	91
図 59	3293溝（3581流路） 出土遺物	92
図 60	3093土坑、3094井戸 断面図	93
図 61	2～4区、13・14区 第2面遺構平面図	94
図 62	2～4区、13・14区 第1面遺構平面図	95・96
図 63	3280井戸 断面図	97
図 64	5・6区 南壁断面	99・100
図 65	3187落ち込み 断面図	101
図 66	3152流路 断面図	101
図 67	5・6区 第2面遺構平面図	102
図 68	3152流路、包含層 出土遺物	103
図 69	5・6区第9層 出土遺物（石器）	104
図 70	3128流路 断面図	105
図 71	3128流路 出土遺物（縄文土器1）	113
図 72	3128流路 出土遺物（縄文土器2）	114
図 73	3128流路 出土遺物（縄文土器3）	115
図 74	3128流路 出土遺物（縄文土器4）	116
図 75	3128流路 出土遺物（縄文土器5）	117
図 76	3128流路 出土遺物（縄文土器6）	118
図 77	3128流路 出土遺物（縄文土器7）	119
図 78	3128流路 出土遺物（剥片石器1）	123
図 79	3128流路 出土遺物（剥片石器2）	124
図 80	3128流路 出土遺物（剥片石器3）	125
図 81	3128流路 出土遺物（剥片石器4）	126
図 82	3128流路 出土遺物（礫石器）	127
図 83	3128流路出土剥片石器サイズ	130
図 84	5・6区 第1面遺構平面図	131
図 85	5・6区第7層、南側溝 出土遺物（石器）	132
図 86	5・6区第7層、南側溝 出土遺物（土器）	132
図 87	7区 南壁・東壁断面図	135・136

図 88	層序と遺構の模式図	138
図 89	8・9区 南壁・東壁断面図	139・140
図 90	9区 南北柱状対比図	141
図 91	15～17区 北壁断面図	143・144
図 92	3512流路 断面図	146
図 93	7～9区、15～17区 第8面遺構平面図	147・148
図 94	7区、15～17区包含層 出土遺物（石器）	149
図 95	3527・3619・3620・3621・3622流路 出土遺物（縄文土器）	149
図 96	7～9区、15～17区 第7～4面遺構平面図	151・152
図 97	15～17区 北側溝 出土遺物（石器）	153
図 98	2259溝 断面図	154
図 99	3115流路、第7d層 出土遺物	155
図100	掘立柱建物35 平面図	156
図101	3413井戸 出土遺物	157
図102	3411土坑・3413井戸・3279溝 断面図	157
図103	3345井戸 断面図	158
図104	3344流路 断面図	159
図105	3410流路 断面図	160
図106	3344・3410流路 出土遺物	161
図107	7区、15～17区第7c層 出土遺物	162
図108	7～9区、15～17区 第3面遺構平面図	163・164
図109	掘立柱建物36 平面図	165
図110	3195竪穴遺構付近遺構 平・断面図	167
図111	3195・3221竪穴遺構、3330溝 出土遺物	168
図112	3322竪穴遺構 断面図	169
図113	3338・3324・3194・3102土坑 断面図	171
図114	3194・3203・3324・3616土坑、3253落ち込み 出土遺物	172
図115	3265溝 断面図	174
図116	3190・3192・3193・3328溝 断面図	175
図117	3272～3275溝 断面図	176
図118	3192・3193・3273・3274・3328・3336溝 出土遺物	177
図119	溝群（波板状遺構）1 平・断面図	179
図120	溝群（波板状遺構）2 平・断面図	180
図121	7～9区、15～17区 第2面遺構平面図	181・182
図122	3323土坑 断面図	184
図123	3511・3514井戸 断面図	185
図124	3098溝 断面図	186
図125	3526・3188・3189溝、3125流路 断面図	187

図126	3323土坑、3511井戸、3098・3188・3189溝 出土遺物	188
図127	3125流路 出土遺物	189
図128	8区、15～17区第7a層 出土遺物	190
図129	2258溝 断面図	192
図130	2258溝 出土遺物(1)	193
図131	2258溝 出土遺物(2)	193
図132	2362流路 断面図	194
図133	2362流路 出土遺物	194
図134	7～9区、15～17区 第1面 遺構平面図	195・196
図135	3515・3516・3517井戸 断面図	197
図136	3255溝 断面図	199
図137	3271土坑、3098・3255溝、包含層(古代) 出土遺物	200
図138	10区 南壁断面図	202
図139	11区 南壁断面図	203・204
図140	19区南西端部 南壁断面図	205
図141	10区 弥生時代 遺構平面図	208
図142	竪穴住居1 出土遺物(土器)	209
図143	竪穴住居1(1期目) 平・断面図	210
図144	竪穴住居1(2期目) 平・断面図	211
図145	竪穴住居2 平・断面図	212
図146	竪穴住居1・2 出土遺物(石器1)	214
図147	竪穴住居1・2 出土遺物(石器2)	215
図148	掘立柱建物1 平・断面図	216
図149	10区柱列 平・断面図	217
図150	2028・2031土坑 平・断面図	219
図151	4048・4104土坑 平・断面図	220
図152	2028・2029・2031・4047・4104土坑 出土遺物	221
図153	2100流路 断面図	222
図154	2100流路 出土遺物(土器)	222
図155	2100流路 出土遺物(石器)	223
図156	10区第7e層 出土遺物	223
図157	10区、包含層 出土遺物(石器)	224
図158	04-1区 弥生時代遺構 平面図・西壁断面図	226
図159	11区 弥生時代 遺構平面図	227・228
図160	竪穴住居3 平・断面図(1)	230
図161	竪穴住居3 平・断面図(2)	231
図162	竪穴住居4 平・断面図(1)	232
図163	竪穴住居4 平・断面図(2)	233

図164	竪穴住居5	平・断面図	234
図165	竪穴住居6	平・断面図	236
図166	竪穴住居7～9	平・断面図	239・240
図167	竪穴住居10	平・断面図	241
図168	竪穴住居14	平・断面図	242
図169	竪穴住居11～13	平・断面図	243・244
図170	11区竪穴住居	出土遺物(1)土器	245
図171	11区竪穴住居	出土遺物(2)打製石器1	246
図172	11区竪穴住居	出土遺物(3)打製石器2	247
図173	11区竪穴住居	出土遺物(4)磨製石器1	248
図174	11区竪穴住居	出土遺物(5)磨製石器2	249
図175	掘立柱建物2	平・断面図	250
図176	掘立柱建物3	平・断面図	251
図177	掘立柱建物4・5	平・断面図	252
図178	掘立柱建物9	平・断面図	253
図179	掘立柱建物10・11	平・断面図	254
図180	掘立柱建物12・13	平・断面図	256
図181	掘立柱建物14	平・断面図	257
図182	11区柱列	平・断面図	258
図183	11区ピット	平・断面図	259・260
図184	2360ピット	出土遺物	261
図185	11区土坑	平・断面図(1)	263
図186	11区土坑	平・断面図(2)	264
図187	11区土坑	出土遺物(1)土器1	265
図188	11区土坑	出土遺物(2)土器2	266
図189	11区土坑	出土遺物(3)石器1	267
図190	11区土坑	出土遺物(4)石器2	268
図191	2129溝	平・断面図	270
図192	11区溝	出土遺物(土器)	271
図193	11区溝	出土遺物(石器)	271
図194	2120流路	断面図	272
図195	2120流路	出土遺物(1)	273
図196	2120流路	出土遺物(2)	274
図197	11区第7e層	出土遺物(土器)	276
図198	11区包含層	出土遺物(石器1)	277
図199	11区包含層ほか	出土遺物(石器2)	278
図200	11区包含層	出土遺物(石器3)	279
図201	11区包含層	出土遺物(石器4)	280

図202	12区 東壁断面図	282
図203	18区 弥生時代 遺構平面図	283
図204	方形周溝墓1 平・断面図	284
図205	方形周溝墓1 出土遺物(土器)	285
図206	方形周溝墓1、包含層 出土遺物(石器)	285
図207	瓜破遺跡(UR97-19) 方形周溝墓801 平面図(大阪市文化財協会1999より)	286
図208	竪穴住居15 平・断面図	288
図209	19区 弥生時代 遺構平面図	289・290
図210	竪穴住居16 平・断面図	291
図211	竪穴住居17 平・断面図	292
図212	竪穴住居18 平・断面図	294
図213	竪穴住居18 ピット断面図	295
図214	竪穴住居19 平・断面図	297・298
図215	竪穴住居20 平・断面図	301
図216	竪穴住居21 平・断面図	302
図217	19区竪穴住居 出土遺物(1) (木製品)	303
図218	竪穴住居22 平・断面図	304
図219	竪穴住居23 平・断面図	305
図220	竪穴住居24 平・断面図	306
図221	19区竪穴住居 出土遺物(2) 土器	307
図222	19区竪穴住居 出土遺物(3) 石器1	308
図223	19区竪穴住居 出土遺物(4) 石器2	309
図224	19区竪穴住居 出土遺物(5) 石器3	310
図225	19区竪穴住居 出土遺物(6) 石器4	311
図226	19区竪穴住居 出土遺物(7) 石器5	312
図227	19区竪穴住居 出土遺物(8) 石器6	313
図228	19区竪穴住居 出土遺物(9) 石器7	314
図229	19区竪穴住居 出土遺物(10) 石器8	315
図230	19区竪穴住居 出土遺物(11) 石器9	316
図231	19区竪穴住居 出土遺物(12) 石器10	317
図232	19区竪穴住居 出土遺物(13) 石器11	318
図233	19区竪穴住居 出土遺物(14) 石器12	319
図234	19区竪穴住居 出土遺物(15) 石器13	320
図235	19区竪穴住居 出土遺物(16) 石器14	321
図236	19区竪穴住居 出土遺物(17) 石器15	322
図237	19区竪穴住居 出土遺物(18) 石器16	323
図238	19区竪穴住居 出土遺物(19) 石器17	324
図239	19区竪穴住居 出土遺物(20) 石器18	325

図240	19区竪穴住居	出土遺物(21)石器19	326
図241	19区竪穴住居	出土遺物(22)石器20	327
図242	19区竪穴住居	出土遺物(23)石器21	328
図243	19区竪穴住居	出土遺物(24)石器22	329
図244	19区竪穴住居	出土遺物(25)石器23	330
図245	19区竪穴住居	出土遺物(26)石器24	331
図246	19区竪穴住居	出土遺物(27)石器25	332
図247	19区竪穴住居	出土遺物(28)石器26	333
図248	19区竪穴住居	出土遺物(29)石器27	334
図249	掘立柱建物6	平・断面図	336
図250	掘立柱建物7	平・断面図	336
図251	掘立柱建物8	平・断面図	337
図252	掘立柱建物15・16	平・断面図	338
図253	19区柱列・ピット	平・断面図	339・340
図254	4231・4241土坑	平・断面図	342
図255	19区土坑	出土遺物(弥生前期土器1)	343
図256	19区土坑	出土遺物(弥生前期土器2)	344
図257	4273・4274土坑	平・断面図	346
図258	19区土坑	平・断面図(1)	348
図259	19区土坑	平・断面図(2)	351
図260	19区土坑	平・断面図(3)	354
図261	2122土坑	出土遺物(鉄製品)	356
図262	19区土坑	平・断面図(4)	357
図263	19区土坑	出土遺物(弥生中期土器1)	360
図264	19区土坑	出土遺物(弥生中期土器2)	361
図265	19区土坑	出土遺物(弥生中期土器3)	362
図266	19区土坑	出土遺物(打製石器1)	363
図267	19区土坑	出土遺物(打製石器2)	364
図268	19区土坑	出土遺物(打製石器3)	365
図269	19区土坑	出土遺物(打製石器4)	366
図270	19区土坑	出土遺物(磨製石器1)	367
図271	19区土坑	出土遺物(磨製石器2)	368
図272	19区溝	出土遺物(土器)	369
図273	19区溝	出土遺物(磨製石器)	371
図274	19区溝	出土遺物(打製石器)	372
図275	2121・2410流路	出土遺物(打製石器)	373
図276	2120・2121流路	出土遺物(土器)	374
図277	2410(4220)流路	出土遺物	375

図278	19区第7d～9a層（弥生時代以前）	出土遺物（土器）	376
図279	19区第4・7d～e層（弥生時代以前）	出土遺物（打製石器1）	377
図280	19区第4・7d～e層（弥生時代以前）	出土遺物（打製石器2）	378
図281	19区第7d～e層（弥生時代以前）	出土遺物（打製石器3）	379
図282	19区第7d～e層	出土遺物（銅製品）	380
図283	19区第7d～e層（弥生時代以前）	出土遺物（磨製石器1）	380
図284	19区第7d～e層（弥生時代以前）	出土遺物（磨製石器2）	381
図285	10区	古墳時代以降 遺構平面図	383
図286	2024土坑・2011溝	断面図	384
図287	10区第4層	出土遺物	384
図288	11区	古墳時代以降 遺構平面図	385
図289	4031土坑	出土遺物	386
図290	溝群（波板状遺構）3	平・断面図	387
図291	11区包含層（古墳時代以降）、4040流路	出土遺物	388
図292	2002・2003流路	断面図	389
図293	2002流路	出土遺物	390
図294	18～20区	古墳時代以降 遺構平面図	391・392
図295	掘立柱建物17（総柱建物）	平・断面図	394
図296	2020土坑・2016溝	平・断面図	396
図297	4271・4272流路	平面図	398
図298	19・20区遺構、包含層（古墳時代以降）	出土遺物	399
図299	2013土坑	平・断面図	400
図300	07-1調査4トレンチ、07-2調査	遺構平面図	401
図301	07-2調査	流路断面図	402
図302	三宅西遺跡（その2）11区東の北壁・南壁(MY(2)11EN・ES)	試料採取柱状図	404
図303	三宅西遺跡（その3）15・16・17区東(MY(3)15・16・17E)	試料採取柱状図	405
図304	粒度分析の手順		406
図305	MY(2)11ES	礫砂泥の割合	409
図306	MY(2)11EN	礫砂泥の割合・粒度分布の評価	410
図307	MY(2)11EN	粒度分布のヒストグラム・累計曲線	411
図308	MY(3)15・16・17E	礫砂泥の割合・粒度分布の評価	412
図309	MY(3)15・16・17E	粒度分布のヒストグラム・累計曲線	413
図310	MY(2)11EN・ES	鉍物組成・火山ガラスの形態・重鉍物組成・火山ガラスの屈折率	416
図311	MY(3)15・16・17E	鉍物組成・火山ガラスの形態・重鉍物組成・火山ガラスの屈折率	417
図312	花粉分析処理フロー		419

図313	イネ科花粉の粒径比較図（中村1974による）	419
図314	MY(2)11EN 花粉ダイアグラム	421・422
図315	MY(3)15・16・17E 花粉ダイアグラム	425・426
図316	樹種鑑定用プレパラート作製フローチャート	429
図317	試料を採取した株の出土状況	429
図318	試料採取位置	429
図319	暦年較正結果	431
図320	大阪平野中央部の上部更新統～完新統における主要5火山灰層の標準的な岩石記載的性質	432
図321	土器付着物の炭素・窒素安定同位体分析結果	467
図322	土器付着物の較正年代	468
図323	縄文土器付着赤色顔料元素分析スペクトル	473
図324	弥生集落のコンターおよび遺構配置図	483・484
図325	水制のイメージ図	493

図 版 目 次

図版 1	1区 遺構（1）	
	1 第13層上面 西半部全景（東から）	2 第11層上面 西半部全景（西から）
図版 2	1区 遺構（2）	
	1 第9層上面 西半部全景（東から）	2 第9層上面 東半部全景（西から）
図版 3	1区 遺構（3）	
	1 第7層下面 西半部全景（東から）	2 第7層下面 東半部全景（西から）
図版 4	1区 遺構（4）	
	1 3009流路 中央部（東から）	2 3009・3002流路 合流部（西から）
	3 3009・3002流路合流部 木杭検出状況（東から）	
	4 3009流路中央部 木組み検出状況（東から）	
	5 3009流路 木組み1南側（東から）	6 3009流路 木組み1北側（東から）
	7 3009流路 木組み2（東から）	
	8 3179土坑 遺物出土状況（南西から）	
図版 5	1区 遺構（5）	
	1 第7層上面 西半部全景（東から）	2 第7層上面 東半部全景（西から）
図版 6	2～4区 遺構（1）	
	1 第7層下面 全景（東から）	2 3区第7層下面 北部全景（西から）

- | | | | |
|-------|------------------------------|---|----------------------|
| 3 | 3区第7層上面 北部全景 (西から) | 4 | 2区第6b層上面 全景 (東から) |
| 5 | 3・4区第9層上面 全景 (西から) | | |
| 図版 7 | 2～4区 遺構 (2) | | |
| 1 | 3・4区第7層下面 全景 (西から) | 2 | 3区 北部ピット群 (西から) |
| 3 | 3・4区第7層下面 南東部全景 (東から) | | |
| 4 | 3596・3608土坑 (西から) | 5 | 3608土坑 遺物出土状況 (西から) |
| 図版 8 | 2～4区 遺構 (3) | | |
| 1 | 3・4区第7層上面 全景 (西から) | | |
| 2 | 3・4区第6b層上面 全景 (西から) | 3 | 3581流路 (南から) |
| 4 | 4区第6a層上面 東部全景 (南から) | | |
| 5 | 3280井戸 井戸枠検出状況 (西から) | | |
| 図版 9 | 13・14区 遺構 (1) | | |
| 1 | 第11層下面 西半部砂層検出状況 (北から) | 2 | 第11層下面 東半部 (東から) |
| 3 | 第10層下面 東半部 (東から) | 4 | 第9層上面 東半部 (西から) |
| 5 | 第9層下面 西半部全景 (東から) | 6 | 第9層上面 西半部全景 (東から) |
| 図版 10 | 13・14区 遺構 (2) | | |
| 1 | 第7層下面 西半部全景 (東から) | 2 | 第7層下面 東半部全景 (東から) |
| 3 | 西半部ピット群 (東から) | 4 | 東半部遺構群 (西から) |
| 5 | 3129土坑 遺物出土状況 (北から) | 6 | 3134土坑 遺物出土状況 (東から) |
| 図版 11 | 5・6区 遺構 (1) | | |
| 1 | 第11層上面 全景 (西から) | | |
| 2 | 3152流路 調査区南壁断面 (北から) | | |
| 3 | 3152流路 中央部土層断面 (南から) | | |
| 図版 12 | 5・6区 遺構 (2) | | |
| 1 | 3128流路 全景 (西から) | 2 | 3128流路 検出状況 (西から) |
| 3 | 3128流路 完掘状況1 (西から) | 4 | 3128流路 完掘状況2 (南から) |
| 5 | 3128流路 中央部土層断面 (南から) | 6 | 3128流路 遺物出土状況1 (南から) |
| 7 | 3128流路 遺物出土状況2 (南から) | 8 | 3128流路 遺物出土状況3 (南から) |
| 図版 13 | 7区 遺構 (1) | | |
| 1 | 第7c層上面 全景 (東から) | 2 | 3413井戸 土層断面 (東から) |
| 3 | 南東部ピット群 (南から) | 4 | 第7a層上面 西半部溝群 (西から) |
| 5 | 第7a層上面 東半部溝群 (波板状遺構) 2 (東から) | | |
| 図版 14 | 7区 遺構 (2) | | |
| 1 | 3125流路 全景 (東から) | 2 | 3125流路 南壁断面 (北から) |
| 3 | 3125流路 完掘状況 (南から) | 4 | 3125流路 遺物出土状況 (西から) |
| 5 | 3125流路 東岸木杭検出状況 (北から) | 6 | 第4b層上面 全景 (西から) |
| 図版 15 | 8区 遺構 (1) | | |
| 1 | 第12a層上面 全景 (北東から) | 2 | 調査区南壁断面 (北から) |

3 調査区東壁断面（西から）

図版 16 8区 遺構（2）

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 第7c層上面 全景（北東から） | 2 第7d層下面 全景（北東から） |
| 3 第3層上面 全景（北東から） | |

図版 17 9区 遺構

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 第7a層上面 全景（西から） | 2 第7c層上面 全景（西から） |
|------------------|------------------|

図版 18 15～17区 遺構（1）

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 第6b層上面 西半部全景（東から） | 2 第7a層上面 西半部全景（東から） |
|---------------------|---------------------|

図版 19 15～17区 遺構（2）

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1 3192・3193溝周辺 遺構群（南から） | 2 掘立柱建物36（南から） |
| 3 3194土坑 遺物出土状況（東から） | 4 3192溝 遺物出土状況（北から） |
| 5 3221・3222竪穴遺構（南から） | 6 第7a層下面 西半部全景（東から） |
| 7 3195竪穴遺構周辺 遺構検出状況（南から） | |
| 8 3195竪穴遺構周辺 遺構完掘状況（南から） | |

図版 20 15～17区 遺構（3）

- | |
|----------------------------|
| 1 第7b層下面（第3面相当） 東半部全景（東から） |
| 2 溝群（波板状遺構）1 西半部（北から） |
| 3 溝群（波板状遺構）1 東半部（北から） |
| 4 3345井戸 井戸枠検出状況（北から） |
| 5 3346ピット 遺物出土状況（北から） |

図版 21 15～17区 遺構（4）

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 3526溝（南から） | 2 3125流路 全景（南から） |
| 3 第6b層上面 西半部全景（南から） | |

図版 22 10区 遺構（1）

- | |
|------------------------|
| 1 第7d層上面 西半部全景（北東から） |
| 2 第7a～d層上面 西半部全景（南東から） |

図版 23 10区 遺構（2）

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1 第7d層下面 東半部全景（西から） | 2 竪穴住居1（南東から） |
| 3 竪穴住居2（南から） | |

図版 24 10区 遺構（3）

- | | |
|----------------------------|----------------------|
| 1 第7d層上面 東半部全景（西から） | |
| 2 第7a層上面 東半部全景（西から） | 3 07-1調査 2001流路（北から） |
| 4 07-1調査 第7a層上面 南東部全景（東から） | |

図版 25 04-1区 遺構

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 第9層上面 南端部遺構群（東から） | 2 第3層上面 南半部（東から） |
|---------------------|------------------|

図版 26 11区 遺構（1）

- | | |
|---------------------|----------------|
| 1 第9a層下面 西半部全景（東から） | 2 掘立柱建物4（北東から） |
|---------------------|----------------|

- 図版 27 11区 遺構 (2)
- | | |
|------------------------|---------------------|
| 1 第7d・e層下面 東半部全景 (西から) | 2 竪穴住居3・6 北半部 (東から) |
|------------------------|---------------------|
- 図版 28 11区 遺構 (3)
- | | |
|-------------------|----------------|
| 1 竪穴住居7・8・9 (南から) | 2 竪穴住居14 (西から) |
| 3 竪穴住居11・12 (東から) | |
- 図版 29 11区 遺構 (4)
- | | |
|----------------------------|--|
| 1 掘立柱建物9・10・11 (南西から) | |
| 2 2270・2273土坑 遺物出土状況 (西から) | |
- 図版 30 11区 遺構 (5)
- | | |
|-------------------------|--|
| 1 第7a～c層下面 東半部全景 (南西から) | |
| 2 溝群 (波板状遺構) 3 (南から) | |
- 図版 31 11区 遺構 (6)
- | | |
|-------------------------|--|
| 1 第7a～c層下面 西半部全景 (北東から) | |
| 2 第7a層上面 東半部全景 (西から) | |
- 図版 32 11区 (07-1調査) 遺構
- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 第10層上面 東部全景 (北から) | 2 第7d層上面 南部全景 (西から) |
| 3 竪穴住居4 南半部 (北から) | 4 竪穴住居3 南半部 (北から) |
| 5 南西部ピット群 (北東から) | 6 4081土坑 遺物出土状況 (北から) |
- 図版 33 11区 (07-1調査)・12区 遺構
- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 第7e層上面 南東部全景 (西から) | 2 第7d層上面 南東部全景 (西から) |
| 3 第7a～c層上面 南東部全景 (西から) | |
| 4 第7a～c層上面 南部全景 (西から) | |
| 5 12区 第9層下面全景 (北から) | 6 12区 第9層上面全景 (北から) |
- 図版 34 18区 遺構
- | | |
|---------------------------|--|
| 1 方形周溝墓1 (北から) | |
| 2 方形周溝墓1 西側周溝土層断面 (北から) | |
| 3 方形周溝墓1 北側周溝土層断面 (西から) | |
| 4 方形周溝墓1 西側周溝南部 (南から) | |
| 5 方形周溝墓1 西側周溝遺物出土状況 (北から) | |
- 図版 35 19区 遺構 (1)
- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 第7e層下面 西部全景 (西から) | |
| 2 第7e層下面 中央西部全景 (東から) | |
| 3 2411土坑 遺物出土状況 (南から) | 4 2430土坑 遺物出土状況 (西から) |
- 図版 36 19区 遺構 (2)
- | | |
|---------------------------|--|
| 1 第7d層下面 西部全景 (西から) | |
| 2 竪穴住居19 西半部および周辺遺構 (東から) | |
| 3 竪穴住居19 サヌカイト類出土状況 (東から) | |

図版 37 19区 遺構 (3)

- 1 竪穴住居15 南半部および周辺遺構 (北から)
- 2 竪穴住居16 および周辺遺構 (西から)
- 3 竪穴住居18 北半部および周辺遺構 (南から)

図版 38 19区 遺構 (4)

- 1 第7d層下面 中央西部全景 (東から)
- 2 第7d層上面 中央東部全景 (西から)

図版 39 19区 遺構 (5)

- 1 2131土坑 遺物出土状況 (北から)
- 2 2125・2193土坑 遺物出土状況 (南東から)
- 3 2191土坑 底面加工痕 (北東から)

図版 40 19区 (07-1調査) 遺構 (1)

- 1 第7e層下面 南西部全景 (北東から)
- 2 第7d層上面 南西部全景 (北東から)
- 3 竪穴住居18 南半部および周辺遺構 (北から)
- 4 4311土坑 遺物出土状況 (北から)
- 5 4273土坑 遺物出土状況 (西から)
- 6 4274土坑 遺物出土状況 (西から)
- 7 第7e層下面 西端部全景 (北から)
- 8 西端部 4271流路の近世整地層断面 (東から)

図版 41 19区 (07-1調査) 遺構 (2)

- 1 第7e層下面 中央南西部全景 (南から)
- 2 第7e層下面 中央南西部全景 (北東から)
- 3 4231土坑 遺物出土状況 (北から)
- 4 4241土坑 遺物出土状況 (北東から)
- 5 第7a層上面 中央南西部全景 (北から)
- 6 第7a~c層上面 中央南西部全景 (北東から)
- 7 第7c層下面 中央南西部西側遺構群 (北から)
- 8 第7c層下面 中央南西部全景 (北から)

図版 42 19区 遺構

- 1 第7d層上面 中央西部全景 (東から)
- 2 第7d層上面 中央東部全景 (西から)

図版 43 19・20区 遺構

- 1 第7a~c層下面 西部全景 (西から)
- 2 第7a~c層下面 中央東部全景 (東から)
- 3 20区 第7a~c層下面 全景 (西から)

図版 44 1区 遺物 (1)

3009流路出土土器 (1)

図版 45 1区 遺物 (2)

3009流路出土土器 (2)

- 図版 46 1区 遺物(3)
3009流路出土土器(3)
- 図版 47 1区 遺物(4)
3009流路出土土器(4)
- 図版 48 1区 遺物(5)
3009流路出土土器(5)
- 図版 49 1区 遺物(6)
3009流路出土土器(6)・木器
- 図版 50 1区 遺物(7)
ピット、井戸、土坑、落ち込み、包含層出土土器
- 図版 51 2～4・13・14区 遺物(1)
土坑出土土器(1)
- 図版 52 2～4・13・14区 遺物(2)
土坑出土土器(2)
- 図版 53 2～4・13・14区 遺物(3)
土坑、井戸、流路出土土器・石器
- 図版 54 2～4・13・14区 遺物(4)
3293(3581)流路出土土器(1)
- 図版 55 2～4・13・14区 遺物(5)
3293(3581)流路出土土器(2)、包含層出土土器
- 図版 56 5・6区 遺物(1)
3128流路出土縄文土器(1)
- 図版 57 5・6区 遺物(2)
3128流路出土縄文土器(2)
- 図版 58 5・6区 遺物(3)
3128流路出土縄文土器(3)
- 図版 59 5・6区 遺物(4)
3128流路出土縄文土器(4)
- 図版 60 5・6区 遺物(5)
3128流路出土縄文土器(5)
- 図版 61 5・6区 遺物(6)
3128流路出土縄文土器(6)
- 図版 62 5・6区 遺物(7)
3128流路出土縄文土器(7)
- 図版 63 5・6区 遺物(8)
3128流路出土縄文土器(8)
- 図版 64 5・6区 遺物(9)
3128流路出土縄文土器(9)

- 図版 65 5・6区 遺物 (10)
3128流路出土縄文土器 (10)
- 図版 66 5・6区 遺物 (11)
3128流路出土打製石器 (1)
- 図版 67 5・6区 遺物 (12)
3128流路出土打製石器 (2)
- 図版 68 5・6区 遺物 (13)
3128流路出土打製石器 (3)
- 図版 69 5・6区 遺物 (14)
3128流路出土打製石器 (4)
- 図版 70 5・6区 遺物 (15)
3128流路出土礫石器
- 図版 71 5～7区 遺物 (1)
溝、流路、包含層出土打製・礫石器
- 図版 72 5～7区 遺物 (2)
5・6区包含層、7区ピット、井戸、溝、流路出土土器
- 図版 73 7区 遺物 (1)
3125流路出土土器 (1)
- 図版 74 7区 遺物 (2)
3125流路出土土器 (2)
- 図版 75 8区 遺物
流路、ピット、井戸、溝出土土器
- 図版 76 15～17区 遺物 (1)
流路、竪穴遺構、溝、土坑、包含層出土土器
- 図版 77 15～17区 遺物 (2)
3194・3324土坑出土土器
- 図版 78 15～17区 遺物 (3)
落ち込み、溝出土土器
- 図版 79 15～17区 遺物 (4)
溝、土坑、井戸、包含層出土土器
- 図版 80 15～17区 遺物 (5)
包含層出土土器
- 図版 81 9区 遺物
流路出土土器
- 図版 82 1・3～7・15～17区 遺物
打製石器
- 図版 83 9・15～17区 遺物
打製・礫石器

- 図版 84 10・11・19区 遺物
縄文土器
- 図版 85 11区 遺物
竪穴住居出土土器
- 図版 86 11・19区 遺物
11区土坑、19区流路出土土器
- 図版 87 10・11・19区 遺物
10区流路、11区包含層、19区流路出土土器
- 図版 88 10・11区 遺物（1）
打製石器（1）石鏃、石小刀？
- 図版 89 10・11区 遺物（2）
打製石器（2）石錐、翼状剥片、接合資料
- 図版 90 10・11区 遺物（3）
打製石器（3）石槍、スクレイパー、接合資料
- 図版 91 11区 遺物
打製石器 剥片
- 図版 92 10区 遺物
磨製・礫石器 石斧類、石庖丁、敲き石
- 図版 93 10区 遺物
礫石器 敲き石、砥石・台石
- 図版 94 11区 遺物
磨製石器 石斧類、石庖丁
- 図版 95 11区 遺物
礫石器 敲き石、砥石・台石
- 図版 96 18・19区 遺物（1）
18区方形周溝墓、19区竪穴住居出土土器
- 図版 97 19区 遺物（1）
土坑出土土器（1）
- 図版 98 19区 遺物（2）
土坑出土土器（2）
- 図版 99 19区 遺物（3）
土坑出土土器（3）
- 図版100 19区 遺物（4）
流路出土土器・土製品
- 図版101 18・19区 遺物（2）
18区方形周溝墓、19区竪穴住居出土打製石器 石鏃・中型尖頭器
- 図版102 18・19区 遺物（3）
18区包含層、19区竪穴住居出土打製石器 石錐

- 図版103 19区 遺物(5)
 竪穴住居出土打製石器 スクレイパー、石核
- 図版104 19区 遺物(6)
 竪穴住居19出土打製石器 石鏃
- 図版105 19区 遺物(7)
 竪穴住居19出土打製石器 石鏃、中型尖頭器
- 図版106 19区 遺物(8)
 竪穴住居19出土打製石器 石錐
- 図版107 19区 遺物(9)
 竪穴住居19出土打製石器 スクレイパー
- 図版108 19区 遺物(10)
 竪穴住居19出土打製石器 二次加工のある剥片、楔形石器、スクレイパー
- 図版109 19区 遺物(11)
 竪穴住居19出土打製石器 剥片、ポイントフレイク
- 図版110 19区 遺物(12)
 竪穴住居19出土打製石器 石核(1)
- 図版111 19区 遺物(13)
 竪穴住居19出土打製石器 石核(2)
- 図版112 19区 遺物(14)
 竪穴住居19出土サヌカイト接合資料(1)
- 図版113 19区 遺物(15)
 竪穴住居19出土サヌカイト接合資料(2)
- 図版114 19区 遺物(16)
 竪穴住居19出土サヌカイト接合資料(3)
- 図版115 19区 遺物(17)
 竪穴住居19出土サヌカイト接合資料(4)
- 図版116 19区 遺物(18)
 竪穴住居19出土サヌカイト接合資料(5)
- 図版117 19区 遺物(19)
 竪穴住居19出土サヌカイト接合資料(6)
- 図版118 19区 遺物(20)
 土坑出土打製石器 石鏃(1)
- 図版119 19区 遺物(21)
 土坑出土打製石器 石鏃(2)
- 図版120 19区 遺物(22)
 溝、流路、包含層出土打製石器 石鏃
- 図版121 19区 遺物(23)
 土坑、溝出土打製石器 石錐

- 図版122 19区 遺物 (24)
土坑、流路出土打製石器 石小刀、中型尖頭器、石槍
- 図版123 19区 遺物 (25)
土坑、溝出土打製石器 スクレイパー
- 図版124 19区 遺物 (26)
溝、包含層出土打製石器 石核、剥片、二次加工のある剥片、ポイントフレイク
- 図版125 19区 遺物 (27)
包含層出土サヌカイト接合資料
- 図版126 19区 遺物 (28)
竪穴住居、包含層出土磨製石器 石斧類
- 図版127 19区 遺物 (29)
土坑、溝、包含層出土磨製石器 石庖丁
- 図版128 19区 遺物 (30)
竪穴住居出土礫石器 敲き石
- 図版129 19区 遺物 (31)
竪穴住居出土礫石器 敲き石、砥石、台石
- 図版130 19区 遺物 (32)
土坑出土礫石器 敲き石
- 図版131 19区 遺物 (33)
土坑、包含層出土礫石器 敲き石、鉄斧、銅鏃
- 図版132 10・11・18・19・20区 遺物
10区包含層、11区土坑・包含層、18区流路、19区土坑・溝、20区土坑出土土器

表 目 次

表 1	分類の概要	106
表 2	3128流路出土剥片石器一覧 (1)	128
表 3	3128流路出土剥片石器一覧 (2)	129
表 4	3128流路出土礫石器一覧	129
表 5	9区 層序表	138
表 6	三宅西遺跡の粒度組成表	407
表 7	三宅西遺跡の粒度分布の評価	408
表 8	三宅西遺跡の火砕物組成	415
表 9	MY(2)11EN 花粉化石組成表	423

表10	MY(3)15・16・17E 花粉化石組成表	427
表11	AMS年代測定結果	431
表12	種実同定結果（1）	444
表13	種実同定結果（2）	445・446
表14	モモ核の計測値	448
表15	樹種同定結果	458
表16	時代別・器種別種類構成	460
表17	¹⁴ C年代測定、炭素・窒素安定同位体比の分析結果一覧	467
表18	近畿地方縄文後晩期時赤色顔料付着状況	474
表19	三宅西遺跡出土縄文土器（仏並・向出含む）分析結果表	475

写 真 目 次

写真 1	碎屑物・火山碎屑物の実体顕微鏡写真・偏光顕微鏡写真	440
写真 2	材の生物顕微鏡写真	441
写真 3	花粉の生物顕微鏡写真	442
写真 4	種実遺体（1）	455
写真 5	種実遺体（2）	456
写真 6	木材（1）	461
写真 7	木材（2）	462
写真 8	木材（3）	463
写真 9	分析を実施した土器（1）	469
写真10	分析を実施した土器（2）	470
写真11	三宅西遺跡出土縄文土器 赤色顔料付着状況	475

第1章 調査にいたる経緯と経過

大阪南部地域では、既存の幹線道路、特に東西方向の道路の混雑が著しく、円滑な交通の確保が難しくなっており、今後の更なる交通量の増大や都市圏の広域化を考えた場合、これに対応できる道路の整備が極めて重要になっている。また、都心部を走る阪神高速道路1号環状線の混雑は慢性的なものとなっており、沿道環境への影響が懸念されている。そのため、これらの問題を解決すべく、自動車交通の流れを抜本的に変革し、都心部の慢性的な渋滞や沿道環境の悪化等を大幅に緩和する、新たな環状道路の整備が強く要望されるようになった。

大和川線は、このような状況を背景として計画されたものであり、大阪府知事により、平成7年9月に都市計画決定、平成8年2月に路線決定、同7月に自動車専用道路の指定がなされている。平成11年3月には、建設大臣より阪神高速道路公団に対して基本計画の指示、10月には工事実施計画書の認可がおこなわれ、工事開始公告となった。平成12年2月には、建設大臣より阪神高速道路公団に対して都市計画事業の承認がおこなわれた。なお、道路関係四公団民営化での事業区分見直しや堺市の政令指定都市移行にともない、平成18年度からは大阪府、堺市ならびに阪神高速道路株式会社の三者が共同して整備をおこなうことになった。

この一方で、整備により誘導される新たな都市拠点の形成を通じた都市構造の再編を促すことを目的として、政府の都市再生本部により、平成13年8月に「大阪都心部における新たな環状道路」が都市再生プロジェクトとして決定された。大和川線は、この「新たな環状道路」の一部を形成する路線であり、堺市築港八幡町で阪神高速道路4号湾岸線より分岐し、松原市三宅中で同14号松原線に連絡する、全長約9.9kmの自動車専用道路である。途中、堺市域で直交する国道26号線や大阪高石線などの幹線道路に連結し、松原市域では都市計画道路堺松原線（大阪府施行）と一体的に整備する予定である。この道路により、大阪南部地域においては臨海部と内陸部が高速道路で直結されることとなり、東西方向一般道の交通混雑が大幅に緩和されるとともに、阪神高速道路の1号環状線、13号東大阪線、14号松原線なども渋滞が緩和され、関西都市圏の社会経済活動の活発化に大きく寄与するものと期待されている。

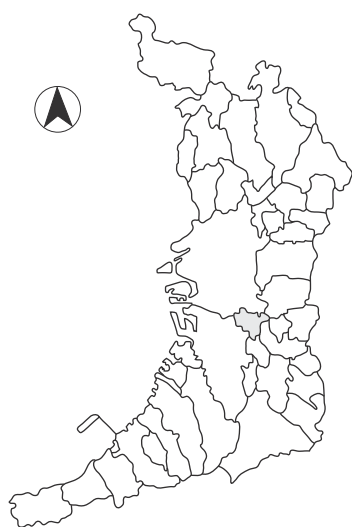


図1 松原市の位置



図2 大阪都市再生環状道路計画図

○大和川線

※ JCT名及びランプ名は仮称

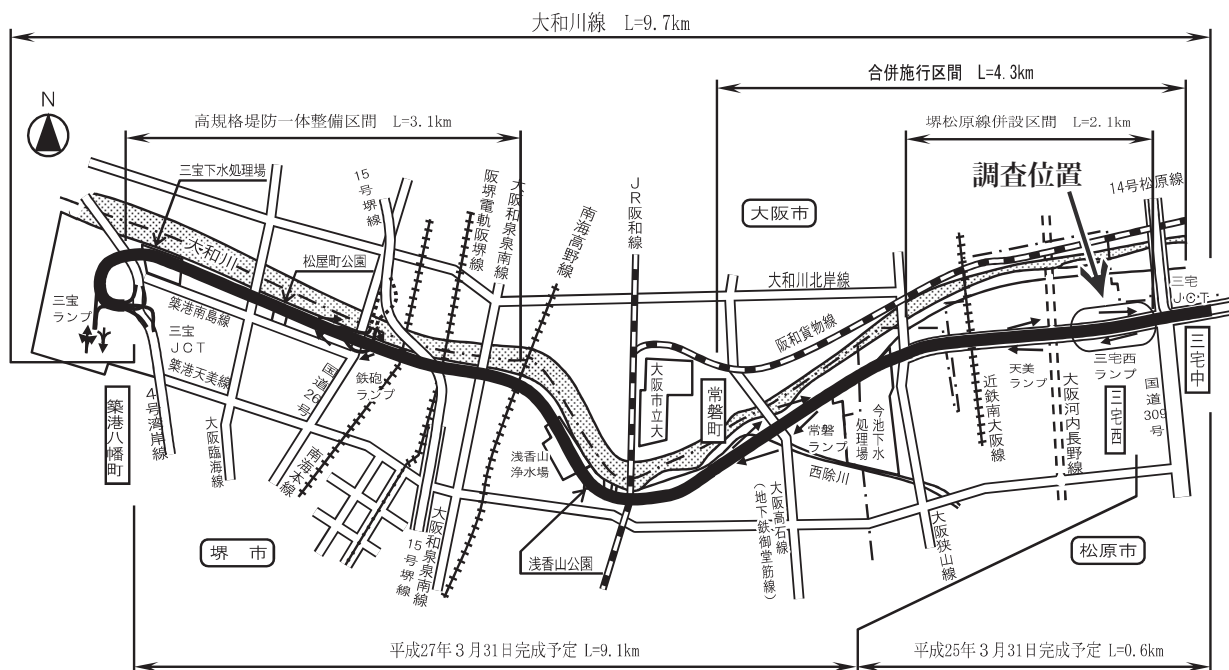


図3 大和川線道路計画図

大和川線は、路線の計画にあたって、道路の整備だけではなく、地域の環境保全に十分配慮しながら高規格堤防整備事業（国土交通省施行）やその他の周辺整備計画との整合のうえ進めている。このため、大和川の景観保護、周辺市街地の環境への影響、沿道の土地利用ならびに沿川のグリーンベルトタウン構想との整合などを勘案し、一部のランプやジャンクションを除いて基本的に地下構造または掘割構造を採用している。平成17年度以降にも計画の見直しがされており、建設着手前にランプの廃止や線形の変更などがおこなわれている。

この都市計画道路の建設計画をうけて、計画路線が周知の遺跡である三宅西遺跡や池内遺跡、大和川今池遺跡などに隣接していることから、平成15年度に大阪府教育委員会文化財保護課は、大阪府土木部および富田林土木事務所および阪神高速道路公団とその取り扱いについて協議をおこなった。その結果、路線内における遺跡の有無および周知の遺跡の実態についての資料を得るために、富田林土木事務所と阪神高速道路公団から、(財)大阪府文化財センターに対して事前確認調査の依頼がなされた。調査目的としては、埋蔵文化財包蔵地の有無を確認することで、基本的に路線予定地の両側に東西方向に幅2m（下端）のトレンチを設定するものであった。調査期間は、平成15年10月～平成16年6月（阪神高速道路公団は、平成15年10月～平成16年3月と平成16年4月～平成16年6月）で、対象は大和川線予定路線のうち、国道309号線から府道大阪狭山線までの区間（約2km）である。

この平成15～16年度の調査成果をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課が、三宅西遺跡と池内遺跡が大和川線路線内まで及んでいると判断し、遺跡範囲が拡大されることとなった。これにより、路線内が調査対象部分となり、三宅西遺跡に関しては、国道309号線から今井戸川までの約550mの区間、今井戸川を越えた西側は池内遺跡となり、近鉄南大阪線付近までの約900mの区間と決定された。

三宅西遺跡の発掘調査は、発注者側が富田林土木事務所に一本化され、そこからの委託事業として契約が(財)大阪府文化財センターとの間で締結され、平成16年11月から平成18年9月までの期間で実施されることとなった。調査は、当初南部調査事務所調査第一係が担当することとなったが、平成18

年度にセンター側で組織の組み替えをおこなったため、調査途中であるが、南部調査事務所調査第二係の担当となった。

当初、掘削面積や土量の規模などから、三宅西遺跡の調査は2工区に分けておこなう予定であったが、調査地の北側に延びるごみ処理施設までの進入路を先に拡幅することになったため、この道路にかかる部分（約370㎡）の調査のみ先行しておこなう必要性が生じた。これにより、この部分を（その1）工区として平成16年11月から平成17年1月までの期間で、先行して発掘調査が実施されることとなった。なお、このごみ処理施設部分は、瓜破遺跡の範囲内であり、建設時に（財）大阪市文化財協会により発掘調査がおこなわれており、弥生時代を中心とした成果が得られている。また、この進入路部分に関しては、平成16年5月に松原市教育委員会により確認調査がおこなわれており、近世の流路が路線上をほぼ縦断していることがわかっている。

（その1）工区以外に関しては、対象地区をほぼ2等分し、東半部を（その2）工区、西半部を（その3）工区として設定し、平成16年12月から平成18年6月までの期間（当初、変更後平成18年8月まで）で、現地での発掘調査が実施されることとなった。

調査は、路線内の全面が対象となっており、官民境界に関しては、大阪府教育委員会文化財保護課の指示により、境界線を調査地の下端とした。掘削は一割勾配のオープンカットでおこない、基本的に鋼矢板などでの土留めなどはおこなわないため、官民境界部分の上端で一部民地にまで掘削が及ぶことになった。このため、可能な限り隣接地の所有者の理解を得て借地をおこない、調査範囲を確保することとした。また、これに伴い調査区の北側と南側に沿うかたちで設置されていた、排水路や畦畔、耕作地用の水道などの付け替えも付帯工事としておこなった。

三宅西遺跡の報告書作成に伴う本格的な整理作業は、富田林土木事務所からの委託事業として、（財）大阪府文化財センターとの間で契約が締結され、平成18年10月から平成21年3月までの期間で実施さ

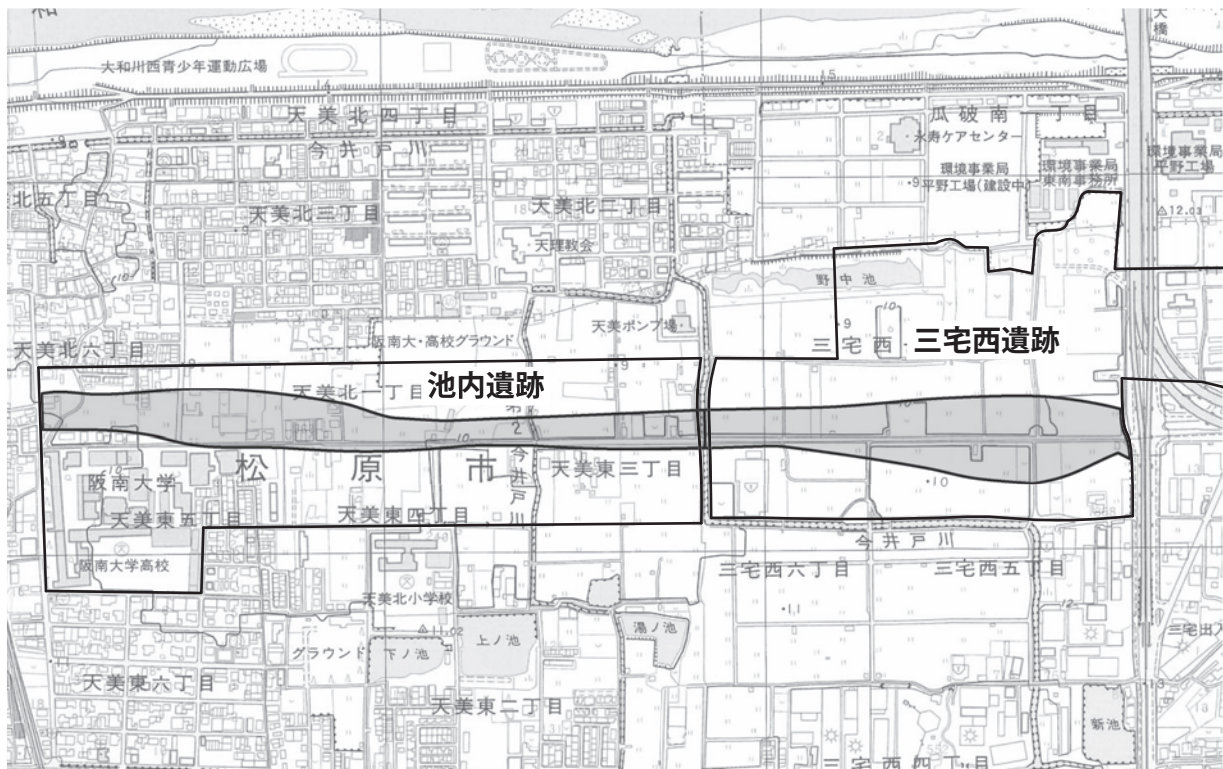


図4 調査区位置図(1/10,000)

れることとなった。南部調査事務所において、事前確認調査および（その1）（その2）（その3）工区の成果をまとめる作業が中心となった。整理作業は、南部調査事務所調査第二係が担当することとなったが、平成20年度に再び組織の組み替えをおこなったため、南部調査事務所調査第一係の担当となった。ただ、調査が着手できなかった部分の現地調査が若干残っていたため、この整理事業の契約内で平成19～20年度に実施することとなった。現地調査は、対象面積が狭く、本体工事の工程と密接に関連することから、発掘調査に伴う工事として（財）大阪府文化財センターから発注するかたちはとらず、本体工事業者が担当する方法をとった。航空測量のみ、センターからの発注とし、現地調査は便宜的に（その4）工区と呼称した。さらに、平成19年度末には本体工事範囲外であるが、関連する事業である今井戸川取水施設整備工事に先立つ調査（約270㎡）が必要となったことから、これも工事施工業者が担当する方法で対応した。ここでも、航空測量のみセンターからの発注とし、現地調査は便宜的に（その5）工区と呼称した。

調査体制

平成15～16年度（2003～2004年度）〔松原市内遺跡群（確認）発掘調査〕

調査部	部長	玉井 功				
調整課	課長	赤木克視				
南部調査事務所	所長	藤田憲司				
調査第一係	係長	橋本高明（平成15年度）、岡本敏行（平成16年度）				
	主査	土井孝之	技師	河端 智	専門調査員	岡田佳之

平成16年度（2004年度）〔三宅西遺跡（その1）発掘調査〕

調査部	部長	玉井 功				
調整課	課長	赤木克視				
南部調査事務所	所長	藤田憲司				
調査第一係	係長	岡本敏行				
	主査	黒田慶一	技師	河端 智	専門調査員	内田真雄

平成16～18年度（2004～2006年度）〔三宅西遺跡（その2）・（その3）発掘調査〕

調査部	部長	玉井 功（平成16年度）、赤木克視（平成17・18年度）				
調整課	課長	赤木克視（平成16年度）、田中和弘（平成17・18年度）				
南部調査事務所	所長	藤田憲司（平成16・17年度）、大野 薫（平成18年度）				
調査第一係	係長	岡本敏行（平成16・17年度）				
	主査	黒田慶一（平成16・17年度）				
	主任技師	（平成16年度）、班長（平成17年度）	中村淳磯			
	技師	河端 智（平成16・17年度）、池田 研（平成16・17年度）				
	専門調査員	岡田佳之（平成16年度）、内田真雄（平成16・17年度）				
		清水梨代（平成16・17年度）、佐藤由美（平成17年度）				

調査第二係 係長 中村淳磯（平成18年度）
技師 河端 智（平成18年度）、池田 研（平成18年度）
小倉徹也（平成18年度）
専門調査員 清水梨代（平成18年度）、水野恵利子（平成18年度）

平成18～20年度（2006～2008年度）〔三宅西遺跡遺物整理〕

調査部 部長 赤木克視
調整課 課長 田中和弘
南部調査事務所 所長 大野 薫
調査第二係 係長 中村淳磯（平成18・19年度）
主査 森井貞雄（平成19年度）
技師 河端 智（平成18年度）、池田 研（平成18年度）
小倉徹也（平成18年度）
専門調査員 清水梨代（平成18・19年度）
調査第一係 係長 中村淳磯（平成20年度）
主査 村上富喜子（平成20年度）

平成19～20年度（2007～2008年度）〔三宅西遺跡（その4）発掘調査〕

調査部 部長 赤木克視
調整課 課長 田中和弘
南部調査事務所 所長 大野 薫
調査第二係 係長 中村淳磯（平成19年度）
主査 森井貞雄（平成19年度）
専門調査員 清水梨代（平成19年度）
調査第一係 技師 井西貴子（平成19年度）
専門調査員 奈良拓弥（平成19年度）
調査第一係 係長 中村淳磯（平成20年度）

平成19年度（2007年度）〔三宅西遺跡（その5）発掘調査〕

調査部 部長 赤木克視
調整課 課長 田中和弘
南部調査事務所 所長 大野 薫
調査第二係 係長 中村淳磯

第2章 位置と環境

第1節 位置と周辺の遺跡

1. 地理的環境

三宅西遺跡の所在する松原市は、大阪府の中央部に位置する。市域の広さは約16.7km²で、人口約12万5千人（平成20年5月推計）の都市である。海には面していないが、市域の北側を大和川が東西方向に流れており、川をはさんで北側は大阪市東住吉区・平野区と接している。さらに東側から南側にかけては、堺市北区・美原区、西側は八尾市・藤井寺市・羽曳野市と接している。

当遺跡は、日下雅義氏の分類によると、調査区の西方を南北方向に流れていた、西除川の氾濫原に位置する。遺跡の東側には、現在の三宅集落がひろがっており、この部分は南からの沖積段丘上となる。遺跡の東端部は、ちょうど西除川の氾濫原と沖積段丘の境界部分となるが、現地表面では明確な段差などは認められない。三宅集落が営まれている部分は、南から北へのびる河内台地上に立地しており、現大和川以北は瓜破台地と呼ばれる。この河内・瓜破台地は、最終氷期に「古天野川」によって形成された扇状地が、それ自身の浸食で段丘化したものと考えられており、主として中位段丘面で構成されてい

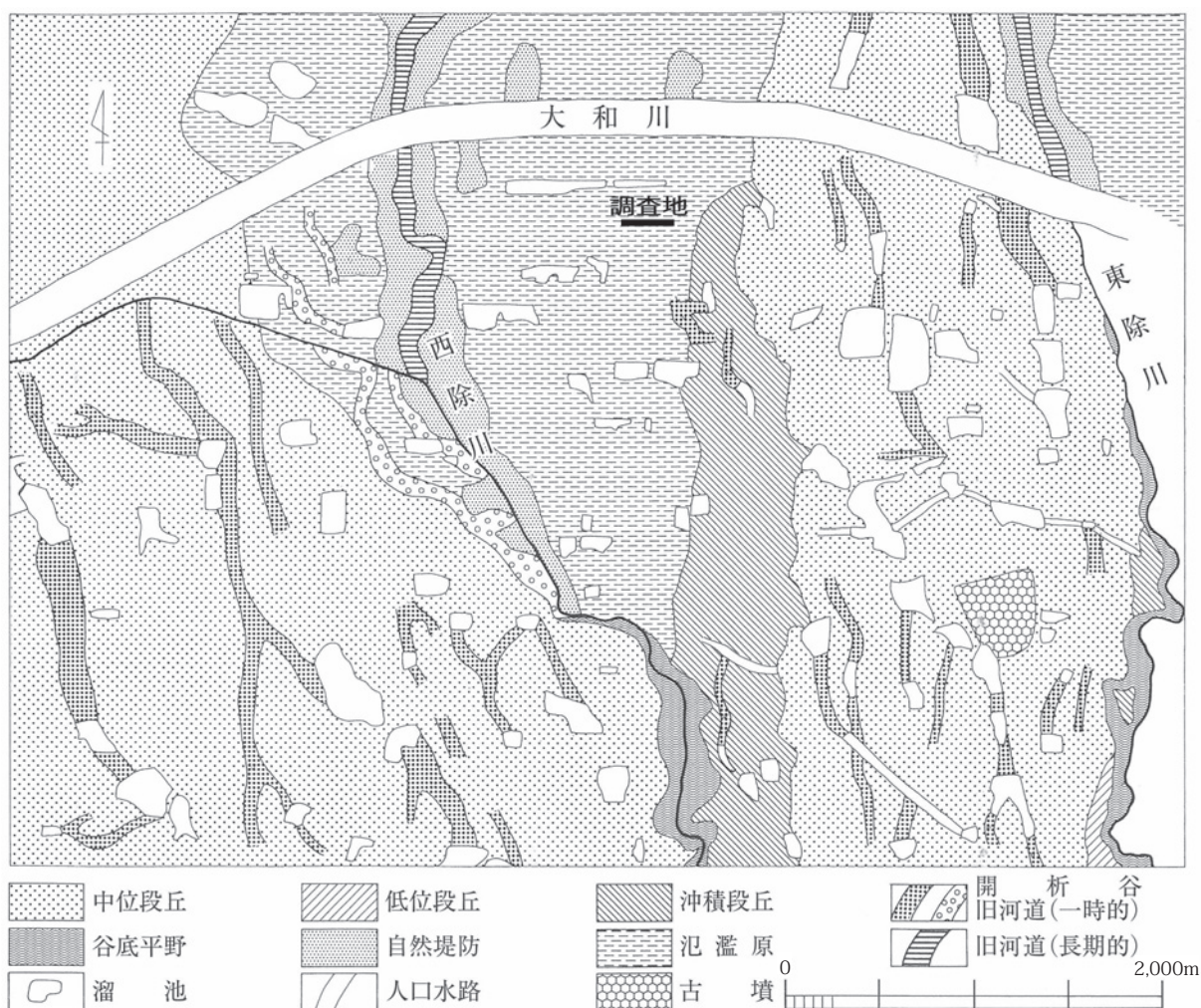


図5 地形分類図 (※『大和川今池遺跡(その1・その2)』より)

るといふ。中位段丘面は南から北に向かって緩やかに低くなり、現大和川の北側部分で沖積平野の地下に埋没する。台地上には凹凸があり、複数の開析谷が存在する。台地の東西には、東除川と西除川が流れており、これらの源流が台地の南に位置する現在の天野川である。6世紀後半から7世紀初頭頃に、「古天野川」の開析により形成された谷底平野を堰き止めて、狭山池がつけられた。この狭山池からの主たる流路が東除川と西除川である。旧西除川は、18世紀初頭に大和川が付け替えられ、現在の流路になるまで、狭山池から北流し、平野川と合流した後に天満川と合わさり、大阪湾に注ぎこんでいた。

大和川の付け替え工事は、宝永元(1704)年に大和川と石川の合流点に堤防を築き(柏原の築留)、流れを西の堺に向け、台地を掘りくぼめ、堤防を積んで新しい川をつくるものであった。河内平野では、以前から大雨が降ると、大和川の堤防が切れて頻繁に洪水をおこし、田畑が水や土砂で埋まることが多いことや、水がうまく抜けないことなどから、農民が江戸幕府に対して大和川の流れを変えるように訴えていた。今米村(現在の東大阪市今米)の庄屋中甚兵衛を中心とした訴えは、明暦3(1657)年からおこなわれていたが、約50年後について認められ、幕府や西日本の大名による工事が決定されることとなった。工事は約8ヶ月の短期間でおこなわれ、川幅180m、長さ14.3kmの新しい川が完成した。これらの付け替え工事に関する記録は、中甚兵衛の残した文書や絵図類からなる「中家文書」をはじめ数多く残されており、経緯を知ることができる。この結果、洪水による被害もほとんどなくなったほか、もとの河道部分に新田と呼ばれる耕地がひろがり、米のつくりにくい土地には木綿が多く植えられた。これは、付け替え工事の5年後には約1,000haにもなり、「河内木綿」として全国的に有名となった。三宅村においても木綿栽培が盛んで、「三宅木綿」の名は早くから知られていたようである。

一方、西除川や東除川の流れがさまたげられたため、この流域で新たな水害が発生することとなった。さらに新大和川が運ぶ土砂は、堺の港を埋めてしまうため、大きな船が入港できなくなり、中世以来の港が衰退するという結果ももたらした。三宅村の北西に位置する城連寺村は、村高の66%を川床にとられ、農民の生活に大きな影響を及ぼした。

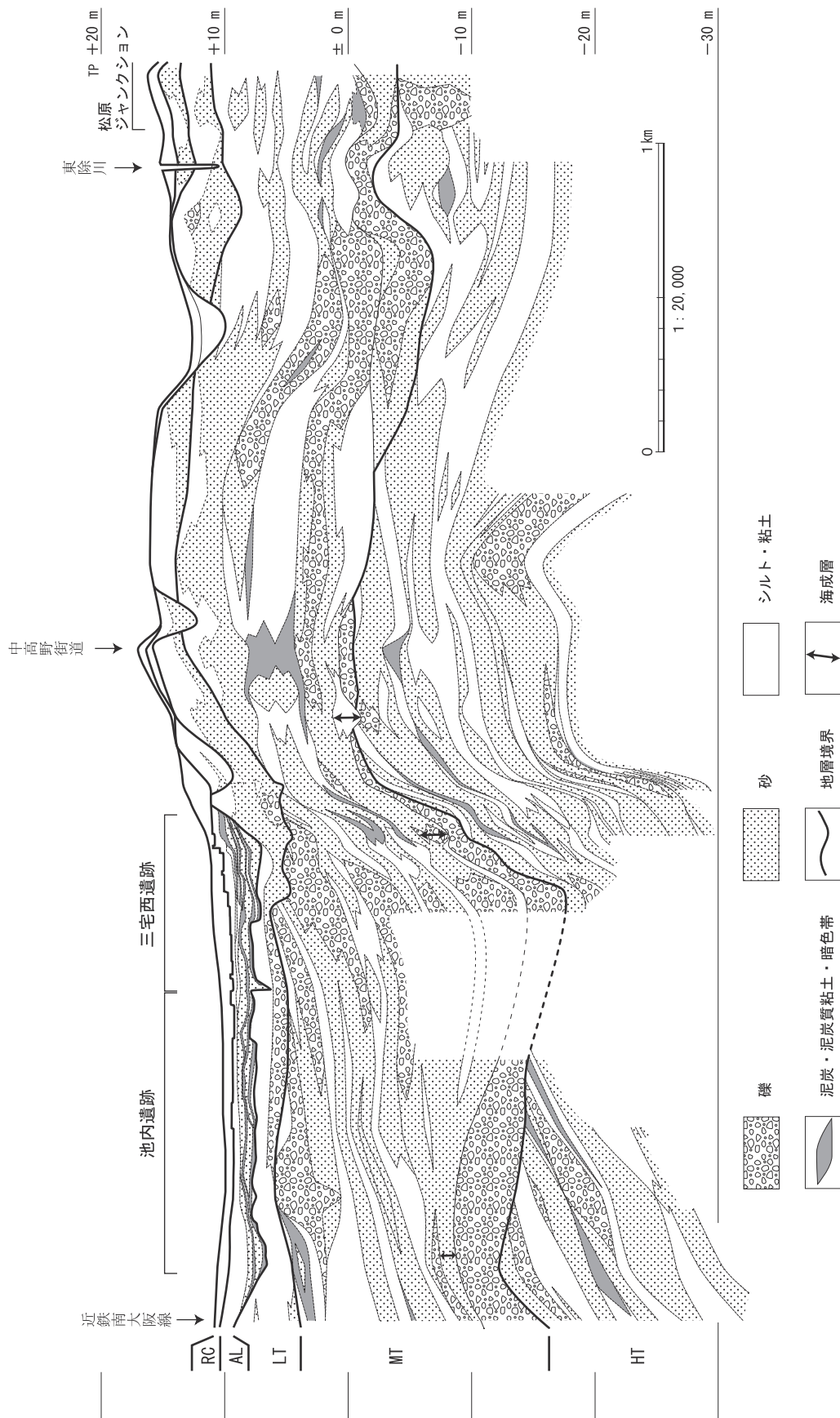
2. 瓜破台地の地形と地質の概要

瓜破台地の地形および地質については、(財)大阪市文化財協会の協力を得て、概要報告をいただいたので、ここに掲載しておく。

上町台地とともに大阪の中位段丘に区分される瓜破台地の地形と地質について、趙(2001)と図6の瓜破台地西部の東西地質断面図に基づいて概観する。

泉北丘陵と羽曳野丘陵の間を南から河内平野南部に突き出た瓜破台地は、周囲の沖積平野とは数m程度の比高がある。海拔高度は大和川の北側、台地先端部が沖積平野に埋没する長居公園通付近で約10m、大和川の南側、松原ジャンクションから三宅西・池内両遺跡を通る台地中央部では、中高野街道付近が最も高く、約17mである(図6)。

瓜破台地をつくる中位段丘構成層は、上町累層と呼ばれ、台地の先端で層厚が約15mあり、泥層と一部指交する下部の砂礫層が約2mおよそ12万年前の堆積と推定される中部の海成粘土～砂層(ma12海成層)が約5m、上部の砂がち砂泥互層が8m前後の層厚で重なっている。この上部の基底付近には、泥炭～泥炭質粘土層が層厚1m前後で挟まれている。少なくとも4面の堆積の休止期を示す層理面があり、それらの層理面を上面とする地層は、木の株が根をはった泥炭質の泥層であったり、上面から乾痕が発達し、分級が不良の砂質泥層であったりする。それぞれの上面は河成の砂層・砂礫層が覆い、上方



HT: 高位段丘構成層、MT: 中位段丘構成層(上町累層)、LT: 低位段丘構成層、AL: 沖積層(難波累層)、RC: 現代盛土

図6 瓜破台地西部の東西地質断面図 (趙原図)

細粒化している。台地中央部での層厚は最大で約24mあり、台地先端部に比較して全般に粗粒である。礫層主体の下部は1～5mと比較的厚いが、中部の海成層は礫・砂・泥からなり、層厚は1～2mと薄い。上部の砂泥互層が最大で層厚17mと厚い。

瓜破台地の東縁では西側が落ちる顕著な北北東－南南西方向の撓曲軸をもつ撓曲構造が認められ、台地北端部の中位段丘構成層の基底では10m前後の落差があり、台地中央部のそれでは17m程度の落差がある。これに対して台地先端部・中央部とも東側はなだらかな斜面になっている。

中位段丘構成層の上部には、2層の火山灰層や火山灰濃集層準が挟まれている。下位の北花田火山灰層は鬼界蕨原火山灰と対比され、堆積年代は9.1万年前と推定されている。また上位の吾彦火山灰層は阿蘇4火山灰と対比され、堆積年代は8.6万年前と推定されている（吉川ほか1991）。

中位段丘構成層を部分不整合で覆う低位段丘構成層は、台地の表層付近に広く分布する。下部が層厚1～4mの砂礫層から上方で層厚1～2mの粘土層へ細粒化する河成～沼沢湿地性の地層であり、低位段丘構成層の主体を成す。低位段丘構成層の上部から最上部は、下部の堆積後に開析された小規模の河川および凹地に堆積した地層、および古土壌である。分布は断続的であり、層厚は薄く、せいぜい数10cmである。水成層が分布しない低位段丘構成層の上面には、乾痕が著しく発達している。最上部には始良Tn火山灰と対比される平安神宮火山灰層（約2.5万年前：吉川ほか1986、較正年代は約2.8万年前）を挟在する。中位段丘構成層との部分不整合が堆積環境の急激な変化によってもたらされたと考えられること、下部の上半部の泥層が長い時間を要して堆積したと考えられること、最上部の暗色帯の形成は、著しい乾痕や泥炭層の存在から低位段丘成立後であると考えられること、などから、趙(1994)は低位段丘層の主体である下部層の堆積年代は、最終氷期の比較的早い時期であったと推定している。

低位段丘構成層（酸素同位体ステージ4と考えられる）を最終氷期極寒期（酸素同位体ステージ2）の不整合で覆う沖積層は、晩氷期以降の地層であり、難波累層と呼ばれる。多数の暗色帯を挟在して、台地周囲の氾濫平野に広く分布している。

趙哲済 2001 「瓜破台地東北部の段丘について」『大阪市文化財協会研究紀要』4 7－16

趙哲済 1994 「大阪平野の旧石器遺跡－特に古大阪平野における遺跡の立地について－」『瀬戸内技法とその時代』
中・四国旧石器文化談話会 243－252

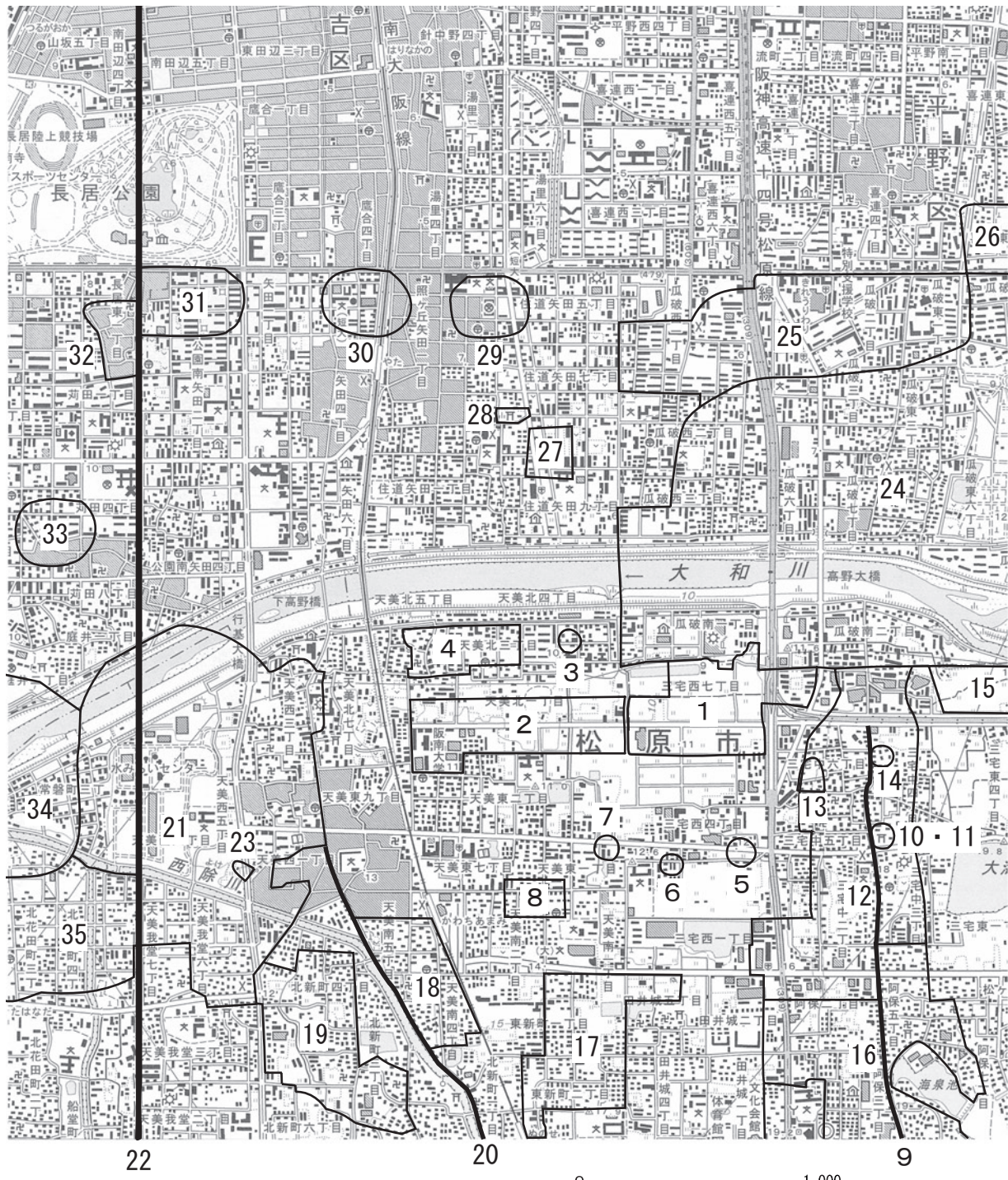
吉川周作・井内美郎 1991 「琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序」『地球科学』45－2 81－100

吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和 1986 「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」
『地球科学』40－1 18－38

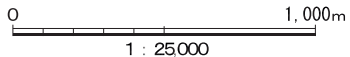
3. 歴史的環境

三宅西遺跡は、松原市三宅西7丁目を中心として広がる弥生時代から中世にかけての集落跡として知られている。その範囲は、東西750m、南北400mに及ぶ。松原市域は、古くは河内国に属しており、その中で丹比郡と称されていた地域にあたる。丹比郡は後に三分割され、そのうち丹北郡に属することになるが、詳細は次項で述べる。

周囲では、西側に弥生時代から中世にかけての池内遺跡が隣接するほか、松原市域では、北西側に城連寺東遺跡、城連寺遺跡、南側に天美南遺跡、天美東1丁目遺跡、田池下遺跡、三宅西4丁目遺跡、東側に三宅遺跡などが知られている。また、さらに西方には堺市域まで広がる大和川今池遺跡、北側には



国土地理院発行 2万5千分の1地形図「大阪東南部」(2007)に加筆



- | | | | | |
|-----------------|------------|----------------|------------|------------|
| 1 三宅西遺跡 | 2 池内遺跡 | 3 城連寺東遺跡 | 4 城連寺遺跡 | 5 三宅西4丁目遺跡 |
| 6 田池下遺跡 | 7 天美東1丁目遺跡 | 8 天美南遺跡 | 9 中高野街道 | 10 屯倉神社 |
| 11 三宅城(三宅砦)跡推定地 | 12 三宅遺跡 | 13 権現山古墳跡 | 14 三宅古墳跡 | 15 三宅東遺跡 |
| 16 阿保遺跡 | 17 東新町遺跡 | 18 堀遺跡 | 19 高木遺跡 | 20 下高野街道 |
| 21 大和川今池遺跡 | 22 難波大道跡 | 23 狐塚古墳跡 | 24 瓜破遺跡 | 25 瓜破北遺跡 |
| 26 喜連東遺跡 | 27 住道寺跡 | 28 中臣須牟知神社境内遺跡 | 29 照ヶ丘矢田遺跡 | 30 矢田2丁目遺跡 |
| 31 矢田部遺跡 | 32 新堀城跡伝承地 | 33 苺田4丁目所在遺跡 | 34 依羅池跡 | 35 北花田遺跡 |

図7 周辺の遺跡 (1/25,000)

大阪市域に瓜破遺跡がひろがっている。このうち、西側に隣接する池内遺跡は、三宅西遺跡と同様に、都市計画道路大和川線の路線にかかることから、ほぼ同時に発掘調査に着手しており、多くの成果をあげている。ただし、古墳時代～中世の遺跡とされる城連寺東遺跡や弥生時代～中世の城連寺遺跡、弥生～古墳時代の天美南遺跡、中世の天美東1丁目遺跡、古墳～中世の田池下遺跡、弥生時代の三宅西4丁目遺跡などは、発掘調査などはおこなわれておらず、実体はほとんど不明である。三宅西遺跡も今回の調査までは本格的な調査がおこなわれておらず、同様に遺跡の実体は不明な状況であった。

台地上に位置する三宅遺跡は、現在の集落内であることから本格的な調査はおこなわれていないが、小規模な発掘調査により、弥生時代の流路や古墳時代の溝、平安時代や中世の掘立柱建物などが検出されており、遺物も出土している。なお、集落内にある屯倉神社の地はかつての砦跡といわれており、その東と南に幅3mの濠がある。発掘調査などはおこなわれておらず、実体は不明であるが、神社の南には馬場池、村の西には新池、北には谷池があって、濠の一部を形成していたと考えられている。なお、明治40(1907)年に同社に合祀された酒屋神社は、式内社の同名社に比定されている。

この地域で最も有名で、調査例が多く実体が比較的是っきりしている遺跡は、西方に位置する大和川今池遺跡と北に広がる瓜破遺跡である。最近の調査例も多く、既往の調査成果とともに、この地域の様相をある程度推定することができる。

大和川今池遺跡は、下水処理場建設に伴う発掘調査や高規格堤防に関連する河川敷での調査が数次にわたっておこなわれており、多くの成果があがっている。また、今回の調査対象となっている都市計画道路大和川線の路線もこの遺跡を横切ることから、引き続き発掘調査が進められている状況である。旧石器時代のナイフ形石器に始まり、縄文時代の有舌尖頭器や石器、古墳時代の玉類や韓式系土器・土師器・須恵器、中世の遺物などが出土している。遺構では、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、古代～中世の掘立柱建物や井戸・溝などが検出されているほか、古代の官道である「難波大道」の一部もみついている。これは、難波宮から南へ直進するもので、河内と大和を東西に結ぶ大津道や丹比道につながり、さらに横大路を経て下ツ道・中ツ道・上ツ道などにより、飛鳥藤原京や平城京にいたるものと考えられている。『日本書紀』推古天皇廿一年十一月の条に「掖上池・畝傍池・和珥池作ル。又難波（なには）ヨリ京（みやこ）ニ至ルマデニ大道（おほち）ヲ置ク。」とあり、推古天皇21(613)年に官道がつくられたことが知られている。昭和55(1980)年の調査で、約18m間隔で並行する溝がみつかり、この中心線がちょうど難波宮の中軸線と一致していたことが判明し、先の『日本書紀』の記述などから、「難波大道」と呼ばれることになったものである。平成20(2008)年度の調査においても、同様の道路状遺構が南北46mにわたって検出されており、位置関係から「難波大道」とされた。

一方、北に位置する瓜破遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、東西1.7km、南北1.6kmに及ぶ範囲を有している。旧大和川流域に展開する河内平野遺跡群の南西端にあたり、東には長原遺跡が隣接する。瓜破遺跡は現在、地形の特徴と遺構の分布により、西・東北・東南の3地区に区分されている。昭和14(1939)年、瓜破霊園建設に伴って出土した弥生土器が新聞で取り上げられたのを契機に、翌年には山本博氏により大和川河床で採集された弥生土器などの遺物が学会に紹介された。その後、戦前から戦後にかけて今里幾次氏や日本考古学協会による発掘調査がおこなわれた。その間に、特に弥生時代前期の土器研究が進み、弥生時代前期後半の土器様式を「瓜破式」と呼称することもあったようである。昭和24(1949)年には、採集された中国新代の「貨泉」が誌上で紹介されている。

三宅西遺跡に隣接する部分は瓜破遺跡西地区にあたり、地形的には瓜破台地の西側斜面とさらに西に

広がる平野部に位置しており、多くの成果が得られている。既往の調査で、約6300年前に降下したとされる横大路火山灰層の下から、石器製作跡に伴うと考えられるサヌカイトのチップがみつかり、古くは後期旧石器時代までさかのぼるものとみられている。縄文時代中期から晩期にかけての土器や石器が、自然流路よりまとまって出土しており、集落の存在の可能性が指摘されている。平野部では、晩期に堆積作用が活発化することが知られており、水成層からは多くの突帯文土器の破片が出土する。西地区南半部に、弥生時代の集落のまとまりがあることが知られている。集落域の中心は、現在の大和川の位置にあたり、前期から後期まで継続するものと考えられている。大和川以南にも調査が及んでおり、三宅西遺跡に隣接する部分の調査区で、弥生時代中期前葉単純期の居住域や墓域が確認されている。これに対し、古墳時代の遺構や遺物はほとんどみつかっていない。また、古代に関しても遺物は散見されるが、まとまった遺構は検出されていない。中近世は、全体で耕作土層が確認されており、島畠や耕作溝が多くみつかり、

三宅集落から大和川今池遺跡付近にかけての地域は、条里地割が明瞭に残っている場所として知られている。特に、昭和55(1980)年におこなわれた大和川今池遺跡の調査の際に、初めて「難波大道」が確認されたことから、周辺の古道の検討と共に条里制についての研究が進んだ。大和川今池遺跡を中心とした条里地割に関しては、岸俊男氏を始めとして、足利健亮氏や金田章裕氏などの研究がある。岸氏は、古道の比定や道の設定規格について検討をおこなっており、その後の古道や条里の研究に大きな影響を与えた。足利氏は、古道の間隔の検討から距離単位における時期を比定し、大津道や丹比道の斜行道路の痕跡を復元した上で、条里の検討をおこなった。また、金田氏は、古道と条里地割の関係について、古道を中心とした条里地割の不規則な規格を、古道設定から条里地割設定、道路耕地化へと続くプロセスとして捉え、検討をおこなった。

さらに、発掘調査で「難波大道」が検出されたため、考古学的な観点からも検討がおこなわれること

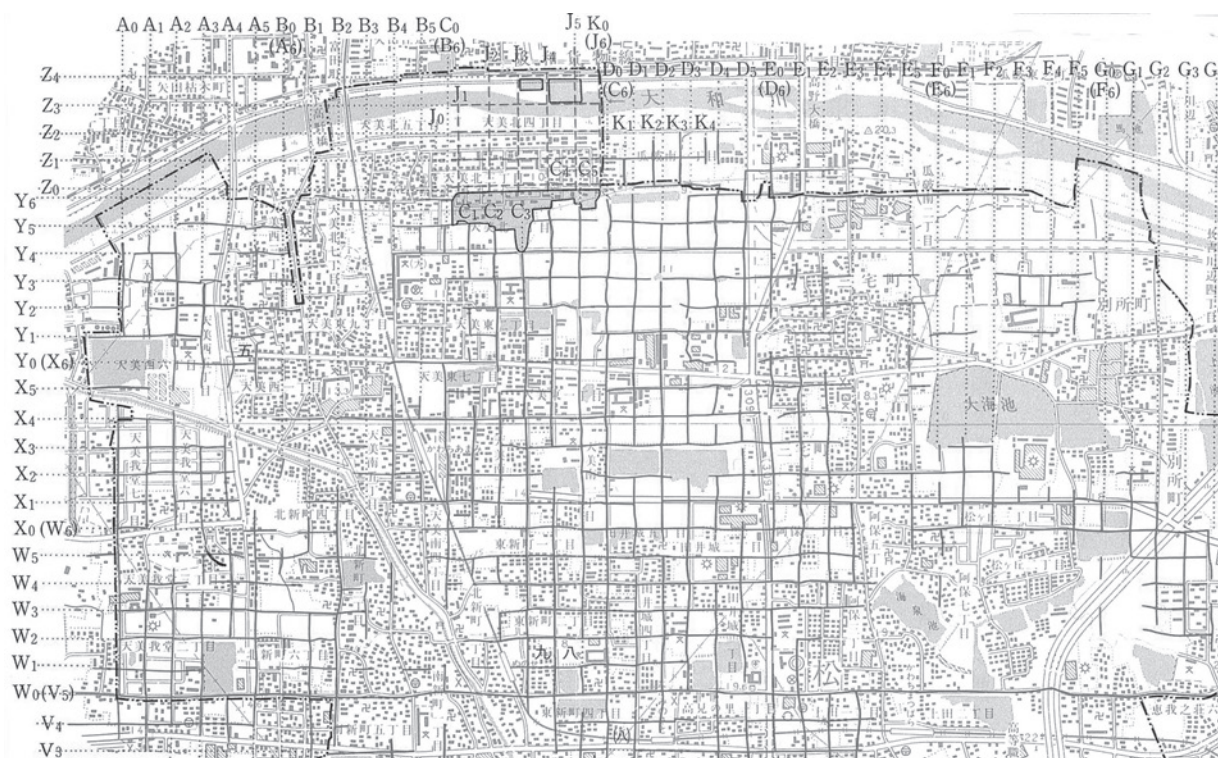


図8 周辺に残る条里地割 (『松原市史』第一巻 足利健亮氏原図より改変)

となった。古代史や地理学の既往の調査成果をふまえて、条里や「難波大道」の設営時期についての検討がなされているが、同時に条里地割の導入時期の問題に焦点が絞られるようになり、集落と土地利用の構造的把握が重要な検討課題となっている。

第2節 文献による歴史的記録

三宅西遺跡の所在する松原市域は、古くは河内国に属しており、その中で丹比郡と称されていた地域にあたる。丹比郡の名は、平安時代の『倭名類聚鈔（和名抄）』では、「タチヒ」（高山寺本）や「太知比」（東急本）などの訓が付けられている。丹比郡は、依羅（よさみ）・黒山・野中・丹上（たんじょう）・三宅・八下（はちげ）・田邑（たむら）・菅生・丹下・土師（はにし）・狭山の11郷からなる。三宅郷の名は、『倭名類聚鈔（和名抄）』では、「美也計」（高山寺本）や「三也介」（東急本）などの訓が付けられている。丹比郡の周辺では、北は渋川郡と攝津国住吉郡、東は志紀郡・古市郡・石川郡、南は錦部郡、西は和泉国大鳥郡と接する。なお、現在の行政区画では、松原市・堺市美原区・大阪狭山市の全域と、大阪市東住吉区・同平野区・藤井寺市・羽曳野市・八尾市・堺市の一部にあたる。

遺跡の所在地は、まさにこの内の三宅郷に位置しており、現在まで残っている地名である。「三宅」の地名の由来は、古代にこの地に設置されていた屯倉のなごりと考えられている。『日本書紀』に記載されている屯倉は、国家制度として位置づけられたものであり、大化前代における朝廷直轄の農業経営地あるいは直轄領ともいふべきものとされている。初期の屯倉は、多くは治水灌漑工事などによる大規模な水田開発の結果成立したもので、5世紀ころから主に畿内で設置されたものと考えられている。この種の屯倉では、農民が他の地から移植され、倉庫や事務所が設けられ、屯倉首（みやけのおびと）などの管理者が置かれたものとされるが、詳細は明らかではない。屯倉は、もと収穫された稲を収める倉庫をさすものであったが、のちにそれに付属する土地や耕作民を合わせて呼ぶようになったため、現在でも各地に地名として残っている例がある。

「屯倉」の初見は、『日本書紀』垂仁天皇二十八年の条の「是歳、屯倉ヲ来目邑ニ興ツ。（屯倉、此レヲバ彌夜氣ト云フ。）」とされているが、この記述はその起源を古く見せる創作と考えられているため、一説には、仁徳天皇のころから屯倉が設置されたものといわれている。『日本書紀』仁徳天皇四十三年秋九月庚子朔の条に「依網屯倉ノ阿弭古、異シキ鳥ヲ捕リテ、天皇ニ獻リテ曰サク、…（以下略）」の記述があり、この依網屯倉が依羅郷から三宅郷に設置されていたものと考えられている。この地に三宅の地名が残っているのは、屯倉を管理する役所や倉庫などの建物が設置されていたことが推定され、現存する屯倉神社（天慶5(942)年創建）もこのことに由来して命名されたものとされている。また、『日本書紀』皇極天皇元(642)年五月乙卯朔己未(5日)の条に「河内國ノ依網屯倉ノ前ニシテ、翹岐等ヲ召ビテ、射獵ヲ觀シム。…（以下略）」の記述がある。翹岐は、百済の慈義王の子であるが、この時期に来日しており、この記事から依網屯倉に天皇家の獵場があったことがわかる。寛延元(1748)年、谷川士清により刊行された『日本書紀通証』（『日本書紀』全巻の註釈書）には、「三宅村有馬場池即是」と記載されており、屯倉神社前にあった馬場池がこの獵場跡とされているが、現在のところ確証はない。なお、寛永元(1624)年に三宅村で大火があり、全村灰燼に帰したとのことから、当地の古文書類はすべてを失っている状況という。この地における、古代の屯倉に関する伝承や記録は以上のように散見されるが、発掘調査などによる遺構の発見はまだないため、想像の域を脱していない状況である。

一方、「三宅郷」の記録を探ると、『正倉院文書』の天平勝宝2(750)年3月23日付「上道人数勘籍」(『大日本古文書』25-110)に見ることができる。この「勘籍(かんじゃく)」は、上道人数なる人物がはじめて官位につく際に、民部省が戸籍を調べて身元を確認したもので、本人所貫の戸主の本籍を書き並べている。

上道人数 [年卅一 河内国丹北郡(丹比郡の誤りか?) 三宅郷戸主大初位下上道波提麻呂戸口]

天平十八年籍所貫同郷戸主少初位上上道波提麻呂戸口人数 [年廿八]

天平十二年籍所貫同郷戸主従八位下上道百嶋戸口人数 [年廿二]

天平五年籍所貫野下郷戸主大初位上上道百嶋戸口人数 [年十五]

神亀四年籍所貫野中郷戸主上道百嶋戸口人数 [年九]

養老五年籍所貫同郷戸主上道百嶋戸口人数 [年三]

天平勝宝二年三月廿三日

これによると、もともと上道人数の戸主である上道百嶋の本籍は、養老5年(721)には丹比郡野中郷であったが、神亀4(727)年には野下郷へ移り、天平勝宝2(750)年には三宅郷に移ったことがわかる。さらに、戸主も天平18(746)年には上道波提麻呂にかわっている。なお、この上道(かみつみち)氏は吉備朝臣の子孫で、もともとは備前国上道郡を本貫とする地方豪族である。『続日本紀』天平宝字元年七月辛亥条に「上道臣斐太都賜姓朝臣」とあり、天平宝字元(757)年に一族の上道臣斐太都が朝臣の姓を賜ったことから、上道朝臣の氏姓が始まったとされている。上記の「上道人数勘籍」は、これ以前の記事となるが、上道氏のうち備前から河内の地に移った一族が存在したことがわかる。ただし、これ以上の記録はみつかっていないことから、備前との直接的な交流関係はわからない。また、三宅郷に移ったとされる上道人数の周辺も不明である。

余談になるが、上記の上道臣斐太都(かみつみちのひたつ)なる人物(後に正道と改名)は、いわゆる「橘奈良麻呂の乱」の際、非常に大きな働きをしたことで知られている。これは、天平宝字元(757)年7月2日、上道臣斐太都が橘奈良麻呂の謀反を藤原仲麻呂(恵美押勝)に密告したことが契機となり、橘奈良麻呂をはじめとする関係者が捕らえられ、処刑されたため、クーデター計画が失敗したものである。『続日本紀』によると、この功績により藤原仲麻呂に重用され、上道臣斐太都は7月4日に中衛舎人従八位上から従四位下に叙せられ、朝臣の姓を賜り、9日には中衛少将へと破格の昇叙をうけている。さらに同年閏8月8日には吉備(備前)国造に任ぜられたほか、美濃・備前・播磨・備後の国司を歴任し、地方豪族出自の官人が国司兼国造という初例となった。天平宝字8(764)年9月に恵美押勝が道鏡を除くために起こした反乱(恵美押勝の乱)における動向は不明であるが、恵美押勝一族が減った以後も健在で、神護景雲元(767)年に備前国造従四位下で没している。ただし、一族の中にこの後貴族として中央で活躍するものはおらず、上道氏は主に備前の豪族として存続した。

このほか、『続日本紀』には、天平勝宝8(756)年2月、孝謙天皇が河内国の智識寺南行宮に御した際に巡拝をおこなった六寺(智識・山下・大里・三宅・家原・鳥坂)中に、三宅寺と呼ばれる寺が含まれていることが記載されている。享保20(1735)～21(1736)に出版された『五畿内志(河内志)』では、これを三宅村の「三宅廃寺」にあてており、『大阪府全志』もこの説をおおむね支持しているが、高安郡三宅郷内の寺とする説もあり、はっきりしない。三宅廃寺は、屯倉神社の境内にあったとされる。

また、弘仁6(815)年7月に成立した古代氏族の系譜書である、『新撰姓氏録』第28巻河内国諸蕃に、「三宅史(みやけのふひと)」の記述が見られる。

河内国諸蕃〔起高丘宿禰。尽伏丸。五十五氏。〕

漢（中略）

山田宿禰。出自魏司空王昶也。（中略）

三宅史。山田宿禰同祖。忠意之後也。（中略）

依羅連。出自百濟國人素禰志夜麻美乃君也。

山河連。依羅連同祖。素禰夜麻美乃君之後也。

ここで見られる三宅史に関しても、前出の三宅寺と同様に、高安郡三宅郷の指摘もあり、丹比郡三宅郷の確証はないが、可能性はあるものと考えられる。なお、三宅史氏の一族の名は、他の史料では見られないようであるが、『平安遺文』によると、周防国玖珂郡玖珂郷の戸籍に多く見られるとのことである。河内国との関連は不明である。依羅連に関しては、丹比郡依羅郷の地名にもとづくものとされている。『続日本紀』神護景雲元年七月辛未条に「河内国志紀郡人正六位上山川造魚足等九人賜姓山川連。同国同郡人從六位上依羅造五百世麻呂。丹比郡人從六位下依羅造里上等十一人依羅連。」とあり、神護景雲元(767)年7月24日に、河内国志紀郡の依羅造五百世麻呂と丹比郡の依羅造里上などが、連の姓を賜ったことがわかる。

丹比郡は、平安時代に丹北・丹南・八上郡の3郡に分かれたことは知られているが、その成立の正確な年代はわかっていない。延久四(1072)年九月五日の『太政官牒(石清水文書)』の丹北郡関係の項に、「壹条」「北参条」「北肆条」などの記述がみられるほか、久安2(1146)年十月十七日の『僧頼円田売地券(京都大学蔵古文書集)』に「八上郡野遠郷萩原里卅五坪」が記されていることから、条里が布かれていたことがわかる。現在でも調査区周辺に条里地割が比較的明瞭に残されている。平安時代の記録がほとんどみつかっていないため推測の域を出ないが、現状では延久4(1072)年以前には、3郡に分かれたものと考えられている。三宅郷は、依羅・田邑・丹下郷とともに丹北郡を構成しており、その範囲は竹内街道を南限、東除川・西除川をそれぞれ東限・西限とする地域である。

この地は、鎌倉時代の終わりころから室町時代にかけて、南北朝の動乱や河内守護畠山氏の内紛などの主たる戦場となっており、各地に記録が残っている。南北朝の動乱では、南河内一帯が両陣営の対峙する最前線となっており、各地で激しい戦闘がおこなわれたことが知られている。この地域を南北に縦断する高野街道が移動の中心となっていることから、街道沿いの拠点の争奪戦に関する記事が多い。主要な街道として、松原市域の東側の藤井寺・羽曳野市域を縦断する東高野街道が知られているが、三宅集落の中心を通る中高野街道も見過ごせない。調査地周辺では、丹南の河内守護所や河内大塚山古墳上につくられていた丹下城、松原や岡などの記事を多く見ることができる。たとえば、楠木正成が南河内から北上して幕府軍と戦う一連の記録の中に「同(元弘3(1333)年〔南朝〕)正月十四日、楠木於河州致合戦、被追落人々、河内守護代在所丹南、同国丹下、池尻、花田地頭俣野、和泉国守護、并田代、品河、成田以下地頭御家人」『楠木合戦注文』と記されており、楠木正成が丹南の守護所において、河内守護代丹下入道西念、河内国丹下・池尻・花田地頭俣野彦太郎、和泉守護阿保国清らを破ったことがわかる。この頃は、まだ後醍醐天皇は隠岐に流されたままであり、足利高氏は鎌倉幕府軍の一員として畿内に派遣されていた時期である。この年の5月には鎌倉幕府が滅亡し、6月より後醍醐天皇を中心とする建武の新政が始まる。また、延元3(1338)年〔南朝〕の『高木遠盛軍忠状』によれば、「今年(延元三年)三月八日、属和田左兵衛尉正興之手、相向丹下城、及数日致合戦畢」や「丹下凶徒等、当国松原庄構城郭之間、閏七月廿二日、属正興之手致合戦、追落凶徒等、討取丹下八郎太郎子息能登房畢」とあ

り、南朝方の和田正興が丹下城や松原城を攻撃し、これらを破ったことがわかる。

この後、南北朝の対立が続くが、明德3(1392)年10月の南北朝合一をもって、政治的には決着をみたかたちとなる。ただし、南北朝合一の立役者である大内義弘が、応永6(1399)年に堺で幕府軍に攻め滅ぼされ(応永の乱)、将軍足利義教が嘉吉元(1441)年に赤松満祐に暗殺される(嘉吉の乱)など、混乱は続き、安定することはなかった。この後、足利将軍家の家督争いや諸大名の対立などもからんで山名持豊と細川勝元の対立が表面化してきた。この両者が、河内守護職をめぐる畠山氏の内紛(義就と政長)に介入したことにより、京の戦火が拡大していった(応仁・文明の乱)。この大乱は応仁元(1467)年から11年におよぶものであったが、この間では畠山氏の内紛が決着をみていないことから、泥沼の様相を呈することになる。この畠山氏の争いの舞台は、河内にとどまらず山城国まで拡大し、長期にわたる対陣がおこなわれたことから、文明17(1485)年に三十六人衆と呼ばれる南山城の国人衆が両畠山陣営と交渉し、撤兵することとなった(山城国一揆)。特異な例であるが、これにより実質的な応仁の乱が終結したものと見え、30年以上にわたる畠山氏の内紛が決着したものである。

この時期の三宅の地名が記録に残っているものとして、相国寺鹿苑院蔭涼軒主歴代の公用日記である『蔭涼軒日録』の明応二年三月二日条があげられる。

「二日 不参。天快晴。(中略)

河州御方諸軍勢書立、自御陳(陣)到来、可有一覧云々。彼書立来。

陣取次第。一くわんせん寺[たけ山より五十町西、誉田より三里]、ねころ(根来)衆、き(紀)の国衆、勢数四千、一にしの浦[誉田より四町](古市郡)、斉藤六郎左衛門尉、一ゆきのみや[にしの浦のそば]、根比のせんしきはう、き(紀)の国衆三千、一藤井寺、遊佐河内守(長直)、勢数三千、其外国衆二千、一こむろ(志紀郡小室)、さうた(沢田)、武田殿、一大田(志紀郡)、みやけ(丹北郡三宅)、勢数五百、一若林(丹北郡)、畠山播州、并神保名字勢数千、一かんめい[誉田江五十町](渋川郡亀井)、尾張守殿(畠山尚順)、同京衆、一正覚寺、公方様(足利義材)、畠山左衛門督殿(政長)、一平野、武衛(摂津住吉郡)、一天王寺、同堺南庄(和泉大鳥郡)、赤松殿(政則)、一岡[誉田より十八町](丹南郡)、細川讃州、三吉衆

敵衆、一国見(錦部郡)、田い庄、一誉田、越智(家栄)、ふるいち(古市澄胤)、はせを(箸尾)、たか田(高田)、まんさい(万歳)、一こんたい(金胎)寺(錦部郡)、かい(甲斐)の庄、糸なみ(江南)、いのくち(井口)、かいてきさうまこ次郎]

これは、明応2(1493)年に将軍足利義材が河内の畠山基家征討の軍を起こした際の記録で、畠山氏の家督争いに将軍が直接出陣することははじめてのことであった。これに畠山政長・尚順、赤松政則らが従い、河内十七箇所・三箇城・若江城・大和郡山城など、基家方の諸城が相次いで陥落したものである。この内容から、足利義材は平野郷に近い正覚寺に陣を構えており、前線は、くわんせん寺・西浦・藤井寺・岡・若林・三宅などであった。戦闘の詳細は不明であるが、三宅に500の軍勢が布陣していたことがわかる。この戦闘は、将軍足利義材側優勢のまま推移し、3月26日には高屋城において攻防戦が開始されるまでとなった。ところが、4月22日に突然、京都の細川政元により、のちの足利義澄の嗣立と畠山政長討伐、畠山基家赦免の令が発せられ、形勢が逆転してしまう。この企ては、すでに手を回してあったと見え、多くの諸将は城攻めを中止し、堺に撤兵した。将軍側は正覚寺にたてこもったが、援軍が阻まれて孤立したため、閏4月25日の戦闘で畠山政長自害という結末となった。足利義材は捕らえられ、畠山尚順は紀伊に逃亡した(明応の政変)。

この後、紀伊に逃れた畠山尚順が勢力を盛り返し、明応6(1497)年に河内守護代家の遊佐氏と誉田氏の内紛が表面化したのに介入し、河内に攻め込んできた。この際の記録として、中臣師淳による『春日権神主師淳記』があり、明応6年11月に將軍方の河内守護代遊佐河内守が三宅で敗れ、多くの戦死者が出たことが記されている。三宅周辺が戦場となっていたことがわかる。さらに、明応8(1499)年には畠山尚順が畠山基家を敗死させ、北河内を平定するまでになる。この勢いを得て、捕らわれていた足利義材(義尹と改名)も越中に脱出した後、京に迫るまでとなったが、細川政元側の猛攻により失敗に終わる。ただし、この後に細川氏において家督争いが激化し、永正4(1507)年には、細川政元が暗殺されるまでに至った。畠山氏においても家督争いが再燃し、両家の事情が複雑になった時期に、周防の大内義興に身をよせていた足利義尹が上洛してきたことから、將軍足利義澄派は近江に逃亡した。永正5(1508)年7月、足利義尹(義植と改名)がついに將軍に返り咲き、管領細川高国という体制が整った。

この後も、畿内では幕府や細川氏内部の対立や争いが絶えず、各地で戦闘が繰り返される状況であった。その中で、三宅の地名が記録に残っているものとして、石山本願寺の証如による『天文日記』の天文十五年八月二十七日条の「細川次郎[高屋ニ在陣]、同四郎[河内三宅ニ居陣]」があげられる。詳細は不明であるが、天文15(1546)年に幕府の実力者である細川晴元と対立していた、細川次郎氏綱が高屋城に、弟である細川四郎藤賢が河内三宅に陣取っており、証如が音信を遣わしていたことが記録されている。細川氏綱は、その後三好長慶とともに幕府に出仕し、將軍足利義輝のもとで管領となったが、実権は三好長慶が握っていた。細川氏綱は、永禄6(1563)年に山城国の淀城で没するが、この後に室町幕府の管領はおかれず、最後の管領となった。

以上の記録に出てくる三宅の陣に関しては、発掘調査などの成果がないことから不明である。宝暦10(1760)年の『三宅村明細帳』(妻屋家文書)に「当村惣構之堀跡有之、西矢倉・東矢倉と申所御座候」とあり、西矢倉・東矢倉と称する惣構之堀跡があったという。現在の屯倉神社の地はかつて砦であったといわれており、その東と南に幅3mの濠がある。南の濠の西に、東西に細長い「土井先」という小字があり、江戸時代の村絵図(妻屋家蔵)では濠が確認できる。屯倉神社の南には馬場池、村の西には新池・酒蓋池、北には谷池があって、三宅壘の濠の一部を形成していたものと考えられている。

なお、慶長20(1615)年の大坂夏の陣の際、西軍の後藤又兵衛や薄田隼人らが、藤井寺の道明寺付近で東軍と戦って敗れたが、この地域も戦場となったとのことである。三宅村の被害はわかっていないが、北西部の城連寺村では、農地が荒らされ、家も破壊されて住むことができない有様で、翌年と次の元和2・3(1616・17)年の年貢が免除されたほどであったという。

江戸時代には、はじめ幕府領であったが、元禄14(1701)年上野高崎藩松平氏領、宝永7(1710)年からは幕府領となるが、一部が正徳2(1712)年武蔵川越藩秋元氏領、明和4(1767)年出羽山形藩秋元氏領、弘化2(1845)年上野館林藩秋元氏領となる。延宝検地で石二千高を越す大村で、南部の馬場と北部の長田、東、西に分かれていた。元禄12(1699)年の『水論文集』(妻屋家文書)では、この四つがそれぞれ村を称しており、年寄がおかれていたという。

『松原市史』によると、幕府領の綿作率は、享保13(1728)年に耕地の41%、元文3(1738)年には同48%、宝暦9(1759)年には村高の37%、安政3(1856)年には耕地の32%であったという。「三宅木綿」の名称があるほど木綿織が盛んであったようで、宝暦10(1760)年の『三宅村明細帳』(妻屋家文書)には、男は土肥し・草刈・縄俵・草履づくり、女は冬・春は糸つむぎ・木綿織とある。

用水は、阿保村の海泉池の水懸り高25町、大海池の水懸り高61町余が主なものであった。狭山池中

樋筋の用水は、享保2(1717)年にはすでに水懸りから離脱していたという。大海池は規模が大きく、三宅村の半分の田地を灌漑していた。三宅村には大海池のほか、八つの池があったが、馬場池・十郎ヶ池・菰池・酒蓋池が大海池の子池で大海池より水を受けていたという。

第3章 調査の方法

本格的な調査は、西半部と東半部で同時に着手したため、現地調査は統一をはかって進めた。ただ、両調査区で、遺構番号や遺物登録をそれぞれおこなったため、調査区全域の整理にあたって、この部分をいかに統一化するかということが問題となった。基本的には遺物登録番号は変更しないが、遺構番号に関しては、なるべく調査時点での番号を大きく逸脱しない方法で新しい番号を付けることとした。詳細は後述するが、ここではまず現地調査段階の状況をあげ、続いて整理段階での統一化に関して述べる。

第1節 現地調査

調査区は、一般府道住吉八尾線外建設予定路線内であり、三宅西遺跡の範囲内にあたる、国道309号線と今井戸川の間部分である。新設道路であり、計画路線は、中央部に片道2車線計4車線の自動車専用道路部分と、両側に片道1車線の車道と歩道が設置される、幅36mに及ぶものである。

平成15～16年度に最初に着手した部分は、確認調査であったため、建設予定路線内で路線に平行するかたちで、幅2mのトレンチを設定して調査をおこなった。この時は、三宅西遺跡部分だけではなく、西側の池内遺跡や大和川今池遺跡の範囲まで対象としていたことから、路線延長約2kmの中で計35ヶ所のトレンチを設定した。東から番号を付しており、三宅西遺跡の範囲は1～12トレンチである。遺物の取り上げ単位はこのトレンチであり、各々で名称をつけている。遺物登録は、全調査区を一括でおこなっているため、連番になっており、番号の重複はない。遺構番号は、遺構の種類に関わらず、トレンチ毎に検出した順に1番から連番を付けている。ここでは測量業者による測量をおこない、基準点設置と国土座標によるトレンチの位置を測定した。なお、図化作業はおこなっていない。

平成16年度の調査(現地では(その1)調査)では、調査区の北側に延びる進入路の拡張工事が先行することから、この部分のみの調査となった。調査範囲は狭かったが、測量業者による航空測量をおこない、国土座標による正確な平面図を作成した。調査区は1ヶ所であることから、遺物登録や遺構番号は、この調査区のみで完結している。

平成16～18年度の調査(現地では(その2・その3)調査)では、(その1)調査部分を除くほぼ対象地全域の調査をおこなった。対象地をほぼ2等分し、東半部を(その2)工区、西半部を(その3)工区と設定した。調査は、『遺跡調査基本マニュアル』に沿っておこなわれており、現地の国土座標による地区割りは、第VI座標系のX軸とY軸を基に設定した10mの正方形区画を基準としている。遺物の取り上げ単位はこの区画であり、各々に名称をつけている。(その2)調査と(その3)調査は、工事契約上分けられたものであることから、現地調査では一括して調査区を設定している。工程上での分割や道路・水路による分断などから、1～20区に分けており、変則的ではあるが、(その2)調査は9～12区と18～20区、(その3)調査は1～8区と13～17区となっている。遺物登録は、(その2)調

査と（その3）調査それぞれでおこなっており、連番になっている。遺構番号も（その2）調査と（その3）調査それぞれで付しており、遺構の種類に関わらず、検出した順に1番から連番を付けている。このため、1番の付く遺構は（その2）調査と（その3）調査に存在することになる。測量業者による航空測量をおこない、国土座標による正確な平面図を作成した。

平成19～20年度の調査（現地では（その4）調査）では、東半部のうち、（その2）調査で着手できなかった、東西方向に走る道路の拡張部分と19区南側部分の調査をおこなった。調査区は、工程上分割したものを含め、1～3調査区に分けている。基本的に、調査方法は（その2）調査になっている。遺物登録や遺構番号は、全調査区を一括で付けているため、連番になっており、番号の重複はない。測量業者による航空測量をおこない、国土座標による正確な平面図を作成した。

さらに、平成19年度には、路線の南側に延びるが、18区と19区を分かち道路の拡張工事に伴う調査（現地では（その5）調査）が追加された。調査区は、鋼矢板による土留めが四周に施されており、調査区は1ヶ所であることから、遺物登録や遺構番号は、この調査区のみで完結している。調査範囲は狭かったが、測量業者による航空測量をおこない、国土座標による正確な平面図を作成した。

以上が、各調査での遺物登録方法、遺構番号の付け方である。少々細かい記述になってしまったが、調査にあたって、異なった方法をとっている状況をあげてみた。次に、ほぼ全般で統一的な調査方法の部分について述べる。

調査は、バックホーによる機械掘削で、現地表面から盛土・耕作土を除去した後、層位毎に人力掘削により掘削を進めている。道路に隣接した部分では、現地表面に到達するまでに、約1mに及ぶ厚さの盛土掘削が必要である。また、一部に構造物が残存していたことから、これらを撤去した後から本来の調査用の機械掘削に移る。なお、調査地域周辺では、耕作地に水を供給する水路がなく、水道施設により代用していることから、調査にあたって、水利組合との調整により、事前にこの水道の付け替え工事をおこなった。また、路線内全域が調査対象範囲となったことから、官民境界に関しては、大阪府教育委員会文化財保護課の指示により、境界線を調査地の下端とした。掘削にあたって、基本的に矢板による土留めは施さず、オープンカットでおこなうことから、官民境界部分では、上端で民地まで掘削がおよぶことになった。このため、可能な限り隣接地の所有者の理解を得て借地をおこない、調査範囲を確保した。

遺構全体の実測作業は、基本的には、主要な遺構面を航空写真測量により、図化作業（1/20、1/50、1/100）を測量業者に委託しておこなっている。遺構面が複数存在する地区や遺構の密集度により、複数面図化した地区も存在する。他の遺構面の全体図や遺構図、土層断面図などは、平板測量や実測により作成している。前述したように、平面位置は三角点による国土座標系（世界測地系：日本測地系2000）、レベルは水準点による東京湾平均潮位（T.P.）を用いており、これを基に図化をおこなっている。航空写真の撮影には、おおむねヘリコプターを使用したが、平成19年度以降は本体工事との関係からレッカー撮影をおこなうようになった。以前は図化作業を手書きによるトレースでおこない、原図を作成していたが、現在では図化作業の発注形態が変わり、デジタル化に伴う測量方法をとることになっている。最終納品はデータで納めるかたちになったことから、CADソフトなどを使用して、パソコン上で図化のみならず、加工も可能となっている。

出土遺物は、基本的な整理作業として現場事務所で登録後、順次洗浄・注記・接合・復元をおこなった。記録写真に関しては、現地で遺構面全景や遺構、遺物出土状況、土層断面などを35mmカメラ（モノクロ、

カラスライド)と適宜6×7カメラ(モノクロ、カラスライド)を使用して、調査担当者が撮影をおこなっている。記録用として、デジタルカメラによる撮影もおこなっている。遺構面全景の写真撮影に際しては、高所作業車(高さ20mクラス、10mクラス)を使用している。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所写真室が担当した。これらの記録写真のネガやスライドなどは登録・整理されており、当センターで保管している。

第2節 整理作業

整理作業にあたって、前節で述べたような相違点をいかに統一化するかということが、まず問題となった。各調査では、各々独自に遺物登録番号や遺構番号をつけているが、全体の調査報告でいちいち「(その2)調査区132土坑」などという表現をとることは、担当者のみにはしか通用しない表現であり、それ以外の人には煩雑な印象しか与えず、全調査区を把握するのに大きな障害となってしまう。調査区割りには、現在の事業者や調査サイドの都合であり、遺跡や遺構には何の意味もないことから、調査方法や体制の説明を除いて、遺跡の内容の記述部分ではなるべく煩雑にならず、統一した表現方法をとることを考えてみた。

調査区の説明に対して、遺構の位置関係などを述べる際、トレンチの名称は必要となることから、全体を通じて当初に付けられたトレンチ名を使用することとした。工程上、細かいトレンチに分かれた部分で、隣接したトレンチ名が離れた数字の場合があり、煩雑な印象を与えるが、現地調査ではこのトレンチ名を使用しており、唯一統一的な部分である。さらに、狭長な調査区であることから、まず(その2)調査と(その3)調査区の分割を利用し、調査区を大きく2分割して説明することにした。さらに、それぞれの調査区の中で、遺構の分布状況からまとまりが考えられる部分について、トレンチをまとめることとした。ただし、これらの分類はあくまでもこの報告書上での位置関係に関する記述のためのものであり、それ以上の意味は有していない。

基本となる遺物登録番号は、各々の調査で用いていたものをそのまま使うこととし、変更はしない。遺物登録ラベルも書き換えなどはおこなわず、そのままにしておくことにした。各調査において台帳が作成されていることから、後で遺構番号を新規に付けたとしても、台帳における番号の読み替えによって、混乱無く使用できるものであると考えられる。

もっとも統一がとれておらず、重要なものとして遺構番号がある。この遺構番号に関しては、なるべく調査時点での番号を大きく逸脱しない方法で、新しい番号を付けることを考えた。今回の調査で、注目される遺構として竪穴住居があげられる。この「竪穴住居」という用語に関しては、その役割が居住のためだけとは限らないことから、「竪穴建物」という呼称を提唱する研究者もいるため、ここでは慣用語として使用する。竪穴住居に関しては、各調査区でそれぞれ遺構番号の一環で番号を付けているが、複数の調査区にまたがったものや建て替えなどで重複したもの、竪穴住居と認識していなかったものも存在するため、調査時の遺構番号をそのまま使用できないものが多い。この路線に関する調査は終了することになるため、細部を除いて竪穴住居の棟数がほぼ確定できる。このため、竪穴住居に関しては、調査時の番号は踏襲せず、新規に番号を付けることとした。対照表により、竪穴住居では新旧遺構番号の対照は可能となるようにしている。

柱穴の複合体となる掘立柱建物に関しても、調査時に番号を付けているものもあるが、煩雑になるた

め、竪穴住居と同様に新規に番号を付けることとした。対照表を作成して、建物を構成する柱穴・ピットの対応関係が明確になるようにしている。なお、柱列に関しても掘立柱建物と同様、新規に番号を付けている。

また、複数の調査区にまたがる流路や一部の溝に関しても、各調査区で個別に遺構番号を付けているものの、同一の遺構と認識できるものが存在する。調査区によっては、調査時には包含層と認識していたが、全体の流れを見たらうで流路内と判断した部分もある。溝に関しては、面積的に比率の多い方の調査区の遺構番号でそろえることにしたが、必ずしも統一はしていない。

その他の遺構に関しては、数が多く煩雑になるため、竪穴住居のように新規に番号を付け直すことは不可能な状況である。全体の遺構番号の付け方をみると、最小単位である調査区内での重複はほとんどないことから、個々の遺構番号はそのまま踏襲できると考えた。さらに、各調査単位で使用された区割りの数も1桁で収まっている。調査区内での遺構番号の最大値は3桁を越えていない。このことから、これらをまとめて各遺構を表す表現方法として、基本的に竪穴住居、掘立柱建物以外は以下の表現方法をとることにした。

[調査単位 (1桁)] [遺構番号 (3桁)] [遺構種類]

たとえば、(その2) 調査の遺構123は、2123土坑と表記

これらの作業により、調査時の遺構番号を踏襲しているとはいえ、新規に番号を付けたことと同様の状況になった。このため、すべての遺構に関しても対照表を作成して、なるべく混乱が生じないようにしている。

遺構図面作成の具体的な作業としては、業者発注により作成された日本測地系2000（世界測地系）のデータは、DXF形式であることから、そのままAutodesk社製AutoCAD LTなどのCADソフトを用いて編集がおこなえるほか、Adobe社製Illustratorでも利用できる。現地での手書き実測図は、スキャナーで取り込み、コンピューター上で加工できるようデータ化することにした。このほか、基本データの作成のため、Adobe社製Photoshop CS2を用いてすべての遺構図面の接合などの作業をおこなった。コンピューター上での編集は、Adobe社製Illustrator CS2を用いておこなった。さらに、これらのデータをもとにIllustrator CS2上でトレース作業をおこない、レイアウトも含め遺構図版を作成した。遺構図版に関しては、従来に比べて作業時間が大幅に短縮できるため、基本的には、従来の手書きによるトレース作業はおこなっていない。

遺物は、打製石器と磨製石器、土器、瓦類などの器種の違いにより、実測方法が異なっている。一部の石鏃や石錐などの打製石器に関しては、薄いものであることから、スキャナーでそのまま画像として取り込み、Photoshop CS2でデータ化する。その画像から稜線等を拾い、Illustrator CS2でトレースをおこなう。遺構図作成とほぼ同様の方法である。これで作成したデータの線号を整えることにより、手書きより繊細な線を表示することができる。この方法により、従来の実測・トレースに比べて作業時間が大幅に短縮でき、レイアウト等も容易におこなえるようになった。ただし、石器研究者の中には、手書きトレースの優位性を主張する意見もあることから、今回は出土地で分けて併用している。石器のトレースに関しては、方法論も含めて議論の余地があるものと考えられる。

これ以外の打製石器や磨製石器、土器類などに関しては、従来通りの実測作業によって実測図を作成

し、手書きによるトレースをおこない、版下を組んでいる。この版下を印刷業者でスキャンしてデータ化してもらい、そのデータをこちらでInDesign CS2により編集し、印刷原稿として入稿するというかたちをとっている。遺構図と同様に、すべての遺物実測図をIllustrator CS2でトレースする方法も考えられるが、丸みを帯びたカーブなどの表現において、仕上がりで手書きトレースのほうが勝っていたため、今回は採用していない。ただし、縄文土器に関しては、Illustrator CS2で遺物実測図のトレースをおこない、拓本をスキャナーで取り込んだデータで図版を組んでいる。結果的には、遺構図とは異なり、手書きトレースに比べて作業時間が大幅に短縮できるとはいえなかった。ただし、レイアウト作業には非常に便利であることや、改良の余地は大いにあるものと考えられることから、今後、遺物のトレース作業についても、コンピューター上でおこない、データ化していくことが可能であるといえる。

写真図版に関しては、従来通りの紙焼きしたものを原寸で貼りこんだ版下を作成している。現状では、報告書作成に関して、写真図版関係にはデジタル化されたものはないという状況である。

本文のレイアウトに関しても、挿図がデータ化されていると、レイアウトソフトである、Adobe社製InDesign CS2などで体裁を整えることができる。今回は、InDesign CS2で作成した本文の版組を印刷製版としている。現実問題として考えられることは、こちらで作成したデータがWindows環境であるのに対して、印刷業者がMacintosh環境であることである。以前なら、データ互換性の問題などが障害となっていたが、OSがWindowsXP（さらにWindows Vista）とMac OS Xになった昨今、ほとんど障壁は取り除かれたものといえる。以前にも同様のデータ作成により入稿したことがあるが、特に重大な問題は体験していないため、OSの違いは問題にならないといえよう。今後、フルデジタル化が進むと、レイアウトソフトによりこちらで体裁まで整えることができることから、印刷製本の期間短縮およびコスト縮減が進むものと考えられる。

サヌカイト製石器の整理にあたっては、縄文時代に関しては吉村氏、弥生時代に関しては上峯氏の多大なる協力を得ると共に、同志社大学学生の実田陽平氏、奈良大学学生の安富匠彦氏には、データ計測などの協力を得た。データ計測の対象として、二次加工の痕跡があるものと2 cm以上の剥片に個体番号を付与して行った。石器器種分類は、真田氏と安富氏が行い、最終的には村上が判断した。事実誤認があれば村上の認識不足である。実測図作成は、接合資料、石槍の完形品を上峯氏が、剥片や石核などを中心に真田氏と安富氏が、小型の石器は村上が行った。掲載した石器類は、個体番号を付与したまま収納しており、資料活用いただければ幸いである。なお、挿図における打製石器の黒塗り部分の表現は、新しい欠損を示している。

磨製石器の石材鑑定は、川端氏と小倉技師が行った。

また、5・6区出土の縄文土器の整理および分類に関しては、清水の原案のもと、大野が再確認し、最小限の手直しをおこなった。実測図のトレースや拓本に関しても、同様である。

全般的に、遺構や遺物の記述に関しては、現地調査担当者の原稿や原案をもとにまとめたものである。調査過程で担当者の交代が多く、報告書作成まで担当することができない状況であったことから、調査時の所見などを残していったものを基本としている。報告書編集の段階で、これらの原案の内容を重視したことから、明らかな事実誤認以外は、そのまま盛り込むようにした。このため、読みづらくなった部分があるかもしれないが、表現に関してはあえて統一していない。

第4章 調査成果の概要

三宅西遺跡の調査区は、東西方向に長く設定されており、南から北へ張り出す河内台地や古い河川の伸張方向とほぼ直交していることから、地層の堆積過程や古環境の変化を把握しやすい条件を備えている。一方、これらの河川により地層が分断されていることから、時期決定の鍵層となる黒色土層などが寸断されている状況である。また、河川の影響を強く受けた土層の起伏に伴い、鍵層の残存状況も複雑な様相を示している。このため、現地作業における考古学的な土層観察のみでは、土層確認（層の対比）が非常に困難な状況である。

調査区から大和川をはさんで北側の大阪市瓜破遺跡や山之内遺跡などでは、(財)大阪市文化財協会の調査研究により、基本層序が作成されており、瓜破台地東北部の段丘の詳細な地形が明らかになりつつある。また、すでに自然科学分野の分析を総合的に解析しており、実績も多くあげている。特に今回の調査区に隣接する大和川北岸における資料に関しては、膨大なデータを保有している。さらに、河内平野南部で詳細な層序が確立している、長原遺跡の標準層序などとの対比をおこなうことにより、すぐ南側に位置する、三宅西遺跡の堆積構造を把握することができるものと考えられる。

第1節 基本層序

前述したように、(財)大阪市文化財協会の協力を得て、基本層序を作成し、現地調査にあたることとなった。ここでは、遺跡全体にわたっての基本層序の概略を述べるが、各調査区の詳細はそれぞれの地区毎に記述する。

三宅西遺跡の東西約0.6kmのルート of 層序断面図を図9に示す。調査地に沿う道路地盤の標高は西端のTP.+10.2mから東へ徐々に高くなり、国道309号に接する遺跡東端では11.5mを超えている。詳しく地層を観察した地点は黒太線や黒丸で示した。当該地域の氾濫平野を構成する難波累層の層厚は2.5～4.0mである。当該地の地層は下記のとおり区分できる。

なお、図9には詳しく地層を観察した地点は黒太線や黒丸で示した。また、基本層序の地層名については、地層番号の前に遺跡名である「三宅西」を付けて、例えば「三宅西1層」のように表記することにし、図表などでは「MY 1」のように表記することがある。また、東半部（三宅西遺跡（その2）の調査範囲）および西半部（三宅西遺跡（その3）の調査範囲）の標記については、煩雑さを避けるためそれぞれMY(2)区およびMY(3)区と記すことにする。

a. 沖積層（難波累層）

三宅西0層（第0層）は、現代の盛土層および攪乱層である。

三宅西1層（第1層）は、現代の作土層をいい、層厚は約25cm以下である。

三宅西2層（第2層）は、主として近世の作土層で、層厚は10～30cmである。

三宅西3層（第3層）は、灰色ないしにぶい黄橙色砂質シルト～シルト質砂からなる中世から近世の作土層で、層厚は約10～30cmである。

三宅西4層（第4層）は、灰褐色ないしにぶい黄橙色砂質シルト～シルト質砂からなる作土層で、層厚は10～20cmである。

三宅西5層（第5層）は、灰黄色ないし灰色シルト質砂～砂からなる氾濫原堆積層である。上位層の耕作による攪拌を受けており、部分的にしか残されていない。層厚は20cm以下である。本層及び上位の三宅西4層からは12～13世紀ごろの瓦器が出土している。

三宅西6層（第6層）は、黄褐色砂混りシルト～砂からなる作土層および氾濫原堆積層である。層厚は35cm以下で、分布はMY(2)区では連続するが、MY(3)区では断続的である。飛鳥時代から平安時代の遺物を含む。

三宅西7層（第7層）は、後背湿地堆積層、古土壌および河川氾濫堆積層からなる。遺跡のほぼ全域に分布し、MY(2)区では三宅西7a層～7e層に細分され、MY(3)区では1層に収斂する。

三宅西7a層（第7a層）は、褐灰色ないし灰色砂質シルト～シルト混り砂からなる古土壌である。層厚は約20～30cmである。主として遺跡中央部に分布し、東側と西側では下位層と収斂する。上面で飛鳥時代ごろの流路、層内で飛鳥時代の総柱建物や古墳時代の遺構群が検出されている。

三宅西7b層（第7b層）は、灰黄色シルト質砂～砂・礫からなる河道内堆積層および河道からの氾濫堆積層である。層厚は30cm以下で、河道部では70cm以上ある。主として遺跡中央部に分布する。

三宅西7c層（第7c層）は、黒褐色粘土質シルト～シルト質砂からなる後背湿地堆積層、古土壌である。層厚は30cm以下で、MY(3) 5・6区以西に分布し、これ以东では上位層と収斂する。MY(3) 7区では上面で庄内式期の掘立柱建物や井戸・溝などを検出している。

三宅西7d層（第7d層）は、褐灰色ないし黄灰色粘土質シルト～砂・礫からなる河道および河道からの氾濫堆積層である。層厚は概ね30cm以下であるが、河道部では約200cmある。主としてMY(2)区に分布し、MY(3) 5・6区以西では上位層と収斂する。なお、MY(3) 8区の河道からは、畿内第V様式の土器が多数出土している。

三宅西7e層（第7e層）は、黒褐色ないし暗褐色粘土質シルト～シルト質砂からなる一部後背湿地堆積層、一部古土壌の暗色帯構成層である。層厚は40cm以下で、主としてMY(2)区に分布し、MY(3) 7区では下位層と収斂し、5・6区以西では上位層と収斂する。MY(2)10・11・19区では、弥生時代前期～中期の竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されている。

三宅西8層（第8層）は、上部が黄灰色ないし灰黄褐色砂・礫からなり、下部が黄灰色ないし褐色粘土質シルト～砂質シルトからなる河川の氾濫堆積層である。層厚はMY(3)区で100cm以下、MY(2)区では10～50cmで、遺跡の全域に分布する。MY(3) 8・15～17区の河道より、縄文土器（滋賀里I～III）が出土している。

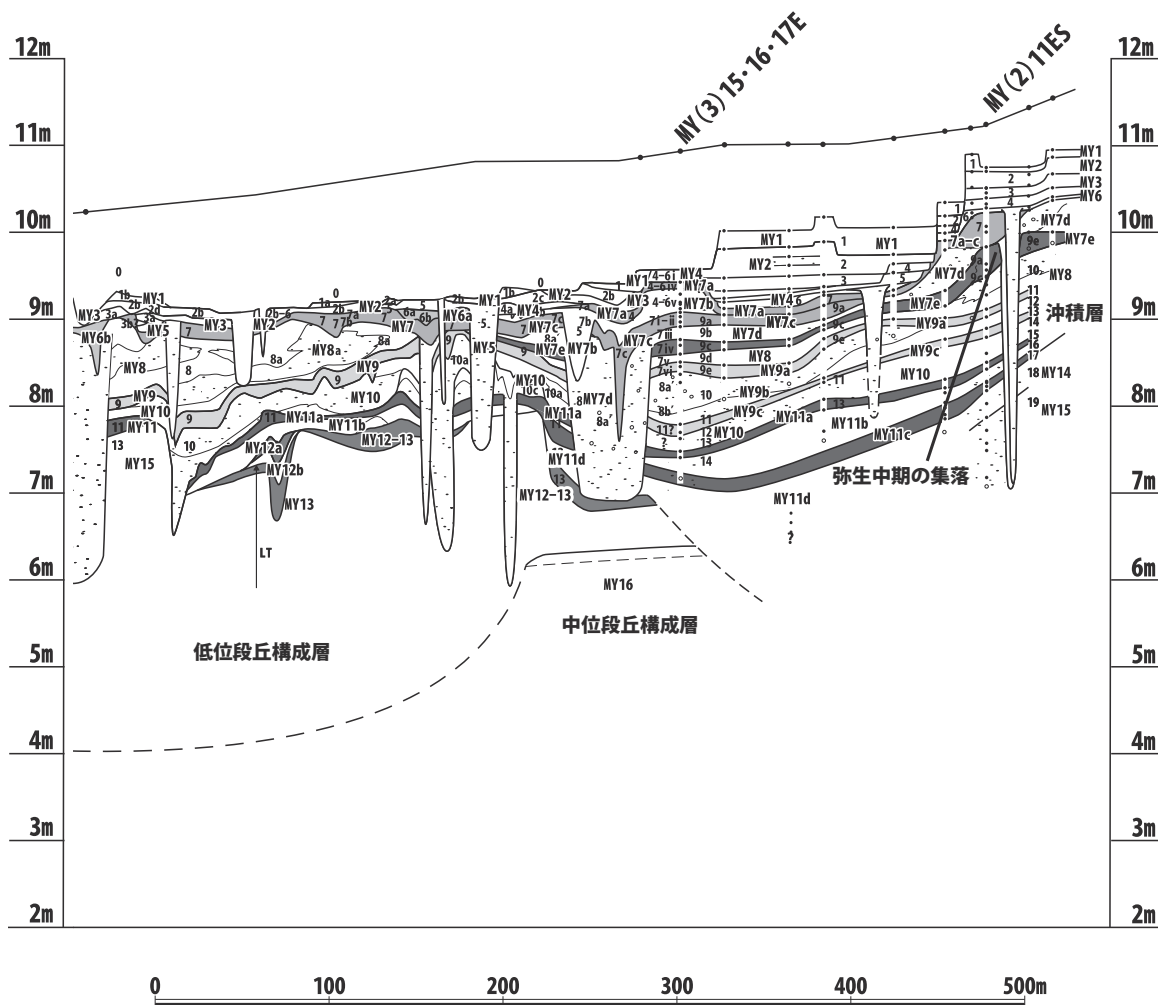
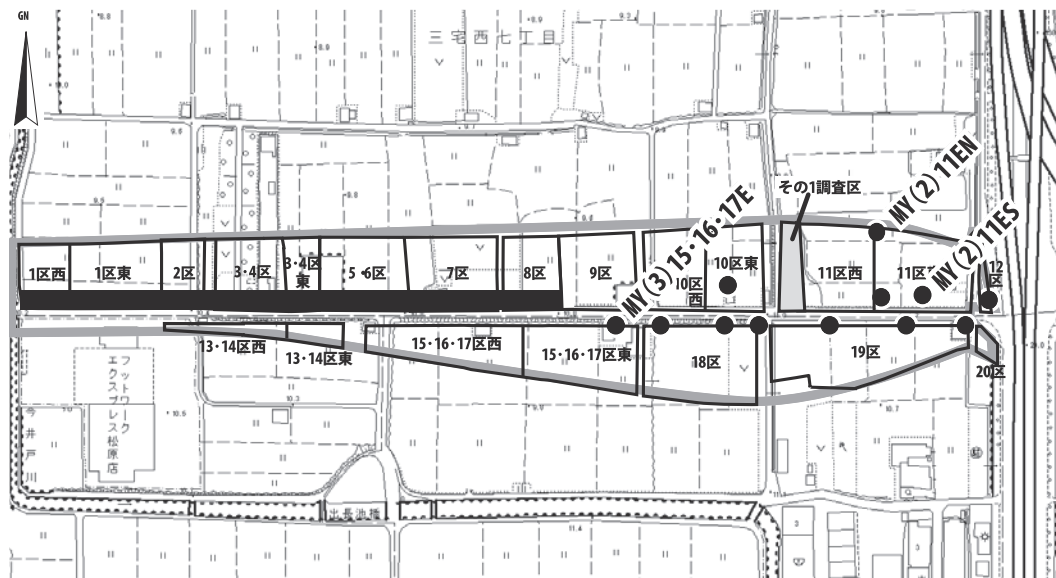
三宅西9層（第9層）は、古土壌および河川の氾濫堆積層で、遺跡の全域に分布する。上面で、MY(2)区西側では倒木痕跡が検出しており、MY(3) 3・4E区および5・6区の河道から縄文土器（後期中葉～後葉）が出土している。MY(2)区では、9a層～9c層に細分される。

三宅西9a層（第9a層）は、黒褐色ないし褐灰色粘土質シルト～砂質シルトからなる後背湿地堆積層、古土壌である。層厚は10～20cmで、上面では乾痕が観察される。

三宅西9b層（第9b層）は、上部が黄褐色ないし黄灰色砂・礫からなり、下部がオリーブ灰色ないし灰色粘土質シルトからなる河川の氾濫堆積層である。層厚は60cm以下である。

三宅西9c層（第9c層）は、黒褐色ないし黒灰色シルト質粘土～シルト質砂からなる沼沢湿地性堆積層である。層厚は10～25cmで、上面では乾痕が観察される。

三宅西10層（第10層）は、灰色砂・礫～黄灰色粘土質シルトからなる河道内堆積層および河道から



断面図中の「MY (数字)」は池内遺跡の基本層序番号、小さな数字は各現場ごとの層序番号を示す。

図9 調査地の東西地質断面図

の氾濫堆積層である。遺跡の全域に分布し、層厚は10～50cm、河道部では約260cmである。MY(3) 5・6区では河道から縄文土器（船元Ⅲ？）が見つかった。

三宅西11層（第11層）は、暗色帯構成層および河成層で、遺跡の全域に分布する。MY(3)区では収斂しているが、MY(3)区東端部からMY(2)区にかけては三宅西11a層～三宅西11d層に区分される。

三宅西11a層（第11a層）は、黒褐色ないし暗オリーブ色粘土質シルトからなる古土壌、沼沢湿地性堆積層で、層厚は10～20cmである。

三宅西11b層（第11b層）は、上部は褐灰色ないし黄褐色砂・礫からなり、下部は灰黄色ないし暗オリーブ色シルトからなる河川の氾濫堆積層である。層厚はMY(2)区で約50cm以下、MY(3)区では約15cm以上である。

三宅西11c層（第11c層）は、黒灰色ないし暗オリーブ色シルトからなる沼沢湿地性堆積層で、層厚は約10cmである。MY(2)11ES区では、中位に暗灰褐色の横大路火山灰層（鬼界アカホヤ火山灰：K-Ah）が挟まれる。

三宅西11d層（第11d層）は、上部がオリーブ灰色シルト～砂、下部がオリーブ灰色粘土質シルトからなる河川の氾濫堆積層である。

三宅西12層（第12層）は、沼沢湿地性堆積層、古土壌および河川の氾濫堆積層で、MY(3) 2区において三宅西12a層および三宅西12b層に細分される。層厚は50cm以下である。

三宅西12a層（第12a層）は、褐灰色ないし黄灰色シルトからなる沼沢湿地性堆積層および古土壌で、三宅西12b層（第12b層）は、灰黄褐色粘土質シルト～シルトからなる河川の氾濫堆積層である。本層上面から下位の三宅西13層（第13層）にかけて乾痕が顕著に観察される。また、実体顕微鏡下の観察では、下位層に由来する扁平型火山ガラスのほか、阪手火山灰層(Skt)起源の角閃石が認められた。

b. 低位段丘構成層

三宅西13層（第13層）は、褐灰色粘土質シルト～シルトからなる古土壌および沼沢湿地性堆積層で、層厚は45cm以下である。上面で乾痕が観察される。本層準は上位層と収斂する場合が多く、区分できたのはMY(3) 2区においてのみである。本地点では3枚の暗色帯に区分できる。また、実体顕微鏡下の観察では無色透明の扁平型火山ガラスが含まれており、上・下位層の地層の状況とから平安神宮火山灰層（始良Tn火山灰：AT）とみられる。

三宅西14層（第14層）は、下半部が緑灰色砂礫からなる河川の氾濫堆積層で、上方細粒化して緑灰色粘土質シルトへ移化する。層厚は160cm以上で、広域に分布する。

c. 中位段丘構成層（上町累層）

三宅西15層（第15層）および三宅西16層（第16層）は、MY(3) 8区において確認した層準である。

三宅西15層（第15層）は、上半部が暗緑灰色シルト薄層と砂薄層からなる河成層で、層厚は約80cmである。下半部が暗青灰色砂混りシルトからなり、硬質である。本層下半部からは北花田火山灰層（鬼界葛原火山灰：K-Tz）に由来するとみられる高温型石英が確認されている。

三宅西16層（第16層）は、緑灰色砂質シルトからなる河成層で、層厚は30cm以上である。

d. 地層の年代

遺構・遺物および火山灰層、地層の累重状況から、各地層の堆積年代は次のように推定できる。

三宅西0層（第0層）：現代

三宅西1層（第1層）：近代～現代

- 三宅西2層（第2層）：近世
- 三宅西3層（第3層）：中世～近世
- 三宅西4層（第4層）：中世
- 三宅西5層（第5層）：中世
- 三宅西6層（第6層）：（飛鳥時代～平安時代）
- 三宅西7a層（第7a層）：古墳時代～飛鳥時代
- 三宅西7b層（第7b層）：古墳時代
- 三宅西7c層（第7c層）：弥生時代後期末～庄内式期
- 三宅西7d層（第7d層）：弥生時代中期末～後期
- 三宅西7e層（第7e層）：弥生時代前～中期
- 三宅西8層（第8層）：縄文時代晩期
- 三宅西9a層（第9a層）：縄文時代後期
- 三宅西10層（第10層）：縄文時代中期
- 三宅西11c層（第11c層）：縄文時代早期（後半）～前期
- 三宅西11d層（第11d層）：（縄文時代草創期～早期）
- 三宅西12層（第12層）：後期旧石器時代後半～縄文時代草創期、晩氷期
- 三宅西13層（第13層）：後期旧石器時代、最終氷期、上限は最終氷期極寒期（酸素同位体ステージ3～2）
- 三宅西14層（第14層）：中期旧石器時代、最終氷期寒冷期（酸素同位体ステージ4～3）
- 三宅西15層（第15層）：中期旧石器時代、最終間氷期終盤（酸素同位体ステージ5）
- 三宅西16層（第16層）：中期旧石器時代、最終間氷期後半（酸素同位体ステージ5）

第2節 遺構・遺物の概略

調査成果については、次章で詳細に述べるが、ここでは、全体の遺構・遺物の状況を地区別に簡単にまとめておくこととする。

平成16～18年度におこなわれた本調査では、三宅西遺跡の調査対象地域を東西に二分したことから、報告もこの単位でおこなうこととする。なお、調査区の番号は、現地調査を二分割する方法の決定前につけられたものであることから、必ずしも調査の順番にはなっていない。

三宅西遺跡は瓜破遺跡の南側に位置しており、同遺跡におけるこれまでの調査や、平成15・16年度の確認調査の結果などから、主に暗色帯構成層である、確認調査標準層序の第7・9層準で、弥生時代から古墳時代を中心とする遺構群が検出されることが予想された。

西半部調査成果

【1区】 古代～近世の溝・井戸・耕作溝・落ち込み、古墳時代の溝・土坑・ピット・流路、縄文時代の流路などを検出した。古墳時代の遺構・遺物が主体である。

中でも主要な遺構である、古墳時代の大規模な3009流路は、南東―北西方向に延び、幅7.0m、深さ1.4m程度ある。木杭を組み合わせた施設が、計4ヶ所で確認された。これらは、水圧を強く受ける後側の

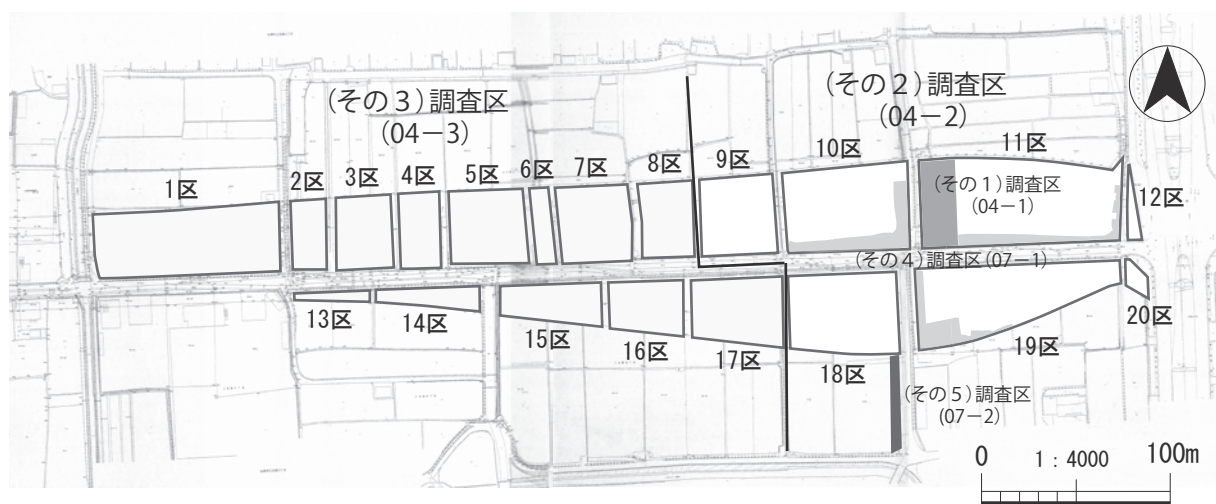


図10 調査区配置図

杭には太い材が選ばれており、川幅が広く水流が弱まる場所や支流との交差部に設置されていることなどから、水利目的のものである可能性が高い。初期須恵器や韓式土器、百濟地域から持込まれた可能性がある瓶などを含む土器や木製品など、5世紀代を中心とする遺物が多く出土している。

その他、3001溝でTK216型式前後の須恵器甕が出土したほか、3018土坑からはTK43型式前後の須恵器杯蓋が出土した。3179土坑は井戸と考えられ、TK10型式新相～TK43型式に属する完形の須恵器杯身や、土師器甕が出土している。

【2～4区】 4ヶ所の調査区（2区、3・4区、3・4区東、3・4区北）に分割して調査を行った。古代～近世の水田・耕作溝・溝・土坑・井戸・ピット・流路、庄内式期～古墳時代の掘立柱建物・土坑・溝群・ピット群などを検出した。

古代の遺構のうち、3581流路からは、土師器・滑石製双孔円板・サヌカイト製石鏃などが出土した。第6層上面では、2区を中心に、畦畔とみられる隆起を検出した。第7層内の複数の生活面で形成されたと考えられる、庄内式期～古墳時代の遺構は、3・4区を中心に分布する。2間×3間の掘立柱建物が復原できた。また、3366土坑からは、庄内式併行の畿内第V様式系の甕が複数個体出土している。

溝には、主に東北東－西南西方向と、北北東－南南西方向の2群がある。これらの溝は掘立柱建物の柱穴に切られており、耕作溝である可能性がある。第7層の形成過程で、生産域から居住域へと土地利用が変化した可能性が考えられる。

【5・6区】 古代～近世の耕作土層に伴う耕作溝・溝・井戸・ピット、縄文時代～古代の流路などを検出した。

第9層内では、大規模な3128・3152流路を検出した。3128流路は、調査区北部で南北方向から南西－北東方向に大きく向きを変えている。埋土からは、北白川上層式3期を中心とする縄文時代後期中葉の多量の縄文土器が、サヌカイト製石器や両端を打ち欠いた石錘などとともに出土した。

【7区】 古代～近世の耕作溝・溝、庄内式期～古墳時代の掘立柱建物・井戸・溝群・ピット群・流路などを検出した。

第7層上面で西肩を検出した3125流路は、南北方向の大規模な流路で、古墳時代後期を中心とする多量の土師器・須恵器が出土した。3340溝の下面で検出された小規模な土坑が並列する土坑群は、波板状遺構の可能性があり、道路と考えられる。遺構の詳細な時期は不明であるが、15～17区や11区で

も同様の遺構が検出されている。その他、3413井戸からは、ほぼ完形の庄内式の甕が出土した。また、2間×1間の掘立柱建物が復原できた。

【8区】 中世～近世の耕作土層に伴う溝・ピット、縄文時代～古墳時代の流路などを検出した。

3115・3116流路は大規模で、調査区中央付近で合流する。埋土からは、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などが出土している。埋土下部には、畿内第V様式の弥生土器が多量に含まれるが、最終的に埋没したのは古墳時代前期以降と考えられる。

3115・3116流路の下面では、さらに大規模な3527流路を検出し、調査区全体が流路の中に位置していることが判明した。流路の底を確認することはできなかったが、方向の異なる複数の流れが錯綜しており、滋賀里Ⅰ～Ⅲ式に属する縄文時代晩期の土器が数点出土した。

【9区】 第7層上面（古代）では、南北方向の溝、南東―北西方向の轍や溝・ピットを検出した。さらに、8区で検出した3115・3116流路の東肩（右岸）を検出した。第8層上面（古墳）では、東半で南北方向の溝、ピット、倒木痕跡を検出した。第9層上面（弥生）では、東半で南北方向の溝を検出した。東に位置するものはV字状に掘り込まれており、自然流路を利用した水路と考えられる。西半では、自然流路の東肩（右岸）を検出した。

【13・14区】 中世～近世の耕作土層に伴う耕作溝・土坑や、庄内式期～古墳時代後期の掘立柱建物・井戸・土坑・ピット群、弥生時代～古墳時代の流路などを検出した。

第7層内の複数の生活面から掘り込まれたとみられる、庄内式期～古墳時代後期の遺構は、調査区中央部に分布している。3間以上×2間の掘立柱建物が復原できた。柱穴には、柱痕跡をとどめているものもある。3131井戸は円形の素掘りの井戸で、初期須恵器を伴う3130井戸に端部を切られている。

3129土坑と3134土坑は楕円形の土坑で、前者からは庄内式の甕や小型器台が、後者からは高杯や移動式竈などの土師器が多数出土した。3027井戸は円形を呈しており、埋土からはMT15型式の須恵器杯蓋が出土した。

【15～17区】 中世～近世の耕作土層に伴う耕作溝・溝・畦畔・野井戸、庄内式期～飛鳥時代の掘立柱建物・井戸や波板状遺構（道路）の可能性のある土坑群、各時期の流路などが検出された。

古代～中世の溝とみられる3188溝を第4層上面で検出し、土師器・須恵器が多く出土した。

竪穴遺構・掘立柱建物・井戸・溝・ピットなど、第4層内の複数の生活面から掘り込まれたとみられる庄内式期～飛鳥時代の遺構は、調査区中央部に分布している。3195・3322竪穴遺構は、方形の竪穴住居の可能性があり、ともに貼床層の上面で柱穴・周壁溝と考えられるピット・溝を検出した。竪穴遺構は、ほかにも検出されているが、柱穴が確認できないものもあり、すべてが竪穴住居になるとは限らない。また、2間×2間の掘立柱建物が復原できた。3192溝・3194土坑・3324土坑からは、多量の土師器が出土した。また、3323・3511井戸はともに流路上から掘り込まれており、後者からはMT15型式前後の須恵器杯蓋が出土している。調査区南東部では、7区でみられるような波板状遺構（道路）の可能性のある土坑群を検出した。

その他、南西―北東方向に延びる大規模な3527流路をはじめ、8区の3115(3344)流路や7区の3125流路の続きなど、各時期の流路を検出した。いずれも完掘することはできなかったが、3527流路からは縄文時代晩期の土器が出土している。

西半部調査成果の小结

まず、13・14区の中央部から3・4区にかけてと、15～17区の中央部から7区にかけての、南北に

延びる2ヶ所の範囲で、古墳時代を中心とする集落遺構が密に分布していることを確認した。また、集落の縁辺部とみられる7区や15～17区東部では、波板状遺構（道路）の可能性のある土坑群が検出されている。南から延びる台地の先端部に位置する本調査地では、南北方向を基本とする大規模な流路が多数検出されており、そうした流路の大半が埋没して、ようやく居住に適する安定した環境となるのが古墳時代頃と考えられる。周辺の調査地とは異なり、弥生時代前～中期の遺構が確認されなかったこと、流路の方向に沿い南北に細長く延びる、狭い範囲に集落が営まれていることなども、そうした考えを裏付けるものといえよう。

一方、調査地では全体的に大規模な流路が錯綜していたことは前述した通りであるが、そうした流路からも重要な遺構・遺物が見つかっている。1区の3009流路では、杭を組合わせた水利目的とみられる施設が、構造の分かる状態で検出された他、朝鮮半島の百済地域から持込まれた可能性がある瓶など、5世紀代を中心とする稀少な遺物が多く出土した。

次に、5・6区の3128流路からは、松原市域では最古級となる、縄文時代後期中葉の北白川上層式3期に属する縄文土器が出土した。出土量が多量である上、状態が極めて良好なこと、型式幅が限定された一括資料であることなどから、今後は当該期の基準資料となることが期待される。弥生時代以前の暗色帯構成層である、確認調査標準層序の第9層準以下で遺構は検出されなかったが、3128流路出土の縄文土器が磨耗していないことから、流路の上流にあたる調査区南方の近い位置に、縄文時代後期の集落が存在した可能性が高いと考えられる。

東半部調査成果

【10区】 第7層上面（古代）では、東半で南西―北東方向の溝を検出した。西半では、条里に伴う可能性がある東西―南北方向の溝を検出し、調査区南側では、それに切られる形で轍を検出した。第8層上面（古墳）では、北西で土坑を検出した。西半で、南東―北西方向の溝とそれに切られる土坑を検出した。第9層上面（弥生）では、西半で南西―北東方向の水路を検出した。埋土は水成層であり、滞水していたと考えられる。

第9層下面（弥生）では、竪穴住居2棟をはじめ、2間×3間の掘立柱建物を検出した。また、住居を取り囲むように柱列を検出している。北西では、南西―北東方向の2100水路を検出した。この水路は南から北に流れるが、埋土は滞水状態を示す水成層であり、常時滞水していたと考えられる。

【11区】 第7層上面（古代）では、東半で近世の井戸をはじめ、条里に伴うと考えられる南北方向の溝を検出した。西端で南北方向の近世水路を検出した。南端で土坑、落ち込み、轍の痕跡を検出した。第8層上面（古墳）では、南西―北東方向で列をなす土坑列を検出した。波板状遺構の可能性があり、道路と考えられる。その北では土坑列に平行して溝・ピットを検出している。古代の所産と思われる。中央では、南東―北西方向の溝と南西―北東方向の溝を検出した。南東では、土坑列に平行した南西―北東方向の轍を検出した。第9層上面（弥生）では、自然流路とその左岸で土坑を検出している。

第9c層上面においては、竪穴住居・溝・柱穴列・土坑・ピットを検出した。北では南東―北西方向の溝、それを切る土坑が検出された。中央では溝とそれに平行して柱穴列を検出した。検出した柱穴は6基である。南端では土坑・ピット・溝をはじめ、118竪穴住居を検出した。118竪穴住居の床面は2枚あった可能性が高く、柱穴も2基×2時期分検出した。埋土から畿内第Ⅱ様式の遺物が出土している。

西半では、第9層を除去した下面において、散発的ではあるが遺構の存在を確認している。調査区南

東で検出したV字溝は、第9c層上面では検出できず、おそらく下面にて検出されるものである。上・下面の遺構ともに、畿内第Ⅱ様式の範疇に収まる遺構と考えられるが、検出面の違いから考えると若干でも時期差がある可能性が高い。第9a～c層下面では、自然流路の左岸で、竪穴住居を10棟、掘立柱建物を6棟検出した。その他には楕円形の土坑・溝・ピットを検出している。右岸では溝を1条検出したのみである。第9e層上面では、西半で東西方向の溝を検出した。

【12区】 第4層下面、第7層上面、第8層上面、第9層上面、第9層下面において、それぞれ遺構検出をおこなったが、顕著な遺構は認められなかった。狭い範囲の調査であり、遺構面の確認より壁断面の土層観察が主体の調査となった。

【18区】 南東から北西に向かって緩やかに傾斜しており、第7層の分布は調査区北半のみであった。後世の整地などによる削平が広い範囲でおこなわれており、上部の包含層は失われている。第9a層上面では、西端で古代の流路を検出した。中央北側では柱穴を1基検出したが、単独である。他の溝は深さ10cm程度の浅いものであり、遺物の出土は無かった。遺構の検出もほとんどなく、削平が包含層のみではなく、遺構面にまで及んでいた可能性が高い。

中央南寄りで、方形周溝墓を検出した。調査区の中央部は微高地状に高まっており、方形周溝墓はその地形を利用して築かれたようである。平面形は南北に長軸を持つ長方形であり、南側を除いて深さ1m前後の周溝をめぐる。北東部では陸橋部を検出した。陸橋は掘り残して整形されたものである。周溝内からの遺物の出土は少なく、弥生土器の細片が主であったが、壺の体部下半を思わせる把手付鉢が周溝埋土の下部層から出土し、畿内第Ⅱ様式の所産と考えられる。主体部の検出はなかったが、後世に削平された盛土中に埋葬されていた可能性が高い。また、第9a層下面では、溝を1条検出したが、遺物の出土はなかった。

【19・20区】 第7層上面（古代）では、特に顕著な遺構は認められなかった。第8層上面（古墳）では、西部で不定形の土坑、溝、さらにピット2基が1対となって、東西方向に並ぶピット列を検出した。中央東側でも、同様のピット列が検出され、南北方向に並ぶ。中央西側では、下位の自然流路の砂礫層上面で、3間×3間の掘立柱建物を1棟検出した。溝・土坑・ピットを多数検出した。西端部では、土坑5基が東西方向に並んだ状態で検出された。

第7層からは飛鳥時代の遺物が主に出土し、それを除去した第8層上面では、19区東端の南北方向の溝と、その西では不定形の土坑群、20区で土坑を検出した。西の土坑群の時期は明らかにできなかったが、古代のある時期に窪地を埋め立て、平坦化させたと考えられる。南北溝からは飛鳥時代を主としながら、奈良時代を下限とする遺物が出土した。この溝は現在の坪境の西に位置することから、坪境溝とも想定される。20区の土坑からは、飛鳥時代の遺物が出土した。

第9層上面（弥生）では、中央と南東端で自然流路を検出した。この流路は、2121流路と同様に埋土が砂礫層であり、2120流路とは埋没状況が明らかに違う。第9層上面で検出した溝や浅い土坑は、上位の第8層形成時に受けた流水痕跡と考えられる。他の深い土坑は素掘り井戸とも考えられるが、長期にわたって滞水した感じは受けなかった。それぞれ埋土が似ており、埋没状況はほぼ同じ状況である。

第9a層下面（弥生）では、西半部で竪穴住居を6棟検出し、2231竪穴住居の周壁溝からはサヌカイトの石材が遺存した状態で検出された。竪穴住居内周提上に置かれたものが、転落した可能性も考えられる。また、東側でも竪穴住居を検出した。他には楕円形の土坑を6基検出した。第9c層下面では、竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟のほか、土坑を複数基検出している。

20区では、第4層下面で轍状の溝状遺構を2条検出した。

東半部調査成果の小結

東半部では、弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の弥生集落がコンパクトに検出された。集落は段丘際の微高地上に展開し、周囲を自然河川で切られる形で集落が形成された状況がみられる。西側の流路際には集落を画するような柱列が設けられ、集落よりも高い位置のさらに西側には、方形周溝墓主体の墓域が展開したと考えられる。集落構造の全域が理解しやすい。

特徴として、検出された竪穴住居からは、サヌカイト製の石器をはじめ、その未製品や、石材・剥片・チップなどが多く出土している。また、231竪穴住居の周壁溝からは、5～10cm大の剥片がまとまって出土し、これらは石器の原材と推定される。さらに、竪穴住居周辺では、石器製作に伴う石屑を廃棄したと考えられる廃棄土坑も検出している。これらの竪穴住居は、石器製作に関わる竪穴住居と推測される。

以上のことから、三宅西遺跡は竪穴住居から出土した遺物などから、弥生時代中期前半を中心に営まれており、石器工房の一面をも窺える集落であるといえる。

【04-1】 北方への車両進入路建設を先行して行うことになったことから、本調査開始前に10区と11区の間にある現在の里道の東側を調査したものである。

弥生時代の遺構は、南端部で検出された。1間×1間の掘立柱建物と土坑である。掘立柱建物の柱穴から弥生時代中期の甕・壺破片が出土した。

中世の遺構として、流路や落ち込み、堤が検出された。流路から須恵質の捏鉢が出土している。近世の遺構として、土坑や流路が検出された。土坑から伊万里焼のほか、瓦器・土師器片が出土している。

調査地の大半が中世流路内に位置したことから、古い遺構は少なかったが、南端部で弥生時代の建物や土坑が検出され、その周辺から弥生土器やサヌカイト片が集中して出土している。

【07-1】 本線部分の調査の後、10区と11区に南接する道路拡張部分と19区南西端部の未調査部分の調査をおこなった。

この結果、10区および11区、19区で検出した弥生集落の遺構群の続きを確認することが出来た。この調査により、集落と考えられるこれらの遺構群がさらに南に広がること、より南で検出した遺構ほど出土した弥生土器の時期が古くなる傾向があることが確認できた。また、これらの弥生時代中期前半を中心とする遺構群を横切る、2220流路から畿内第Ⅳ様式の土器が出土していることから、少なくとも弥生時代中期後半にはこれらの遺構群は廃絶していたものと考えられる。

【07-2】 本線の工事とは別に「一般府道住吉八尾線外の建設工事に伴う今井戸川取水施設整備工事」に先立って発掘調査を実施したものである。

調査は、三宅西遺跡を東西に二分したうちの東半調査区と接しており、上記工事で追加されたものである。18区と19区を画する南北方向の道路に沿ったかたちのトレンチ調査を行った。本調査の結果、18区東端部で検出した中世～近世の流路を検出した。近世にまでおよぶ流路が大半であったため、遺物もほとんど出土していない。

第5章 調査成果

道路建設に伴う調査のため、調査範囲が狭長な形状をしている。このため、調査にあたっては第3章で述べたように、調査範囲を南北方向に横断する道路や水路などで分けて、20調査区を設定した。本来は、時期別に全体の調査成果を記述すべきと考えるが、調査区によって状況が異なっている部分もあることから、調査成果については、ある程度の調査区のまとまりを設定し、それぞれについて時期別に記述することとする。なお、調査区をまとめるにあたっては、遺構のつながりなどを考慮し、全部で5ヶ所に分けることとした。

第1節 1区の結果

調査範囲の最も西側に位置しており、西側を南北方向に流れる現在の今井戸川を隔てて、池内遺跡と接している。東西方向に走る道路の北側にあたり、南側には調査区は設定されていないため、他の調査区とは、東側で里道をはさんで2区と接しているのみである。最も面積の大きい調査区であり、他の調査区との関連性があまりないため、1区は単独でまとめることとする。

1. 層序

調査区の形状はほぼ長方形を呈しており、この調査区における基本層序は、調査区南壁で設定している。全体にあまり大規模な起伏はみられず、ほぼ平坦であるが、調査区西半部で旧今井戸川とも言うべき古い流路に伴う砂の堆積が顕著に見られる。

第0層：現代の盛土である。

第1b層：黄灰色極細粒砂質シルトからなり、調査区西部にのみ分布する。近世以降の耕作土層あるいは盛土とみられる。

第3b層：灰黄色砂質シルトからなり、中世～近世の耕作土層とみられる。本層下面では耕作溝や、16世紀代の遺物を伴う落込みが検出された。

第3d層：黄褐色砂質シルトからなり、調査区西部にのみ分布している。砂質が強く、水成層を母材とする中世～近世の耕作土層とみられる。

第4層：黄褐色極細粒砂質シルトからなり、層厚は8cm程度ある。調査区中央部では、にぶい黄褐色極細～細粒砂質シルトからなる第4a層と、褐灰色極細粒砂質シルトからなる第4b層に細分される。中世の耕作土層とみられ、本層上面で野井戸、下面で耕作溝を検出した。

第6層：黄灰色細～極粗粒砂からなる、水成層あるいは水成層起源の耕作土層とみられる。調査区北部や落込み中で部分的に分布しており、下面で耕作溝を検出した。

第7層：灰黄褐色極細粒砂質シルトからなり、層厚は18cm程度ある。弱く暗色化しており、酸化マンガンの集積が観察される。調査区東部では、褐灰色極細粒砂混じり粘土質シルトからなる第7i層と、黄灰色礫混じり砂質シルトからなる第7ii層に細分される。古墳時代の暗色帯構成層であるが、土壌化は進行しておらず、本層内で形成されたと考えられる遺構はわずかである。

第8層：西ほど厚く堆積する氾濫堆積層である。明褐色粘土～礫からなる第8a層と、明黄褐色粘土か

らなる第8b層に細分される。層厚は第8a層が最大で80cm、第8b層は10cm程度ある。第8a層は調査区西部では淘汰が悪く、東部では砂礫層とシルト・粘土層が互層をなす。層内で3107流路や踏込みが検出されたが、生活面とみられる堆積休止面は検出されなかった。

第9層：暗色帯構成層で、層厚は10～20cm程度である。部分的に、黒色粘土からなる第9a層と、黒褐色砂混じりシルト～粘土からなる第9b層に細分される。第9a層は暗色化の程度が強く、第9b層の下部は砂質が強い。上面では乾痕や、倒木痕が観察された。

第10層：灰色粘土～砂からなる水成層である。層厚は最大約50cmで、調査区西部では厚さを減じる。層内で、3106および3113流路を検出した。

第11層：褐灰色砂混じりシルト～粘土からなる暗色帯構成層である。層厚は4～20cm程度で、暗色化の程度は弱い。

第12層：灰オリーブ色粘土質シルト～シルト混じり砂からなる。分布は部分的で淘汰が悪いが、水成層とみられる。層内で、3110流路を検出した。

第13層：オリーブ灰色シルト混じり粘土からなる。締まりがよく、地山と考えられる。

2. 古墳時代以前の遺構・遺物

調査では、大きく5面の遺構面を確認することができた。そのうち、下層部分にあたる第3面～第5面が古墳時代をさかのぼる時期と考えられる。縄文土器やサヌカイト剥片などが出土しているが、遺物量は非常に少ないことから、それぞれの遺構面の時期を確定することは困難である。古墳時代にあたる第2面は、多くの遺物が一括で出土しており、当遺跡を代表するものといえる。

a. 第13層上面（第5面）

調査の最終面である地山面まで掘り下げて、第13層を確認した。他の調査区では、下層の砂層の堆積が厚いことから、この面を確認するほど深く掘り下げることはできなかった。この面では、遺構や人為的な改変の痕跡などはほとんど検出されなかったが、第12層内で形成されたと考えられる、3110流路を確認した。

3110流路（図12）

調査区西半の第12層内で形成された、南北方向の浅い流路である。検出面での規模は、幅2.5～3.0m、深さ0.1～0.3mで、北に向かって深さを増す。遺物は出土していない。

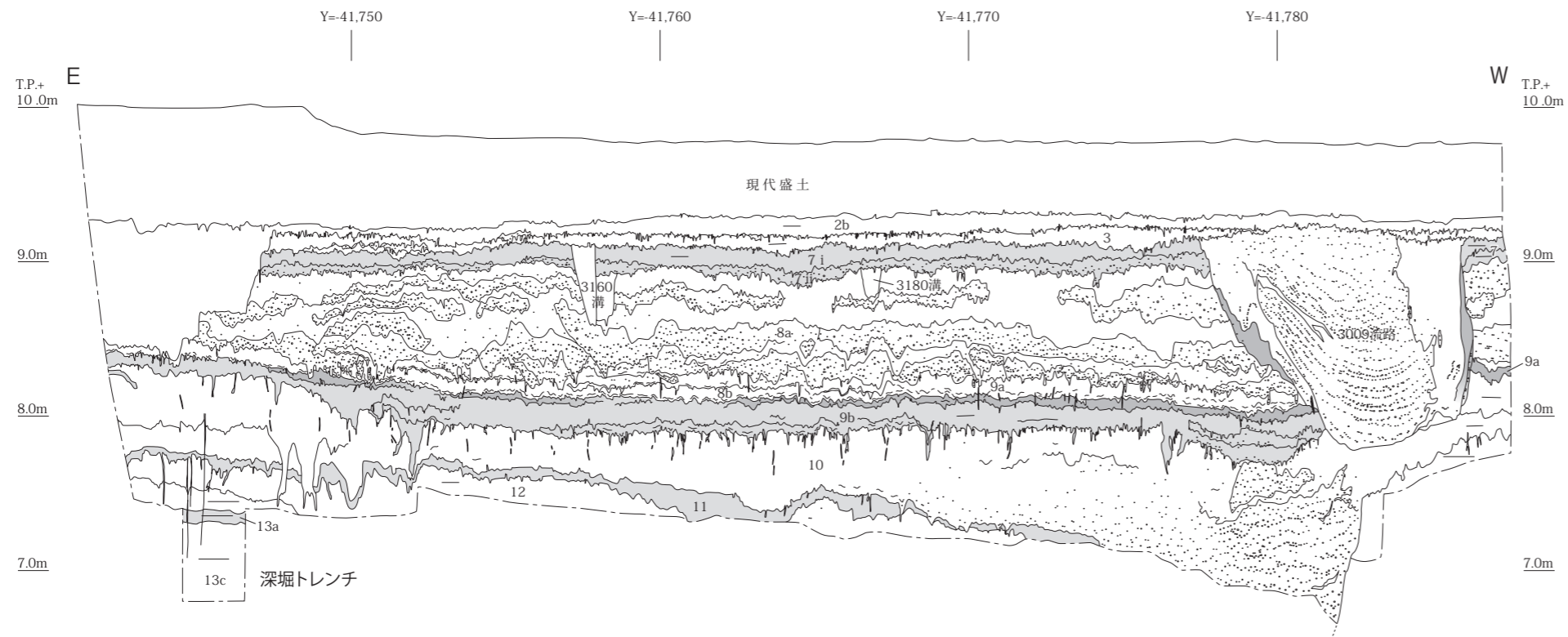
b. 第11層上面（第4面）

人為的な手が加わった遺構は検出されなかったが、第10層内で形成されたと考えられる、3106流路を確認した。

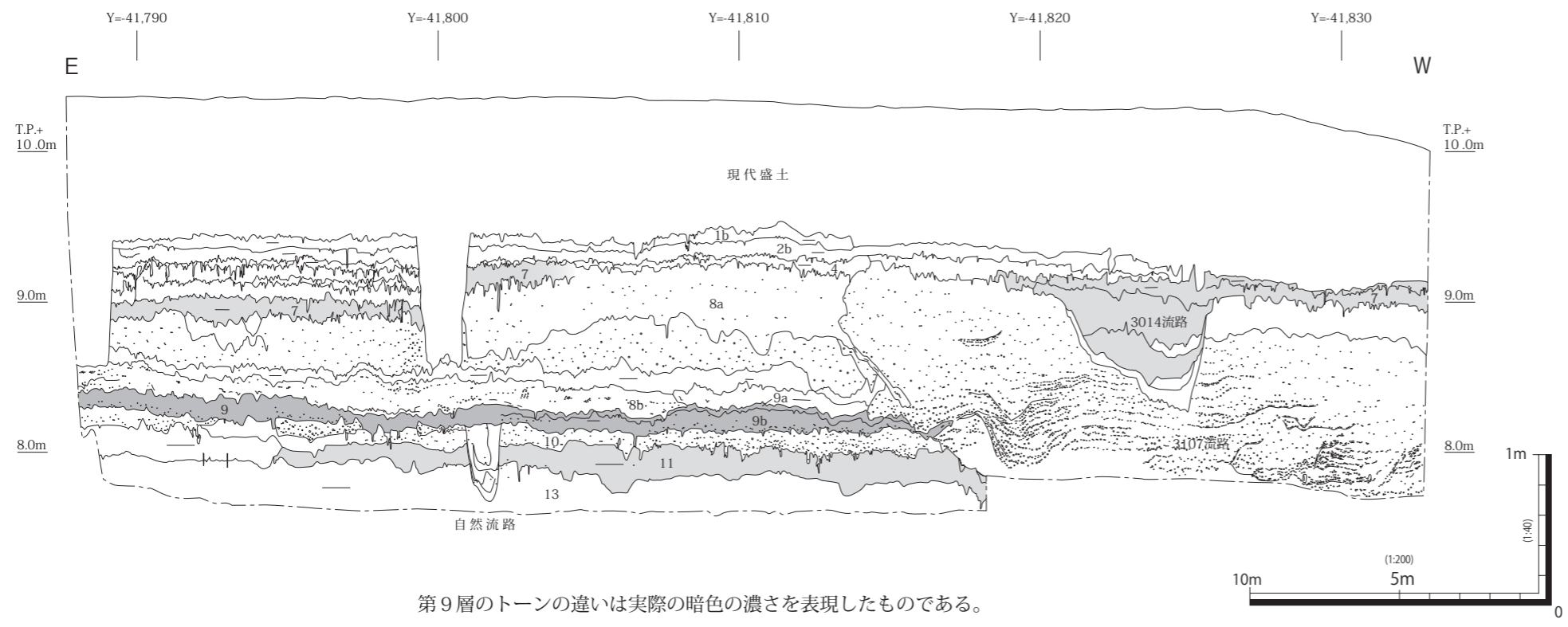
3106流路（図12）

調査区西端の第10層内で形成された流路である。検出面での規模は、幅約3.5m、深さ0.3～0.4mで、蛇行しながら南北方向に延び、南端部を3107流路により切られている。出土量は少ないものの、サヌカイト剥片が出土している。

1区 東半部 南壁



1区 西半部 南壁



第9層のトーンの違いは実際の暗色の濃さを表現したものである。

図11 1区 南壁断面図

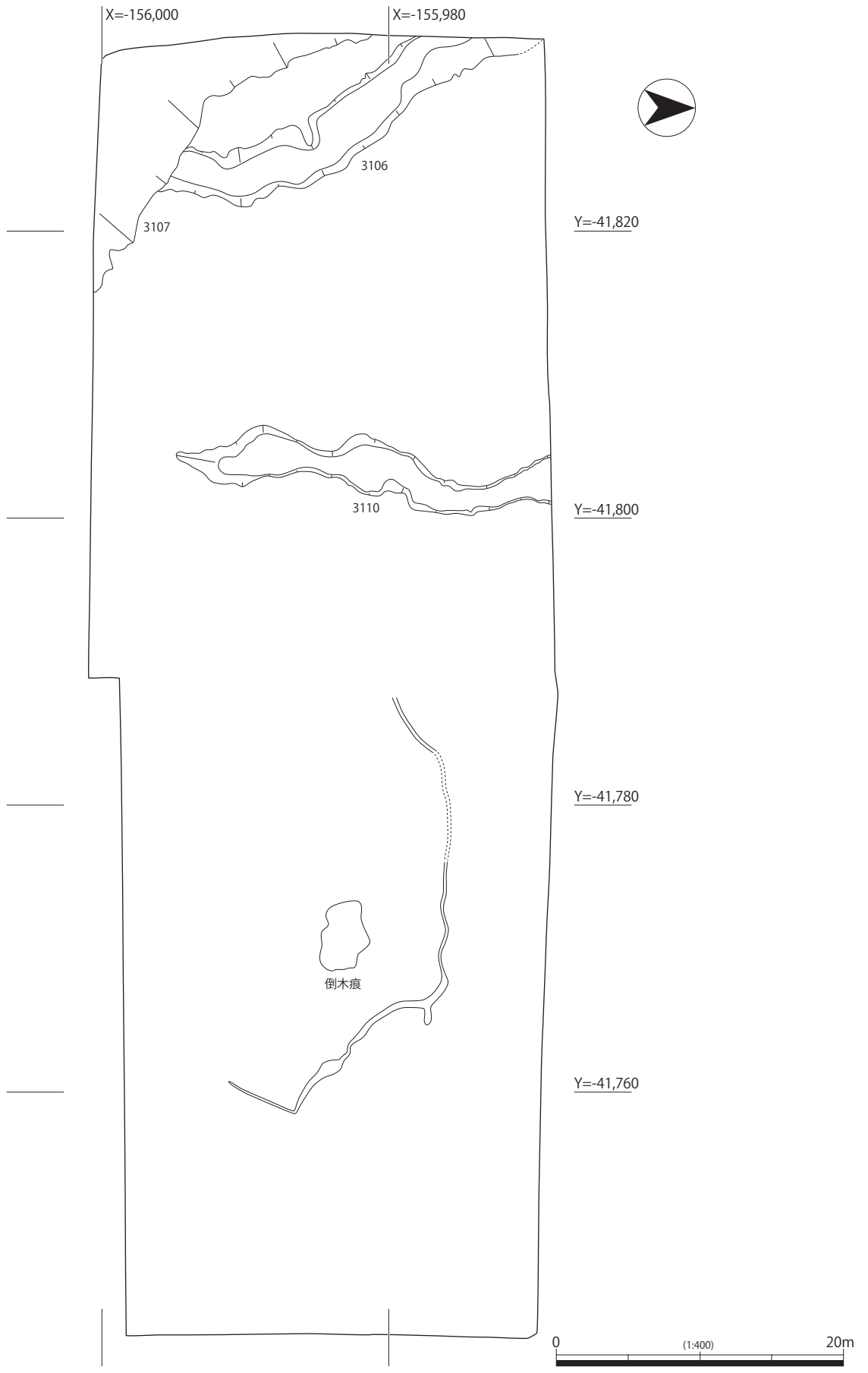


図12 1区 第3～5面遺構平面図

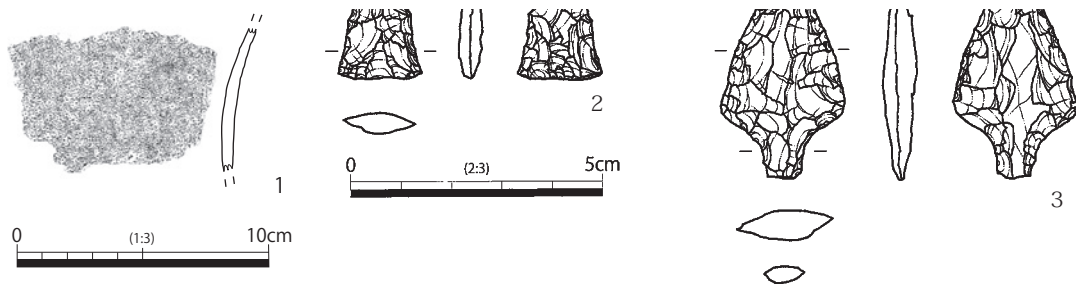


図13 3107流路、第7層 出土遺物

c. 第9層上面（第3面）

第9層は、調査区全域に分布する暗色帯構成層である。第9層上面における地形は、調査区西半では平坦な地形をなす一方、東半では中央やや西寄りに比高0.3m程度の高まりがあり、起伏の激しい地形をなしている。そこで、西半では本層を全面掘削して上・下面の平面調査を行ない、東半では東西南北の側溝に加えて、南東―北西方向および南西―北東方向のサブトレンチを、高まり部分で交差するように設定し、地層断面の観察を行なった。その結果、第9層上面では倒木痕、第8層内で形成された流路・踏み込み痕などを検出することができた。

3107流路（図12・13）

第9層上面で検出されたが、第8層内で形成された大規模な流路である。調査区南西隅で、北東側の肩の一部を検出したのみであるが、幅は8m以上あり、調査区をかすめて、南東から北西方向に延びているものと考えられる。

3106流路との交差部分から、縄文土器（図13-1）が出土した。激しいローリングを受けているため調整は不明であるが、その器形から縄文時代後期～晩期初頭に属する、外反口縁深鉢の口頸部と考えられる。

このほか、調査区東部中央付近の高まりの頂部では、倒木痕と考えられる不整形な遺構を検出した。また、高まりの裾部では、第8b層内で形成されたと考えられる、帯状に分布する人間や偶蹄類による踏み込み痕を検出した。なお、調査当初、本層は畦畔を伴う弥生時代の暗色帯構成層と推測されていたが、本層から弥生土器の出土は無く、水田耕作等が行われた形跡も認められなかった。遺構面検出の際に細かい精査をおこなったが、畦畔も確認できなかった。

第7層出土石器（図13、図版82）

縄文時代晩期に形成されたと考えられる第8層からは、土器や石器の出土はなかった。ただし、上層の第7層（縄文時代晩期～古墳時代(TK217相当)）から、弥生時代の剥片石器が2点出土したため、ここで報告しておく。石材はすべてサヌカイトである。

2は、平基無茎式石鍬である。側縁に明瞭な屈曲点をもつ、五角形鍬である。3は、凸基有茎式石鍬である。正・裏面に素材面を残している。

d. 第7層下面（第2面）

第7層下面では本層内、あるいは上面で形成された土坑および溝・流路等を検出した。土坑および溝

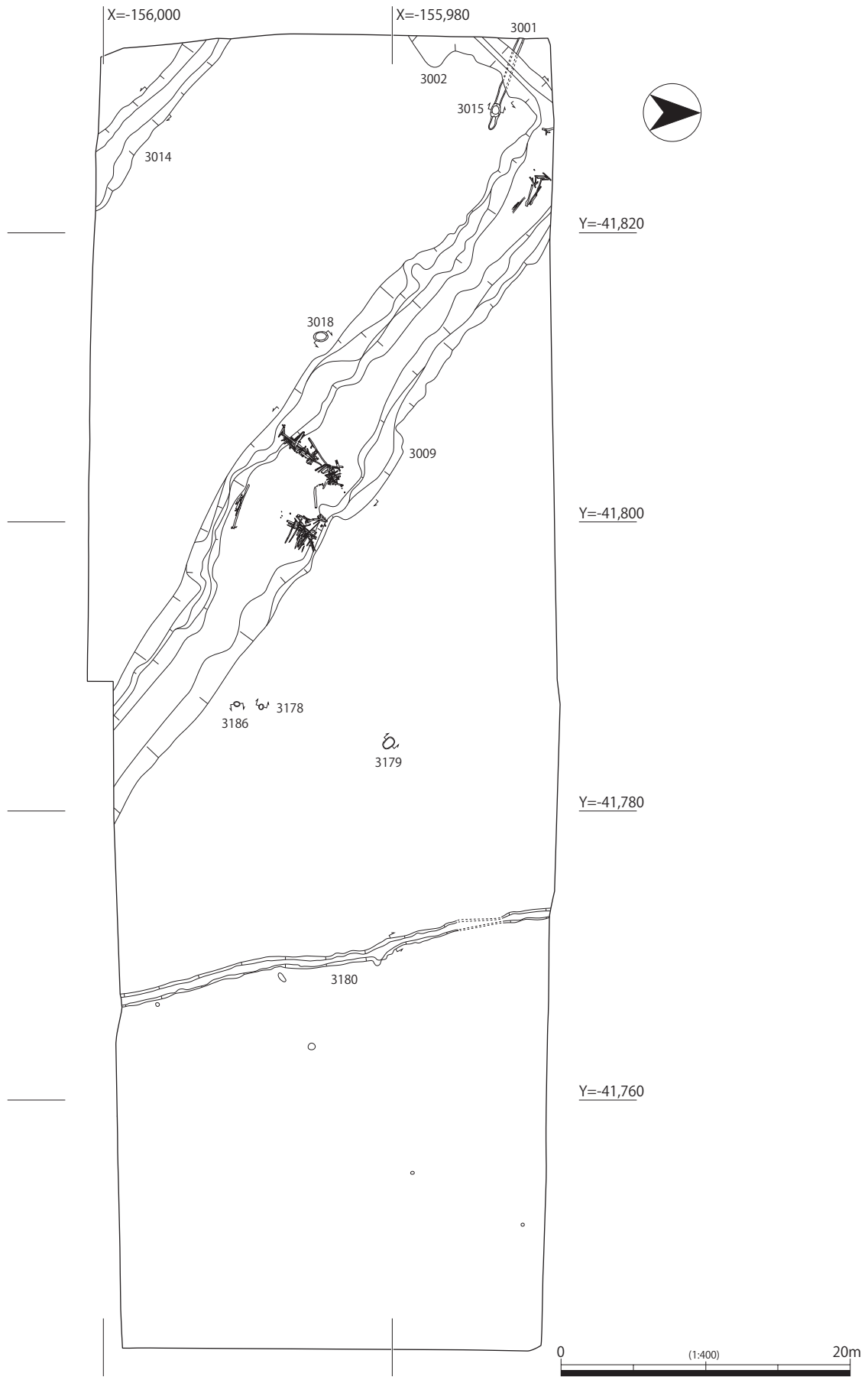


图14 1区 第2面遺構平面図

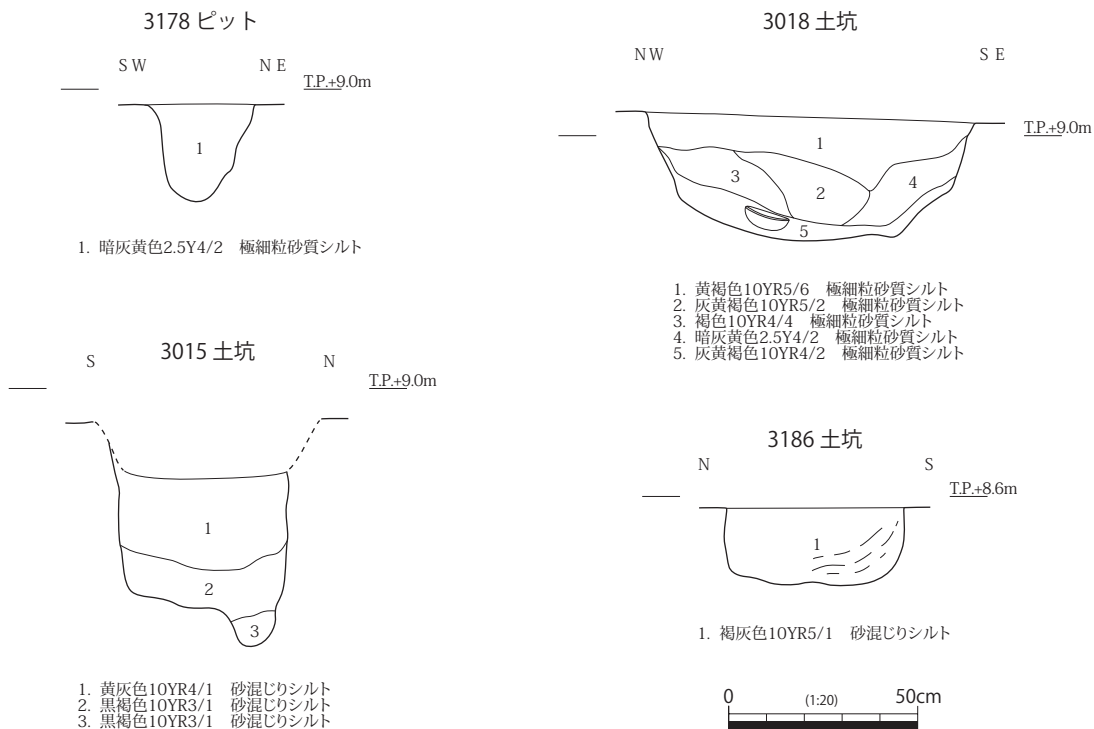


図15 1区 第2面ピット・土坑 断面図

については、いずれも埋土が第7層と近似していることから、検出は第7層除去後の第7層下面で行った。なお、3002・3009・3014流路については、最終的な埋没時期は本層上面以降であるが、流路として機能していたのは本層内であると考えられる。

1. ピット

調査区内では、ピット類はほとんど検出されておらず、掘立柱建物などの建物跡は確認できなかった。その中でもわずかに数基のピットがみつまっているが、散見されるのみで、建物を構成するものかどうかははっきりしない。

3178ピット (図14・15)

中央部やや南寄りに位置する。南側に約1.8m離れて3186土坑がある。平面形は、円形を呈しており、径20cm、深さ25cm程度のピットである。埋土は、暗灰黄色極細粒砂質シルトからなり、土師器および須恵器片が出土している。いずれも細片で復元できる遺物は出土していない。

2. 土坑

土坑は、ピットと同様にあまり検出されていないが、散発的に点在している。第7層下面で検出したものであるが、埋土が第7層と近似していることから、第7層上面で形成されたと考えられるものも含まれており、若干の時期差がある可能性もある。建物跡は確認できなかったことから、1区では集落が営まれていた可能性は低いと考えられるが、その中で遺物の出土する土坑もみられる。性格ははっきりしないが、井戸の可能性のあるものもある。

3015土坑 (図14・15)

北東端部に位置しており、後述する3001溝の続きと考えられる溝の下面で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径0.8m、深さは0.5m程度である。埋土は3層に細分される。1層は黄灰色、2・3層は

黒褐色の砂混じりシルトからなる。復元できる遺物は出土していない。

3018土坑 (図14~16、図版50)

西半部のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈しており、長径1.0m、深さは0.3m程度である。埋土は5層に細分される。1層は黄褐色、2層は灰黄褐色、3層は褐色、4層は暗灰黄色の極細粒砂質シルトからなる。このうち、1・3・4層は第8層起源の小偽礫を含む。1層は僅かに、4層は多く含んでいる。5層は灰黄褐色極細粒砂質シルトからなり、須恵器が出土している。

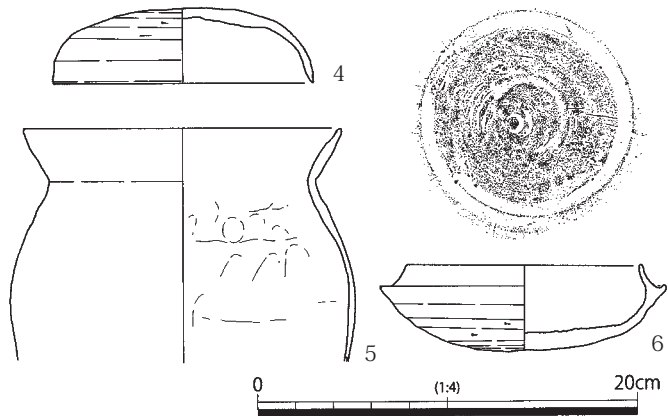


図16 3018土坑・3179土坑 出土遺物

4は、須恵器杯蓋である。口縁端部を丸く収め、天井部が扁平で、天井部と口縁部を隔てる稜線が失われており、TK43に相当する。

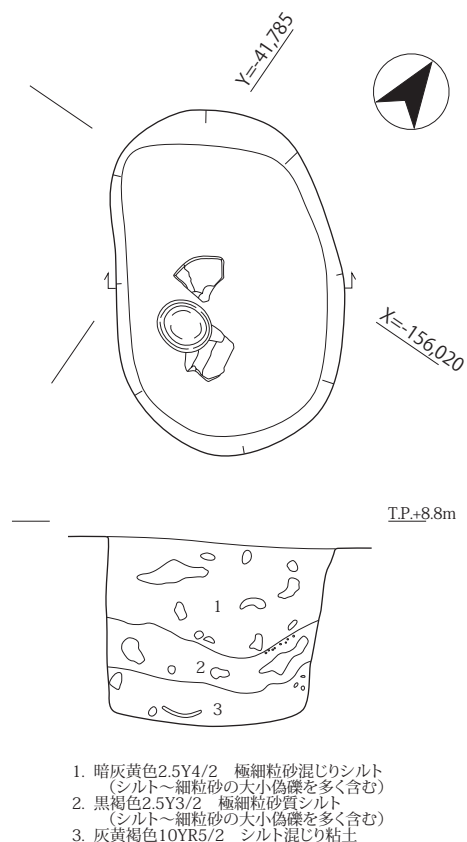
3186土坑 (図14・15)

中央部やや南寄りに位置する。北側に約1.8m離れて3178ピットがある。平面形は楕円形を呈しており、長径0.5m、深さは0.2m程度である。埋土は、褐灰色砂混じりシルトからなる。底部から、土師器片や種実が出土している。

3179土坑 (図14・16・17、図版4・50)

中央部やや北寄りに位置する。南側に約9.0m離れて3178ピットがある。平面形は楕円形を呈しており、長径0.9m、短径0.6m、深さは0.5m程度である。井戸の可能性もある。埋土は3層に細分される。1層は暗灰黄色極細粒砂混じりシルト、2層は黒褐色極細粒砂質シルトからなる。両層ともシルト～細粒砂の大小偽礫を多く含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。3層は灰黄褐色シルト混じり粘土からなり、機能時の堆積層である可能性がある。3層からは土師器・須恵器などの遺物が出土している。

6は、須恵器杯身で、口縁端部を丸く収め、立ち上がり強く内傾する。底部は扁平で、内面に当て具痕を持つ。口径が13cmと大きく、回転ヘラケズリが反時計回りであることから、TK10に相当すると考えられる。5は、口頸部が弱く「く」の字に屈曲し、体部外面をハケ、内面をナデにより調整する、布留式甕の影響を受けた土師器甕である。



1. 暗灰黄色2.5Y4/2 極細粒砂混じりシルト (シルト～細粒砂の大小偽礫を多く含む)
2. 黒褐色2.5Y3/2 極細粒砂質シルト (シルト～細粒砂の大小偽礫を多く含む)
3. 灰黄褐色10YR5/2 シルト混じり粘土

図17 3179土坑 平・断面図

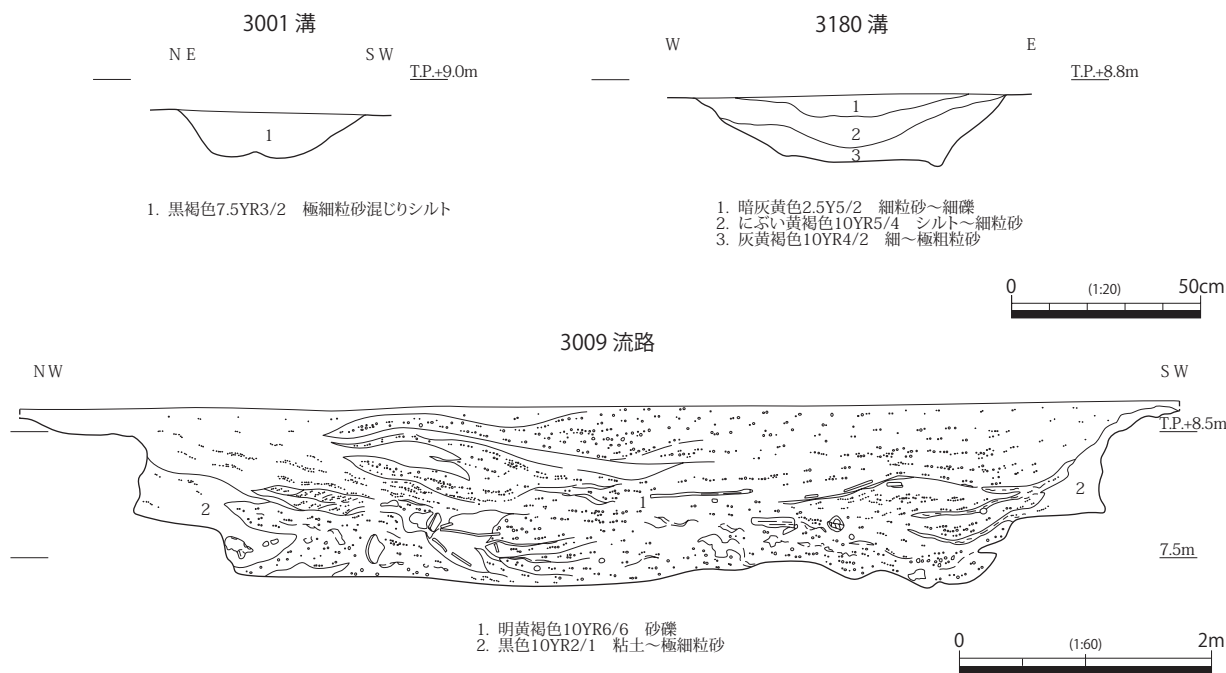


図18 1区 第2面溝・流路 断面図

3. 溝・流路

土坑と同様に、溝・流路も第7層下面で検出したものであるが、第7層上面で形成されたと考えられるものも含まれており、若干の時期差がある可能性がある。溝は小規模なものであるが、3009流路を中心として、それと関連するものと考えられる3002流路と共に本調査区の主要な遺構となっている。1区では集落が営まれていた可能性は低いといえるが、3009流路からは完形に近い遺物が多量に出土することから、調査区内では検出されなかったものの、近隣に集落が存在することが考えられる。

3001溝 (図14・18)

調査区北西端で検出した、東南東から西北西に延びる溝である。西側は、調査区外に延びている。規模は、幅0.5m、深さ0.1m程度である。埋土は、黒褐色極細粒砂混じりシルトからなる。なお、3002流路をはさんで検出された溝が本遺構の続きであれば、3001溝は本来、第7層より上位層で形成された遺構であった可能性も考えられる。

3180溝 (図14・18、図版3)

調査区東部で検出した、南南東から北北西に延びる溝である。ほぼまっすぐに延びており、調査区内ではおさまらず、調査区外まで及んでいる。規模は、幅0.8m、深さ0.2m程度である。埋土は3層に細分される。1層は暗灰黄色細粒砂～細礫、2層はにぶい黄褐色シルト～細粒砂、3層は灰黄褐色細～極粗粒砂からなる。遺物は出土しなかった。

3009流路 (図14・18～27、図版2～4・9・44～49)

調査区西半部で検出した、南東から北西方向に延びる流路である。ほぼまっすぐに延びており、調査区内ではおさまらず、調査区外まで及んでいる。幅7.0m、深さ1.4m程度の大規模な流路で、3002流路と直交、さらに3014流路と平行して延びている。切り合いや出土遺物から、これらの遺構の先後関係を判断することはできなかったが、同時期に機能していた可能性も考えられる。

川幅が最も広がり、両岸に広い平坦部を持ち、二段落ちとなっている調査区中央部および北端の3002流路との交差部分の底部では、木杭を組み合わせた木組みが検出された。これらの木組みは川幅



図19 3009流路内木組み 平面図

が広く、水流の弱まる場所や3002流路との交差部に設置されていることから、水利目的の施設である可能性が考えられる。なお、この部分に取り付くような溝などの遺構は検出されていない。

最終的には、砂礫を中心とした埋土により一挙に埋没したと考えられ、肩部に部分的に分布する黒色粘土～極細粒砂層を中心に、土器や木製品をはじめとする遺物が大量に出土した。前述の木組みは、川幅が広がる調査区中央で3ヶ所、北端で1ヶ所の計4ヶ所で検出された。北端で検出された木組みは、かなり破壊されており、遺存状態は悪い。中央部3ヶ所の木組みのうち、南東のものはほとんどが破壊されており、上部構造は不明であるが、中央と北東の遺存状態は良好であり、その構造を観察することができた。中央の木組みでは、「X」字状に交差させた縦材を流路を横切るように、底に打ち込み、横に長い板材が渡されていた。また、長い葉をもつ芦のような植物を何層にも重ねたものを、材と材の間にサンドイッチ状に挟んでいたようである。縦材の一部は表面を加工し易いように焼成してから、先端を鋭く尖らせ、横材は角材または板材に加工したものを用いている。なお、水圧を強く受ける後側の縦材には比較的、太い材を用いているようである。中央と北東の木組みは、縦材として板状に加工した材を用い、ほとんど加工が施されていない材を横材として用いている。出土状況から、縦材を前後二列の合掌状に組み、その上に横材を2本わたす構造になっていたものと推定される。これらの木組みに使用されていた材は、クヌギやマキ、ヒノキをはじめとした多様なものである。

3009流路からは、TK216～208を中心とする須恵器や土師器、朝鮮半島の百濟地域から持込まれた可能性がある瓶などを含む土器や木製品など、5世紀代を中心とする遺物が多く出土している。全部でコンテナ22箱にも及ぶ土器（須恵器・土師器・韓式系土器・陶質土器）が出土しており、内訳の比率は、須恵器：土師器：その他＝24：75：1である。完形に復元できるものが多く、比較的まとまって出土していることから、上流から流れてきたものや単なる廃棄品というよりは、意図的に置かれたものという状況である。水利に伴う祭祀に関連する可能性もある。

7～12は、須恵器杯蓋である。7～9・11・12は、天井部が扁平で、口縁部と天井部の境の稜は鋭く、口縁端部は平たく、わずかに段を持つ。10は、口径が11.6cmと小さく、天井部をナデ消している。焼成もやや甘く、器形も他の陶邑産のものに比べるとやや異質である。

13～20は、須恵器杯身である。13・15～17・19・20は、立ち上がりが内傾し、端部を丸く収め、受部が水平または外上方に短く伸びる。体・底部の回転ヘラケズリの単位は小さく、底部は扁平である。18の立ち上がりはやや内傾し、口縁端部は平たく段を持つ。受部は水平に短く伸び、体・底部の回転ヘラケズリの単位は小さく、底部は丸みを持つ。

21は、須恵器無蓋高杯である。杯部口縁は直線的に上方に伸び、端部は平たく、段を持つ。杯体部の上下を明瞭な稜線で区分し、横位の櫛描波状文がめぐり、杯底部にも上下2段の刺突列点文がめぐり、脚部を欠くが、杯部との接合痕から、長方形三方透かしの脚部が付くことが判る。22は、須恵器高杯脚部である。3方向に円形の透かし孔を持ち、裾部に段を持つ。

23は、須恵器小型甗である。口縁部の大部分を欠いているが、頸部と口縁部との境界には鋭い凸帯を持ち、頸部下半には波状文がめぐり、体部は算盤玉に近い形状を持ち、最も張り出す体部中央に円孔を穿つ。円孔の上下には沈線がめぐり、上方の沈線は上下に刺突列点文を伴う。底部には成形時の調整に伴う不定方向の格子タタキが認められる。

24・25は、須恵器壺である。24は、頸部と口縁部との境界に鋭い稜を持つ。体部は肩が強く張り、尖底気味の底部を持ついわゆる無花果形の器形である。体部上半には、上下に凹線を伴う波状文がめぐ

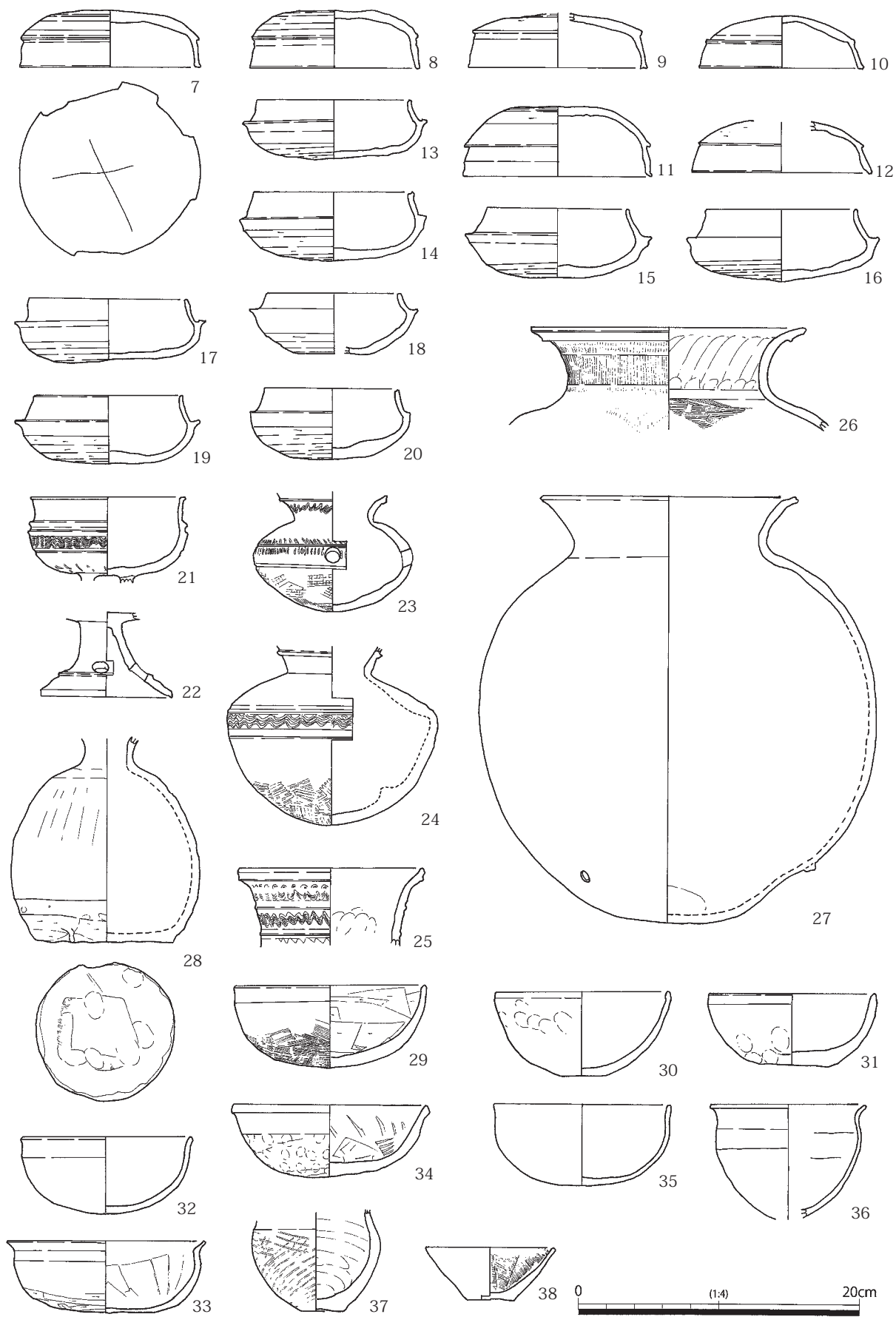


图20 3009流路 出土遺物 (1)

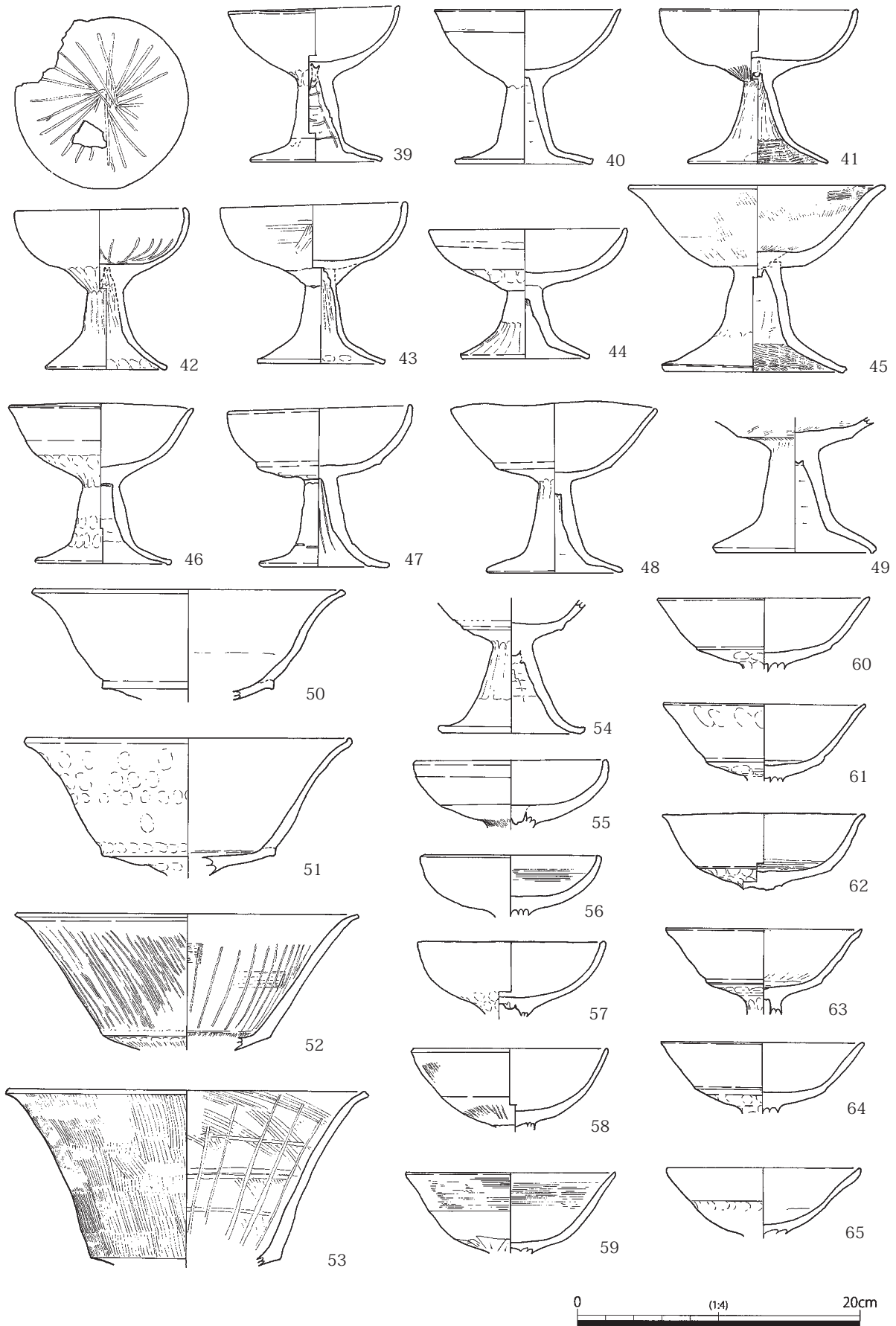


图21 3009流路 出土遺物 (2)

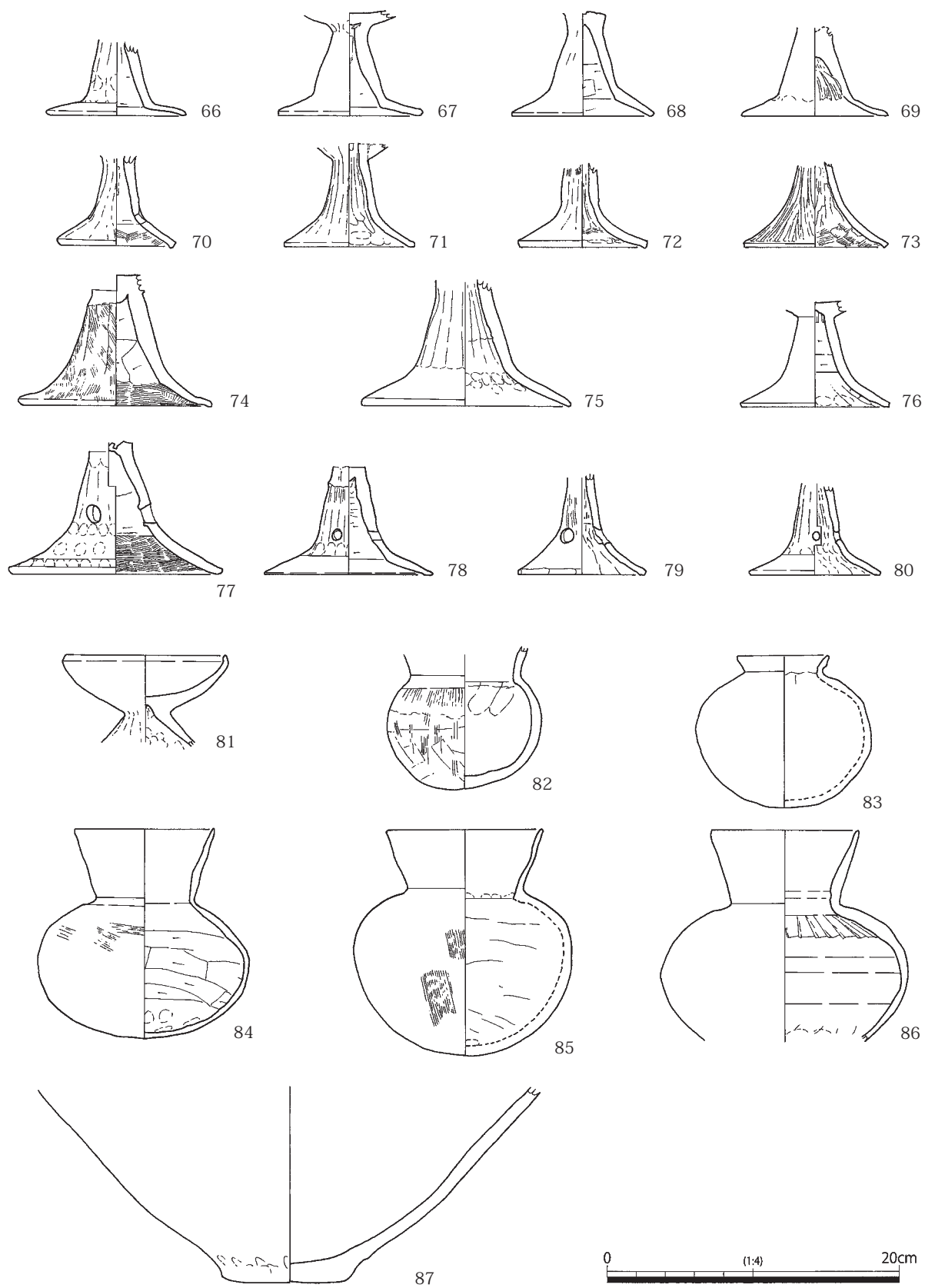


图22 3009流路 出土遺物 (3)

る。底部には、調整に伴う不定方向の格子タタキが認められ、23等の甕と同様の成形技法を用いていたと考えられる。25は、口縁がわずかに外反し、口頸部に櫛描き波状文と断面三角形の凸帯による文様帯を3段めぐらす。頸部以下を欠くため形状は不明であるが、口縁の形状から壺と考えられる。

26・27は、須恵器甕である。27は、口縁部に凸帯を伴わず、体部も成形時のタタキ調整の後、内外面を丁寧にナデ消している。26は、口縁部が外反し、端部直下に鋭い稜を持つ凸帯を伴う。外面は、口頸部から肩部にかけて平行タタキによる調整を行い、内面は頸部以下をハケ、頸部から口縁にかけては、指により斜め縦方向にナデ上げるといった土師器の調整技法が行われている。以上、これらの須恵器は、一部にTK73前後の特徴を持つものを含むものの、器形的特徴から、大部分がTK216～ON46に収まると考えられる。

28は、陶質土器である。口縁部を欠くもののほぼ完形で、口頸部が細くしまり、最大径が胴部のほぼ中央にくる撫肩で底部が平底の、いわゆる瓶（百濟土器および新羅土器では、一定のふくらみを持つ体部に小さな口頸部がつくものを瓶と呼ぶ。）形土器と考えられる。

外面調整は、平行タタキの可能性が考えられる縦方向の調整の後、横方向のナデ調整を行っている。また、底部にごく近い部分では手持ち篋削りによる調整が行われ、胴部上半分では縦方向の直線が胴部を等間隔で一周している。外面からも粘土ひもの単位を観察することが可能である。内面調整は、口頸部を絞り、細く締めた後、ナデ上げている。底部には、いわゆるゲタ痕と言われる方形に近くぼみが観察できる。ゲタ痕の中央は未調整であるが、四方は指ナデによるナデ消しが観察できる。共伴する須恵器の形式において同様の器形の出土が確認されておらず、同時期の百濟の古墳出土陶質土器に、同種のもの出土が散見されることから、直接または間接的に朝鮮半島の百濟地域から持ち込まれた土器であるといえる。

29～35は、土師器の杯である。32・35は口縁がわずかに外傾し、丸底の底部を持つ。同系統の形状の土器が、八尾市久宝寺南遺跡や御所市南郷遺跡群から出土している。29・30・34は、口縁がわずかに内湾し、丸底の底部を持つ。堺市小阪遺跡や船橋遺跡0-IIで、同系統の形状の土器が出土している。33は口縁端部を外方につまみ出し、平底の底部を持つ。31は口縁がわずかに内湾し、平底の底部を持つ。

36～38は、土師器鉢である。37は、平底の底部を持ち、体部外面にタタキ調整を行う。38は、平底の底部から直線的に外に開く体部を持ち、内面に蜘蛛の巣状のハケ調整を行う。37・38は、畿内第V様式系の鉢と考えられる。

50～53は、土師器大型有段高杯の杯部である。50は、杯底部から弱く内湾しながら立ち上がった後、外反する。51～53は、杯底部から直線的に外方に開く口縁を持ち、杯底部は真横に伸びる。口径に比して杯部の深さが深いことから、布留式IV～V期に相当すると考えられる。

41～44・55～57は、土師器椀形高杯である。この内、55～57は脚部を欠損している。41～43は、脚部が杯部に比べると小型化しており、脚柱部内面に絞り目が残る。なお、44は口径に比して杯部の深さが浅く、脚柱部内面の絞り目がケズリ調整により消されていることから、やや古い要素を引き継いでいると考えられる。

39・40・46・58・59・65は、土師器無稜高杯である。この内、58・59・65は、脚部を欠損している。39・40・46は、脚部が杯部に比して小型化しており、脚柱部内面の絞り目は、ケズリ調整により消されている。45は土師器無稜外反高杯である。脚柱部内面はケズリにより丁寧に調整され、裾部内面はハケにより調整されている。脚部に安定感があることから、他に比べてやや古い要素を持っていると考

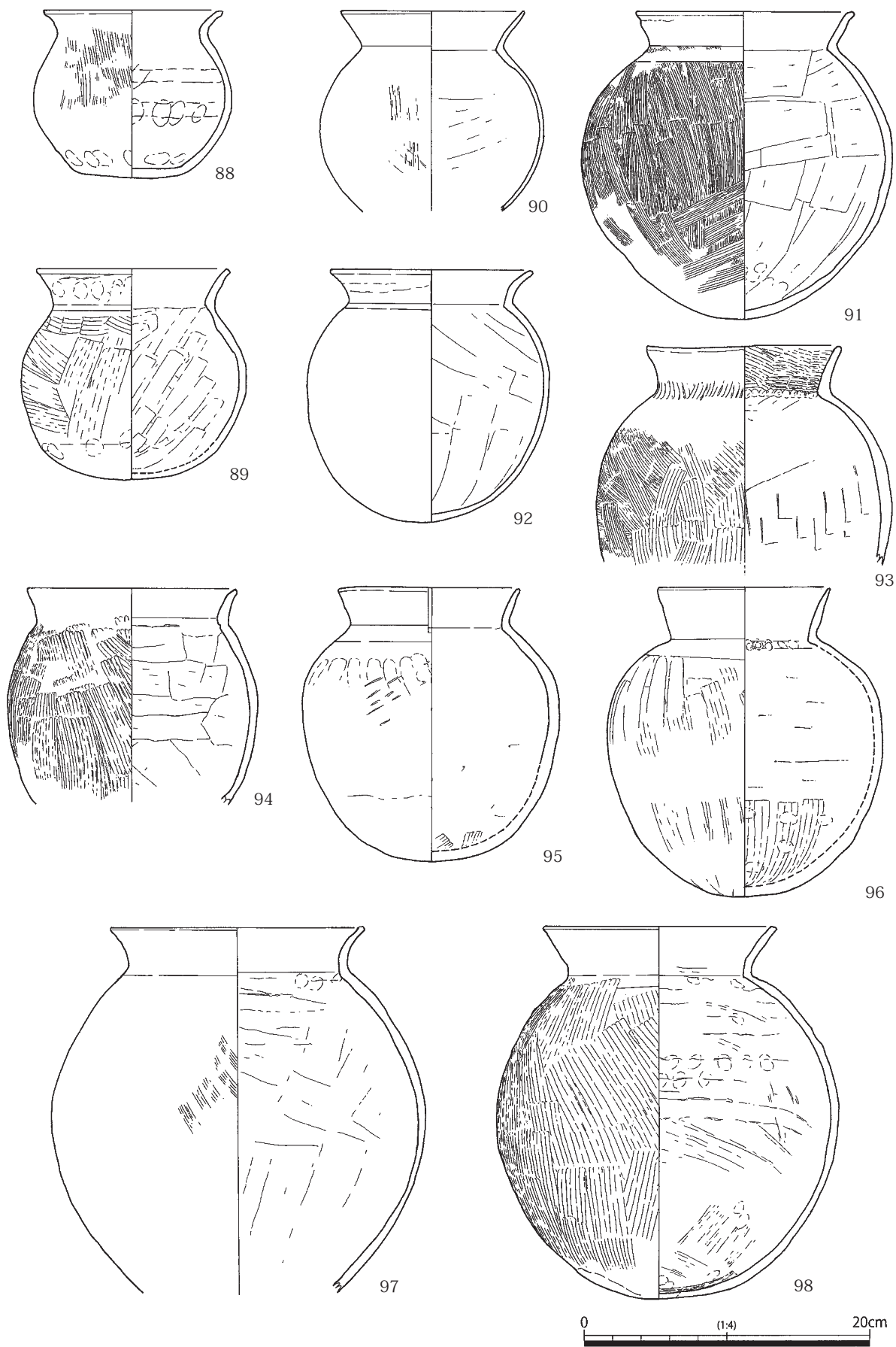


图23 3009流路 出土遺物 (4)

えられる。

47~49・54・60~64は、土師器有段高杯である。49・54は杯部口縁を、60~64は脚部を欠損している。47は、杯部口縁が内弯し、杯底部が真横に伸びる。脚部は杯部に比して小型化しており、脚柱部内面には絞り目が残る。48は、真横に伸びる杯底部から口縁が直線的に外に開く。脚部は杯部に比して小型化しており、脚柱部内面の絞り目はケズリ調整により消されている。

66~80は、土師器高杯脚部である。66~68・74・76は、脚柱部内面の絞り目をケズリ調整により消している。この内、66~68は、脚柱部と裾部の境が屈曲する。69・72・73・75は、脚柱部内面に

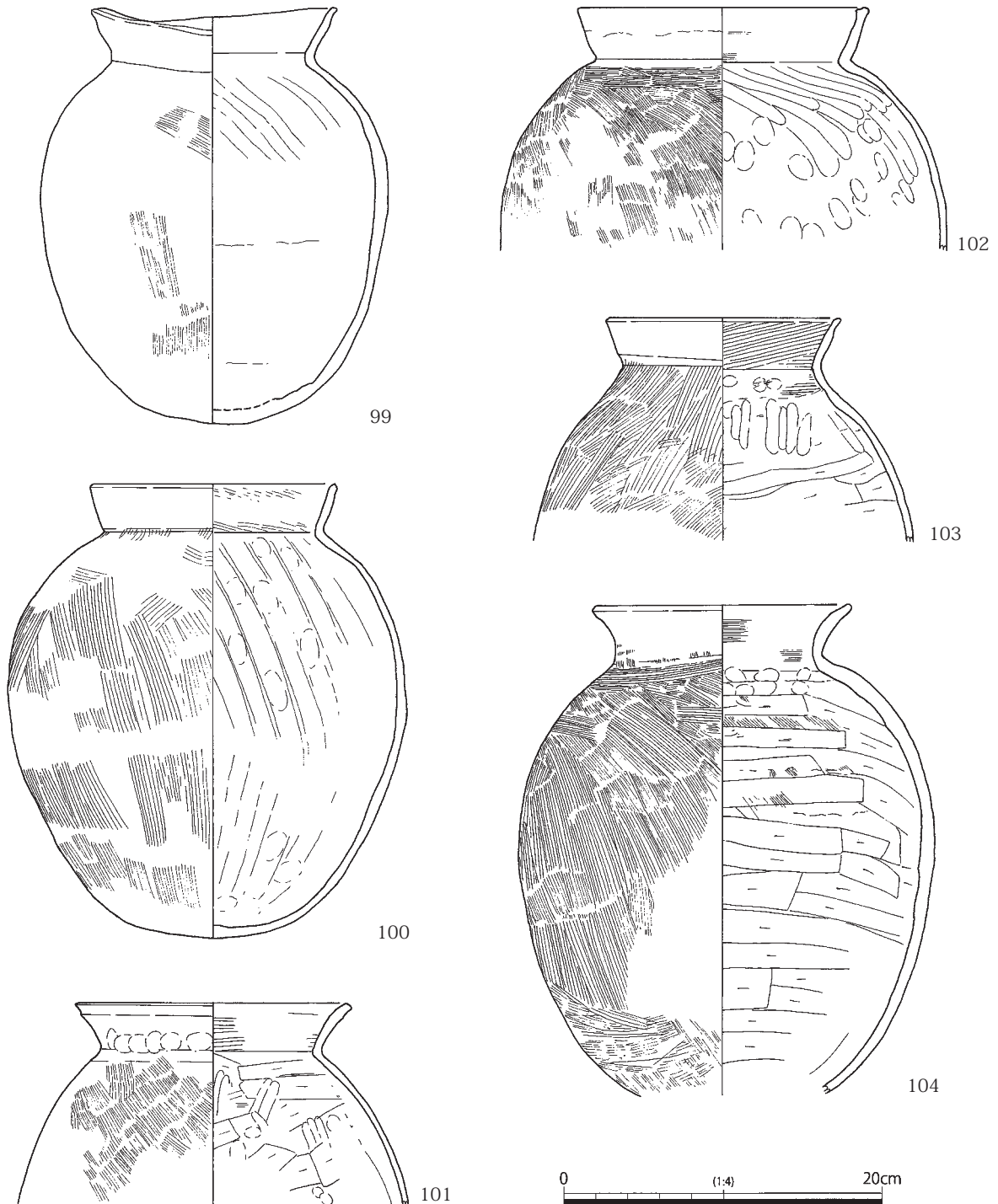


図24 3009流路 出土遺物（5）

絞り目が残る。

70・77～80は、透かし孔を持つ脚部である。77・78の脚柱部内面の絞り目は、ケズリ調整により消されている。これらの高杯は、布留式Ⅲ期に相当すると考えられる45を除き、布留式Ⅳ～Ⅴ期に相当すると考えられる。81は、土師器小型器台である。皿部の深さが浅く、脚部が皿部に比して小さいことから、小型3種の最終段階のものに相当すると考えられる。

82～87は、土師器壺である。82は頸部の締まりが弱く、口縁が直線的に上方に立ち上がり、口径が体部最大径とほぼ等しくなる。いわゆる小型丸底土器の最終段階のものと考えられるが、東海系の瓢壺の在地のものとなる可能性もある。83は、小型の土師器短頸壺である。84～86は、土師器直口壺である。

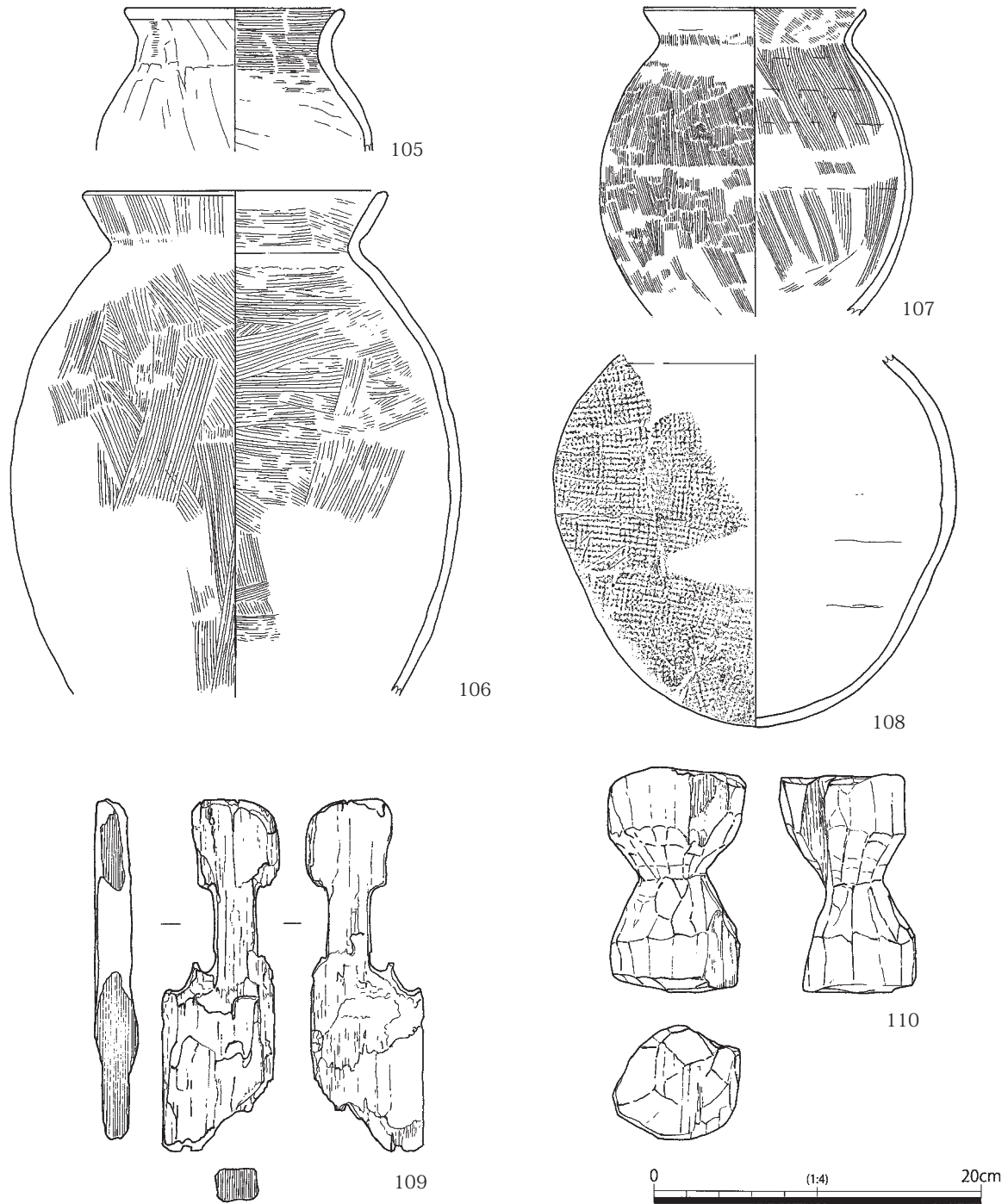


図25 3009流路 出土遺物 (6)

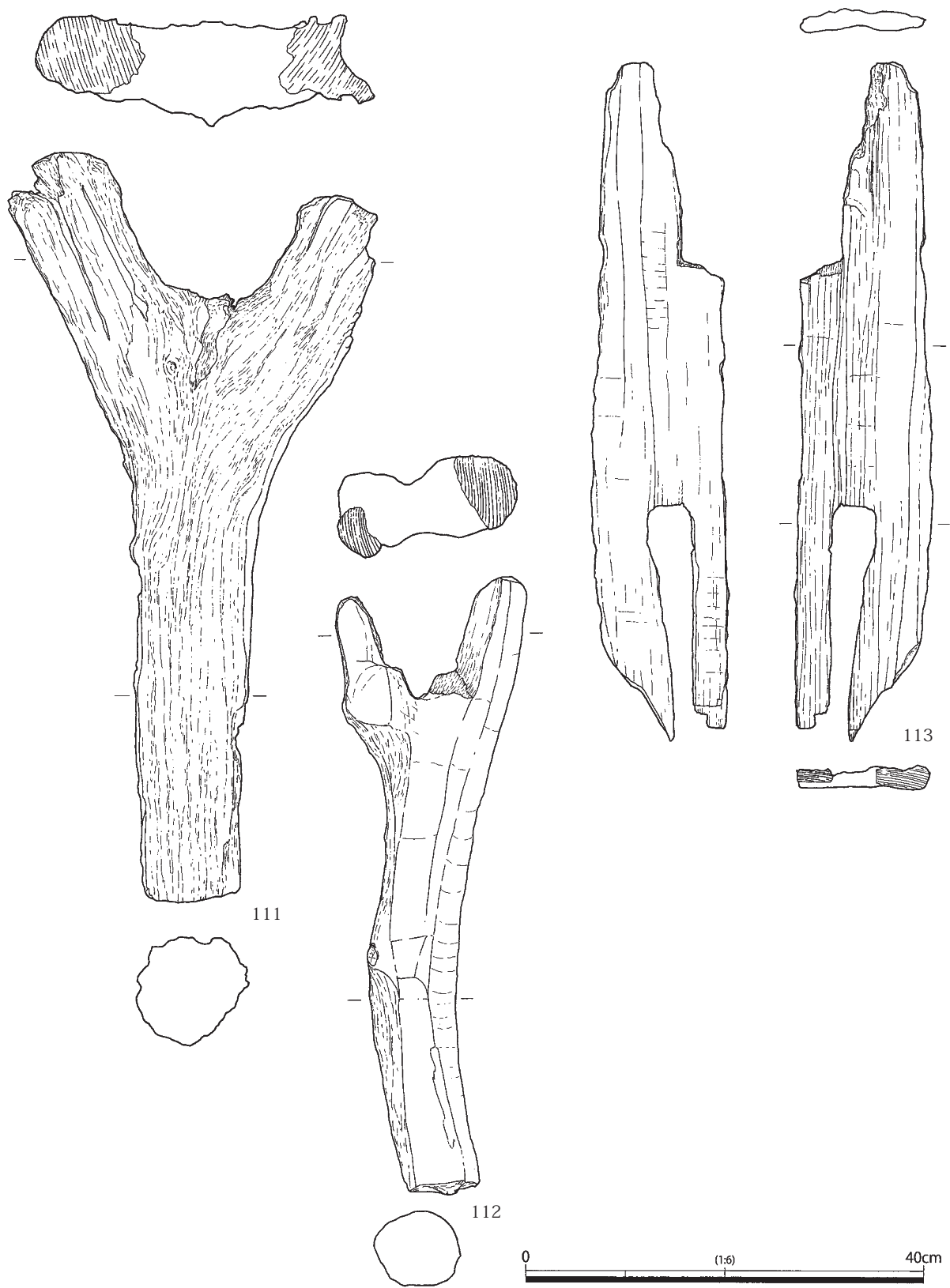


图26 3009流路 出土遺物 (7)

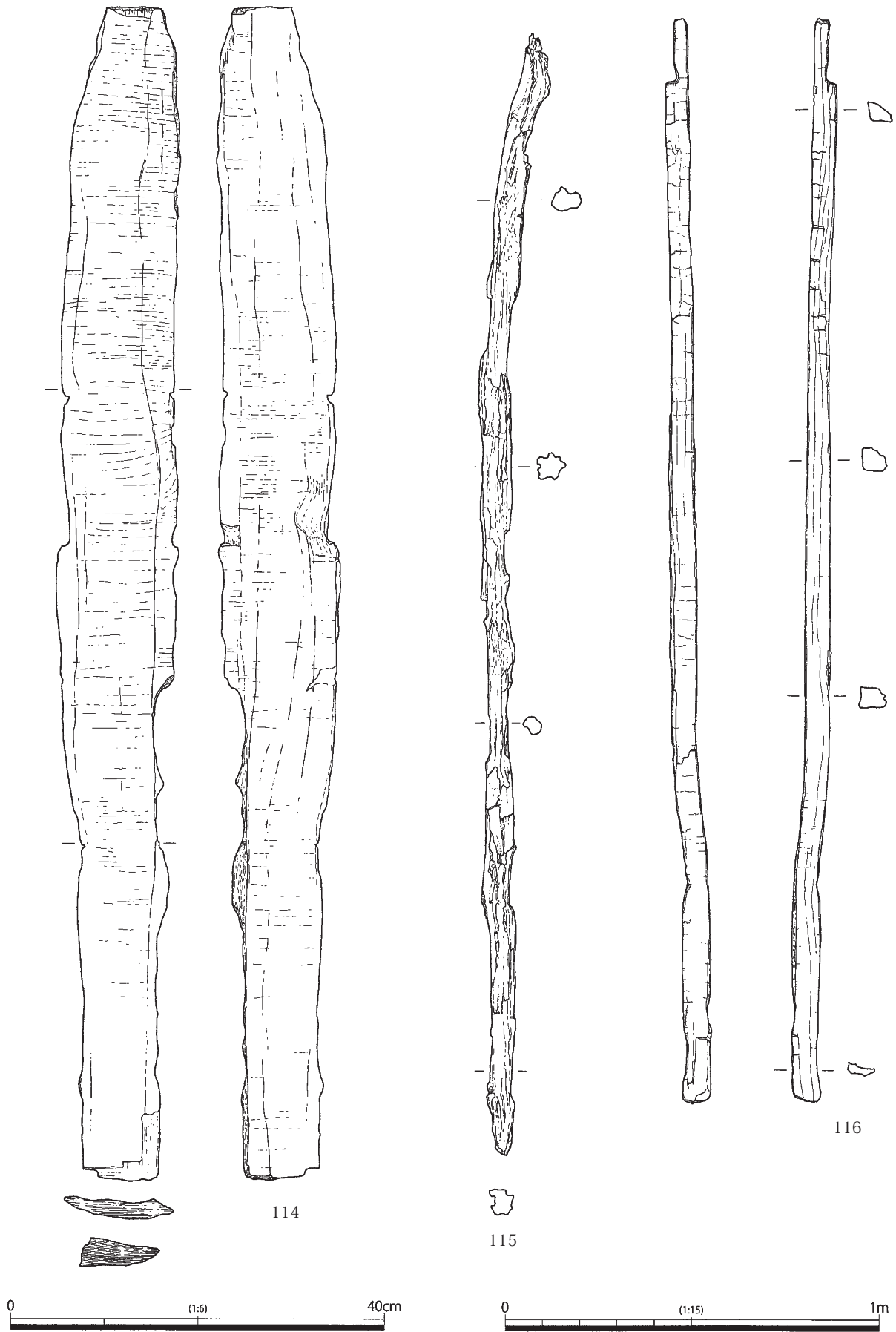


图27 3009流路 出土遺物 (8)

頸部が細く締まり、口縁は直立気味に外に開く。85は、体部の丸みが強く、体部最大径が体部1/3よりも上位に来る。84・86は、体部が横に強く張り出し、算盤玉に近い器形を持つ。これらは、その器形的特徴から、布留式Ⅳ期に相当すると考えられる。

88・89は、韓式系土器の影響を受けた平底の小型の土師器甕である。91・92・94・96・97は、布留式甕である。器壁が厚く、口縁の肥厚が弱いことから、布留式Ⅳ～Ⅴ期に相当すると考えられる。93は、長胴甕になる可能性のある布留式甕である。90・95・98は、在地の甕である。

101～104は、布留式系の長胴甕である。口縁が肥厚し、器壁も厚い。99・100・106・107は、土師器長胴甕である。このうち、99は内面調整が摩耗のために不鮮明であるが、布留式系の長胴甕である可能性が高い。106・107は、内外面ともにハケ調整を行った長胴甕である。108は、口縁部を欠損するが、頸部が緩やかに絞まる器形の甕である。体部外面の調整が格子タタキであることから、韓式系土器と考えられる。105は、頸部が直立し、口縁がゆるく外反する長胴かと思われる土師器甕である。調整は内外面ともにナデであるが、口縁部にハケ目が残る。

109・111～116は、木組みを構成する転用材である。109は不明板材である。一端は平面形が丸みをもつ。中央部に加工痕が認められるが、ホゾの痕跡か抉りか不明である。110は木錘である。樹種はコナラ垂属コナラ節で、輪切りにした心持材の両端近くから側面中央に向けて斜めに削り込み、側面から見て鼓形に仕上げたものである。『木器集成図録』による分類の4類に対応する。111・112は、Y字状材である。112はクヌギで、片面を面取りしているが、裏面には加工痕はない。111はコナラで、加工痕はない。113はクヌギの板材で、用途は不明であるが、表面を焼いた後、ノミ状工具で板材に加工している。114はコナラの横材で、柁目取りの表面にノミ状工具の加工痕が残る板材である。115はコナラの横材で、3mを超えるものである。樹皮が一部に残っており、部分的に抉ったような状況が見られるが、明確な加工痕はない。116はアカガシの横材で、約3mの長さを有する。表面を焼いた後、ノミ状工具で板材に加工している。中心に向かって木取りをしており、側面に樹皮があり、断面三角形である。

3002流路 (図14・28・29、図版4・49)

調査区北西端で検出した、南西から北東方向に延びる流路である。規模は、幅2.0m、深さ0.9m前後あり、北東端で3009流路と交差している。ほぼ直交しており、蛇行して3014流路につながる可能性もある。埋土は大きく4層に分かれ、1層は褐灰色極細粒砂、2層は黒褐色シルト～極細粒砂からなる。2層の上部には酸化鉄が沈着しており、下部ではラミナ構造が発達している。3層は黒褐色砂混じりシルトからなり、粘土～シルトの大小偽礫や土師器を含む。4層は明褐色細～中粒砂からなる水成層である。

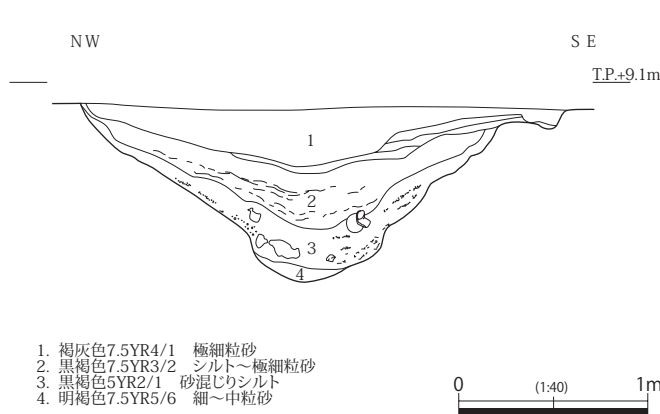


図28 3002流路 断面図

シルトからなり、粘土～シルトの大小偽礫や土師器を含む。4層は明褐色細～中粒砂からなる水成層である。

TK208に対応する須恵器や、それに並行する布留式Ⅳ期前後の土師器が出土していることから、3009流路と同時期に機能していた可能性が高い。なお、3009流路内で3002流路との交差部付近に木杭組施設が設置されていることから、3002流路は3009流路の取水等の水利目的で作られた人工的な溝である

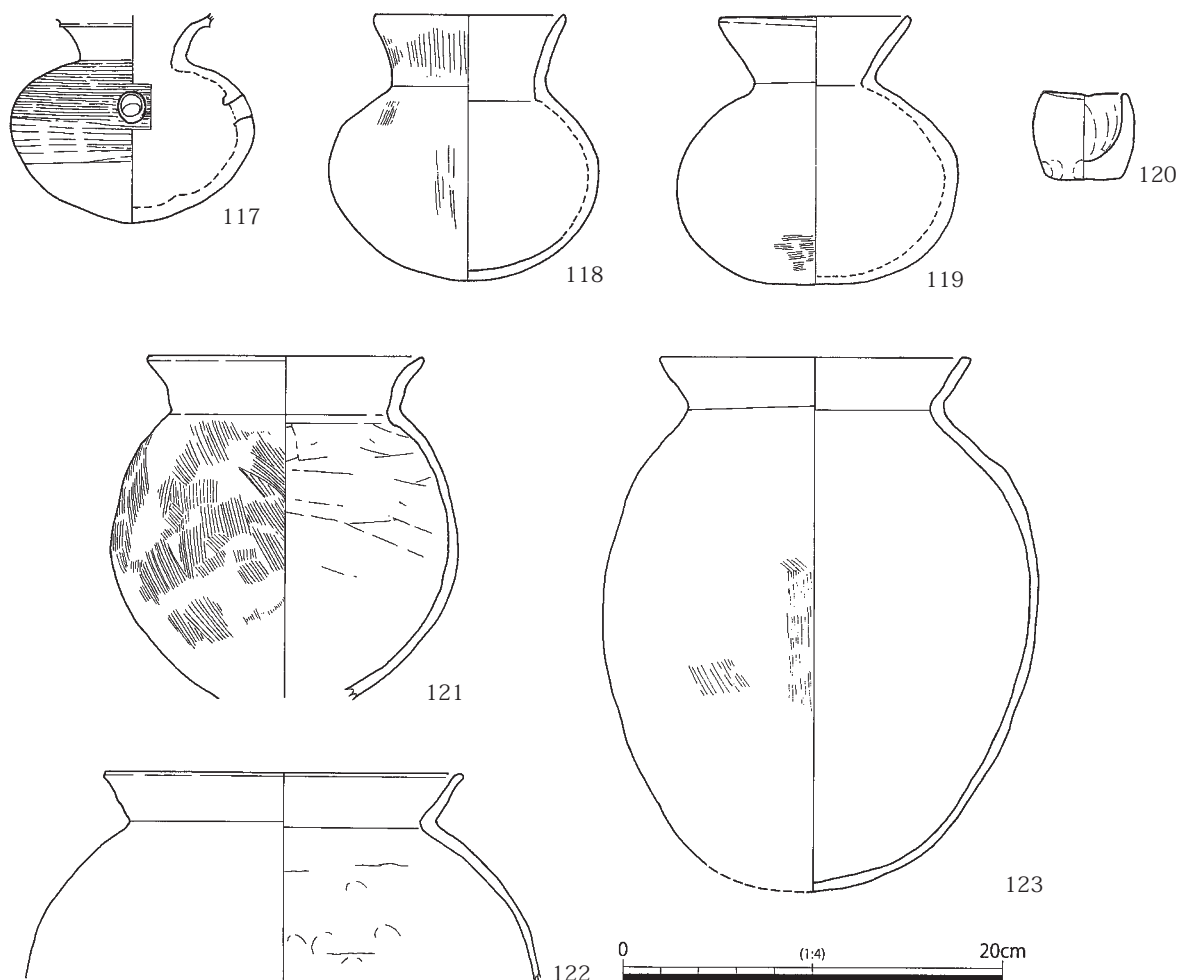


図29 3002流路 出土遺物

可能性も考えられる。

3002流路からは、須恵器および土師器が出土している。117は、体部上半にカキメ調整を施したやや肩の張る扁平球の体部を持つ須恵器甕である。118・119は、土師器直口壺である。119は、口頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部が直線的に外に開く。体部は、中央部に最大径が来る扁平な球状を呈し、底部は平底である。118は、口頸部の屈曲はやや弱く、口縁の開きも弱く、ほぼ直立する。体部は、最大径がほぼ中央に来る扁平な球状を呈する。121は、布留式甕である。口縁部が肥厚するが、やや直立気味であり、体部の器壁もやや厚手である。122は、口縁端部が内側に肥厚し、口頸部が「く」の字に屈曲する。内外面ともに磨耗が激しく、調整が不明瞭であるが、外面にはハケ調整の可能性のある調整痕が認められ、布留式甕の可能性が高い。123は、土師器長胴甕である。内面調整が磨耗のために不鮮明であるが、布留式系の長胴甕である可能性が高い。120は、手づくねの鉢である。器形が小さいことから、実用品ではなく、ミニチュア土器の可能性もある。

以上、3002流路出土土器のうち、須恵器の甕はその特徴からTK208に対応し、供伴する土師器も、それと併行もしくはやや古い布留式IV期に対応する。

3014流路 (図14・30、図版3)

調査区南西端部で検出した、南東から北西方向に延びる流路である。3009流路と約24m離れているが、ほぼ平行である。検出面での規模は、幅2.2m、深さ0.6m程度である。埋土は大きく3層に分かれ、

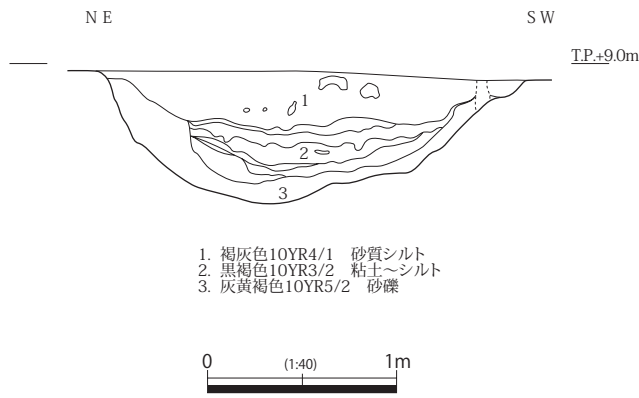


図30 3014流路 断面図

1層は褐灰色砂質シルトからなり、砂の偽礫を含む。2層は黒褐色粘土～シルトからなり、さらに細分が可能である。暗色化しており、滞水の状態で堆積したと考えられる。3層は灰黄褐色砂礫からなり、側方細粒化している。土師器片が出土している。

古墳時代包含層出土遺物（図31、図版50）

このほか、古墳時代の包含層からは、須恵器および土師器が出土している。124～128は、須恵器蓋杯である。124・126は、TK216に相当する須恵器蓋杯である。126は、立ち上がりが長く内傾し、受け身が水平で、底部が扁平である。124は、天井部が扁平で、天井部と口縁部の境に鋭い稜を持つ。口縁は「ハ」の字に開き、端部が平たくわずかに段を持つ。125・127は、TK10～TK43に相当する須恵器蓋杯である。稜や端部は全体的に鈍く、口径が大きい。128は、立ち上がりが短く、強く内傾し、底部がへら切りであることから、TK209～217に相当する須恵器杯身と考えられる。132は、須恵器甕である。129・130は、TK208～TK23に相当する須恵器無蓋高杯の杯部である。131は、上下に凹線を伴う波状文が体部中央にめぐるTK208前後の甕である。133・134は、土師器高杯である。このうち、134は、杯部に比して脚部が小さく、脚柱部内面の絞り目が上部に残ることから、布留式IV期に相当する無稜外反高杯である。135・136は土師器甕である。

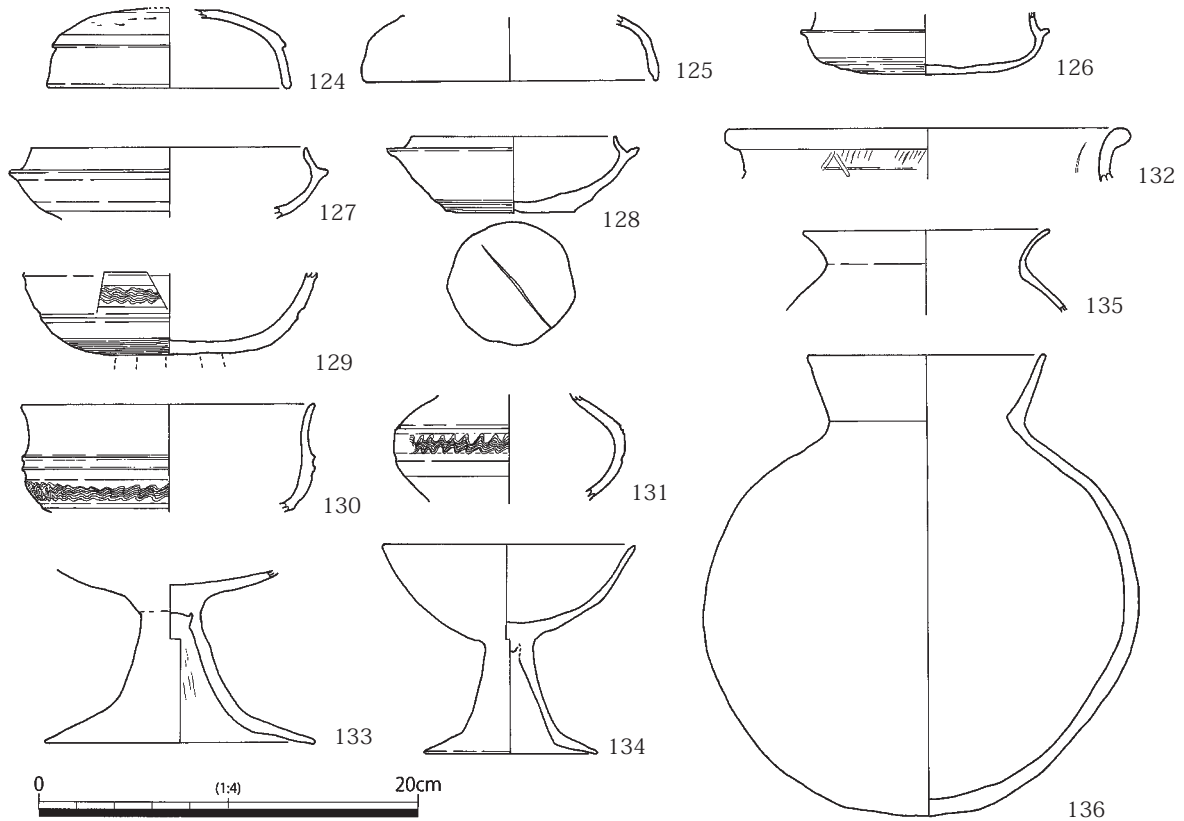


図31 1区 古墳時代包含層 出土遺物

3. 古代以降の遺構・遺物

調査で確認できた5面の遺構面のうち、最上層にあたる第1面で古代以降の遺構を検出した。耕作に伴う遺構がみつまっているのみで、建物跡などは確認されておらず、集落は検出されなかった。遺物量は全体に少ない。

a. 第7層上面（第1面）

第7層上面で、第7層上位の古代～近世の各耕作土層に伴う遺構を一括で検出した。調査区西半では、第2～6層段階の耕作に伴う中近世の耕作溝・溝・井戸などを一括して検出した。調査区東半では、第1・3・6層の各耕作土層に伴う耕作溝・土坑・落ち込み・井戸などを検出した。

1. 土坑・井戸・落ち込み

調査区南東部では、第7層上位の第2層基底面で複数の土坑を検出した。調査区全体に点在しているわけではなく、南東部にまとまっている。中には、井戸と考えられるものも含まれている。

3154土坑（図32・33）

調査区南東端部で検出した。平面形は、長径1.5m、短径1.0mの楕円形を呈し、深さは0.3m程度である。埋土は2層に分かれ、1層は灰黄褐色砂質シルトからなり、シルトの小偽礫と炭化物を含む。2層は褐灰色極細粒砂質シルトからなる。遺物は少量で、土師器片が出土しているのみである。

3017井戸（図32・33・35、図版50）

土坑は調査区南東部に集中しているが、3017井戸のみ調査区中央部に位置している。素掘りの井戸で、平面形は楕円形を呈し、長径1.4m、短径1.0m、深さは約0.9mである。第8層の水成砂層を掘り抜き、第9層の粘土層に達しており、底部付近から土師器や礫が出土した。周囲には建物跡などはみつかっておらず、耕作に伴う井戸と考えられる。

埋土は、10層に細分される。1層は、褐灰色極細粒砂混じりシルトからなり、炭化物を含む。2層は、褐灰色極細～細粒砂混じりシルトからなり、炭化物を含む。3層は、褐灰色極細粒砂混じりシルトからなり、炭化物を含む。4層は褐灰色極細粒砂質シルト、5層は褐灰色極細粒砂質シルト、6層は褐灰色極細粒砂質シルト、7層は褐灰色極細粒砂質シルトからなる。8層は、褐灰色極細粒砂質シルトからなり、壁面の第8層の流れ込みが観察される。9層は、褐灰色極細～中粒砂混じりシルトからなり、土師器・礫などの遺物やシルトの小偽礫を含む。10層は灰黄褐色粗粒砂からなり、機能時に壁面の第8層が流れ込み、堆積したものと考えられる。

遺物量は少ないが、8層から土師器鉢（図35-140）および甕（図35-141）が出土しており、奈良時代に相当するものと考えられる。

3159井戸（図32・33）

調査区南東部に位置しており、第2層上面で検出した円形の井戸である。完掘はできなかったが、規模は径0.8m、深さ0.9m程度とみられる。埋土は黄褐色砂質シルトからなり、第9層起源とみられる黒褐色粘土・褐色粘土・黄橙色シルトなどの大小偽礫を多数含む。集落に伴うものの可能性がある。遺物は出土していない。

3172落ち込み（図32・35、図版50）

調査区南東隅の第2b層段階で一部を検出した、大規模な落ち込みで、深さは0.7m程度である。下面では複数の土坑を検出したが、3172落ち込みとの関係は不明である。

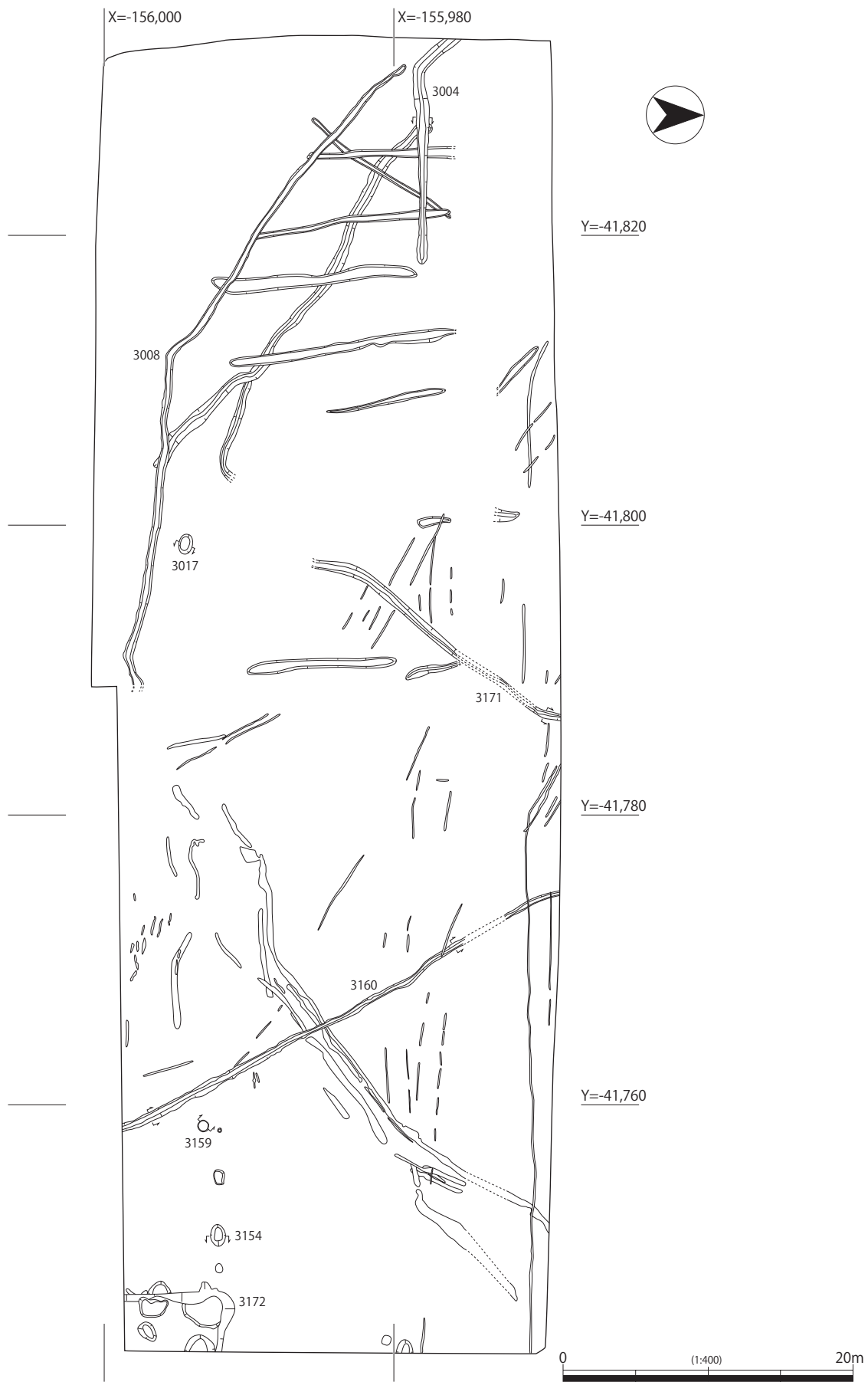


図32 1区 第1面遺構平面図

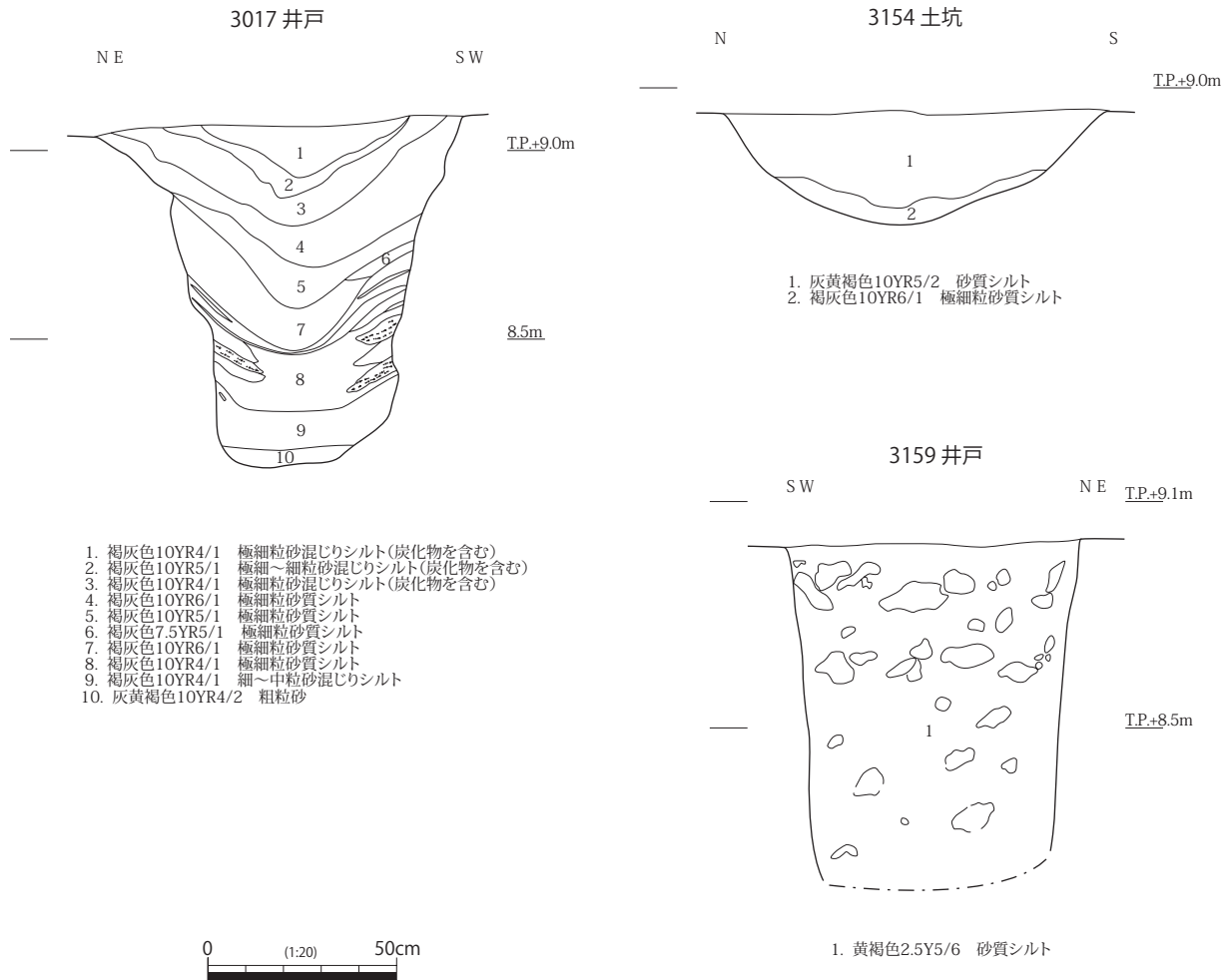


図33 1区 第1面土坑・井戸 断面図

景德鎮系白磁の端反皿(138)や国産陶器・陶磁器をはじめとする遺物が多量に出土した。138は、15世紀後半～16世紀前半の景德鎮系白磁皿ⅢCに相当する。

2. 溝

調査区全面に溝は展開しているが、方向は一定しておらず、あまり規則性はみられない。建物跡はみつかっていないことから、いずれも耕作に伴うものと考えられる。遺物の出土量も少ない。

3160溝 (図32・34)

調査区東半に位置しており、南東から北西方向に延びる溝である。ほぼまっすぐに延びており、調査区内ではおさまらず、調査区外まで及んでいる。検出面での規模は、幅0.4～0.7m、深さ0.25～0.5mで、北西方向に向かって幅が減少し、検出面からの深さも浅くなり、底部の水準は0.1m程度高くなる。北西寄りでは底部が水平で、断面が鋭角な台形を呈していることから、暗渠であった可能性もある。

埋土は、暗灰黄色極細粒砂からなる1層と、黄灰色シルト～中粒砂からなる2層に細分され、いずれも水成とみられる。一方、深度の深い南東寄りでは大きく4層に細分され、1層は灰褐色極細粒砂からなり、灰黄褐色細粒砂の薄層を挟む。2層は褐色粗～粗粒砂、3層はにぶい黄橙色極細粒砂、4層は暗褐色極細粒砂質シルトからなる。

調査区西半で検出した溝は、いずれも調査区内を蛇行しながら長く延びている。

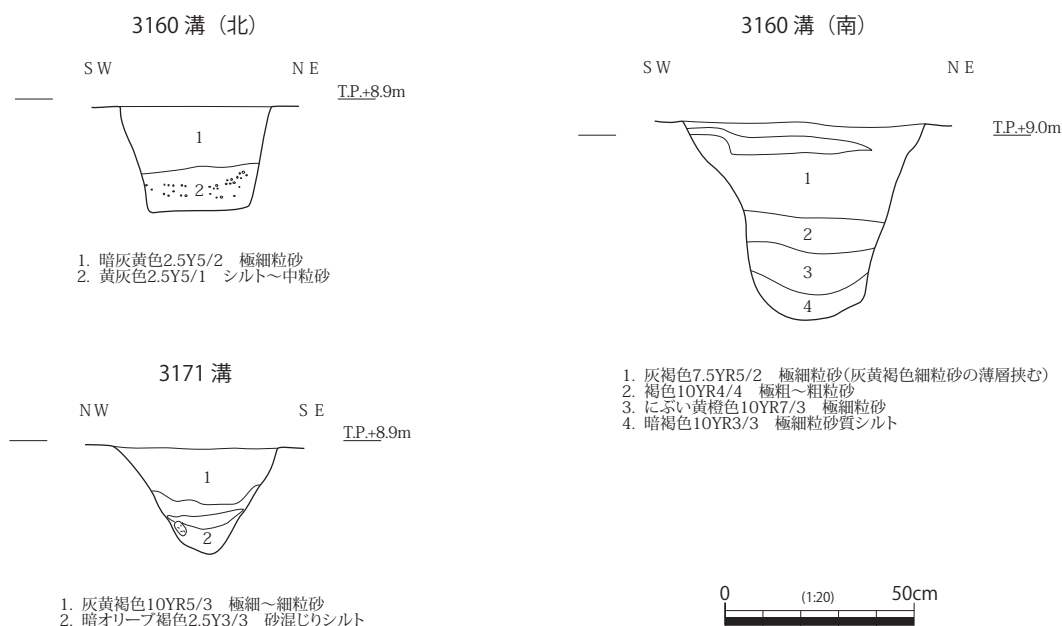


図34 1区 第1面溝 断面図

3004溝 (図32・35)

調査区西半に位置しており、北西から南東方向に伸び、さらに東へ向かう溝である。西側は調査区外に伸びている。幅0.8m、深さ0.7m前後の深い溝で、側面は垂直あるいはオーバーハング気味になっており、暗渠の可能性が考えられる。埋土は5層に細分され、1層は灰黄褐色極細～細粒砂、2層はにぶい黄橙色細～極粗粒砂、3層はにぶい黄橙色細～中粒砂、4層はにぶい黄褐色細～極粗粒砂からなる。2～4層は層理面が不明瞭であり、これらの砂層により、比較的短期間のうちに埋まったと考えられる。機能時の堆積層とみられる5層は、灰黄褐色シルト～極細粒砂からなり、炭化物を少量含む。

139は、口頸部が「く」の字に強く屈曲する土師器甕である。

3171溝 (図32・34)

中央部北寄りに位置している。南西から北東方向に伸びる。規模は、幅0.4m、深さ0.3m程度あり、埋土は、1層が灰黄褐色極細～細粒砂、2層が暗オリーブ褐色砂混じりシルトからなる。

3. 耕作溝

調査区東半部の北寄りを中心に、第1・3層段階の東西方向および南東から北西方向に伸びる溝群を検出した。これらの溝は、幅が10cm程度と細く、鋤溝あるいは轍と考えられる。また、調査区東半部の第5層下面では、幅0.3～0.5m、深さ5cm程度の南西から北東方向に伸びる耕作溝を確認した。

一方、各耕作土層に伴う遺構を一括して検出した調査区西半部では、幅0.6～0.8m、深さ0.1m程度の南北方向に伸びる耕作溝を確認した。

包含層出土遺物 (図35、図版50)

古代～中世の包含層からは、須恵器・土師器・土師質土器・陶器・陶磁器等が出土している。

137は、3010ピットから出土した須恵器杯である。3010ピットは、調査区北西端部の第7層上面で検出されたものであるが、他にピットは検出されていないことから、建物を構成するものではないと考えられる。地鎮などの土器埋納ピットの可能性もあるが、上面は削平を受けているため、はっきりしな

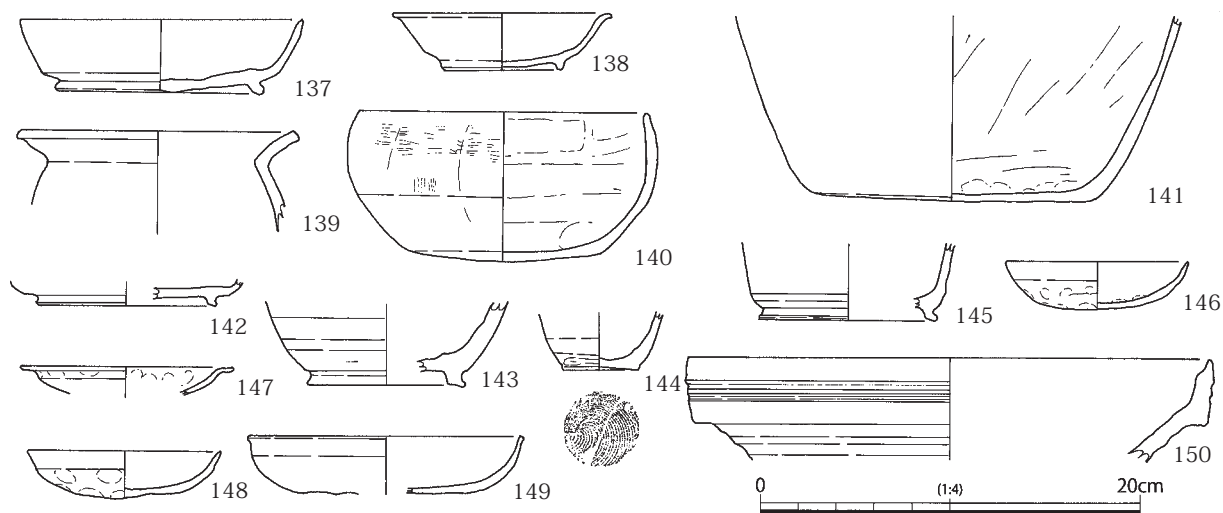


図35 1区 古代以降 出土遺物

い。高台が「ハ」の字に開き、胎土がやや粗い。飛鳥V～平城IIの杯Bに相当する。

142・143・145は、奈良時代の須恵器である。142・145は平城II～IIIに相当する杯B、143は平城IVに相当する壺である。

146～149は、平安時代の土師器皿である。147は「て」字状口縁の土師器皿、146・148は手づくねの土師器皿A、149は、土師器皿Dであろう。150は、備前焼の播鉢である。外縁帯には沈線がはっきりと残り、口縁端部は内面に段を持ち、上方に引き上げている。16世紀第3四半期～第4四半期前半に相当すると考えられる。144は、平安時代の須恵器壺底部であり、底部外面に回転糸切り痕がみられる。

4. 小結

主要な遺構として、古墳時代の大規模な流路である3009流路から、川幅が広がる中央で3ヶ所、北端で1ヶ所の計4ヶ所で、木杭を組み合わせた施設（本文中では木組みと呼称）が検出された。中央部の施設は、交差させた杭を流路を横切るように底に打ち込み、横に渡した長い杭で連結し、植物質の編物で覆っていたようである。これらの施設は、水圧を強く受ける後側の杭には太い材が選ばれているとみられ、川幅が広く水流が弱まる場所や支流との交差部に設置されていることなどから、水利目的のものである可能性が高い。

3009流路からは初期須恵器や韓式系土器、百済地域から持ち込まれた可能性のある瓶形土器等を含む土器や木製品など、5世紀中葉を中心とする遺物が多く出土している。これらの土器には完形品が多く見られるだけでなく、木杭施設周辺からの出土が比較的多いことから、単なる廃棄ではなく、何らかの意図を持って投棄された可能性も考えられる。しかしながら、調査区内では当該期の集落は見つかっておらず、今後これらの施設の建設にかかわった集団の集落を確認することが課題と言える。

また、3009流路の土器群は、前時代に比して、土師器の器種構成内における高杯の高率化という、須恵器導入期における供膳形態の変化を示唆するとされる、近畿地方における一般的様相を示す一方で、瓶型土器の出土をはじめ、土師器と須恵器の比率がおおよそ3：1であるなど、特徴的な様相も示している。渡来人系集落とされる長原遺跡ほどその影響は強くはないものの、大阪府部屋北遺跡や奈良県伴堂東遺跡など他の同時期の資料と比較すると、大陸系要素が強い傾向にある。このことは、三宅西遺跡

が長原遺跡の周辺部に位置するという、立地上の関係とも深くかかわっているものと考えられる。

3009流路出土の瓶形土器に近似する土器としては、TK208～TK47の須恵器と共伴して出土した、奈良県橿原市新沢千塚281号墳の瓶形の陶質土器を挙げることが出来る。これは、3009流路出土のものよりも法量が一回り大きく、調整もやや粗雑であるが、ほぼ同一の器形と言ってもよいものである。

瓶形土器は、韓半島中西部から南西部のいわゆる百済の領域で、5世紀代の古墳を中心に出土する器種である。韓半島における同器種の出現時期は、風納土城206号井戸より3009流路と近似する瓶形土器が出土していることから、少なくとも5世紀の第1四半期にまで遡るものと考えられる（権五榮2008）。

百済地域の瓶形土器は、口縁部はバリエーションに富むが、時代が下るほど肩が張る傾向がある（吉井秀夫1991）など体部の形態には一定の規則性があることから、体部の形態を基にした分類がある（寺井誠2004）。それによると、3009流路出土瓶形土器が相当する5世紀後葉以前に位置づけられている類は、最大径が体部の中ほどにあり、底部径が最大径の7割程度の大きさのもので、撫肩を呈する。本類に該当するのは、3009流路、新沢281号墳出土のものおよび、MT15～TK10の須恵器と共伴する三重県津市中大谷13号墳出土のものである（田中秀和1993）。分類結果と共伴する須恵器の編年から、3009流路出土瓶形土器は、日本出土の同器種の百済系土器としては、最も古い例になると思われる。また、3009流路、新沢281号墳出土のものに平行タタキ等の縦方向の調整が見られるのに対し、中大谷出土のものは横方向のカキメによる調整が行われており、系譜が異なる可能性が考えられる。なお3009流路出土瓶形土器同様、前述の風納土城206号井戸をはじめとする韓半島で出土した瓶形土器も口縁部を打ち欠いていることから、このことにも何らかの意図があったことが考えられる。

権五榮 2008「漢城百済研究の最新成果」『漢城百済の歴史と文化 特別史跡 百済寺跡再整備事業推進イベント 歴史講演会資料集』

寺井誠人 2004「古代難波の外来遺物」(財)大阪市文化財協会編『難波宮址の研究 第12集—宮殿周辺地域の調査—』

吉井秀夫 1991「朝鮮半島錦江下流域の三国時代墓制」『史林』第74巻 第1号

田中秀和 1993「三重県出土の百済系土器の検討 ～いわゆる徳利型土器について～」『Mie history』vol. 5

清水梨代 2008「三宅西遺跡出土百済系土器について」『大阪文化財研究』第33号

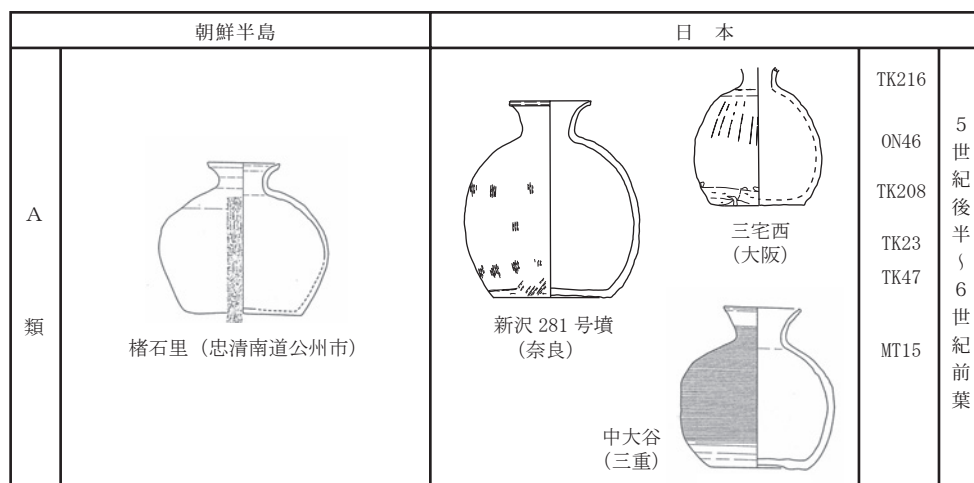


図36 日本と韓国の瓶型土器比較

第2節 2～4区および13・14区の成果

調査範囲の西半部に位置しており、2区は西側で里道をはさんで1区と接している。2～4区は、東西方向に走る道路の北側にあたり、すぐ南側には13・14区を設定している。13区の西側は、1区の南側にあたるが、調査区は設定されていない。2区と4区では、調査区北側に入る進入路を確保したことから、一部未調査部分が生じている。東側は5区と接している。道路南側の14区は東側で、道路をはさんで15区と接している。

1. 層序

調査区は、東西方向に走る道路で分断されていることから、この調査区における基本層序は、北側の2～4区南壁断面で設定している。ただし、調査時に中央部を東西方向に走る道路で分断されていることや、連続した調査がおこなえなかったことから、13・14区の南壁断面の層序も記載することとする。なお、2～4区南壁と異なり、13・14区南壁は道路形状に従っているため、やや湾曲しており、単純な比較はできない状況である。全体にあまり大規模な起伏はみられず、ほぼ平坦であるが、2区の中央部で古い流路に伴う流水堆積が顕著にみられる。

2～4区南壁断面

第0層：現代盛土である。

第3a層：灰オリーブ色極細粒砂質シルトで、現代耕作土である。

第3b層：暗オリーブ褐色砂質シルトで、東部にのみ分布する中～近世の耕作土層と考えられる。

第4層：黄褐色砂混じりシルトで、西～中央部に分布する中世の耕作土層と考えられる。

第6a層：暗灰黄色砂～シルトで、水成層であるが、部分的に耕作土化している。

第6b層：にぶい黄褐色シルト～粘土で、上面で畦畔を検出していることから、古代の耕作土層と考えられる。

第7層：上部が極暗褐色砂質シルト、下部が黒褐色シルト混じり細～極細粒砂からなる、古墳時代～縄文時代晩期の暗色帯構成層である。土壌化が進行しており、層内で古墳時代の遺構群が形成されている。

第8a層：にぶい黄褐色砂礫で、水成層である。

第8b層：褐色シルトで、酸化鉄の集積が見られる。

第9層：黒褐色粘土混じりシルトで、調査区西部では第9a層（黒色粘土）と第9b層（黒灰色細粒砂混じりシルト）に細分される。なお、本調査区における第9層は、全体的に暗色化が強いが、調査区東部では暗色化が弱くなり、西部とは層相が異なる。なお、本層上面で縄文時代後期中葉～後葉の土器が出土している。

第10層：褐灰色細礫～シルトで、淘汰の悪い水成層である。

第11層：褐灰色粘土混じりシルトで、やや暗色化しており、近畿地方の標準火山灰層である、横大路火山灰層（アカホヤ）（K-Ah）と考えられる火山ガラスを含有している。

第12層：灰色礫～シルトからなる水成層で、調査区西部では3層に細分される。

第13層：オリーブ灰色粘土～褐灰色シルトからなる暗色帯構成層で、2～3層に細分される。

13・14区南壁断面

第0層：現代盛土である。

第1a層：黒褐色砂質シルトからなり、現代盛土あるいは耕作土層である。

第1b層：にぶい黄橙色極細粒砂質シルトからなり、近世以降の耕作土層あるいは盛土とみられる。

第3a層：主に黄褐色砂混りシルトからなり、調査区西部のみに分布する。中～近世の耕作土層とみられる。

第3b層：にぶい黄色砂混りシルトからなり、下部は砂質が強い。中～近世の耕作土層とみられる。

第3ci層：主ににぶい黄色砂質シルトからなり、調査区東部のみに分布する。中～近世の耕作土層とみられる。

第3cii層：主に黄褐色砂混りシルトからなり、調査区東部のみに分布する。中～近世の耕作土層とみられる。

第3d層：明黄褐色シルト～砂からなる。層厚は最も厚い調査区東端で50cm程度であり、西に向けて次第に減じている。水成層であるが、部分的に耕作土化されており、下面では耕作溝を検出した。

第4層：主に褐色極細粒砂混りシルトからなり、酸化鉄斑の集積が観察された。中世の耕作土層とみられる。

第7層：庄内式期から古墳時代にかけての遺物を含む、暗色帯構成層である。層厚は15～25cm程度で、調査区の中央部と東西端部では様相が大きく異なる。東西端部では暗色化が弱く、灰褐色極細粒砂混りシルトからなる。下部は砂質が強く、部分的に細分することが可能である。一方、中央部では土壌化が進行しており、黒色砂混りシルトからなる。土師器や須恵器などの遺物や焼土を多く含み、下面では本層内の複数の生活面から掘込まれたとみられる遺構群を検出した。

第8a層：灰黄色シルト～礫からなり、西ほど厚く堆積する氾濫堆積層である。層厚が10～50cm程度であり、層内では複数の流路を確認した。東方では厚さを減じるとともに細粒化し、酸化鉄・マンガン斑の集積が観察される。

第8b層：灰オリーブ色シルト～粘土からなり、西ほど厚く堆積する氾濫堆積層である。層厚は10cm程度である。

第9層：黒色砂混り粘土質シルトからなる暗色帯構成層である。調査区東部では暗色化が弱く、酸化マンガン斑が集積する。上面では乾痕が観察された。

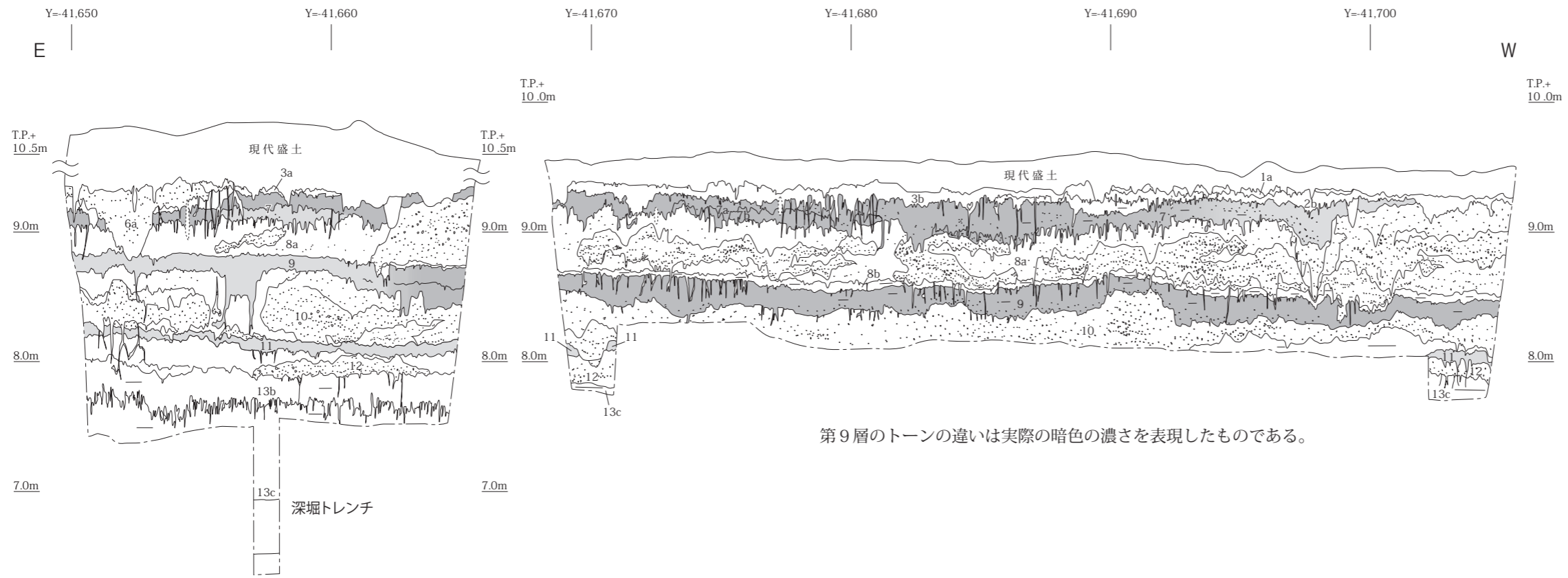
第10層：オリーブ灰色シルト～砂からなり、層厚は最大で約50cmある。淘汰が悪いが、水成層とみられる。

第11層：黒褐色粘土質シルトからなる暗色帯構成層である。暗色化の程度は弱い。

第12層：緑灰色シルト～砂からなり、層厚は最大で30cm程度である。淘汰は悪いが、水成層とみられる。

第13層：緑灰色粘土からなる。締まりが良く、地山とみられる。

3・4区 南壁



2区 南壁

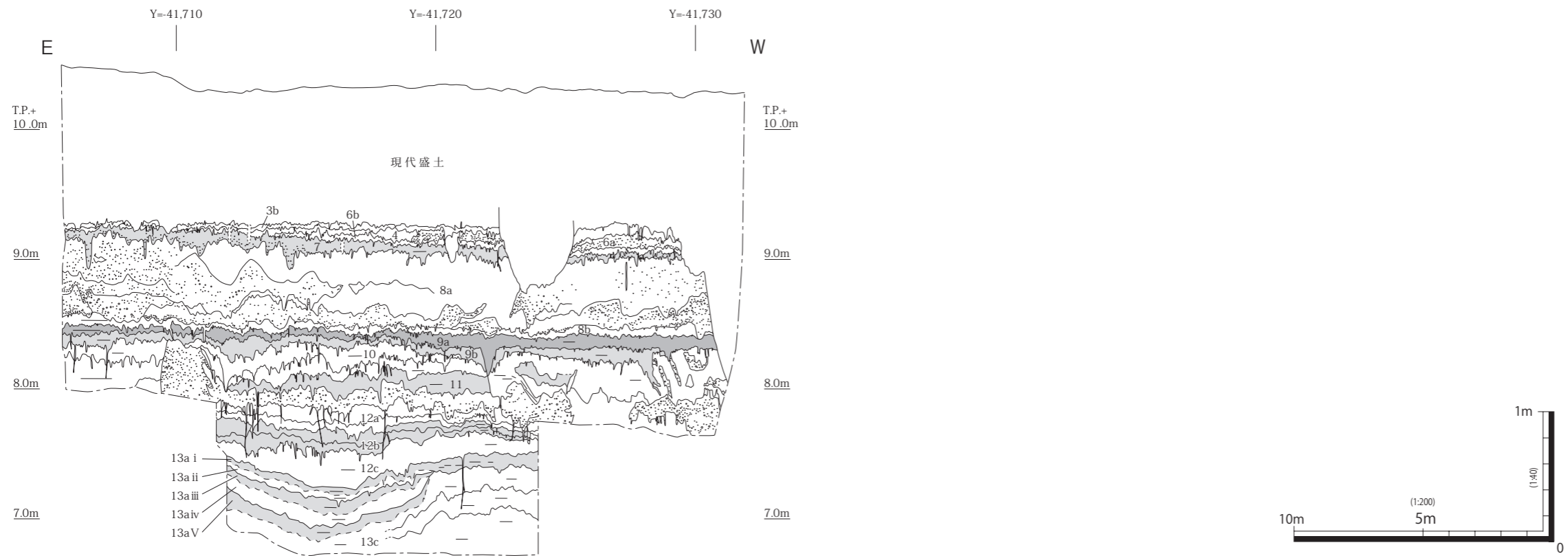
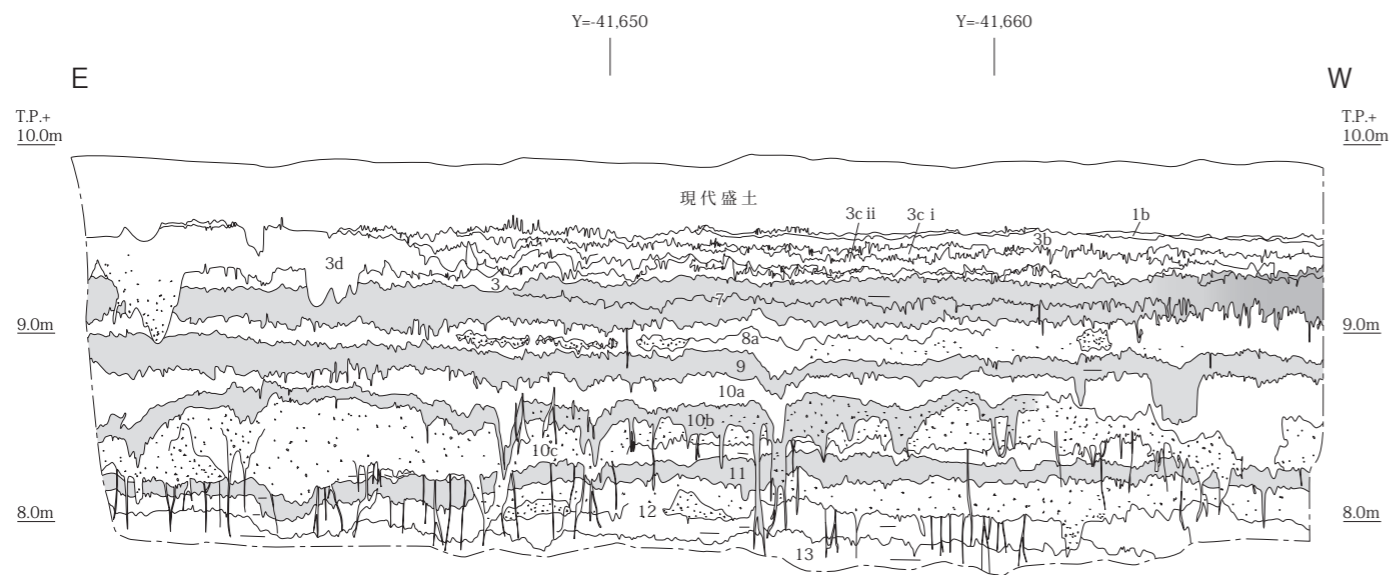
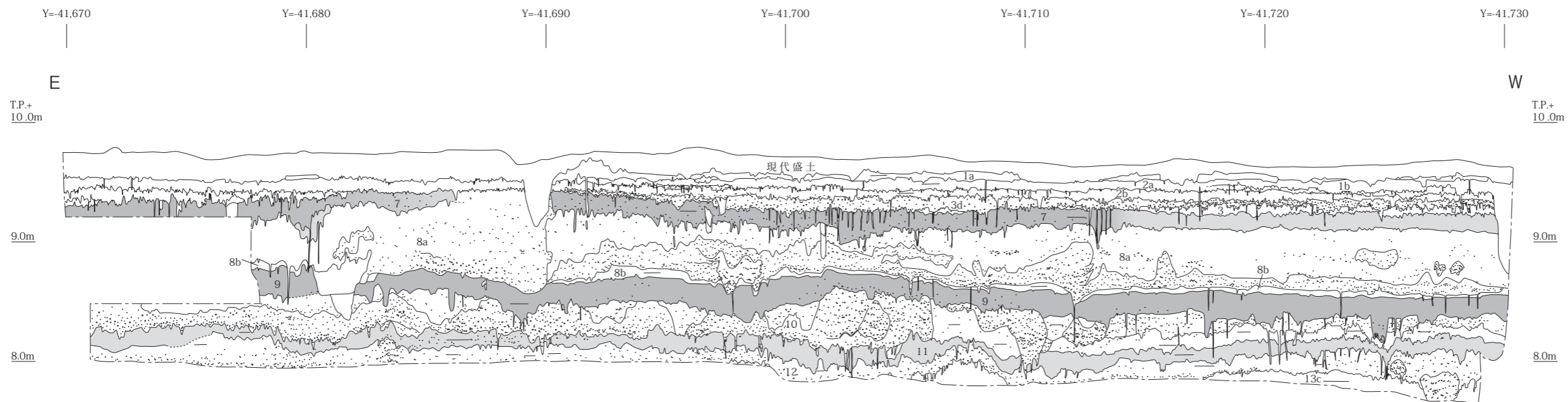


図37 2～4区 南壁断面図

13・14区 東半部 南壁



13・14区 西半部 南壁



第9層のトーンの違いは実際の暗色の濃さを表現したものである。

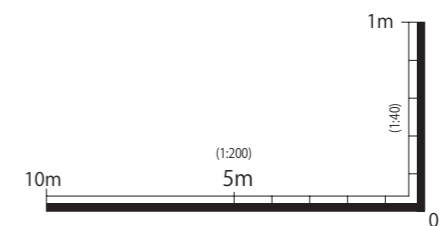


図38 13・14区 南壁断面図

2. 縄文時代の遺構・遺物

2～4区の調査では、大きく6面の遺構面を確認することができた。そのうち、下層部分である第5面と第6面が、縄文時代にあたる時期と考えられる。縄文土器やサヌカイト剥片などが出土しているが、遺物量は非常に少ないことから、それぞれの遺構面の時期を確定することは困難である。

a. 第9層下面（第6面）

調査区全域に分布する暗色帯構成層である、第9層内で形成されたピットや土坑等の遺構を、第9層下面で検出した。全体像は不明であるが、暗色化が強い調査区西部では、遺構・遺物の存在は極めて希薄であった。これに対し、5区の3128流路に近接する4区東部では、縄文時代後期中葉の緑帯文土器やサヌカイトが第9層上部から出土している。

13・14区では、調査範囲が狭いことから、面的な調査をすることができなかったが、調査区西部において、第9層下面と第10層上面で倒木痕の可能性のある落ち込みを確認した。

b. 第9層上面（第5面）

調査区全域に分布する厚い水成層である、第8a層および、調査区の東半途まで分布する第8b層内で形成された流路、偶蹄類等による踏み込みが第9層上面で検出された。第8a層内からは遺物の出土は極めて少なく、第8b層内から出土した縄文時代後期中葉の土器も、第9層内の遺物が踏み込み等による第9層上部の擾乱により巻き上がったものであると推定される。

13・14区では、調査範囲が狭いことから、この遺構面を明確に確認することができなかった。

縄文時代の遺物（図39、図版82）

2～4区においては、縄文時代の暗色帯構成層と考えられる第9層から、縄文時代後期の緑帯文土器を含む、少量の縄文土器およびサヌカイト製石器が出土している。また、古墳時代を中心とする遺物包含層である第7層最下部から、縄文時代晩期の凸帯文土器を検出している。

151は、渦巻き文の中心飾りに2条の縄文帯（沈線＋縄文）を伴う深鉢の胴部である。縄文の原体は、摩耗が激しいため不明であるが、西接する5・6区の3128流路より、極めて類似する文様を持つ深鉢が出土していることから、LR縄文である可能性が高い。152は、並行して横走する2条の縄文帯（沈線＋縄文）を持つ、いわゆる緑帯文土器の破片である。151・152は、その施文された文様から、縄文時代後期中葉の北白川上層式3期～元住吉山式に相当するものと考えられる。

153は、口縁部に刻み目凸帯を有する深鉢の口縁である。154は、胴部に刻み目凸帯を有する深鉢である。その器形および胎土の特徴から、縄文時代晩期後半の長原式に相当するものと考えられる。

サヌカイト製石器は、包含層と第3面で検出された3581流路から出土している。

155・156は、第9層から出土した石鏃で、ともに凹基無茎式である。155は、基部の挟りが深く、先端は鋭く作り出されている。156は、基部の奥に、正面から器体に対して垂直に、微細な加工が施されており、円く凹んでいる。157は、第7層から出土した石鏃で、凹基無茎式である。158・159は、3581流路から出土したものである。古墳時代の遺物とともに出土しており、混入品である。158は、円基式の石鏃である。側縁の二次加工痕は比較的深く、打点も非常に明瞭であり、見かけ上鋸歯縁となる。159は、凸基有茎式の石鏃である。

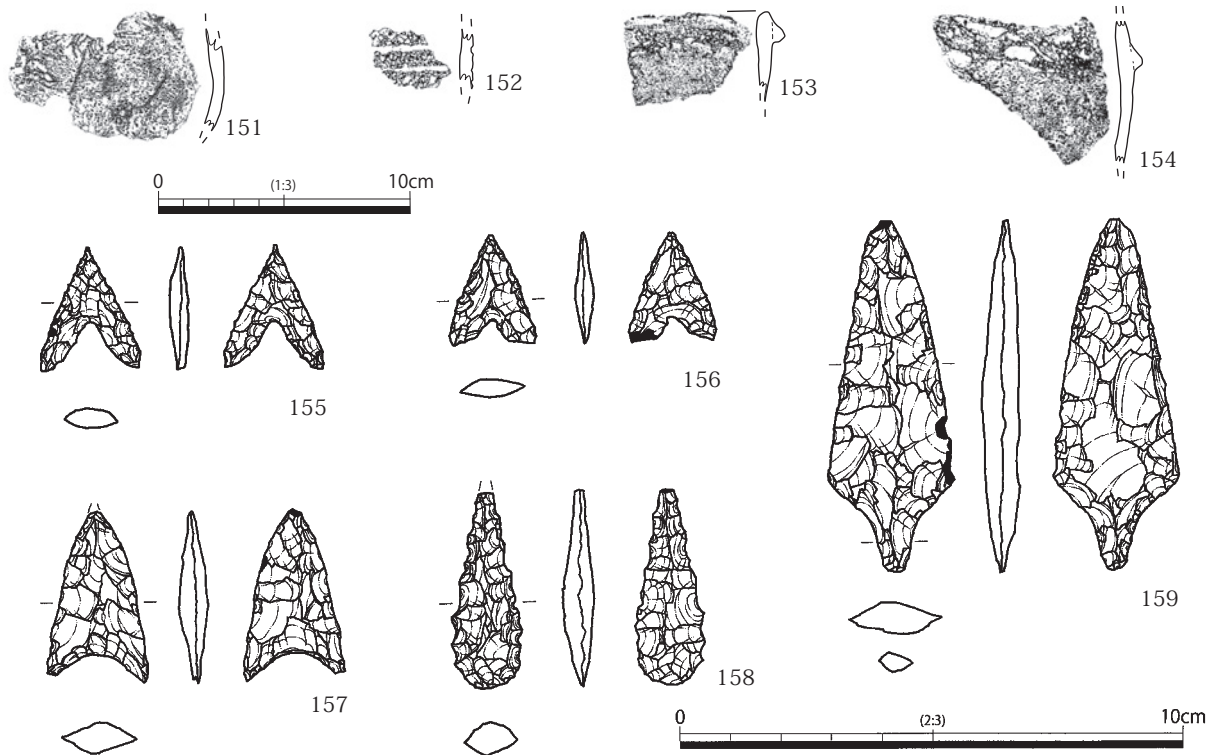


図39 3・4区 出土遺物

3. 古墳時代の遺構・遺物

a. 第7層下面（第4面）

第7層下面で、調査区中央～東部を中心に、同層内で形成された複数の生活面から掘り込まれた、古墳時代の掘立柱建物・ピット群・土坑・溝などの遺構を検出した。3区から13・14区にかけてまとまって分布しており、2区や4区では希薄となっている。なお、当該面からは、TK216前後の須恵器や韓式系土器・土師器等が多数出土している。

1. 掘立柱建物・ピット群

2～4区および13・14区に共通して、調査区の中央部を中心に、ピット群を検出した。そのうち、13・14区のほぼ中央部と3区北寄り、掘立柱建物を4棟復原することができた。3区南側寄りから13・14区、さらに調査区南側に広がる範囲にピットの検出が顕著であるため、この部分に集落を構成していたことが推測できる。調査区が狭いため、これ以上の建物の復原はできなかった。

掘立柱建物31（図40・41、図版10）

13・14区のほぼ中央部南寄りで検出されたものである。交差部分が攪乱のため不明であるが、直線上に並ぶ3024～3026ピットと、3022・3023ピットの軸線が直交していることから、掘立柱建物の柱穴と判断した。調査区外の南側に広がることから、全体規模は不明である。桁行3間以上、梁行2間で、主軸はN-46°-Eである。柱間距離は、桁行が1.5m、梁行が1.8m前後を測る。柱穴掘方は、円形や楕円形を呈しており、径40～50cm、検出面からの深さは30～40cmである。掘立柱建物31の柱穴とみられるピットは5基検出されているが、そのうち3022～3024ピットで、径12～15cmの柱痕跡を確認することができた。

遺物は、3023ピットから土師器高杯脚部、3022と3025ピットから土師器の破片が出土している。

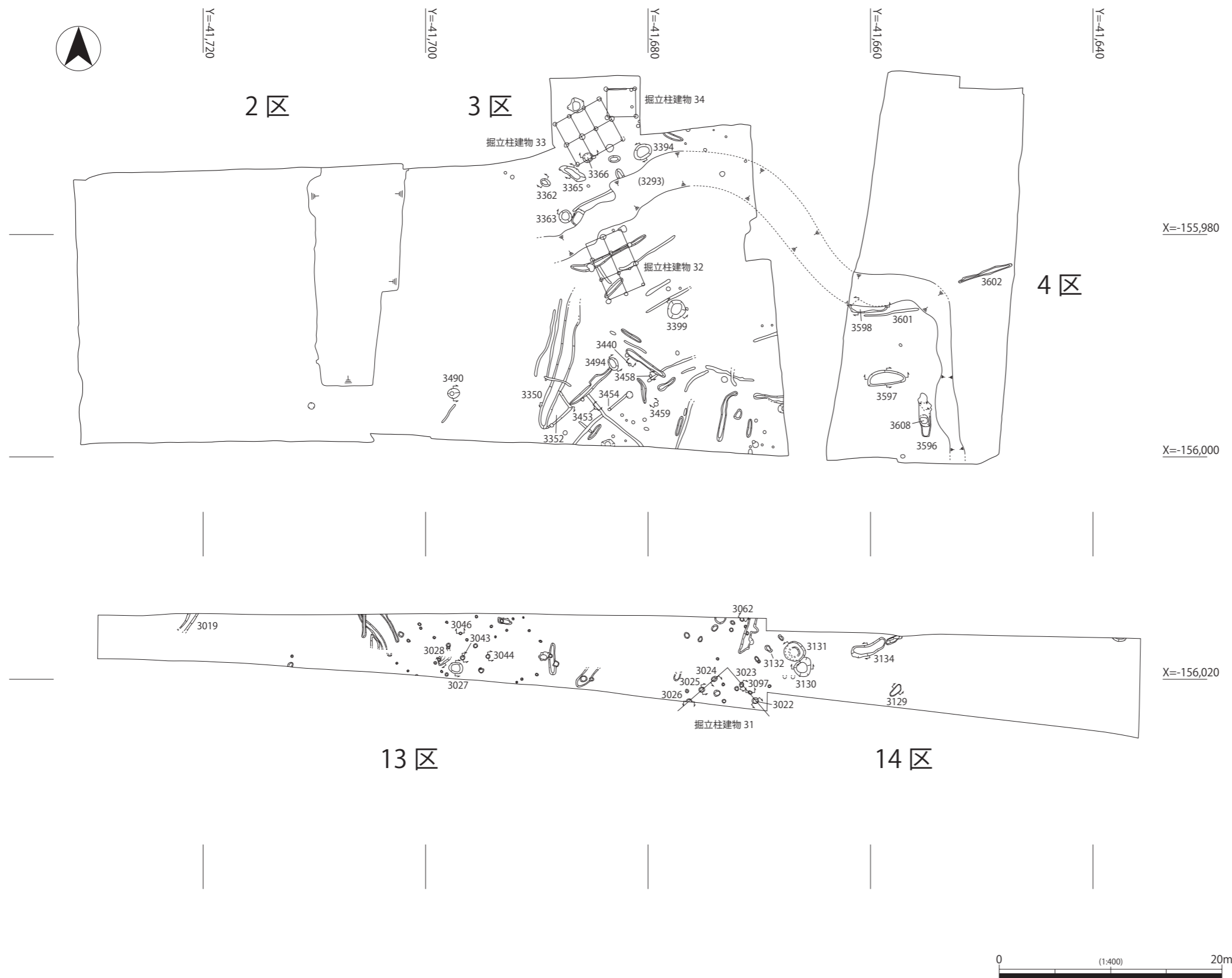


图40 2~4区、13・14区 第4面遺構平面図

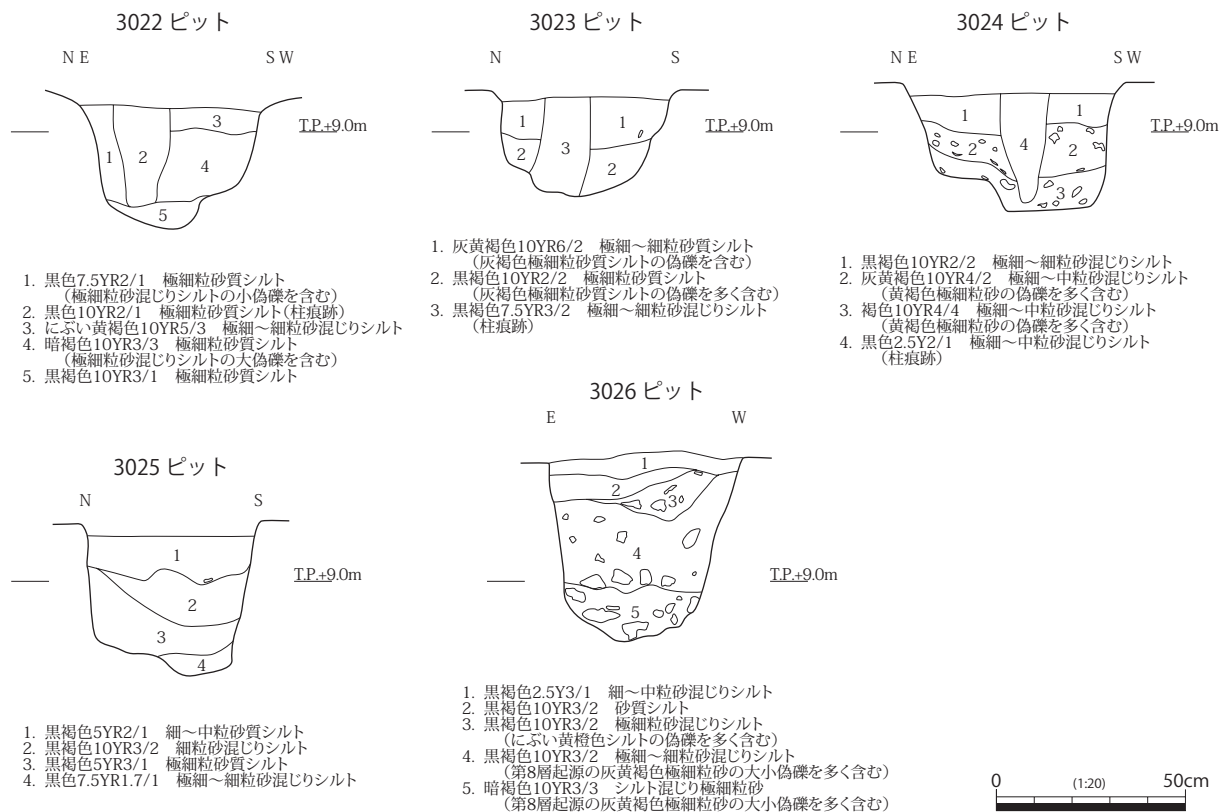


図41 掘立柱建物31 柱穴断面図

掘立柱建物32 (図40・42、図版7)

3区のほぼ中央部で検出されたものである。3361・3480～3484・3488・3489・3491～3493ピットで構成される。北側で第3面の3293溝と重複しているが、周囲に他のピットはみられないことから、2間×3間の総柱建物と考えられる。主軸方向は、N-22°-Wである。柱間距離は、桁行が5.5m、梁行が3.5m前後を測る。柱穴掘方は、円形や楕円形を呈しており、径30～50cm、検出面からの深さは20～40cmである。掘立柱建物32の柱穴とみられるピットは11基検出されており、ほとんどが確認されていることになる。柱痕跡は検出されておらず、埋土は、主に第8層起源のシルト～極細粒砂偽礫を含むシルトからなる。

掘立柱建物33 (図40・43、図版7)

3区のほぼ中央北端部で検出されたものである。3368・3430・3433・3560～3562・3564～3567・3570・3627ピットで構成される。掘立柱建物32の北に位置しており、約6m離れている。東側で掘立柱建物34と重複しているが、周囲に他のピットはみられないことから、2間×3間の総柱建物と考えられる。主軸方向は、N-62°-Eである。柱間距離は、桁行が4.7m、梁行が4.3m前後を測る。柱間は、桁行より梁行の方が長い。柱穴掘方は、円形や楕円形を呈しており、径30～50cm、検出面からの深さは10～25cmである。やや規模の違いはあるが、掘立柱建物33の柱穴とみられるピットはすべて検出されている。掘立柱建物33の柱穴とみられるピットのうち、3560ピットで柱痕跡を確認することができた。掘立柱建物32とは、主軸方向は異なるものの、ほぼ同じ方向で建てられたものということができ、関連性が考えられる。

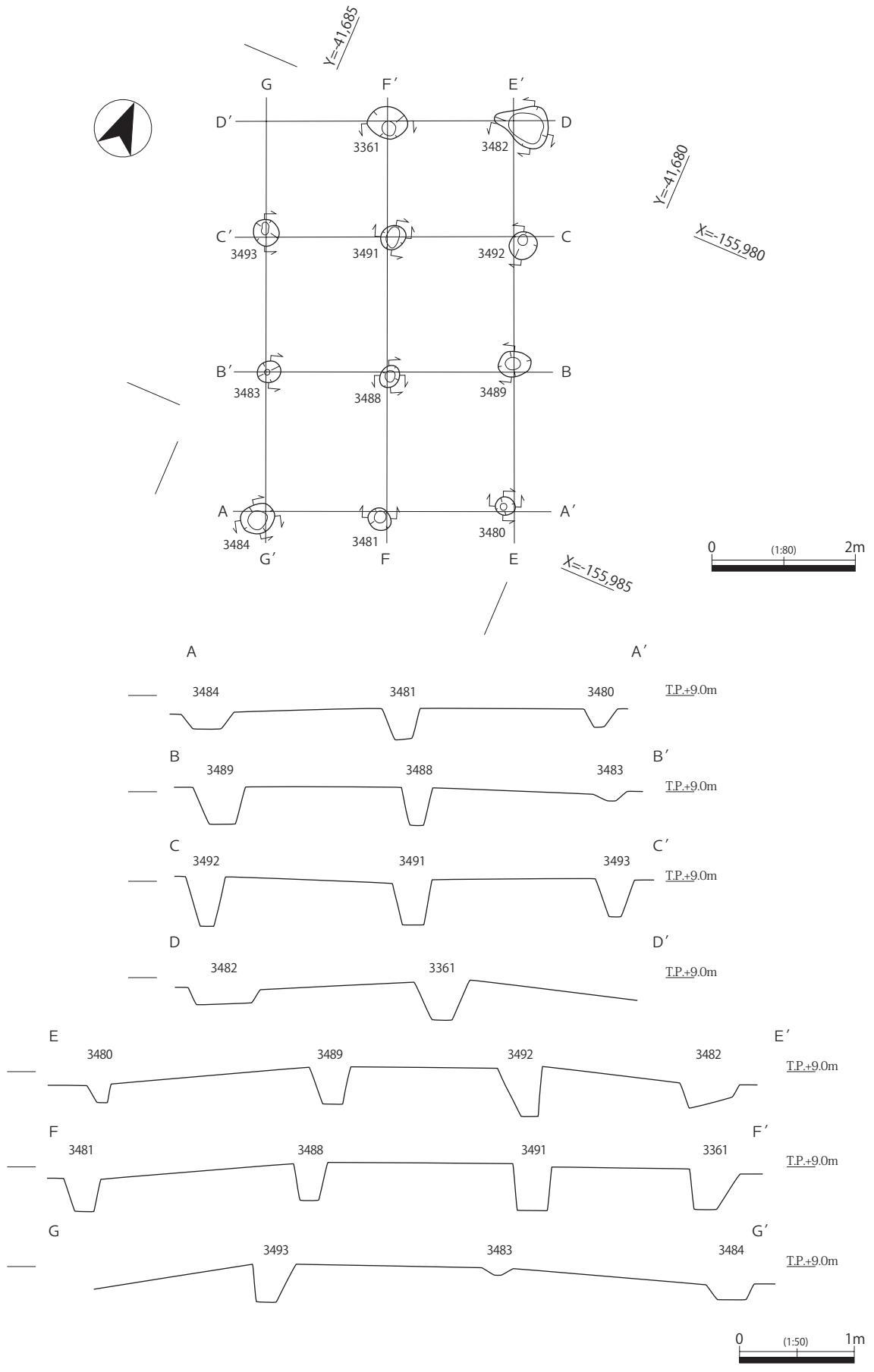


图42 掘立柱建物32 平・断面图

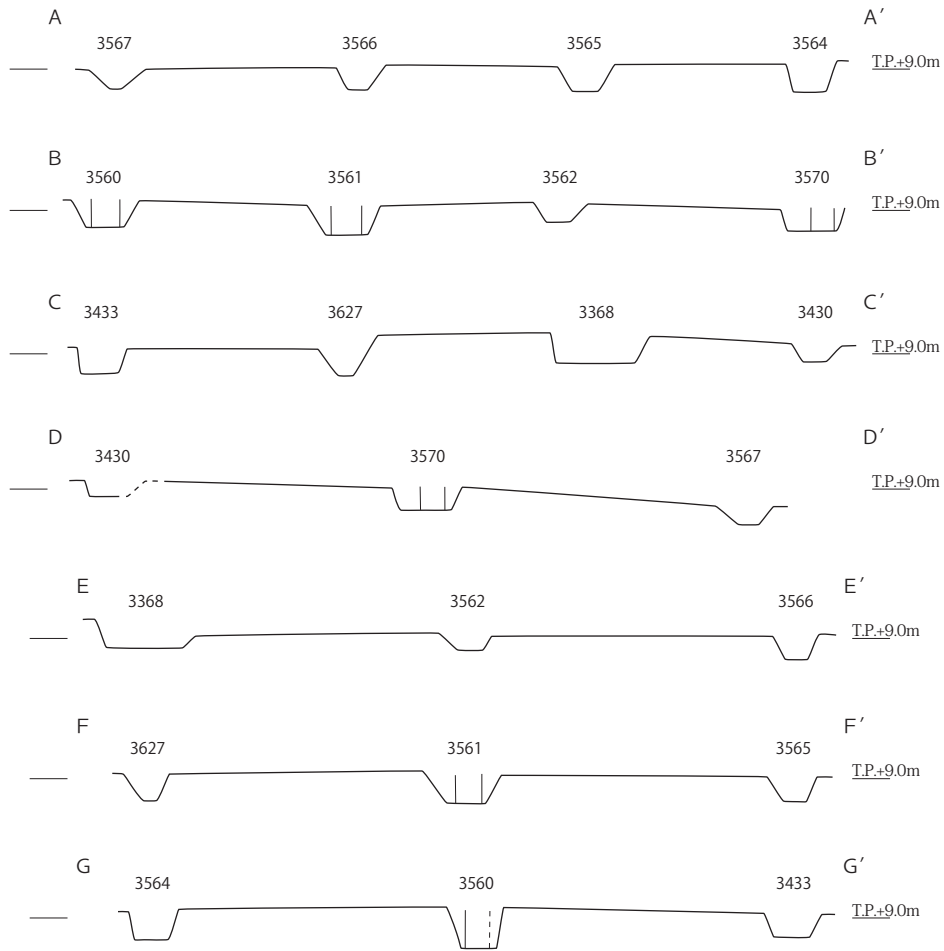
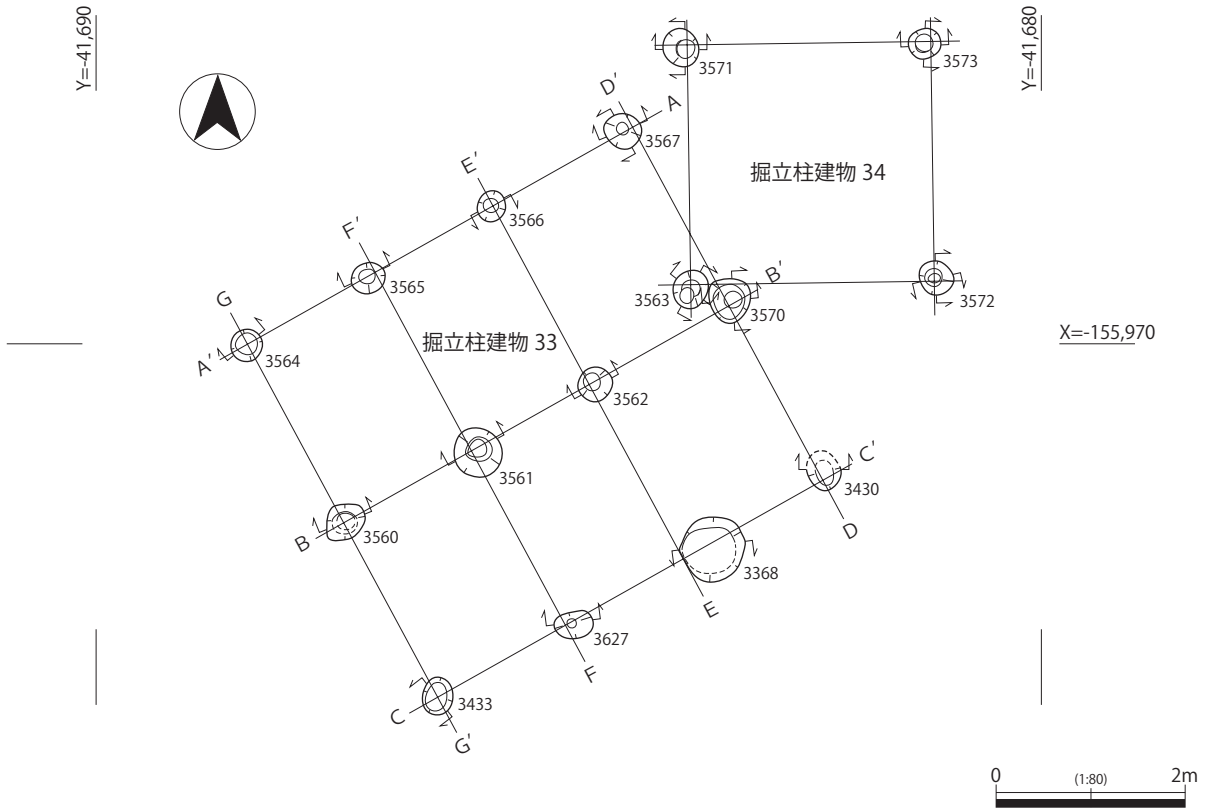


图43 掘立柱建物33·34 平·断面图

掘立柱建物34 (図40・43、図版7)

3区のほぼ中央北端部で検出されたものである。掘立柱建物33と重複している。3563・3571～3573ピットで構成される。現状では、主軸がN-0°の1間×1間分が確認されたのみであるが、調査区端部に位置する事から、調査区外まで広がって、規模が大きくなる可能性が考えられる。柱穴掘方は、ほぼ円形を呈しており、径30cm程度、検出面からの深さは10～30cmである。掘立柱建物34の柱穴とみられるピットのうち、3572・3573ピットで、柱痕跡を確認することが出来た。なお、掘立柱建物34は、掘立柱建物33と重複している事から、これらのピット群にも時間的差異があるものと考えられる。主軸方向の違いから、掘立柱建物32・33とは明確に時期差があるといえる。

ピット群

2～4区では、掘立柱建物が復原された3区北寄り部分と、やや離れた南寄り部分でピット群を検出している。このうち、南側のピット群では掘立柱建物が復原できなかったが、柱痕跡が確認されたピットがみられる。本来は、復原された掘立柱建物の棟数以上の建物が存在したものと考えられる。

ピットからは、土師器や須恵器の小片が出土しているが、形を復原できるものや図化できるものはみられない。

3458ピット (図40)

3区南寄り部分のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約30cm、深さ20cmを測る。埋土が大きく2層に分かれており、1層は褐灰色細～極細粒砂混じりシルトからなり、偽礫(シルト)・炭化物を含む。柱痕跡の可能性はある。2層は、黒褐色細～極細粒砂混じりシルトからなる。

3440ピット (図40)

3区南寄り部分のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約30cm、深さ30cmを測る。埋土が大きく2層に分かれており、1層は、黒褐色粘土混じりシルト(大小偽礫)からなる。第8層起源の灰色極細粒砂を多く含む。2層は、黒褐色極細粒砂混じりシルトからなる。

下部に柱根と思われる木片が残っている。

3453ピット (図40)

3区南寄り部分のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約30cm、深さ25cmを測る。埋土が大きく4層に分かれており、1層は黒褐色中～極細粒砂混じりシルト(小偽礫・極細粒砂)からなる。焼土や炭化物を含む。2層は、黒褐色極細粒砂からなる。3層は、黒褐色極細粒砂質シルトからなり、小偽礫(シルト)を含む。4層は、黒褐色細～極細粒砂混じりシルトからなり、柱痕跡の可能性はある。

3454ピット (図40)

3区南寄り部分のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約45cm、深さ30cmを測る。埋土が大きく2層に分かれており、1層は黒褐色細粒砂混じりシルトからなる。土器や炭化物を含む。2層は、黒褐色極細粒砂混じりシルトからなり、偽礫(シルト)を多く含む。

3459ピット (図40)

3区南寄り部分のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約30cm、深さ30cmを測る。埋土が大きく2層に分かれており、1層は灰黄褐色中～極細粒砂からなる。2層は、褐灰色砂混じりシルト(大小偽礫(極細粒砂)からなり、炭化物を含む。

13・14区中央部では、約20mの間隔をあけて大きく2群に分かれるピット群を検出している。このうち、西側のピット群にあたる3043・3044・3046ピットと東側のピット群にあたる3062・3097ピットは、掘立柱建物を復原することはできなかったが、柱痕跡が確認されている。東側のピット群では、掘立柱建物31が復原されている。これらのピットの多くから土器片が出土している。

3043ピット (図40・44)

13・14区西側のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約40cm、深さ20cmを測る。埋土は、大きく3層に分かれる。1層は、暗灰黄色極細～細粒砂混じりシルトからなり、土器片や第8層起源の極細粒砂偽礫を多く含む。2層は、赤黒色極細粒砂からなる。3層は、黒褐色極細粒砂質シルトからなる。第8層起源の極細粒砂の小偽礫を含み、柱痕跡とみられる。

3044ピット (図40・44)

13・14区西側のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約35cm、深さ30cmを測る。埋土は、大きく3層に分かれる。1層は、灰黄褐色極細粒砂混じりシルトからなり、部分的に黄灰色シルトと黒色シルトが互層をなしている。2層は、褐灰色極細粒砂質シルトからなる。3層は、黒褐色極細～細粒砂混じりシルトからなり、柱痕跡とみられる。

3046ピット (図40・44)

13・14区西側のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約30cm、深さ25cmを測る。埋土は、大きく2層に分かれる。1層は、灰黄褐色極細～細粒砂混じりシルトからなり、シルトの小偽礫を含む。2層は、黒褐色極細粒砂混じりシルトからなり、柱痕跡とみられる。

3062ピット (図40・44)

13・14区東側のピット群に属する。平面形は円形を呈しており、径約40cm、深さ45cmを測る。埋土は、大きく2層に分かれる。1層は黒褐色極細粒質シルトからなり、第8層起源の極細粒砂の偽礫を多く含む。2層は極細粒砂の大小偽礫を含む、黒褐色砂混じりシルトからなり、柱痕跡とみられる。

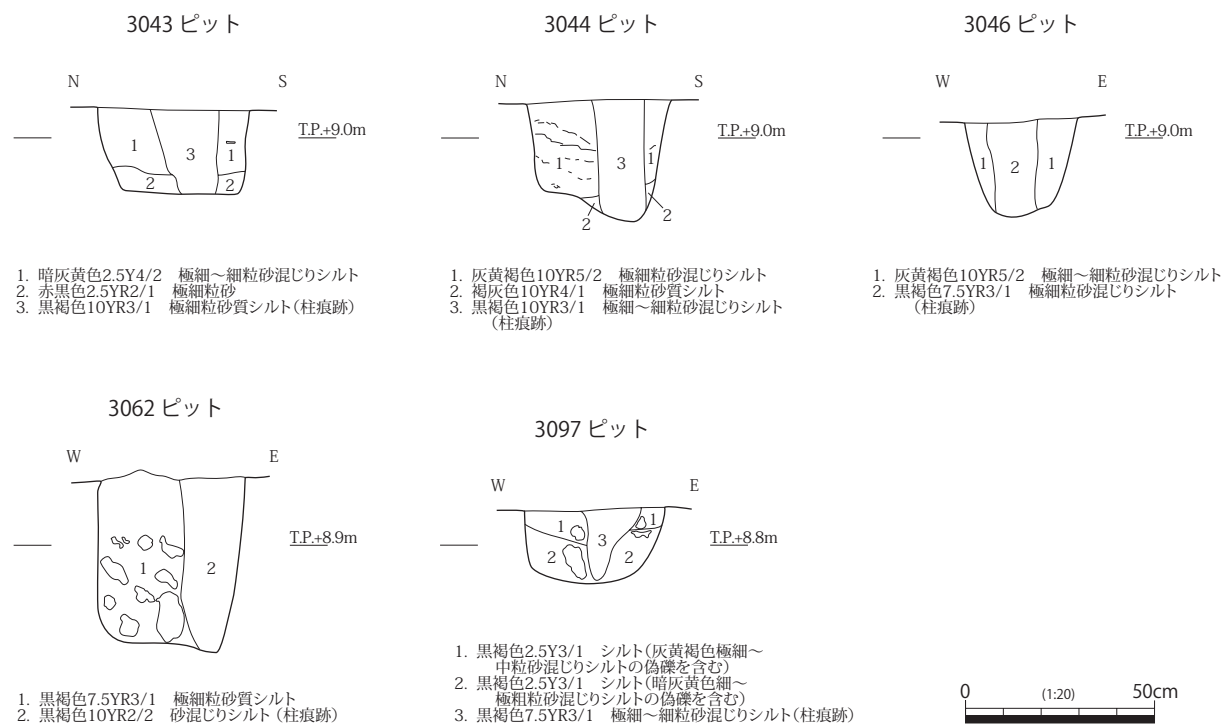


図44 13・14区ピット 断面図

3097ピット (図40・44)

13・14区東側のピット群に属する。掘立柱建物31と重複するが、前後関係は不明である。平面形は円形を呈しており、径約35cm、深さ20cmを測る。埋土は、大きく3層に分かれる。1層は、黒褐色シルトからなり、灰黄褐色極細～中粒砂混じりシルトの偽礫を含む。2層は、黒褐色シルトからなり、暗灰黄色細～極粗粒砂混じりシルトの偽礫を含む。3層は、黒褐色細～極細粒砂混じりシルトからなり、柱痕跡とみられる。

2. 土坑

2～4区では、調査区中央部から東部(3・4区部分)で、埋土に土器や炭化物、焼土を含む多くの土坑を検出した。3区では、ほぼ調査区全体に分布しているが、4区では南西部のみで検出されている。2区では検出されていない。

3596土坑 (図40・45・46、図版7・52・53)

4区南部に位置しており、平面形は長軸3.0～4.0m、横軸1.0～1.5mの長楕円形を呈する。上部を削平されており、深さ約10cm分が残存しているのみである。3608土坑と重複しており、3608土坑を切っている。底部のみ残存しており、埋土は黒褐色極細粒シルトからなり、土器のほか炭化物・焼土を多く含む。ほぼ長軸が南北方向であり、北半部は一部攪乱をうけている。

南半部で、遺物が多く出土しており、畿内第V様式系の甕や庄内式期～布留式期にかけての甕、高杯等がみられる。

160は、須恵器甕である。口縁部が外反し、端部を丸くおさめ直下に凸帯をめぐらす。体部外面はタタキ調整の後、ナデによる調整を行い、内面は指による強い縦方向のナデにより当て具痕をナデ消している。その器形的特徴から、TK216前後に相当すると考えられる。166は、脚柱部に3方向の透かし孔を伴う土師器高杯脚部である。脚柱部内面はケズリ調整を行い、外面はミガキ調整を行う。布留式IV期に相当する精製の高杯と考えられる。167は、手づくねの鉢である。165は、口縁端部をわずかに外に引き出した土師器鉢または杯である。161は、土師器甕である。体部は内外面ともに磨耗が激しく調整は不明である。把手は舌状に反り上がる形状で、底部の穿孔は円形である。164は、土師器甕である。

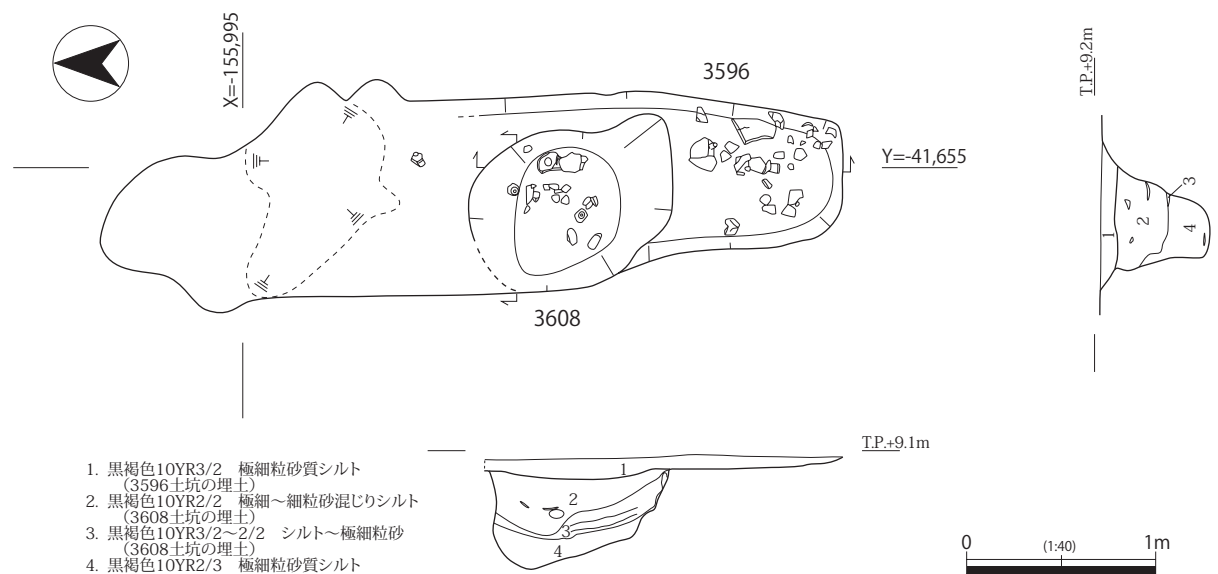


図45 3596・3608土坑 平・断面図

162は、滑石製有孔円盤である。現況では、ほぼ中央部に孔が一つ穿たれているが、その位置から本来は孔を2つ穿つ双孔円盤であったと考えられる。163は、赤色顔料の付着した石杵である。元素分析の結果、石杵に付着している赤色顔料は水銀朱であることが判明した。

3608土坑 (図40・45・46、図版7・51)

4区南部に位置しており、3596土坑に切られている。長軸0.95m、短軸0.5m、深さ約0.5mの楕円形を呈する。埋土は3層に分けられる。上層は、黒褐色細～極細粒砂混じりシルトからなり土器や焼土が多く含まれる。中層は黒褐色極細粒砂～シルトからなり、ラミナが観察されることから自然堆積と考えられる。下層は黒褐色極細粒砂質シルトである。

本調査区では、弥生時代の遺物の出土は希薄であった。しかしながら、3608土坑では、上層から畿内第V様式系甕や土師器等が、下層からは畿内第V様式甕が出土している。169は、体部下半から底部にかけて遺存する畿内第V様式の甕である。外面調整は連続する右上がりのタタキであり、内面調整はハケである。底部内面のハケ調整が蜘蛛の巣状にならないことから、畿内第V様式でもやや新しいもの

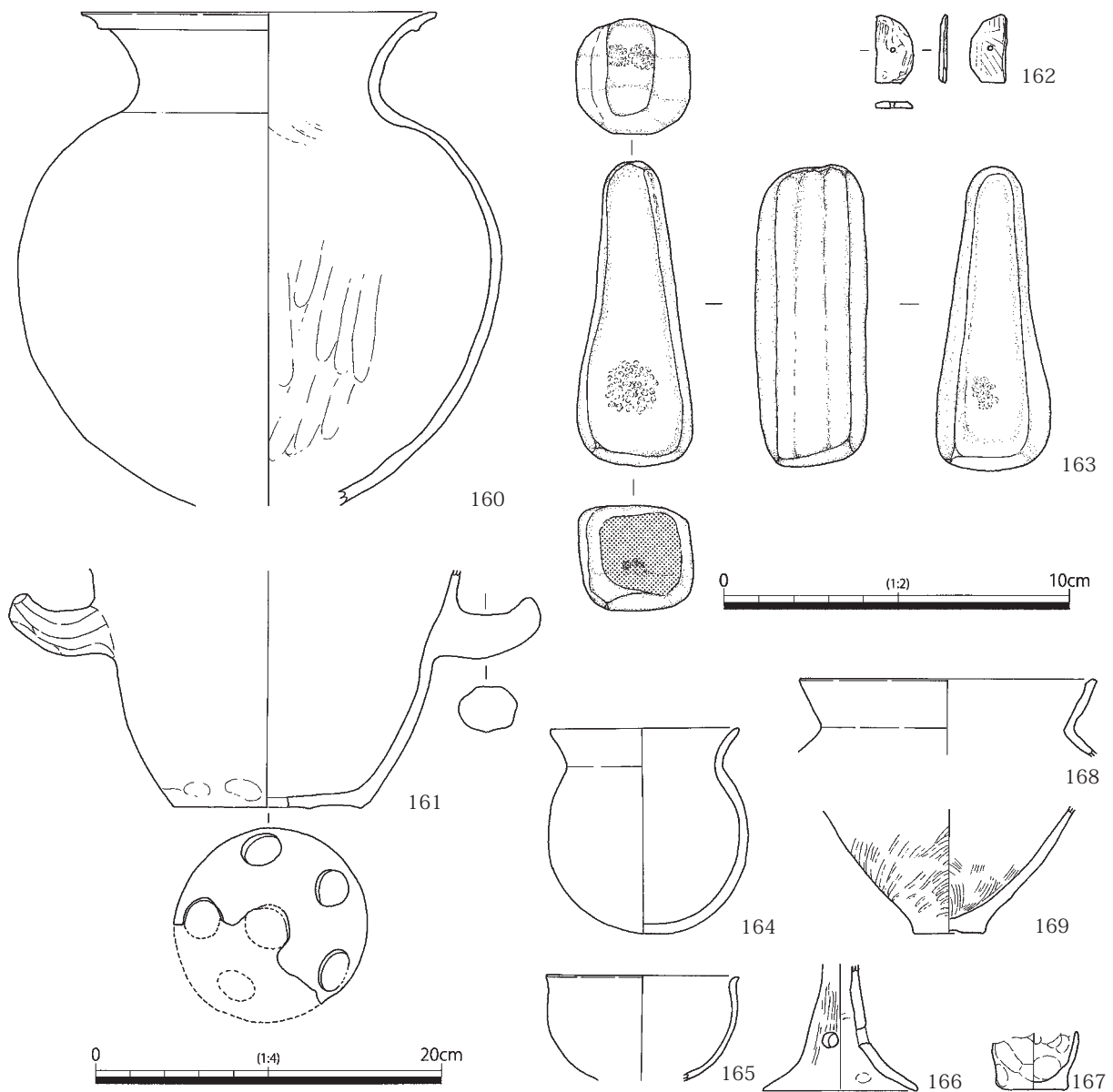


図46 3596・3597・3608土坑 出土遺物

に属すると考えられる。

3597土坑 (図40・46、図版7)

4区南西部に位置しており、平面形は長軸3.0~4.0m、横軸1.0~1.5mの長楕円形を呈する。上部を削平されており、底部のみ残存している。埋土は、黒褐色砂質シルトからなり、土師器や炭化物を多く含む上層と、灰黄褐色極細粒砂質シルトからなる下層に分けられる。下層は、加工時堆積層と考えられる第8層起源の偽礫を含む。ほぼ長軸が東西方向であり、3596土坑と直交する。

土師器が出土した。168は、土師器甕口縁である。口縁端部が平たく、口縁がやや内弯して肥厚することから、布留式甕の可能性が考えられる。

3598土坑 (図40)

4区中央部西寄りに位置しているが、北半部を削平されているため、全体形は不明である。3597土坑とほぼ同規模の土坑と考えられる。埋土は、黒褐色極細~細粒砂からなり、第8層起源の偽礫を含む。土器や炭化物・焼土を多く含む。ほぼ長軸が東西方向であり、約6m南に位置する3597土坑と平行する。図化できるような遺物は出土していない。

4区で検出された3596~3598土坑は、長楕円形を呈しており、いずれも上部の削平により、深さ約10cm分が残存しているのみである。ただ、位置関係を見ると、各々の土坑の長軸方向が平行または直交していることから、なんらかの関連性がある可能性も考えられる。

3362土坑 (図40・47・48、図版51)

3区北端部に位置しており、長軸約1.5m、短軸約0.7m、深さ0.3~0.5mの楕円形の土坑である。

埋土は3層に細分され、1層は黒褐色砂混じりシルト、2層は黒褐色極細粒砂質シルト、3層は黒褐色粘土からなる。そのうち、焼土や偽礫を含む人為的な埋土からは、小型器台や庄内式甕をはじめとする土師器が出土している。

175は、高杯脚部である。脚柱部内面にシボリ目が残り、脚柱部と裾部の境目に指オサエを行っている。

3363土坑 (図40・47・48、図版52)

3区北端部に位置しており、3362土坑の南約3mで近接している。平面形は円形を呈しており、規

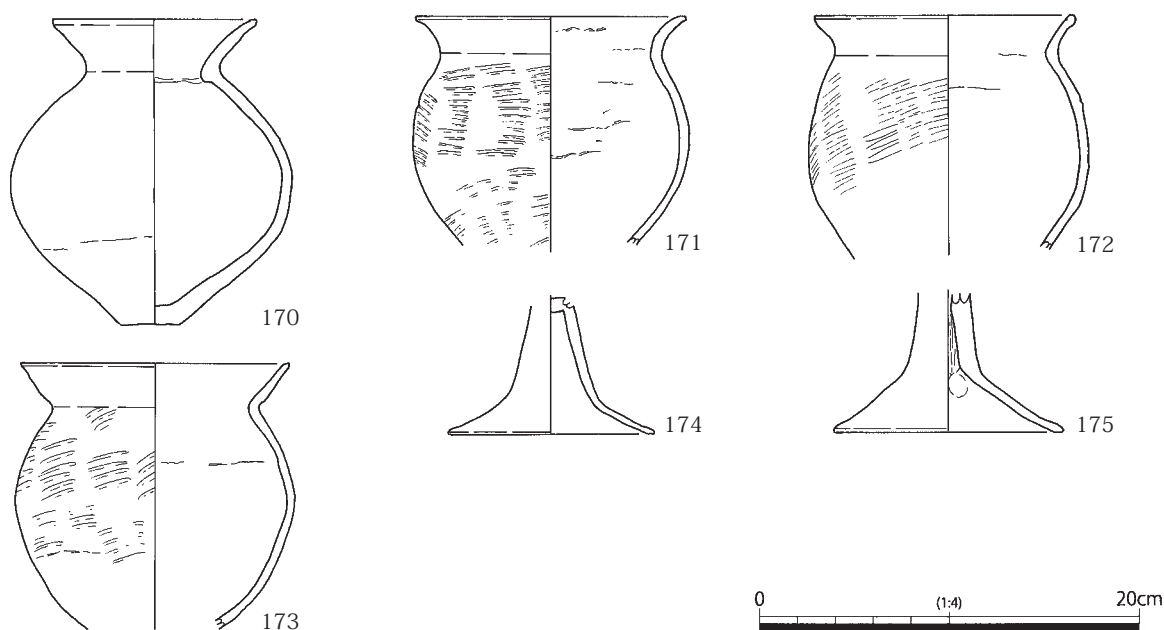
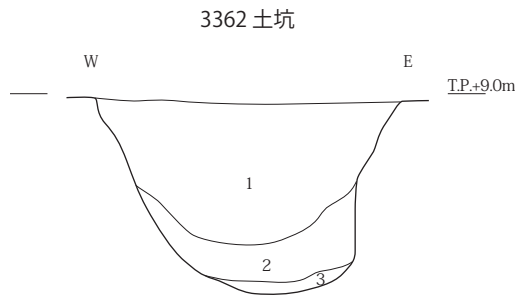
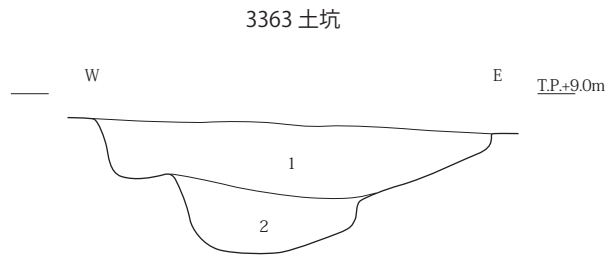


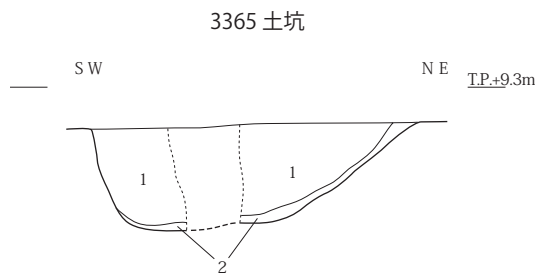
図47 3362・3363・3366土坑 出土遺物



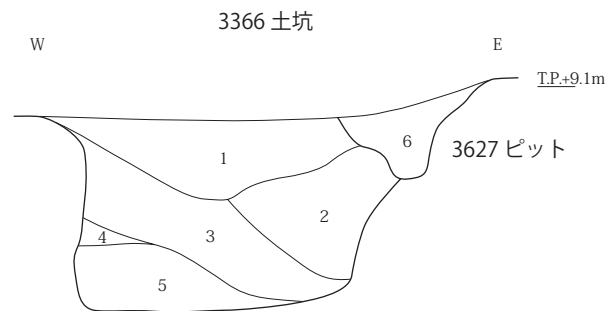
1. 黒褐色10YR2/2 砂混じりシルト(焼土含む)
2. 黒褐色10YR3/1 極細粒砂質シルト(小偽礫(シルト)含む)
3. 黒褐色2.5Y3/1 粘土



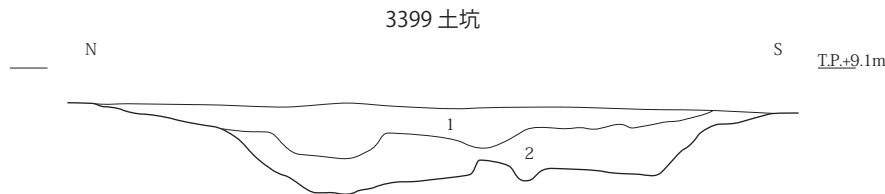
1. 黒褐色10YR3/1 極細～中粒砂(焼土・炭化物・小偽礫(極細粒砂)を含む)
2. 黒褐色2.5Y3/1 粘土



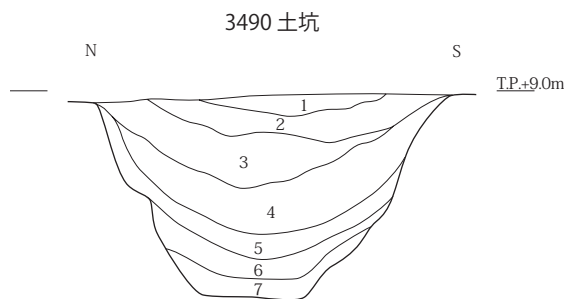
1. 黒褐色10YR2/2 砂質シルト(焼土・小偽礫を含む)
2. 黒褐色10YR3/1 極細粒砂質シルト



1. 黒褐色10YR3/2 礫混じり砂質シルト(焼土・土器を多く含む)
2. 暗褐色10YR3/3 砂
3. 黒色10YR2/1 砂礫混じりシルト(焼土を含む)
4. 灰色5Y5/1 極細粒砂
5. 黒色2.5Y2/1 極細～細粒砂混じりシルト
6. 褐灰色10YR4/1 礫混じり砂質シルト(3627ピット埋土)



1. 黒色10YR2/1 砂混じりシルト
2. 黒褐色2.5Y3/1 砂混じりシルト(土器・炭化物・大小偽礫(シルト)を含む)



1. 褐灰色10YR4/1 シルト
2. 黒褐色10YR3/1 砂混じりシルト(焼土を含む)
3. 褐灰色10YR4/1 砂混じりシルト
4. 黒色10YR2/1 砂質シルト
5. 褐灰色10YR4/1 シルト
6. 黄灰色2.5Y4/1 極細粒砂
7. 黒褐色10YR3/1 シルト混じり粘土



1. 黒褐色7.5YR3/1 極細粒砂混じりシルト(土器・炭化物・偽礫(8層起源のシルト～細粒砂)を含む)
2. 黒色10YR2/1 シルト混じり粘土(土器・炭化物を含む)
3. 黒褐色10YR3/1 シルト混じり粘土(偽礫(8層起源のシルト～細粒砂)を多く含む)



図48 2～4区土坑 断面図

楕は径約1.0m、深さ0.35mである。埋土は、2層に分けられる。1層は黒褐色中～極細粒砂からなり、焼土・炭化物・少偽礫（極細粒砂）を含む。2層は黒褐色粘土である。

土師器が出土した。174は、高杯脚部である。磨耗が激しく調整は不明瞭であるが、脚柱部内面をケズリにより調整している。

3365土坑（図40・48）

3区北端部に位置しており、掘立柱建物32の南西部とほぼ接している。長軸約3m、短軸約1m、深さ約0.2～0.3mの長楕円形の土坑である。埋土は、2層に分けられる。1層は黒褐色砂質シルトからなり、焼土・少偽礫を含む。2層は黒褐色極細粒砂質シルトである。図化できるような遺物は出土していない。

3366土坑（図40・47・48、図版51）

3区北端部に位置しており、掘立柱建物33の柱穴である3627ピットによって切られている。平面形は円形を呈しており、規模は径約0.9m、深さ0.5mである。埋土は、土器や焼土を含む人為的な埋土である1～3層、機能時の水成堆積層と考えられる4・5層の5層に分けられる。1層は黒褐色礫混じり砂質シルト（焼土・土器を多く含む。）、2層は暗褐色砂、3層は黒色砂礫混じりシルト（焼土を含む。）からなる。4層は灰色極細粒砂、5層は黒色細～極細粒砂混じりシルトである。

遺物は、畿内第V様式系甕や壺（図47-170）が出土している。171～173は、畿内第V様式系甕である。体部は丸みを帯び、外面には右上がりの粗いタタキ、内面にはナデまたはケズリ後ナデ調整を施す。実171・172の口頸部の屈曲は弱い、173の口頸部の屈曲は緩やかな「く」の字である。

その他の土坑（図40・48）

その他にも、3区の東半部を中心に土坑が分布しているが、3368・3369・3399・3435・3490・3494・3579土坑は、おおむね径1～2mの円形を呈している。埋土に土器や炭化物、偽礫を含むが、図化できる遺物は出土していない。

13・14区中央部では、大きく2群に分かれるピット群を検出しているが、この遺構群に土坑も含まれており、土坑の分布はピット群の分布と重なっている。

3129土坑（図40・49・50、図版10・52）

13・14区東側の遺構群のさらに東に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長軸約1.5m、短軸約0.7m、深さ0.3～0.5mである。埋土は3層に分けられ、1層は砂の小偽礫を少量含む、黒褐色砂混じりシルト、2層は黒褐色砂質シルトからなる。3層は灰黄褐色砂質シルトからなる。細粒砂の大小偽礫や土器を多く含み、人為的な埋め戻し土とみられる。

3層から出土した土器には、庄内式の甕や小型器台・高杯、畿内第V様式系の甕などがある。

177は、畿内第V様式系甕である。口縁は一旦、立ち上がった後、外反し、端部を外方に引き出す。外面のタタキ調整は連続タタキで、体部も丸みを帯びている。器形や胎土から搬入品の可能性も考えられる。178は、庄内式甕である。口縁端部が上方に摘みあげられ、口頸部が「く」の字に屈曲し、最大径が体部中央にくる。外面体部上半は細かいタタキの後、ハケ調整が行われており、庄内式Ⅲ～Ⅳ期に相当すると考えられる。176は、三方透かしの小型器台である。浅く小さな杯部から、庄内式Ⅳ期～布留式Ⅱ期に相当すると考えられる。

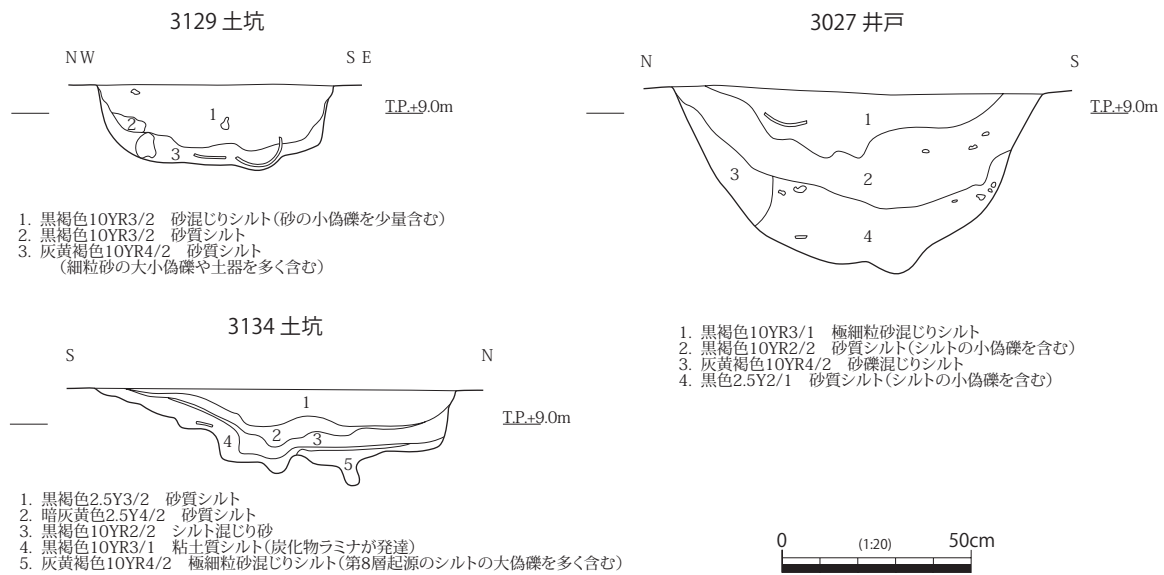


図49 3129・3134土坑、3027井戸 断面図

3134土坑 (図40・49・50、図版10)

13・14区東側の遺構群のさらに東で、3129土坑の北側に位置する。東端は不定形な3135土坑を切っている。平面形は長楕円形を呈しており、長軸約3m、短軸約1m、深さ0.2~0.3mである。埋土は5層に細分され、1層は黒褐色砂質シルト、2層は暗灰黄色砂質シルト、3層は黒褐色シルト混じり砂、4層は黒褐色粘土質シルトからなる。このうち、4層は炭化物ラミナが発達しており、滞水の状態で堆積したものと考えられる。5層は第8層起源のシルトの大偽礫を多く含む、灰黄褐色極細粒砂混じりシルトからなり、加工時堆積層とみられる。

1~4層から、高杯・移動式竈などの土師器が出土した。181は、椀形高杯の杯部である。化粧掛けが施され、杯底部には脚部との接合時の棒状工具による突き刺し痕がある。182は、複合口縁壺の口縁部である。口縁は「く」の字に屈曲した後、内傾する。器形および結晶片岩を含む胎土から、東阿波型の大型複合口縁壺と考えられる。

3028土坑 (図40・50)

13・14区西側の遺構群に属する。一部を攪乱で切られているが、長径1.3m以上、短径0.6m、深さ0.1m程度の楕円形を呈している。埋土は、オリーブ黒色極細粒砂混じりシルトからなり、土師器高杯の脚部が出土した。

土師器が出土した。179は、口縁が大きく外に開く壺の口縁である。

3132土坑 (図40・50、図版10)

13・14区東側の遺構群に属する。3131井戸の西側に位置する。平面形は、南北方向に延びる不整楕円形を呈しており、長軸約0.8m、短軸約0.5m、深さ約25cmを測る。埋土は、黒色砂質シルトが主体で、第8層起源の偽礫を含む。

土師器が出土した。180は、複合口縁壺口縁部である。弱く屈曲し、外反する口縁は竹管文を施した円形浮文により加飾されている。器形および加飾の特徴から、庄内式に相当すると考えられる。

3. 井戸

13・14区の狭い範囲で、複数の井戸を検出した。中央部では、大きく2群に分かれる遺構群を検出

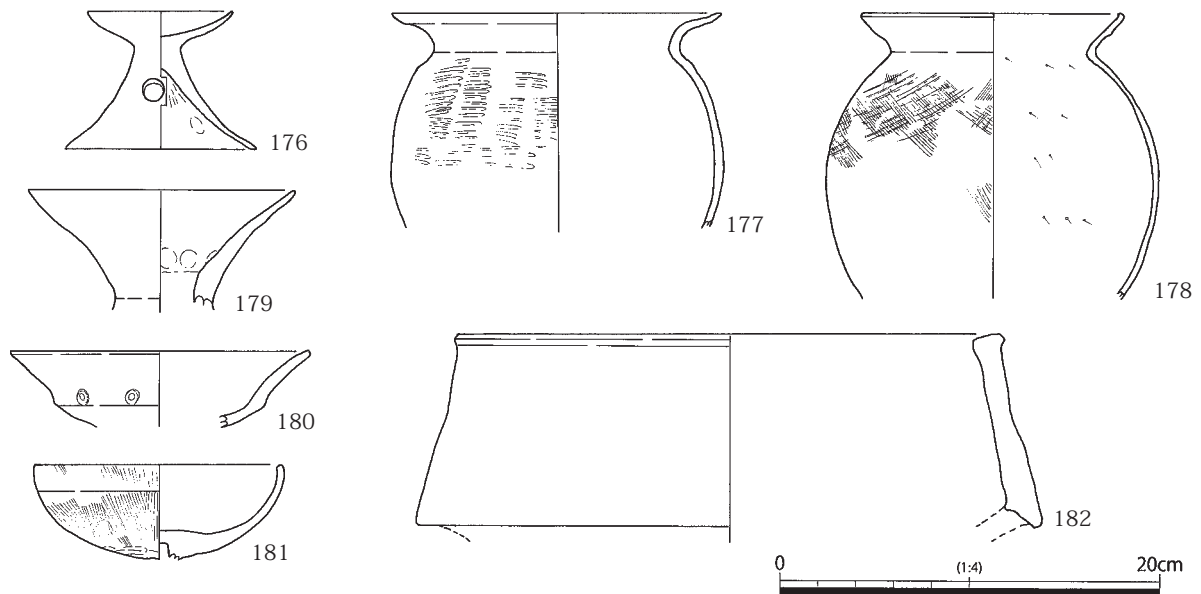


図50 13・14区土坑 出土遺物

しているが、この遺構群に井戸も含まれており、ピット群の分布と重なっている。

3027井戸 (図40・49・52、図版53)

13・14区西側の遺構群に属する。円形を呈しており、直径1.0m、深さ0.5mの素掘りである。底は水成の砂層まで達しており、湧水が激しいことから、井戸と考えられる。埋土は4層に細分され、1～3層は人為的な埋め戻し土と考えられる。1層は黒褐色極細粒砂混じりシルトからなり、土師器・須恵器が出土した。2層は黒褐色砂質シルトからなり、シルトの小偽礫を含む。3層はシルトの小偽礫を含む黒色砂質シルトからなり、土師器が出土した。4層は灰黄褐色砂礫混じりシルトからなり、流れ込みによるものとみられる。

183は、須恵器杯蓋である。天井部が丸みを持ち、天井部と口縁部の境の稜が鈍く、回転ヘラケズリの範囲が1/2以下である。口縁は内傾し、端部に段を有する。器形から、TK10（新）に相当するものと考えられる。

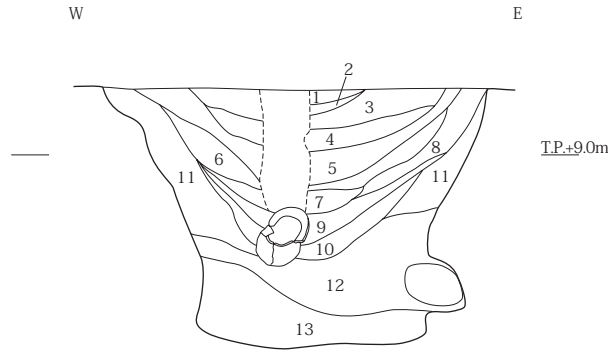
3130井戸 (図40・51、図版10)

13・14区東側の遺構群に属する。円形の素掘りの井戸とみられ、直径1.5m、深さ1.0m程度ある。埋土は10層に細分され、その多くは大小偽礫を含む人為的な埋土である。1～3層はにぶい黄橙色、4・5層は褐灰色、6層は灰黄褐色で、いずれも粗粒砂混じりシルトからなる。7層は褐灰色細粒砂混じりシルト、8層は灰黄褐色粗粒砂混じりシルトからなる。9層はにぶい黄橙色シルト、10層は褐灰色細粒砂混じりシルトからなる。11層は灰色細粒砂混じりシルトからなり、12層との境ではほぼ完形の土師器甕が出土した。12層は暗灰色シルト、13層は黒色シルトからなる。両層とも暗色化が著しく、滞水の状態で堆積したとみられ、12層は壁面から崩落した地山層の偽礫を含む。

3131井戸 (図40・51・52、図版10・53)

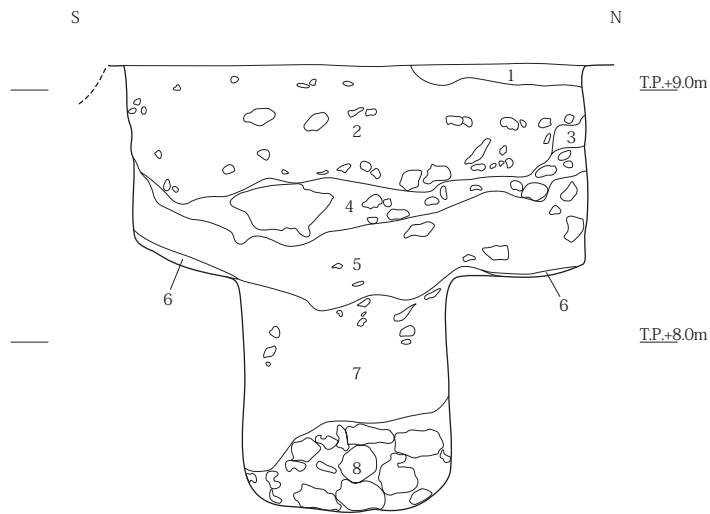
13・14区東側の遺構群に属する。円形の素掘りの井戸とみられ、直径1.8m、深さ1.3m程度ある。3130井戸と隣接しており、端部の切合い関係からは3131井戸がより新しいと考えられる。断面は、湧水砂層を境に二段落ちとなっており、下部が水溜めの機能を果たしていた可能性がある。8層に分かれる埋土の多くは大小偽礫を多く含み、人為的に埋め戻されたとみられるが、遺物は出土しなかった。

3130 井戸



1. にぶい黄橙色10YR7/4 粗粒砂混じりシルト
2. にぶい黄橙色10YR7/2 粗粒砂混じりシルト
3. にぶい黄橙色10YR6/4 粗粒砂混じりシルト
4. 褐灰色10YR5/1 粗粒砂混じりシルト
5. 褐灰色10YR5/1 粗粒砂混じりシルト
6. 灰黄褐色10YR6/2 粗粒砂混じりシルト
7. 褐灰色10YR4/1 細粒砂混じりシルト
8. 灰黄褐色10YR6/2 粗粒砂混じりシルト
9. にぶい黄橙色10YR7/3 シルト
10. 褐灰色10YR4/1~5/1 細粒砂混じりシルト
11. 灰色N4/0 細粒砂混じりシルト
12. 暗灰色N3/0 シルト(暗色化、地山層の偽礫を含む)
13. 黒色N2/0 シルト(暗色化が著しい)

3131 井戸



1. 黒褐色7.5YR3/1 砂質シルト(粘土~極細粒砂の大小偽礫を多く含む)
2. 暗灰黄色2.5Y5/2 砂混じりシルト(粘土~極細粒砂の大小偽礫を多く含む)
3. 黒色2.5Y2/1 砂混じりシルト(粘土~極細粒砂の大小偽礫を多く含む)
4. 褐灰色10YR4/1 極細~細粒砂混じりシルト(粘土~極細粒砂の大小偽礫を多く含む)
5. 灰色5Y4/1 極細粒砂質シルト(粘土~極細粒砂の大小偽礫を多く含む)
6. オリーブ黄色5Y6/3 粘土
7. 灰色10Y4/1 シルト質極細粒砂(粘土~極細粒砂の大小偽礫を多く含む)
8. 第13層起源の緑灰色5G6/1 粘土、灰色5Y4/1 極細粒砂、暗灰黄色2.5Y4/2 粗粒砂などの大小偽礫からなる



図51 3130・3131井戸 断面図

1層は黒褐色砂質シルト、2層は暗灰黄色砂混じりシルト、3層は褐灰色極細～細粒砂混じりシルト、4層は黒色砂混じりシルト、5層は灰色極細粒砂質シルト、7層は灰色シルト質極細粒砂からなり、いずれの層も粘土～極細粒砂の大小偽礫を多く含む。6層はオリブ黄色粘土からなり、段をなす部分に堆積した薄層である。最下層の8層は、第13層起源の緑灰色粘土、灰色極細粒砂、暗灰黄色粗粒砂などの大小偽礫からなる。

遺物は、小型丸底土器や長胴甕、甑をはじめとする土師器、初期須恵器が出土している。特に、長胴甕からは滑石製の白玉（図52-189～202）が出土している。184は、土師器有段高杯の杯部である。185は、土師器小型丸底土器である。口縁が短く、内面調整がケズリであることから、布留式IV期に相当すると考えられる。なお、この時期の小型丸底土器には底部穿孔をしたものがよくみられることから、185の底部の破損も人為的な穿孔である可能性が高い。186・187は、土師器甕である。186は、口縁端部が平たく段を持ち、口縁がやや内弯し、肥厚する。187は口縁端部の内面が凹状をなし、胴部が長胴化し、外面のハケ調整は粗い。188は、土師器甑である。磨耗が激しく、内外面とも調整は不鮮明であるが、ハケ調整を行っている痕跡が確認できる。これらは、その特徴から布留式IV期に相当すると考えられる。

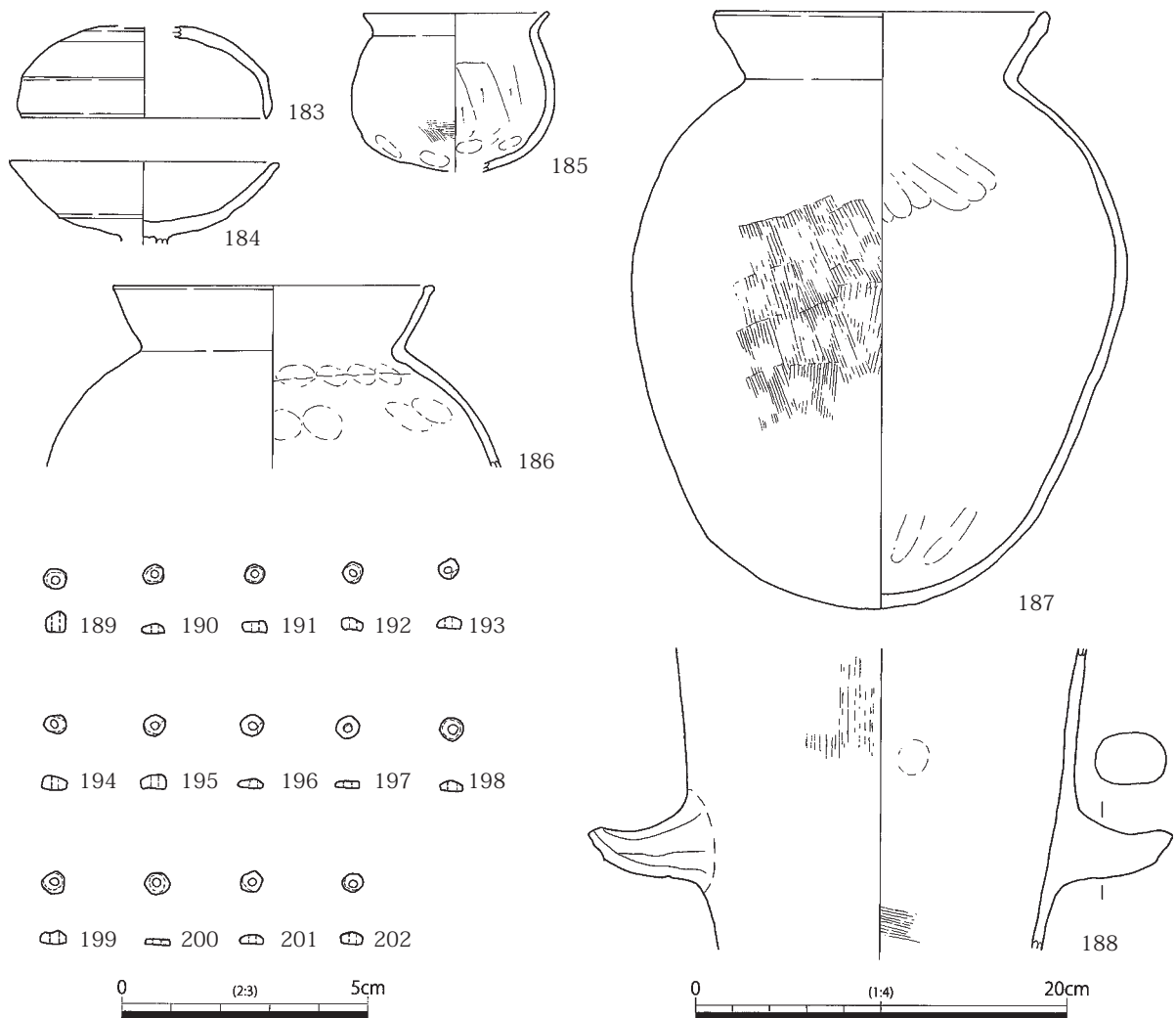


図52 13・14区井戸 出土遺物

4. 溝・溝群

2～4区中央～北部で、北北東－南南西方向と東北東－西南西方向に延びる2種類の溝および溝群を検出した。3350溝を除く溝群は、幅約0.2m～0.3m、深さ約5cm前後と浅く、水が流れた形跡が見当たらない事から、耕作溝である可能性が考えられる。また、東北東－西南西方向に延びる溝群は、北北東－南南西方向に延びる溝群により切られ、さらに掘立柱建物の柱穴にも切られていることから、これらの溝群には時期差が存在するだけでなく、第7層の形成課程で土地利用が変化した可能性が考えられる。

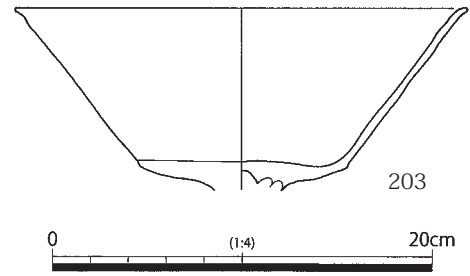


図53 3350溝 出土遺物

3350溝 (図40・53・54)

2～4区中央のほぼ中央部に位置する。幅が広く、浅い3352溝を切っている。ただし、3352溝の形状ははっきりしないため、実体は不明である。規模は、幅約1.4m、深さ約0.1mで、北北東から南南西方向に延びる。埋土は、人為的な埋土と考えられ2層に細分される。上層は、黒色極細～細粒砂混じりシルトで、下部に炭化物の堆積が見られる。下層は、黒褐色極細～細粒砂混じりシルトで、偽礫や土器が含まれる。

203は、大型有段高杯の杯部である。杯部の深度が深く、杯底部から伸びる口縁は外方に角度がつく。

包含層出土遺物 (図55、図版55)

古墳時代の包含層からは、須恵器および土師器が出土している。

204～207は、須恵器の蓋杯である。206は、受身がほぼ水平で、底部が平底の杯身である。器形および底部が手持ちヘラケズリによる調整であることから、TK73の杯身と考えられる。207は、立ち上がり内傾し、口縁端部が平たく、わずかに段を持つ杯身である。受部は外上方に短く伸び、底部は扁平である。205は、口縁部と天井部を隔てる稜および口縁端部の段がやや鈍い杯蓋である。天井部の回転ヘラケズリは反時計回りで、ケズリの範囲も1/2程度である。204は、天井部が扁平で、大きく扁平なつまみがつく有蓋高杯の蓋である。口縁端部は平たく、口縁部と天井部の境の稜はやや鈍い。器形から、204・207はTK216に、205はTK47に相当すると考えられる。

213・214は、須恵器の甕である。214は、口縁部が外反し、口縁端部直下および口縁部と頸部の境目に鋭い稜をもつ凸帯を伴う。体部の大部分を欠損するが肩部に残る調整から、体部外面の調整は格子タタキであったと考えられる。これらの甕は、その器形および調整からON46～TK208に相当する。

208は、器台等の子持ち器種の子持ちの椀である。

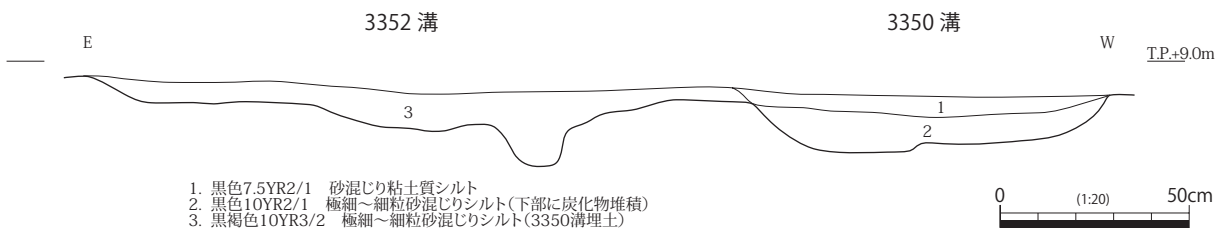


図54 3350・3352溝 断面図

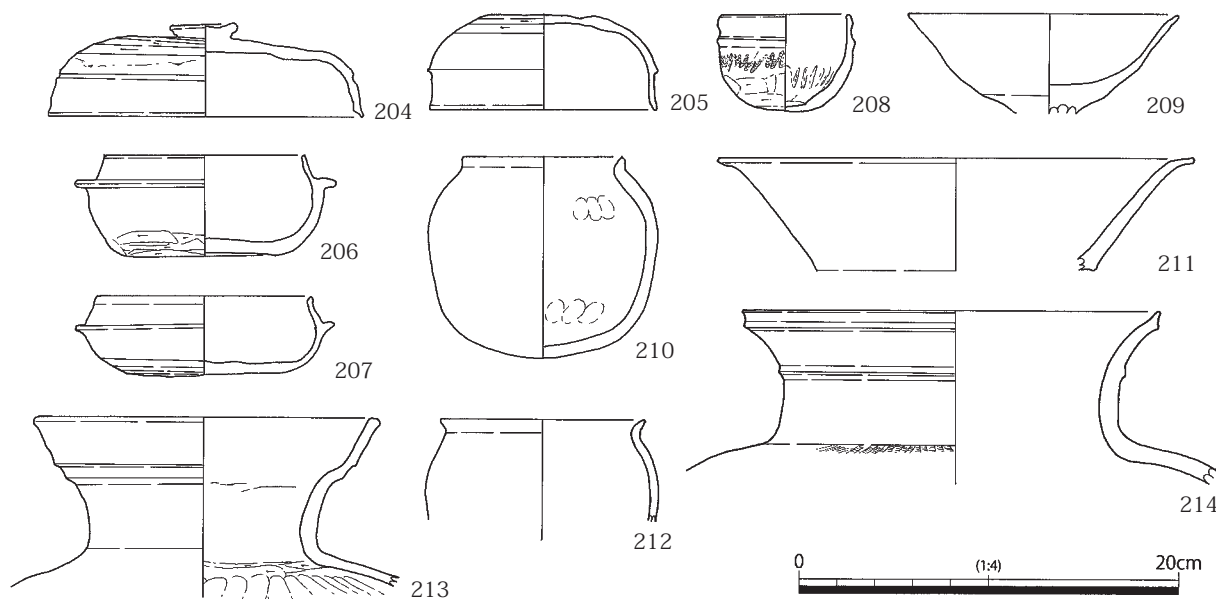


図55 2～4区、13・14区 古墳時代包含層 出土遺物

209～212は、土師器である。210は、底部が平底気味で口縁が短く直立する短頸壺又は無頸壺である。212は、口縁を短く外に引き出す小型丸底土器である。209は、無稜外反高杯の杯部である。211は、大型有段高杯の杯部である。底部から直線的の外方に開き、端部を横に引き出す。209・211・212は、器形的特長から布留式Ⅳ期に相当すると考えられる。

4. 古代以降の遺構・遺物

a. 第7層上面（第3面）

第3面では、第6層内および第7層上面のピットや土坑、溝、流路等複数の遺構を検出した。

1. ピット

2～4区東部では、第6層内および、第7層上面で形成された複数のピットを検出した。そのうち、3306・3307・3312・3313・3529・3530ピットの埋土には、炭化物や焼土、土器が多く含まれている。ピット群からは、掘立柱建物は復原できなかった。全体に検出量が少ないことから、集落を営むほどの建物群が存在したとはいえない。

3306ピット（図56・57）

平面形は円形を呈しており、径約45cm、深さ40cmを測る。埋土が大きく3層に分かれており、1層は、黒褐色砂混じりシルト（大小偽礫（シルト））からなり、炭化物を含む。2層は、黒色シルトからなる。3層は褐灰色砂混じりシルトからなる。土師器を含んでおり、柱痕跡の可能性はある。

3307ピット（図56・57）

平面形は円形を呈しており、径約35cm、深さ35cmを測る。埋土が大きく4層に分かれており、1層は灰黄褐色砂混じりシルトで、小偽礫（シルト）を多く含む。2層は、黒褐色砂混じりシルトからなり、炭化物・焼土・偽礫を含む。3層は、褐灰色砂質シルトからなる。4層は、黒褐色砂質シルトで、柱痕跡の可能性はある。

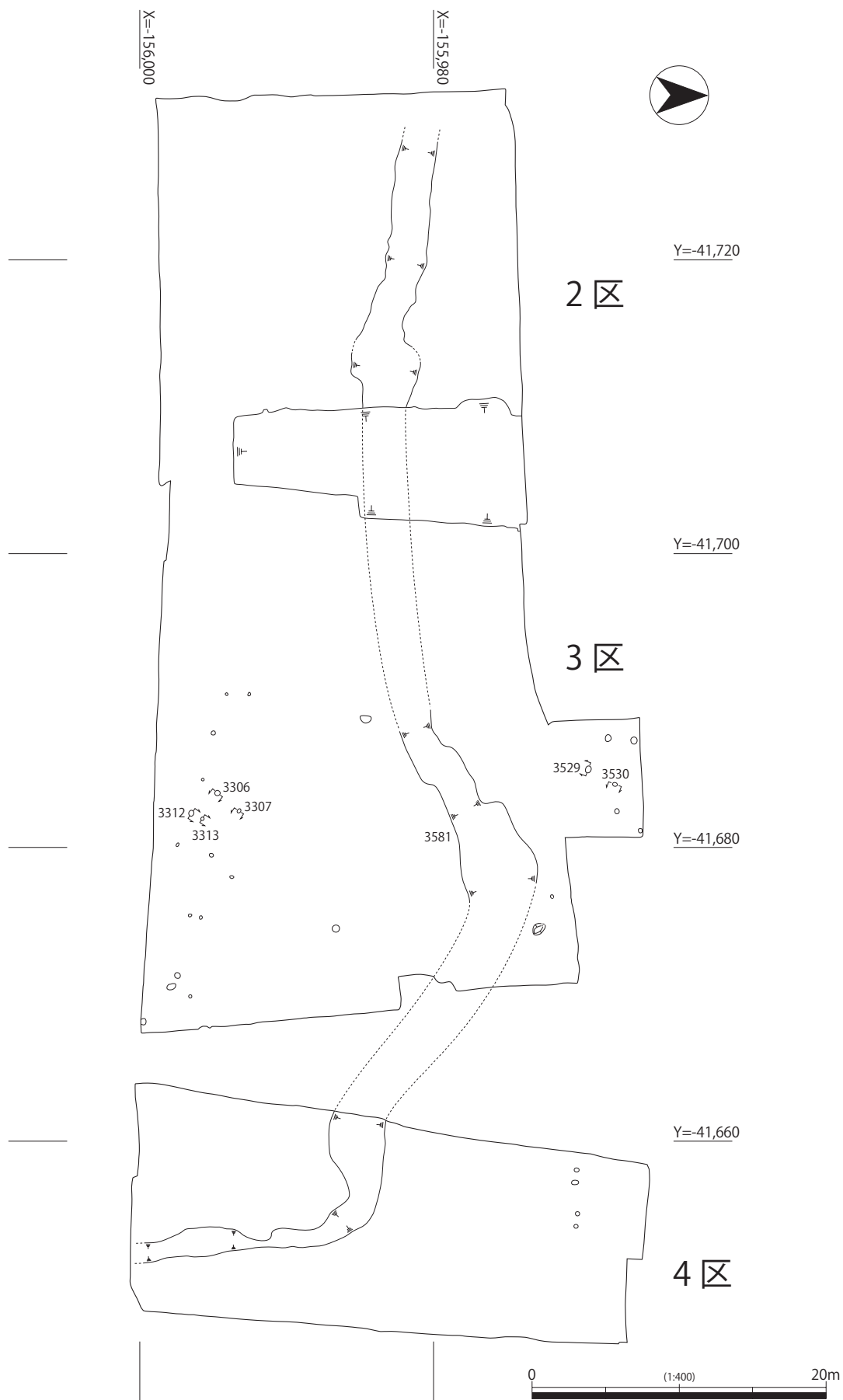


図56 2～4区、13・14区 第3面遺構平面図

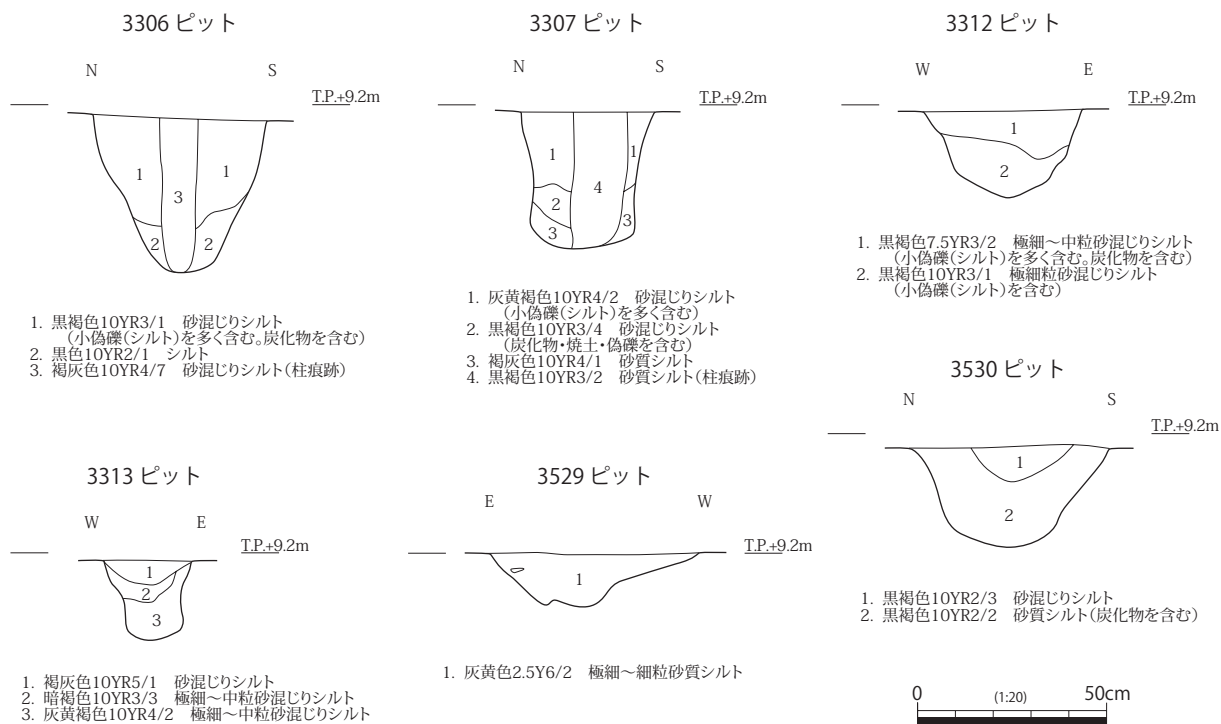


図57 2～4区ピット (古墳時代) 断面図

3312ピット (図56・57)

平面形は円形を呈しており、径約40cm、深さ25cmを測る。埋土が大きく2層に分かれており、1層は、黒褐色中～極細粒砂混じりシルトで、小偽礫(シルト)を多く含む。炭化物・土師器等を含む。2層は、黒褐色極細粒砂混じりシルトからなり、小偽礫(シルト)・土師器を含む。

3313ピット (図56・57)

平面形は円形を呈しており、径約20cm、深さ20cmを測る。埋土が大きく3層に分かれており、1層は褐灰色砂混じりシルトで、土師器を含む。2層は、暗褐色中～極細粒砂混じりシルトからなる(土師器含む。)3層は、灰黄褐色中～極細粒砂混じりシルトである。

3529ピット (図56・57)

上部は削平を受けていると考えられる。現状で平面形は円形を呈しており、径約55cm、深さ10cm程度を測るのみである。埋土は、灰黄色細～極細粒砂質シルトで、土器を含む。

3530ピット (図56・57)

平面形は円形を呈しており、径約40cm、深さ25cmを測る。埋土が大きく2層に分かれており、1層は、黒褐色砂混じりシルト、2層は黒褐色砂質シルトからなり、炭化物・土器を含む。

2. 溝、流路

2～4区の全体にわたって東西方向に延びる3293溝が検出された。

3293溝 (3581流路) (図56・58・59、図版8・53～55)

調査区東部を南から北方向に延び、東部中央で大きく向きを変え、東から西方向に延びている。かなり蛇行しており、もとは自然流路(3581流路)であったと考えられるが、最終的には人為的な手が加えられ、水路として利用されていたといえる。規模は幅約3.5mを測り、西に行くにつれ深さを減じる。上部は削平を受けているものと考えられる。

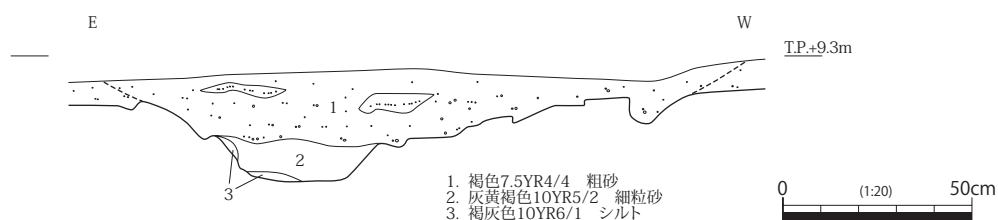


図58 3293溝 (3581流路) 断面図

埋土は3層に分けられ、1層は偽礫を含む褐色粗砂、2層は灰黄褐色細粒砂、3層は褐灰色シルトからなる。なお、この3581流路は、第6b層上面段階には水路(3293溝)として使用され、最終的に埋没するのは、第6a層段階であると考えられる。

遺物は、かなりまとまって出土しているが、その大部分がTK216前後で集中することから、第7層段階で機能していた時期のものであると考えられる。

229は、須恵器大甕である。口縁部が外反し、端部を丸くおさめその直下に凸帯めぐらす。口頸部には波状文を配さず、体部外面は平行タタキによる調整を行い、内面は調整時の当て具痕をナデ消している。底部には焼成時の支脚等によるへコミがあり、窯で直接乾燥させた際に付着したと思われる離れ砂が遺存している。225は、最大径が体部上半に来る肩の張る器形の壺である。磨耗が激しく調整は不明瞭であるが、肩部直下に上下に凹線を伴う波状文がめぐり、体部下半はケズリ調整の後、縦方向の平行タタキによる調整が行われている。成形手法は須恵器の手法によるものであるが、一般的な須恵器の胎土と異なるだけでなく、160等の焼成不良の須恵器とも異なる。

224は、土師器杯または鉢である。215・216は、土師器大型有段高杯である。215は、杯底部から伸びる口縁は外方に角度がつき、杯底部は真横に伸びる。脚柱部と裾部の境目付近に円形の透かし孔を配し、脚柱部内面にはシボリ目および棒状工具による突き刺し痕が残る。なお、脚部は杯部に比して脆弱である。216は、大型有段高杯の杯部である。杯底部が厚く、杯底部からのびる口縁は外反する。217～219は、土師器無稜高杯である。これらは、杯部と脚部を粘土盤充填により接合する。杯部口縁は、217・218がわずかに内弯するのに対し、219は外に開く。脚部は217の脚柱部と裾部の境が屈曲し、脚柱部内面にケズリ調整を行うが、218の脚柱部内面にはシボリ目が残る。220は、土師器碗形高杯である。脚部の半ば以上を欠損するが、脚柱部内面に棒状工具による突き刺し痕が残る。221～223は、土師器高杯の脚部である。223は、円錐状に大きく開く脚部の中央よりやや上方に、円形の透かし孔3個を配する。脚部内面をナデ調整し、外面をミガキにより調整する。222は、脚部外面をミガキにより調整し、脚柱部内面にはシボリ目が残る。これらの高杯は、庄内式期の碗形高杯脚部と考えられる223を除き、その器形および調整手法から布留式Ⅲ～Ⅳ期に相当すると考えられる。

228は、畿内第Ⅴ様式系甕である。口頸部は緩やかに屈曲し、体部は丸味をもつ。体部外面は粗い右上がりのタタキ、内面はナデにより調整する。226は小型の土師器甕である。緩やかに外反する口縁を持ち、粗いハケにより体部外面を調整する。227は、外面に格子タタキをおこなった韓式系土器の破片である。230は、中央に円孔を2つ穿孔した滑石製の双孔円盤である。

b. 第6b層上面 (第2面)

第2面では、第6a層内の流路および、第6b層上面の畦畔を伴う水田跡等を検出した。このような畦畔を伴う水田跡は、ほかの調査区では確認されていない。第7層上面の3581流路は、第6b層上面段

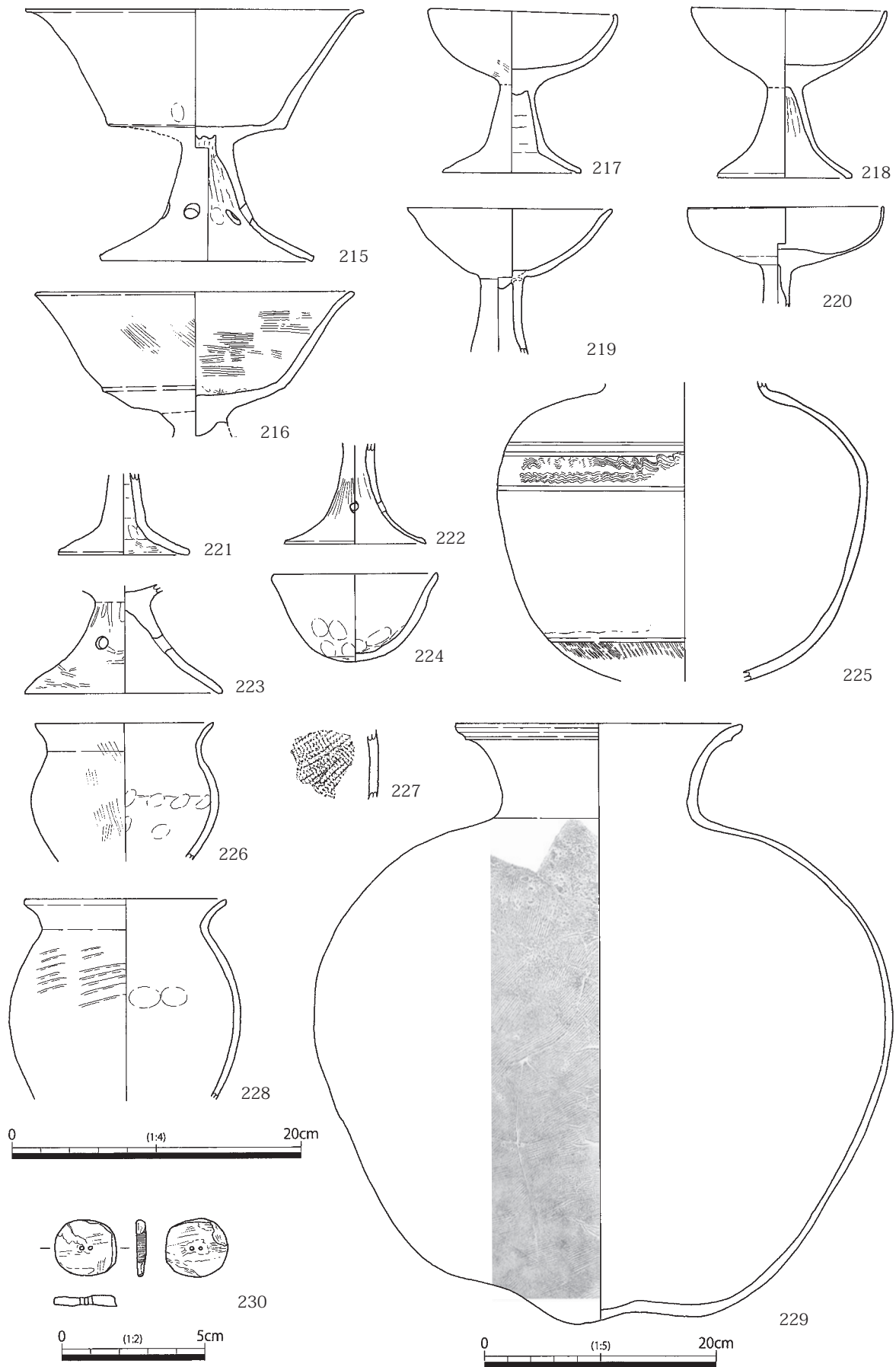


图59 3293溝 (3581流路) 出土遺物

階においても、水路として使用されており（3293溝）、最終的に埋没するのは第6a層段階であると考えられる。

調査区の北東部で、幅0.3～0.5m、深さ約10cmの東から西方向に伸びる3582溝を検出した。耕作に伴う溝と考えられるが、蛇行しており、やや疑問が残る。

3520 畦畔（図 61、図版 6）

調査区西部（2区）のほぼ全域と調査区東南部（3・4区東）の一部で、畦畔を伴う水田跡を検出した。水田跡は、第6a層の水成層によりパックされている。検出面で各畦畔は、幅約0.4～0.5m、高さ約0.2mを測り、個々の水田面積は約20～30㎡である。各水田は小面積で不整形であることから、自然地形の制約を受けているものと考えられる。3581流路の後身である、3522溝の両肩の高まり上には水田域へと繋がる水口が掘削されており、ここから各畦畔に掘削された水口を通して水が供給されていたものと考えられる。また、畦畔や水田面には轍や足跡が検出されているが、当該面に伴う遺物は極めて少なく、いずれも小片である。このため、時期の確定はできないが、堆積状況から、古代のものと考えられる。

c. 第6a層上面（第1面）

第3a層～4層に伴う南北方向の耕作溝や土坑、井戸など中～近世の遺構を一括で検出した。

3093 土坑（図 60・62）

調査区南西隅で検出した。土取り坑の可能性のある遺構で、その大部分が調査区外に続いている。埋土は2層に分けられ、大小偽礫を含む上層は、にぶい黄色シルトが主体の人為的な埋戻し土である。

3096 土坑（図 62）

3093土坑下面で検出した3096土坑は、長径1.2mの楕円形の土坑である。埋土は3層に分けられ、大小偽礫を含む1層は、灰黄色シルトが主体の人為的な埋戻し土である。3層は、暗灰黄色粘土が主体であるが、大小偽礫を多く含んでおり、人為的な埋戻し土である。

第1面では中～近世の井戸を複数検出している。これらの井戸の大半は調査の都合上、完掘していない為、その正確な深さは不明である。

3094 井戸（図 60・62）

13・14区南西端部に位置する。西側を3093土坑に切られ、北側は調査区外であるため、その正確な

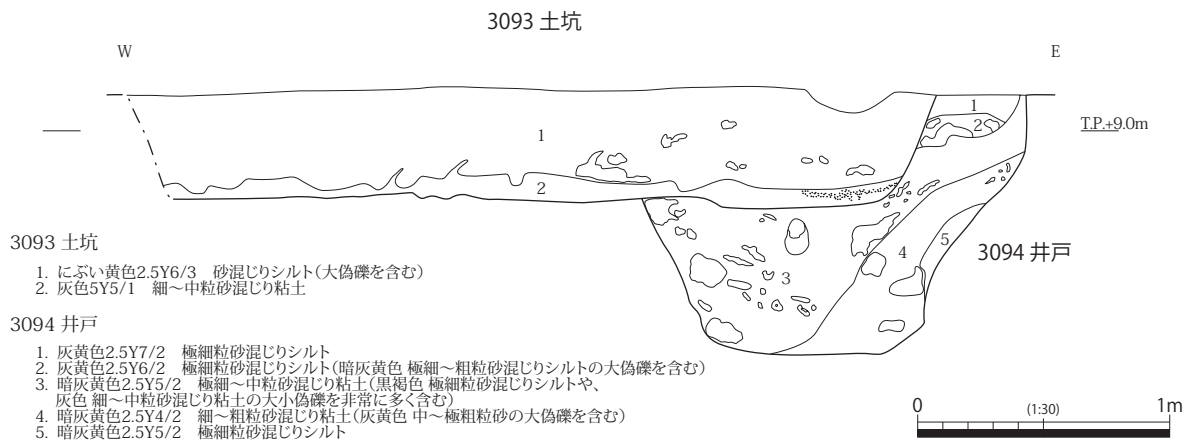


図60 3093土坑・3094井戸 断面図

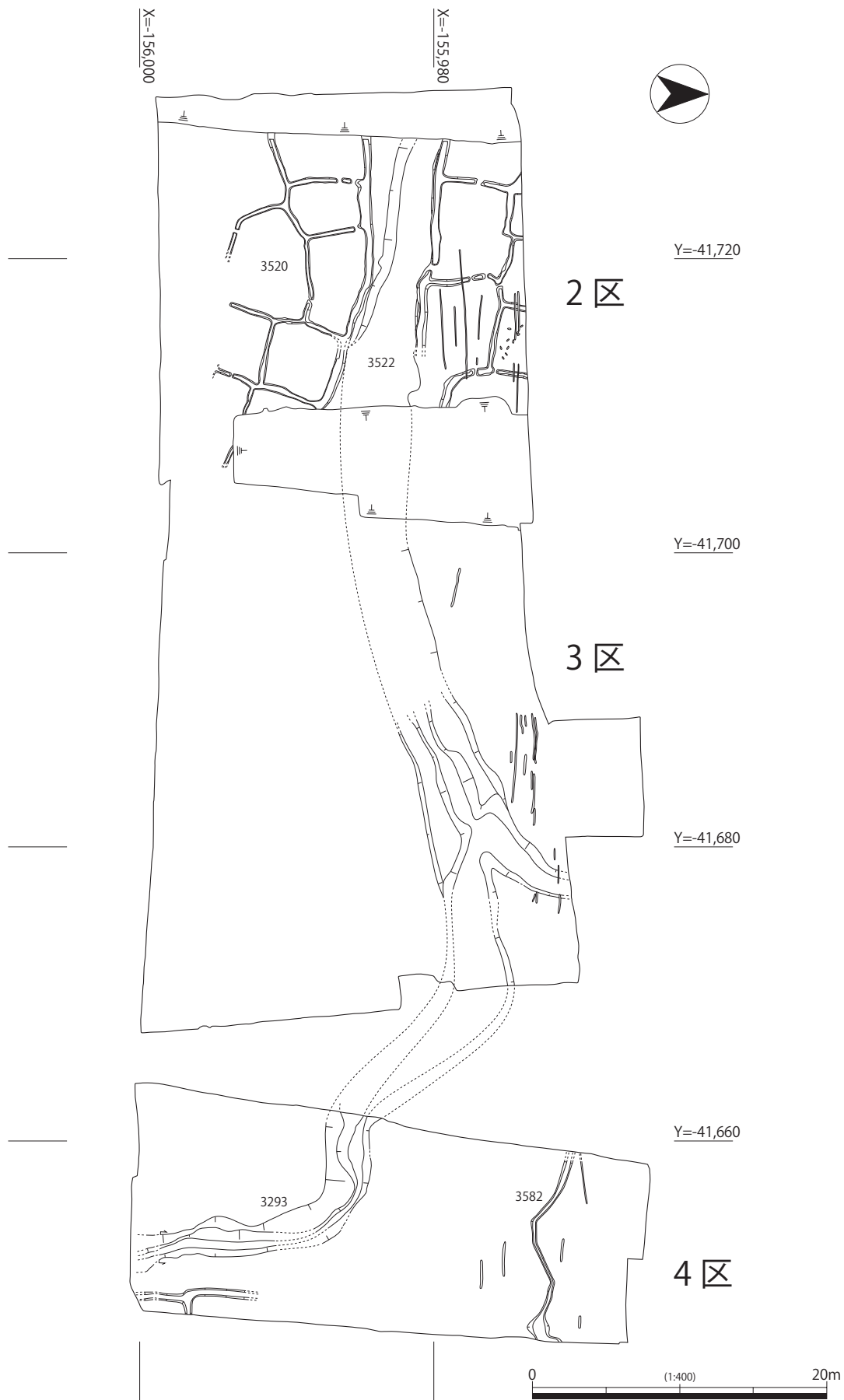


図61 2～4区、13・14区 第2面遺構平面図



图62 2~4区、13・14区 第1面遺構平面図

規模は不明である。検出面からの深さは、約1.0mを測る。埋土は5層に細分され、大小偽礫を含む2～5層は、人為的な埋め戻し土である。

3291 井戸 (図 62)

中央西部に位置する。規模は径1.75mで、板材を竹紐で留めた井筒をもつ井戸である。調査の安全上、完掘しなかったが、掘削を行ったところまでの埋土は、6層に細分される。このうち、大小偽礫を含む1・2・5・6層は、井戸廃絶時の人為的な埋土、3・4層は掘り方の埋土である。

3280 井戸 (図 62・63、図版 8)

2～4区東部の南端部に位置する。東半部は調査区外であるため、全容ははっきりしないが、規模は径約1.6mで、板材を竹紐で留めた井筒をもつ井戸である。調査の安全上、完掘しなかったが、掘削を行ったところまでの埋土は、4層に細分される。いずれも、大小偽礫を含んでおり、人為的な埋め戻し土である。

5. 小結

2～4・13・14区の調査の結果、調査区全体の西部(2区)および東部(4区東半)では遺構が希薄で、中央東部(3区・4区西半)では遺構が集中する事から、これらの遺構群は、初期須恵器を含む古墳時代中期を中心とする南北方向に細長く広がる集落域であると考えられる。なお、中央西部は南部(13・14区)で遺構の集中がみられることから、後世の水成堆積層により削平されている北部にも遺構の広がりがあった可能性が考えられる。

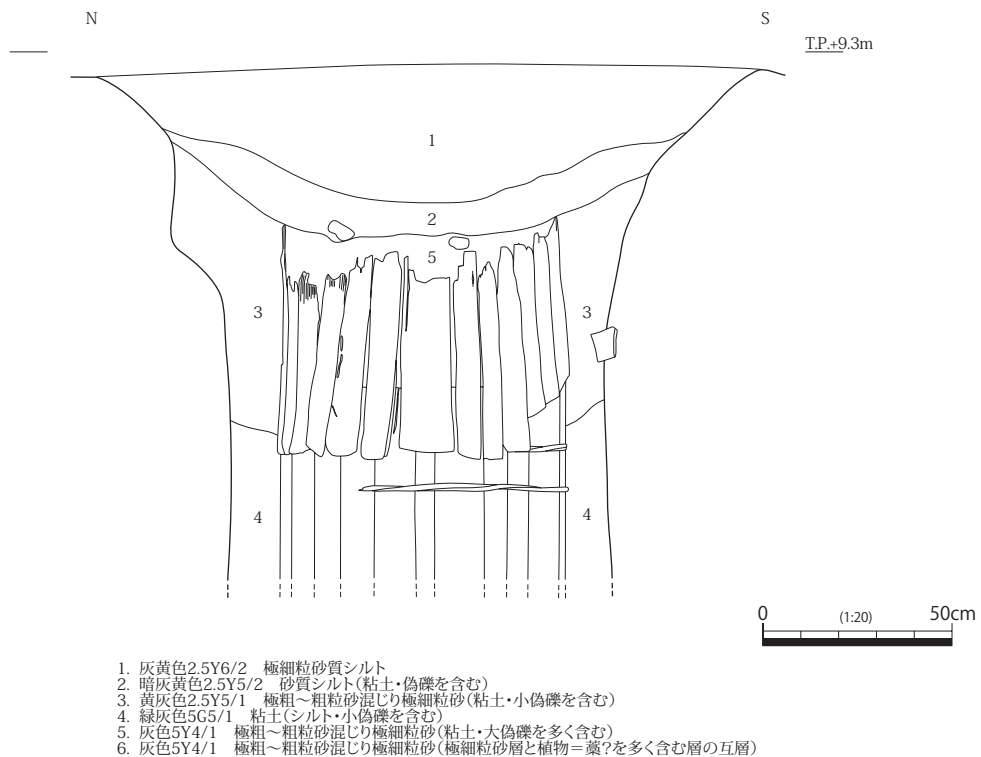


図63 3280井戸 断面図

第3節 5・6区の結果

調査範囲の中央部やや西寄りに位置しており、西側は土地境界の段差をはさんで4区と接する。5区と6区は、調査前には区画されていたため、分割して調査区を設定したが、調査時には同時に着手できたことから、同一の調査区として扱っている。東西方向に走る道路をはさんで南側には、14区の東端部と南下する道路をはさんで15区の西端部が位置している。東側は7区と接しているが、ちょうどこの位置で、南北方向に伸びる大規模な3125流路が検出されたことから、この流路により調査区を分割している。3125流路の結果については、次節で記述する。

1. 層序

調査区の形状はほぼ長方形を呈しており、この調査区における基本層序は、調査区南壁で設定している。上部では、全体にあまり大規模な起伏はみられず、ほぼ平坦であるが、古墳時代以前と考えられる層以下では、大規模な流路が複数形成されており、流路に伴う砂の堆積が顕著に見られるほか、かなりの起伏が認められる。

第0層：現代盛土である。

第3b層：暗灰黄色砂質シルトからなる、中～近世の耕作土層である。

第4層：オリーブ褐色砂混じりシルトからなる、中世の耕作土層である。

第6a層：灰オリーブ色砂からなる水成層である。部分的に耕作土化しており、6区と7区を分割する3125流路は本層段階で完全に埋没する。

第6bi層：黄褐色極細粒砂混じりシルトからなる。調査区西部に分布しており、古代の耕作土と考えられる。

第6bii層：灰黄褐色極細粒砂混じりシルトからなり、酸化マンガン斑の集積が見られる。第7層を耕起した古代の耕作土層と考えられる。

第7層：黒褐色砂混じりシルトからなり、層厚10～20cmの古墳時代の暗色帯構成層である。土壌化は進行しておらず、3152流路直上付近の調査区東部で第8a層、第9層と収斂する。

第8a層：褐灰色極細粒砂混じりシルトからなる水成層である。3152流路直上付近の調査区西部で、第7層、第9層と収斂する。3128流路は、本層段階で完全に埋没する。

第9層：褐灰色シルトからなる暗色帯構成層である。縄文時代後期中葉の土器や石器がまとまって出土した、3128流路は本層内で形成されている。

第10a層：灰黄褐色粘土混じりシルトからなる。3152流路は、本層内で完全に埋没する。

第10b層：黒褐色砂質シルトからなる暗色帯構成層である。3152流路肩部に堆積し、暗色化していることから、3152流路肩部埋土の可能性が高い。

第10c層：暗灰黄色シルト～砂からなる淘汰の悪い水成層である。

第11層：暗赤灰色極細粒砂混じりシルトからなる暗色帯構成層である。本層からは、褐色ガラスを含む火山ガラスが多量に検出されており、横大路火山灰層（アカホヤ(K-Ah)）の本体である可能性が考えられる。

第12層：黄褐色極細粒砂質シルトからなる。下部は粘土質が強くなる。

第13c層：明黄褐色シルト混じり粘土からなる。上面でサヌカイトが出土している。

5·6区 南壁

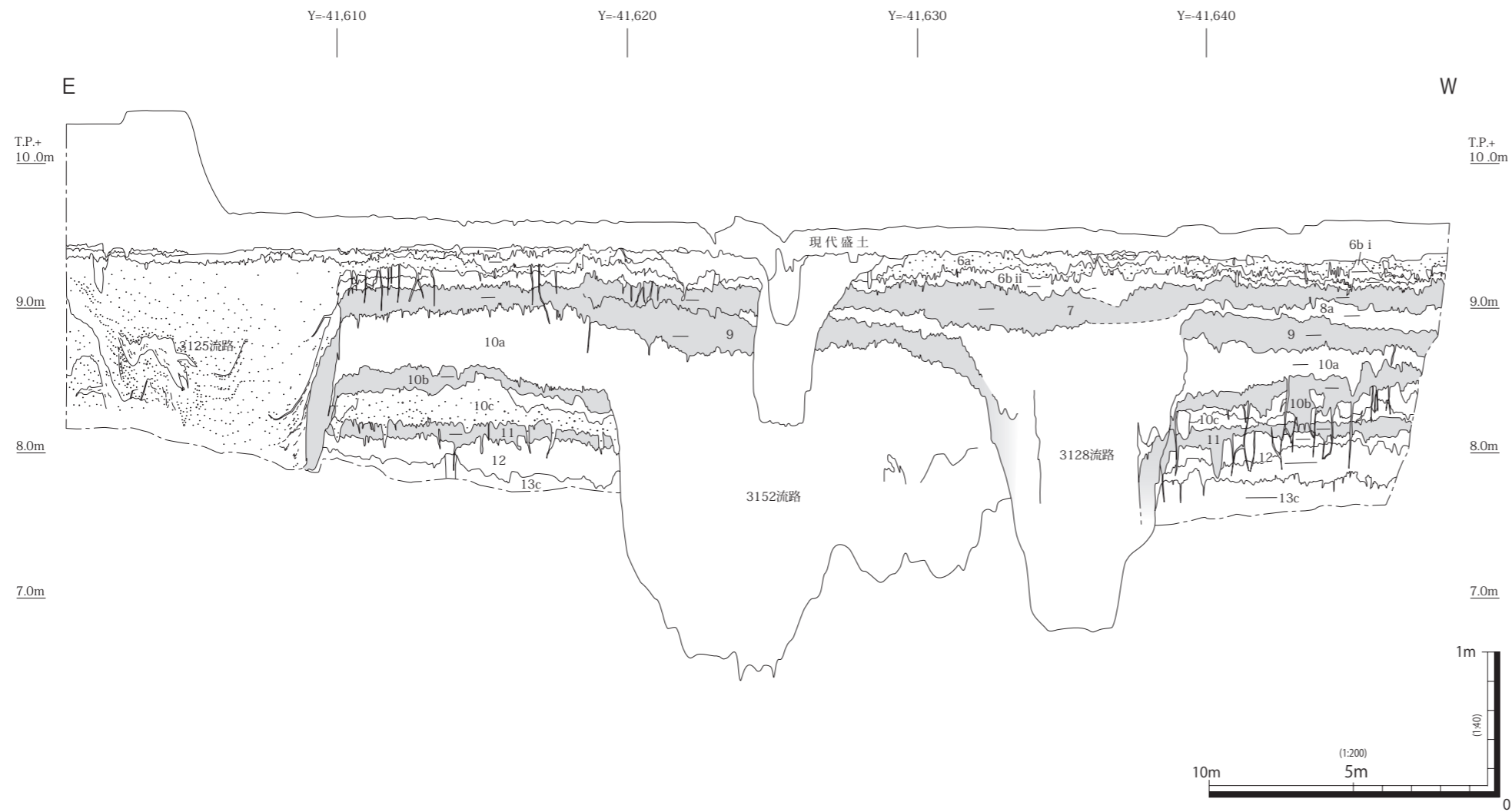


图64 5·6区 南壁断面图

2. 縄文時代の遺構・遺物

第8層内で、南北方向に延びる大規模な流路（3128・3152流路）を検出し、調査区の大半を占めている。特に、3128流路からは、北白川上層式3期を中心とする後期中葉の多量の縄文土器が、サヌカイト製石器などとともに出土した。5・6区の出土遺物は、コンテナ数30箱で、そのほとんどが縄文土器である。

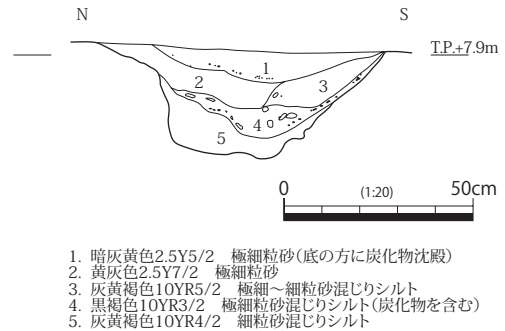


図65 3187落ち込み 断面図

a. 第11層下面（第5面）

暗色帯構成層である第11層は、後述する3128流路の西肩と3152流路の東肩に分布する。両流路の掘り込みが深いため、調査区中央部には存在しない。第11層は、褐色ガラスをはじめとする火山ガラスを含有しており、横大路火山灰層（K-Ah）を含む層位であると考えられているが、5・6区の第11層は、他の調査区以上に火山ガラスの検出が顕著であることから、K-Ahの本体である可能性が考えられる。

3187落ち込み（図67）

遺構はほとんどみられないが、調査区北東端部で3187落ち込みを検出した。人為的に掘られた可能性は少なく、倒木痕と考えられる。ただ、埋土に炭化物が含まれていることから、土坑として利用されていた可能性も考えられる。遺物は出土していない。

b. 第10層下面（第4面）

第4面では、第10層内で形成された3152流路を検出した。本調査区の第10層は、層厚約0.8mと厚いことから、3層（第10a～c層）に細分することができる。第10a層は、3152流路を供給源とする水成堆積層であり、第10b層は暗色帯構成層ではなく、3152流路肩部の暗色化した埋土と考えられる。

3152流路（図66～68、図版11・17）

調査区中央を南から北方向へ延びる、幅10m以上、深さ2.0m程度の大規模な流路である。東側には多数の支流が分岐している。北部では、南北方向から南西―北東方向に向きを変えており、西肩は3128流路に切られた状況を示している。西肩を3128流路と共有、または3128流路よりも西側に肩を

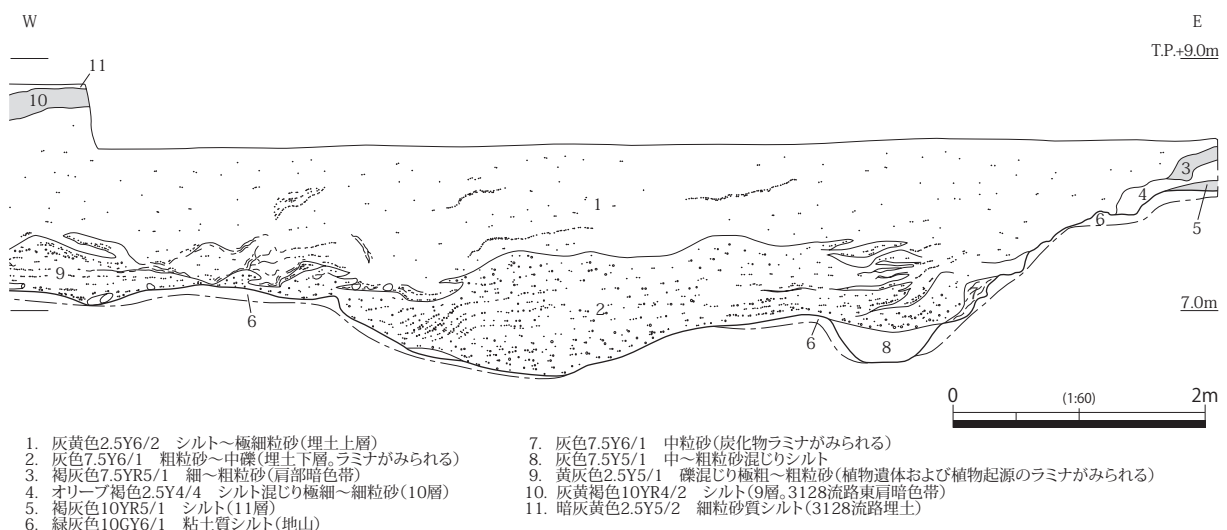


図66 3152流路 断面図

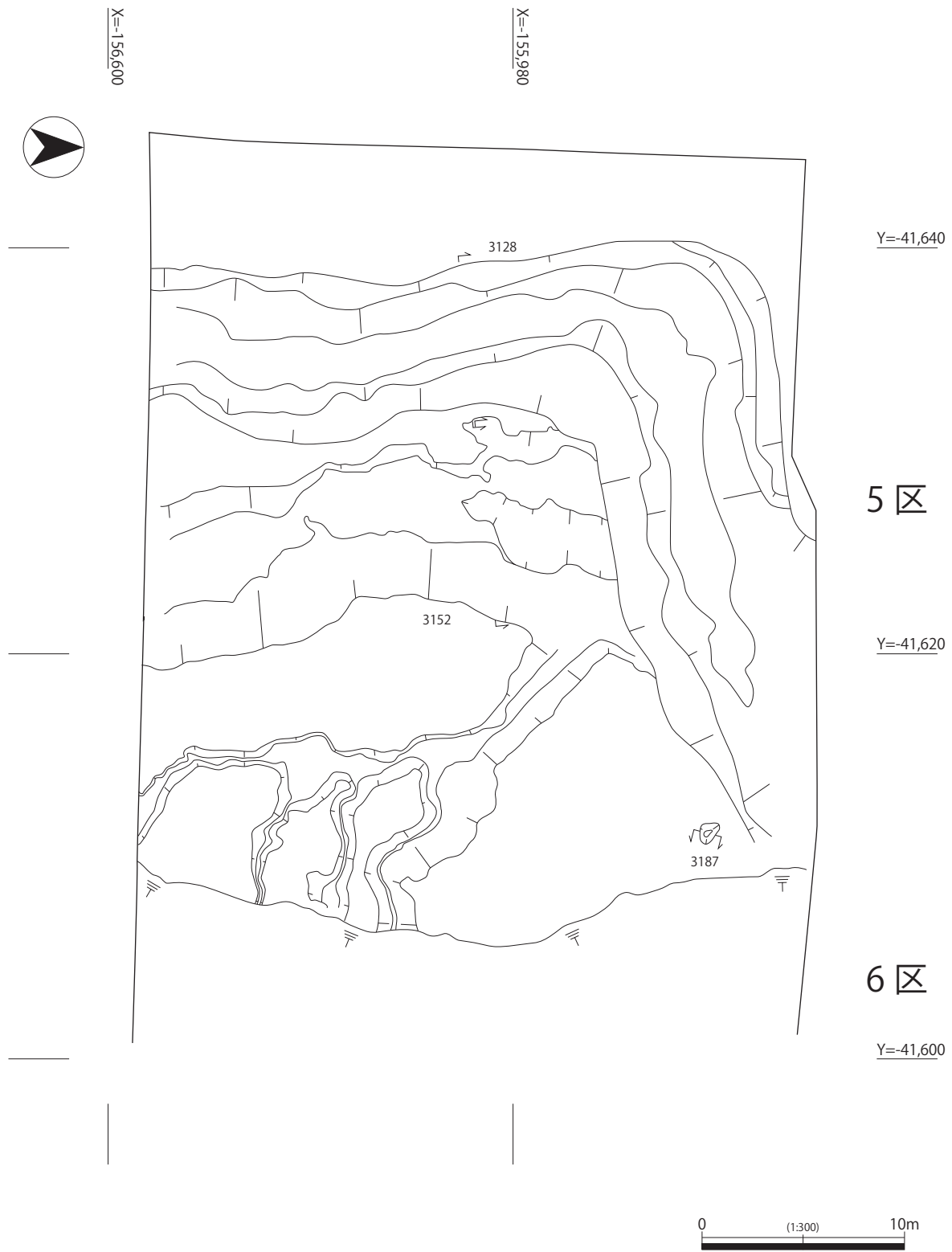


图67 5・6区 第2面遺構平面図

持つと考えられる。埋土は、灰黄色極細粒砂～シルト（上層）と灰色砂礫（下層）を主体としている。断面観察の結果、細粒化が進んでいる上層は比較的ゆっくりと堆積したと考えられるのに対し、下層は急激に堆積したと考えられ、上層と下層では堆積環境が異なっていたと推定される。

遺物はほとんど検出されていないが、数点のサヌカイト剥片(233)、敲石(232)と縄文土器が数点出土している。231は小片であるだけでなく、ローリングを受けているため縄文の原体は不明であるが、縦方向の施文であることから縄文時代中期の船元式の可能性が考えられる。

縄文時代中期以前の遺物（図68）

縄文時代中期以前にさかのぼる遺物として、横大路火山灰層（K-Ah相当）の本体と考えられる本調査区第11層下面から、スクレイパー（237）や剥片(234～236)をはじめとするサヌカイトが出土している。237はスクレイパーで、礫打面の剥片を素材とし、背面には平坦な剥離面が認められる。刃部は、背面から主要剥離面側への片面調整によって形成される。

c. 第9層下面（第3面）

第3面では、第9層内で形成された3128流路を検出した。本調査区の第9層は、3128流路の西岸では安定した層相であるが、第10層内で形成された3152流路直上である東岸では、砂質が強く不安定な

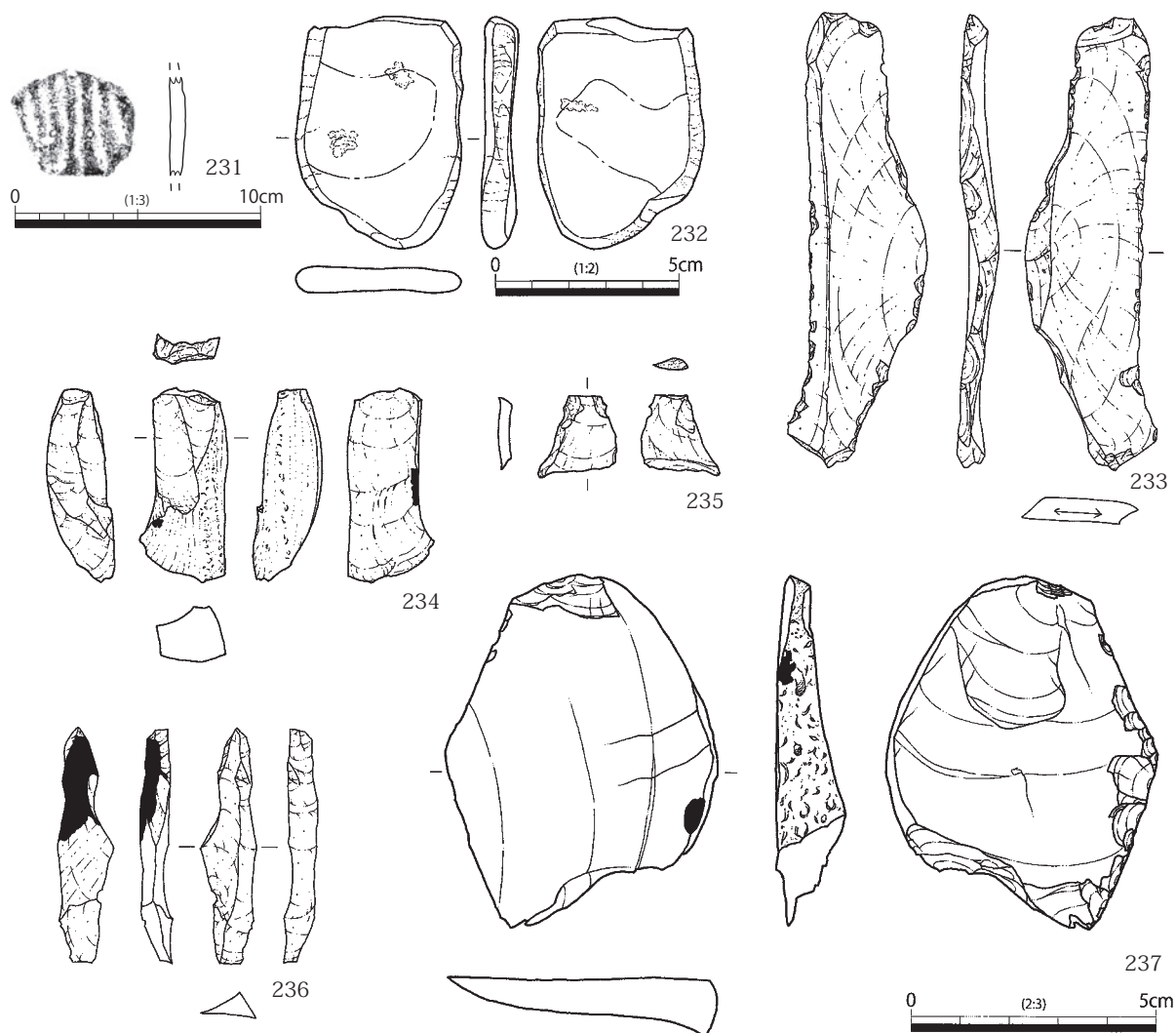


図68 3152流路、包含層 出土遺物

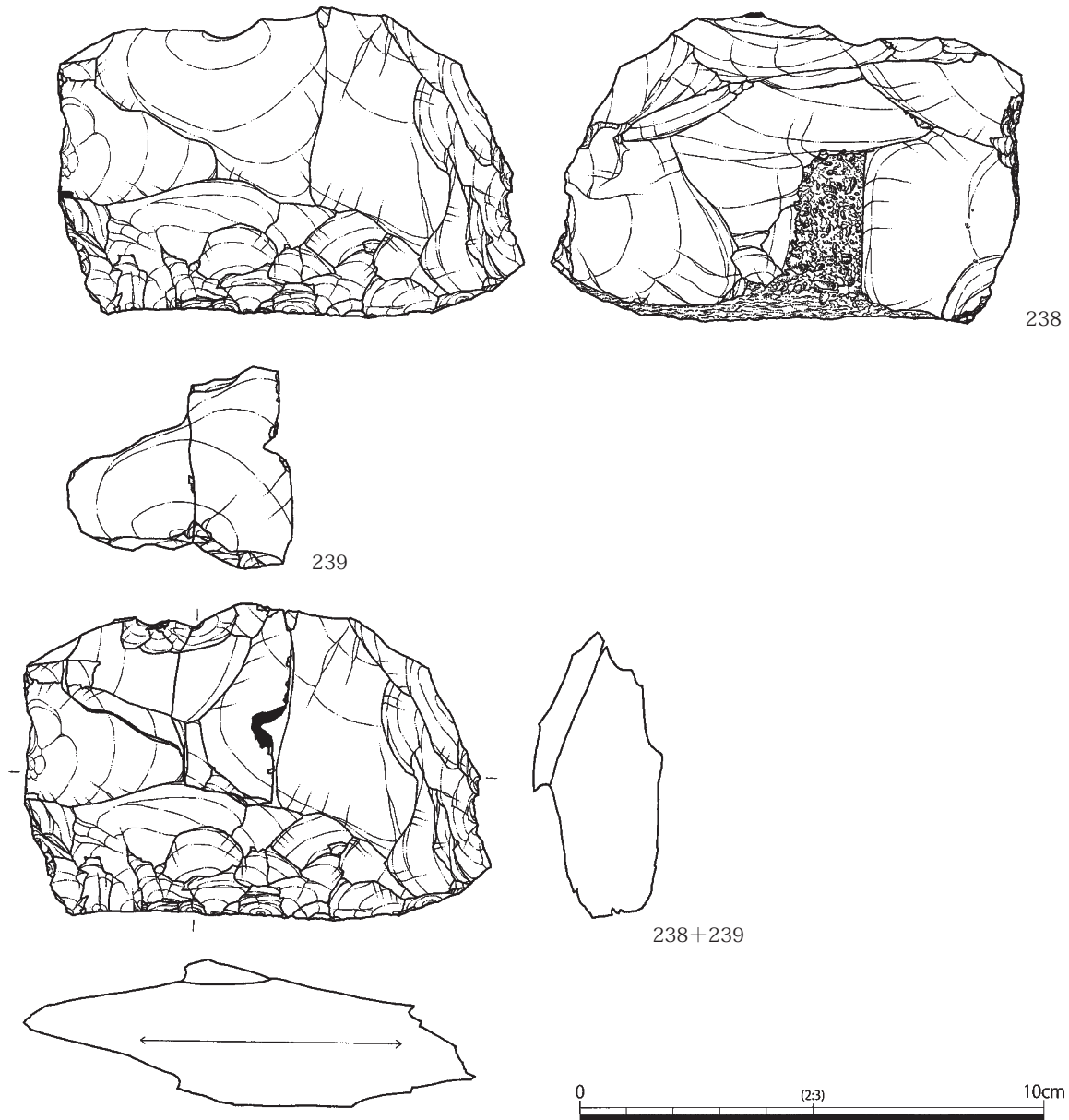


図69 5・6区第9層 出土遺物（石器）

層相である。なお、3128流路の西岸では、第9層内からサヌカイトが多く出土している。

238は、後述する3128流路がL字状に曲がる部分の外側肩部で検出された、3128流路に伴う落ち込み又は倒木痕から出土したものである。今回の調査では、第9層内で形成された建物跡などの集落に関連する遺構を確認することはできなかったが、非常に大型のサヌカイトであり、風化がほとんど認められないことから、人為的に埋納された可能性も考えられる。

238は、石核であるが、剥片剥離作業の進行により素材が不明である。上・左・右縁では、交互剥離状に作業が進行し、正面下方の剥離痕は下面の礫面を打面としている。下面の礫面には、打撃痕が顕著に認められ、裏面右下方にも打撃痕が認められる。重さ1638.3gを量る、非常に大型の石核である。

239は、複剥離打面の剥片。238の石核と接合する。背面はネガティブな剥離痕のみで構成され、238の石核が、素材の厚さからある程度減じられていることが分かる。右側縁に微細剥離痕が認められる。器体中央の折れ面で2点が接合しており、この折れ面は主要剥離面と同時に生じたものと考えられ

る。重量は100.7g。

3128流路 (図67・70、図版12)

調査区のほぼ中央を南から北方向へと延び、調査区北部でL字状に曲がり、北東方向へと大きく向きを変える、幅7～9m、深さ2.3mの大規模な流路である。埋土上部は、淘汰の悪いにぶい黄色の砂礫からなり、埋土下部は砂と泥が互層になっており、ラミナ構造が発達している。いずれの埋土も側方では細粒化し、暗色化や炭化物ラミナの発達が見られる。断面観察の結果では、埋土に明確な堆積環境の変化は無く、比較的短期間で埋没したものと考えられる。

流路の底部付近である、埋土下部および地山直上付近から、縄文土器及びサヌカイト製石器が出土している。分布は特に集中している様子はなく、ほぼ流路全面から検出されている。出土遺物を総覧すると、いずれも器面の炭化物付着が顕著で、遺存状態は良好であり、大ぶりの破片が目立つ。全体にローリングはほとんど受けていない状態であり、断面観察で推測されるように、すぐに砂礫により埋没したものと考えられる。

3128流路から出土した縄文土器は、時期がほぼ限定され、残存状態のきわめて良好な一括資料であることから、ここで項を設けて縄文土器と石器に関して詳細な記述をおこなうこととする。

3128流路出土土器

3128流路から、縄文土器及びサヌカイト製石器が出土している。縄文土器の総量は、コンテナ数25箱（総破片数775点）である。時期は縄文時代後期中葉・北白川上層式3期にあたる。出土遺物を総覧すると、いずれも器面の炭化物付着が顕著で遺存状態は良好であり、大ぶりの破片が目立つ。

分類はまず深鉢、浅鉢、鉢、注口土器に器種分類し、さらにそれぞれを全体の器形によって2群に大別した。次に、口縁部の形状に基づいて各々を3類に分類した。また、土器底部については胴部以上の形状を知りうるものがないため、上記の分類とは別に項目を立てることとした。なお、器種名及び文様、部位名称、編年案については泉拓良（泉1979・1989）、千葉豊（千葉2002）、岡田憲一（岡田2005；深井・岡田1998）の三氏の文献を参考にした。また、上記三氏および木下哲夫氏・矢野健一氏から多大な御教示を受けた。

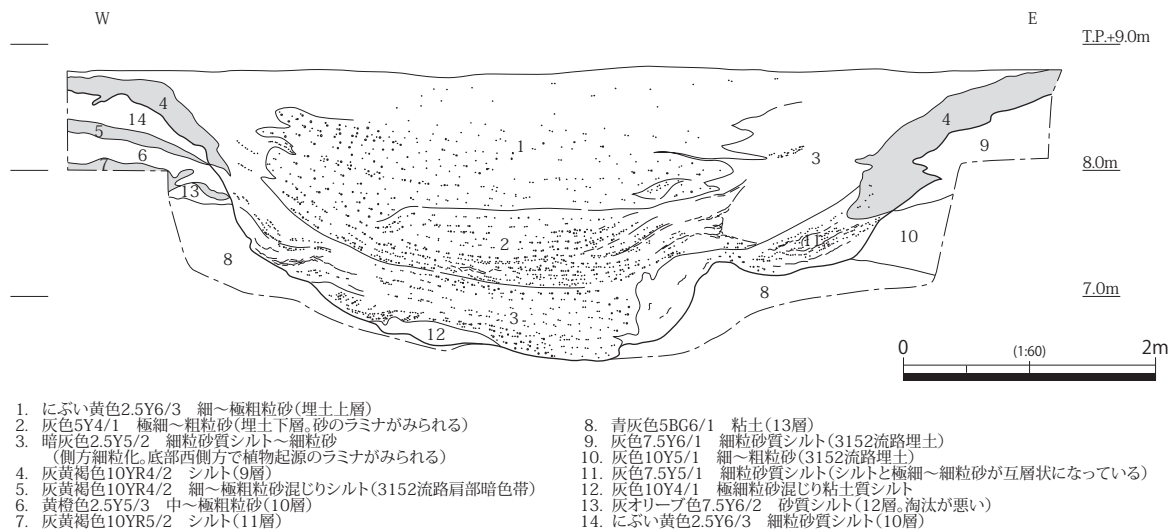


図70 3128流路 断面図

表1 分類の概要（本文ではI群2類aをI-2 aなどと記す）

器形による群別 口縁部形状による類別	砲弾型（I群） 深鉢／浅鉢	頸胴部屈曲型（II群） 深鉢／浅鉢／鉢
外反口縁（1類）	水平（a）／波状（b）	水平（a）／波状（b）
内弯口縁（2類）	水平（a）／波状（b）	水平（a）／波状（b）
直立口縁（3類）	水平（a）／波状（b）	水平（a）／波状（b）

深鉢

I群：頸胴部にくびれを持たず、砲弾型を呈する土器

I-1：口縁が外反する土器

I-1 a：口縁が水平を呈する土器

I-1 b：口縁が波状を呈する土器

I-2：胴部上半から口縁部にかけて内弯（内屈）する土器

I-2 a：口縁が水平を呈する土器

I-2 b：口縁が波状を呈する土器

I-3：口縁が直立または直線的に外傾する土器

I-3 a：口縁が水平を呈する土器

I-3 b：口縁が波状を呈する土器

II群：頸胴部にくびれを持つ土器

II-1：口縁が外反する土器

II-1 a：口縁が水平を呈する土器

II-2 b：口縁が波状を呈する土器

II-2：口縁が内弯する土器

II-2 a：口縁が水平を呈する土器

II-2 b：口縁が波状を呈する土器

II-3：口縁が直立する土器

II-2 a：口縁が水平を呈する土器

II-2 b：口縁が波状を呈する土器

浅鉢

I群：底部から口縁部にかけて彎曲するボール状の器形を呈する土器

I-2：口縁部が強く内弯し、口縁より下に最大径がくる土器

I-2 a：口縁が水平を呈する土器

I-2 b：口縁が波状を呈する土器

I-3：口縁部から胴部にかけて弱く内弯し、口縁が最大径となる土器

I-3 a：口縁が水平を呈する土器

I-3 b：口縁が波状を呈する土器

II群：底部から直線的に立ち上がり、胴部が「く」の字に屈曲する土器

- Ⅱ－１：口縁が外反する土器
- Ⅱ－２：口縁が外反しない土器

鉢

- Ⅱ群：胴部上半部で膨らみをもって立ち上がり、頸胴部にくびれを持つ土器
 - Ⅱ－１：口縁が外反する土器
 - Ⅱ－１ a：口縁が水平を呈する土器
 - Ⅱ－１ b：口縁が波状を呈する土器

注口土器

- Ⅰ群：在地系の土器
- Ⅱ群：加曾利B式系の土器

胴部・底部

深鉢

深鉢は器形から2群6類に分類する事ができる。頸胴部にくびれを持たない土器(Ⅰ群)と持つ土器(Ⅱ群)に大別し、さらに口縁部の形状によって各々を外反(1類)、内弯(2類)、直立(3類)に類別した。また、口縁部が水平のもの(a)と波状のもの(b)に細分した。深鉢に分類できるものの、頸胴部以下の形状を知り得ることができないものについては、別に口縁として項目を立てた。なお、以下の本文中では、Ⅰ群2類(a)をⅠ－2 aなどと表記する。

Ⅰ群

頸胴部にくびれを持たない土器である。

Ⅰ－1

口縁が外反する土器で、口縁が水平を呈するもの(a)と波状を呈するもの(b)がある。

Ⅰ－1 a (図71-240・241、図版56)

240は小型の深鉢である。胴部全面にLR縄文を施文する。外反する口縁内面の端部直下に1条の沈線を施文した後、端部にLR縄文を施文する。なお、胴部内面には炭化物が厚く付着している。241は口縁が大きく外反する粗製の深鉢である。

Ⅰ－2

胴部上半から口縁にかけて内弯(内屈)する土器で、口縁が水平を呈するもの(a)と波状を呈するもの(b)に細分できるが、(b)は出土していない。

Ⅰ－2 a (図71-242~249、図版56)

242・243は有文の深鉢である。242は大きく外に開いた後、内弯する深鉢である。口縁直下に1条の縄文帯(沈線+LR縄文)が口縁に並行して横走する。243は口縁端部を面取りし、2条目と3条目の間に無文帯を挟む縄文帯(沈線+LR縄文)が口縁に並行して横走する。244~249は粗製の深鉢である。244~246は口縁端部が面取りされ、内弯はやや弱い。247は内弯が極弱く、口縁端部を丸く納める。

248・249は口縁部が内弯ではなく、内屈に近く、口縁端部を内折する。

I-3

口縁が直立または直線的に外傾する土器で、口縁が水平のもの（a）と波状するもの（b）がある。

I-3 a（図71-251～257、図版56・57）

251は直立気味に外に開く器形で、口縁端部を面取りする。内面の口縁端部直下に口縁に並行して1条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。252～257は粗製の深鉢である。257が外に大きく開くのに対し、252～254・256は直立気味に外に開く。255は口縁端部を面取りし、極弱く外に開く。口縁のやや下方に焼成後に行われた穿孔がある。

I-3 b（図71-258～261、図版57）

258～261は口縁がわずかに内弯し波状する有文の深鉢である。口縁端部は面取りしている。258は波状口縁に並行する縄文帯（沈線+LR縄文）と横走する2条の縄文帯（沈線+LR縄文）の間に波頂部でS字の中心飾り（沈線+LR縄文）を、波底部に区切り文を有する。259は波状口縁に並行して横走する上段の3条の縄文帯（沈線+LR縄文）に下段の斜行する縄文帯（沈線+LR縄文）が収斂する。260は波頂部から垂下する連続するS字の中心飾りが、波状口縁に並行する縄文帯（沈線+LR縄文）と横走する縄文帯（多条沈線+LR縄文）を横断する。261は波状口縁に並行し、波頂部の中心飾りに向けて収斂する縄文帯（多条沈線+LR縄文）と横走する2条の縄文帯（沈線+LR縄文）により三角形を形成する。

I（図71-250、図版56）

250は一条の縄文帯が横走する。口縁部が欠損しているため、正確な形状は不明であるが、頸胴部にくびれを持たない深鉢と考えられる。

II群

頸胴部にくびれを持つ土器である。

II-1

口縁が外反する土器で、口縁が水平のもの（a）と波状するもの（b）がある。

II-1 a（図72-262～269、図版57・59）

262は小型の深鉢である。胴部上半部に逆C字の中心飾り（沈線+LR縄文）を伴う2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。弱く外反する口縁の内面には1条の沈線が横走する。また、内面には炭化物が厚く付着している。263～269は粗製の深鉢である。263～265は胴部外面にミガキ調整を行っている。また、263・264・266・268は口縁端部を断面四角形に面取りしている。なお、263・268の頸胴部のくびれは非常に弱い。

II-1 b（図73-270・271、図版58）

270は頸胴部のくびれが弱い波状口縁深鉢で、口縁にのみ文様帯を持つ。口縁部文様帯は、波底部から波頂部への上がり端に、区画を有する3条一組の縄文帯（沈線+LR縄文）が、波頂部の中心飾り（S字？）の上下を横走する。なお、口縁端部は断面四角形に面取り後、弱く凹状に仕上げる。口縁端部の凹状は波頂部が顕著であり、波底部は水平に近い。271は波状口縁に沿って横走する上下の縄文帯（多条沈線+LR縄文）が波底部の区切り文で収斂する。口縁端部は断面四角形に面取りする。なお、頸胴

部のくびれが弱く、口縁部にのみ文様帯を有するなど、270と同様の形状になる可能性がある。

II-2

口縁が内弯する所謂内弯キャリパー型土器で、口縁が水平のもの（a）と波状するもの（b）がある。

II-2 a (図73-272)

272は粗製の深鉢である。頸胴部のくびれが弱く、口縁部がわずかに内弯する。

II-2 b (図73-273~275)

273は波状口縁深鉢で、波頂部下に入り組み文風の横位の文様帯（沈線+LR縄文）を有する。縄文は波頂部下では横位に、区画部分のみ縦位に施文する。また、肥厚する口縁端部は内折されており、外折が主体の北白川上層式3期とは系譜が異なると考えられる。274は口縁部をユビオサエした粗製の深鉢である。粗製土器の波状口縁深鉢の類例は少ない。275は口縁直下と頸胴部のくびれに1条の縄文帯（沈線+LR縄文）を配し、波頂部より貼付隆帯が垂下する。なお、口縁波頂端部にこぶを有する。

II-1 群 (図74-276~294、図版60)

深鉢II群で、口縁部が外反すると思われるもの。276~294は外反口縁の途中までしか残っておらず、口縁端部の形状は不明である。276は上段に並行する3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走し、中・下段に中心飾りから縄文帯（多条沈線+LR縄文）が斜行する。なお、中心飾りはS字または上下2段の渦巻きである可能性が考えられる。277は中心飾り（沈線+LR縄文）の上下に3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走し、中心飾りから2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が上下の縄文帯に斜行する。278は上下の横走する縄文帯（沈線+LR縄文）と中心飾りから斜行する縄文帯（沈線+LR縄文）により多重の菱形を形成する。内面には粘土継ぎ目とユビオサエが見られる。なお、外面に厚く炭化物が付着している。279はS字の中心飾り（沈線+LR縄文）の上下に縄文帯（沈線+LR縄文）を伴う。なお、下段の中心飾りから斜行する縄文帯は並行して横走する上段の3条の縄文帯と収斂する可能性がある。280は並行し、横走する3条の縄文帯（沈線+LR縄文）と斜行する縄文帯が、入り組みのS字の中心飾り（沈線+LR縄文）で交わる。287は緩やかに外反する頸胴部直下に3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。282は胴部中央に位置すると考えられるS字（沈線+LR縄文）の中心飾りである。胴部中央付近のみの破片ではあるが、形状から頸胴部にくびれを持ち、外反する口縁をもつと考えられる。283は2段の渦巻きの中心飾り（沈線+LR縄文）から2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が斜行し、上部に3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。285は並行して横走する3条の縄文帯（沈線+LR縄文）に楕円形の中心飾りが伴う。286は中心飾りを伴う縄文帯（多条沈線+LR縄文）が胴部を斜行する。また、内面には赤色顔料の付着が確認された。288は頸胴部くびれ直下に3条の並行する縄文帯（沈線+LR縄文）が横走し、それに1条の縄文帯（沈線+LR縄文）が斜行もしくは収斂する。289は2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が並行して横走する。292は大きく外反する口縁と胴部の境に縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。290・293・294は縄文地の深鉢である。290は胴部以下に1本目と2本目にLR縄文を、3本目に無節のLr縄文を施文する。293は胴部外面にLR縄文またはLr縄文を施文している。294は頸胴部くびれ以下にLR縄文を施文する。291は粗製の深鉢である。

II (図74-295~308、図版61)

295~308は胴部の一部しか残っておらず、口縁の形状は不明である。しかしながら胴部が張る形状から、II群に属するものであると推定される。295は上下の縄文帯（LR縄文）が中心飾りに向かって収

斂して斜行する。296～298は中心飾りに三角形の側文帯を伴う深鉢の胴部である。296は渦巻き文の中心飾りから斜走する縄文帯（多条沈線+LR縄文）と頸胴部に並行して横走する縄文帯（沈線+LR縄文）により三角形を形成する。297は中心飾りから斜行する縄文帯（沈線+LR縄文）と横走する縄文帯（沈線+LR縄文）により三角形を形成する。298は中心飾りが遺存していないが、上下の縄文帯（多条沈線+LR縄文）により三角形を形成することから、296と同系統のものと考えられる。299・300は中心飾りを伴う縄文帯（多条沈線+LR縄文）である。縄文帯は中心飾りで収斂する。301は互い違いの無文三角形を縄文帯（多条沈線+LR縄文）により描く。302は上下2段の渦巻き文の中心飾りの上段から縄文帯（多条沈線+LR縄文）が斜行する。303は2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が並行して横走する。304は並行して横走する縄文帯（沈線+LR縄文）に多重弧の中心飾り（沈線+LR縄文）を伴う。淡輪遺跡に同系統の中心飾りが見られる。305は櫛歯状工具による櫛描文と沈線により縦位の文様を施文する。他の供伴する土器に比べて胎土がやや異なり、器壁が厚いことや文様構成が縦位であることから、やや時期の古いもの（北白川上層式1～2期?）か、搬入品のどちらかであると考えられる。306は2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が胴部を横走する。胎土の色調が白く、縄文帯に施文された原体がLR縄文であることから搬入品の可能性が考えられる。307は並行する2列の刺突文が横走する。クサリ礫を多く含むことから、和泉の土器である可能性が示唆される。308は同じLR縄文の原体を縦横に転がした羽状縄文を胴部に施文する。

浅鉢

浅鉢は器形から2群4類に分類する事ができる。底部から口縁部にかけて弯曲するボール状の器形をなす土器（Ⅰ群）、底部から直線的に立ち上がり、胴部が「く」の字に屈曲する土器（Ⅱ群）がある。

Ⅰ群

底部から口縁部にかけて湾曲するボール状の器形をなす土器である。口縁部が強く内弯し、口縁部より下に最大径がくるⅠ-2と、口縁部が弱く内弯し、口縁部が最大径となるⅠ-3がある。口縁部が外反するⅠ-Ⅰはない。

Ⅰ-2

口縁部が強く内弯し、口縁より下に最大径がくる土器である。口縁が水平を呈するもの（a）と波状を呈するもの（b）がある。

Ⅰ-2 a（図75-309～314、図版61）

309・310はともに無文の浅鉢である。309は胴部から口縁にかけて内弯するのに対し、310は胴部から口縁にかけての立ち上がりが垂直に近い。311は口縁と並行して横走する短沈線と沈線を交互（短沈線+沈線が3条）に配し、縦への区切り文を有する。施文手法から北陸系の加曾利B式の影響が伺える。312は口縁に並行して3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。313はやや弧状を呈する上下2段（上段：3条、下段：2条）の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。上段の口縁直下の沈線は、押し引きによるものであり、区切り文の代りに、空白を用いる。堀ノ内Ⅱ式の影響を受けた在地の浅鉢と考えられる。314は上段にやや波状する多条沈線が横走し、中段に区切り文に刺突をもつ多重弧を有し、下段は中段に規制される区切り文を有する多条沈線が横走する。文様の形状から、口縁が弱く波状する可能性が考えられる。

I-2 b (図75-315~317、図版61)

315は波頂部から垂下する文様帯によって切られる上下2段の文様帯が横走する。文様帯は沈線後、櫛歯状工具によって施文する。北陸から西日本にかけては加曾利B式の注口に用いられるモチーフを鉢や浅鉢に使用する例がみられ、315もこの類であると考えられる。316は多条沈線で横方向に展開する入り組み文様を描く。口縁の波状は弱く、わずかに内弯する。317は3条ないし4条の縄文帯（沈線+LR縄文）が並行して横走する。口縁の波状は弱く、端部を面取りする。

I-3

口縁部から胴部にかけて弱く内弯し、口縁が最大径となる土器である。口縁が水平を呈するもの（a）と波状を呈するもの（b）がある。

I-3 a (図75-318~326、図版62)

318は口縁端部をわずかに面取りした水平口縁で、平底の底部を持つ。内面は、ケズリ調整後ナデ調整をしている。外面には口縁に並行する上下2段の縄文帯が横走り、一部において上下の縄文帯をつなぐ相対する弧線を入れるなど、加曾利B1式の影響がうかがえる文様構成である。なお、口縁部から底部まで残存しており、反転による復元が可能である。319~323は口縁端部を面取りした水平口縁の浅鉢である。319は口縁に並行して3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。縄文帯の間の無文帯には何らかの黒色物質が塗布されている。320は口縁に並行して3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。細い撚りがあって太い撚りがあるという加曾利B2式系独特の撚りをしていることから、搬入品の可能性も考えられる。321は、口縁に並行して上下2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。上下の縄文帯は幅が異なり、上の縄文帯は下の約2倍である。322は口縁に並行して幅広の文様帯（沈線+LR縄文）が横走する。文様帯内には、区切り文として菱形状の文様を配する。類例は少ないが、口縁端部内面を面取りする事から、北白川上層式3期の浅鉢であると考えられる（註1）。323は口縁に並行して3条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。325は無文の小型浅鉢である。体部は外方に直線的に開き、底部は尖底気味の丸底である。326は口縁を欠いており、正確な器形は不明であるが、その形状より口縁部から胴部にかけて弱く内弯し、口縁が最大径となる浅鉢であると考えられる。外面には、口縁に並行すると考えられる2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。なお、内面に赤色顔料（水銀朱）の付着が認められる。

I-3 b (図75-327~330、図版63)

327は口縁に沿って2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走り、波頂部で渦巻きの中心飾り（沈線+LR縄文）を有する。なお、口縁の波状は弱く、わずかに内弯する。328は蛇行する沈線によって区切られる縄文帯（多条沈線+LR縄文）が口縁に沿って横走する。口縁の波状は弱く、端部を四角く面取りする。また、内面には赤色顔料（水銀朱）の付着が認められる。329は波状を呈する口縁に沿って2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が横走する。口縁の波状は弱く、端部を面取りする。330は328と同一個体である可能性が考えられる。

II群

底部から直線的に立ち上がり、胴部が「く」の字に屈曲する土器である。口縁部が外反するII-1と、口縁部が外反しないII-2に分類できるが、II-2は出土していない。

Ⅱ－1 (図75－331・332、図版63)

331は船形になるとされる浅鉢である。「く」の字に屈曲する胴部に外に開く口縁部がつく。口縁部は朝顔形の外反口縁の可能性はある。口縁部に沿って区切り文をもつ4条の縄文帯(沈線+LR縄文)が横走する。332は「く」の字に屈曲する胴部に外反する広口口縁がつく。胴部文様は入組弧線文(多条沈線+LR縄文)が横方向に連繋して展開する。なお、胴部内面に赤色顔料(水銀朱)の付着が見られる。

鉢

鉢は、器形から1群1類に分類する事ができる。胴部上半部で膨らみをもって立ち上がり、口縁部が外反する土器(Ⅱ－1)で、水平を呈する口縁(Ⅱ－1 a)と、波状を呈する口縁(Ⅱ－1 b)に細分できる。

Ⅱ－1 a (図76－333・334、図版64)

胴部上半で膨らみを持って立ち上がり、外反する口縁が水平を呈する土器である。333は粗製の鉢である。短く外反する口縁の端部は面取りされ、胴部上半は強く丸みを持って膨らむ。なお、内外面に厚く炭化物が付着している。334は頸胴部界に沈線が横走し、その下に楕円形の区画文を連続的に配している。楕円形の内部には、LR原体の羽状縄文を施文する。

Ⅱ－1 b (図76－335・336、図版63・64)

胴部上半部で膨らみを持って立ち上がり、外反する口縁が波状を呈する土器である。335・336はともに器高が低く、径が大きい。また、胴部上半部に文様帯を施文する。335は三角形を伴うS字の中心飾り(沈線+LR縄文)の上下に縄文帯(多条沈線+LR縄文)が横走する。短く外反する4波頂の波状口縁は、内面に波頂部のS字を開始点とする縄文帯(沈線+LR縄文)を施文する。内面の施文は一部であり、正面観をもつものと考えられる。336も335同様、三角形を伴う中心飾りの上下に縄文帯(多条沈線+LR縄文)が横走すると思われる。

注口土器

注口土器は、器形から在地系のもの(I群)と加曾利B式系のもの(Ⅱ群)に分類することができる。

I群 (図76－337、図版64)

337は在地系の注口土器である。注口部の断面形が楕円形ではなく、正円に近い形状をしており、一乗寺K式に続いていく器形である。

Ⅱ群 (図76－338～341、図版64)

338～341は加曾利B式系の注口土器である。338は加曾利B式系の注口土器の口縁である。口縁端部を肥厚させ、口唇部と端部内面を凹状にする。339は組紐状に編んだ文様帯(ハケ状工具+沈線)を施文している。加曾利B式の注口土器を模倣した在地のものであると考えられる。340は沈線で区画を行った幾何学的な文様の内部を櫛歯状工具により、施文している。341はハケ状工具により同心円状の文様を施文している。340・341の胴部文様は加曾利B式の深鉢に見られる文様である。

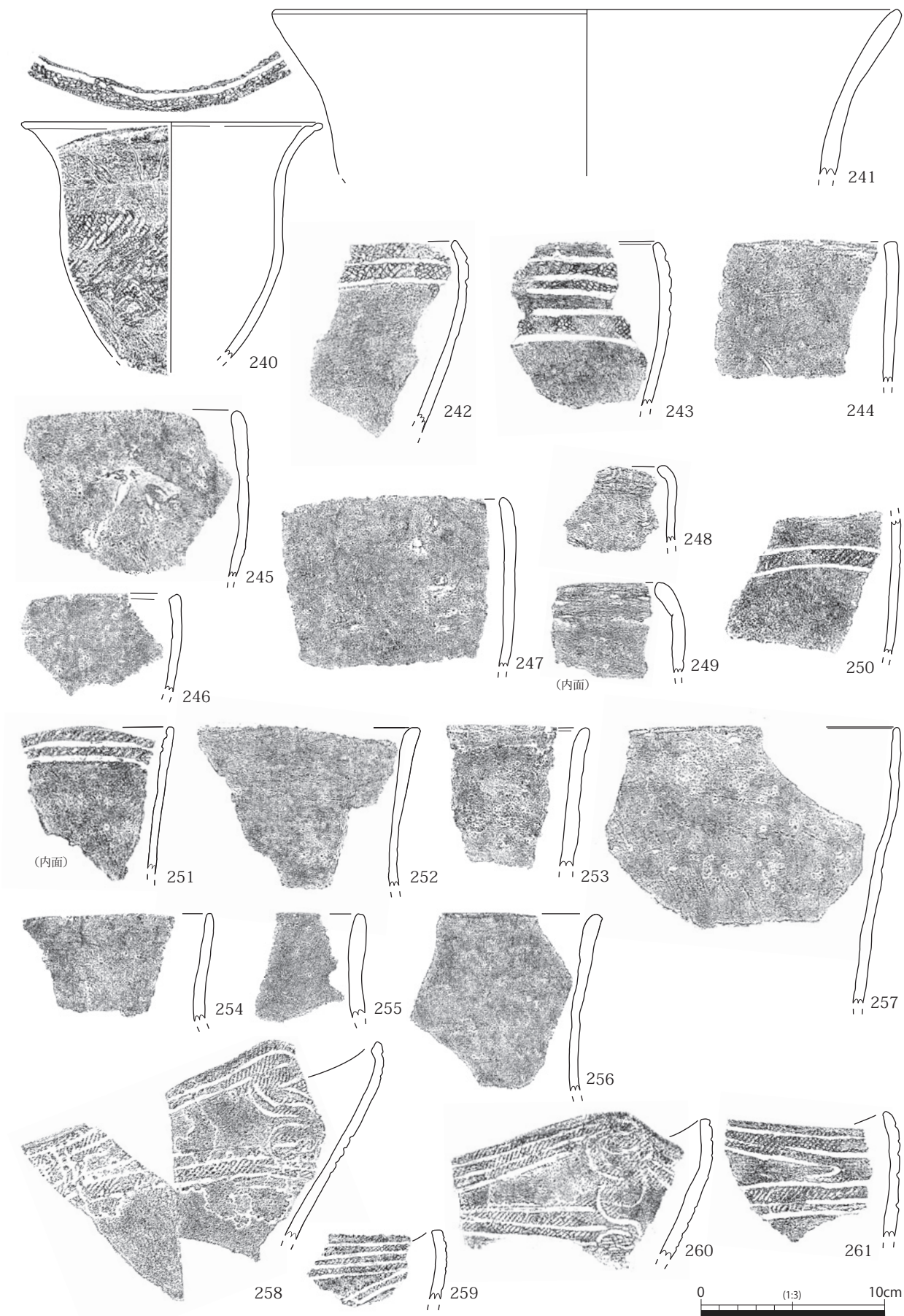


图71 3128流路 出土遺物（縄文土器1）

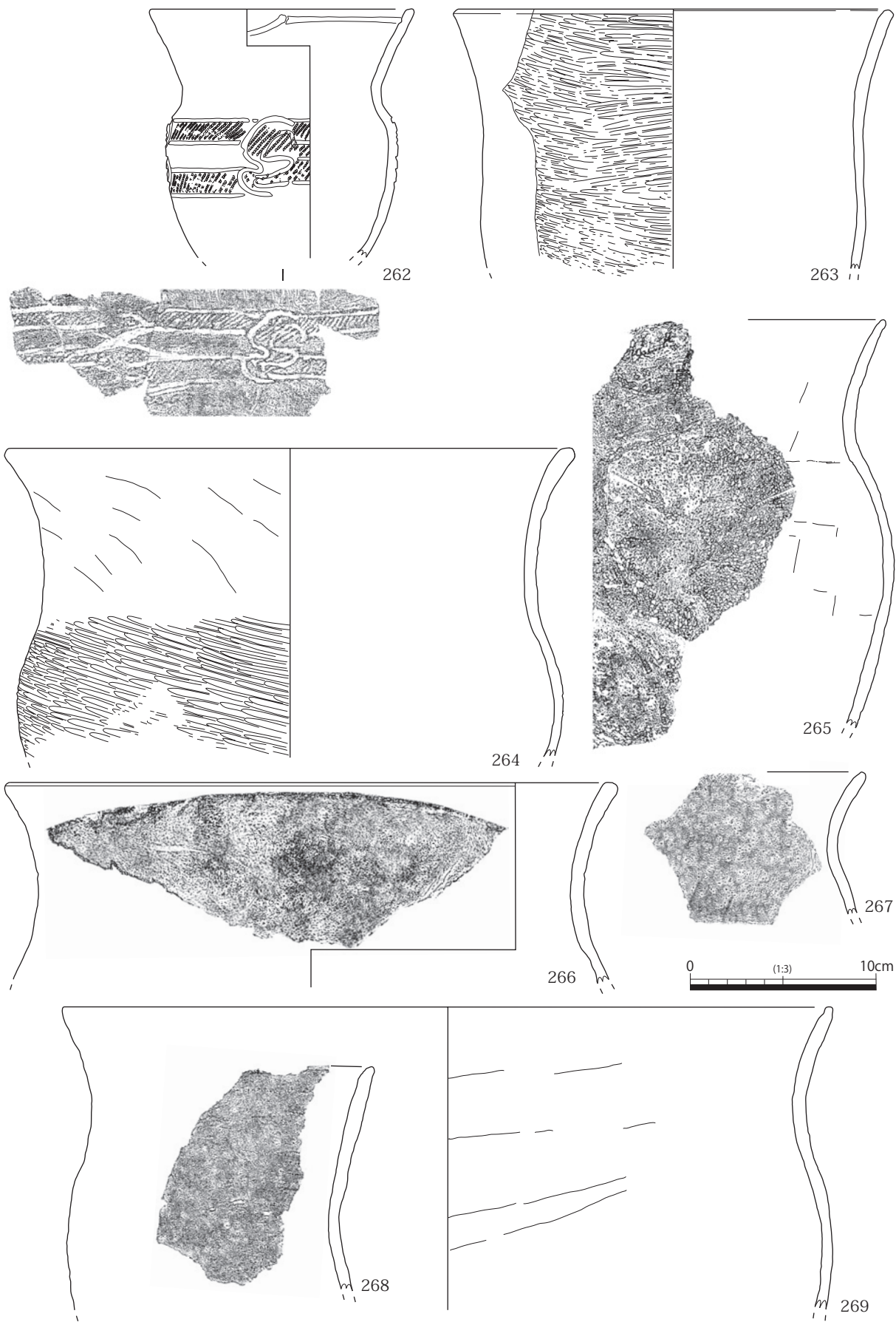


图72 3128流路 出土遺物（繩文土器2）

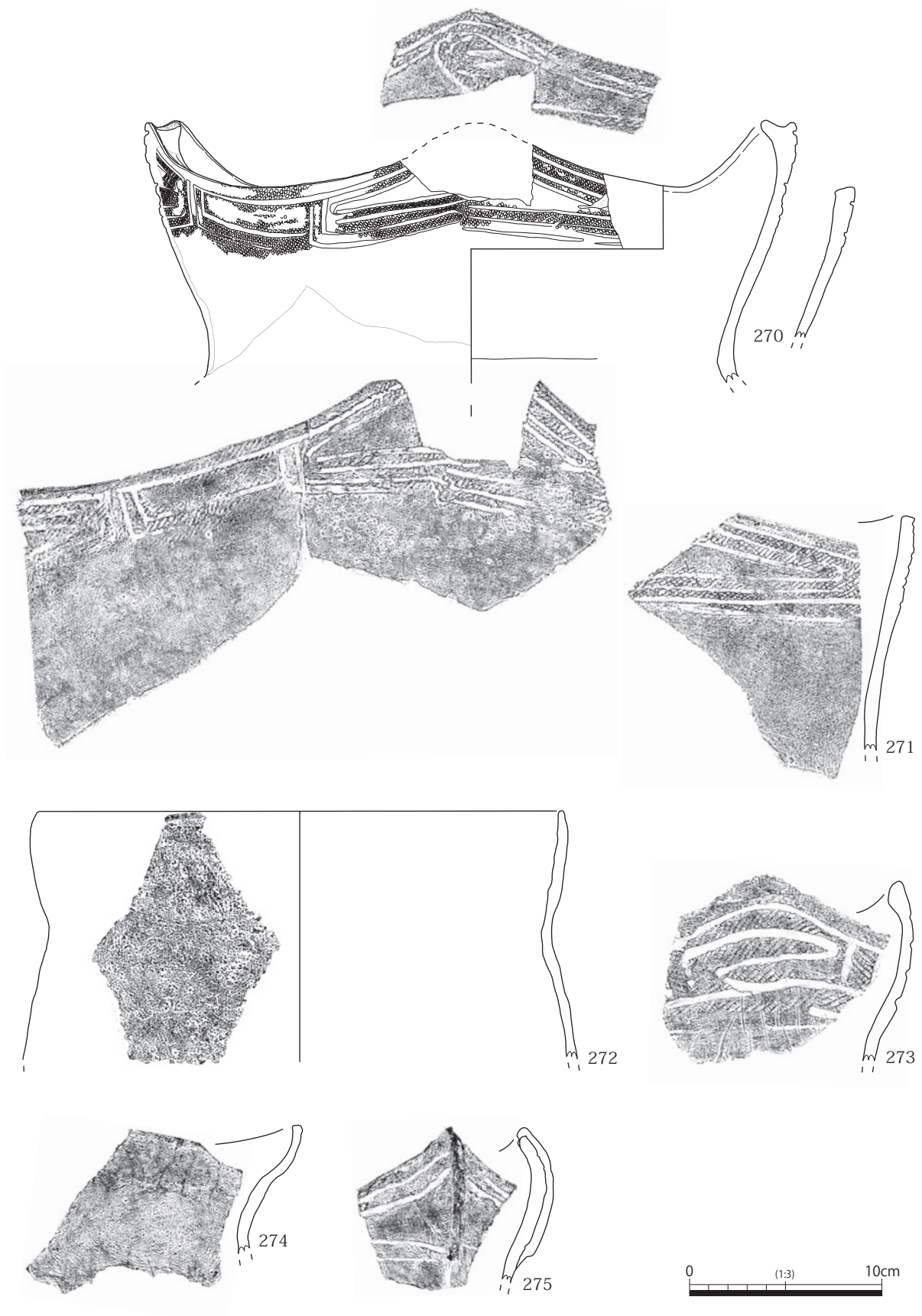


图73 3128流路 出土遺物（縄文土器3）

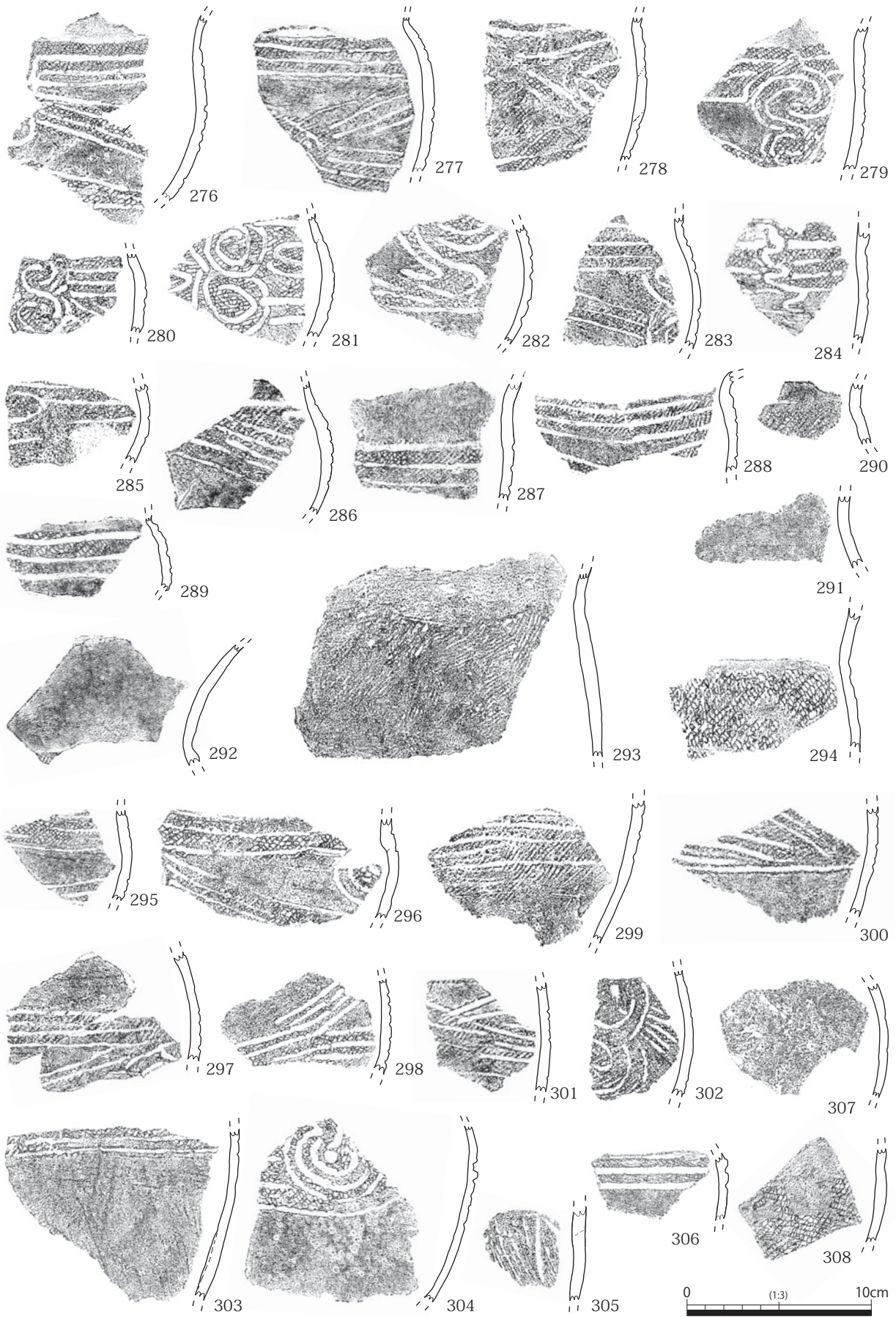


圖74 3128流路 出土遺物 (繩文土器 4)

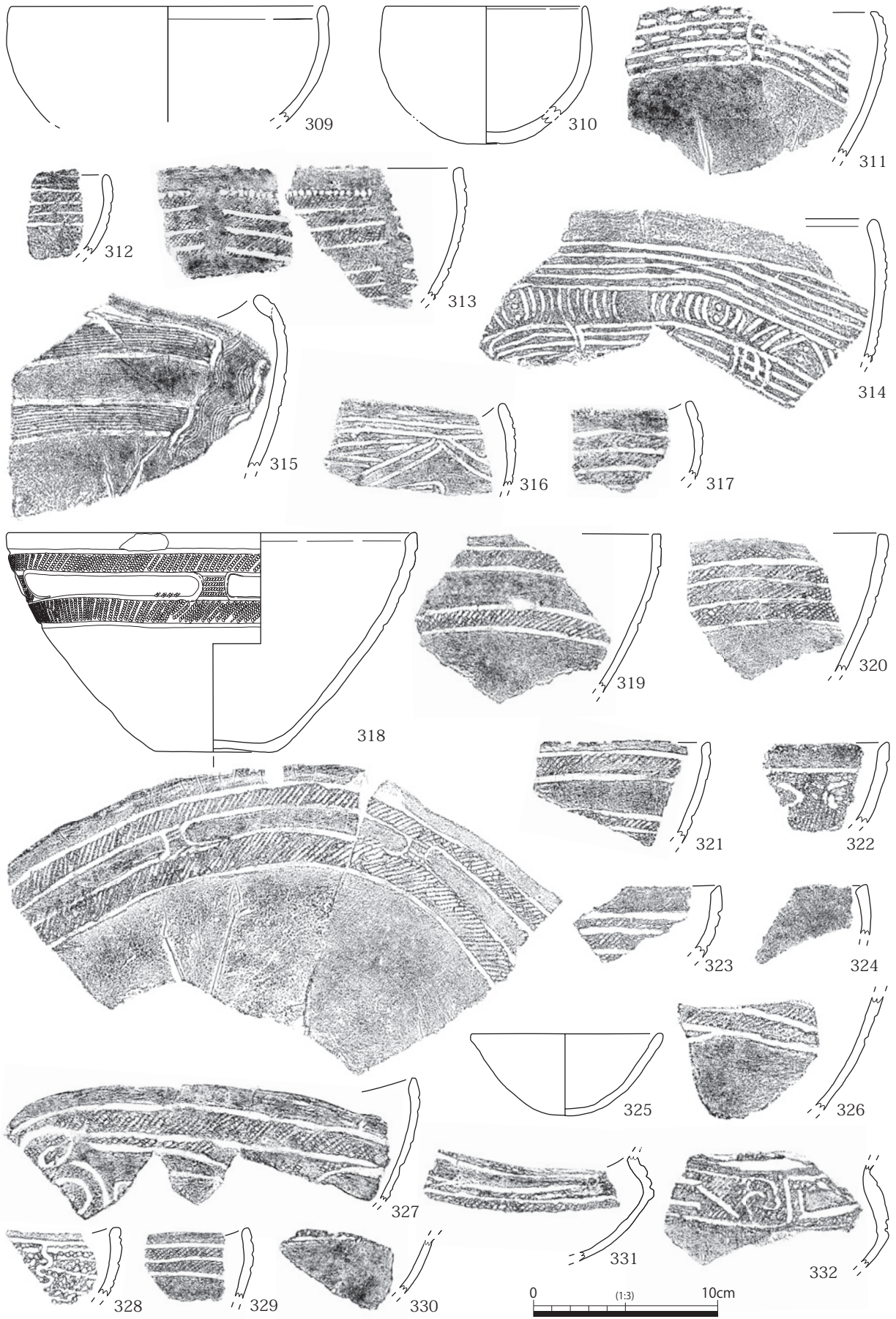


图75 3128流路 出土遺物 (繩文土器 5)

口縁部（図77-342～369、図版64・65）

342～369は深鉢あるいは鉢の口縁部である。このうち、342～347は口縁内面に施文が見られる外反口縁である。342は口縁端部直下に凹線を有し、端部にLR縄文を伴う横位のS字の隆帯を施文する。343は口縁端部にLR縄文を施文し、端部直下に横位の渦巻き文を伴う縄文帯（沈線+LR縄文）がめぐる。344は弱く波状する外反口縁で口縁内面に沈線で菱形を描く。沈線内にLR縄文を施文し、中央には竹管文を縦に2つ配する。345は外反口縁の端部内面直下に1条の沈線がめぐる。346・347は口縁内面の端部直下に口縁に並行して2条の縄文帯（沈線+LR縄文）がめぐる。346については横位のS字またはJ字を伴う可能性がある。なお、これらの口縁内面に文様を有する外反口縁は瀬戸内地域の彦崎K式の影響が考えられる。

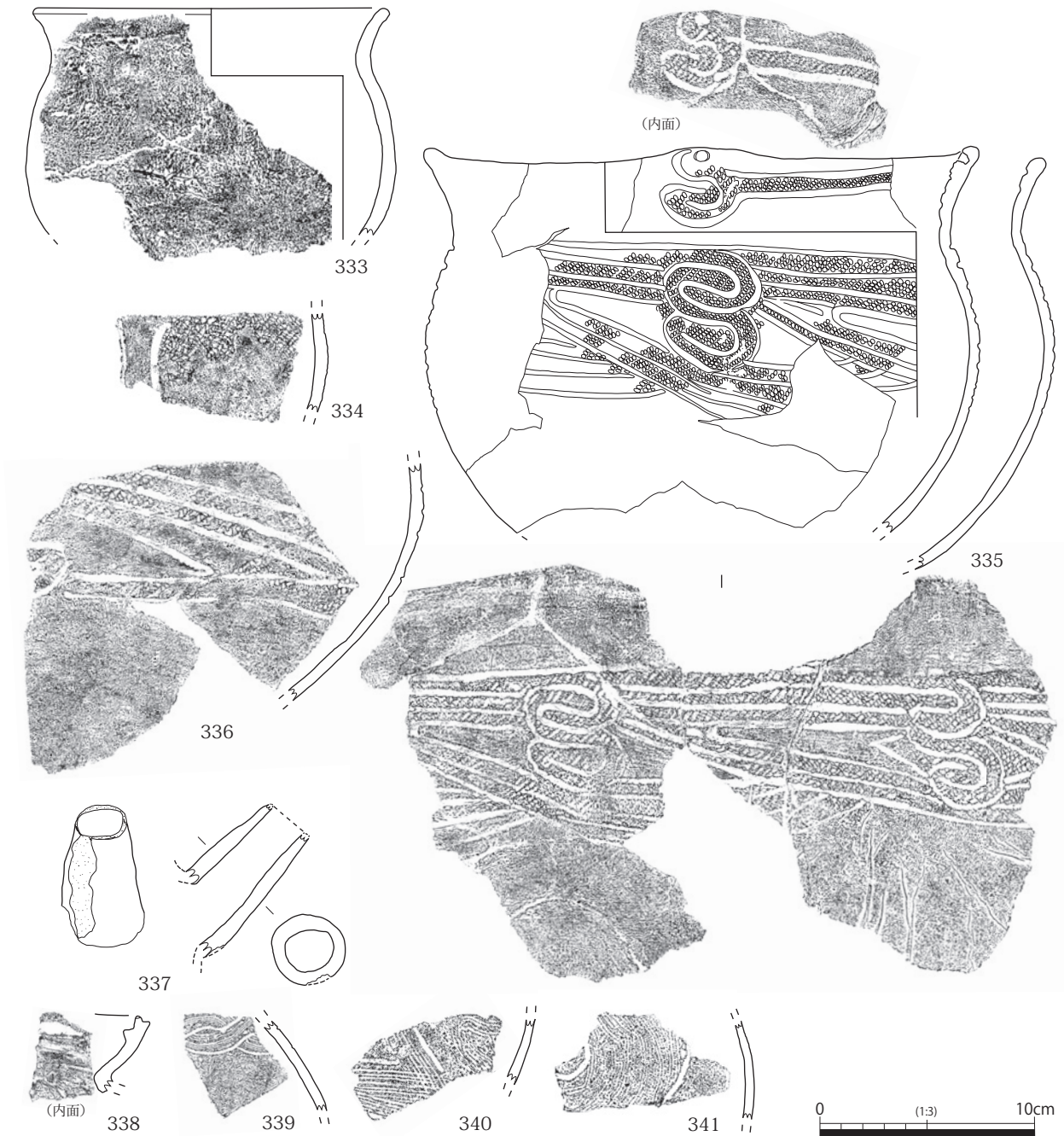


図76 3128流路 出土遺物（縄文土器6）

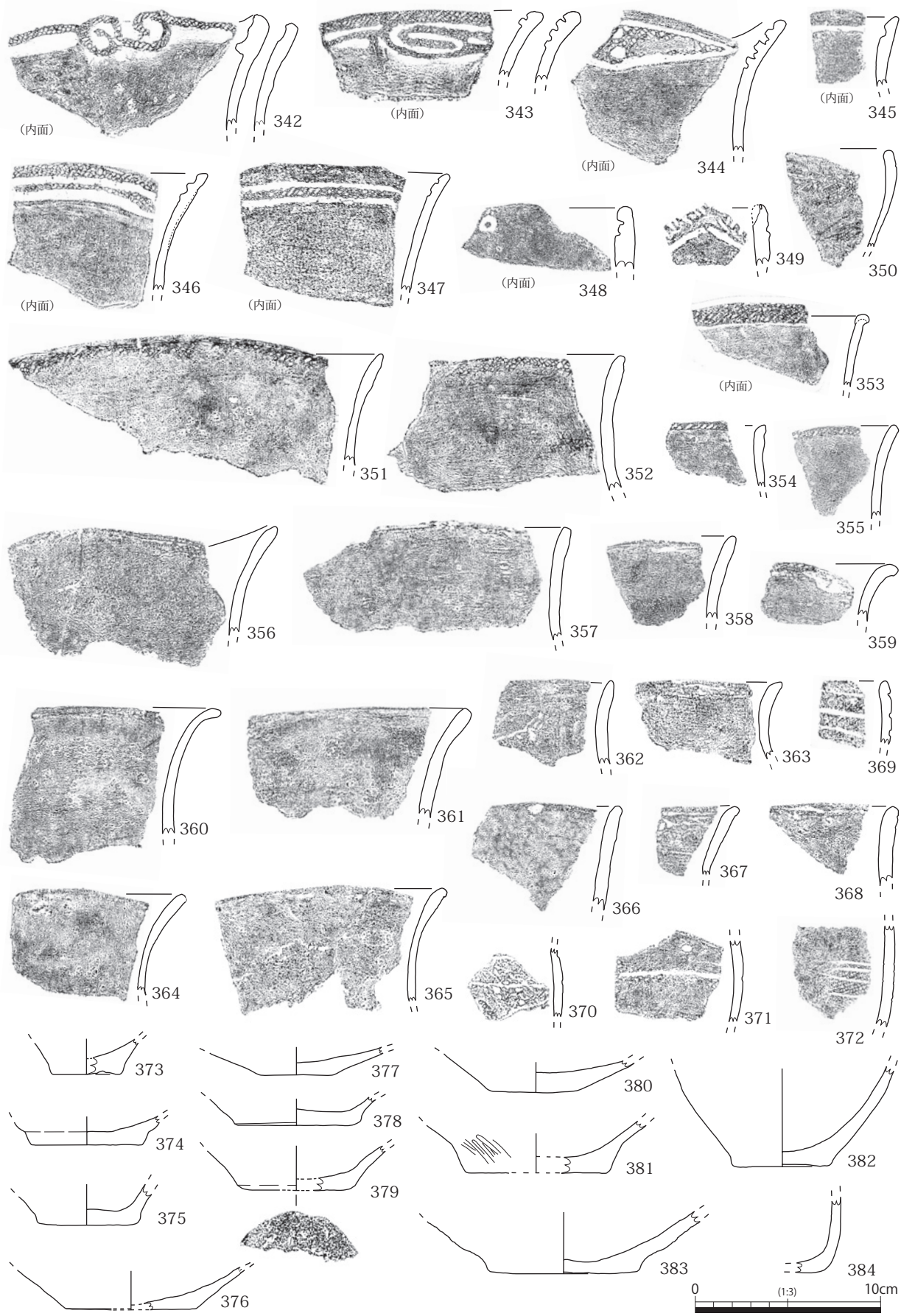


图77 3128流路 出土遺物 (繩文土器7)

348・349は頸胴部にくびれを持たず、ほぼ直立する深鉢の口縁と考えられる。348は口縁端部を面取りし、端部内面直下に竹管文を1つ有する。349は口縁端部に刻み目を持ち、直下に1条の沈線を有する。波状口縁深鉢の口縁部と考えられる。

350は口縁部が内弯し、端部を面取りする。摩耗のため、LR縄文であるのかRL縄文の燃戻しであるのか判然としないが、外面に縄文を施文する。なお、波状口縁の口唇部の可能性も考えられる。

351～355は口縁端部にLR縄文を施文する外反口縁である。353は口縁を内折後、端部にLR縄文を施文する。351・352・354は口縁端部を面取り後、端部外面をLR縄文で施文する。

356～365は無文の外反口縁である。このうち359・360は口縁を外に引き出し端部を外折し、357・361・363・365は口縁端部を面取りする。

366～368は直線的に開く深鉢の口縁部である。367は直線的に外に大きく開く形状の深鉢の口縁で、口縁端部を外折し、丸く収める。366・368は開きがごく弱く、ほぼ直立の近い形状を持つ深鉢と考えられる。なお、368の口縁端部直下には種子痕の可能性が考えられる圧痕が認められる。

369は2条の縄文帯（沈線+LR縄文）が胴部を並行して横走する。

胴部（図77-370～372、図版65）

370～372は深鉢の胴部である。370は胴部を縄文帯が横走する。摩耗し、鮮明ではないが縄文原体が右撚（RI）の可能性がある。371は胴部に1条の沈線をめぐらす。なお、沈線の直上に種子痕の可能性のある圧痕が認められる。372は胴部に多条沈線+LR縄文をめぐらす。

底部（図77-373～384、図版65）

373～384はすべて平底である。このうち、375・374・378・379・382・383・384は深鉢の底部に、376・377・380は浅鉢または鉢の底部になると考えられる。なお、373の内面には、赤色顔料（水銀朱）の付着が、384の内外面には塗膜状の付着物と赤色顔料（ベンガラ）の付着が認められる。

小結

以上、3128流路より出土した縄文土器を概観した結果、図化したもののうち、器形、器種が判別可能なものの比率は深鉢：浅鉢：鉢：注口＝15：5：1：1である。中でも、深鉢においては頸胴部屈曲型外反口縁深鉢（深鉢Ⅱ群1類）が、浅鉢においてはボール状の器形を呈するもの（浅鉢Ⅰ群）が高率を占めている。また、3128流路から出土した縄文土器全体の破片総数から底部を除いたものを母数とし、無文土器と有文土器との比率をみると、おおよそ7：3である。このうち、縄文を施文した有文土器207点のうち3点を除き、縄文原体はLR縄文である。

なお、北白川上層式3期から一乗寺K式への移行期が存在し、縄文原体の比率がLR縄文主体からRL縄文主体となる、兵庫県佃遺跡佃23層出土縄文土器を指標とする佃下層期をもって転換点とする縄文土器の細分案に基づくと、3128流路より出土した縄文土器は広義の北白川上層式3期の新しい部分に相当する（註2）。しかしながら、細分案における広義の北白川上層式3期の指標の一つである充填縄文（縄文+沈線）ではなく、磨消縄文（沈線+縄文）による施文手法を多用していること、頸胴部屈曲型外反口縁深鉢が高率を占めることなど、3128流路出土縄文土器は、細分案の分析に用いられた当該期の遺跡とは異なる様相を示している。これらの差異が地域性に基づくものであるのか、時間差に基づ

くものであるかは今後の課題である。

註

註1：「御経塚神殿遺跡」（石川県野々市町）、「折戸遺跡」（石川県珠洲市）、「弘川佃遺跡」（滋賀県）

註2：岡田憲一 2008 「近畿地方最後の縄の系譜 ―縄文時代後期における縄文原体の転換背景―」『泉拓良先生還暦記念論文集 文化財学としての考古学』 泉拓良先生還暦記念事業会

3128流路出土石器（図78～82、図版66～70）

3128流路からは、剥片石器が67点、礫石器が4点出土している。これらの石器は、縄文土器と同様、ほとんどのものが遺構底部付近より出土しており、帰属時期は縄文時代後期と考えられる。

剥片石器の内訳をみると、スクレイパー 8点・石鏃の未完成品 1点・楔形石器 1点・R.F.（二次加工ある剥片） 4点・石核10点・剥片42点・破片 1点であり、石材はすべてサヌカイトである。剥片と破片については、単純最大長（最も長い部分の計測値）が2cm以上のものを剥片、2cm未満を破片として、便宜的に分類している。また折れ面で接合する資料(395、399)が認められるが、それらは接合状態で1点としてカウントしている。

礫石器の内訳は、敲石2点・台石1点・打欠石錘1点であり、石材は砂岩などが使用されている（註1）。転用品(407)に関しては、最終的な使用痕跡によって分類を行い、また、折れ面で接合する資料(405、407)は、剥片石器同様接合状態で1点としてカウントしている。

観察表の項目について説明しておく、『長さ』、『幅』は実測図と同じ方向に据え（註2）、四角形を想定して計測している。『厚さ』は最大厚を計測している。『打面形態』は剥片と剥片素材とわかる資料のみ観察し、「礫打面」・「単剥離面打面」・「複剥離面打面」・「複合打面」（礫面と剥離面で構成された打面）・「点状打面」に分類している。『背面』は剥片と剥片素材とわかるもののみ観察し、背面に礫面が付着している場合は「礫」、背面にポジティブな剥離面が認められるものは「ポジ」、背面に平坦な剥離面が認められるものは「平坦」、背面がネガティブな剥離面のみで構成されるものは「ネガのみ」と記している。

以下器種ごとに、説明を加えていきたい。なお実測図断面内の矢印はサヌカイトの石理走向を示す。

① 剥片石器（図78～81、表2・3）

・スクレイパー

8点出土しており、すべて図化した。385は、礫打面の剥片を素材とする。打面から側面にかけて礫面のカーブを取り込んでおり、背面はネガティブな剥離面のみで構成される。刃部は両面調整によって形成される。386は、礫打面の剥片を素材とする。打面から側面にかけて礫面のカーブを取り込んでおり、背面はネガティブな剥離面のみで構成される。刃部は両面調整によって形成される。387は、礫打面の剥片を素材とする。打面から側面にかけて礫面のカーブを取り込んでおり、背面にはポジティブな剥離面が認められる。刃部は両面調整によって形成される。388は、剥片を素材とする。打面が顕著に潰れているが、左側面下方に礫面が付着していることから、礫打面であったと考えられる。385～387と同様、打面から側面にかけて礫面のカーブが取り込まれており、背面はネガティブな剥離面のみで構成される。刃部は背面から主要剥離面側への片面調整によって形成される。389は、礫打面の剥片を素材と

する。背面はほぼ礫面で被われており、いわゆる礫端片素材である。刃部は両面調整によって形成される。390は、剥片を素材とする。折損により、打面形態は不明である。右側面に礫面を取り込んでおり、背面はネガティブな剥離面のみで構成される。刃部は微細な剥離痕のみが認められる部分が多く、刃部形成が顕著ではない。ただし、腹面側の刃部中央には、比較的大きな調整剥離痕が認められる。391は、剥片を素材とする。刃部調整によって打面が除去されており、打面形態は不明である。背面はネガティブな剥離面のみで構成される。左側面に折れ面が認められることから、少なからず素材の大きさを減じていることがわかる。また正面左方にこの折れ面を打面とする二次加工が認められることや、刃部調整にこの折れ面が切られていることから、事故的な破損ではなく、折断による整形加工であった可能性が高い。刃部は両面調整によって下縁に形成されている。上縁にも連続的な加工が認められるが、明らかな刃部である下縁に比べ非常に調整が粗く、凹凸も顕著であることから刃部とは考えにくい。392は、単剥離面打面の剥片を素材とする。背面はネガティブな剥離面のみで構成される。刃部は主要剥離面から背面側への片面調整によって形成され、刃部の調整剥離痕の稜はやや摩滅し、光沢を帯びている。

・石鏃の未完成品

1点出土しており、すべて図化した。393は、明瞭に先端を作り出しているものの、非常に調整が荒く、厚手であり、完成品とは考えにくい。裏面左下方に素材の打面を残しており、単剥離面打面の剥片を素材としていることがわかる。第7層下面精査中に出土しており、北白川上層式3期の縄文土器に伴う資料ではない可能性が高い。

・楔形石器

1点出土しており、すべて図化した。394は、加工の進行により、素材が不明である。上、左、右縁に潰れが観察される。

・R.F.

4点出土しており、1点図化した。395は、器体中央の折れ面で2点が接合しており、この折れ面は正面中央上方の二次加工痕と同時に生じた可能性が高い。剥片を素材とし、背面には礫面が付着している。打面形態は二次加工によって除去されているため不明である。

・石核

10点出土しており、6点図化した。396は、剥片剥離作業の進行により素材は不明である。基本的に上面、右側面の礫面を打面に、裏面を作業面に設定している。裏面右上方の剥離開始部には節理が認められる。397は、剥片剥離作業の進行により素材は不明である。ただし、正・裏面ともに平坦な剥離面が認められ、特に裏面中央の平坦な剥離面はポジティブな剥離面と考えることもできる。基本的に右側面の礫面、上面の折れ面を打面に、正・裏面を作業面に設定している。398は、剥片剥離作業の進行により素材は不明である。基本的に上面の礫面を打面に、正面を作業面に設定している。下面にみられる縦方向の折れ面は、両極技法によるものと考えられ、この折れ面の末端あたる正面右端の階段状剥離がその証左といえよう。399は、器体中央の折れ面で2点が接合している。礫打面の縦長剥片を素材とし、背面には礫面が付着している。左側面の礫面を打面に、素材の主要剥離面を作業面に設定してお

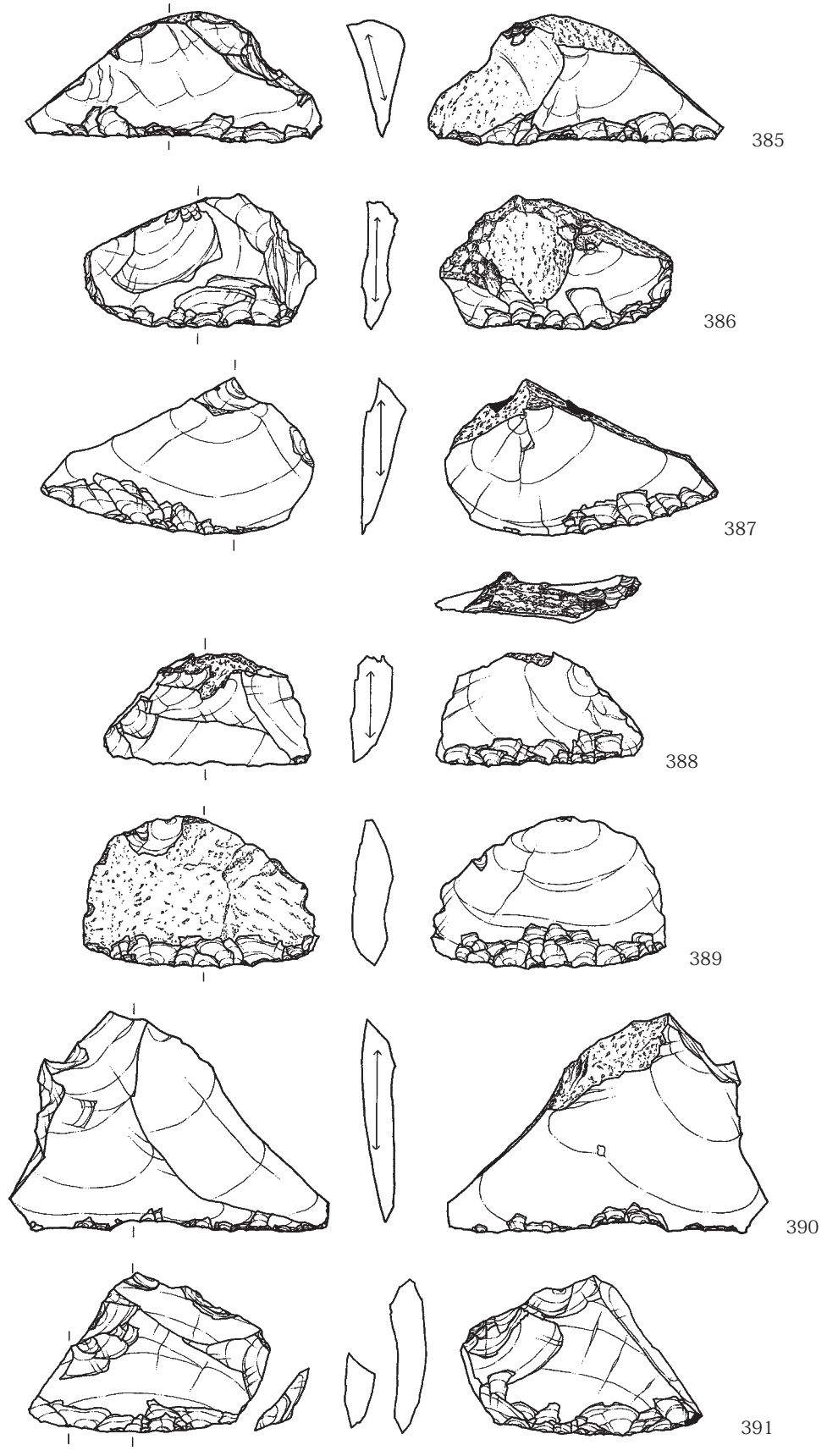


图78 3128流路 出土遺物 (剥片石器 1)

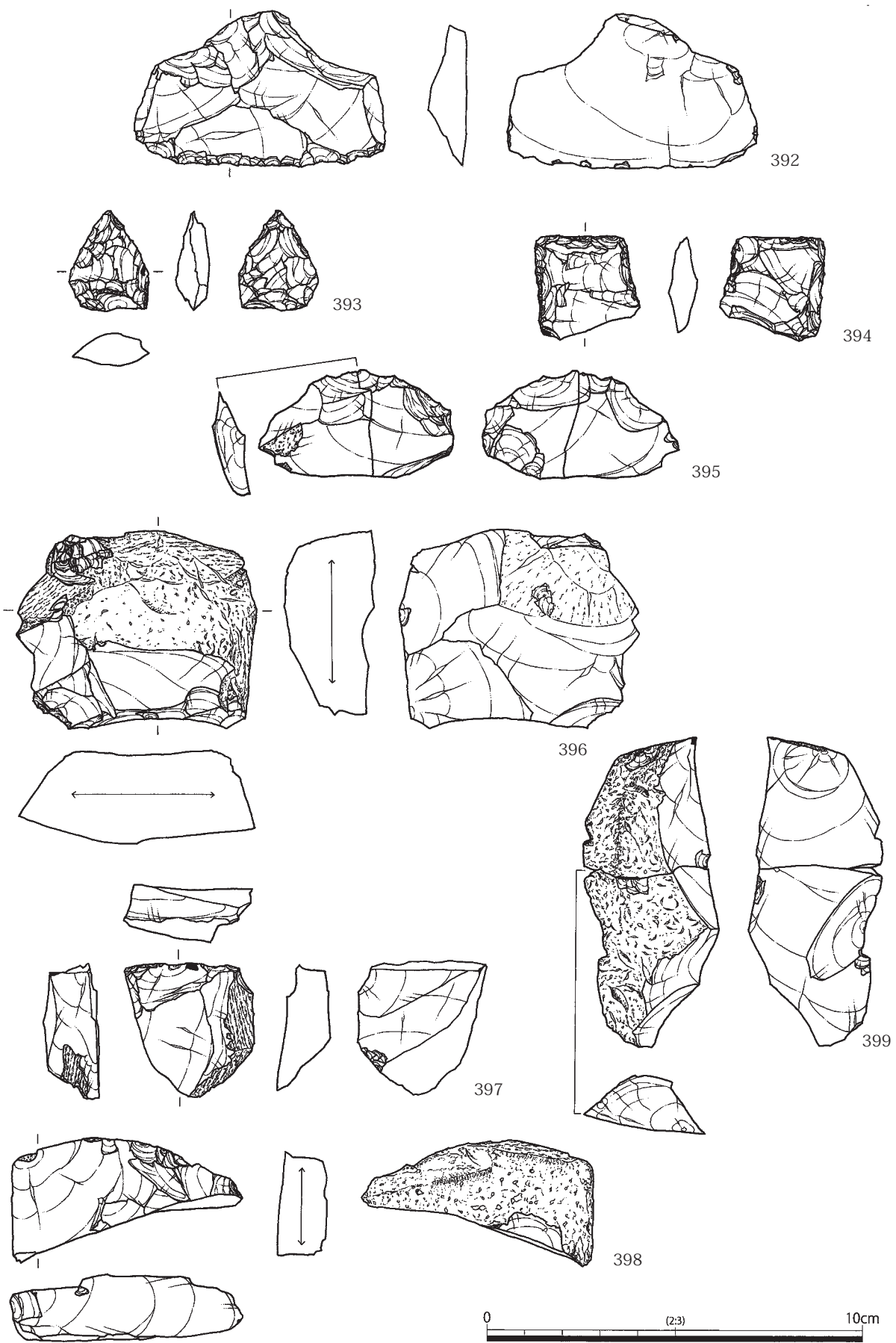


图79 3128流路 出土遺物 (剥片石器 2)

り、打面に設定されている左側面には剥片剥離を意図したと考えられる打撃痕が少なくとも4つ認められる。器体中央の折れ面左下方には、左側面にみられる打撃痕の一つと、打点の位置を同じくする潜在的割れが認められ、この時の打撃が折損の原因の一つと考えられる。402は、剥片を素材とし、背面には礫面が付着している。上縁では交互剥離状に作業が進行し、素材の打面が除去されている。主要剥離面側左方の大きな剥離痕は右側面の礫面を打面としている。当遺構から出土した石核のなかで最も大型であり、重さは318gを量る。403は、剥片を素材とし、背面はほぼ礫面で被われている。素材の打面は、背面側左上方の主要剥離面と同時に生じたと考えられる剥離面により欠損している。下面、左・右側面にも礫面が付着しており、素材をえた石核の大きさのある程度想定できる。また、背面右上方の剥離痕は背面左上方の主要剥離面と同時に生じた剥離面を切っており、二次的なものとわかる。左側面の礫面を打面に、素材の背面を作業面に設定している。

・剥片

42点出土しており、2点図化した。400は、単剥離面打面の剥片。背面はネガティブな剥離面のみで構成される。背面側の右側縁には微細剥離痕が認められる。401は、礫打面の剥片。背面に平坦な剥離面を取り込んでいる。左側縁から下縁にかけて微細剥離痕が認められる。

なお400、401の石材は、剥離面の風化色が灰色を呈し、黒色の縞模様がみられるサヌカイトであり、礫面観も含めて、397、403の石材と類似することから、この4点は同一母岩であった可能性が考えられる。

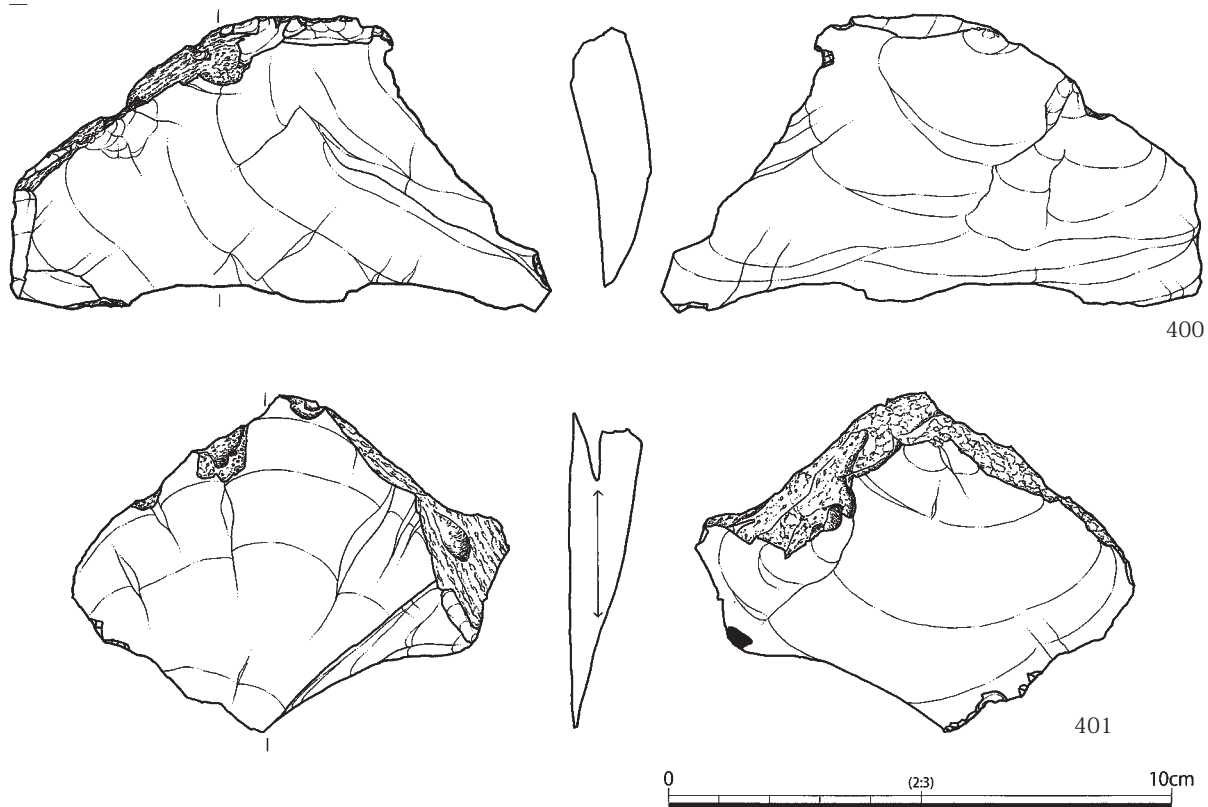


図80 3128流路 出土遺物（剥片石器3）

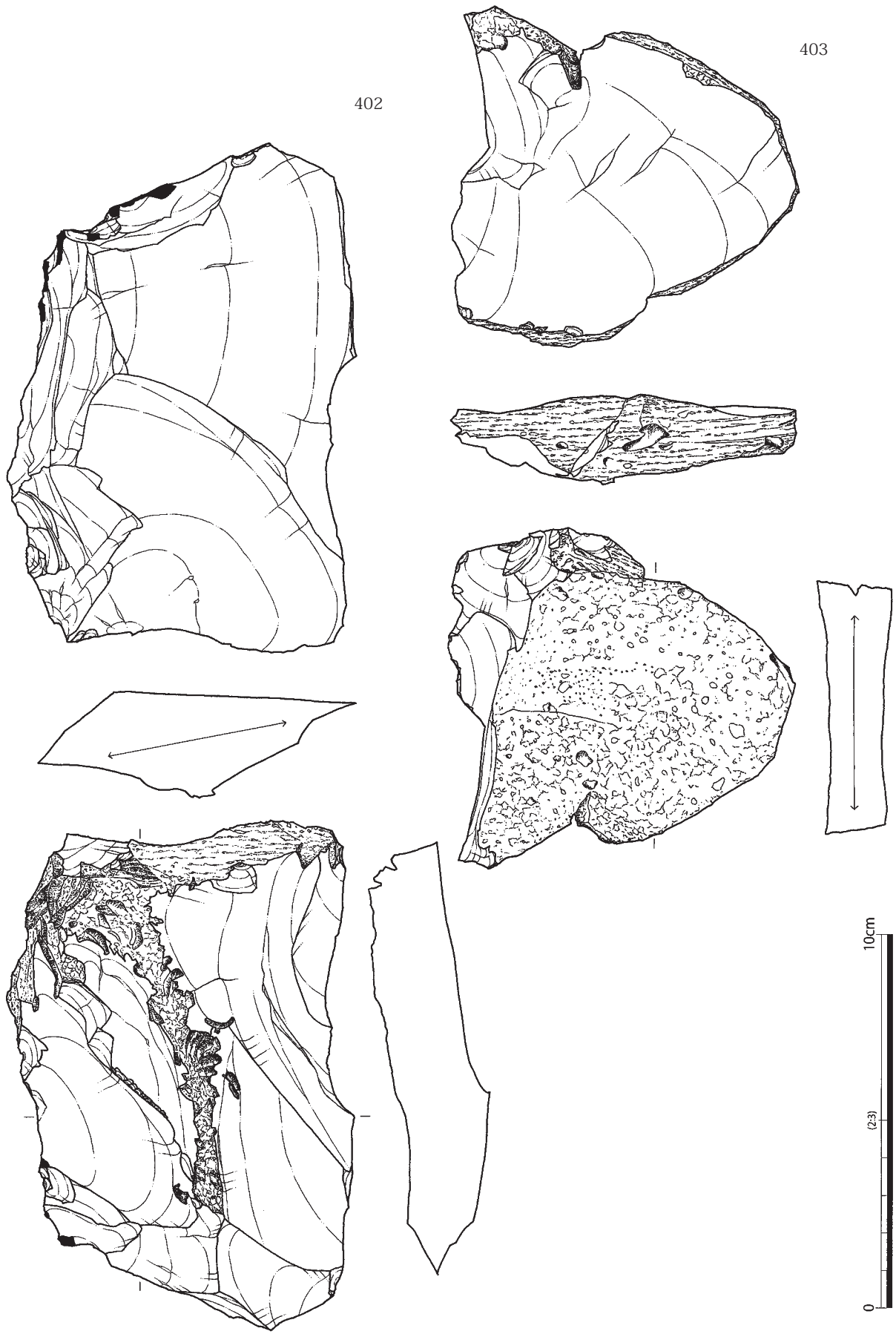
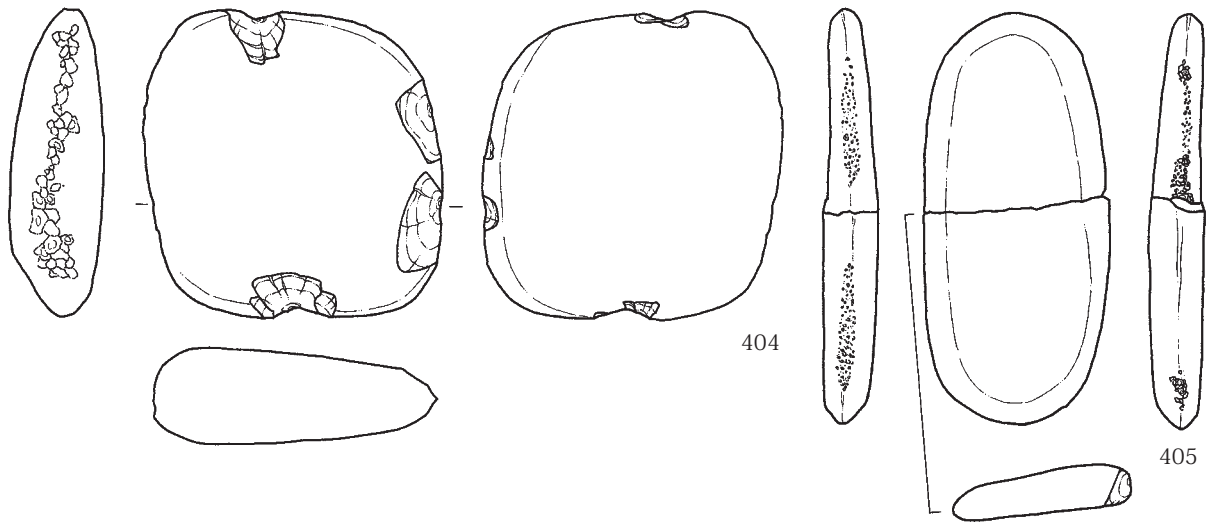
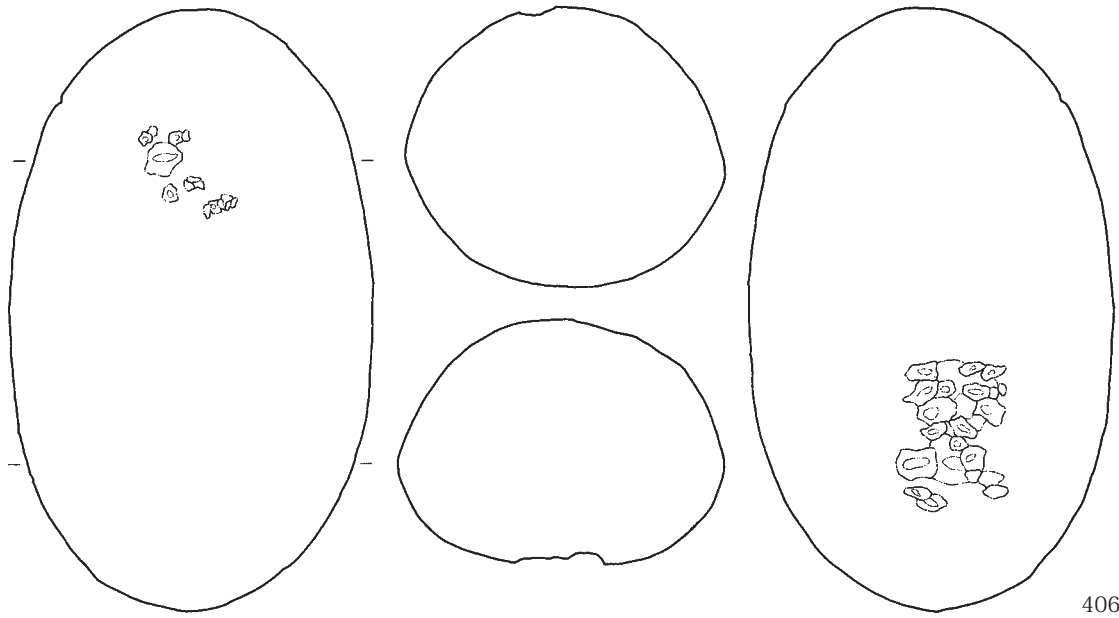


图81 3128流路 出土遺物 (剥片石器4)

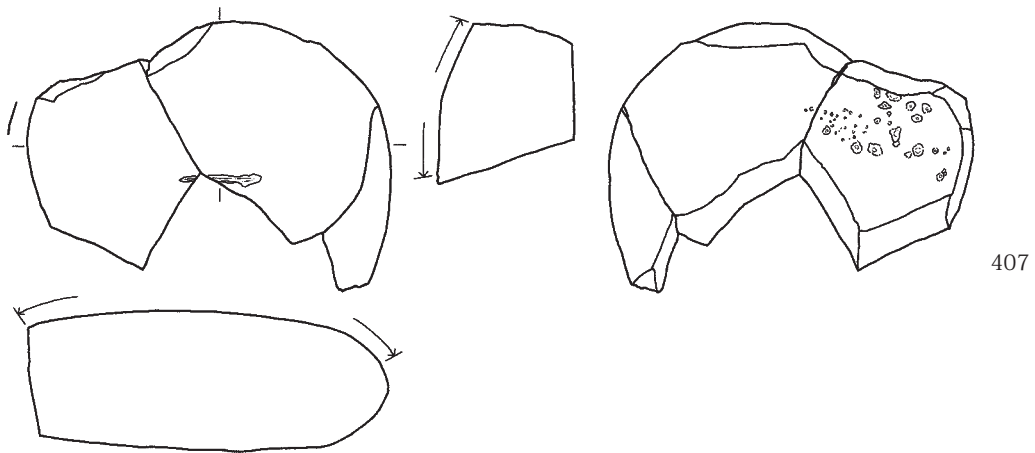


404

405



406



407

0 (1:2) 10cm

图82 3128流路 出土遺物 (礫石器)

表2 3128流路出土剥片石器一覧(1)

図版no	写真図版no	遺物no	整理no	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打面形態	背面	備考
78	66	385	2	スクレイパー	30.2	69.5	13.7	22.5	礫	ネガのみ	
78	66	386	30	スクレイパー	31.1	55.0	9.4	16.8	礫	ネガのみ	
78	66	387	64	スクレイパー	36.8	64.6	9.0	17.1	礫	ポジ	
78	66	388	1	スクレイパー	26.2	48.7	9.1	12.3	礫	ネガのみ	
78	66	389	3	スクレイパー	35.2	55.3	9.5	20.1	礫	礫	礫端片素材
78	66	390	68	スクレイパー	51.2	76.1	7.1	25.9	不明	ネガのみ	
78	66	391	4	スクレイパー	37.1	57.0	9.4	22.1	不明	ネガのみ	
79	67	392	5	スクレイパー	41.5	67.2	10.1	24.5	単剥離面	ネガのみ	二重バルブ
79	67	393	62	石鏃未完製品	27.2	21.9	8.1	4.4	単剥離面?	不明	
79	67	394	36	楔形石器	28.0	28.5	7.6	6.2			素材不明
79	67	395	8+7	R.F.	29.5	52.3	9.0	13.8	不明	礫	折れ面で2点が接合
			6	R.F.	37.2	64.5	11.8	24.2	礫	ポジ	
			24	R.F.	51.9	57.0	14.6	31.8	不明	礫	
			58	R.F.	51.7	39.5	6.6	12.4	礫	ネガのみ	
79	67	396	43	石核	53.0	64.9	25.0	114.4			素材不明
79	67	397	45	石核	35.4	34.1	15.3	19.3			素材不明
79	67	398	10	石核	32.0	61.5	7.0	35.1			素材不明
79	67	399	14+13	石核	82.0	35.4	19.1	47.6	礫	礫	剥片素材、折れ面で2点が接合
81	69	402	9	石核	93.5	135.5	27.1	318.0	不明	礫	剥片素材
81	68	403	33	石核	92.3	91.3	20.1	175.3	不明	礫	剥片素材
			16	石核	40.1	47.3	15.6	30.3	礫	礫	剥片素材
			42	石核	49.3	35.1	10.9	14.8			素材不明
			44	石核	44.8	71.6	19.4	66.4			素材不明
			46	石核	31.9	36.9	10.7	13.9			素材不明、被熱
80	68	400	32	剥片	59.2	108.2	12.3	72.2	単剥離面	ネガのみ	
80	68	401	34	剥片	67.0	87.5	25.6	76.1	礫	平坦	
			11	剥片	42.0	46.4	15.1	20.1	礫	平坦	
			12	剥片	28.9	75.9	6.3	14.7	礫	平坦	二重バルブ
			15	剥片	42.2	48.1	11.8	20.6	礫	ネガのみ	
			17	剥片	87.0	76.5	27.7	135.9	単剥離面	礫	
			18	剥片	61.5	43.8	17.3	37.8	単剥離面	礫	
			19	剥片	22.8	15.0	4.6	1.2	単剥離面	平坦	
			20	剥片	37.7	19.2	5.8	4.3	点状	ネガのみ	ハイポラーフレイク
			21	剥片	34.0	18.0	5.8	3.6	点状	礫	ハイポラーフレイク
			22	剥片	23.8	19.0	2.6	1.0	不明	ネガのみ	
			23	剥片	32.9	26.7	6.6	5.0	点状	ネガのみ	ハイポラーフレイク
			25	剥片	37.8	30.1	8.2	7.7	点状	ネガのみ	
			26	剥片	39.1	46.2	9.6	12.3	不明	礫	
			27	剥片	33.3	41.0	7.9	8.9	点状	礫	
			28	剥片	16.1	27.1	7.0	2.0	礫	礫	
			29	剥片	27.2	17.2	3.8	1.6	不明	礫	
			31	剥片	21.3	45.1	7.3	6.3	単剥離面	ポジ	垂直割れ
			35	剥片	53.1	19.5	5.8	4.2	点状	ネガのみ	
			37	剥片	31.4	30.2	9.9	8.6	礫	ネガのみ	二重バルブ
			38	剥片	33.0	46.1	12.2	15.9	礫	礫	
			39	剥片	27.7	46.1	8.2	9.0	礫	ネガのみ	二重バルブ
			40	剥片	27.5	50.0	10.9	12.6	礫	ネガのみ	二重バルブ
			41	剥片	57.6	37.2	7.1	18.1	礫	ネガのみ	
			47	剥片	31.7	19.9	6.3	3.2	点状	ポジ	
			48	剥片	24.2	27.8	8.4	4.6	不明	ネガのみ	
			49	剥片	20.1	27.3	4.2	2.2	点状	ネガのみ	被熱
			50	剥片	74.9	64.0	13.5	71.7	礫	ネガのみ	
			51	剥片	65.7	35.1	16.0	37.9	単剥離面	礫	

表3 3128流路出土剥片石器一覧(2)

図版no	写真図版no	遺物no	整理no	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打面形態	背面	備考
			52	剥片	65.2	46.6	8.8	17.8	礫	ネガのみ	被熱
			53	剥片	48.1	48.0	6.3	11.0	点状	礫	
			54	剥片	30.2	35.0	9.5	9.3	不明	平坦	
			55	剥片	38.9	35.0	4.8	5.9	点状	ネガのみ	
			57	剥片	24.0	27.8	8.9	5.1	点状	礫	
			59	剥片	42.1	49.2	13.8	23.6	複剥離	ポジ	
			60	剥片	32.8	52.7	13.1	13.9	複合	礫	
			61	剥片	48.0	24.9	12.1	8.4	複剥離	礫	
			66	剥片	26.8	19.7	4.1	1.9	不明	ネガのみ	
			67	剥片	24.9	12.2	6.1	1.4	不明	ポジ	
			63	剥片	21.9	33.0	3.9	3.2	不明	ネガのみ	ローリングを受ける
			65	剥片	48.4	35.0	10.6	20.8	礫	平坦	
			69	剥片	27.2	25.7	4.2	2.2	礫	ネガのみ	
			56	破片	17.5	14.9	3.9	1.0	不明	ネガのみ	

② 礫石器(図82、表4)

・打欠石錘

1点出土しており、すべて図化した。404は、扁平な円礫を素材とし、両面剥離によって上下両端を打欠いている。右側縁にも両面剥離による打欠きが認められるが、対辺には打欠きは認められない。また、左側面には顕著な敲打痕が認められ、敲石としても使用された可能性が考えられる。

・敲石

2点出土しており、すべて図化した。405は、扁平な円礫の側縁を使用している。器体中央の折れ面で2点が接合しており、上方個体の折れ面右方には、剥離痕が認められる。この剥離痕は右側縁中央の敲打痕と同時形成である可能性が高く、上方個体に関しては折損した後も使用されていたと考えられる。406は、非常に大きな円礫を使用している。礫の断面は楕円形であるが、裏面はやや平坦となる。敲打痕は正面上方、裏面下方に認められ、裏面のほうが、より顕著である。

・台石

1点出土しており、すべて図化した。407は、3点が接合している。正面中央に溝状の凹みが認められ、両極技法の痕跡である可能性が考えられる。溝の長さは約22mmであり、当遺構から一点出土した楔形石器のサイズともほぼ一致する。また正面には溝状の凹みに切られる磨滅痕(実測図← →の範囲)が認められ、磨石を転用したことがわかる。

表4 3128流路出土礫石器一覧

図版no	写真図版no	遺物no	整理no	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
82	70	404	76	石錘	砂岩	81.2	80.2	24.9	251.2	敲打痕あり
82	70	405	70+71	敲石	砂岩	109.1	50.0	12.6	114.9	折れ面で2点が接合
82	70	406	77	敲石	砂岩	159.1	98.0	74.2	1698.5	
82	70	407	72+73+74	台石	ハンレイ岩?	71.4	96.0	38.3	325.1	3点が接合

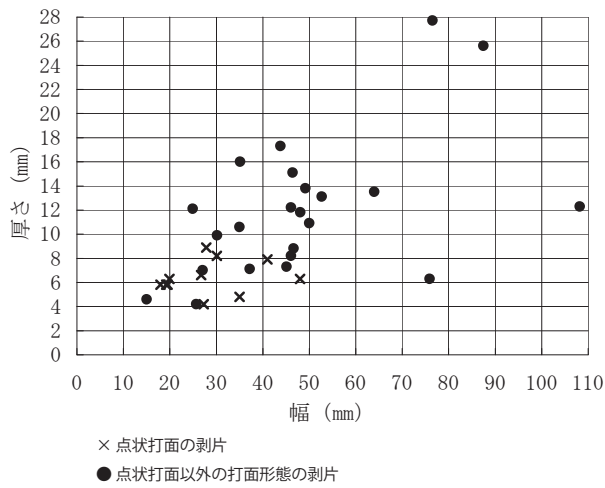
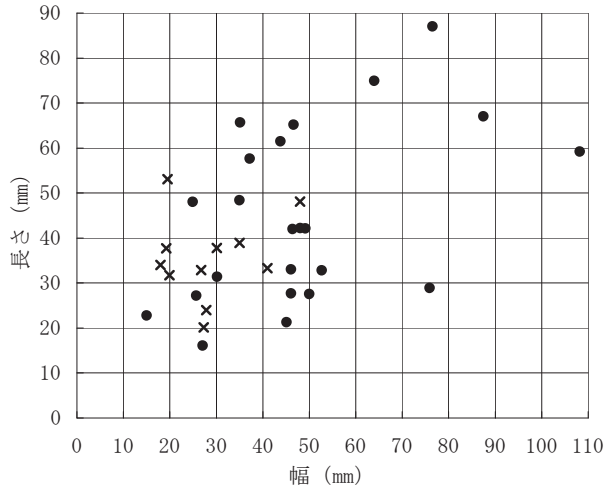


図83 3128流路出土剥片石器サイズ

391)、片面調整のものは少数である。

最後に最も多く出土した、剥片についても述べておく。剥片の打面形態は礫打面14点、単剥離面打面6点、複剥離面打面2点、複合打面1点、点状打面11点であり、礫打面のものが比較的多い。また点状打面の剥片のなかには、いわゆるバイポーラーの剥片も認められる。サイズをみると(図83)、楔形石器からの剥離物を含む可能性が高い点状打面の剥片は小型であるが、他の打面形態の剥片は、長幅いずれかが40mmを超えるものが主体であり、厚さも10mmを超えるものが多い。このように比較的大型な剥片が目立つが、流水の作用によって、小型剥片の多くが失われた可能性を考慮しておくべきであろう。(吉村駿吾)

参考文献 末永雅雄 1961 「皮剥による原石の復原」『橿原』 奈良県教育委員会

註1 礫石器の石材に関しては、小倉徹也氏に御教示を得た。

註2 スクレイパーは刃部を下辺に、石鏃の未完成品は先端部を上、楔形石器は潰れが観察される、いずれか一辺を上辺に据えている。R.F、剥片は剥離軸を基準に、石核も剥片素材とわかるものに関しては剥離軸を基準に据えるよう努めた。打欠石鏃は上下の打欠きを基準に、敲石は長軸を基準に据えている。台石は、溝状の凹みが横方向に真っ直ぐになるよう据えている。

③ まとめ

ここでは、一定量出土している剥片石器について、まとめておきたい。

繰り返しになるが、3128流路出土の剥片石器石材はサヌカイトに限定され、組成はスクレイパー8点・石鏃の未完成品1点・楔形石器1点・R.F.(二次加工ある剥片)4点・石核10点・剥片42点・破片1点である。狭義の石器のなかではスクレイパーが主体を占めているが、自然流路より出土していることから、本来の比率をどの程度反映しているかは不明確である。

次に、スクレイパーに注目すると、その半数が礫面のカーブを打面から側面にかけて取り込んだ剥片を素材としていることがわかる(385~388)。このような剥片を素材として選択する目的は、橿原遺跡の報告書内で末永雅雄が指摘するように、礫面のカーブをそのままスクレイパーの背部形成に利用するためと理解することができる(末永1961)。さらに、390の右側面に取り込まれた礫面、391の左側面の折断面もまた、背部形成を意図したものと捉えられよう。また刃部は多くの場合、明確な両面調整によって一側縁に形成されており(385~387、389、

3. 古墳時代以降の遺構・遺物

a. 第7層下面（第2面）

第7層下面では、第7層内で形成された倒木痕が検出された。本調査区の第7層は暗色化が弱く、土壌化も進行していないだけでなく、遺構や遺物の存在も希薄である。

第7層からは、古墳時代の遺物として、土師器や須恵器が出土している。出土量は少なく、図化できるものはほとんど見られない。

下層からの混入品であるが、残存状況の良好な打製石器が出土している。408は、第7層出土の石鏃である。基部がわずかに凹んでいるものの、平基無茎式の範疇に入ると考えられる。正・裏面に素材面を大きく残している。409は、中近世耕作土層出土の石鏃である。尖基式。正・裏面に素材面を残し、裏面には礫面が付着している。410は、第7層出土の石鏃である。凸基有茎式。

さらに、土器で図化できたものは、以下の1点である。411は、包含層出土のもので、土師器小型器台である。透かし孔が4方向にある円錐状の脚部と、浅い皿状の杯部を持つことから、庄内式Ⅳ期～布留式Ⅰ期に相当すると考えられる。

b. 第7層上面（第1面）

第7層上面で、第2～6層段階の中・近世の井戸・耕作溝・溝、古墳時代の遺物が出土した流路等を一括して検出した。



図84 5・6区 第1面遺構平面図

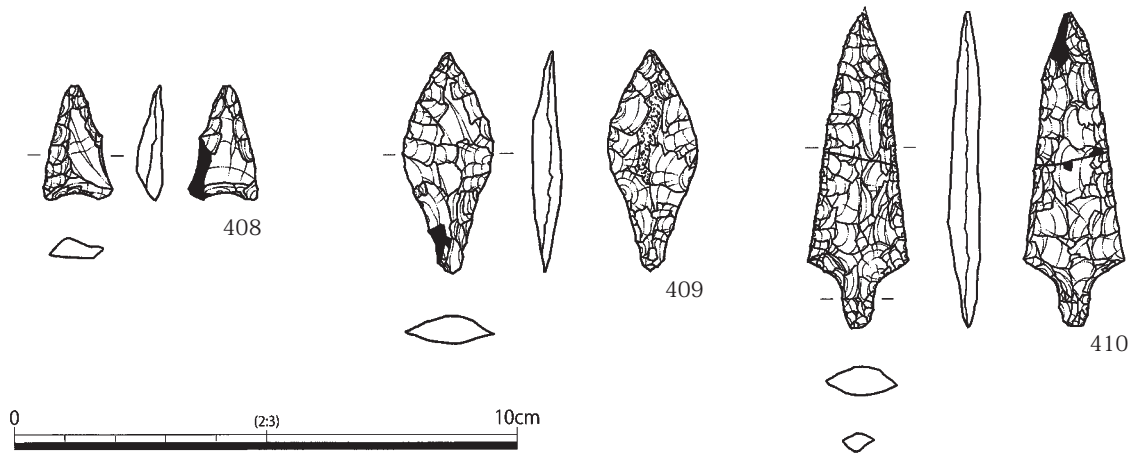


図85 5・6区第7層、南側溝 出土遺物（石器）

調査区東部で、南東から北西方向へ延びる溝を検出した。これらは幅約10cm程度であり、耕作溝または轍である可能性が考えられる。15～17区の第3b層で検出された耕作溝と同様に、南東から北西方向に延びることから、同一層段階のものと考えられる。

3121溝（図84）

調査区を南東から北西方向に横切る、幅約0.5m、深さ約10cmの3121溝を検出した。埋土は、暗灰黄色中～極細粒砂混じりシルトからなる1層と、黒褐色シルトからなる2層に細分される。

本調査区の古墳時代より上位の包含層からは、古代から中世にかけての遺物が出土している。出土量は少なく、図化できるものはほとんど見られない。413は、第7層上面で検出された、輸入陶磁器の白磁碗である。口縁部の玉縁が大きく、体部の器壁が厚いだけでなく、胎土が粗く、釉もやや灰色を帯びた白色を呈することから、11世紀末～12世紀初頭の白磁碗Ⅳ-1aに相当する。412は、包含層出土のもので、土師器皿である。口縁部が直立気味で、口径に比して底径の占める割合が大きく、橙褐色を呈することから、13世紀頃の土師器皿Dに相当すると考えられる。

4. 小結

本調査区は、各層で大規模な流路が調査区を南北に横断しており、調査区東部では第7層から第9層にかけての地層の収斂が見られるなど、本調査区を境に西と東では地層の堆積状況に大きな差異がみられる。なお、これらの大規模な流路の影響で、本調査区内での遺構の存在は希薄である。しかしながら、第9層内で形成された3128流路から出土した多量の縄文土器（北白川上層式3期）がほとんどローリングを受けていないことから、縄文時代後期中葉の集落が流路の上流である調査区南方の極めて近い位置に存在したことが想定される。

3128流路から出土した縄文土器は、研究者によって実見されており、かなり時期の限定された一括

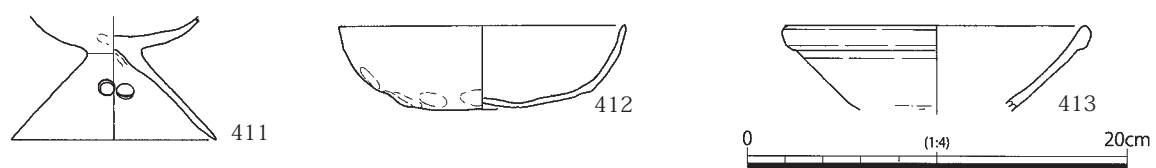


図86 5・6区第7層・南側溝 出土遺物（土器）

遺物ということで、高い評価を受けている。今後、研究者の手でさらに評価が加えられ、将来的には一時期を表す標式的な土器群となる可能性もある。

今回の調査では、不十分ながら、考古学的な整理作業とともに自然科学的分野による分析もおこなっている。土器付着物による¹⁴C年代測定や赤色顔料の分析に関しては、第6章で調査成果報告を掲載しているが、渋谷綾子氏による土器付着物のデンプン分析に関しては、紙面をとることができなかったため、ここで簡単な報告（一部省略）を掲載することにする。

大阪府松原市三宅西遺跡第5・6区から出土した土器付着炭化物のデンプン分析

研究の目的

本分析は、新潟県立歴史博物館の西田泰民氏を代表とするグループによる研究プロジェクト、科学研究費補助金基盤研究B「日本における稲作以前の主食植物の研究」にもとづく。研究プロジェクトは複数のアプローチによって、縄文時代および旧石器時代の植物利用を明らかにすることを目的とし、中でも食物加工具や遺跡堆積物でのデンプン残存物の検出を核としている(西田泰民他 2004-2006)。本分析はプロジェクト中の「土器付着炭化物の分析」を行ったものである。

試料と方法

分析した土器は、多量に炭化物が内面に付着しているものを中心に選択した。試料総数は8点である。デンプン粒の検出状況と内容の記載

今回分析した試料からはすべてデンプン粒を検出した。定量的分析を行っていないため、試料中に含まれたデンプンの量を決定することはできないが、今回検出したデンプンの量は非常に多い。検出したデンプンは分解や腐食した状態のものが多く、分解の度合いもさまざまである。さらに、植物の細胞の内部にデンプン粒が見られるものやデンプン粒が密集した状態のものもあった。分解したデンプン粒は原形をとどめていないものが多いが、球形、楕円球形、角張った球形に分けられる。検出したデンプン粒の大きさは、大きいものが径20 μ m、小さいものが径6 μ mである。現時点での研究状況では、今回検出したデンプンの同定は難しい。しかし、非常に小さいタロイモ (*Colocasia esculenta* (L.) Schott) や特徴的な形態をもつヤマノイモ (*Dioscorea japonica*) のデンプン粒ではないと考える。

結論

今回分析した炭化物の試料にはすべてデンプン粒が残存しており、分解状態のものが多かった。他の自然科学分析による遺跡の周辺環境の復原、それを受けた残存デンプンの候補植物が不明であるため、現時点では植物の同定はできないが、タロイモやヤマノイモは候補植物から除外できる。

これらの結果は分析者の博士論文や関連の研究論文で報告し、さらに研究を進展させるつもりである。

註 タロイモのデンプン粒の大きさはおよそ1~4 μ mと小さく、遺跡土壌や遺物においてしばしば密集した状態で検出される。ヤマノイモのデンプン粒は卵形や一部が平坦になった楕円球形が多く見られる。

西田泰民・吉田邦夫・八田一・Matthews P. J.・宮尾亨・Fullagar R.・鈴木忠司 (2004-2006) 『日本における稲作以前の主食植物の研究』 2006年9月19日アクセス, <http://www.asahi-net.or.jp/~zh4y-nsd/starchhp/stitle.html>.

(渋谷綾子)

第4節 7～9区および15～17区の成果

調査範囲のほぼ中央部に位置しており、東西方向に走る道路の北側では、西側で3125流路をはさんで6区と接している。7区と8区は、現在使われている水路により分断されていることから、分割して調査区を設定した。8区と9区は、農作業用の進入路により分断されていたが、調査工程をずらしたことから、結果的に分断せずに道路部分も調査をおこなうことができた。東西方向に走る道路をはさんで南側には、15～17区が位置している。西側は、道路をはさんで14区と接しており、東側は、現在使われている水路をはさんで18区と接している。

なお、記述に関しては、特に7～9区の各調査区における状況がかなり異なっていることから、各調査区毎に分けることとする。15～17区に関しては、他の地区と同様にまとめた記述をおこなう。

1. 層序

調査区は、東西方向に走る道路で分断されていることから、この調査区における基本層序は、北側の7～9区南壁で設定している。ただし、8区を中心として大規模な流路が認められたため、この部分に関しては基本層序を設定できない状況である。このため、7～9区に関しては、東西方向の通し断面を作成せず、あえて各調査区の南壁と東壁断面を提示することとする。ただし、流路の影響で複雑な堆積状況であることから、南側の15～17区の北壁断面の層序も提示する。こちらは通し断面を作成したので、全体の傾向をつかむことができる。上部では、全体にあまり大規模な起伏はみられず、ほぼ平坦であるが、古墳時代以前と考えられる層以下では、大規模な流路が複数形成されており、複雑な様相を呈している。

7区

第0層：現代盛土である。

第1b層：黄褐色中～細粒砂質シルトからなり、近代以降の耕作土層である。

第3b層：灰白色砂質シルトからなり、中～近世の耕作土層である。

第3c層：にぶい黄褐色砂質シルト～砂混じりシルトからなり、中～近世の耕作土層である。

第4b層：褐灰色シルト混じり粘土からなり、偽礫を含み、下面は凹凸が著しい。層内で、瓦器椀が出土している。

第7a層：暗灰黄色砂質シルトからなり、調査区北西部に部分的に分布する。古墳時代の暗色帯構成層である。

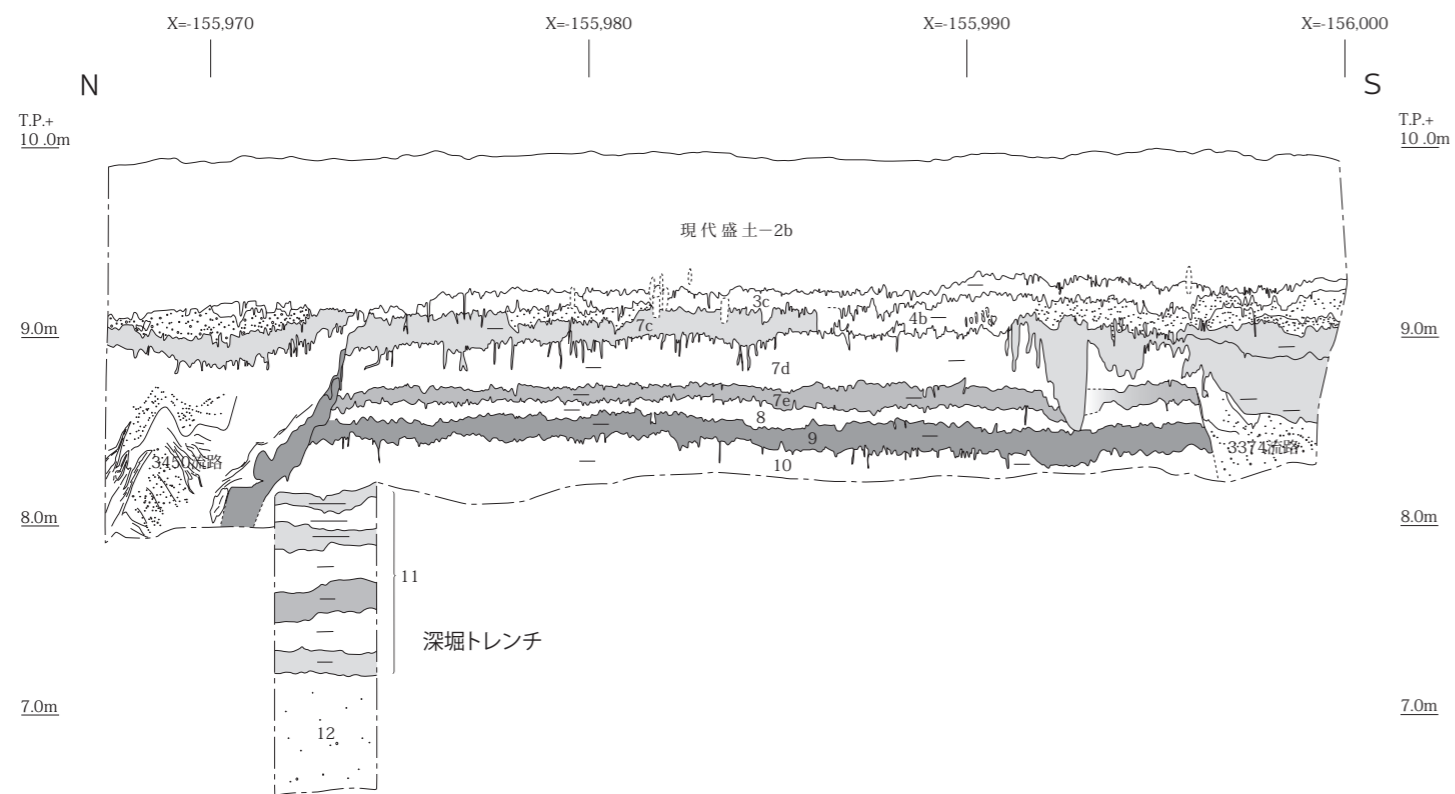
第7bi層：灰黄褐色砂質シルトからなる水成層で、部分的に耕作土化していると考えられる。上面で溝群（波板状遺構）を検出した。

第7bii層：黄灰色細～極細粒砂混じりシルトからなる水成層で、部分的に耕作土化していると考えられる。

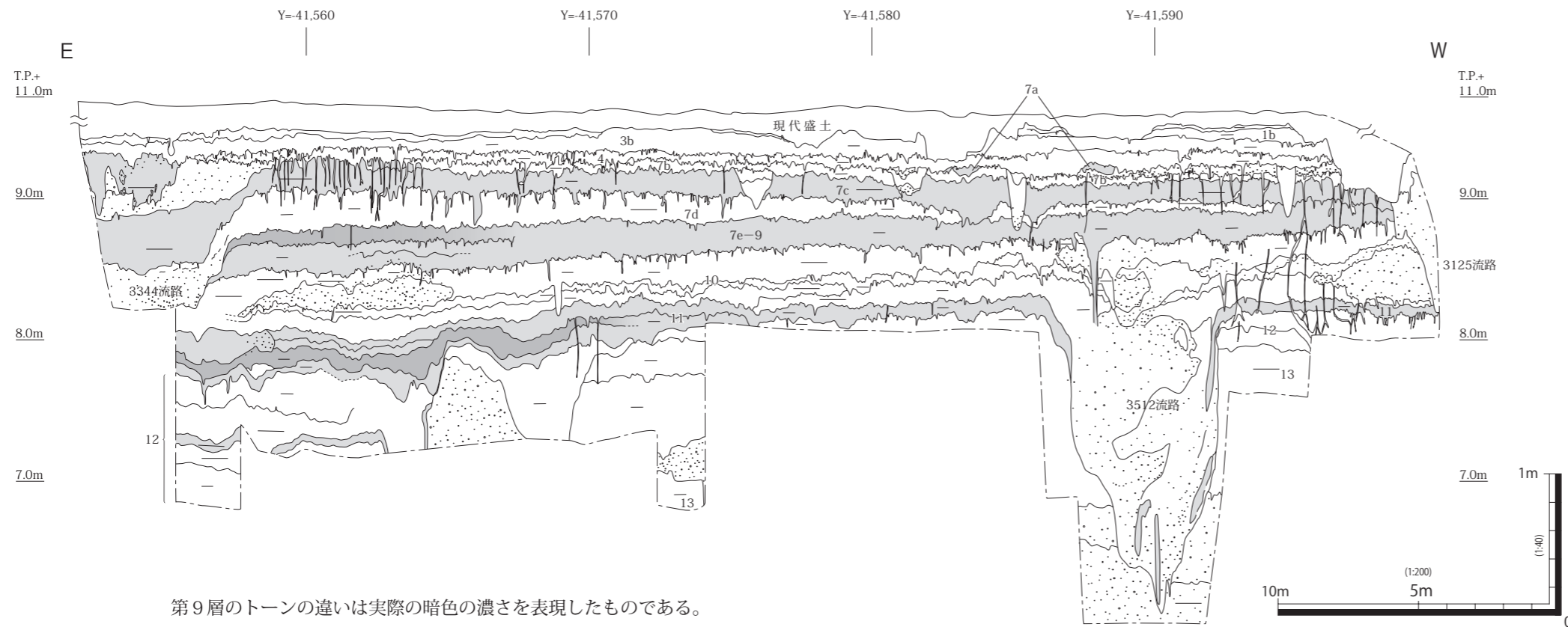
第7c層：黒褐色シルト混じり粘土からなる暗色帯構成層である。上面および層内で庄内式期の土器を伴う遺構を検出した。

第7d層：灰黄褐色シルト混じり粘土からなる水成層である。3527(3623)流路を供給源とし、西に向かって堆積が薄くなる。

7区 東壁



7区 南壁



第9層のトーンの違いは実際の暗色の濃さを表現したものである。

図87 7区 南壁・東壁断面図

第7e～9層：黒褐色シルト混じり粘土からなり、強く暗色化している。調査区西部で第7c層と収斂する。

第10層：灰黄色粘土からなる水成層である。3512流路は、本層段階で完全に埋没する。

第11層：褐灰色中～極細粒砂混じりシルトからなる。やや暗色化しており、火山ガラスを少量含む。

第12a層：オリーブ灰色粘土～極細粒砂からなる水成堆積層である。

第12b層：オリーブ灰色極細粒砂混じりシルトからなる。極弱く暗色化しており、火山ガラスを少量含む。

第13b-c層：灰白色粘土の上部と、緑灰色極粗～細粒砂および明緑灰色粘土質シルトの下部からなる。上部は風化が進行し、下方で砂が混じる。なお、本層以下は低位段丘と考えられる。

8区

8区は、調査区全体を各時代の大規模な流路が縦横に交錯していることから、区内の層序を立体的に示すため、南壁に加えて、直交する東壁の断面図を併載している。

第0層：現代盛土である。

第1a層：灰黄褐色極細～中粒砂からなり、現代の盛土・耕作土層である。

第1bi層：灰黄褐色極細～細粒砂からなり、近代以降の盛土・耕作土層である。

第1bii層：灰黄色極細～中粒砂からなり、近代以降の耕作土層である。

第3層：黄褐色細～粗粒砂混じりシルトからなり、中～近世の耕作土層とみられる。

第4a層：黄褐色礫混じり砂質シルトからなる。

第4b層：黄褐色シルト～細礫からなり、調査区東部の一部に分布する。水成層であるが、上部はシルト質が強く、部分的に耕作土化されている可能性がある。

第7a層：褐色極細～細粒砂混じりシルトからなる暗色帯構成層である。調査区東部では暗色化が進行しており、西部では耕作土化されている。酸化マンガン斑の集積が観察される。

第7b層：灰黄褐色極細粒砂混じりシルトからなる。水成層であるが、部分的に耕作土化されている可能性がある。3115(3344)・3116(3410)流路は、本層段階で埋没している。

第7c層：褐灰色極細粒砂混じりシルトからなる暗色帯構成層である。層厚は20cm程度ある。上部は暗色化が強く、酸化マンガン斑の集積が観察される。一方、下部は砂質が強く、酸化鉄斑の集積が観察される。層内では、3115(3344)・3116(3410)・3118流路を検出した。

第7d層：灰オリーブ色極細～細粒砂からなり、下位層で形成された3527流路の影響で、下方粗粒化している。層内では、流路である3620・3621・3623流路などを検出した。本層からは、畿内第V様式の土器が複数出土している。

第12a層：灰色粘土からなり、層厚は4cm程度ある。

第12b層：灰色粘土からなり、やや暗色化している。層厚は10cm程度ある。

第13層：本層以下は、調査区南東隅の深掘トレンチで確認したものである。7区で検出されたように、本層以下は低位段丘と考えられる。①層は暗緑灰色極細粒砂混じりシルト、②層は暗青灰色極細粒砂混じりシルト、③層は緑灰色極細粒砂質シルトからなる。

9区

調査地の現地地表はT.P.+10~10.5m、坪掘りを含め現地地表下約5m(T.P.+5.5m)までの地層を観察した。この結果に基づき、また19区や11区との対比関係を考慮しつつ、本調査地の層序を組み立てた。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴を表5に、現地の地層と遺構の模式図を図88、南壁および東壁地層断面図を図89、南北方向の柱状対比図を図90に示す。なお、地層の構成物質の記載については、構成物質の主体を占める碎屑物粒子と、その運搬・堆積(沈着)条件を決定する営力の大きさととの運動関係がもっともよく反映されている碎屑物の粒径区分(ウェントワース・レイン式)によって行った。地層の色については、『新版標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄 1996]を用いて行った。

観察した地層は沖積層(難波累層)に相当し、人為によって形成された第6層以上と、主として自然の営力による第7a層以下に大きく区分できる。各層の詳細については層序表、柱状対比図と地層断面図を参考にされたい。なお、平面的な調査は第7a層上面から行ったため、第6層以上の記載は壁面の観察によって行った。

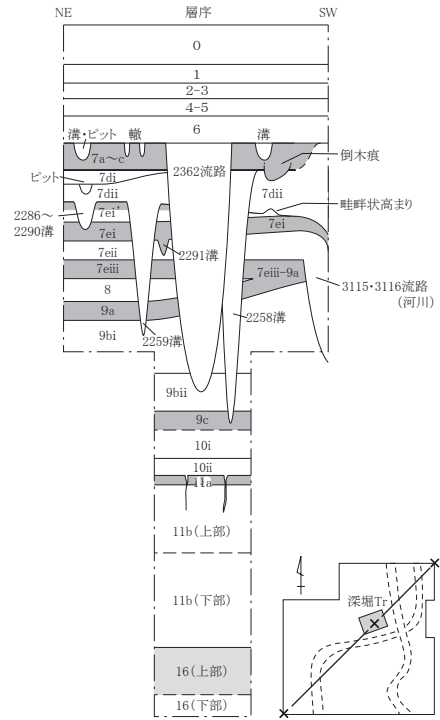


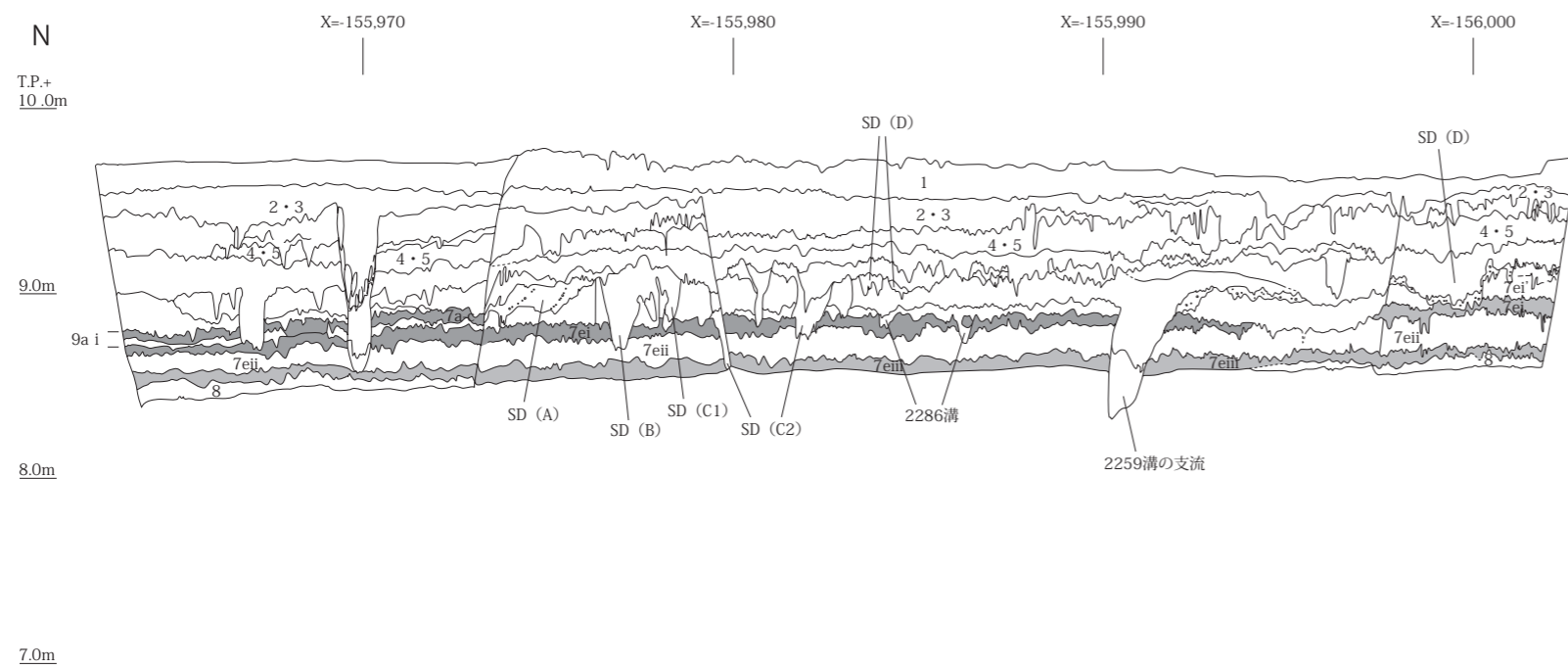
図88 層序と遺構の模式図

表5 9区 層序表

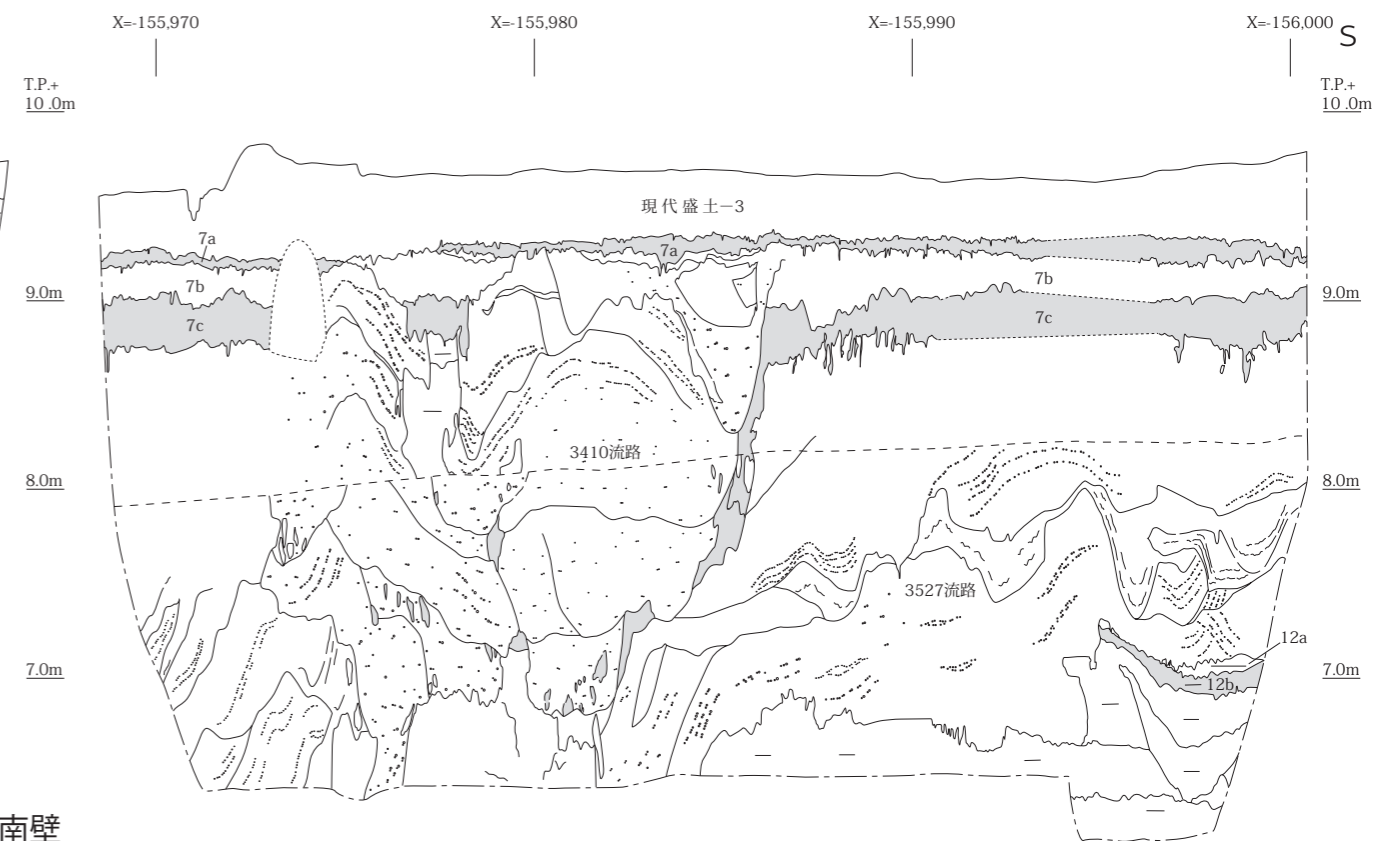
9区層序	岩相	土色	層厚(cm)	自然現象ほか	遺構	時代・年代
第0層	現代盛土および攪乱層			■ 暗色帯		現代
第1層	現代作土	2.5Y3/1	10~40			
第2-3層	含極粗粒砂~細礫 にぶい黄橙・褐色 シルト混り中粒~粗粒砂 [作土]	10YR6/3 7.5YR6/1	10~25			近世
第4-5層	灰黄褐・褐色 シルト混り中粒~粗粒砂 (含極粗粒砂~細礫) [作土]	10YR5/2 7.5YR5/1	≦20			中世
第6層	含粗粒砂~細礫 にぶい黄橙色 シルト混り中粒~細粒砂 [作土]	10YR6/3	≦20		2362流路, 溝, ビット, 倒木痕	(飛鳥~平安)
第7a-c層	東部: 褐色・黒褐色 シルト混り細粒砂~下層: シルト質細粒砂 [古土壌] 中央部~西部: シルト混り粗粒~中粒砂 [古土壌]	10YR3/1 7.5YR4/1	≦30		2362流路, 溝, ビット, 倒木痕, 3115-3116河川の東端(8区)	古墳~飛鳥
第7d層	i 褐色 粗粒砂~細粒砂 [河川氾濫堆積層] (南東部に分布する.) ii 灰褐色 細粒砂質シルト~細粒砂混りシルト (部分的に2層に細分可能) [河川氾濫堆積層] (北西部に発達)	10YR6/1 7.5YR4/2	≦10 5~10		2258溝, 溝(A+B+C+D), ビット, 倒木痕 2259溝, 2285土坑, 2286~2290溝, 畦畔状高まり	古墳
第7e層	i 暗灰・褐色 細粒砂質シルト/含粗粒砂~細礫 シルト混り粗粒砂 [暗色帯構成層・河川氾濫堆積層] ii 黒褐色 粘土質シルト~細粒砂混りシルト [暗色帯構成層] iii 黄灰色 シルト~シルト質粘土 [河川氾濫堆積層]	10YR3/4 7.5YR4/1 10YR3/1	≦25 5~20			弥生 前期~中期
第8層	a 黒褐色 粘土質シルト [暗色帯構成層] b 褐色 粘土質シルト~シルト質粘土 [河川氾濫堆積層]	7.5YR3/1 5YR4/1	5~15 ab.20			縄文晩期
第9層	a 黒褐色 粘土質シルト [暗色帯構成層] b 東部: 黄灰色 極粗粒砂~中粒砂 (上部に相当する.) (正級化構造を示す. 側方変化が大きい.) [河成層] c 中央部: 褐色 極粗粒砂~細礫(下部に相当) (正級化構造を示す.) [河成層]	5YR3/1 7.5YR2/2 2.5Y5/1 7.5YR4/1	5~15 40~70			縄文中期
第10層	上半: 緑灰色 シルト質細粒砂~細粒砂質シルト (逆級化構造を示す.) [河成層] 下半: 緑灰色 粘土質シルト [暗色帯構成層]		15~45 ab.10			
第11層	i 灰・やや緑灰色 極粗粒~粗粒砂 [河成層] ii 緑灰色 シルト~粘土質シルト (第15層は第14層によって削剥されていた.) [河成層] a 暗灰色 シルト~粘土質シルト [暗色帯構成層]		ab.15 ab.5 ab.5		→ 乾痕	縄文中期
第12層	b 上部: 緑灰色 粘土質シルト [河成層] b 下部: 灰色 極細粒砂~粗粒砂 (正級化構造を示す.) [河成層]		ab.60 ab.70			
第16層	上半: 暗褐色 極細粒砂質シルト (正級化構造を示す.) [河成層] 下半: 暗褐色 粗粒砂 [河成層]		ab.45			縄文早期~前期
第17層	灰色 粗粒砂 [河成層]		30 ≦	湧水		(縄文草創期~早期)

← 上面検出遺構 ↓ 下面検出遺構 △ 層内検出遺構

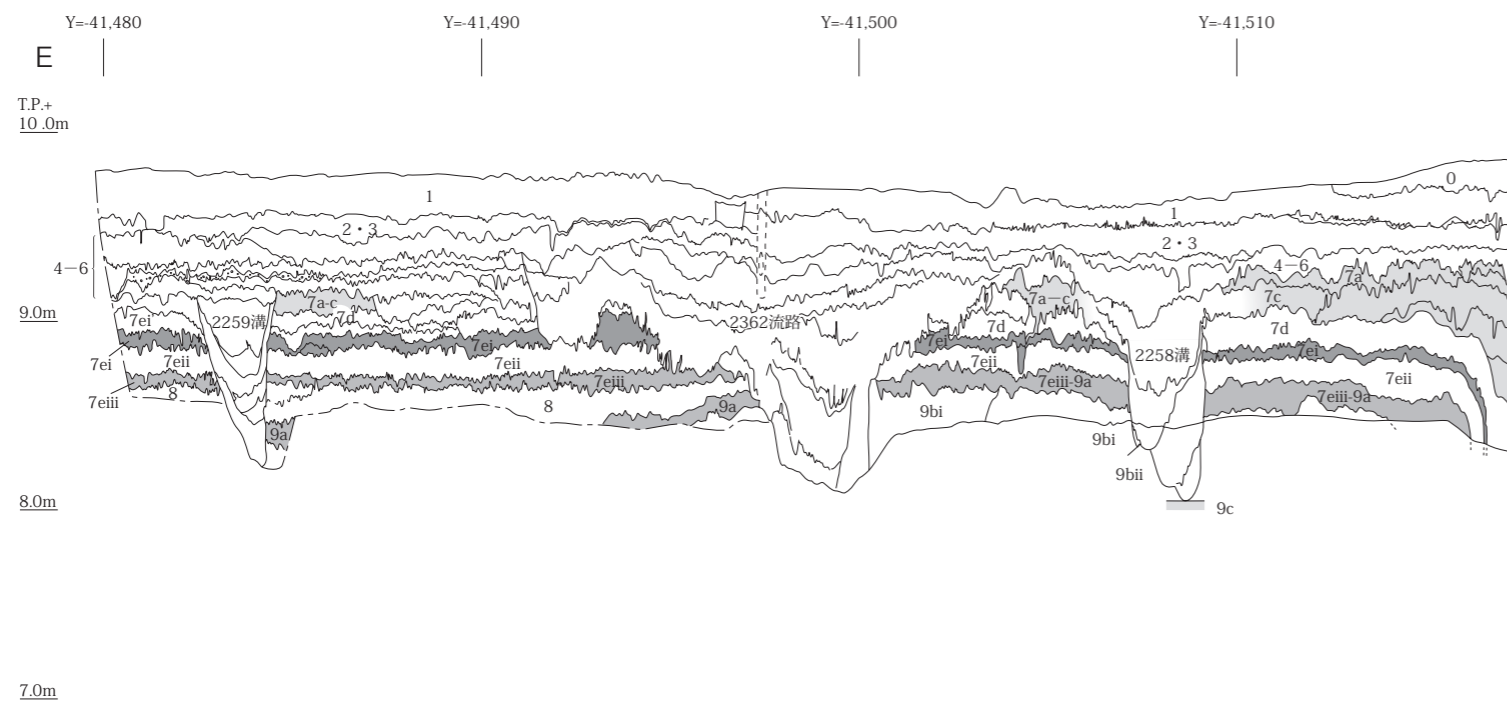
9区 東壁



8区 東壁



9区 南壁



8区 南壁

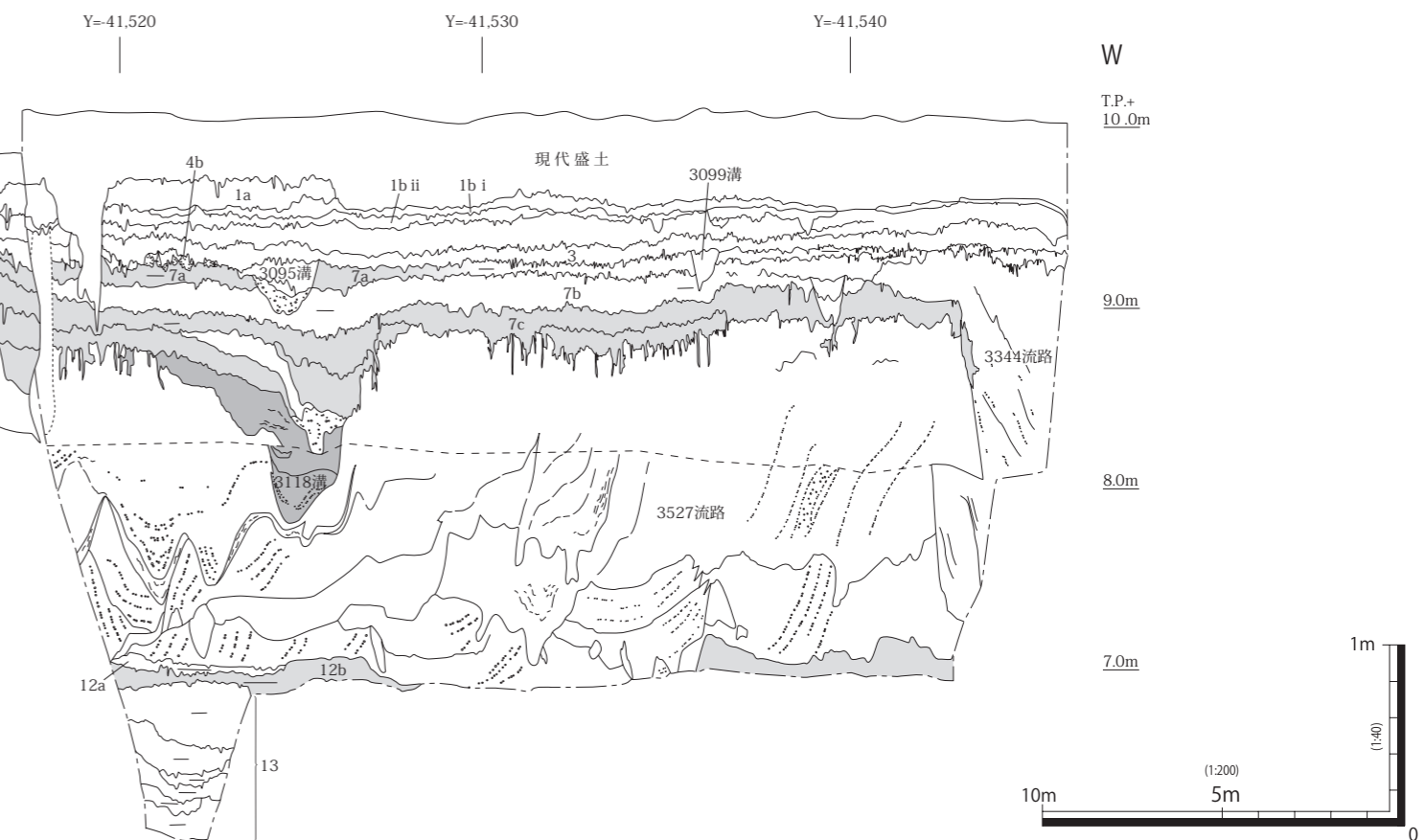
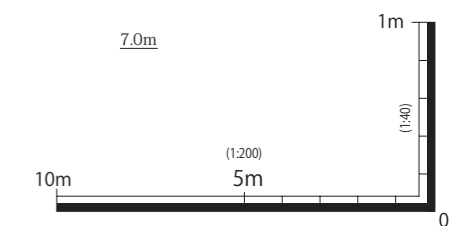


図89 8・9区 南壁・東壁断面図



第0層：現代の盛土および攪乱層。

第1層：現代の耕作土層。

第2・3層：近世。

第4・5層：中世の耕作土層である。なお、第2・3層および第4・5層の地層番号については、調査時に11区および19区との対比によって付した番号で、平面調査を行っていないことから正確な時期が明らかでないことと、番号の変更によって煩雑になることを避けるため、そのまま踏襲して用いることにした。

第6層：2362流路の氾濫によって供給された堆積物を母材とする耕作土層である。

第7a~c層：おもに褐灰色ないし黒褐色のシルト混り砂からなり、下位の第7d層を母材とした古土壌である。上面では2362流路のほか多数の溝や轍、ピットなどを検出した。

第7d層：河川の氾濫堆積層で、第7di層と第7dii層とに区分した。

第7di層はおもに調査区南東部に分布し、上面で検出した溝の埋土の下部でも認められた。

第7dii層は北西部に厚く堆積し、部分的に2層に細分可能である。

第7e~9a層：暗色帯構成層と河川の氾濫堆積層の互層からなる。

第7e層~第9a層の5層準に区分し、第7ei層はさらに上部の第7ei'層と下部の第7ei''層に細分し

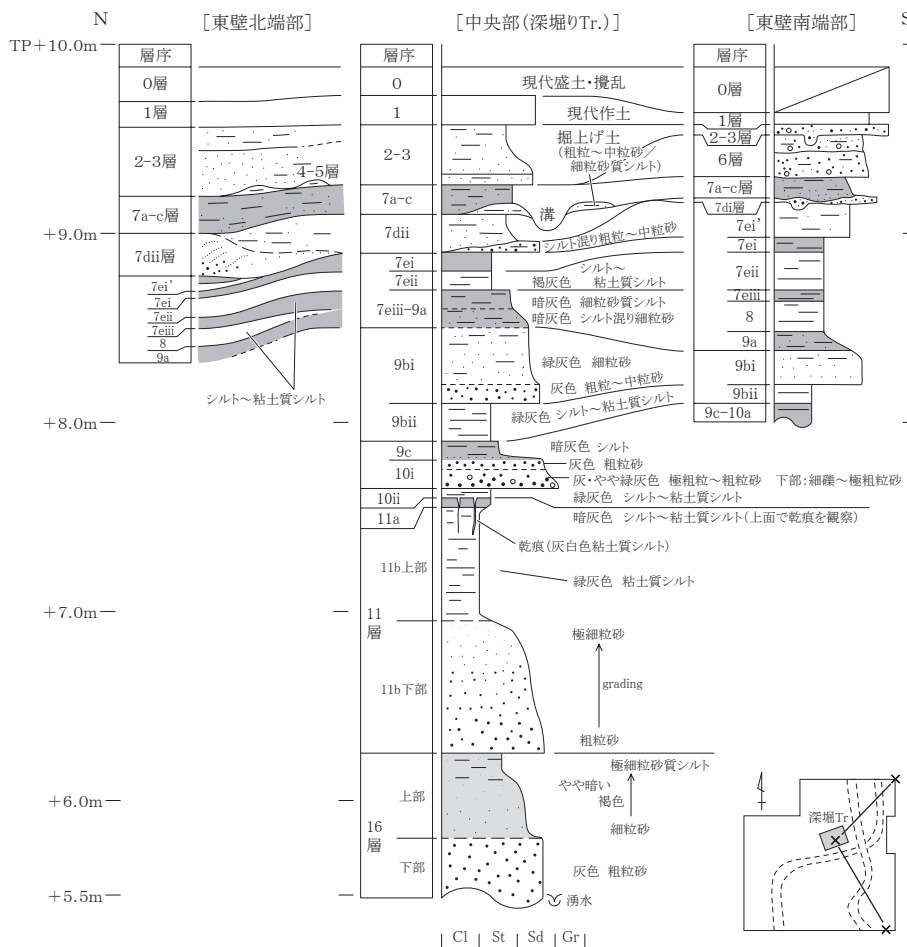


図90 9区 南北柱状対比図

た。第7ei層は暗色帯構成層および河川の氾濫堆積層からなり、第7ei'層は暗色帯構成層である。調査区南西部にかけて収斂し、西端で急角度に西へ落ち込んでいた。上面で2259溝および2286～2290溝、2285土坑、畦畔状高まりなどを検出した。

第7eii層は河川の氾濫堆積層であり、上面で2363溝および2291溝を検出した。

第7eiii層は暗色帯構成層、**第8層**は河川の氾濫堆積層で、**第9a層**は暗色帯構成層である。第7eiii層・第8層・第9a層は調査区南西部にかけて収斂していた（第7e～9a層）。

第9b層：第9bi層と第9bii層に細分した。

第9bi層は調査区東部で黄灰色の極細粒砂～中粒砂からなり、中央部では褐灰色の極粗粒砂～細礫からなる河成層である。側方への変化が大きく、正級化構造が認められた。

第9bii層は上半部が緑灰色を呈する河成層で、逆級化構造が観察された。

第9c層以下は坪掘りにおいて確認した層準である。

第9c～10i層：第9c層と第10i層とに区分した。

第9c層は黒灰色の粘土質シルトからなる暗色帯構成層である。

第10i層は灰色ないし緑灰色の極粗粒～粗粒砂からなる河成層で、下位層を削剥していた。

第10ii層：緑灰色のシルト～粘土質シルトからなる河成層である。

第11a層：暗灰色のシルト～粘土質シルトからなる暗色帯構成層で、上面で乾痕が観察された。

第11b層：上部が緑灰色の粘土質シルト、下部が灰色の極細粒砂～粗粒砂からなる河成層である。下部には正級化構造が観察され、下位層を削剥していた。

第16層：上部はやや暗色化した正級化構造を示す河成層、下部は塊状の灰色粗粒砂からなる河成層である。

15～17区

第0層：現代盛土である。

第1b層：浅黄色極細～細粒砂質シルトからなり、層厚は最大30cm程度ある。近現代耕作土層および盛土である。

第3b層：灰白色砂質シルトからなり、下部は砂質が強い。中～近世の耕作土層とみられる。

第3c層：にぶい黄褐色細～極細粒砂質シルトからなり、下部は砂質が強い。調査区西部に分布しており、中～近世の耕作土層とみられる。

第3d層：にぶい黄色細～極粗粒砂からなり、調査区西部に分布する。13・14区の東部から続く水成堆積層で、層厚の最も厚い調査区西端では18cm程度ある。

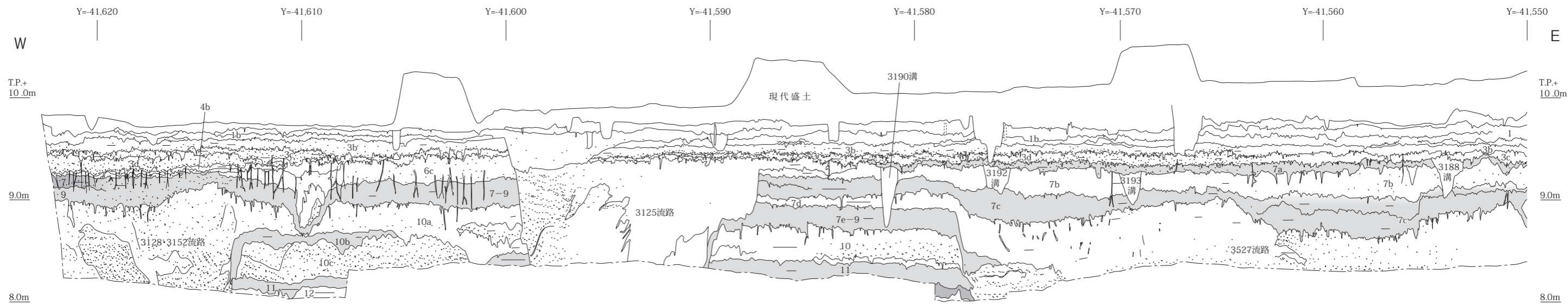
第4b層：黄灰色極細粒砂混じりシルトからなる。分布は局部的で、下部にシルト偽礫を含む。7区でも確認された中世の水成層である。

第6b層：暗灰黄色シルト～粗粒砂からなる。調査区西部では、上面で畦畔の可能性のある隆起を検出した。層厚が薄く、下面でも耕作痕が確認されなかったことから、水成層あるいは水成層が部分的に耕作土化されたものである可能性もある。

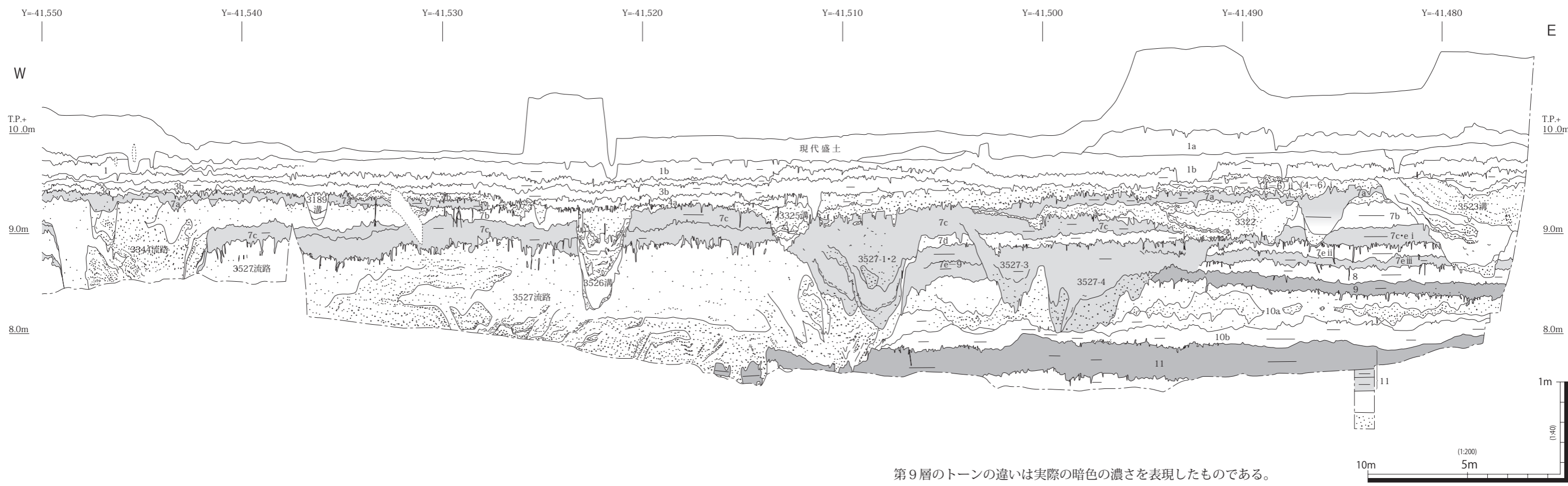
第6c層：灰黄色極細粒砂からなる水成層である。調査区西部に分布しており、3125流路は本層内で完全に埋没したと考えられる。

第4～6層：3527流路より東側の調査区東部にのみ分布している。第(4～6)i層は、灰黄褐色砂から

15・16・17区 西半部 北壁



15・16・17区 東半部 北壁



第9層のトーンの違いは実際の暗色の濃さを表現したものである。

図91 15～17区 北壁断面図

なる水成層である。第(4～6)ii層は、灰褐色砂質シルトからなり、耕作土層であると考えられる。年代を決定できる遺物は出土していないが、上下の層から古代～中世前半に相当する水成堆積層と考えられる。

第7a層：褐灰色極細～細粒砂質シルトからなる、古墳時代の暗色帯構成層である。調査区西端では下位の第7b～9層と収斂している。本層上面では古代、下面では本層内で形成された古墳時代の遺構を検出した。なお、調査区西半では土器や炭化物を多く含み土壌化が進行しているが、3344流路以東においては、下位で検出される流路により砂質が強まり、遺物、遺構の存在が極めて薄くなる。

第7b層：暗灰黄色シルト～極細粒砂からなり、層厚は最大で30cm程度ある。水成層であるが、部分的に耕作土化されている可能性があり、調査区東端の本層下面では波板状遺構の可能性のある溝群を検出した。本層上位の第4a層基底面で、3526流路を検出した。また、8区から続くとみられる3344(3115・3412)流路は本層段階で埋没している。

第7c層：黒褐色シルト混じり粘土からなり、層厚は最大で30cmである。滞水状態で堆積したとみられる暗色帯構成層で、上部は酸化マンガン斑が集積している。3344流路周辺の調査区中央部では井戸やピット群を検出した。なお、第7c層は調査区東端では第7e層最上部と収斂している可能性が考えられる。

第7e層：3527流路の両肩で第9a層と収斂して存在し、調査区東端で、部分的に黒褐色極細粒砂混じりシルトからなる第7ei層、褐灰色粘土～シルトからなる第7eii層、黄灰色粘土からなる第7eiii層の3層に細分される。特に最上部である第7ei層は上位の第7c層と収斂している可能性が高い。

第8層：黄灰色粘土からなり、調査区東端に分布する。滞水状態で堆積した水成層と考えられる。

第9a層：黒褐色極細粒砂混じりシルトからなる、暗色帯構成層である。下部は砂質が強い。調査区西部では第7層と収斂していたものが、3125流路と3527流路の間では第7a層と第7b層、第7c層、第7e～9a層に分離し、調査区東端では第7e層と第8層、第9a層に分離する。

第10層：調査区西部に厚く堆積する水成層で、部分的に第10a～c層に細分される。第10a層は、暗灰黄色粘土～礫からなり、5・6区に続くとみられる3152流路は本層段階で埋没している。3152流路の肩部に分布する第10b層は褐灰色シルトからなり、やや暗色化している。第10c層は、暗灰黄色砂礫からなる。なお、3527流路の東側に分布する水成堆積は、本層に相当するものと考えられる。

第11層：調査区西部に分布する暗色帯構成層で、褐灰色粘土からなる。暗色化の程度は弱い。3527流路の東側に分布する暗色帯構成層についても、火山ガラスが検出されており、本層に相当する可能性が高い。

2. 縄文時代の遺構・遺物

a. 第11層上面(第8面)

調査区全体に遺構は希薄であり、明確に人為的に改変されたり、つくられたと考えられるものはみつかっていない。主に、南から北方向に流れる流路が検出され、縄文時代の遺物が出土している。流路は、下位の土層になるほど重複が激しく、流路の形状を確認することがむずかしくなる。特に8区は、ほぼ全体が流路の中に収まってしまうほどであることから、流路の識別は困難な状況であった。その中で、7区で3512流路、15～17区で3527流路を検出した。このほか、15～17区西端の北壁断面では、5・6区で検出した、3152流路の続きとみられる流路の東肩を確認した。本流路は、第10a層の段階で埋

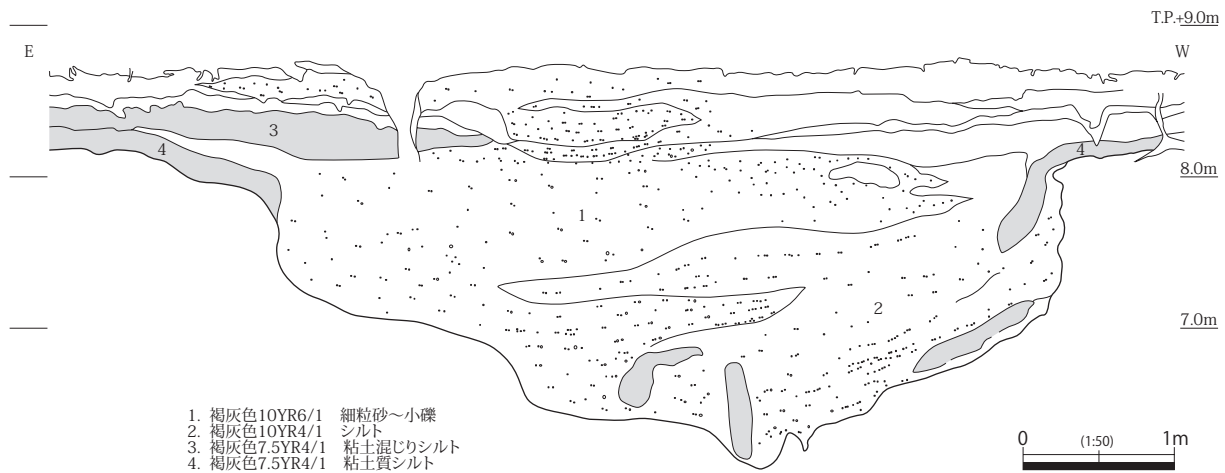


図92 3512流路 断面図

没している。9区では、この面までの全面的な掘削はおこなっていない。

3512流路 (図92・93)

7区西半部で、第11層上面もしくは第11層上部で形成され、第10層内で埋没した3512流路を検出した。南南西から北北東方向に伸びており、幅約6.0m、深さ約2.0mを測る。南側の15～17区では、下層の砂層を掘りきっていないことから、流路の形状を確認することができず、詳細は不明である。埋土は、淘汰の悪い褐灰色砂礫からなる上層と、褐灰色シルトからなる下層の大きく2層に分かれる。遺物の出土はなかった。

3527流路 (図93・95)

15～17区のほぼ中央から、8区を中心とした7区東端部と9区西端部にまで続く大規模な流路である。砂層が厚く、安全確保のため完掘していない。このため、正確な規模は不明であるが、15～17区の北壁土層断面の観察から推測すると、幅70m程度、深さ1m以上を測る。西肩を第9層上面で、東肩を第8a'層内と北壁及び調査区南端部の確認調査トレンチ断面で検出したことから、ほぼ南北方向に伸びているものと考えられる。埋土は、砂のラミナの観察される粗い砂礫を中心としており、側方細粒化している。掘削した底部付近からは、縄文時代晩期の土器が複数出土している。

3527流路は、第8a'層段階でほぼ埋没しているが、直上の第7c層段階では、位置や方向を少しずつ変えながら、8区に続く3527(3620・3621・3623)流路や後述する3344・3410流路などの小規模な流路として、機能していたと考えられる。3527(3620・3621・3623)流路は、第8a'層段階の、3527流路本体のほぼ東肩にあたる位置を、南西から北東方向に伸びている。断面観察では、4条の流れに細分することが可能であるが、平面では識別することができず、一体のものとして検出している。規模は、全体で幅10m程度、最深部で深さ0.9m程度ある。埋土は、黒色シルト主体とする細粒の堆積物からなり、暗色化している。この最終段階の流れにおける遺物は出土していない。

出土した縄文土器は、すべて下位の砂礫または底部からの出土である。417～420・423～425は、縄文時代晩期前半の滋賀里Ⅱ～Ⅲa式の土器である。423は、端部に面取りをし、わずかに内弯する浅鉢の口縁である。口縁外面には、多条沈線による横位の文様を施文する。424は、口縁部が外反する浅鉢で、口縁と体部の境に沈線を持つ。425は、口縁部が波状を呈し、口縁と体部の境に沈線を持ち、内外面に丁寧なミガキ調整を施している。典型的な黒色磨研土器の浅鉢である。424・425は、口縁部と体部を隔てる沈線内に赤色顔料の付着が認められる。

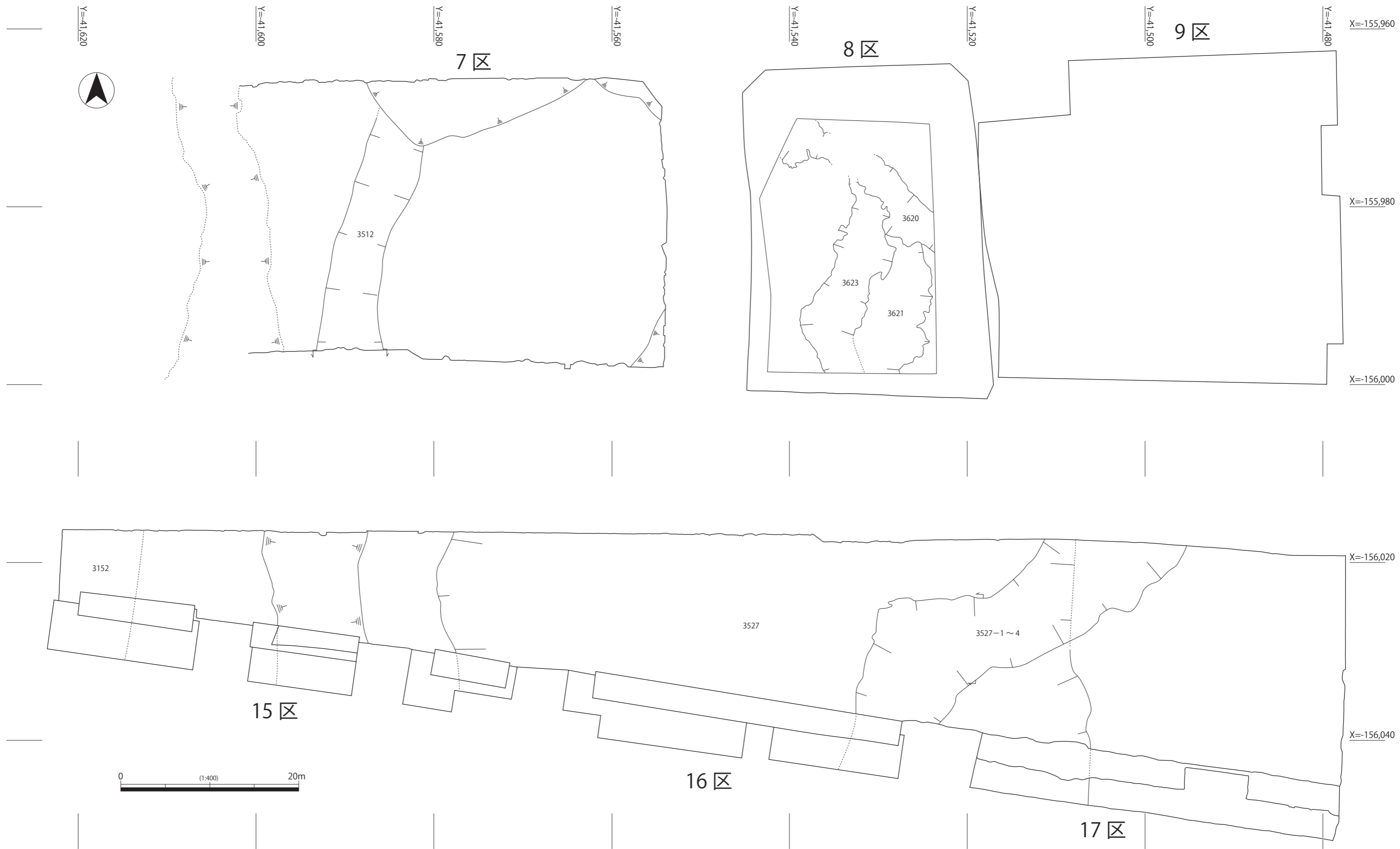


图93 7~9区・15~17区 第8面遺構平面图

421は、胴部に刻目凸帯をもつ、長原式の深鉢である。419は、口縁端部を面取りし、外面に巻貝による細かい条痕調整を行っている。431・432は、深鉢の底部である。431は、内外面をケズリにより調整したくぼみ底である。滋賀里Ⅲ式に相当すると考えられる。420・427・422・426は、粗製の深鉢の体部である。422は、外面を二枚貝条痕による調整を行っている。428～430は、繊維束を用いたケズリ調整を行っている。

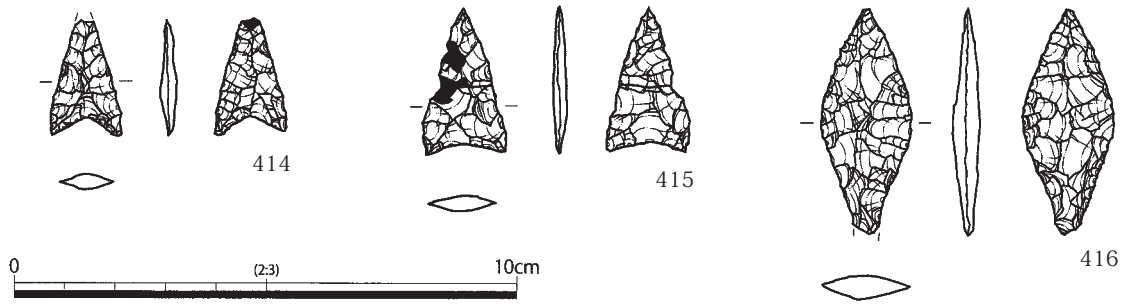


図94 7区、15～17区包含層 出土遺物（石器）

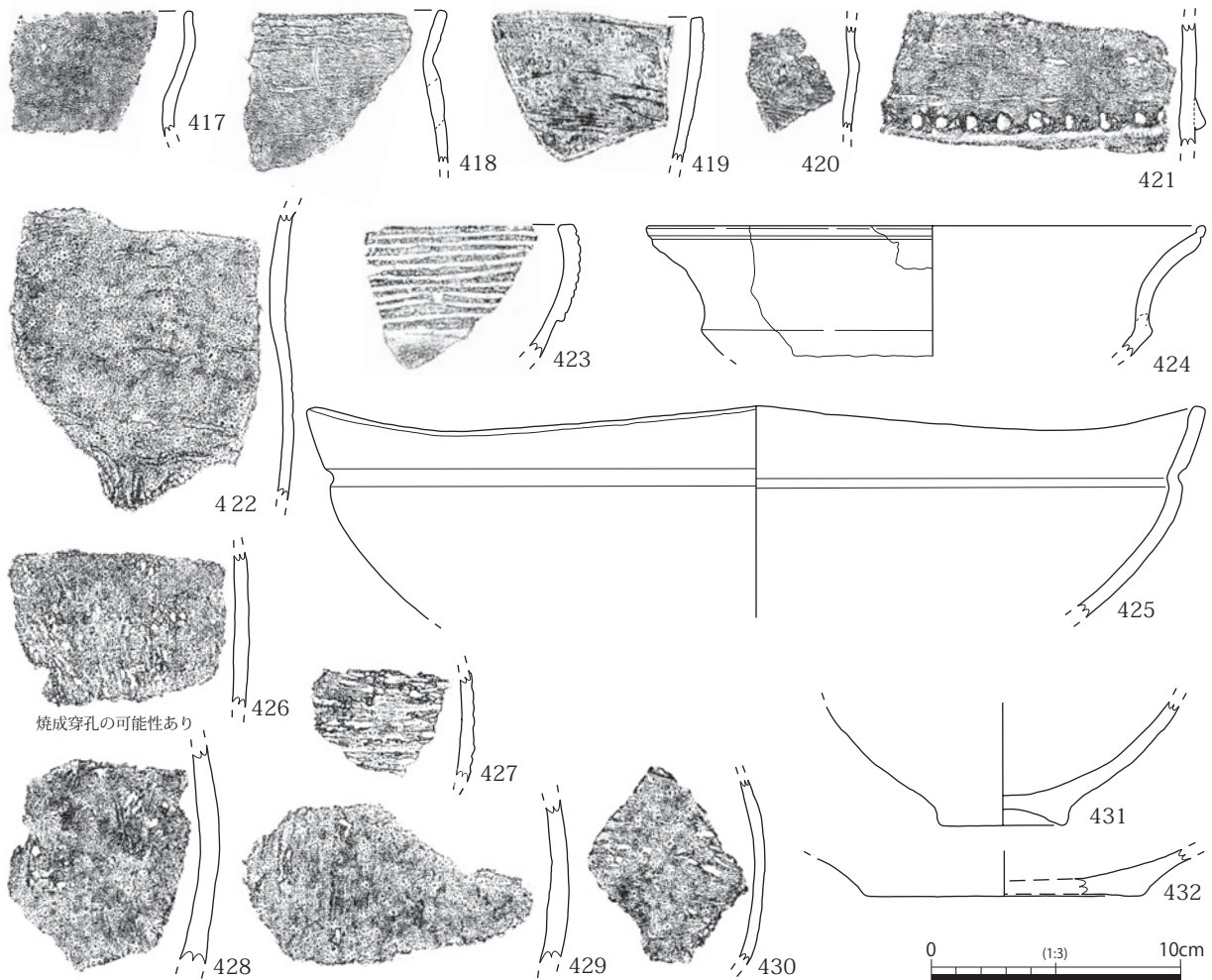


図95 3527・3619・3620・3621・3622流路 出土遺物（縄文土器）

包含層ほか出土縄文時代石器（図94、97、図版82・83）

この他に、上位の包含層や遺構から出土した縄文時代石器をまとめておく。

414～416は、サヌカイト製石鏃である。414は、7区第7層から出土したもので、混入品である。凹基無茎式で、先端部が欠損している。415は、15～17区第7c層上面で検出された、3345井戸から出土したもので、混入品である。凹基無茎式で、基部の扱りは非常に浅く、弧状を呈している。416は、15～17区第7a層内で検出された、3322竪穴遺構内の3346ピットから出土したもので、混入品である。尖基式で、基部が折損している。

433は、15～17区西端部の深掘りトレンチから出土したものであるが、所属層位ははっきりしない。サヌカイト原礫面を両側面に残す剥片を素材とした石核である。背面下半の大剥離面が最も古い。腹面に大きく主要剥離面を留める。頂部から背面側への剥離により、末端は左寄り中央部で階段状をなす。背面頂部と下部、腹面大剥離面末端部と左側辺に剥離がみられる。材質は緻密な黒色で、自然面が灰黄色の凹凸の少ない面をなす。

3. 弥生～古墳時代の遺構・遺物

ここでは、第7面から第4面までをまとめて述べることにする。土層断面では、明確に分離できるものの、部分的に平面の識別が困難なところもある。また、全体にわたって遺構が密集して検出されているわけではなく、第4面で確認されたものが大半である。

b. 第9層下面（第7面）

第7面では、第9層下面でピット群および倒木痕を7区西半部で検出した。なお、15～17区西部では、3527（3620・3621・3623）流路を供給源とする第7d層の堆積が薄いだけでなく、後述する3125流路付近で第9層が第7c層と収斂するため、層離面が不明瞭であった。このため、15～17区ではこの遺構面は明確には確認できなかった。8区では、3527流路が本格的に流れていたことから、砂層の厚い堆積があり、遺構面は確認できなかった。9区では、第9層を第9a～9e層の5層準に細分した。第9b層は河川の氾濫堆積層であり、上面で2363溝および2291溝を検出した。第9c層と第9e層は暗色帯構成層、第9d層は河川の氾濫堆積層である。第9c～e層は調査区南西部にかけて収斂していた。

3501～3504ピット（図96）

7区西半部の第7e～c層下面で検出したが、第7c層内で形成された遺構である可能性もある。規模は、径0.4～0.6m、深さ約10cmを測り、ほぼ方形に並んでいる。桁行1間（約3.0m）×梁行1間（約2.2m）の掘立柱建物と考えることもできるが、周囲に他の遺構はみられず、集落を構成していた状況は認められなかった。ただ、上部を削平されている可能性もあることから、建物が存在していたことは否定できない。遺物は出土していないことから、時期ははっきりしない。

2363溝、2291溝（図96、図版17）

9区のほぼ中央部の第9b層上面で検出した。どちらもほぼ南北方向であり、第9aii層によって埋まる溝である。一連の溝の可能性はあるが、中央部が上位の2362流路によって削剥されていたため、詳細は不明である。2363溝は、畦畔状高まりの下から部分的に検出された。遺物は、2363溝から弥生中期の底部が1点出土したのみである。胎土中に角閃石を含んでおり、生駒山西麓産である。

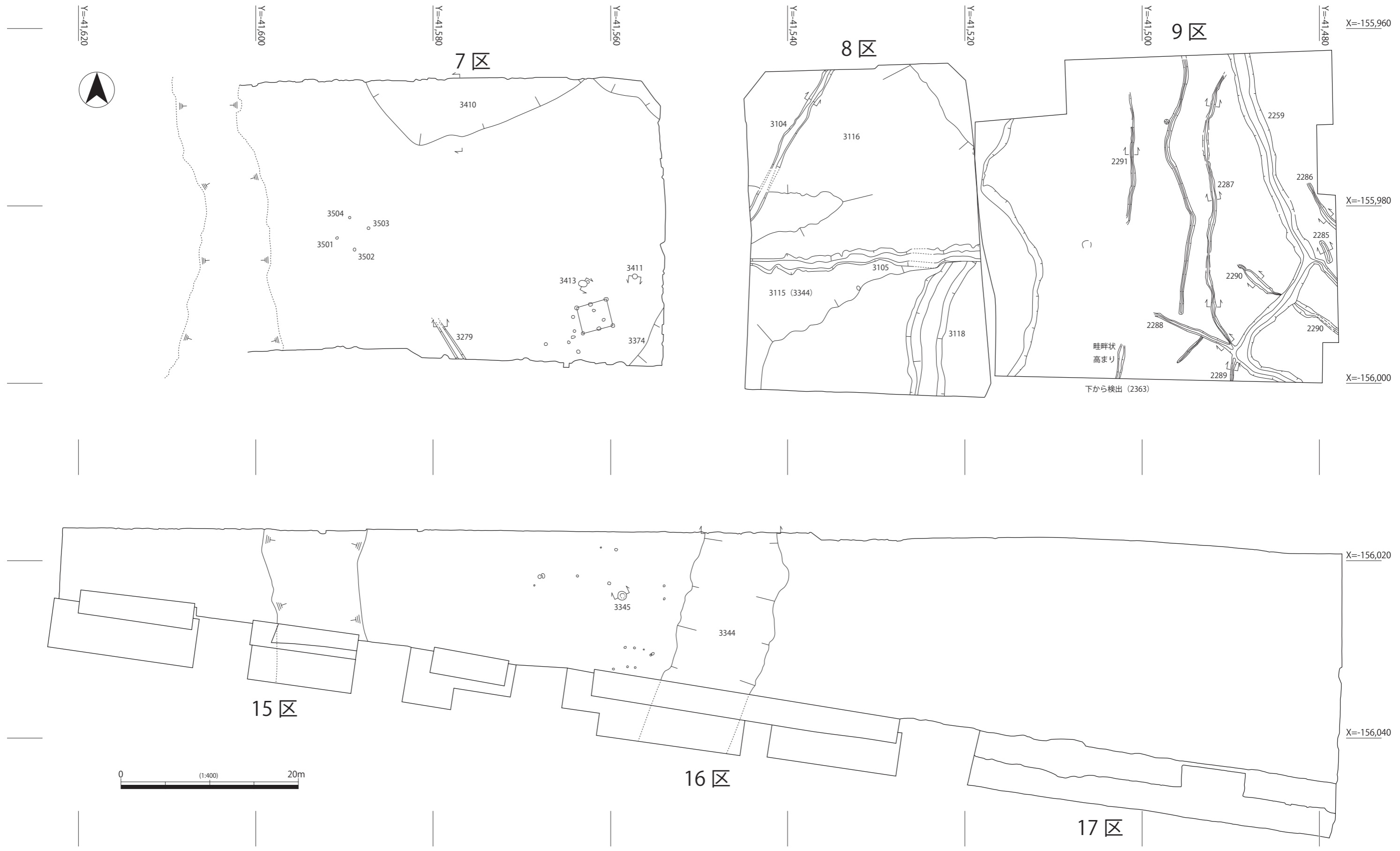


図96 7～9区、15～17区 第7～4面遺構平面図

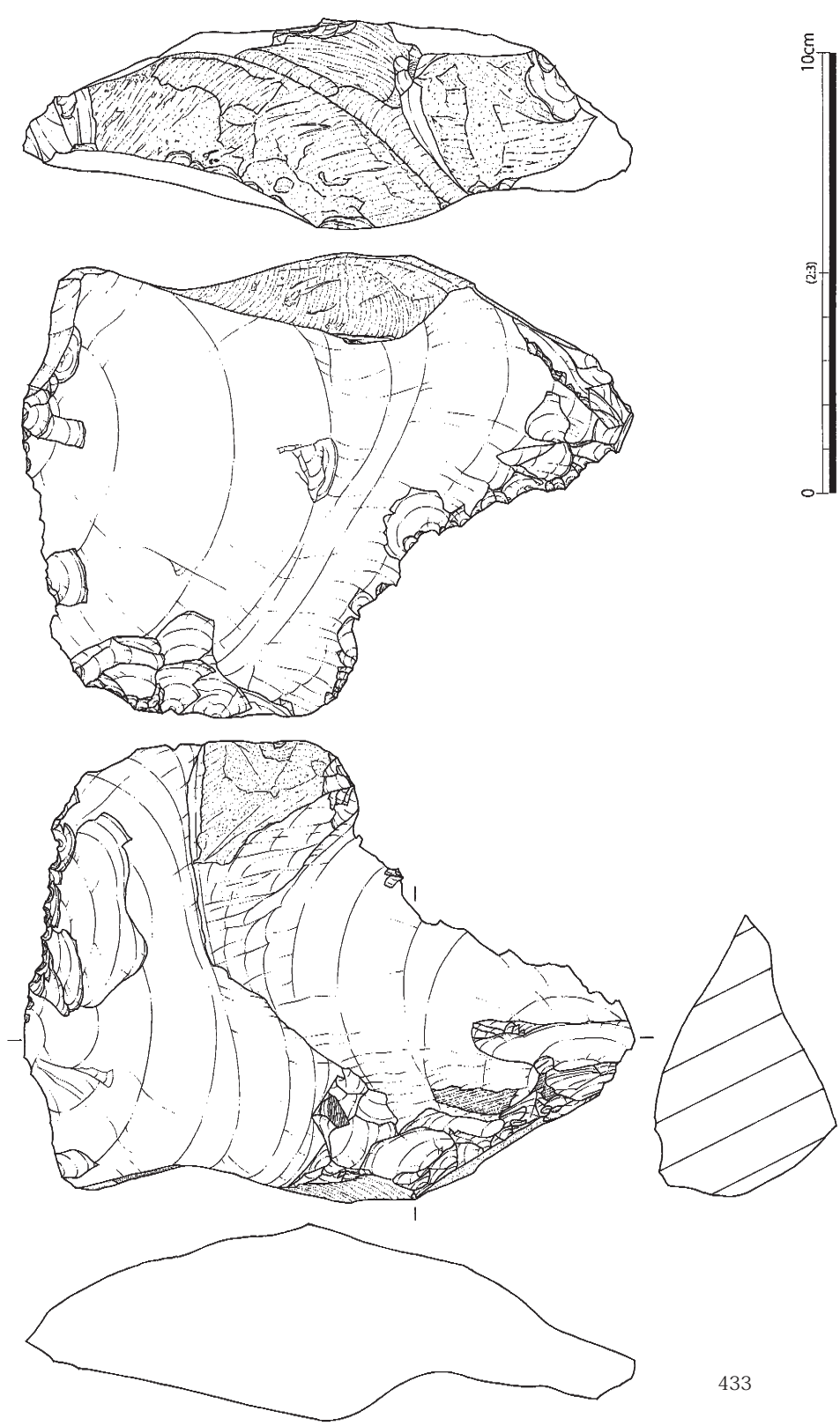


图97 15~17区 北側溝 出土遺物 (石器)

433

c. 第7d層下面（第6面）

第6面では、8区で第8a層内で形成された3118流路を検出した。

9区では、第9a層上面で、2259溝および2286～2290溝、2285土坑、畦畔状高まりなどを検出した。

3118流路（図96）

8区南東部で、南から北東方向に延びる3118流路を検出した。規模は幅約4m、深さ約0.9mで、3344流路によって切られている。南側の15～17区西部では、3527（3620・3621・3623）流路が供給する砂層のため、明確な流路を確認することはできなかった。このため、8区内のみで検出されたものであり、全容ははっきりしない。

埋土は、黄灰色極細粒砂質シルトからなる上層と、黒褐色シルト～極細粒砂からなる、暗色化した下層に細分される。畿内第V様式の土器片が出土している。

第7e～9a層上面検出遺構（図96・98）

9区の東半部で、ほぼ南北方向に延びる溝が密集して検出された。

2259溝は、幅2～2.5m、深さ約1.2mを測り、V字型の断面形をした溝である。蛇行しながらもほぼ北へ流下していた。南側では断面が明瞭なV字型であるが、北側では丸みを帯びて、U字型を呈する。

2286～2290溝のうち、2287～2289溝は2259溝に取り付く溝であったが、2290溝は2259溝によって切られていた。いずれも検出面で、幅0.3～0.6m、深さ10～20cmを測る。埋土は、黒褐色細砂シルトが基本で、粗砂や小礫を含んでいる。上部は不明であるためはっきりしないが、断面形は、2259溝のようなV字型にはならないと考えられる。2285土坑については、延長が十分に確認できなかったため、ここでは土坑としたが、溝の可能性はある。

中央部南寄りでは、ほぼ南北方向の直線的な畦畔状高まりを検出したが、北側は上位の2362流路によって削剥されていたため詳細は不明である。

第7d層出土土器（図99、図版75）

8区の第7d層内から、土器が数点出土している。

439は、摩耗および剥離が激しく調整については不明であるが、口縁が直立し、体部の肩が張る畿内第IV様式から直接系譜を引く畿内第V様式の壺である。436、437は、畿内第V様式の甕である。437は、口縁端部を上方に摘みあげ外に引き出す受け口状の口縁を持ち、口頸部が強く「く」の字に屈曲する。内面の調整は摩耗が激しく不明であるが、外面はハケ調整の後、連続する右上がりのタタキにより

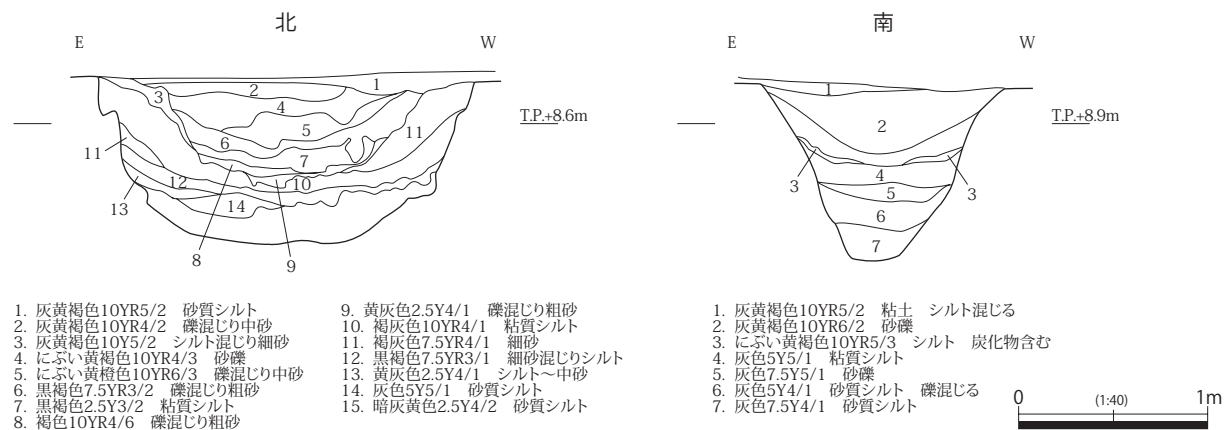


図98 2259溝 断面図

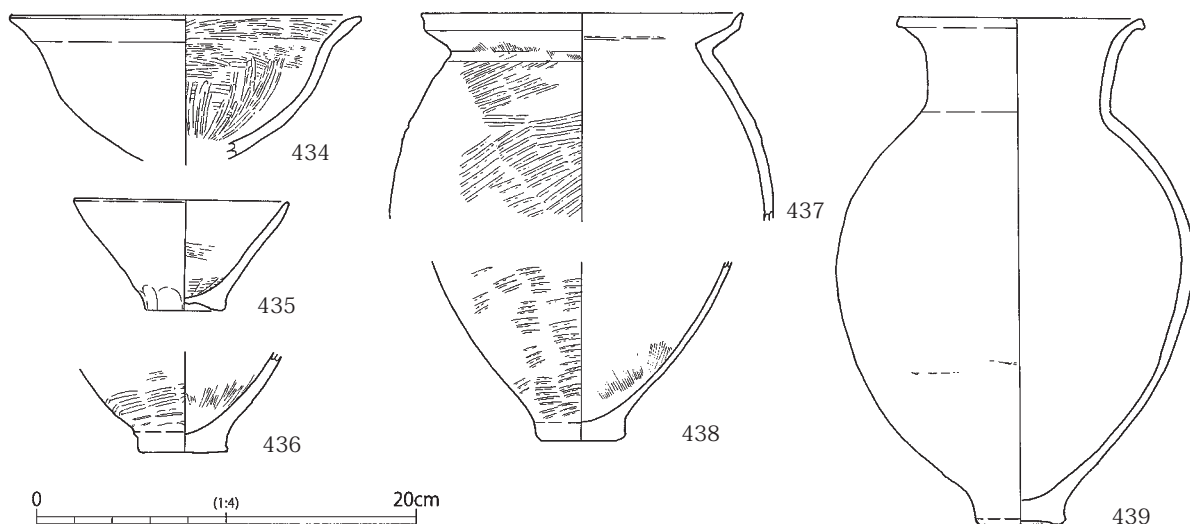


図99 3115流路、第7d層 出土遺物

調整する。436は、外面をタタキにより、内面をハケにより調整した甕の底部である。438は、外面をタタキ、内面をハケにより調整し、平底の底部を持つ畿内第V様式の甕底部である。434は、底部が丸底化し、口縁が外反する鉢である。外面は磨滅が激しいがタタキが退行し、ナデ調整が主体となっており、内面はハケのちミガキにより調整されている。畿内第V様式末～庄内式期に相当する。435は、外面をナデ、内面をクモの巣状ハケにより調整した鉢である。

d. 第7c層下面（第5面）

第5面では、第7c層下面で、同層内で形成されたピット群および、倒木痕を7区で検出した。なお、3527(3620・3621・3623)流路を供給源とする第7d層の堆積が、15～17区の東から西に向かって薄くなり、第9層と収斂するため、調査区西端では第7c層と第7e～9層との層離面は不明瞭である。

7区南東部に分布する第7c層下面で、同層内で形成された古墳時代のピット群を検出した。ピットの組み合わせから、掘立柱建物を1棟復原することができた。ピット群は、7区内では広がり確認できなかったが、調査区外の南側や東側に広がる可能性が考えられる。複数の掘立柱建物がこの部分に存在することも考えられる。

掘立柱建物35（図96・100、図版13）

7区南東端部で検出されたものである。柱痕を確認した3462～3464ピットを含む、3462～3467ピットで構成される。周囲でも他にピットが検出されていることから、建物は復元できなかったものの、集落を構成していた可能性がある。1間(約3.0m)×2間(約3.5m)の掘立柱建物と考えられる。主軸方向は、N-76°-Eである。柱間距離は、桁行1.6mと1.9m、梁行3.0m程度を測る。柱穴掘方は、円形や楕円形を呈しており、径40～50cm、検出面からの深さ30～40cmである。梁行の柱間距離がやや長い、間には他に柱穴は確認できなかった。

遺物は、土師器が出土しているが、図化できるほど復元できるものはなかった。

e. 第7c層上面（第4面）

第7c層上面で、7区南東部を中心に井戸および土坑、溝、流路を検出した。15～17区から8区を経て、7区までおよぶ大規模な流路が検出されている。8区では、これとは別に小規模な溝が検出された。

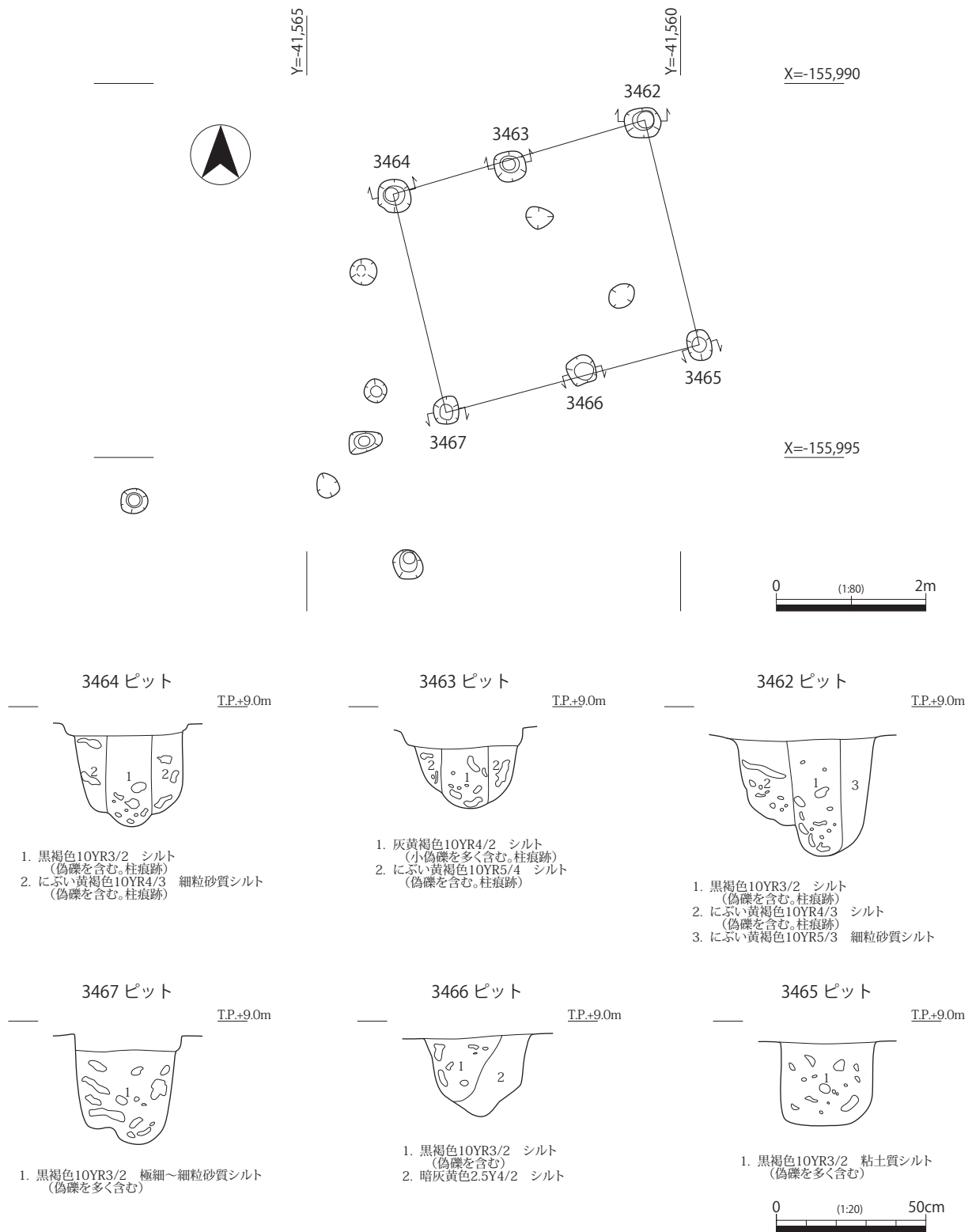


図100 掘立柱建物35 平面図

1. 土坑・井戸

7区南東部で、3411土坑および3413井戸を検出した。また、15～17区のほぼ中央部では、3345井戸が検出された。

3411土坑 (図96・102)

7区南東部の遺構群の北端部に位置する。平面形は円形を呈しており、規模は径約0.5m、深さ約0.5

mである。埋土は4層に細分され、1層はにぶい黄褐色中～細粒砂、2層は灰黄褐色細粒砂混じりシルト、3・4層は黒褐色シルトである。2・4層に、炭化物や偽礫を多く含む。廃棄土坑と考えられるが、遺物はほとんど出土していない。

3413井戸 (図96・101・102、図版13・72)

7区南東部の遺構群の北端部で、3411土坑の西約6mのところに位置する。平面形は円形を呈しており、径約0.8m、深さ約1.1mの素掘りの井戸である。埋土は、7層に細分される。2・3層は、炭化物や偽礫を多く含んでおり、廃絶時の人為的な埋土である。4～7層は、中～細粒砂が互層していることから、植物遺体や偽礫を含む滞水状態で堆積した機能時の堆積層と考えられる。種実同定の結果、イネやメロン類などの栽培植物、草本類、低木類などが検出されたが、草本に比べて木本が著しく少ないことが特徴である。

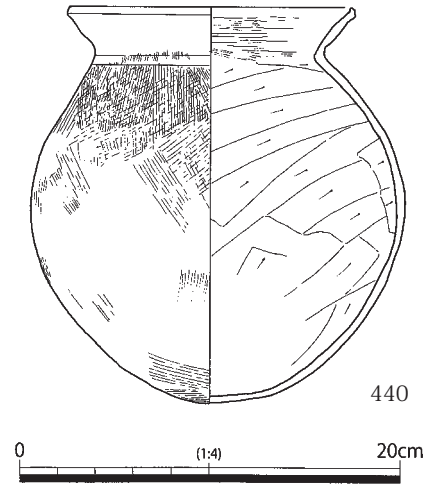


図101 3413井戸 出土遺物

底付近より完形の河内型庄内甕(440)が出土している。口縁端部を上方に摘み上げ、口頸部が「く」の字に屈曲する。体部最大径が中央よりやや下方にくるやや下膨れの器形で、底部はやや尖底気味の丸底である。内面をケズリ、外面体部上半を細かいタタキのちハケで、下半をハケにより調整する。庄内式IV期に相当する。

3345井戸 (図96・103、図版20)

15～17区のほぼ中央部の第7c層上面で検出された。割り貫きの木製井戸枠をもつ井戸である。規模は、掘形が径約1m、井戸枠が径約0.4mで、深さ約1mを測る。割り貫きの井戸枠は上端が欠損しており、下部の0.6m程度が残存している。井戸枠は上部が抜き取られた可能性もある。井戸枠は樹種同定の結果、コナラ材が用いられていたことが判明した。

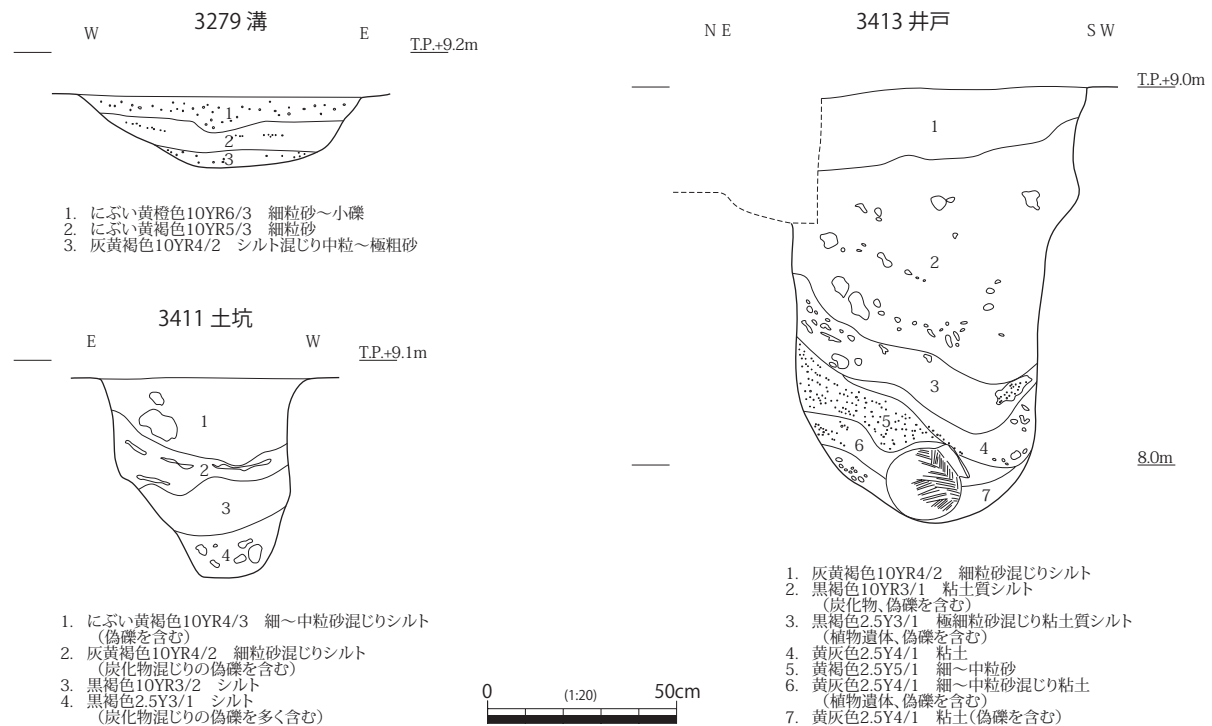


図102 3411土坑・3413井戸・3279溝 断面図

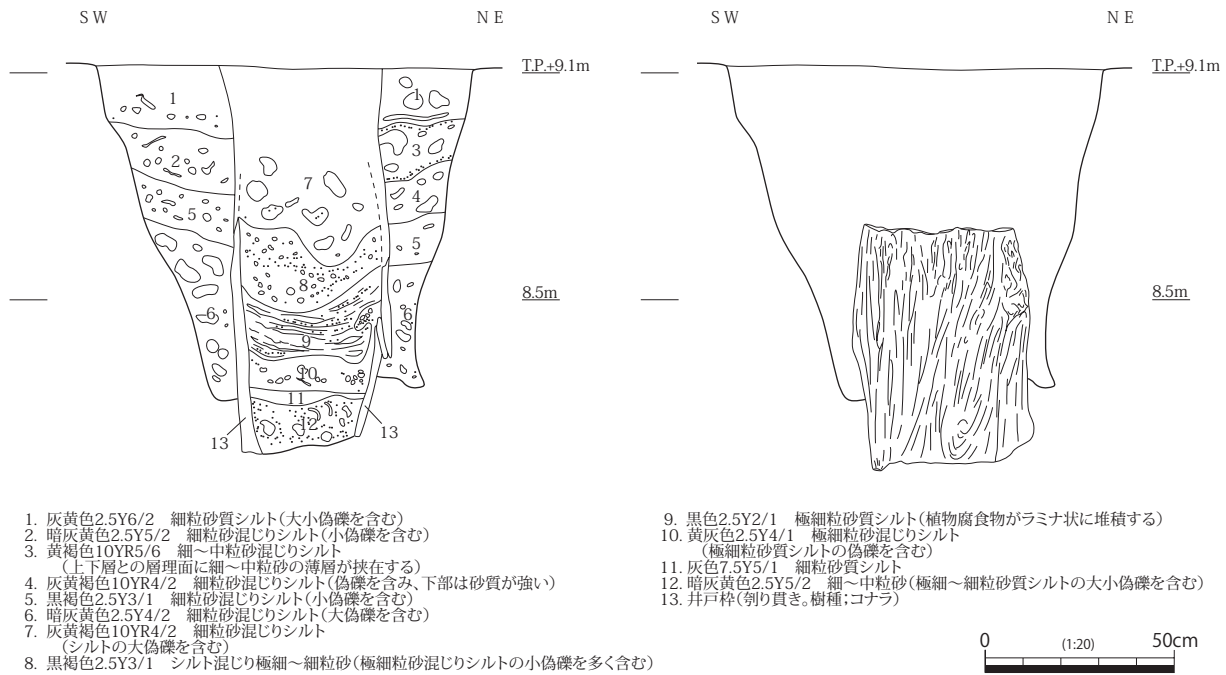


図103 3345井戸 断面図

掘形の埋土は、6層に細分される。1層は、灰黄色細粒砂質シルトからなり、大小偽礫を含む。2層は、暗灰黄色細粒砂混じりシルトからなり、小偽礫を含む。3層は、黄褐色細～中粒砂混じりシルトからなり、上下層との層理面に細～中粒砂の薄層が挟在する。4層は、灰黄褐色細粒砂混じりシルトからなり、偽礫を含み、下部は砂質が強い。5層は、黒褐色細粒砂混じりシルトからなり、小偽礫を含む。6層は、暗灰黄色細粒砂混じりシルトからなり、大偽礫を含む。

一方、井戸枠内の埋土は6層に細分され、1・2(図では7・8)層は人為的な埋戻し土とみられる。1(7)層は、灰黄褐色細粒砂混じりシルトからなり、シルトの大偽礫を含む。2(8)層は黒褐色シルト混じり極細～細粒砂からなり、極細粒砂混じりシルトの小偽礫を多く含む。3(9)層は黒色極細粒砂質シルトからなり、植物腐食物がラミナ状に堆積する。4(10)層は、黄灰色極細粒砂混じりシルトからなり、極細粒砂質シルトの偽礫を含む。5(11)層は、灰色細粒砂質シルトからなる。6(12)層は、暗灰黄色細～中粒砂からなり、極細～細粒砂質シルトの大小偽礫を含み、加工時の堆積層である可能性がある。

掘形の埋土からは、土師器片や前述したサヌカイト製石鏝が、井戸枠内の埋土からは土師器片や礫が出土している。

3345井戸の周囲では、ピット群(3373～3390ピット)を検出した。いずれも小規模で、浅いものが多い。掘立柱建物を復元することはできなかった。

2. 溝

7区中央部の南端部で、3279溝を検出した。また、8区では、3104溝と3105溝が検出された。全体に溝の検出は希薄である。

3279溝 (図96・102)

7区中央部の南端で検出されたもので、南東から北東方向へ延びる。規模は、幅約0.7m、深さ約0.2mで、北側を後述する3265溝によって切られており、長さ約5mが確認されたのみであるため、全容ははっきりしない。南側の15～17区では、これにつながると考えられる溝は検出されなかった。

埋土は、全て水成層からなる3層に細分される。にぶい黄褐色少礫～細粒砂の1層、にぶい黄褐色細粒砂の2層、灰黄褐色シルト混じり極粗～中粒砂の3層からなる。土師器片が多く出土している。

3104溝 (図96)

8区北西部で検出された。南西から北東方向に延びており、3410流路を切る。規模は幅約0.9m、深さ15cmである。8区西側の調査区外で3105溝と重複すると考えられるが、前後関係は不明である。西側の7区と南側の15～17区では、これにつながると考えられる溝は検出されなかった。

埋土は、黄褐色粗～中粒砂からなる上層と、極粗～粗粒砂からなる下層の2層に細分される。遺物は、布留式甕の口縁部が1点出土している。層序的には矛盾する点があるため、混入品であるのか、本遺構の埋没年代を示すものであるかは検討する必要がある。

3105溝 (図96)

8区中央部で検出されたもので、第7b層内で形成された溝である。ほぼ東西方向にまっすぐ延びており、3344流路を切る。8区西側の調査区外で3104溝と重複すると考えられるが、前後関係は不明である。西側の7区では、これにつながると考えられる溝は検出されなかった。規模は、幅約1.0m、深さ約0.7mである。埋土は、黄褐色粗～極細粒砂からなる。

3. 流路

15～17区から8区を経て、7区までおよぶ大規模な流路が検出されている。基本的な流れは、南から北方向であるが、かなり蛇行している部分も見受けられ、単純な流路ではない様相である。

3344(3115)流路 (図96・104・106、図版75・76)

15～17区では、中央部で検出されたもので、南南西から北北東へ延びている。第7b層内で検出した大規模な流路である。第7c層段階には既に流路として機能しており、第7b層段階でほぼ埋没している。8区でも、3344流路の続きと考えられる流路(3115流路)を検出した。8区内では、南西から東に向かっている。8区東端部では、幅約15m、深さ約6m程度あり、中央部で3116(3410)流路と合流し、北西方向へ向かう。3344流路は、いずれの調査区でも安全上の問題で完掘していないため、正確な規模は不明であるが、幅約7.0m、深さ1.0m以上である。埋土は、にぶい黄色粗～細粒砂からなる上層と、オリブ褐色粗～極細粒砂からなる下層の2層に分けられる。

遺物は、畿内第V様式の土器が多く出土している。

446は、頸部以下を欠損した広口壺である。口縁端部を摘み上げ、頸部外面に簾状文を施文する。簾状文のピッチは粗く、上段の簾状文の一部に、さらに波状文が施文されている。444・445は、体部上半以下を欠損した壺である。444は、頸部が直立気味に立ち上がり、外反する垂下口縁がL字にならない広口壺である。頸部のミガキは強く緻密である。445は、口頸部が弱く外反する。453は、壺の頸胴部片である。頸部内面をケズリのち指押さえで、胴部内面を横ハケにより調整する。外面はハケのちミ

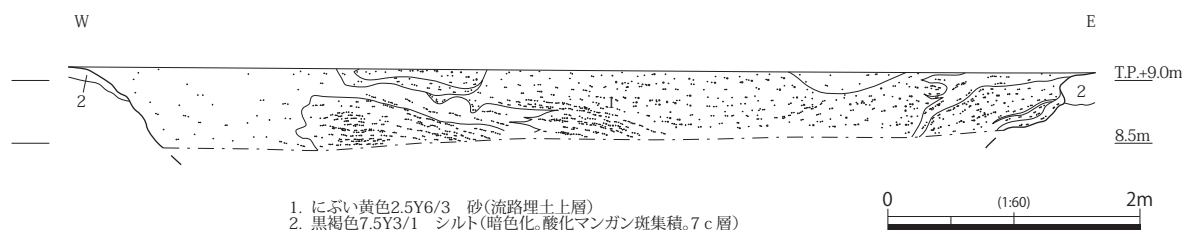


図104 3344流路 断面図

ガキにより調整し、頸部と胴部の境に刺突列点文を施す。頸胴部の境に刺突列点文を施すことから、西部瀬戸内の第V様式の影響を受けた長頸壺であると考えられる。

447は、体部が球胴状で、底部が平底の畿内第V様式の甕である。外面を底部付近までタタキ調整後、ハケ調整し、内面下半を縦方向のハケで、上半をケズリで調整する。なお、器型が球胴状で、口縁が直立気味に立ち上がることから、壺の可能性も考えられる。448は、畿内第V様式甕の底部である。449は、布留式甕である。口縁が肥厚し、頸部が「く」字に屈曲する。体部内面をケズリ、外面の肩部を横ハケ、以下を縦ハケにより調整する。布留式I～II期に相当すると考えられる。

441は、内外面をナデ調整した蓋である。裾部口径が小さいことから、甕等の蓋ではなく、無頸壺または台付き壺の蓋と考えられる。442・443・451は、鉢である。442は、底部中央にくぼみがある平底の鉢である。体部は底部から直線的に外方に開き、外面をハケで、内面をクモの巣状ハケにより調整する。443は、底部を指押さえにより絞った鉢である。摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、内面をハケにより調整する。451は、外面をタタキ、内面をハケにより調整する。口縁が外傾し、底部が小さくなり、尖底化への傾向が見られることから、畿内第V様式末～庄内式期に相当すると考えられる。450は、台付き鉢の脚部である。452は、畿内第V様式の高杯である。杯部は椀型で、脚部の裾部の広がりが見られることから、全体的に安定感がある。

3410(3116)流路 (図96・105・106、図版13・72・75)

7区北端部で、北東から南西方向へ調査区に入り、さらに北西方向へ伸びる3410流路の南肩を検出した。第7c層上面で検出した大規模な流路である。第7c層段階には既に流路として機能しており、第7b層段階でほぼ埋没している。8区内では、東から北西に向かっている(3116流路)。8区東端部では、幅約15m、深さ約6m程度あり、中央部で3115流路と合流する。3410流路は完掘しておらず、7区北端部で一部を検出したのみであったため、その正確な規模は不明である。

埋土は、大きく5層に細分される。灰黄褐色砂質シルトからなる1層および、底部の暗色化が著しい黒褐色粘土質シルトからなる2層は、最終段階で埋没した流路の埋土である。3・4層は、炭化物や植物遺体を多く含む粘土質シルトからなる。4層からは、畿内第V様式の鉢(458・460)が出土している。1～4層は、埋土の細粒化が著しい事から、滞流状態での堆積であったと考えられる。また、砂や植物遺体によるラミナが発達した灰黄色砂礫からなる5層は、下層の3527流路の埋土と考えられる。

遺物は、3410流路からは畿内第V様式の土器が多く出土しているが、これらの土器は3・4層段階の流路より出土したものであると考えられる。その他、サヌカイトや長原式および滋賀里II～III式を中心とす

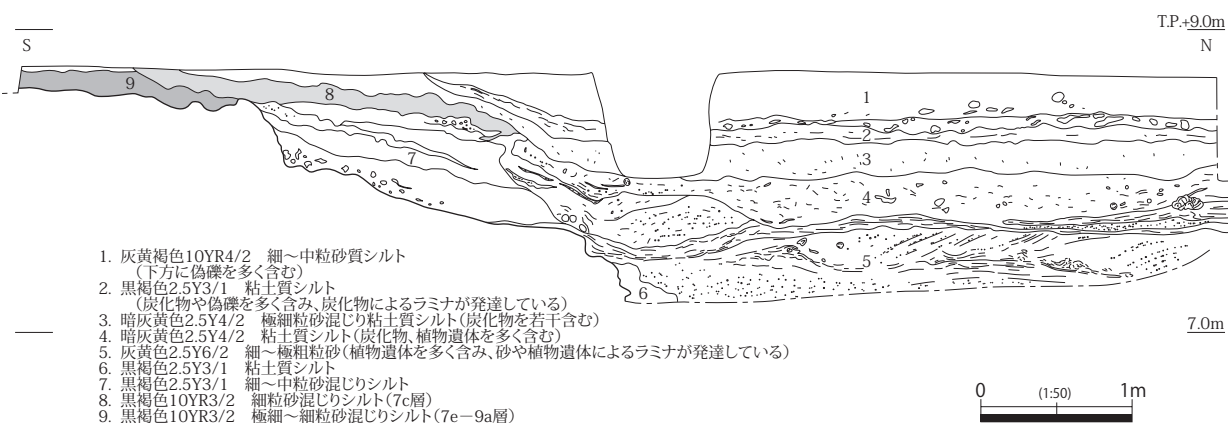


図105 3410流路 断面図

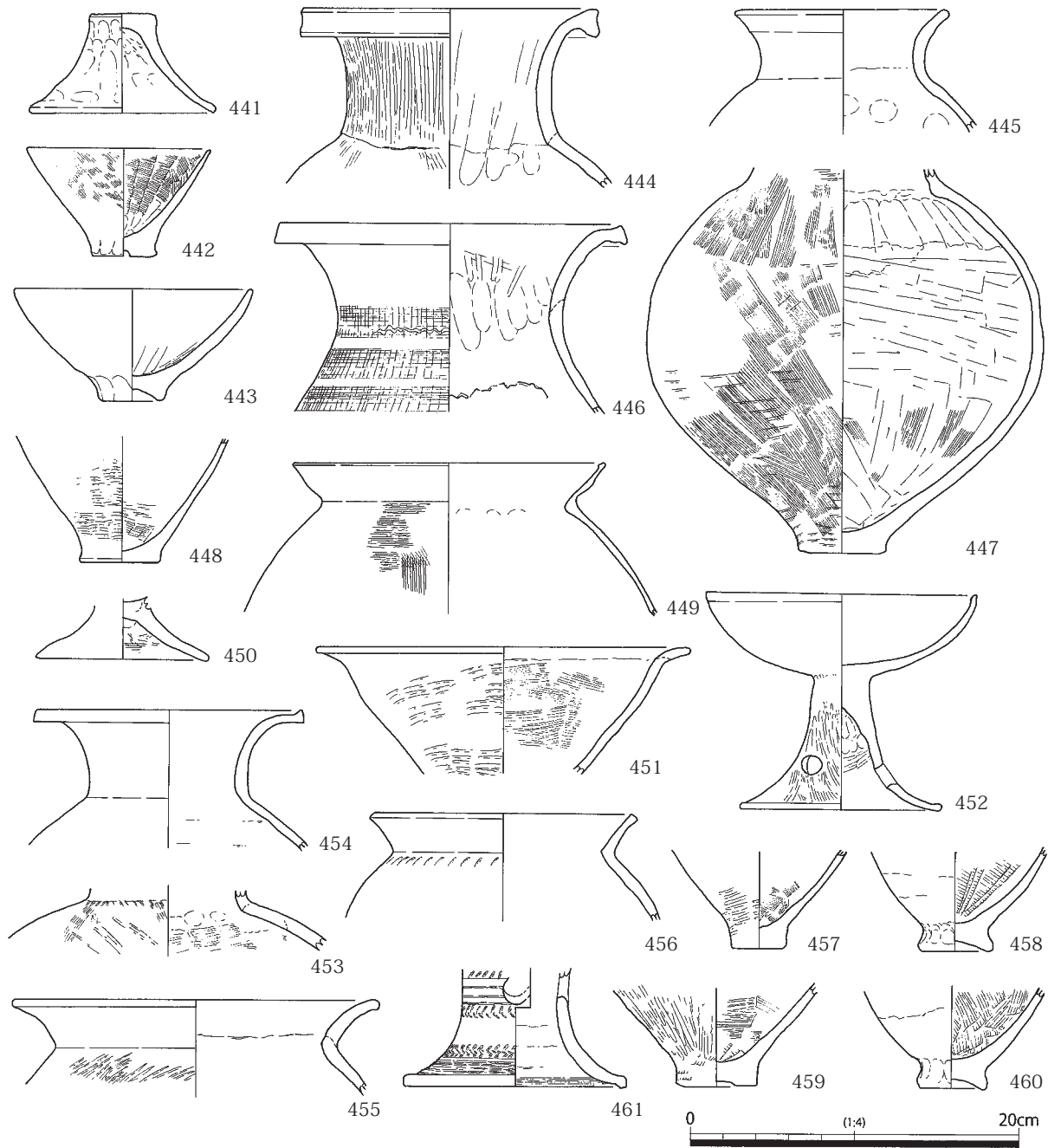


図106 3344・3410流路 出土遺物

る縄文時代晩期の土器が出土しているが、下層の3527流路に帰属するものと考えられる。

454は、頸部が直立し、外反する口縁の端部を上方に摘みあげた畿内第V様式に相当する壺である。456・457は、甕である。457は、外面をタタキ、内面をハケにより調整し、平底の底部を持つ畿内第V様式の甕底部である。底部径が極めて小さく尖底化が顕著である。456は、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部を面取りする。内面のケズリ調整が頸部までおよび、外面肩部に刺突列点文を配することから西部瀬戸内系の第V様式甕と考えられる。458・460は、底部を指押さえにより絞った畿内第V様式の鉢である。外面をナデ、内面をクモの巣状ハケにより調整している。461は、沈線状の凹線とヘラ描きの刺突文を組み合わせたものにより、加飾した数段の透かし孔をもつ畿内第V様式の器台である。亀井遺跡（Ⅱ）14溝より近似するものが出土している。

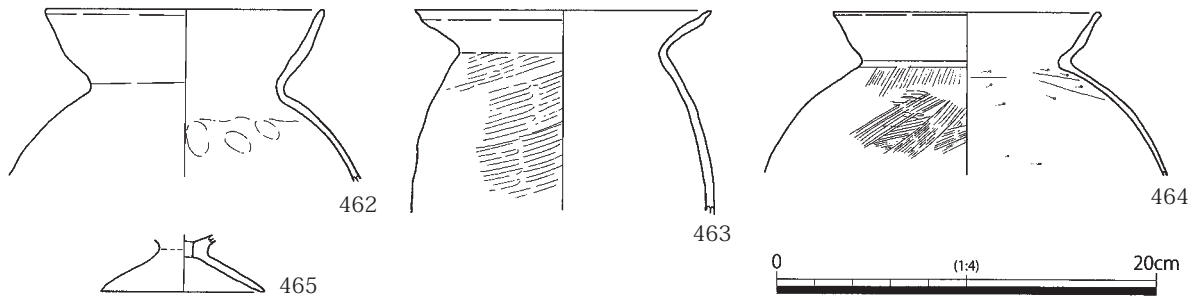


図107 7区、15～17区第7c層 出土遺物

459および455は、3115流路と3116流路の交差部分より出土した畿内第V様式の甕である。459は、内面をハケ、外面をハケのちミガキにより調整し、底部がくぼみ底になる。455は、口縁が「く」の字に屈曲し、体部外面を右肩上がりのタタキにより、内面をハケにより調整した甕の口縁である。

第7c層出土土器（図107、図版72・76）

第7c層内の遺構および包含層より、庄内式期を中心とする土器が出土している。

463は、体部の張りが弱く、口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部を外方に摘み出した畿内第V様式系の甕である。体部外面を幅の太い連続する右上がりのタタキにより調整する。体部内面は摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、ハケによる調整の可能性がある。464は、体部内面をケズリ、外面をタタキのちハケにより調整した庄内式甕である。口縁部が肥厚し、端部が内折である等、布留式甕の影響が顕著に認められることから、布留式並行の庄内式IV期に相当すると考えられる。462は、口縁が内弯し、口縁端部が肥厚する土師器甕である。体部の調整は摩耗が激しく不明であるが、布留式甕の口縁の特徴を持つことから、布留式甕の可能性が考えられる。465は、裾部が大きく外に開き、器高の低い中空の小型器台である。

f. 第7a層下面（第3面）

第3面では、第7a層の分布が極めて局地的であった為、第7bii層上面で第7a層上面および第7a層内の遺構を一括で検出した。同層内の複数の生活面から掘り込まれた、古墳時代の掘立柱建物・ピット・井戸・溝・竪穴遺構などの遺構群を検出した。なお、下位層との層理面は不明瞭で、遺構検出が困難であったことから、第7b層上部まで掘削を進めた後の精査により検出した遺構もある。さらに、南北方向に延びる溝が複数検出されており、15～17区から7区西半部にまで延びている。9区では、第7d層上面で溝・倒木痕・ピットを検出した。

1. 掘立柱建物・ピット

15～17区では、中央から西寄り部分にかけて分布する第7a層下面で、古墳時代の掘立柱建物・ピット・竪穴遺構などが密集したかたちで検出された。ただし、ピット群や井戸、竪穴遺構は、15～17区内でのみ密集しており、7区では検出されていない。南側の調査区外に広がるものと考えられる。9区では、東半部でピットがまとまって検出されたが、掘立柱建物を復元することはできなかった。

掘立柱建物36（図108・109、図版18・19）

15～17区の中央部やや西寄りに位置する、3192溝の東側でピット群がまとまって検出された。そのうち、3200・3232・3236～3238・3240・3243・3246ピットで構成される。3236・3246ピットでは、

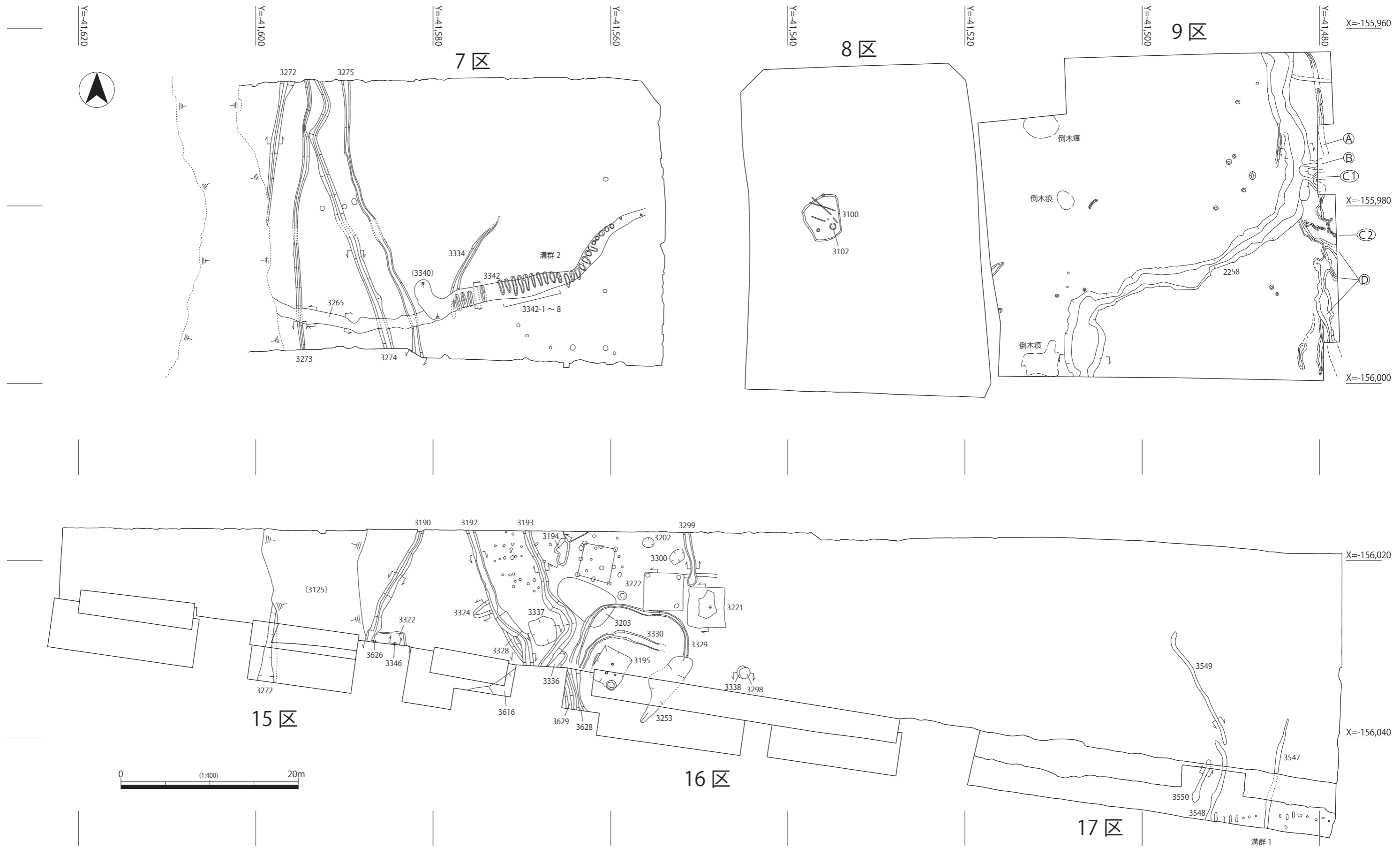


图108 7~9区、15~17区 第3面遺構平面図

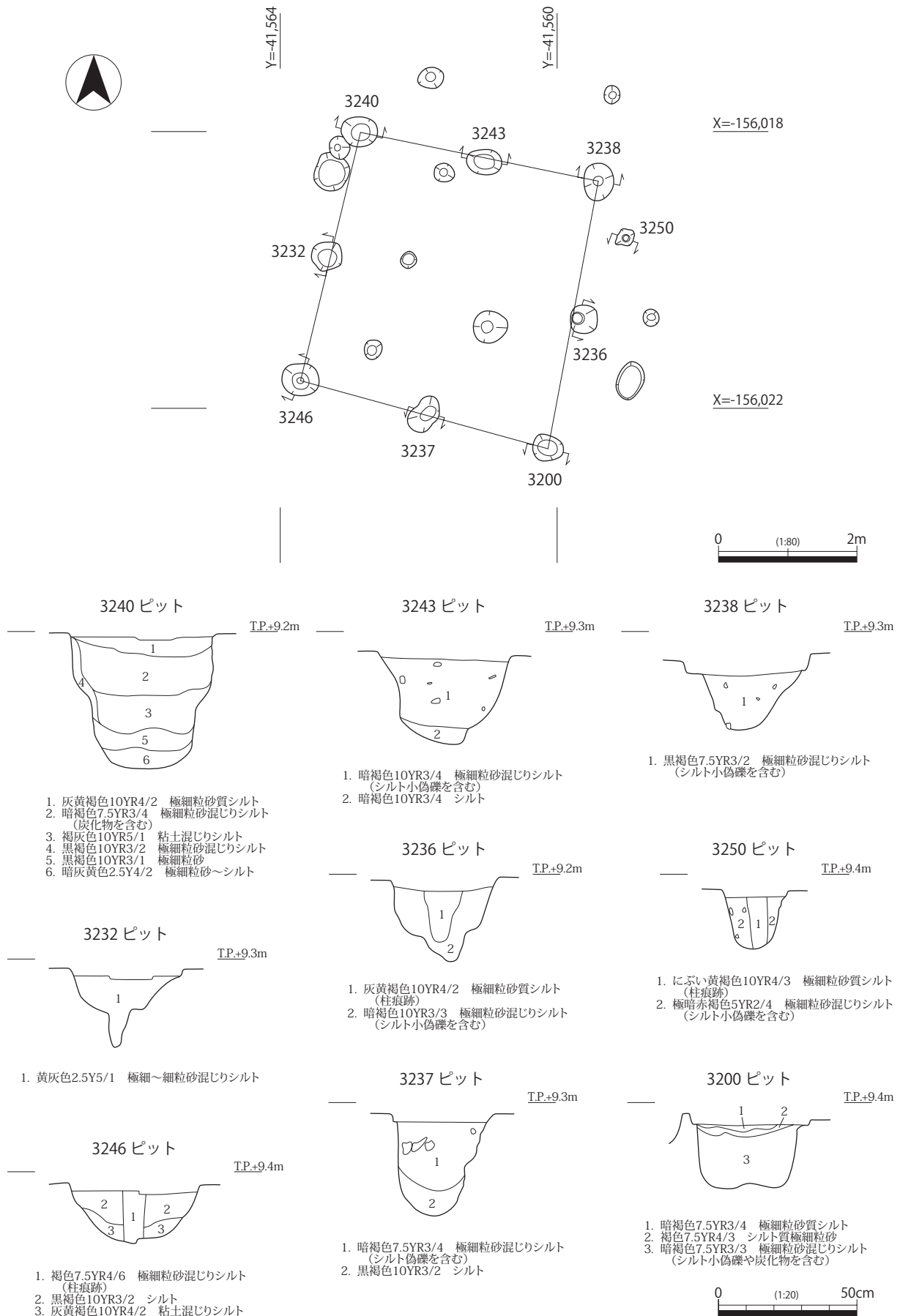


図109 掘立柱建物36 平面図

柱痕を確認している。2間(約3.6m)×2間(約3.9m)の掘立柱建物の柱穴として組み合わせる可能性がある。柱間距離は、桁行1.8～2.0m、梁行1.8m程度を測る。主軸方向は、N-10°-Eである。

柱穴掘方は、円形や楕円形を呈しており、規模や検出面からの深さは以下の通りである。3240ピットは、楕円形を呈し、長径0.5m、短径0.45m、深さ0.48mある。3200ピットは、円形を呈し、径0.4m、深さ0.25m程度ある。3243ピットは、楕円形を呈し、長径0.48m、短径0.36m、深さ0.33mある。3232ピットは、円形を呈し、径0.4m、深さ0.28mある。3246ピットは、楕円形を呈し、長径0.53m、短径0.47m、深さ0.21mある。3236ピットは、円形を呈し、径0.39m、深さ0.29mある。3237ピットは、やや不整形な楕円形を呈しており、長径0.56m、短径0.35m、深さ0.37mある。3238ピットは、楕円形を呈し、長径0.53m、短径0.46m、深さ0.25mある。

遺物は、3238・3243ピットで土師器が出土しているが、いずれも小片で図化できるほど復元できるものはなかった。

3250ピット (図108・109)

このほか、掘立柱建物36とは別の建物を構成しているものと考えられるが、3250ピットでも柱痕跡が確認されている。他に柱痕跡のみられるピットは検出されておらず、掘立柱建物を復元することはできなかった。平面形は隅丸方形を呈しており、一辺0.23m程度、深さ0.21mである。埋土は2層に細分され、柱痕跡とみられる1層は、にぶい黄褐色極細粒砂質シルトからなる。2層は、極暗赤褐色極細粒砂混じりシルトからなり、シルトの小偽礫を含む。

2. 竪穴遺構

15～17区の中央部から西にかけての遺構が集中して検出された部分で、方形の竪穴遺構が5基みつかった。形状は、いわゆる竪穴住居に似ており、その可能性も考えられるが、上面の削平が著しく、柱穴や付属施設なども明確には確認できなかったことから、ここでは竪穴遺構として一括して述べることにする。このうち、3195・3322竪穴遺構は、竪穴住居の可能性が高いものと考えられる。

3195竪穴遺構 (図108・110・111、図版18・19・76)

15～17区のほぼ中央南端部に位置する。方形を呈しており、一辺3.5m、深さ0.2m程度である。上面はかなり削平をうけているものの、攪乱などはうけておらず、平面形はほぼ完形の状態で検出されている。西側で3625溝を切っている。埋土は2層に細分され、2層は貼床層と考えられる。1層は黒褐色極細～細粒砂混じりシルトからなり、土器を含む。2層は灰褐色極細～細粒砂質シルトからなり、炭化物を含む。

2層の上面で、柱穴の可能性のある3339ピットを検出した。竪穴遺構の中央やや北側に位置する。円形を呈しており、径0.37m、深さ0.28mある。埋土は2層に細分され、1層は黒褐色細粒砂混じりシルト、2層は褐灰色粘土質シルトからなる。他にも対峙するかたちで南側で1基、東側で1基ピットが検出されたが、上部構造を復元できるまでには至っていない。

内部では周壁溝は確認されなかったが、排水用の可能性がある幅12cm、深さ5cm程度の細かい溝(3625溝)が、西側に取り付いていた。さらに、外側を取り囲むような形状の3329溝と3330溝が検出された。

遺物は、土師器が出土している。

470は、口縁が内弯肥厚し、口縁端部を外に引き出した布留式甕である。摩耗が激しく不明瞭であるが、体部内面をケズリ、外面をハケにより調整する。468は、口縁が肥厚し、端部を内側に摘みだす布

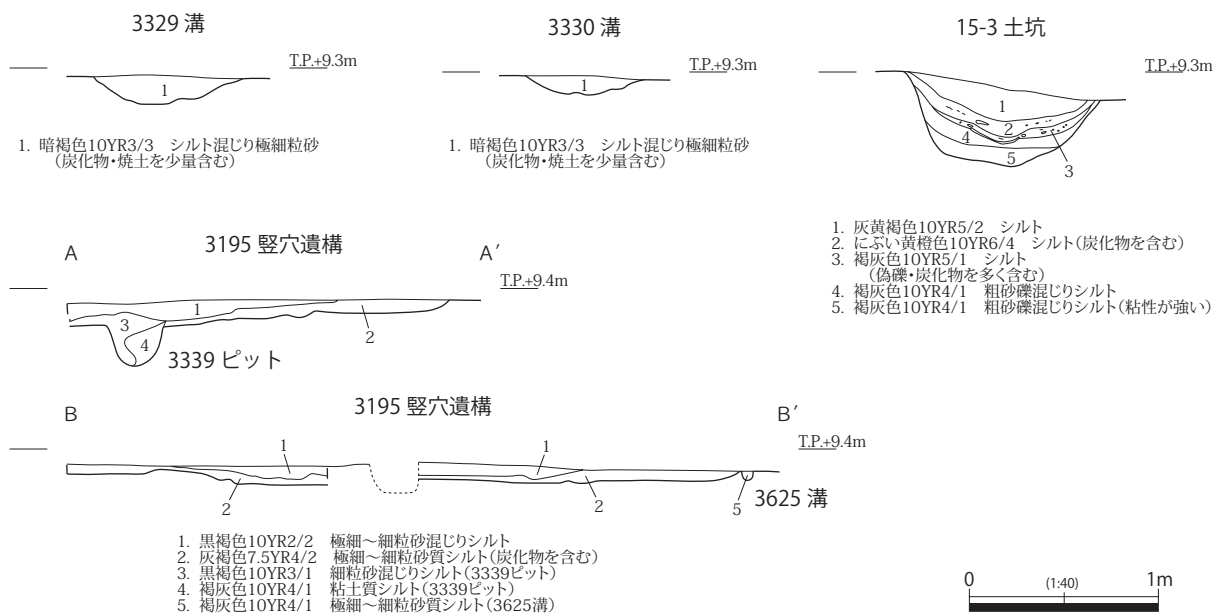
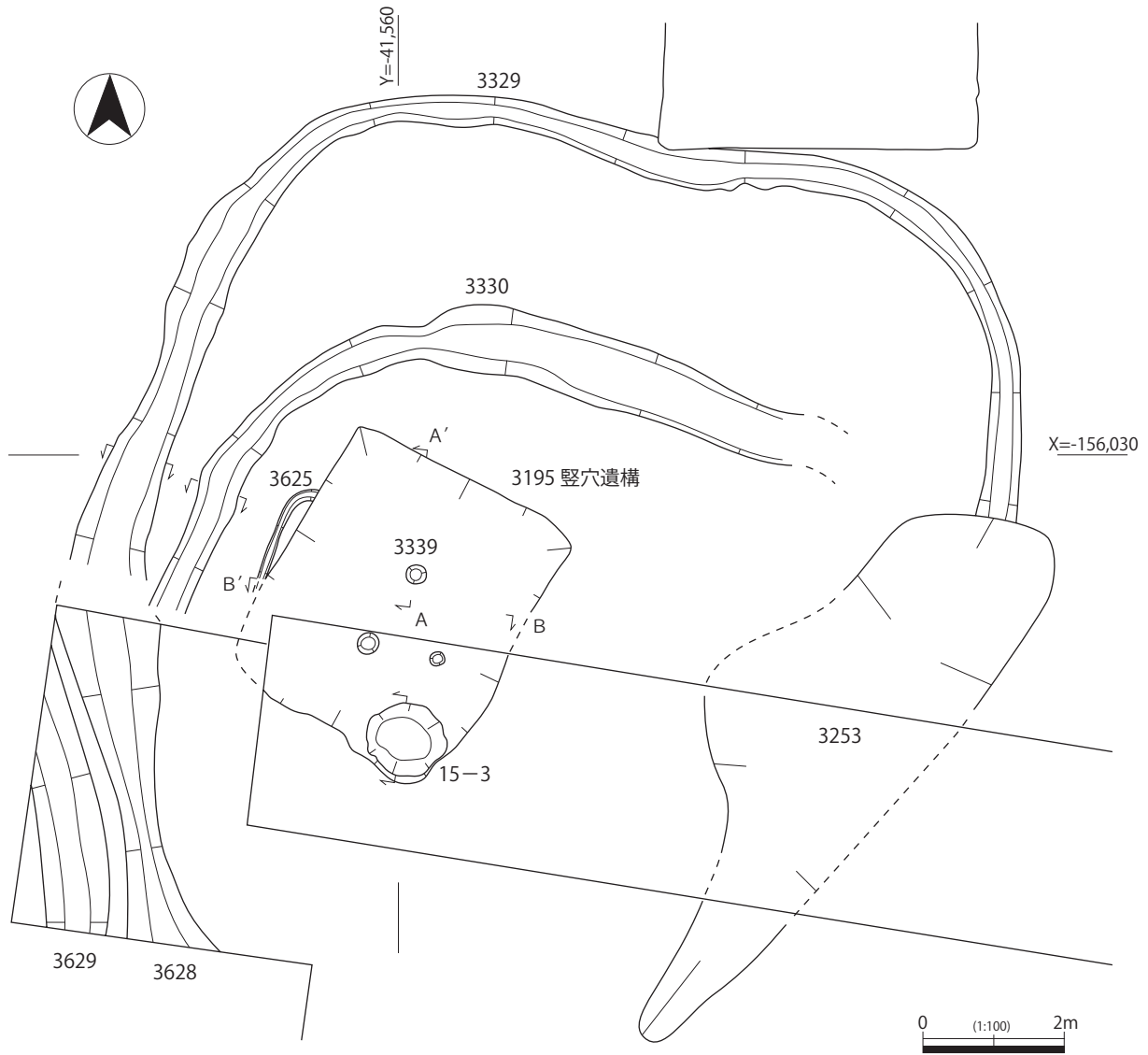


図110 3195竪穴遺構付近遺構 平・断面図

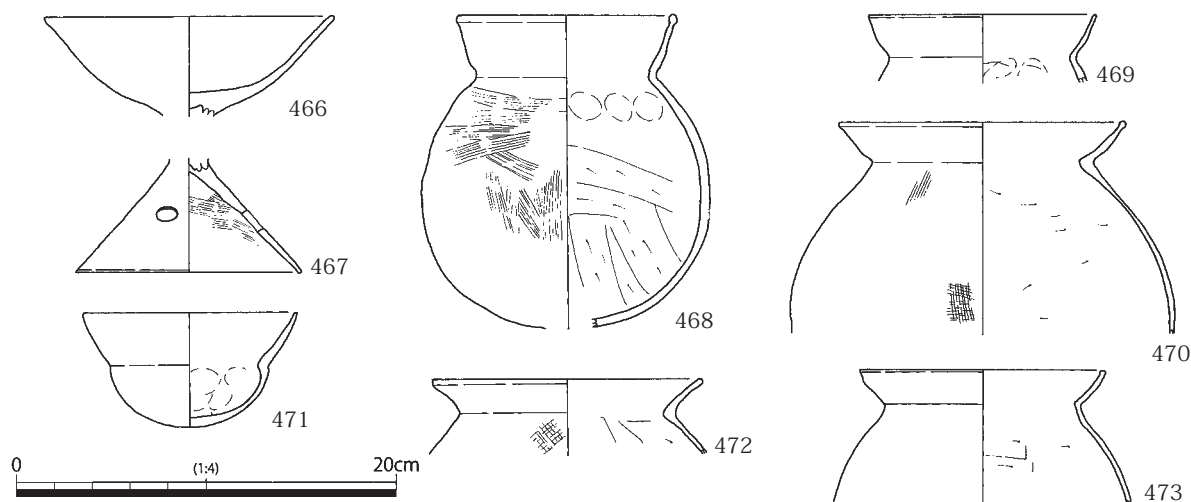


図111 3195・3221竪穴遺構、3330溝 出土遺物

留式甕である。体部の器壁はやや厚く、下膨れで、内面をケズリ、外面上半を横ハケ、下半を縦ハケにより調整する。466は、脚部との接合部に棒状工具による突き刺し痕の残る、無稜外反高杯の杯部である。469は、口縁が内弯しながら外に開き、内外面に化粧掛けを施した小型丸底土器の口縁部である。467は、脚部が大きく外に広がり、三方向に円形の透かし孔を有する小型器台の脚部である。外面の調整は摩耗が激しく不明であるが、内面はハケにより調整する。これらは、器形的特徴から布留式Ⅱ～Ⅲ期頃に相当するものと考えられる。

3329溝・3330溝（図108・110・111、図版18・19・76）

3195竪穴遺構に関連するものと考えられるため、ここで述べることとする。3195竪穴遺構を囲むように並走する2条の溝である。第7a層内で形成されたとみられる溝である。

外側の3329溝は、3195竪穴遺構の南側から西側と北側を通り、東側に向かう形状で、明らかに3195竪穴遺構のまわりを巡ることを意識して掘削されたものといえる。ただし、3195竪穴遺構の大きさに比べ、3329溝で区画された部分の面積が広すぎることから、単に竪穴遺構を区画するための施設ではないことも考えられる。3195竪穴遺構の東側に位置する3253落ち込みと重複しており、切られている。その先の部分は検出されておらず、南側の状況は不明である。幅は0.7m前後で、深さは15cm程度である。埋土は、暗褐色シルト混じり極細粒砂からなり、炭化物や焼土を少量含む。遺物は、庄内式の甕を含む土師器片が出土している。

内側の3330溝は、3195竪穴遺構の西側から北側に向かう部分を検出している。ややL字状に曲がる形状であるが、東側と南側は削平のため検出できず、状況は不明である。3329溝と並走するが、3195竪穴遺構の西側で重複する可能性がある。幅は0.7m前後で、深さは10cm程度である。埋土は、3329溝と同様に、暗褐色シルト混じり極細粒砂からなり、炭化物や焼土を少量含むなど、近似している。

3329溝および3330溝に囲まれた部分では、3195竪穴遺構が確認されたのみで、他の遺構はみられず、空閑地となっている。

遺物は、3330溝から土師器片が出土している。472は、口頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部をわずかに摘み上げた庄内式甕である。体部は、内面をケズリ、外面をタタキのちハケにより調整する。471は、口縁が全体の1/2を占め、内弯しながら外に広がる小型丸底土器である。器形的特徴から庄内式Ⅳ～Ⅴ期（布留式Ⅰ期）に相当するものと考えられる。

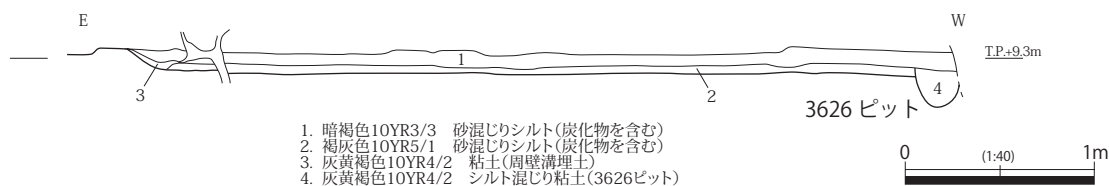


図112 3322 竪穴遺構 断面図

3329溝と3330溝は、ともに3195竪穴遺構に付属する溝と考えられるが、出土遺物の内容から3195竪穴遺構よりも先行すると考えられ、3195竪穴遺構に建て替えがあった可能性を示唆できる。

3322 竪穴遺構 (図108・112、図版20)

15～17区の西側南端部に位置する。方形を呈しており、南側の大半が調査区外に広がる。さらに西側を3190溝に切られており、規模は、一辺3.7m以上、深さ0.1m程度である。埋土は2層に細分され、2層は貼床層と考えられる。1層は暗褐色砂混じりシルト、2層は褐灰色砂混じりシルトからなり、ともに炭化物を含む。

2層上面で、柱穴の可能性のある3346・3626ピットを検出した。3346ピットは、3322竪穴遺構の北東部に位置しており、4本柱のうちの1基である可能性が高い。円形を呈しており、径0.34m、深さ0.17mである。埋土は、灰黄褐色砂混じりシルトからなる。調査区限界である南壁断面で検出された3626ピットは、径0.22m以上、深さ0.19mである。埋土は、灰黄褐色シルト混じり粘土からなる。このほか、2層上面では、わずかに周壁溝とみられる溝を検出した。幅10～20cm、深さ2cmである。

遺物は、2層上面でサヌカイト製石鏃が出土した。

このほかの3221・3222・3337竪穴遺構は、竪穴住居に形状は似ているが、確実に柱穴と考えられるピットが検出されていないことや、床面の確認が困難であることなどから、竪穴住居とする根拠に乏しい。このため、性格がはっきりしないまま、ここでは便宜上、「竪穴遺構」として報告することとする。ただし、あくまでも呼称であり、現在のところは特定の遺構を指しているわけではない。

3221 竪穴遺構 (図108・111、図版18・19・76)

15～17区の中央部に位置しており、遺構が集中する部分の東端部にあたる。この遺構より東側では、竪穴遺構やピットは検出されていない。北西部には、直接の関係はないと考えられるが、3299溝が接するほど近い距離で掘削されている。さらに西側には、約0.6mの距離をおいて、主軸方向が同じ3222竪穴遺構が位置している。ほかの遺構との重複関係はない。平面形は長方形を呈しており、長辺が5m、短辺は4m程度である。上面はかなり削平をうけていることから、検出面からの深さは5cm程度で、埋土は2層に細分される。1層は、オリーブ褐色砂質シルトからなり、2層は、暗褐色砂質シルトからなる。遺構の中央部に分布しており、炭化物を多く含む。2層の下に局部的に分布している土層がみられ、暗灰黄色細～粗粒砂からなる。柱穴や周壁溝は検出されなかった。

遺物は、畿内第V様式系及び庄内式に属するものを含む土師器や、砥石の可能性のある砂岩礫などが出土している。473は、摩耗が激しく外面の調整は不明瞭であるが、内面をケズリにより調整した生駒山西麓産の胎土を持つ庄内式甕である。体部内面のケズリ調整が口頸部境まで及ばず、口縁部がわずかに内弯するなど、布留式甕の影響が認められることから、庄内式期V期(布留式I期)に相当するものと考えられる。

3222 竪穴遺構 (図108、図版18・19)

15～17区の中央部に位置しており、遺構が集中する部分の東端部にあたる。東側には、約0.6mの距離をおいて、主軸方向が同じ3221 竪穴遺構が位置している。近接しているため、同時に存在したものであろうかははっきりしないが、なんらかの関連性はあるものと考えられる。南側で3329溝と重複関係があり、これを切っている。このため、3195 竪穴遺構を中心とした遺構群よりは、新しいものといえる。

平面形は、一辺4.5m程度のほぼ正方形を呈しており、上面はかなり削平をうけていることから、検出面からの深さは3cm程度である。埋土は、底部付近しか残っていないが、褐灰色極細粒砂質シルトからなり、土師器片や炭化物を含む。本遺構の四隅のうち三ヶ所で、3232～3234ピットを検出した。これらのピットは、円形で径0.4m程度とほぼ同規模であるが、深さは10～30cmと一定していない。明確な柱痕跡は確認できなかったこと、また四隅のうち一ヶ所では検出されなかったことなどから、柱穴とは考えにくい。周壁溝は検出されなかった。

3337 竪穴遺構 (図108)

15～17区の中央部に位置しており、ピットが集中する部分の南側にあたる。3192溝と3193溝の間に位置している。これらの溝と重複関係はなく、特に3193溝が3337 竪穴遺構を回り込むかたちで掘削されていたことから、3195 竪穴遺構で見られるような、周りを巡る溝として掘削された可能性が考えられる。ほかの遺構との重複関係はない。

平面形は、一辺3m程度のやや不整形な正方形を呈する。上面はかなり削平をうけているが、検出面からの深さは15cm程度である。埋土は2層に細分される。1層は、暗赤褐色極細粒砂混じりシルトからなり、炭化物を含む。2層は、極赤褐色極細粒砂混じりシルトからなる。柱穴や周壁溝は検出されなかった。本遺構からは土師器片が出土した。

3. 土坑・落ち込み

15～17区の中央部やや西寄りのまとまって検出された遺構群の中で、土坑や井戸が点在して検出された。そのうち、3338・3324・3194土坑は、第7a層内で形成されたとみられるものである。埋土は、やや暗色化しており、炭化物ラミナが観察される。また、部分的ではあるが、8区中央部でも落ち込みと土坑が検出されている。

3338 土坑 (図108・113)

15～17区のほぼ中央部に位置しており、まとまって検出された遺構群のうち、もっとも東にあたる。平面形は円形を呈しており、径1.2m、深さは0.45m程度である。埋土は、5層に細分される。1層は褐灰色砂質シルト、2層は黒褐色砂質シルト、3層は黒色砂混じりシルト、4層は灰黄褐色シルト、5層は黒色シルトからなる。1・2層を中心に土師器片が出土している。

3324 土坑 (図108・113・114、図版77)

15～17区の中央部やや西寄りに位置しており、まとまって検出された遺構群のうち、西端部にあたる。平面形は、南北方向に長い楕円形を呈するとみられ、東側を3192溝に切られている。規模は、長径2m以上、深さ0.1m程度である。埋土は2層に細分される。1層は灰黄褐色極細～細粒砂混じりシルト、2層は暗褐色砂混じりシルトからなり、ともに炭化物・焼土を含み、多量の遺物が出土した。

486は、口縁部が外に直線的に開く広口口縁壺の口縁部である。483は、頸部が直立した後、直線的

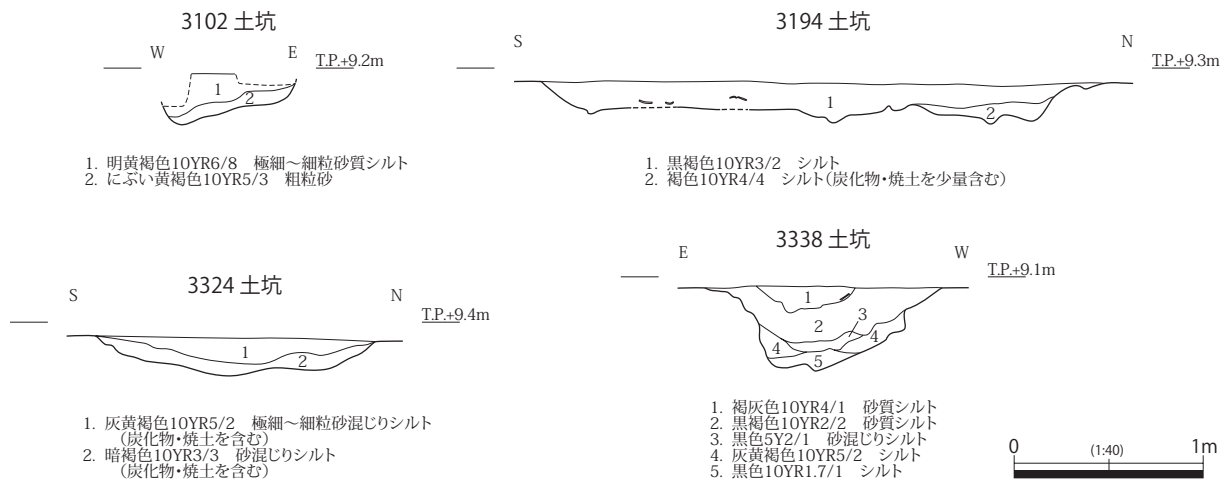


図113 3338・3324・3194・3102土坑 断面図

に外に広がり、口縁端部が短く上方に直立する。器面の摩耗や剥離が激しく、調整は不明瞭であるが、体部外面をハケにより調整する。頸部と胴部の境には継目痕跡が明瞭に観察され、胎土に結晶片岩を含む。器形的特徴から、布留式Ⅰ期に相当する、和泉地域の複合口縁壺と考えられる。484は、小型丸底土器である。口縁部が短く、器形的特徴から布留式Ⅰ期前後に相当する。485は、体部がやや扁平で、口縁部が器高の約1/2を占め、体部よりも外に広がる小型丸底土器である。摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、器形的特徴および底部をケズリにより調整していることから、布留式Ⅰ期に相当すると考えられる。480は、小型器台である。脚部の大部分を欠損するが、皿部の深度が浅く、口縁端部を上方に摘み上げることから、布留式Ⅰ期に相当する。481は、製塩土器の脚部である。脚部の裾が広がっていることから、脚台Ⅱ式またはⅢ式と考えられる。布留式並行のものであろう。482は、土錘である。河川での漁に使用するには器形が大きいことから、製塩土器などと共に搬入された可能性も考えられる。

3194土坑 (図108・113・114、図版19・76・77)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、まとめて検出された遺構群のほぼ中央部にある。最大長が3m程度の不定形の土坑である。北側には、雨水が流れ込んだ痕跡とみられる細い2条の溝が取り付いており、自然の落ち込みである可能性もある。埋土は2層に細分され、1層は黒褐色シルト、2層は褐色シルトからなり、炭化物・焼土を少量含む。

1層から土師器などの遺物がまとめて出土した。遺物には、土師器直口壺・甕・高杯・小型器台などがある。

478は、口縁部が直線的に外に開く、庄内式期の直口壺または広口口縁壺の口縁部である。474・477は、口頸部を「く」の字に屈曲させ、端部を上方に摘み上げた庄内式甕である。体部内面をケズリ、外面を細かいタタキ後ハケにより調整する。477は、体部上半以下を欠損し、摩耗が激しい為調整が不明瞭であるが、口縁部がやや肥厚し、端部の摘み上げが弱いなど布留式甕の影響が認められることから、庄内式Ⅳ期に相当する。474は、体部がやや下膨れであることから、庄内式Ⅲ～Ⅳ期に相当する。なお、474・477・478は、生駒山西麓産の胎土である。

479は、口縁部の締まりが弱く、体部が球胴形の在地の小型の甕である。体部内面をナデ、外面をハケ、底部外面をタタキにより調整する。475・476は、脚部に円形の3方向透かしを持つ小型器台である。475は、杯部が欠損している為、詳細な時期については不明であるが、476は、杯部(皿部)の深度が深く、脚裾部が緩やかに大きく広がることから、庄内式Ⅳ～Ⅴ期に相当する。

3203落ち込み (図108・114)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、まとまって検出された遺構群のほぼ中央部にある。掘立柱建物32の南側に位置しており、南東部を溝3329に切られている。平面形は、不定形な楕円形を呈しており、長軸約6m、短軸約1.5m、検出面からの深さ10cm以下を測る。人為的な掘削によるものかどうかははっきりしないが、遺物がまとまって検出されており、なんらかの廃棄に伴うものの可能性がある。

487は、口縁部が直線的に外に開く直口壺の口縁部である。器形的特徴から庄内式末期～布留式前半

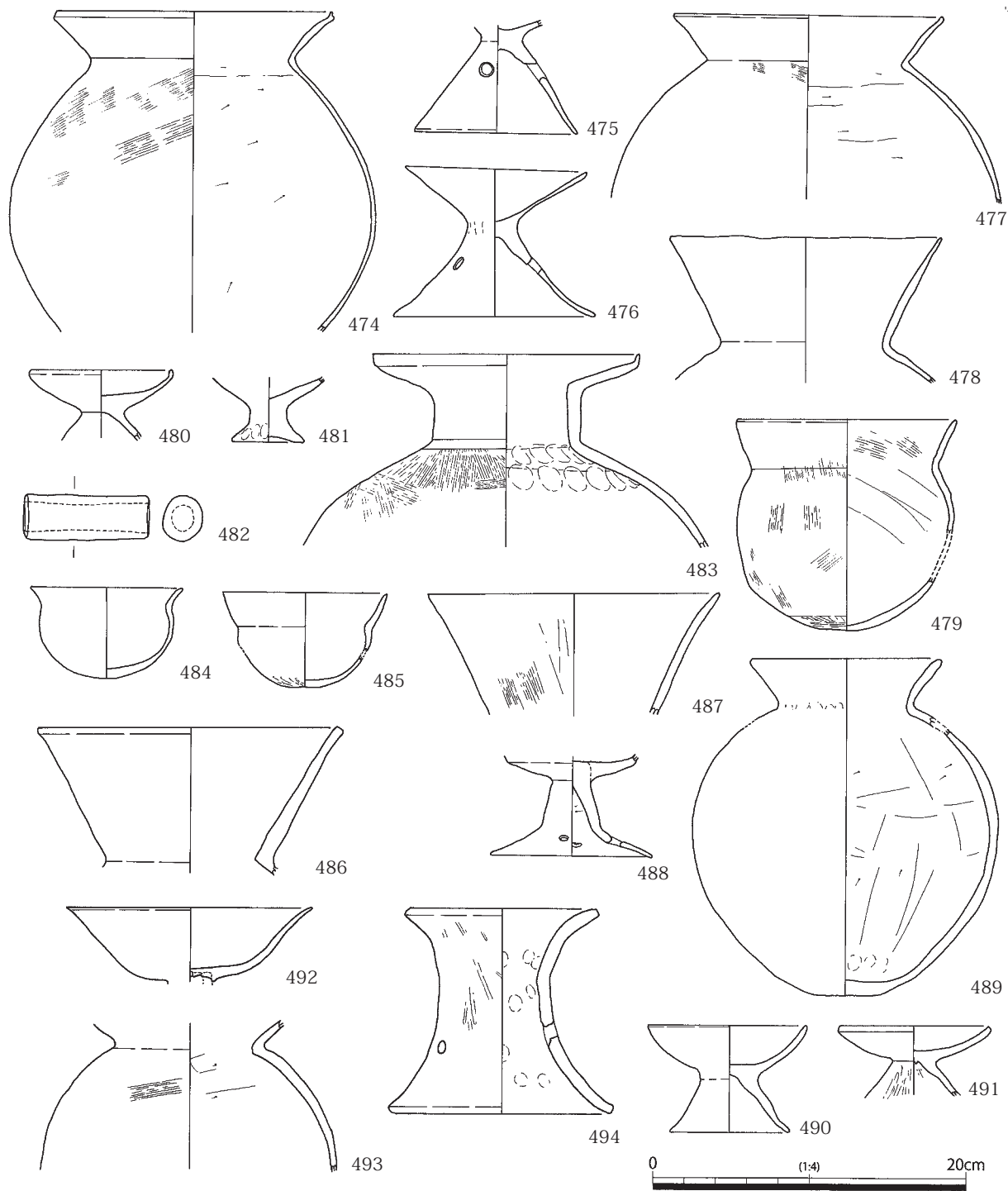


図114 3194・3203・3324土坑、3616・3253落ち込み 出土遺物

期に相当する。489は、口縁が内弯せず直線的に外に開き、底部がやや平底を呈する。体部外面をナデ、内面をケズリにより調整することから、布留式期の在地の甕と考えられる。488は、脚部が短く、大きく開く裾部に四方向の円形の透かし孔を有する高杯である。脚部の形状および、杯部の大部分が欠損しているが、杯底部の形状から、庄内式Ⅳ～Ⅴ期に相当する有段高杯と考えられる。

3100落ち込み (図108)

8区中央部やや西寄りで検出した。3100落ち込みの下面で、3102土坑や複数のピットを検出した。径5.0m、深さ5cm程度の不定形な浅い落ち込みである。

遺物は、畿内第Ⅴ様式系の土器が出土している。

3102土坑 (図108・113)

3100落ち込みの下面で検出された、径約0.7m、深さ約0.3mの円形の土坑である。埋土は2層に細分され、1層が明黄褐色極細～細粒砂質シルト、2層はにぶい黄褐色粗粒砂からなる。

1層からは、畿内第Ⅴ様式系の甕をはじめとする土師器が出土した。

3616落ち込み (図108・114、図版78)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、3328溝の南側で検出されたものである。調査区南端部の確認トレンチの南東端部で北側肩部を確認した。南東方向に落ちるもので、一部を検出したのみであるため、人為的に掘削されたものかどうかははっきりしない。15～17区内ではこの続きは確認されておらず、流路内に埋没しているものと考えられる。

遺物がまとまって出土した。490・491は、小型器台である。ともに脚部が低い、491は皿部が浅く、口縁端部を上方に摘み上げる布留式期の特徴を持つものに対し、490は皿部の深度がやや深く椀型を呈する庄内式期の特徴を有する。

3253落ち込み (図108・114、図版78)

15～17区のほぼ中央南端部に位置する。3195竪穴遺構の東側にあり、竪穴遺構を巡る3329溝を切っている。上部を削平されており、さらに中央部を上面の遺構である3189溝に切られているため、性格ははっきりしない。不定形で、検出面での規模は9×2.5mで、深さは約10cmである。

遺物は、比較的多く出土した。493は、体部内面をケズリ、外面をハケにより調整した布留式甕である。体部の器壁がやや厚く、口縁部の肥厚が弱く、内弯しないことから、布留式Ⅳ期前後に相当する。492は、無稜外反高杯の杯部である。径高指数が低く、脚部と杯部の接合部に棒状工具による突き刺し痕が認められることから、布留式Ⅲ期前後に相当する。494は、器壁が厚く、鼓状の器形を持つ畿内第Ⅴ様式系の器台である。四方向に円形の透かし孔をもち、体部外面をミガキ、内面を指押さえおよびナデにより調整する。

4. 溝

溝は、7区西半部および15～17区中央部西寄りですべて検出された。このほとんどは、調査区を南北方向に流れる溝であり、同一の溝として考えられる。これとは別に、7区南半部で東西方向に流れる溝が検出されており、南北方向の溝を切っている。9区では、東半部で南北方向に延びる溝が検出されている。

3265溝 (図108・115、図版13)

7区南半部で東西方向に伸びており、3273～3275溝を切り、3340落ち込みにより切られる。ただし、

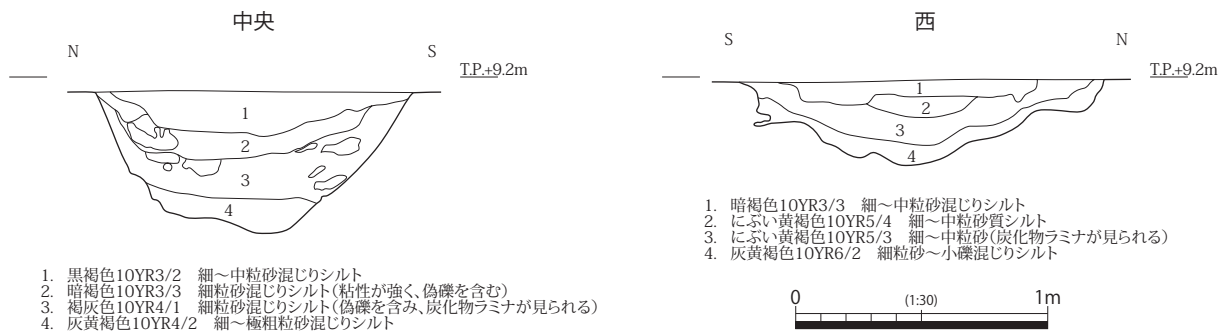


図115 3265溝 断面図

3340落ち込みとの重複部分は明確でないため、一連の溝の可能性も考えられる。規模は、幅1.5～2m、深さ0.35～0.5mで西に行くにしたがって深さを減じる。埋土は4層に細分され、中央部での1層は黒褐色細～中粒砂混じりシルトである。水成層である2・3層は、偽礫を含み炭化物ラミナが観察できることから、機能時における堆積であると考えられる。2層は暗褐色、3層は褐灰色細粒砂混じりシルトからなる。4層は、灰黄褐色細～極粗粒砂混じりシルトである。

遺物は、土師器片が出土している。

15～17区中央部西寄りでまとまって検出された、3190・3192・3193溝は、第7a層内で形成されたとみられる溝である。

3190溝 (図108・116、図版18)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、まとまって検出された南北方向の溝群のうち、もっとも西の溝である。規模は、幅0.6～1.0m、深さ0.5m程度あり、南南西から北北東方向に延びる。U字形の断面をもつ、しっかりとした溝である。

埋土は5層に細分される。1層はにぶい黄褐色細粒砂、2層は灰黄褐色シルト～極細粒砂、3層は褐灰色極細粒砂混じりシルト、4層は灰黄褐色極細～細粒砂からなる。2層には壁面から崩落したとみられる粘土偽礫を、3層には炭化物を含むが、これらはいずれも水成層と考えられる。5層は黒褐色シルト～極細粒砂からなり、粘土偽礫を含む。加工時の堆積層である可能性がある。

遺物は、土師器が出土した。尚、本遺構の直上に分布する第4層は、第3段階の耕作の影響を強く受けており、当遺構の本来の掘り込み面はより上位である可能性もある。

3192溝 (図108・116・118、図版18・19・78)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、まとまって検出された南北方向の溝群のうち、西から2番目の溝である。3190溝とは方向が異なっており、南南東から北北西へ延びている。規模は、幅1.0m程度、深さ10～25cmである。埋土は4層に細分され、1層は、灰黄褐色極細粒砂混じりシルトからなる。2層は、黒褐色極細～中粒砂混じりシルトからなり、少量の土器を含む。3層は、灰黄褐色砂からなり、淘汰が悪い。4層は、褐色シルト混じり粘土からなる。

3層を中心に多数の土師器が出土した。

497は、頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する在地の複合口縁壺の口縁部である。角閃石を含む生駒山西麓産系の胎土と角閃石を含まない胎土を交互に用いた特殊なもので、亀井遺跡や船橋遺跡で同様の類例がみられる。498は、口縁部が外に直線的に開く広口口縁壺の口縁部である。500は、壺の底部である。499は、その大部分が欠損しているが、遺存している形状から、球胴状の体部に円錐状

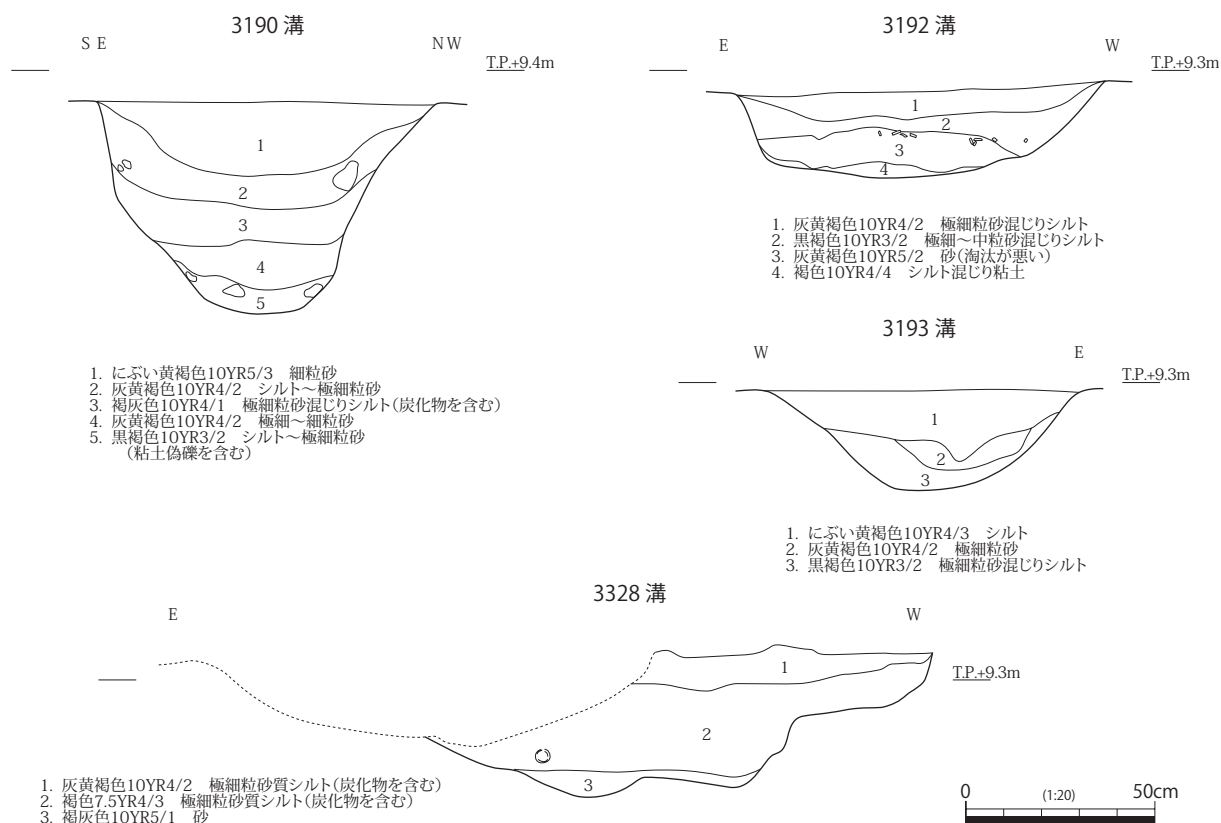


図116 3190・3192・3193・3328溝 断面図

の脚部を持つ台付き壺と考えられる。501は、口縁部と体部の境に凹線を有する大型の鉢である。495は、平底気味の底部からやや内弯気味に外に立ち上がる体部を持つ鉢、または杯である。摩耗および剥離が激しい為、調整は不明であるが、形状から布留式I期に相当すると考えられる。496は腕状のやや浅い皿部に、円形の3方向透かし孔を配する円錐状の脚部をもつ小型器台である。脚部外面をミガキ、内面をハケおよびケズリにより調整する。

3193溝 (図108・116・118、図版18・19)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、まとめて検出された南北方向の溝群のうち、もっとも東の溝である。南側では3190溝とほぼ同じ方向であるが、3337竪穴遺構を巻き込むかたちで、ほぼ直角に曲がった後、3192溝と同じ方向となり、南南東から北北西へ延びている。規模は、幅1.0m程度、深さ20～25cmである。埋土は3層に細分され、1層はにぶい黄褐色シルト、2層は灰黄褐色極細粒砂、3層は黒褐色極細粒砂混じりシルトからなる。

遺物は、土師器壺・甕高杯などの細片や砂岩礫などが出土した。502は、口頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が内側に肥厚する。体部の調整は摩耗が激しく不明であるが、口縁部の形状および体部の器壁が薄いことから、庄内式IV期頃の布留祖形甕と考えられる。

3192・3193溝は、いずれも南南東から北北西方向に延びながら南端では蛇行していること、北北西に向かって次第に底が深くなり、水準も低下していること、上部の埋土が滞水状態で堆積したとみられるシルト層であることなど共通点が多い。

3336溝 (図108・118、図版79)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、まとめて検出された南北方向の溝群のうち、3193溝の南に接するかたちで検出された。調査区南端部で長さ約2mが確認されたのみで、調査区外の南へ延

びているため、詳細ははっきりしない。他の遺構との関連も不明である。

遺物は比較的まとまって出土した。503は、小型丸底土器である。口縁部が器高の1/3以下で「く」の字に屈曲し、わずかに内弯する。器形的特徴から、布留式I期前後に相当する。

3328溝 (図108・116・118、図版78)

15～17区中央部やや西寄りに位置しており、3192溝が南端でやや蛇行している部分で検出された溝状の遺構である。規模は、幅1.3m以上、深さ0.4m程度である。埋土は3層に細分され、1層は灰黄褐色極細粒砂質シルトからなり、炭化物を含む。2層は褐色極細粒砂質シルトからなり、土器や炭化物を含む。3層は褐灰色砂からなる。位置や切り合い関係から、3192溝は、もともとこの位置にあった3328溝が掘り直されたものである可能性もある。

遺物は、庄内式や畿内第V様式系の甕、複合口縁壺などが出土している。

504は、口頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が内側に肥厚する。体部は摩耗が激しく、調整は不明であるが、口縁部の形状から布留式I期頃の布留式甕または布留式系の甕と考えられる。505は、口縁部が「く」の字に屈曲し、直線的に外に広がる小型丸底土器である。口縁が器高の1/3以上を占め、口径が体部最大径よりも大きく、内外面を精緻な横方向のミガキにより調整する。器形的特徴から、庄内式IV期(布留式0期)頃に相当する。

3299溝 (図108)

15～17区のほぼ中央部に位置しており、まとまって検出された遺構群のうち、東端部の溝である。ほぼ南北方向にまっすぐに延びる溝で、北側は調査区外に及ぶ。規模は、幅0.7m、深さ0.1m程度であり、埋土は黒褐色砂質シルトからなる。本遺構からは土師器片が出土している。

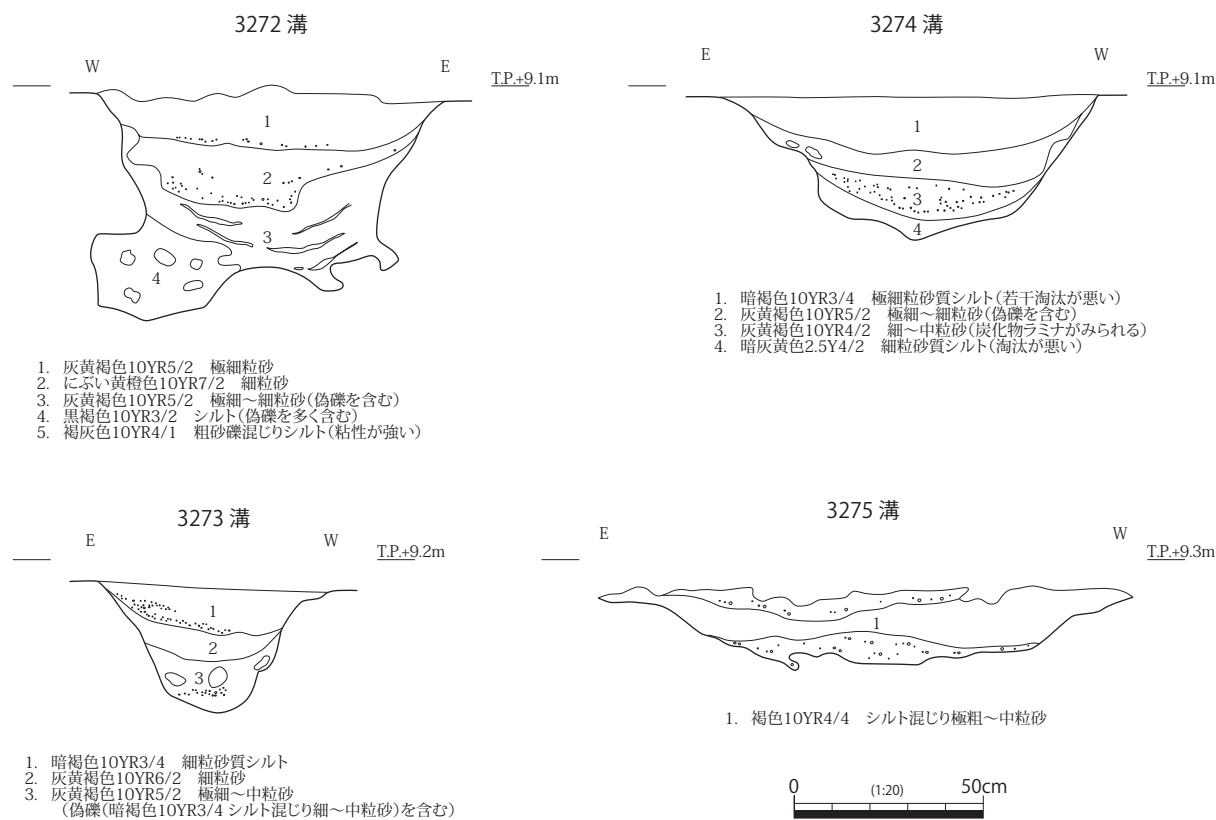


図117 3272～3275溝 断面図

北側の7区西半部では、15～17区で検出した溝の続きと考えられる、南北方向に伸びる3272～3275溝を検出した。

3272溝 (図108・117、図版13)

7区北西端部で検出されており、西端中央付近で3125流路に切られている。南南西から北北東方向に延びる。南側の15～17区から延びている溝と考えられるが、砂層に埋没しているため、確認はできなかった。規模は、幅約0.9m、深さ約0.6mである。埋土は4層に細分され、1層は灰黄褐色極細粒砂、2層はにぶい黄橙色細粒砂、3層は灰黄褐色細～極粗粒砂からなる。水成の1～3層のうち、偽礫を含む3層は機能時の堆積層であると考えられる。4層は黒褐色シルトで、偽礫を多く含むことから、加工時の堆積層であるとも考えることもできる。

3273溝 (図108・117、図版13)

7区北西端部で検出された溝群のひとつで、3272溝から約2.6m離れた東側でほぼ平行に延び、調査区を縦断している。南南西から北北東方向に延びる。7区の南側で3265溝に切られている。規模は、幅0.5～0.9m、深さ約0.3mである。埋土は3層に細分され、1層は暗褐色細粒砂質シルト、2層は灰黄褐色

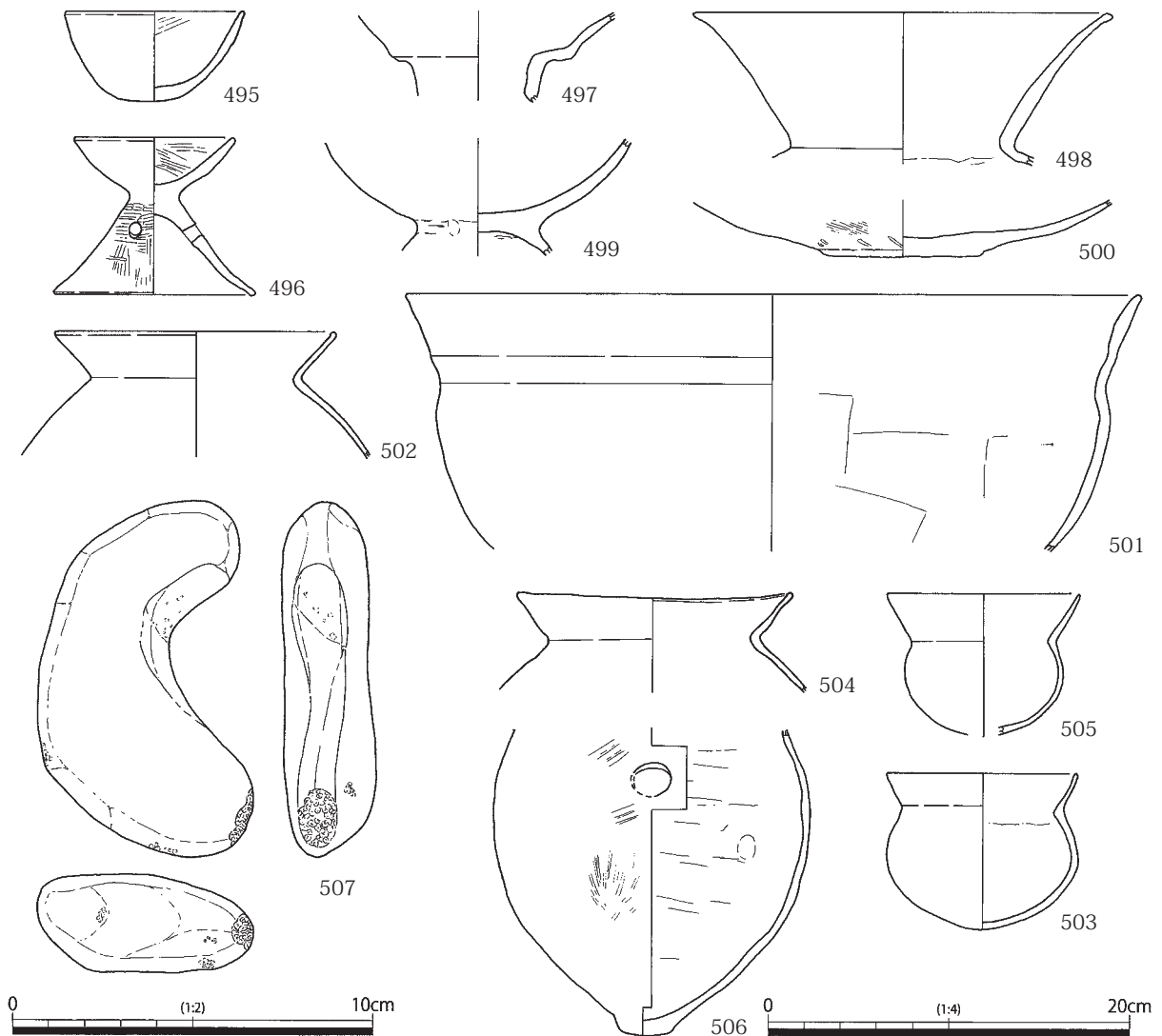


図118 3192・3193・3273・3274・3328・3336溝 出土遺物

細粒砂、3層は灰黄褐色中～極細粒砂からなる。上位2層は水成層で、1層は淘汰が悪く、下部は砂質が強い。3層は、淘汰が悪く、偽礫を含むことから加工時の埋土である可能性が高い。なお、埋土の構成および遺構の形状から、やや蛇行するが、15～17区第4面で検出した3192溝の続きと考えられる。

506は、尖底気味の径の小さな平底を持ち、摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、体部外面をタタキ、内面ケズリにより調整した畿内第V様式系の有孔甕である。頸部のやや下方にある円形の透かし孔は焼成後穿孔によるものである。

3274溝 (図108・117・118、図版13・71)

7区北西端部で検出された溝群のひとつで、北側で3273溝と接しているが、方向が異なっており、南に行くにしたがって離れていく。調査区を縦断し、南南東から北北西方向に延びる。7区の南側で3265溝に切られている。規模は、幅0.6～1.0m、深さ約0.4mである。埋土は全て水成層からなり、4層に細分される。1層は暗褐色極細粒砂質シルト、2層は灰黄褐色細～極細粒砂で、偽礫を含む。3層は灰黄褐色中～極細粒砂で炭化物ラミナが見られ、4層は暗褐色細粒砂質シルトからなる。なお、埋土の構成および遺構の形状から、やや蛇行気味であるが、15～17区第4面で検出した3190溝の続きと考えられる。

507は、L字状に弯曲する砂岩製の石杵である。

3275溝 (図108・117、図版13)

7区北西端部で検出された溝群のひとつで、もっとも東側に位置する。3274溝から約2.0m離れた東側でほぼ平行に延び、調査区を縦断している。南南東から北北西方向に延びる。7区の南側で3265溝に切られている。規模は、幅約0.7m、深さ0.1～0.2mで、南から北に行くに従って浅くなる。埋土は、褐色シルト混じり粗～中粒砂からなり、土器を多く含む。埋土の構成および遺構の形状から、やや蛇行気味であるが、15～17区第4面で検出した3193溝に続くと考えられる。

5. 溝群 (連続溝)

15～17区南東端部と7区南東部で、短い溝が連続して並ぶ溝群 (連続溝) を検出した。これは、各地でみつまっている、「連続土坑」や「波板状遺構」、「波板状凹凸遺構」などと呼ばれているものと同じ種類の遺構と考えられる。

溝群1 (図108・119、図版20)

15～17区南東端部の第7b層下面で、短い溝が連続して並ぶ溝群を検出した。溝群の中には、長さ1m以内の短い3531～3546溝などのまとまりと、長く延びる3547～3550溝などのまとまりの2種類がある。前者は、約0.8m間隔で南北方向に延びている。幅0.2m、深さ5cm前後のものが多いが、長さはまちまちで、短いものは円形のピット状を呈する。多くは、埋土が灰黄褐色極細粒砂混りシルトからなるが、3531～3536溝など東方の一群では砂質が強くなる。

遺物は、3538溝から土師器片が出土している。

溝群2 (図108・120、図版13)

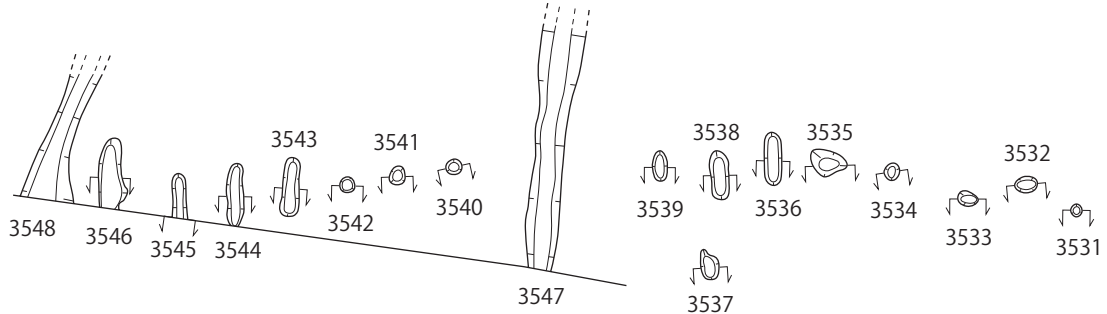
7区南東部の第7bi層上面で検出された、3340落ち込み下面で、みつかったものである。幅約0.5m、深さ約0.3mの短い溝が並列するもので、南西から北東方向に延びる。これらの溝は、西から東に行くに従って長軸幅は短くなっており、短いものは円形のピット状を呈する。溝群1とは異なり、長く延びる溝は含まれていない。なお、上層で検出された溝状に延びる3340落ち込みの下面で3342溝が検出さ



Y=-41,490

Y=-41,480

X=-156,046



X=-156,052

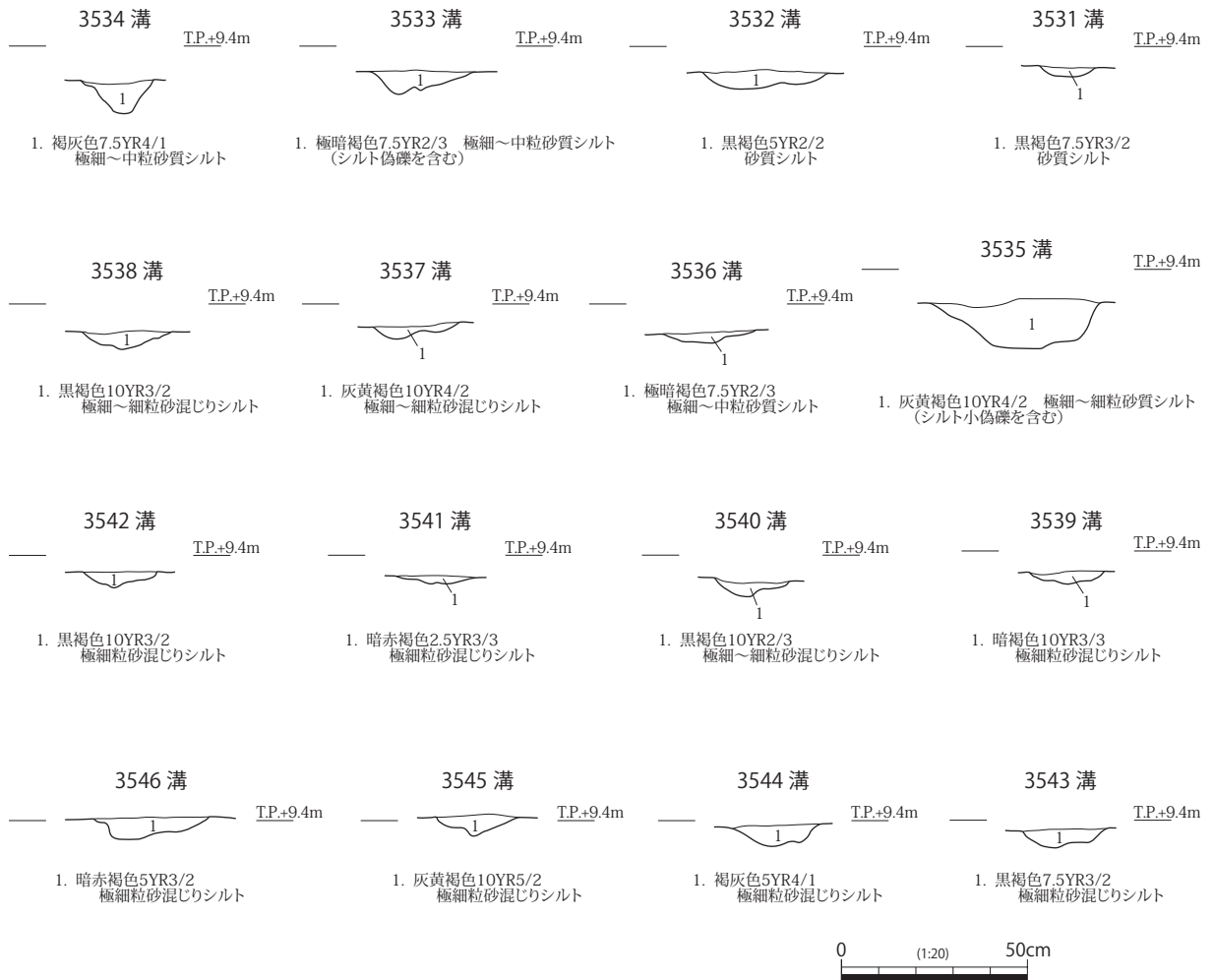
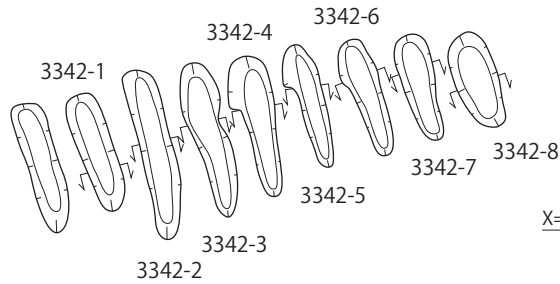


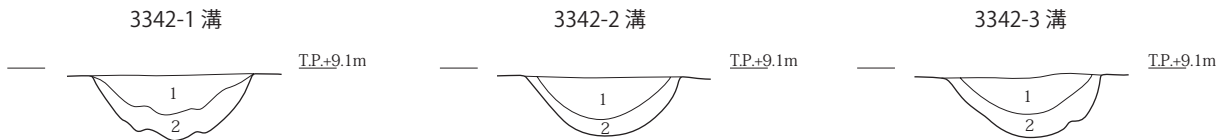
図119 溝群 (波板状遺構) 1 平・断面図



Y=-41,570



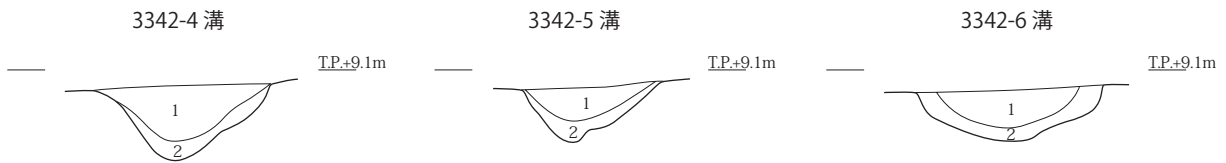
X=-155,990



- 3342-1 溝
1. 暗褐色10YR3/4 細～中粒砂質シルト (砂質が強い)
 2. 灰黄褐色10YR4/2 細～中粒砂質シルト (若干シルトが強く、偽礫を含む)

- 3342-2 溝
1. 暗褐色10YR3/4 細～中粒砂質シルト (若干砂質が強い)
 2. 灰黄褐色10YR4/2 細～中粒砂質シルト (若干シルトが強く、偽礫を含む)

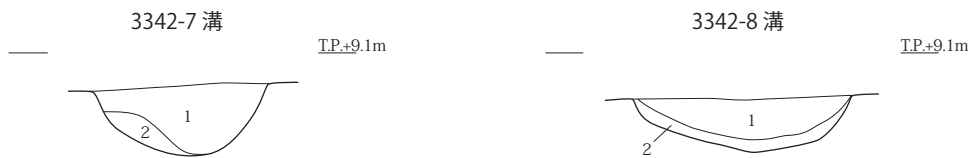
- 3342-3 溝
1. 暗褐色10YR3/4 細～中粒砂質シルト
 2. 灰黄褐色10YR4/2 細～中粒砂質シルト (若干シルトが強く、偽礫を含む)



- 3342-4 溝
1. 灰黄褐色10YR5/2 細～中粒砂質シルト
 2. 灰黄褐色10YR4/2 細～中粒砂混じりシルト (偽礫を含む)

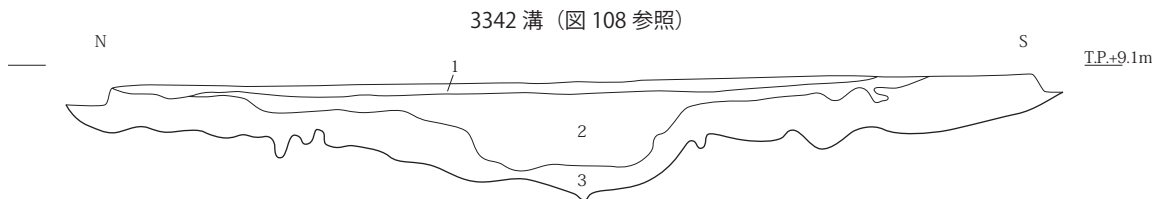
- 3342-5 溝
1. にぶい黄褐色10YR5/3 細～中粒砂質シルト
 2. 褐色10YR4/4 シルト

- 3342-6 溝
1. 黒褐色10YR3/2 細～中粒砂混じりシルト (若干砂質が強い)
 2. 黒褐色10YR3/2 細～中粒砂混じりシルト (偽礫を含む)



- 3342-7 溝
1. 暗褐色7.5YR3/4 細～中粒砂質シルト
 2. 褐灰色10YR4/1 細～中粒砂混じりシルト

- 3342-8 溝
1. 褐灰色10YR4/1 細～中粒砂質シルト
 2. 褐色10YR4/6 細～中粒砂混じりシルト



1. にぶい黄褐色10YR7/2 極細粒砂(3340落ち込みの埋土)
2. 灰黄褐色10YR6/2 極細～中粒砂質シルト
3. 灰黄褐色10YR5/1 細～中粒砂混じりシルト(偽礫を含む)



図120 溝群(波板状遺構) 2 平・断面図

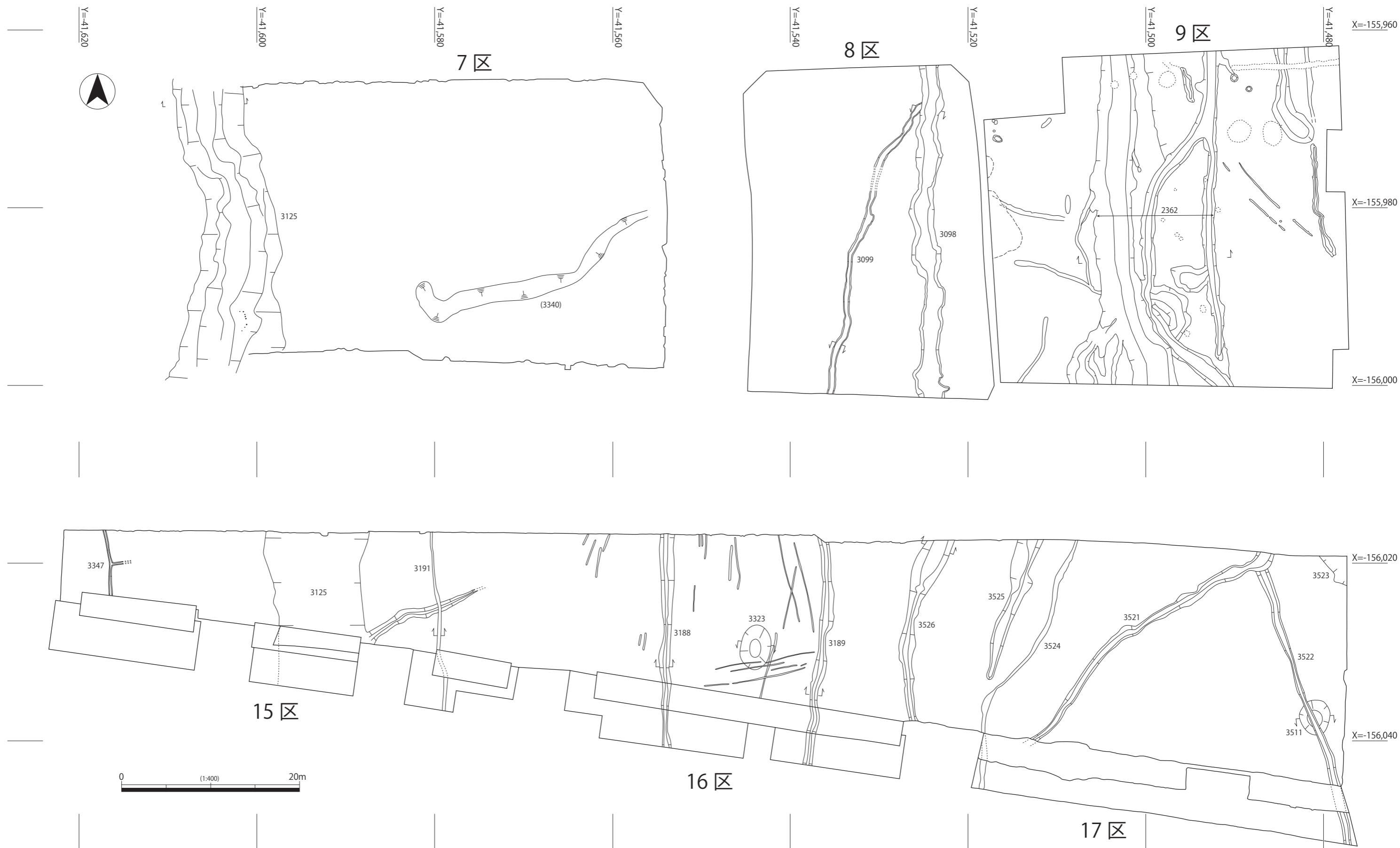


图121 7~9区・15~17区 第2面遺構平面图

れており、ほぼその中におさまっている。短い溝の埋土は2層に細分され、1層は砂質の強いシルト層で機能時の自然堆積層、2層は偽礫や土器を含む砂混じりシルトからなる。3342溝の埋土も土質が類似しており、一連のものと考えることができる。

これらの遺構の性格については、水利や区画の機能をもつとは考えにくく、畝の畝間溝である可能性もある。このため、調査時には、「畝状遺構」というあいまいな表現をとっていた。ただ、畝の畝間溝とするには、各溝の長さが短く、一定していないことや方向が定まらないことなど、疑問点も多い。一方、遺構の形成された時期については、確定できる遺物を伴わないため詳細は不明であるが、層序関係から、庄内式期を中心とする時代のものである可能性が高い。三宅西遺跡の調査では、11区でもこのような短い溝や小規模な土坑が並列する同様の遺構が複数検出されている。

類例としては、羽曳野市郡戸遺跡でもみられる。ここでは、径15～30cmの円形や楕円形のピットが、約50cm前後の間隔で並んだピット列群としてとらえている。個々のピットの中には、瓢箪のように2基のピットが並んだ形状を示すものもあり、柵列などのピット列群とは異なった様相を呈している。あまり長く残存しておらず、方向も一定ではなく、まっすぐではない。性格に関しては、牛馬の歩行痕説、排水施設説、枕木・コロ説、路床基礎工事説などの諸説があるようであるが、いずれも決め手がなく、郡戸遺跡でも性格は不明としている。最近の調査では、これらの遺構を道路の路面舗装のための路床としてつくられたものとの考え方が一般的となっているようで、呼び方は一定していないものの、道路に関する遺構との認識で一致しているようである。

時期が異なるため、同一視できないかもしれないが、埼玉県所沢市東の上遺跡では、両側に側溝を伴う、幅12mの道路が検出され、その中心部分で3～5mの硬化面が確認されている。この部分に凹凸がみられ、短い溝が並列して並ぶ状況が確認できる。ただ、ここでは路床の根拠として、硬化面が確認されている点があげられるが、三宅西遺跡の例では認められないことから、具体的な構造物を特定することはできない。諸説あるため、議論が必要であると思うが、ここでは、道路に関する路面下の基礎部分と考えるに留めておく。

g. 第7層上面（第2面）

1. 耕作溝・畦畔

15～17区の中央部の第2c層下面で、耕作に伴う鋤溝を検出した。鋤溝は南北方向に延びており、幅10～20cmのものが多い。また、北北西から南南東方向とそれにほぼ直交する、幅の狭い溝を複数検出した。約2m間隔でほぼ平行に走っていることから、それらは轍の可能性はある。

8区においても、一部で幅10cm程度の細い溝を検出しており、耕作溝あるいは轍の可能性はある。

9区では、東部で轍が検出されており、約1.5m間隔の細い溝が平行してほぼ北西－南東方向に続いている。

15～17区の西端部の第4b層上面で、東西方向に延びる隆起を検出した。極めて部分的な検出であるため、はっきりしない部分もあるが、ここでは耕作に伴う畦畔として扱うこととする。なお、水田跡は2区でも確認されており、古代以降のものとして推定されている。関連性は薄いものの、ほぼ同時期に存在していた可能性は高いと考えられる。

3347畦畔（図121）

15～17区の西端部で検出されたもので、南北方向とそれに直交するT字状の隆起を確認した。上端



図122 3323土坑 断面図

が20cm、下端が30～40cm、高さ5cm程度あり、耕作に伴う畦畔と考えられる。中央部で、東方向に延びる隆起が取り付いているが、東方では次第に高さを減じ確認できなくなる。人為的な加工の痕跡などははっきりしない。ただ、第4b層は層厚が4cm程度と耕作土層としては薄く、下

面でも耕作痕が確認されなかったことから、これらの隆起が自然地形の可能性もある。

2. 土坑・井戸

15～17区のほぼ中央で土坑が1基、東部で井戸が2基検出された。周囲では、他にピットや土坑は確認できなかったため、集落に伴うものではなく、耕作用と考えられる。

3323土坑 (図121・122・126、図版79)

15～17区のほぼ中央部に位置する。周囲には土坑や井戸はみられない。南北方向に延びる3188溝と3189溝の間にあたる。平面形は、南北方向に長い楕円形を呈しており、長径5.0m、深さは0.9m程度ある。すでに埋没している3344流路上で掘り込まれており、流路埋土の砂礫層からの湧水が現在でも激しいことから、井戸の可能性が高い。沈下した遺構上部には、第7a層が垂れ込んでいる。

埋土は大きく6層に細分される。1層は、黒褐色砂混じり粘土からなる。淘汰が悪く、偽礫を含んでおり、人為的な埋め戻し土の可能性が高い。2層は黒色粘土からなり、機能時の滞水状態下で堆積したものとみられる。3層は、黒褐色砂礫混じり粘土からなる。淘汰が悪く、偽礫や土器を含んでおり、人為的な埋め戻し土の可能性が高い。4層は灰オリーブ色極細～細粒砂、5層は灰黄褐色砂礫、6層は黒褐色粘土からなる。壁面から崩落したとみられる極細粒砂偽礫を含み、滞水状態下で堆積したものであろう。

本遺構からは庄内式の鉢、布留式の甕や壺などのほか、須恵器杯が出土している。510は、体部がやや扁平で、口縁部が肥厚し、体部最大径よりも大きく外に開く小型丸底土器である。摩耗と剥落が激しく、内外面ともに調整は不明である。509は、ミニチュア土器である。508は、須恵器の杯身である。立ち上がりは短く、内傾し、底部は回転ヘラケズリが反時計回りで、範囲も狭く、全体的につくりが粗雑である。TK209に相当する。

3511井戸 (図121・123・126、図版79)

15～17区東端部に位置し、第7a層上部で形成されたものと考えられる。3522溝に切られている。平面形は南北方向に長い楕円形を呈しており、長径3.9m、短径3.3m、深さ1.1m程度である。水成の砂層まで掘削が及んでおり、現在でも湧水が激しいことから、井戸と判断した。

埋土の大半は、滞水状態で堆積した粘土が主体であり、底部付近には砂層が堆積している。上部の1～3層は上位層が垂れ込んだもので、1層は褐灰色砂質シルト、2層は褐灰色粘土からなり、基本層序の第4～6層に相当する耕作土層である。3層は小規模な3522流路の埋土であり、にぶい黄褐色砂からなる。

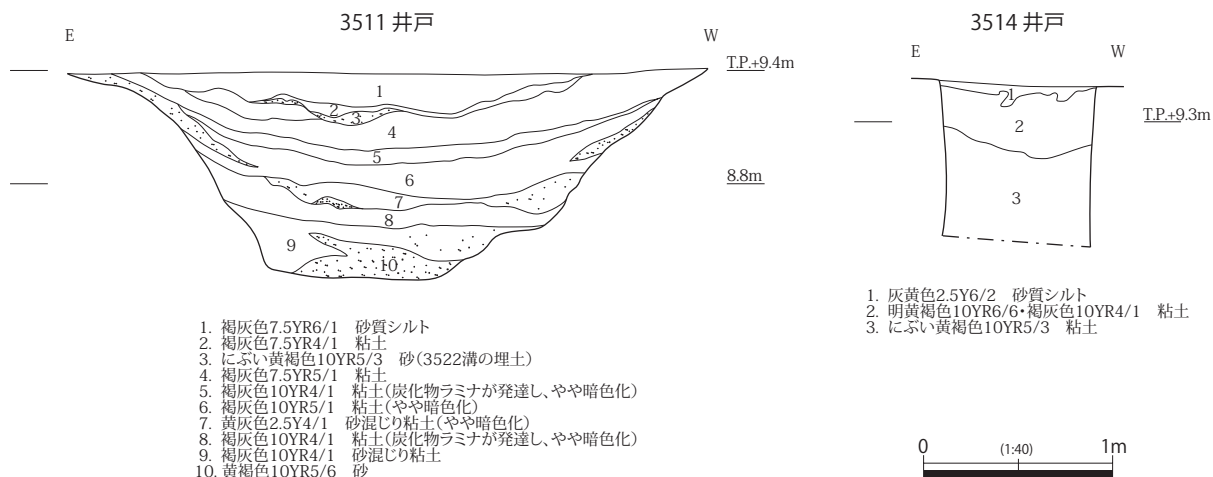


図123 3511・3514井戸 断面図

井戸の埋土は大きく7層に細分される。4～8層は、滞水状態で堆積したとみられる細粒の堆積物を主体とし、壁面から崩落したとみられる砂の薄層が挟在する。4層は褐灰色粘土からなる。5層は褐灰色粘土からなり、炭化物ラミナが発達し、やや暗色化している。6層は褐灰色からなり、やや暗色化している。7層は黄灰色砂混じり粘土からなり、やや暗色化している。8層は褐灰色粘土からなり、炭化物ラミナが発達し、やや暗色化している。9層は褐灰色砂混じり粘土、10層は黄褐色砂からなる。

511は、須恵器杯蓋である。10層から出土したものである。天井部と口縁部を分ける稜が鈍く、天井部は幾分扁平である。天井部の回転ヘラケズリが反時計回りで、口径が14cm前後と大型化していることから、MT15に相当する。

3514井戸 (図121・123)

15～17区東部に位置し、第4b層上面で検出されたものである。平面形は円形を呈しており、径0.8m程度で、深さ0.8m以上ある。埋土は3層に細分され、1層が灰黄色砂質シルトからなり、第2b層が垂れ込んだものとみられる。2層は明黄褐色・褐灰色粘土など、3層はにぶい黄褐色粘土などの中小偽礫を主体とする人為的埋土である。湧水のため、底部までは掘削していない。

3. 溝

8区の第7a層上面では、中世とみられる南北方向に伸びる3098・3099溝を検出した。15～17区の第7a層上面でも、南北方向の3188・3189・3526溝が検出されており、一連の溝と考えられる。9区では、西部で4条、東部で3条の溝を検出した。その方向は西部の溝が概ね北北西-南南東方向とこれに直行した方向で、東部の溝はほぼ南北方向であった。いずれも、耕作に伴う溝と考えられ、延長はあまり長くない。これらの遺構の検出面は第7a層上面であるが、第4b層内から掘り込まれているものと考えられる。

3098溝 (図121・124・126、図版16)

8区の東部に位置し、ほぼ南北方向に伸びており、調査区北部で3099溝を切っている。調査区外へ伸びており、南側の15～17区で検出された3526溝と一連の溝と考えることができる。規模は、幅2～3m、深さ0.6m程度である。

埋土は4層に細分される。1層は灰黄色極細粒砂混じりシルトからなり、第3層よりも下位の耕作土層が沈み込んだものである可能性がある。2層は褐灰色粘土混じりシルト、3層は褐灰色極細～細粒砂

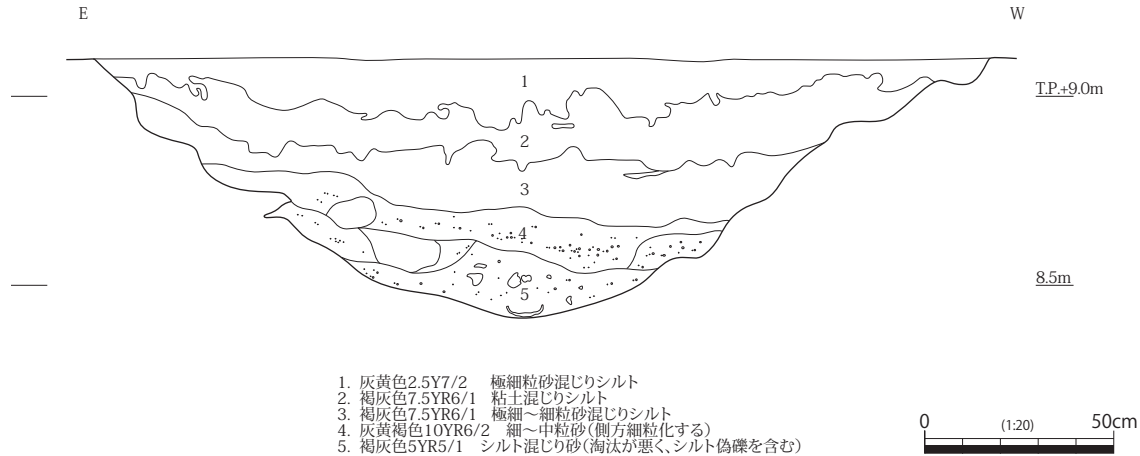


図124 3098溝 断面図

混じりシルトからなり、ともに滞水状態下の堆積物とみられる。4層は灰黄褐色細～中粒砂からなり、側方細粒化する。ラミナ構造は観察されないが、機能時に堆積した水成層と考えられる。5層は淘汰が悪く、シルト偽礫を含んでおり、TK217に属する須恵器杯蓋が出土している。

遺物は、土師器・須恵器が出土している。ただ、3098溝の下面には、先行する別遺構の埋土とみられる、褐灰色シルト混じり砂などが部分的に分布しており、同じ位置で掘り直されている可能性がある。掘削時には判別がつかなかったため、上位の3098溝出土遺物として取り上げている。

3098溝に先行する溝の埋土から出土した512は、須恵器杯蓋である。口縁部と天井部を隔てる稜が弱く、天井部の回転ヘラケズリが粗いことから、TK217前後に相当する。

3099溝 (図121、図版16)

8区の中央部に位置し、南南西から北北東方向に延びており、調査区北部で3098溝に切られている。南側は調査区外へ延びており、15～17区で検出された3189溝と一連の溝と考えることができる。規模は、幅0.8m、深さ10～15cm程度であり、埋土は灰黄色細礫混じり極粗粒砂からなる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器などが出土した。

3526溝 (図121・125、図版21)

15～17区の中央部やや東寄りに位置している。第4a層基底面で検出されたもので、南北方向に延びる溝である。北端部では幅3m、深さ1m前後あるが、南端部では幅0.8m、深さ0.4m前後と規模が小さくなる。8区の3098溝と一連の溝と考えることができる。

埋土はいずれも水成層で、大きく4層に細分される。1層は暗灰黄色砂質シルトからなり、淘汰が悪い。2層は灰黄褐色粘土からなり、肩部から崩落した極細～中粒砂の偽礫を含む。滞水状態で堆積したものである。3層は灰黄褐色砂からなり、側方細粒化している。4層は褐灰色シルト混じり粘土からなる。

土師器・須恵器・サヌカイトなどの遺物が出土した。遺物は、古い時期のものであるが、第4a層基底面で検出されたことから、遺物の時期より新しいものと判断した。

3188溝 (図121・125・126、図版79)

15～17区の中央部で検出された。調査区を南北方向に縦走しており、調査区外に及んでいるが、北の7区では、つながるものと考えられる溝は確認できていない。7区と8区の間を北方向に延びているものと考えられる。規模は、幅1.0～1.5m、深さ0.3～0.4mである。

埋土は大きく3層に細分でき、1層はにぶい黄褐色砂で、下面は凹凸が著しく、掘り直された溝の人

為的な埋土である可能性がある。2層は、灰黄褐色シルト～極細粒砂からなる。機能時の水成層であろう。3層は、にぶい黄色細～中粒砂からなる。シルト偽礫や土器を含むが、水成層とみられる。

3層を中心に土師器や須恵器が多数出土している。514は、体部内面をハケ、外面を連続する右上がりのタタキで調整した畿内第V様式系の小型甕である。緩やかに外反する口縁は、端部を上方に摘み上げたのち丸く納め、体部最大径は中央よりやや下方にくる重心の低い器形である。513は、須恵器壺の底部とみられる。底部内面のつくりは甕と同様である。大部分を欠損しているため、正確な器形および時期は不明である。このほか、庄内式の甕や土師器高杯、須恵器蓋杯、礫などの遺物が出土している。調査段階では、下層の第7a・7c層を掘り抜いていることから、こうした遺物は本来、それらの古墳時代の遺物包含層に含まれていたものである可能性が高い。

3189溝 (図121・125・126、図版79)

15～17区の中央部やや東で検出された。調査区を南北方向に縦走し、調査区外に及んでおり、8区の3099溝に続くものと考えられる。規模は、幅0.2～0.4m、深さ0.2m程度である。

埋土は2層に細分され、1層はにぶい黄橙色中粒砂～細礫、2層はにぶい黄橙色細粒砂で、いずれも水成層である。

1層からは土師器甕・小型器台・高杯などが出土した。515は、口縁が内弯し、口縁端部を摘み出した甕である。摩耗が激しく体部外面の調整は不明であるが、口縁部の形状および体部内面をケズリにより調整していることから、布留式甕の可能性が高い。516は、漏斗形の受身と裾部をもつ中空の小型器

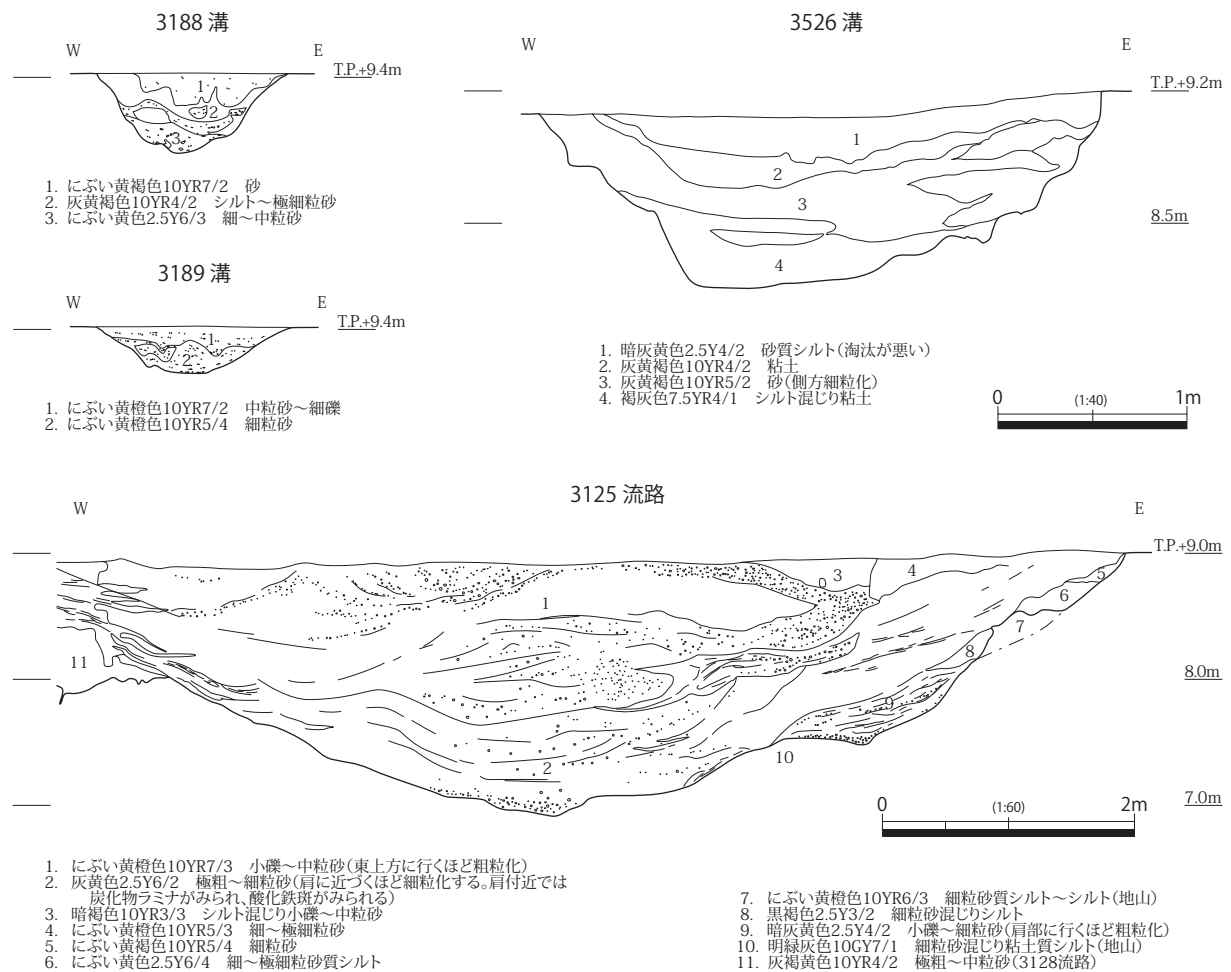


図125 3526・3188・3189溝、3125流路 断面図

台である。器形的特徴から、布留式Ⅱ期前後に相当すると考えられる。

3188溝と同様に、調査段階で下層の7a・7c層を掘り抜いているため、これらは、古墳時代の遺物包含層に含まれていたものである可能性が高い。

3191溝 (図121)

15～17区の西部で検出された。調査区を南北方向に縦走しており、調査区外に及んでいるが、7区ではつながるものと考えられる溝は確認できていない。規模は、幅1.0m、深さ5cm程度あり、底の水準は北が低くなっている。埋土は褐色砂からなり、淘汰が悪い。

遺物は、土師器片が出土している。

15～17区の東部では、3521・3522・3524・3525溝を検出した。いずれも3527流路が埋没する過程の、最終段階の流れとみられる。

3125流路 (図121・127、図版14・21・73・74)

15～17区より続き、7区の西端をほぼ南から北方向へ延びる、幅6～7m、深さ約2.5mの大規模な流路である。最も川幅の広い7区南端部では、東肩が広い平坦部を持つ二段落ちとなっている。この東肩平坦部では、肩に沿って列状に並ぶ杭跡が確認された事から、1区の3009流路同様に、何らかの木組み施設が築かれていた可能性が考えられる。

埋土は、にぶい黄橙色砂礫の上層と灰黄色砂礫の下層を主体としている。上層からは、須恵器の杯身等が、下層および底部からは布留式甕や直口壺、高杯等(布留式の後半(須恵器出現期))が出土している事から、上層と下層では堆積に若干時間差があると考えられる。なお、3125流路の東肩が南壁部分で攪乱を受けている等、正確な切り込み層位は不明であるが、第3面の3265・3272溝を切っている事から、第7a層上面または第7a層上部で形成された流路であると考えられる。

遺物は、多量に出土している。

517は、須恵器杯身である。立ち上がりが器高の1/2以下で、器高に比して口径が大きく、口縁端部が丸い。底部の回転ヘラケズリは1/3以下で、ロクロ回転が反時計回りである。518は、須恵器甕である。頸部が細く、ラッパ状に開き、肩部に凹線を、体部中央にヘラ描きの列点文をめぐらす。517・518は、器形的特徴および調整からTK10に相当する。

519は、外面をタタキ、内面をナデにより調整した底部尖底の有孔鉢である。522は、口縁が外反する大型の鉢である。520は、内外面をナデにより調整し、口縁が緩やかに外反する小型の鉢である。521は、体部が緩やかに内弯し、体部外面を指押さえ後ナデ、内面をハケのちナデにより調整した平底

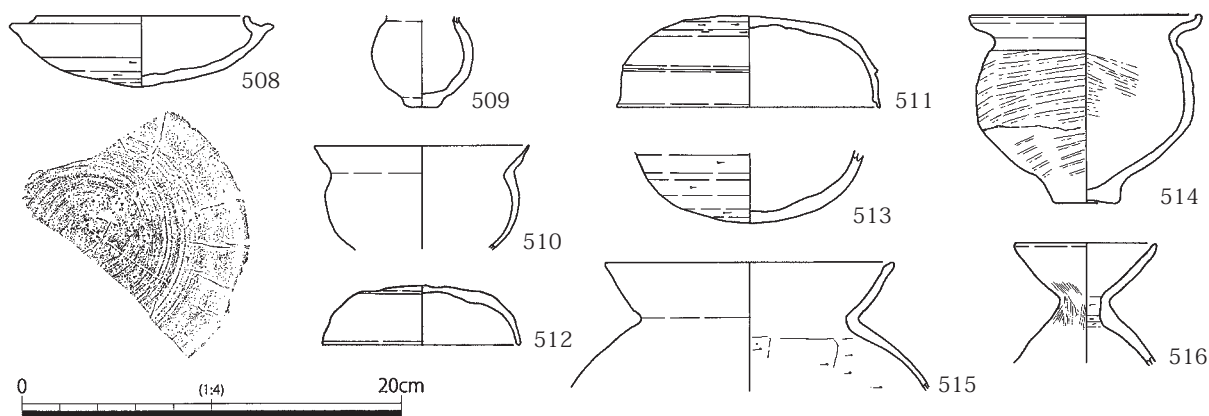


図126 3323土坑、3511井戸、3098・3188・3189溝 出土遺物

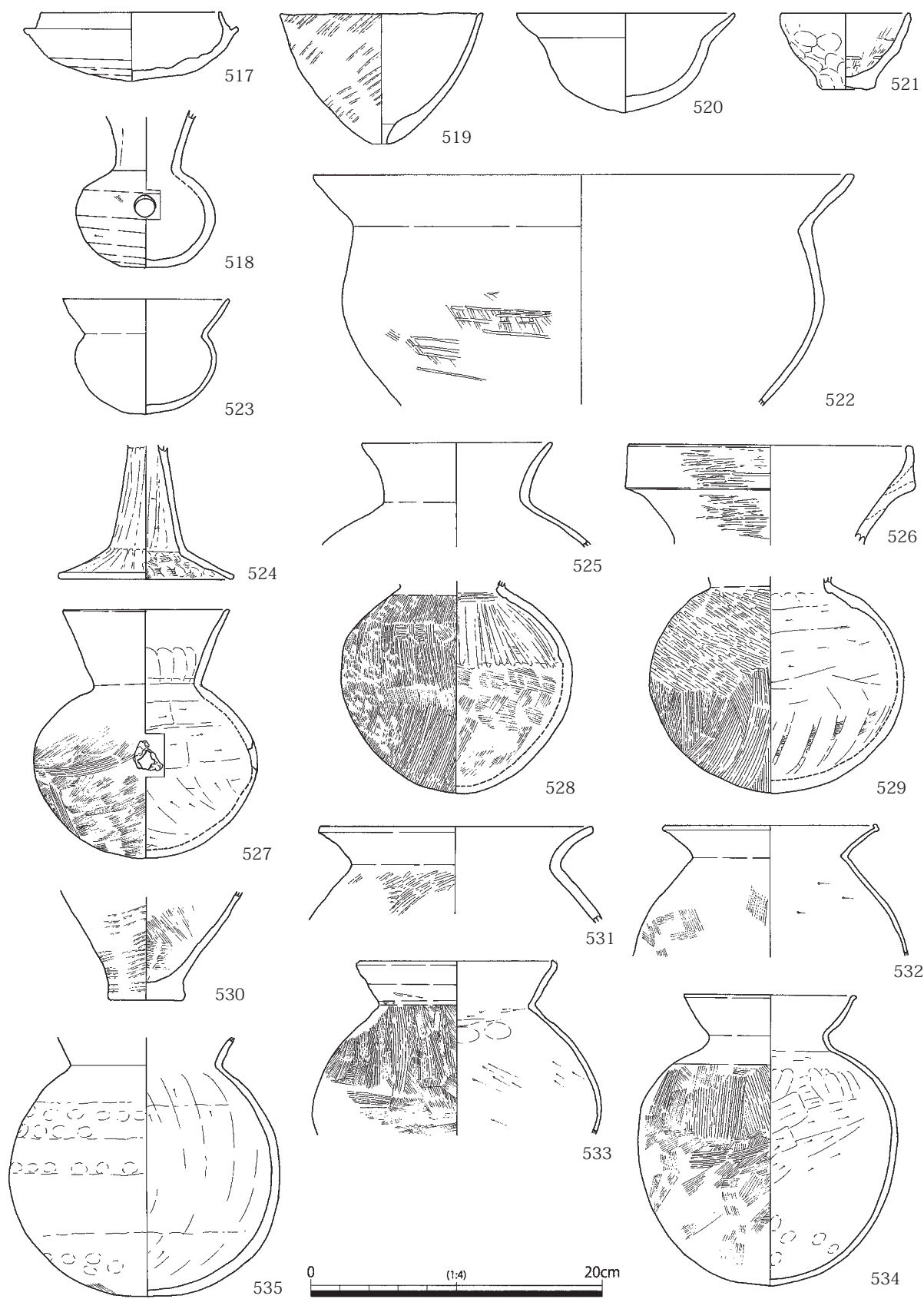


图127 3125流路 出土遺物

の鉢である。これら519～522は、庄内式期～布留式Ⅲ期に相当する。523は、口径が体部最大径よりも大きく、口縁が器高の約1/3を占める小型丸底土器である。器形的特徴から、布留式Ⅰ期前後に相当する。524は、高杯脚部である。脚柱部内面をケズリ、裾部内面を指押さえのちハケ、脚部外面をミガキにより調整する。脚柱部がやや長脚化し、脚柱部と裾部の境が屈曲することから、布留式Ⅱ期に相当すると考えられる。

525～529は、壺である。527は、口縁部が直線的に外に開き、体部が算盤玉型に近い直口壺である。体部外面をハケ、内面をケズリにより調整し、体部中央に焼成後穿孔が行われている。器形的特徴に須恵器の影響が認められることから、布留式Ⅲ～Ⅳ期に相当する。528は、体部外面をハケ、内面下半をハケ、上半をナデにより調整する。口縁部が欠損しており、正確な器形は不明であるが、口頸部が細く締まり、体部の器壁が厚いことから、甕ではなく、布留式Ⅲ～Ⅳ期に相当する壺と考えられる。529は、体部内面をケズリ、外面上半をハケのちミガキ、下半をハケにより調整する。体部の器壁がやや厚く、器形は球形を成すが、口縁部が欠損している為、壺か甕かの識別は困難である。525は、摩耗が激しく調整は不明であるが、口頸部が緩やかに外反する広口の在地の壺である。526は、口縁が直立気味に内

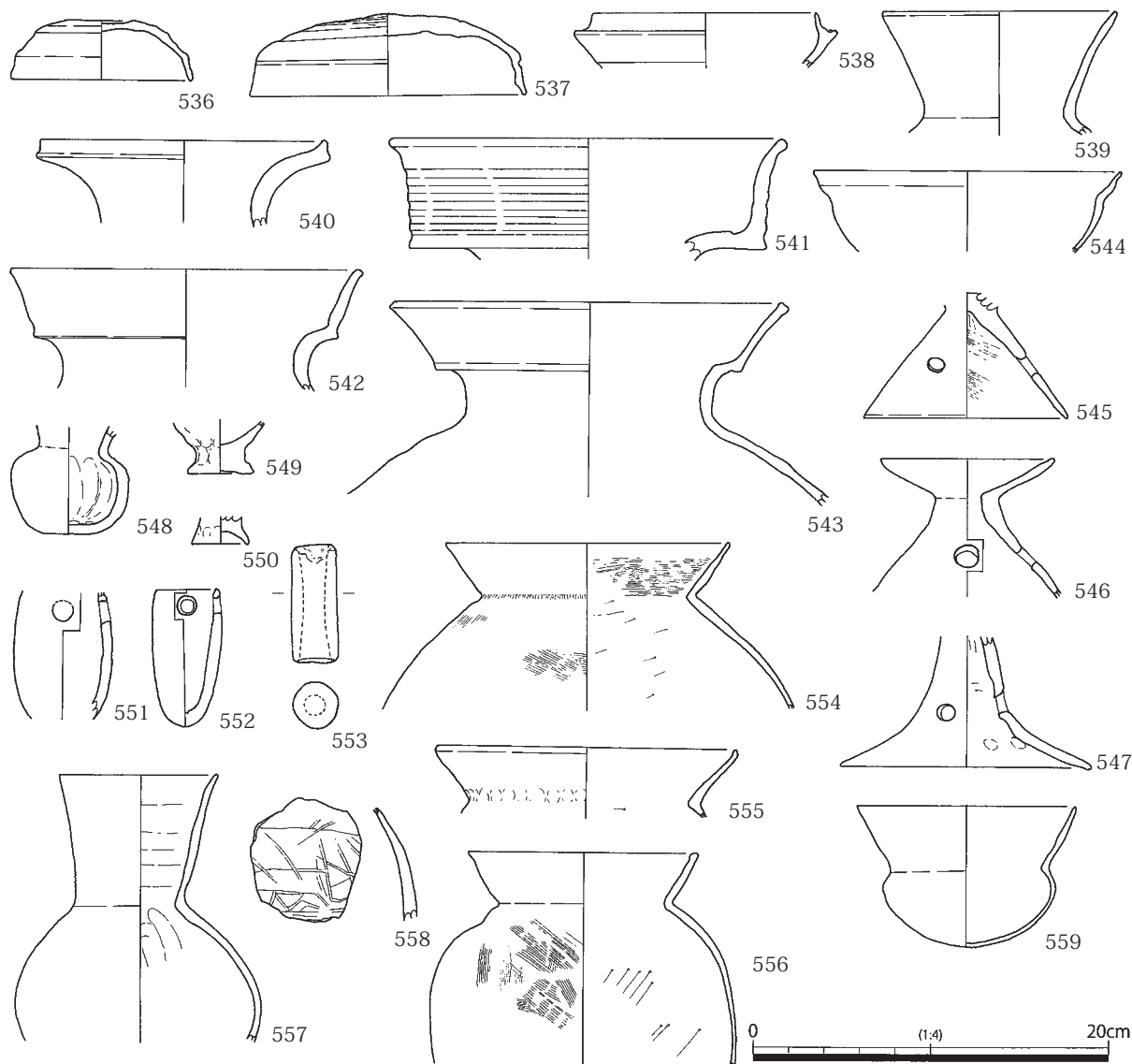


図128 8区、15～17区第7a層 出土遺物

傾する複合口縁壺の口頸部である。口縁を二段階成形ではなく、一体で成形し、内外面をミガキにより調整する。庄内式～布留式期の吉備を含む西部瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。

530は、畿内第Ⅴ様式の甕底部である。平底の底部から立ち上がる体部の膨らみは極弱く、体部外面をタタキ、内面をハケにより調整する。531は、口縁が弱く「く」字に屈曲し、体部外面を右上がりの連続するタタキにより調整した畿内第Ⅴ様式系甕である。532は、口縁が「く」字に屈曲し、端部を上方に摘み上げた庄内式甕である。体部内面をケズリ、外面を極細のタタキのちハケにより調整する。庄内式Ⅲ～Ⅳ期に相当する。533は、口縁部が「く」の字に屈曲した後、わずかに内弯し肥厚し、口縁端部を摘み上げた甕である。体部内面をケズリ、外面肩部から上半にかけてを縦ハケ、中央以下を横ハケにより調整する。庄内式甕の影響を受けた庄内式Ⅳ期頃の布留式甕の祖形甕と考えられる。534は、口縁が極弱く内弯し、端部が肥厚する布留式甕である。体部は球形で、外面をハケ、内面をケズリにより調整する。また底部内面には指頭痕が、外面の肩部には横ハケが認められる。布留式Ⅲ期に相当する。535は、口縁が「く」字に屈曲し、体部がやや扁平な球形を呈する甕である。体部外面をナデ、内面をケズリにより調整する。

第7a層包含層出土土器（図128、図版79・80）

第7a層からの遺物は、主として、15～17区から多く出土している。以下は、548が8区で検出されたほかは、すべて15～17区から出土したものである。

536・537は、須恵器杯蓋である。536は、天井部がヘラ切り後未調整で、丸みが無くなり、口径が10cmと小型である。537は、天井部が扁平で、天井部と口縁を隔てる稜が鈍く、口縁端部に段を持つ。口径は15cm以上と大型化し、全体的につくりが粗雑である。538は、口縁端部を丸く収め、立ち上がりが短く、内傾する須恵器杯身である。器形的特徴から、536はTK209、537・538はTK10に相当する。

539は、口縁部が直線的に外に開く土師器直口壺の口縁部である。540は、口縁端部を上方に摘み上げた畿内第Ⅴ様式系の広口口縁壺の口縁である。541～543は、複合口縁壺である。541は、複合口縁部が直線的に上方に立ち上がり、複数の凹線を持つ。器形的特徴と胎土に結晶片岩を含むことから、東阿波型土器と考えられる。542・543は、複合口縁の口縁が短く、直線的に外に開くことから、在地系と考えられる。なお、542は生駒山西麓産系の胎土である。539・540・542・543は、器形的特徴から庄内式末期～布留式前半期に相当する。554・555は、口縁端部を上方に摘み上げ、口頸部が「く」の字に鋭く屈曲する庄内式甕である。554は、摩耗が激しく、不明瞭であるが、内面をケズリ、外面をハケにより調整していることから、布留式甕の影響を受けた庄内式Ⅴ期（布留式Ⅰ期）頃に相当する庄内式甕と考えられる。544は、口縁部が有段化し、体部がやや扁平な小型精製三種の鉢である。545・546は、脚部に円形の透かしを有する小型器台である。この内、546は杯部が浅く、杯部と脚部が貫通していることから、布留式Ⅲ期前後に相当する。548は、ミニチュア土器である。549・550は、脚台Ⅲ式の製塩土器底部である。551・552は蛸壺、553は土錘である。

547・556～559は、15～17区の南側で設定された確認トレンチからの出土であり、遺構から検出されている可能性もあるが、特定できないことから、ここでは第7a層からの出土品として扱うこととする。

557は、体部が球胴形で、頸部が細く、口縁の外反が弱い直口壺（細頸壺）である。摩耗が激しく調整は不明であるが、器形的特徴から庄内式期に相当する。556は、体部外面をハケ、内面をケズリによ

り調整した布留式甕である。口縁部が肥厚し、口縁端部を内折する。器形的特徴および調整から、布留式Ⅱ期前後に相当する。547は、3方向に円形の透かし孔を持ち、裾部が緩やかに広がる高杯の脚部である。脚柱部内面のシボリ目を消すケズリ調整が上方まで及ぶことから、布留式Ⅲ期頃に相当する。559は、口縁が内弯せずに直線的に外に開き、器高の1/2以上を占める小型丸底土器である。口径が体部最大径よりも大きく、体部が浅いという器形的特徴および胎土がやや粗いことから、布留式Ⅱ期前後に相当する。558は、線刻のある絵画土器の破片である。手焙り型土器の破片の可能性が高い。

4. 古代以降の遺構・遺物

溝・流路

9区西半部で、2258溝と西端で南北方向の複数の浅い溝を確認した。第7層上面で大規模な2362流路を検出した。さらに8区で検出された、3115・3116流路の自然堤防の東側末端部付近と思われる状況を西端部で確認した。ただ、9区では、2362流路を主体とする自然流路により、層位が複雑化していることから、これらの溝や流路の明確な層序は確認できていない。

6区と7区を分ける位置で、南北方向に延びる大規模な3125流路を検出した。第7a層上部で形成された流路と考えられ、第5層で完全に埋没している。

いずれも形成された時期は古墳時代であるが、古代まで存続していたものと考えられ、出土遺物がやや新しいものまで混じるため、この項で述べる。

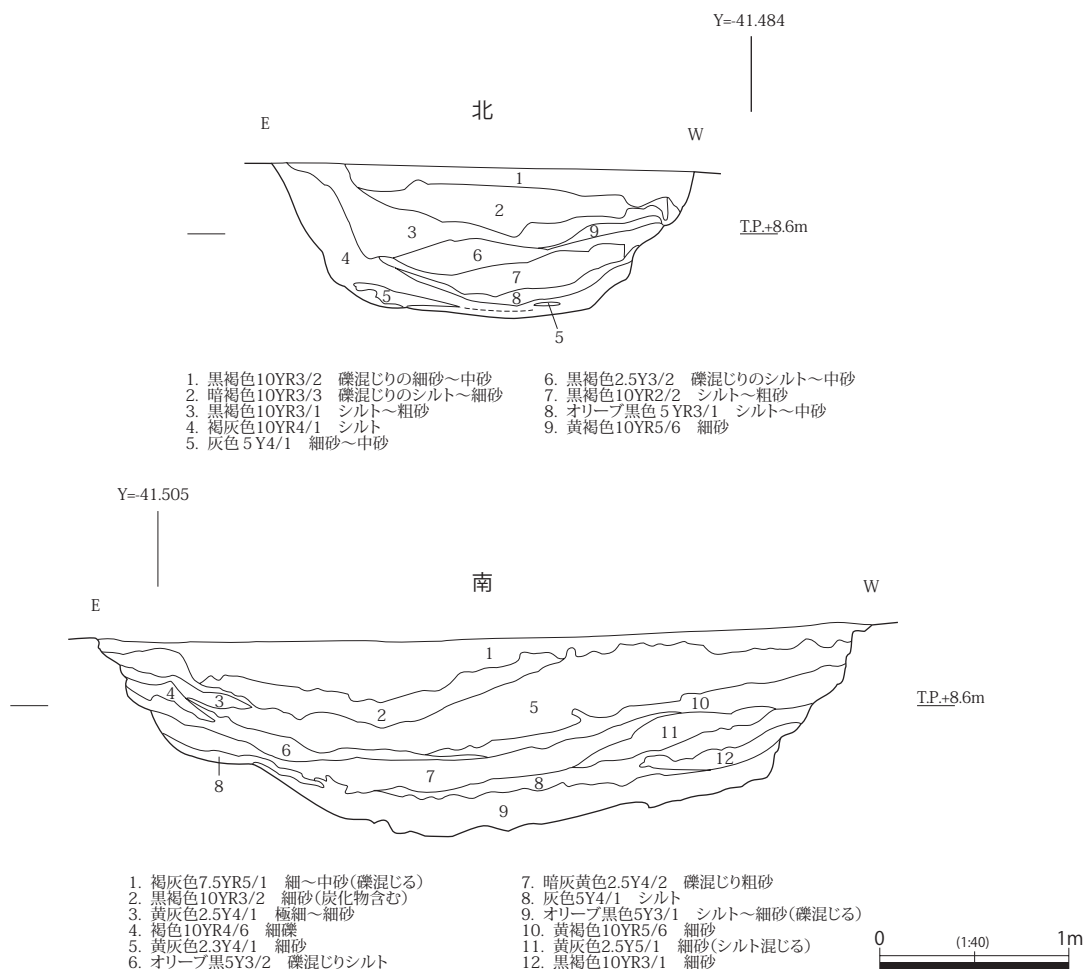


図129 2258溝 断面図

2258溝（図108・129・131・132、図版81・83）

9区内を南西から北東方向へ蛇行する溝である。幅2～4m、深さ約1mを測る。断面形はU字型を呈しており、埋土の主体が粗砂からシルトで流水堆積であることから、常に流水状態であったものと考えられる。

遺物は多く、須恵器、木器、石器が出土している。

561は、須恵器杯蓋である。天井部外面はヘラ切り未調整のままであり、口縁部外面に重ね焼きの痕跡を留める。TK217に相当する。この他、古墳時代末～飛鳥時代の壺口縁部破片が出土している。

562は、長さ70.1cm、幅11.8cm、厚さ2.6cmの柁目取りの板材である。表面・裏面ともに幅約6cmの工具痕が残り、中央より少しずれた位置に1.7cm角のホゾ孔が開けられている。側面には長軸と直交する方向の線状痕がみられるが、加工痕か使用痕跡か不明である。樹種はヒノキである。

560は、黒雲母花崗岩である。全体に扁平な板状をなし、2辺は割れ面よりなる。表面に茶褐色物質が付着し、表面・裏面にはまばらな敲打痕および僅かな研磨痕が認められる。当遺跡でこのような石は得られないことから持ち運ばれた石材であり、形状や使用痕跡からみて台石と考えられる。

当遺構は、須恵器の特徴から、6世紀終りから7世紀初め頃の時期にあたるものかと考えられる。

9区において、2362流路が調査区の中央部を南北方向に流れているが、自然流路でかなり動いてい

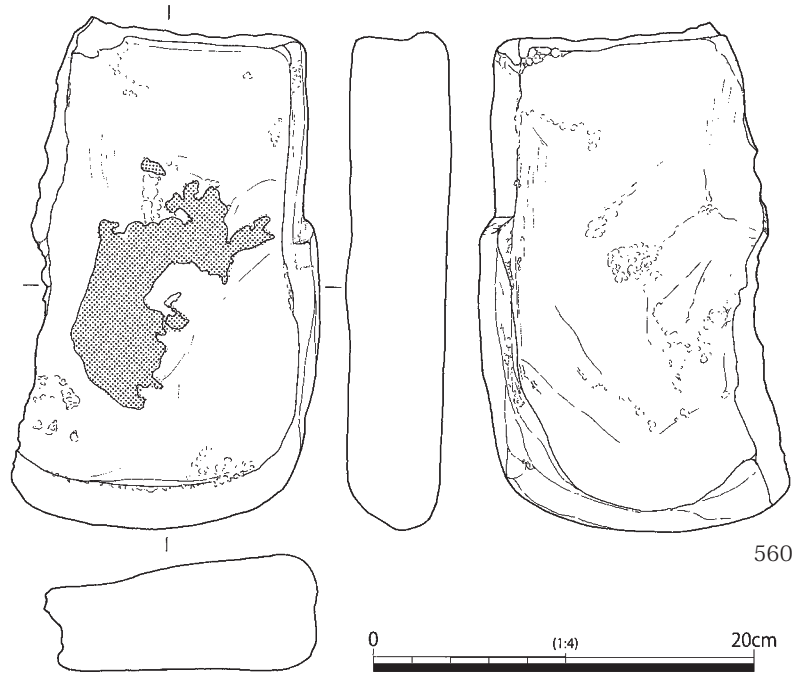


図130 2258溝 出土遺物（1）

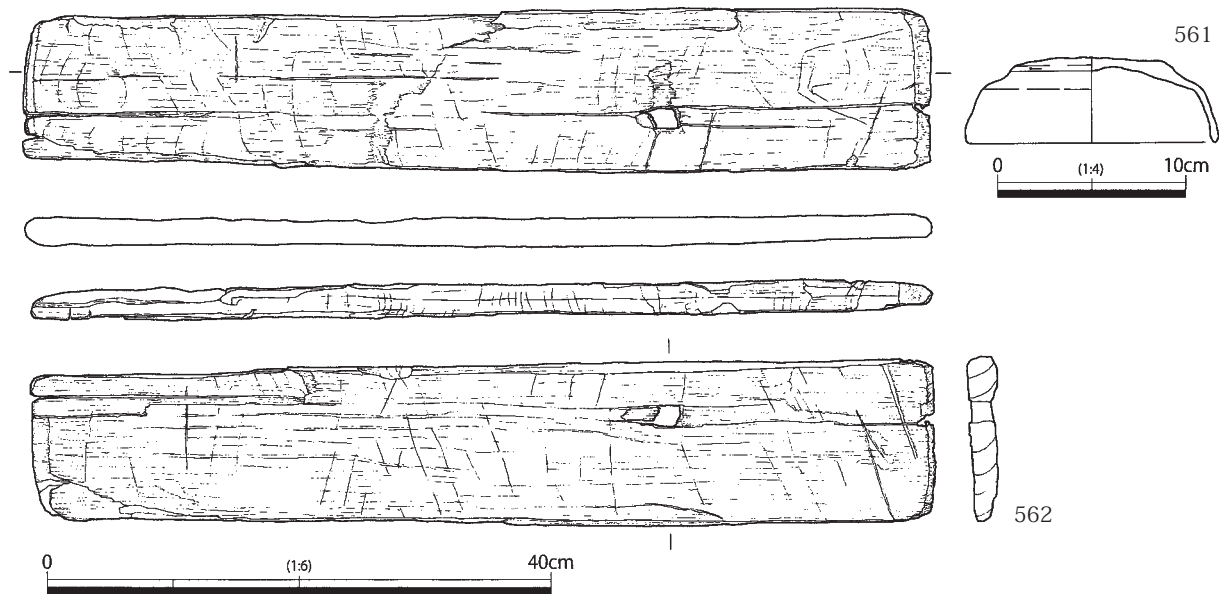


図131 2258溝 出土遺物（2）

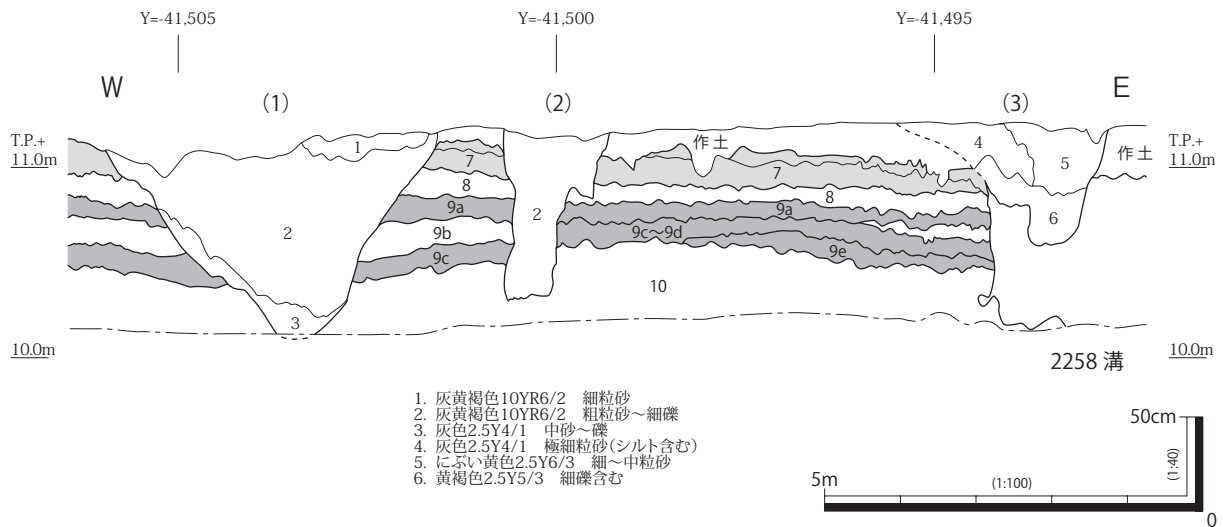


図132 2362流路 断面図

ることから、2258溝と正確に掘り分けられない部分も存在する。また、深く抉れた部分に埋没した遺物もみられ、時期を正確につかめない部分もある。このため、ここでは2258溝と2362流路を分けて記述しているが、遺物に関しては、互いに混入している可能性があるため、時期差を正確にとらえることはできない。このため、奈良時代を中心とした遺物が多く出土しているということ以上のことはいえない状況である。

2362流路 (図121・132・133、図版17・81)

9区のほぼ中央部を南北方向に延びる流路であるが、南側の15～17区では、3527流路の流水堆積による砂層に埋没していたことから、延長を確認することができなかった。検出面で、幅13～19m、深

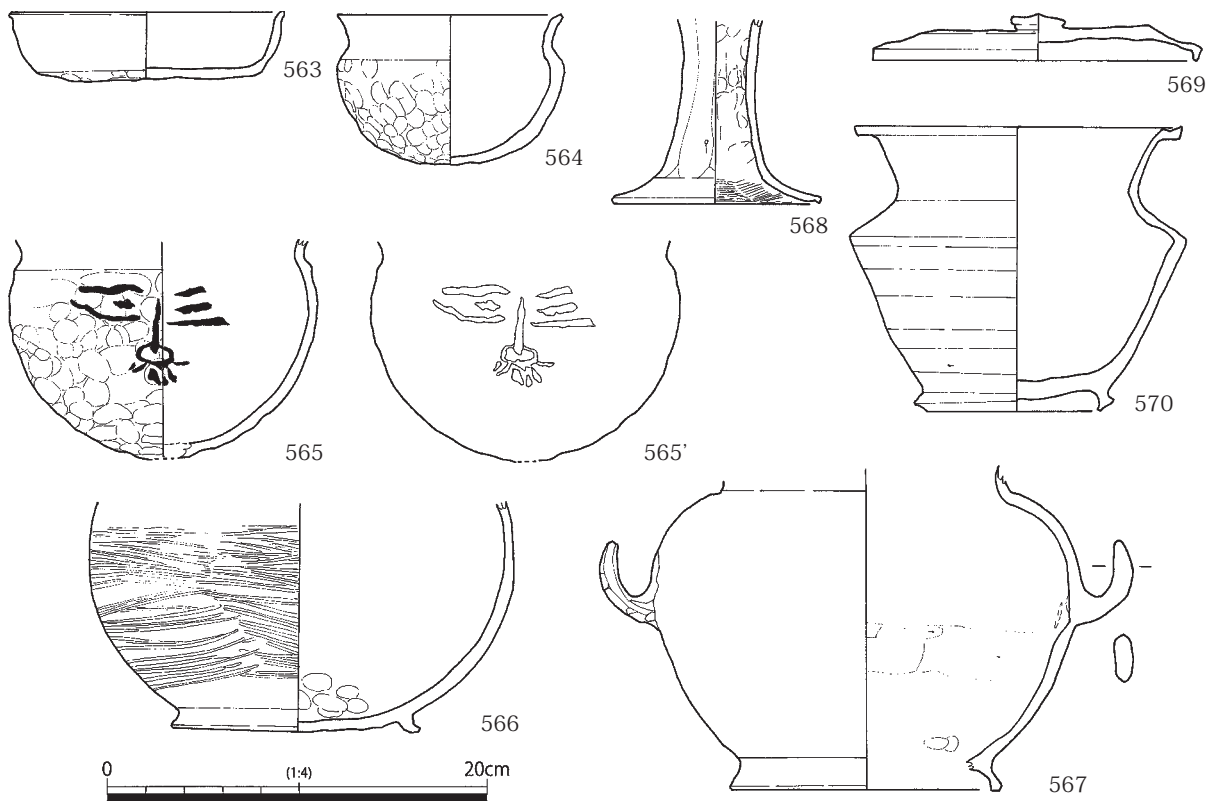


図133 2362流路 出土遺物

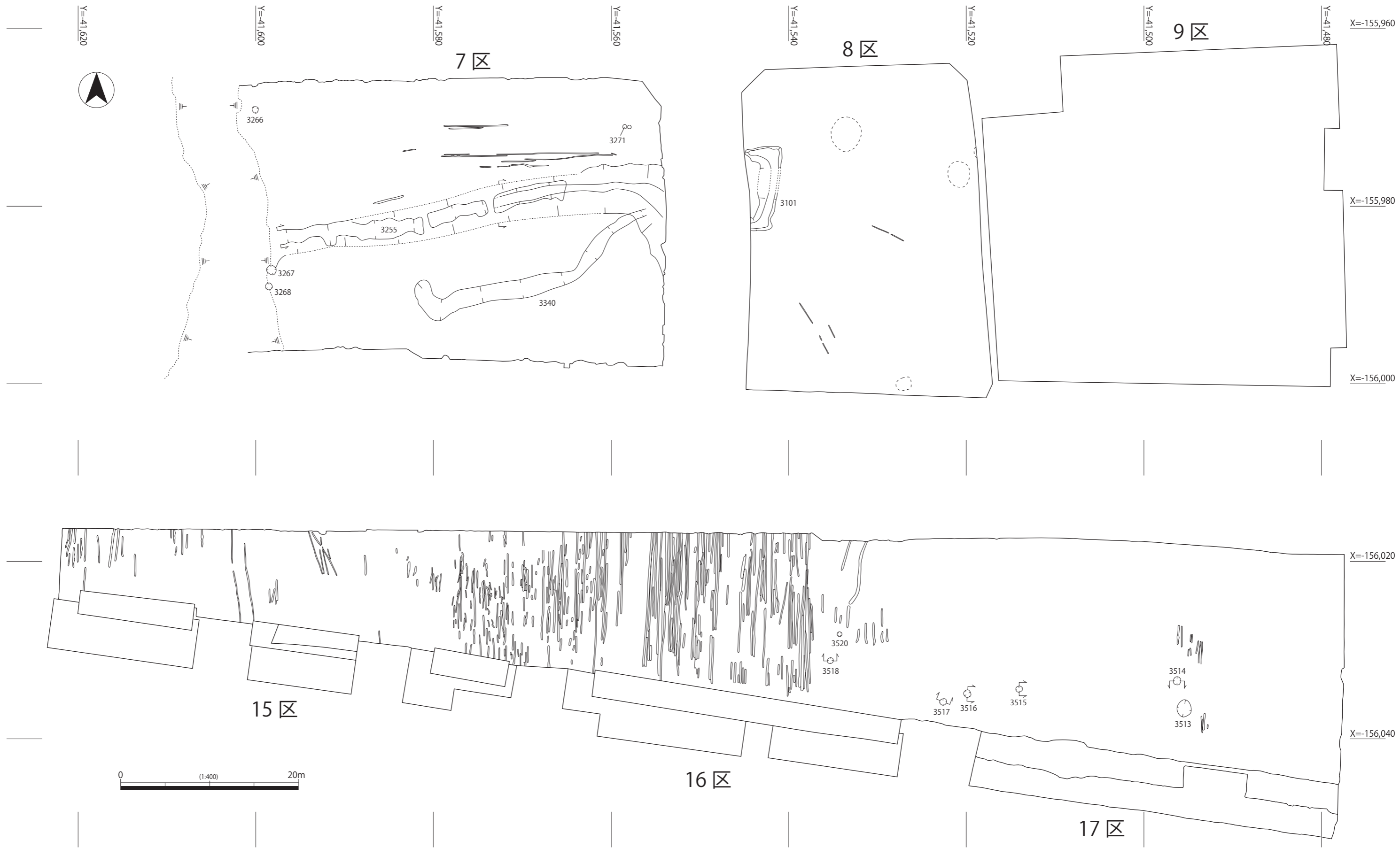


图134 7~9区・15~17区第1面 遺構平面図

さ約1.5mあり、細部を確認することは困難であるが、いくつかの流れの複合した流路である。トラフ型斜交葉理が発達しており、埋土からは奈良時代後半の土師器が出土した。

古墳時代の土師器や須恵器が少量、奈良時代の土師器杯、壺、甕、墨書人面土器、須恵器杯蓋、広口壺、奈良時代の製塩土器かと思われるもの、中世の須恵器こね鉢口縁部1点が出土した。

563の土師器杯は、口縁端部内面に沈線が1条巡り、底部外面は指押さえの後なでている。564は、口縁端部が丸く収められ、体部に指頭圧痕が多くみられる土師器甕である。565は、564と同じく外面に指頭圧痕を残す土師器甕であり、外面には人面が墨書されている。人面には鼻の下に短く髭のような表現がみられる。566は土師器高台付き壺の体部下半、567は有蓋の土師器把手付壺である。把手は体部に孔をあけ挿入されている。568の土師器高杯脚柱部は、下から上方向にヘラによる面取りが施され、九面体をなす。569は須恵器杯蓋、570は須恵器広口壺である。

これらの土器は平城Ⅲ～Ⅳの時期に相当する。最終的に埋没したのは中世と考えられるが、これら出土遺物から本流路が稼動していたのは主に奈良時代であったと考えられる。

h. 第4層上面以上（第1面）

第1面では、第1b～4層に伴う中近世の溝・耕作溝・井戸、古代のピットを一括して検出した。

1. ピット

耕作地として利用されていたものと考えられ、全体にピットの検出は少ない。建物を復元できるほどのピットはみつかっておらず、集落が営まれていた状況ではない。

その中で、7区の北部で複数のピットを検出した。建物は復元できなかったが、北東部で検出した3271ピットから、土師器杯が出土している。571は、奈良時代の杯Aである。底部が平底で、口径に比して器高が低く、暗文が見られないことから、平城Ⅳ期前後に相当する。

2. 土坑・井戸・落ち込み

7区では、西端部で3266・3267・3268井戸を検出した。これらの井戸は、埋没した3125流路の真上に立地する事から、旧流路の水道を選んで掘削されたものと考えられる。

15～17区では、中央部やや東よりの第2b層上面で、土坑や井戸がまとまって検出された。

検出した3513～3518井戸は、近世以降の野井戸とみられる。

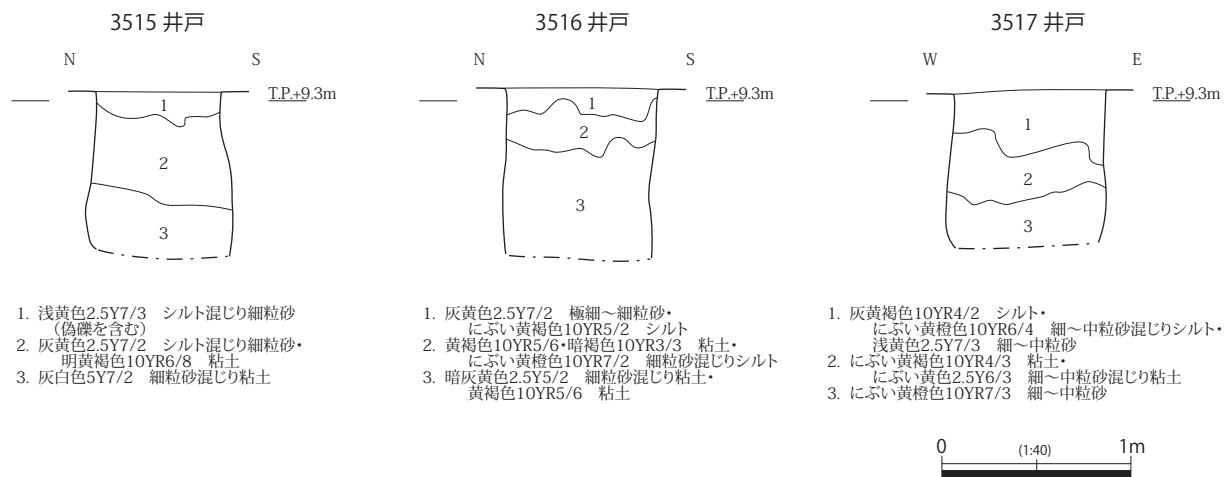


図135 3515・3516・3517井戸 断面図

3513井戸 (図134)

15～17区の東端部に位置する。平面形はほぼ円形を呈しており、径約1.7m、深さ1m以上である。灰色細粒砂の薄層を挟みながら、明黄褐色・暗褐色粘土や灰色細粒砂などの大小偽礫を主体とする埋土で人為的に埋められている。安全のため、完掘できなかったが、近世以降の野井戸とみられる。

3515井戸 (図134・135)

15～17区の東部に位置する。3513井戸の西にあり、約13.5m離れている。平面形はほぼ円形を呈しており、径約0.7m、深さ0.9m以上である。埋土は3層に細分され、1層が浅黄色シルト混じり細粒砂からなり、偽礫を含む。2層は灰黄色シルト混じり細粒砂や明黄褐色粘土、3層は灰白色細粒砂混じり粘土など、大小偽礫を主体とする人為的な埋土である。安全のため、完掘できなかったが、近世以降の野井戸とみられる。

3516井戸 (図134・135)

15～17区の東部に位置する。3515井戸の西にあり、約6.0m離れている。平面形はほぼ円形を呈しており、径約0.8m、深さ0.9m以上である。埋土は3層に細分され、1層は灰黄色極細～細粒砂やにぶい黄褐色シルト、2層は黄褐色・暗褐色粘土やにぶい黄褐色細粒砂混じりシルト、3層は暗灰黄色細粒砂混じり粘土や黄褐色粘土などの大小偽礫を主体としている。すべての層が人為的に埋め戻されている。安全のため、完掘できなかったが、近世以降の野井戸とみられる。本遺構からは須恵器片が出土している。

3517井戸 (図134・135)

15～17区の東部に位置する。3516井戸の西に近接しており、約2.6m離れている。平面形はほぼ円形を呈しており、径約0.8m、深さ0.8m以上である。埋土は3層に細分され、1層は灰黄褐色シルト・にぶい黄褐色細～中粒砂混じりシルト・浅黄色細～中粒砂、2層はにぶい黄褐色粘土やにぶい黄色細～中粒砂混じり粘土などの大小偽礫を主体とし、人為的に埋め戻されている。3層はにぶい黄褐色細～中粒砂からなる。安全のため、完掘できなかったが、近世以降の野井戸とみられる。

3518井戸 (図134)

15～17区の中央部やや東寄りに位置する。3517井戸の西にあり、約13.0m離れている。中央部から西半部にかけて広がる、南北方向の鋤溝群の東端部にあたる。これより東側では、鋤溝はほとんど見られない。平面形はほぼ円形を呈しており、径約0.6m、深さ0.6m程度である。埋土は2層に細分され、1層は黄灰色シルトからなる水成層である。2層は、灰黄色砂質シルト・黒褐色粘土・黄褐色砂混じりシルトなどの大小偽礫を主体とする人為的な埋土である。安全のため、完掘できなかったが、近世以降の野井戸とみられる。

3520土坑 (図134)

15～17区の東端部に位置する。3513井戸の北に近接しており、約2.0m離れている。平面形はほぼ円形を呈しており、径約0.6m、深さ15cm程度である。埋土はにぶい黄褐色極細～細粒砂質シルトからなり、細～粗粒砂の偽礫を含む。近世以降のものと考えられるが、他の野井戸とは様相が異なる。

3340落ち込み(図134)

7区南部で検出されたもので、北東から南西方向に延びる。溝状を呈しており、調査区中央部で途切れている。7区東端部で、瓦器椀が出土した3255溝を切っていることから、第4a層よりも上位の水成層の落ち込みであると考えられる。ただ、前に述べたように、この底面(第3面)で「溝群2」と呼ぶ、並列した短い溝のまとまりが検出されていることから、一連の遺構として人為的に掘削されたものの可

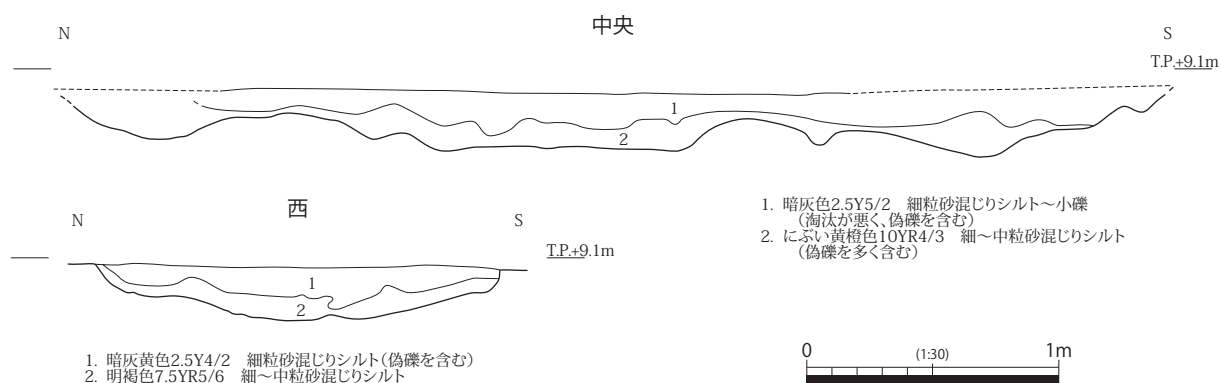


図136 3255溝 断面図

能性も考えられる。

3. 耕作溝・轍

7区では、北部を中心に、中世段階の耕作に伴うと考えられる耕作溝を少数検出した。これらの耕作溝は、長さ0.3～1.5m、幅0.1m程度で、南西から北東方向に延びており、一部は轍になる可能性がある。

15～17区では、第2b層下面で中央部を中心に、耕作に伴う耕作溝を多数検出した。耕作溝は、ほぼ南北方向に延びており、幅0.2m程度のものが多い。

3255溝 (図134・136・137、図版72)

7区中央部で検出されたもので、ほぼ東西方向に延びる。西側は、3125流路部分につながるが、埋土が明確に識別できなかったことから、切り合い関係ははっきりしない。検出面から判断すると、3125流路の埋没のほうが古い時期と考えられる。一方、東側は、調査区外まで延びているが、8区においても、この溝につながる遺構は確認されておらず、性格は不明である。ただ、8区の西端部で検出された、3101落ち込みが関連する可能性がある。

規模は、幅1.6～4m、深さ約0.25mである。東側では幅が広くなり、東端部でもっとも幅が広い。確認された形状から、7区東端部で南方向へ屈曲する可能性がある。埋土は大きく2層に細分される。1層は、淘汰の悪い少礫～細粒砂混じりシルトで、偽礫や土器を含んでいる。2層は中～細粒砂混じりシルトで、偽礫を多く含む。1層から、和泉型瓦器椀が出土している。

572は、瓦器椀である。体部外面には整形時のユビオサエの痕跡が目立ち、内面の見込みには粗い格子状の暗文が見られることから、和泉型瓦器椀Ⅱ期に相当する。

8区西端部で検出された、3101落ち込みは検出面からの深さ5cm程度の浅い落ち込みである。7区で検出した東西方向の3255流路の連続である可能性がある。本遺構からは土師器片が出土した。

4. 流路

15～17区の北東端部の第2b層上面で検出された。大規模な流路のごく一部を検出したのみであるため、全体の規模は把握できないが、北壁断面で幅5m以上、深さ1m程度ある。南東から北西方向に延びているものとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルト～中粒砂からなり、側方細粒化している。

本調査区の前古墳時代より上位の遺構および耕作土層から、古代～中世の遺物が出土している。

包含層出土土器 (図137、図版72)

573・574は、瓦器椀である。573は器高が高く、体部外面は分割線よりも下位のミガキが簡略化され、

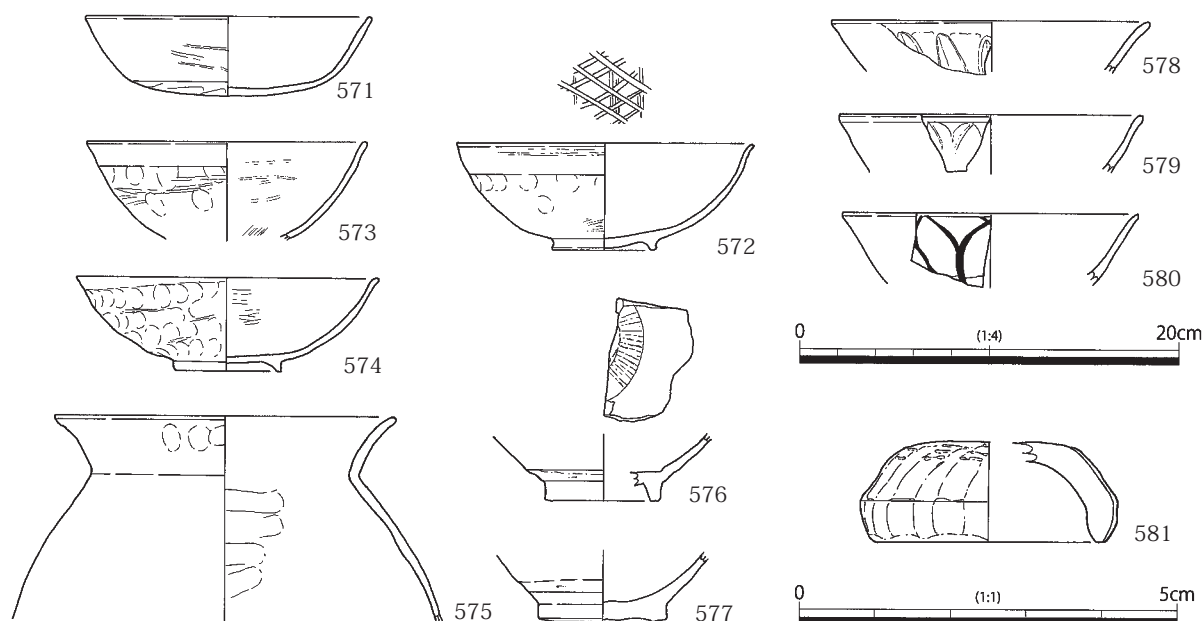


図137 3271土坑、3098・3255溝、包含層（古代） 出土遺物

整形時のユビオサエが目立つ。574は器高が浅く、体部外面は分割線が失われ口縁付近まで整形時のユビオサエが目立つようになる。内面の見込みには、粗い格子状の暗文が認められる。器形及び調整から、573は和泉型瓦器碗Ⅱに、574はやや新しい和泉型瓦器碗Ⅱ-3～Ⅲ期に相当する。

577は、白磁碗である。578～580は、龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。578・579は、蓮弁に鎬をもつ青磁碗Ⅰ-5b、580は鎬をもたない青磁碗Ⅰ-5aである。581は、青白磁合子蓋である。型抜き整形後、外面のみを施釉した景德鎮窯系の合子で、12世紀前後の経塚で同様のものが多く出土する。近年の博多遺跡群出土の輸入陶磁器と中国における窯資料との比較研究の中で、これらの青白磁合子が景德鎮窯系の福建省大口窯産である可能性が指摘されている（森本朝子2003）。576は、白磁碗である。575は、口縁部を「く」の字に屈曲させた土師器甕である。

5. 小結

本調査区では、大規模な流路が各層で調査区を南北に横断し、これらの流路の影響により各層が収斂分離を繰り返している。第9層は縄文時代後期、第8d層は縄文時代晩期(滋賀里)を想定している。また、第8a'層上面で検出された3118流路および第8a'層内からは、弥生時代後期の畿内第Ⅴ様式の土器が出土しており、同層内で形成された3527流路からは、縄文時代晩期の滋賀里Ⅱ式～長原式の土器が出土していることから、第8a'層は縄文時代晩期～弥生時代後期までの期間を想定できる。なお、第7a層下面における遺構の広がり希薄であることから、本調査区が15～17区の中央部に広がる庄内式期後半～布留式期前半にかけての集落の北限であると考えられる。

9区では、第6層以上においても耕作土層と河川氾濫堆積層が現代まで累重していることから、古代以前はあまり利用されない地区であり、その後も河川の氾濫を幾度となく被った場所であったことが伺われた。

第5節 10～12区および18～20、04-1区、07-1・2調査の成果

調査範囲のほぼ東半部にあたる。東側は、国道309号線と阪神高速松原線と接している。東西方向に走る道路の北側は、里道をはさんで10区と11区に分割されているが、この部分の道路拡張工事が先行されたため、04-1区として先に調査をおこなった。10区の西側は、里道をはさんで9区と接している。東西道路の南側は、里道をはさんで大きく18区と19区に2分割されている。19区は、調査区南側にある民有地への進入路を確保しながらの調査になったため、細かい単位での調査となった。

本調査の後、一部の道路切り替えにより、東西道路の拡幅部分や調査区南端部の調査が可能となったため、07-1調査として調査区（トレンチ）を分けて別に調査をおこなった。10区南側の道路拡張部分から東側の縁辺部にかかる、L字状の部分は、1トレンチとした。11区南側の道路拡張部分から東側の縁辺部にかかる12区との隣接地に至るL字状の部分は、3トレンチとした。19区西側の縁辺部から南西端部の未調査部分は3分割して調査をおこなったが、これを2トレンチとした。

さらに、18区と19区を分かち道路の拡幅工事が追加して計画されたことから、07-2区として別に調査をおこなった。また、07-2調査と18区の接続部の未調査部分を4トレンチとした。

なお、複数の調査区に及ぶ溝などについては、調査時の遺構番号を並列表記している。

1. 層序

本調査地の基本層序は以下の通りである。

第0層：現代の盛土である。

第1層：現代の耕作土である。

第2層：層内から染付（肥前・19世紀）が出土していることから、近世後半～近代の耕作土と考えられる。

第3層：染付、瓦質土器、瓦器椀が出土していることから、中世後半～近世前半の耕作土と考えられる。

第4層：瓦器椀（和泉Ⅱ～Ⅲ期が主体）が出土していることから、中世の耕作土と考えられる。

第5～6層：調査区全域に分布する水成堆積層である。4017(2219)流路以東では、第5層と第6層上部及び、第6層下部に3分される。第5層は、均質なシルト層で中世～古代の耕作土の可能性も考えられる。第6層上部は中～粗粒砂で断続的に残存し、第6層下部は黄色味の強いシルトで古代の遺物を若干含む。

第7a～c層：調査区西部に分布する暗色帯構成層である。淘汰が悪く、東に行くほど薄くなり、上位層と収斂する。須恵器や土師器等を数多く含む古墳時代の遺物包含層である。

第7d層：弥生時代の水成堆積層である。本地層の供給源となる2010(4220)流路から、畿内第Ⅳ様式後半の高杯や畿内第Ⅴ様式の甕がわずかに出土することから、弥生時代中期後葉～後期に相当すると考えられる。

第7e～9a層：層厚は約40cmを測り、3層の暗色帯をはさむ。調査区内で収斂・分離が行われている。第7e層は、弥生時代前～中期の遺物包含層である。本調査区では、第7ei、第7eii、第7eiiiの3層に細分され、第7ei層、第7eiii層が暗色帯を構成する。調査区中～東部の大部分では第7eii層が不明瞭であるが、調査区西部の傾斜地では層厚が増えるに従って分離が進む。本地層には、畿内

10区 南壁

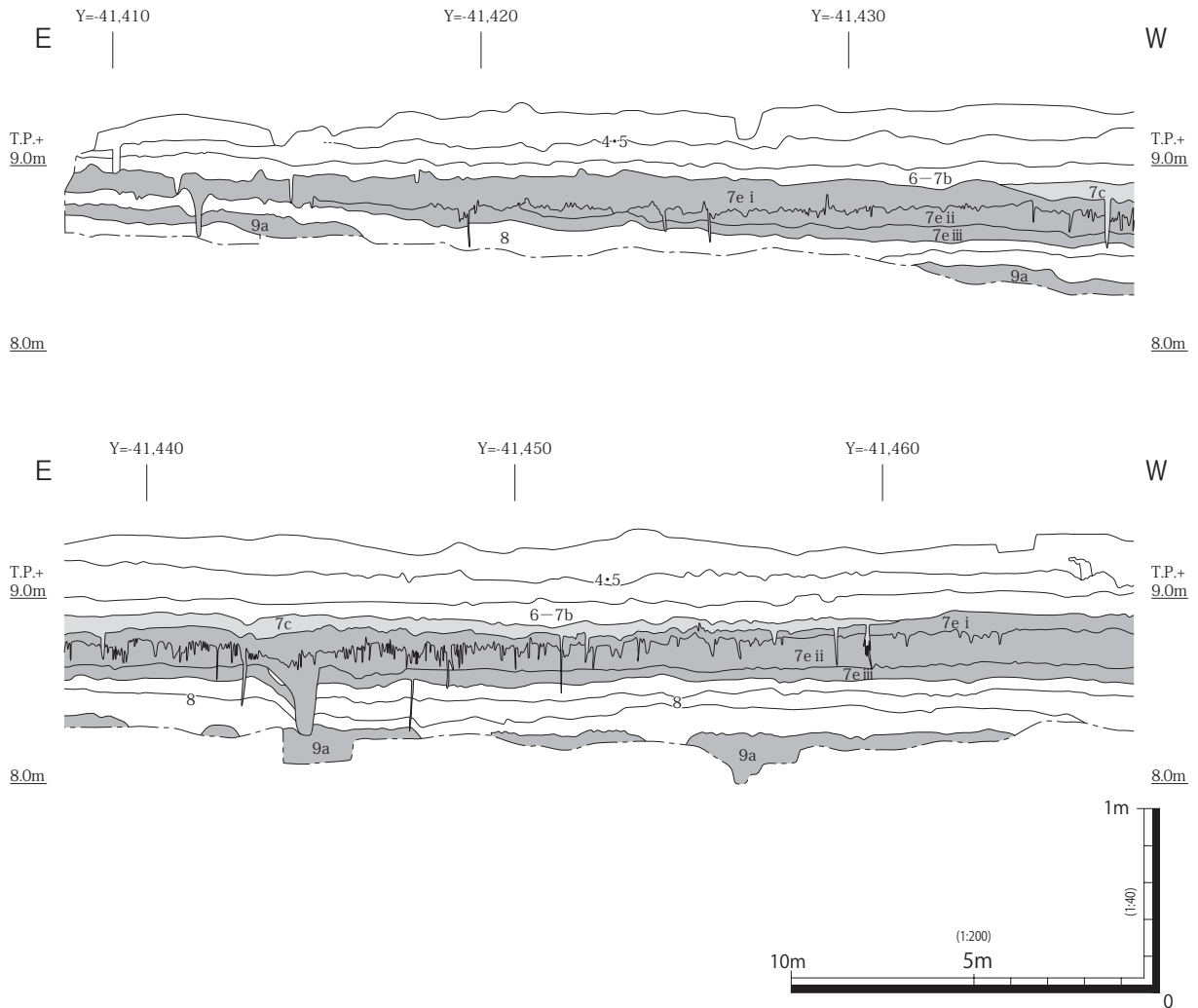


図138 10区 南壁断面図

第Ⅱ様式（一部、畿内第Ⅲ様式が混じる。南縁部では畿内第Ⅰ様式が増える）期の土器や石器が大量に含まれる。第7e ii層上面及び、第7e iii層下面から、竪穴住居やピット、土坑など弥生時代集落を構成する遺構群が検出される。第8層は水成堆積層であるが、遺物を出土していない。第9a層は暗色帯であり、2010(4220)流路以西の第9a層最上部では縄文土器（後期中葉）が出土している。

第9b～10層：淘汰の悪い水成堆積層からなる第9b層、強く暗色化している第9c層、細粒砂混じりシルトからなる第10層に細分される。このうち、強く暗色化している第9c層をサンプリングしたところ、角閃石が多量に確認されたが、火山ガラスはほとんど確認する事が出来なかった。なお、本層以下は下層確認の為に設定したトレンチでの断面調査であった為、遺物の出土は無かった。しかしながら、上下の層準の年代観から本層は縄文時代中期に相当すると考えられる。

第11a～c層：3層に細分される暗色帯構成層である。本層をサンプリングした結果、火山ガラス（バブル(Bb)型）を大量に含有しており、褐色ガラスも確認する事が出来た。以上の事から、本層は横大路火山灰層(K-Ah)を含む層準である可能性が考えられる。なお、横大路火山灰層下面で、縄文時代早期の土器の出土が九州で確認されていることから、本層は縄文時代前期に相当すると考えられる。

11区 (07-1調査3トレンチ) 南壁

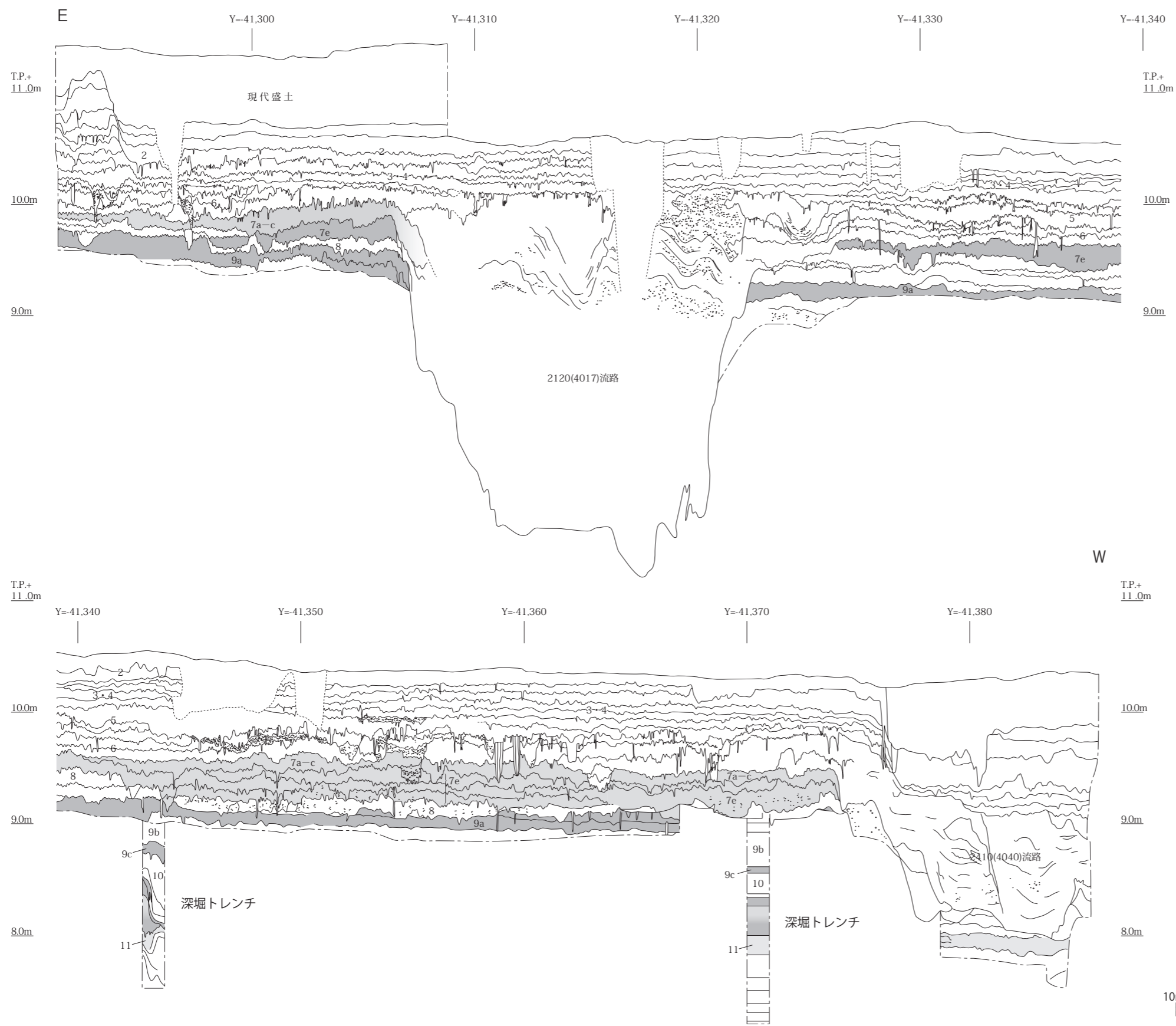


図139 11区 南壁断面図

19区 南西端部 (07-1調査 2-2・2-3トレンチ) 南壁

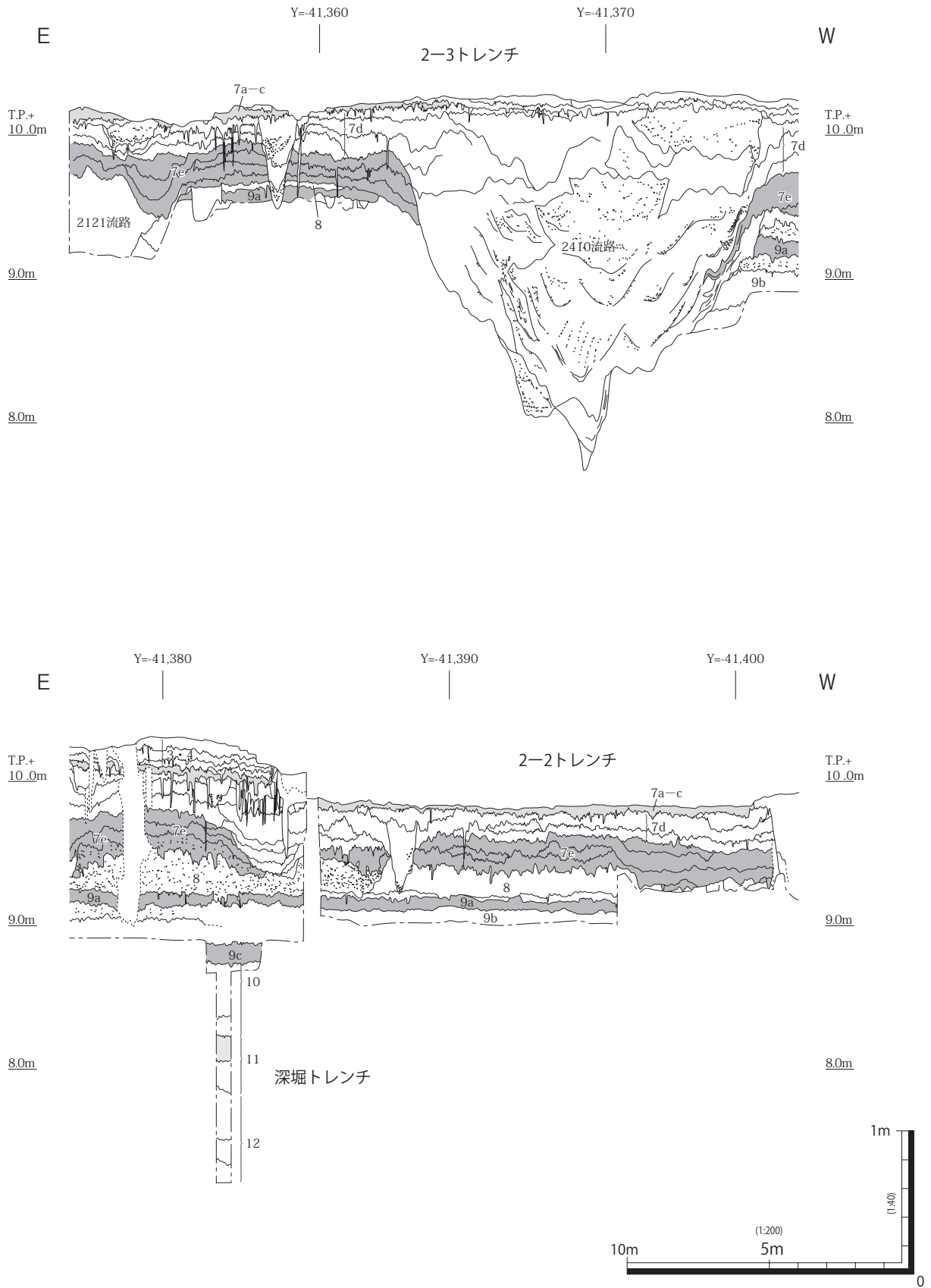


図140 19区南西端部 南壁断面図

第11d層：本層は、粘土からなる上部と極細粒砂混じりシルトの下部の2層に細分される。

10区南壁（07-1調査1トレンチ）（図138）

調査区の形状はほぼ長方形を呈しており、この調査区における基本層序は、07-1調査の1トレンチ南壁で設定している。地形は、西に向かって緩やかに下降し、斜面を埋めるように第7e～9a層が厚く堆積している。現代の攪乱により、第4・5層より上部の堆積状況は不明である。

なお、東西道路をはさんで南側の18区の基本層序も、おおむね10区の状況と同じである。

第7a～c層：褐灰色砂質シルトでマンガン斑を含む。第7c層は、調査区中央部の第7e層上面の窪地に薄く堆積する。

第7e～9a層：第7e層以下は、西に向かって緩やかに下降し、層厚を増すため、層の細部が可能となる。3層の暗色帯が明瞭に認められ、最上部が第7ei層、次が第7eiii層、最下部が第9a層に比定できる。また、暗色帯にはさまれシルト層については、第7ei層と第7eiii層間を第7eii層、及び第7eiii層と第9a層間を第8層とする。第7eii層は弱く暗色化している。ただし、遺物・遺構密度が極端に少なく、層の年代比定が困難なことから三宅西遺跡の基本層序への対応には課題も残る。地形が高くなる東端では第7e各層が一つに収斂する。なお、図示していないが、深掘りトレンチの所見では、横大路火山灰を含む第11層が認められた。

04-1区南壁（図158）

調査区の形状はほぼ長方形を呈しており、この調査区における基本層序は、南壁で設定している。調査区を横断する流路によって、北側と南側では堆積状況に差がみられ、第4～7c層は削平され、部分的にしか存在しない。

第1層：現代の耕作土で、第1a層と第1b層に分けられる。

第2層：近世の耕作土で、約50cmと厚く、10cm程度の単層に細分される。

第3層：中世の耕作土で、ごく薄く残存している。

第7e～9a層：黒褐色粘質シルトで、暗色帯を構成する。ごく薄く残存している。

第10層：灰黄褐色粘土質シルト層で、遺物は出土していない。層厚は5～15cmを測る。

11区南壁（07-1調査3トレンチ）（図139）

調査区の形状はほぼ長方形を呈しており、この調査区における基本層序は、07-1調査の3トレンチ南壁で設定している。全体的に南東から北西にかけて緩やかに下る。調査区の東側と西端には、南北方向に伸びる大規模な流路があり、複雑な様相を呈している。

第0層：現代の盛り土である。

第1層：現代の耕作土である。

第2層：近世後半～近代の耕作土で、黄褐色中～極細粒砂質土からなり、酸化鉄粒を多く含む。

第3・4層：中世の耕作土で、3層に細別され、下層が第4層に該当する可能性が高い。各細別層は、灰色系シルトと黄色系シルトがセットとなって構成されている。瓦器を若干含む。

第5・6層：第5層は、暗オリーブ褐色細～極細砂質シルトからなり、厚さ5～7cmを測る。第6層上部層は中～粗粒砂で、下位層の凹みや遺構埋土の中に部分的に残る。第6層下部層は、黄灰色シルト

からなり、マンガンの縦縞沈着物を多く含む。西側に向かって厚くなり、2410(4040)流路起源の水成層と一体化する。

第7a～c層：暗褐灰色中～極細粒砂混じりシルトからなり、暗色帯を構成する。厚さ10～15cmを測る古墳～飛鳥時代の遺物包含層である。

第7e層：黒褐色土からなり、厚さ10～20cmを測る弥生時代中期の遺物包含層である。第7ei～iii層から構成されるが、本調査区では大部分が1～2層に収斂している。弥生中期前葉の土器や石器を数多く含む。

第8層：灰黄褐色細～極細粒砂からなる水成堆積層である。特に、2120流路の西肩にはやや厚く堆積し、弥生中期集落の遺構面となっている。

第9a層：黒褐色粘質シルトで、調査区全域に均質に広がるが、中央～西部にかけては暗色化の程度が弱くなる。

第10層：オリーブ褐色～暗灰黄色中～極細砂混じりシルトである。なお、深掘り部では、横大路火山灰を含む第11層が検出されている。

19区南西端部南壁（07-1調査2トレンチ）（図140）

調査区の形状は、南側が湾曲しているが、ほぼ長方形を呈している。工程上、細かく分割して調査をおこなったため、この調査区における基本層序として、調査区南西端部にあたる07-1調査の2-2（西）・3（東）トレンチ南壁を提示する。基本的には、東西道路をはさんで北側の11区と同じであるが、調査区を南北方向に横切る大規模な流路（2410流路）が蛇行しており、これに伴う洪水砂の堆積がひろがっていることから、複雑な様相を呈している。

第0層：現代の盛土であり、全体的に厚く覆われる。

第1・2層：近世～現代の耕作土であるが、盛土工事に際して削除され、ほとんど残らない。

第3～5層：第3・4層は中世の耕作土である。2-3トレンチでは厚さ20cmを測り、3細分できるが、調査区西部では大部分が削除される。第5層は、2-3トレンチ東部で部分的に認められる。

第6層：黄色系シルトで構成され、調査区北西部のみ残存する。

第7a～c層：褐灰色土からなる古墳時代後期の遺物包含層である。地形が下降する調査区中央～西北部に向かって厚さを増す。

第7d層：オリーブ褐色シルトからなる弥生時代中期後半～後期の河川氾濫堆積層である。2条の大規模な自然流路が供給源と考えられ、調査区全域に厚さ15～30cmで広がる。

第7e層：弥生時代前～中期の遺物包含層である。第7ei～iii層から構成され、調査区北西部では分離が可能性であるが、地形が上昇する調査区東半部と南端部では一つに収斂する。第7ei層は暗褐色細粒質シルト～黒褐色中・細粒砂混じりシルト、第7eiii層は黒色粗～細粒砂混じりシルトで、下層がやや黒味がかかり、下部の第8層の巻き上げもあって粗砂粒が多い。遺物は両層とも数多く含む。また、2-2トレンチの南端及び、2410(4220)流路の東側では、本地層を機械的に分層発掘した結果、最下部では弥生時代前期の土器のみを検出しているが、層界を見つけることはできなかった。

第8層：にぶい黄褐色極粗～中粒砂からなる河川氾濫堆積層である。2410(4220)流路の西肩に沿って厚く帯状に広がる。

第9a層：黄灰色シルトからなり、暗色化の程度は低い。調査区西部では、本地層の最上部から縄文時



X=156,000

10区

X=155,980

X=155,960

Y=-41,470

Y=-41,450

Y=-41,430

Y=-41,410



07-1 調査 1 トレンチ

0 (1:400) 20m

図141 10区 弥生時代 遺構平面図

代後期中葉の土器片を出土した。

第10層：明褐色土砂～シルトである。

なお、深掘りトレンチでは、横大路火山灰層を含む第11層が認められた。

2. 弥生時代の遺構・遺物

調査では、大きく4面の遺構面を確認することができた。そのうち、下層部分にあたる2面分が弥生時代と考えられる。ひとつの集落を構成しているものと考えられ、やや時期差は認められるものの、竪穴住居をはじめ、掘立柱建物やピット、土坑、溝などが集中して検出された。弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）を中心とした時期であり、一部前期の遺物も見られる。かなり遺構が密集・重複していることから、時期差が考えられるが、調査時に遺構面を掘り分けることが困難だったため、明確に時期差を確認できたわけではない。遺構の密集している部分のほぼ全域で、サヌカイト製の石器をはじめ、未製品や石材、剥片、チップなどが多く出土しており、特徴的である。竪穴住居の中には、石器の原材と推測される剥片がまとまって出土したのものも見られる。石器製作という集落の一面が見られ、当遺跡を代表するものといえる。

ほぼ調査区全体に遺構がひろがっていることから、ここでは便宜的に調査区毎に分けて遺構別に記述することとする。前節までの調査区西半部の体裁と異なるが、全体をひとつの弥生集落ととらえ、細かい層位の違いや時期差が認められるものも、一括して調査区毎にまとめている。

なお、10・11・19区出土のサヌカイト製石器の整理に際しては、2cm以下の剥片・碎片をチップとした。04-2と07-1調査で出土したサヌカイトは、チップを除いて個体番号を振った結果、合計8400点近くにのぼる。また、チップの重量も含めて計測した結果、合計114kgのサヌカイトが搬入されていることが分かった。

石器の器種の認識は、定型的なものを除く他のものを下記の要領で行った。

スクレイパーは、刃部が連続した剥離で作られている場合と、剥片素材末端の鋭い縁辺を用い微細な剥離を伴うものも含めた。石鏃の未成品については、石鏃よりも大きい剥片素材で周縁から二次加工を施したものも含めた。中型尖頭器は、石鏃よりも大きく、石槍よりも小さいものを呼称し、大きさは6cm以上を目安としている。文中での（ ）内点数は、（ ）前の点数に含めて記述している。

a. 10区（07-1調査1トレンチ）

調査区のほぼ中央を東西に走る道路の北側の西半部である。10区南側と東側の道路拡張部分が、07-1調査1トレンチにあたる。第9a層下面では、調査区のほぼ中央部を南西から北東方向に延びる2100流路が縦断しており、この流路に向かって西側へ遺構面が下がっている。東半部で竪穴住居や掘立柱建物、ピット、土坑などを確認した。分布は東端部に集中しており、居住域の西端の様相を呈している。

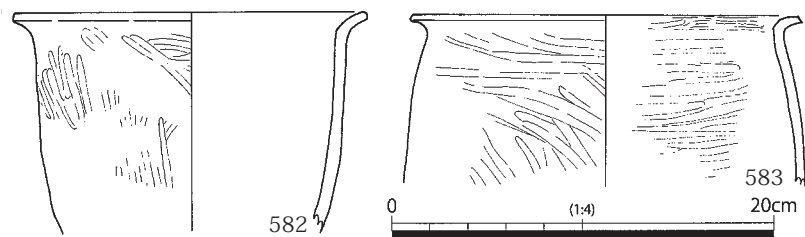
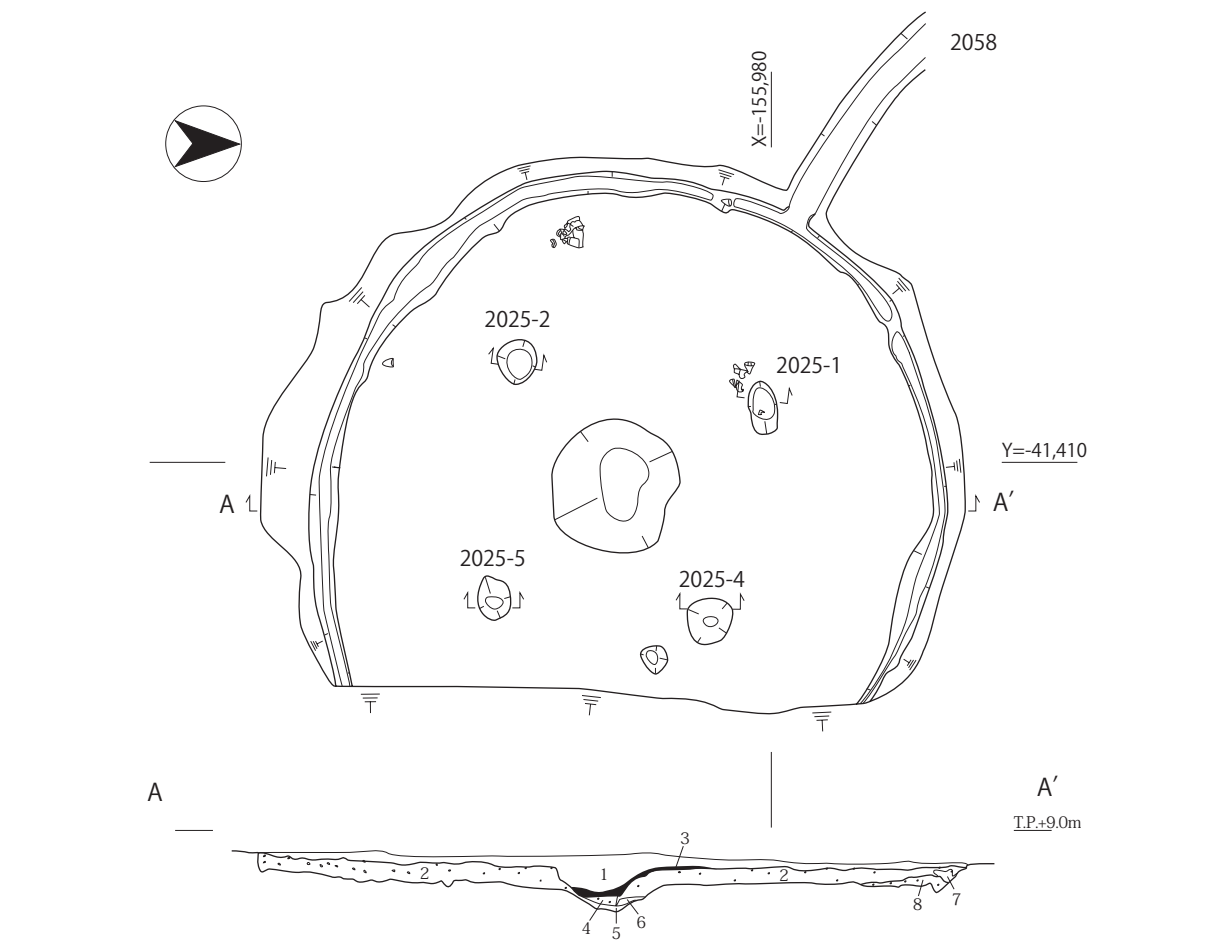


図142 竪穴住居1 出土遺物（土器）



- 1. 黒色2.5Y2/1 シルト～中砂混じり細砂(2期目埋土)
- 2. 黒色5Y2/1 シルト～中砂混じり細砂(1期目埋土)
- 3. 黒色N1.5/0 シルト(炭化物層)
- 4. 黒色N1.5/0 シルト～細砂
- 5. 黒色5Y2/1 シルト～細砂(炭化物多い)
- 6. 灰オリーブ色5/3 シルト(地山偽礫)
- 7. 黒色2.5Y2/1 シルト～細砂(地山偽礫)
- 8. 黒褐色10YR3/1 細砂(地山偽礫を多く含む)

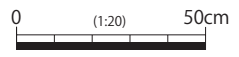
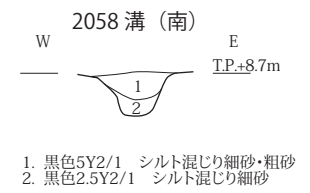
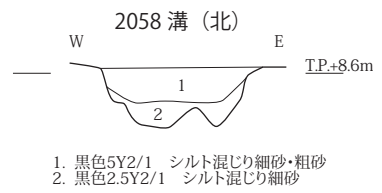
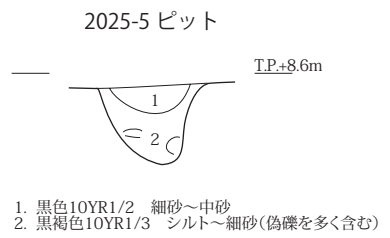
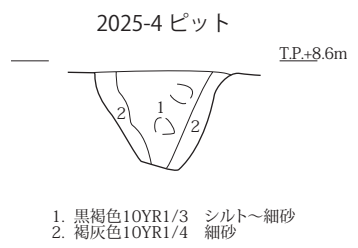
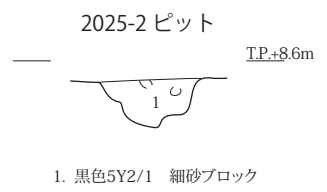
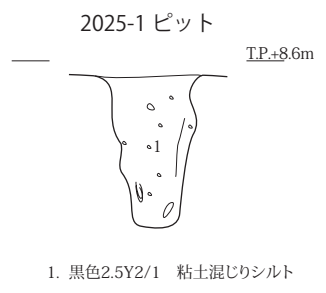
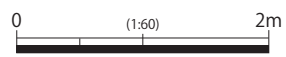
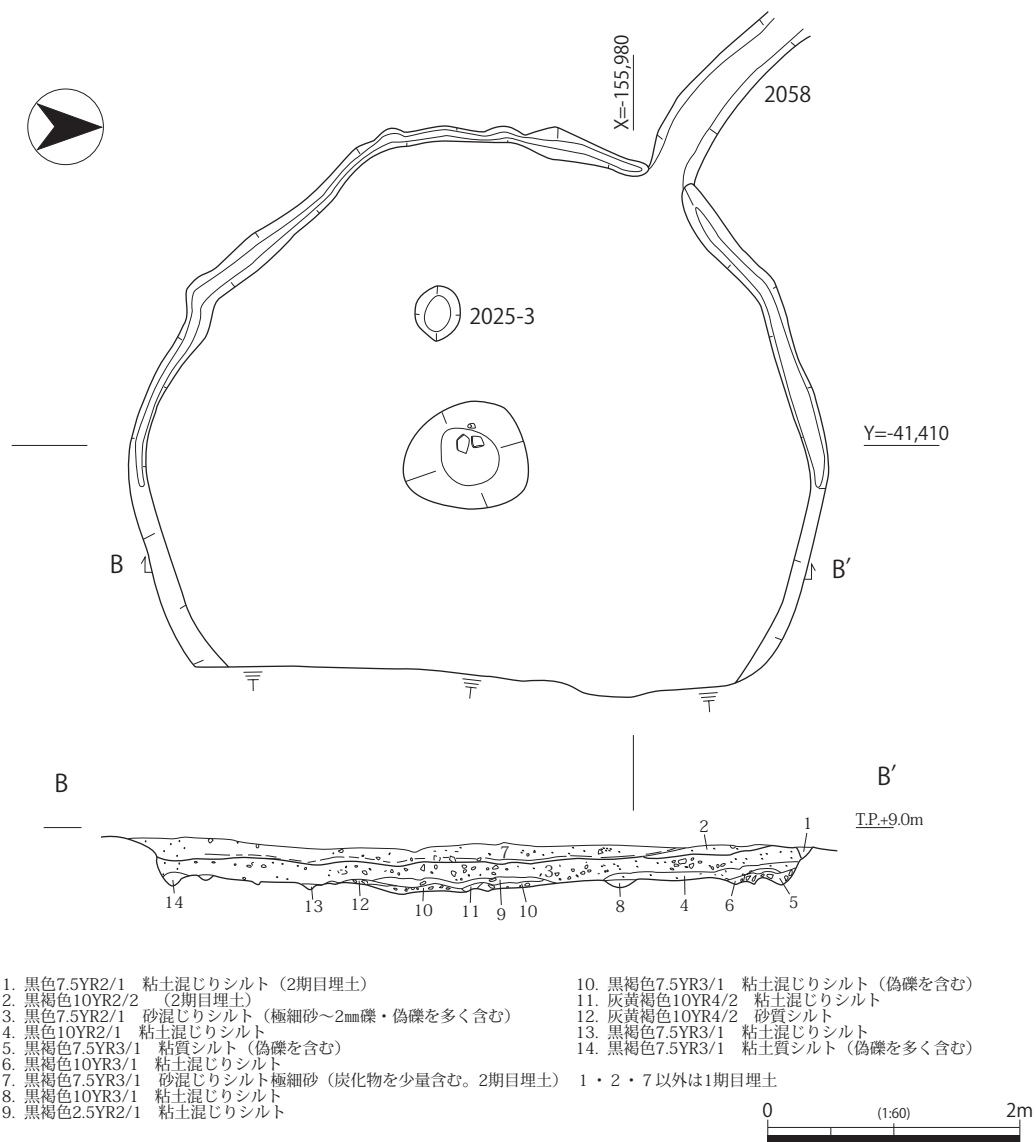


図143 竪穴住居1(1期目) 平・断面図



- | | |
|--|----------------------------------|
| 1. 黒色7.5YR2/1 粘土混じりシルト (2期目埋土) | 10. 黒褐色7.5YR3/1 粘土混じりシルト (偽礫を含む) |
| 2. 黒褐色10YR2/2 (2期目埋土) | 11. 灰黄褐色10YR4/2 粘土混じりシルト |
| 3. 黒色7.5YR2/1 砂混じりシルト (極細砂~2mm礫・偽礫を多く含む) | 12. 灰黄褐色10YR4/2 砂質シルト |
| 4. 黒色10YR2/1 粘土混じりシルト | 13. 黒褐色7.5YR3/1 粘土混じりシルト |
| 5. 黒褐色7.5YR3/1 粘質シルト (偽礫を含む) | 14. 黒褐色7.5YR3/1 粘土質シルト (偽礫を多く含む) |
| 6. 黒褐色10YR3/1 粘土混じりシルト | |
| 7. 黒褐色7.5YR3/1 砂混じりシルト極細砂 (炭化物を少量含む。2期目埋土) | 1・2・7以外は1期目埋土 |
| 8. 黒褐色10YR3/1 粘土混じりシルト | |
| 9. 黒褐色2.5YR2/1 粘土混じりシルト | |

図144 竪穴住居1 (2期目) 平・断面図

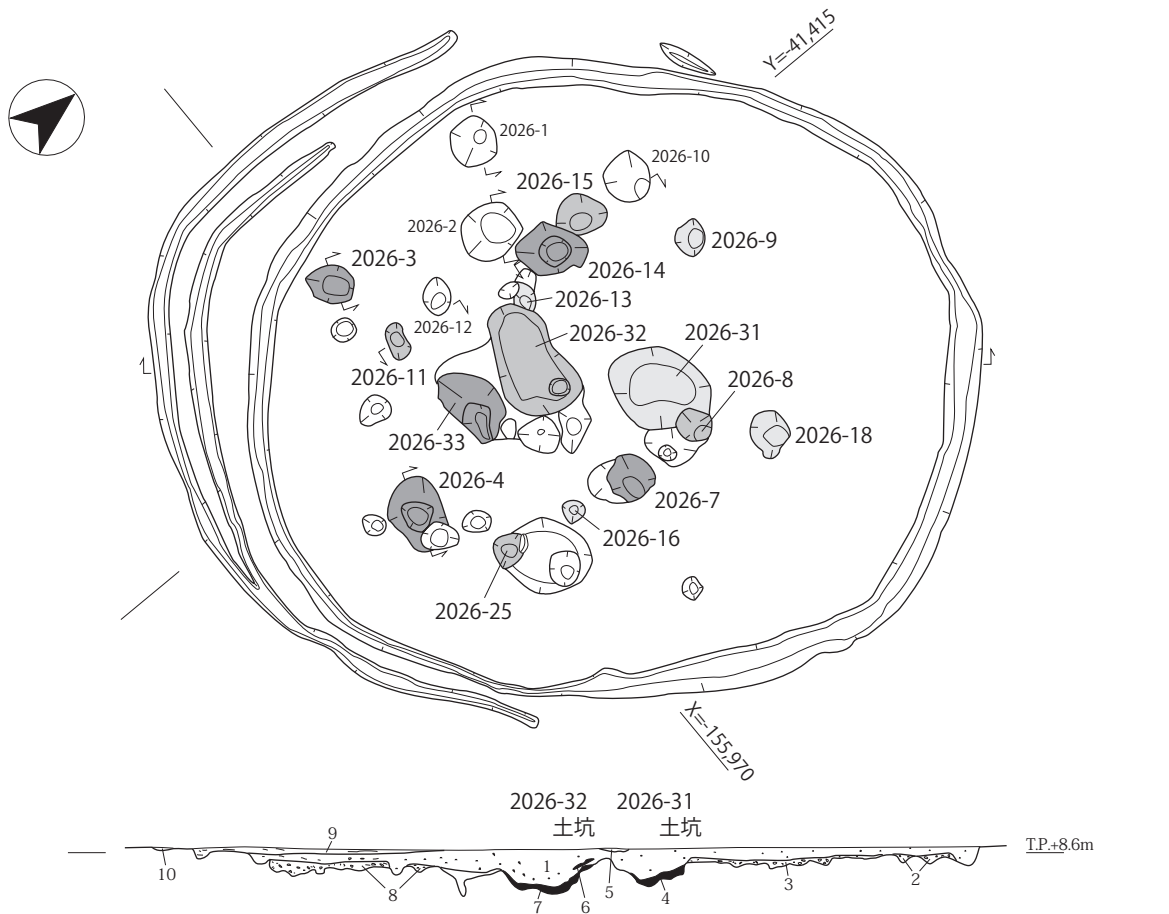
1. 竪穴住居

東半部の中央から東寄りで見出されており、西側にはみられない。

竪穴住居1 (図141~144・146・147、図版23・88・92)

東端部に位置する。南に竪穴住居2が近接し、西側に掘立柱建物1、柱列9・10が位置する。竪穴住居1からは、2058溝が北西方向へ向かって派生する。竪穴住居1は、ちょうど同じ位置で上下に重複しており、時期の古いものを1期目、時期の新しい方を2期目と呼ぶ。2期目を作る際には、1期目の竪穴住居をやや外に拡張して作っており、その際に発生した土で床面を一度、埋没させている。その為、2期目の床面は、1期目の床面よりも10cm程度高くなっている。いずれも上部は削平を受けているため、かなり失われている。

1期目の平面形はほぼ円形を呈している。規模は、検出面で最大径約5m、深さ約10cmを測る。埋土は、黒色中砂混じり細砂~シルトである。貼床は確認されていない。周壁溝は全周し、規模は幅約20cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は、竪穴住居の埋土とほぼ同じである。周壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。



- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. 黒褐色7.5YR3/2 中砂混じりシルト～細砂 | 6. 黒色N2/2 シルト(炭化物を含む) |
| 2. 黒褐色10YR3/1 細砂～中砂 | 7. 黒色2.5Y2/1 シルト(炭化物を含む) |
| 3. 黒色2.5Y2/1 細砂～中砂 | 8. 黒褐色7.5YR3/1 細砂 |
| 4. 黒褐色10YR3/1 シルト(炭化物を含む) | 9. 黒褐色7.5YR3/1 中砂混じりシルト～細砂 |
| 5. 黒褐色10YR3/2 シルト～細砂 | 10. 褐灰色7.5Y4/1 シルト |

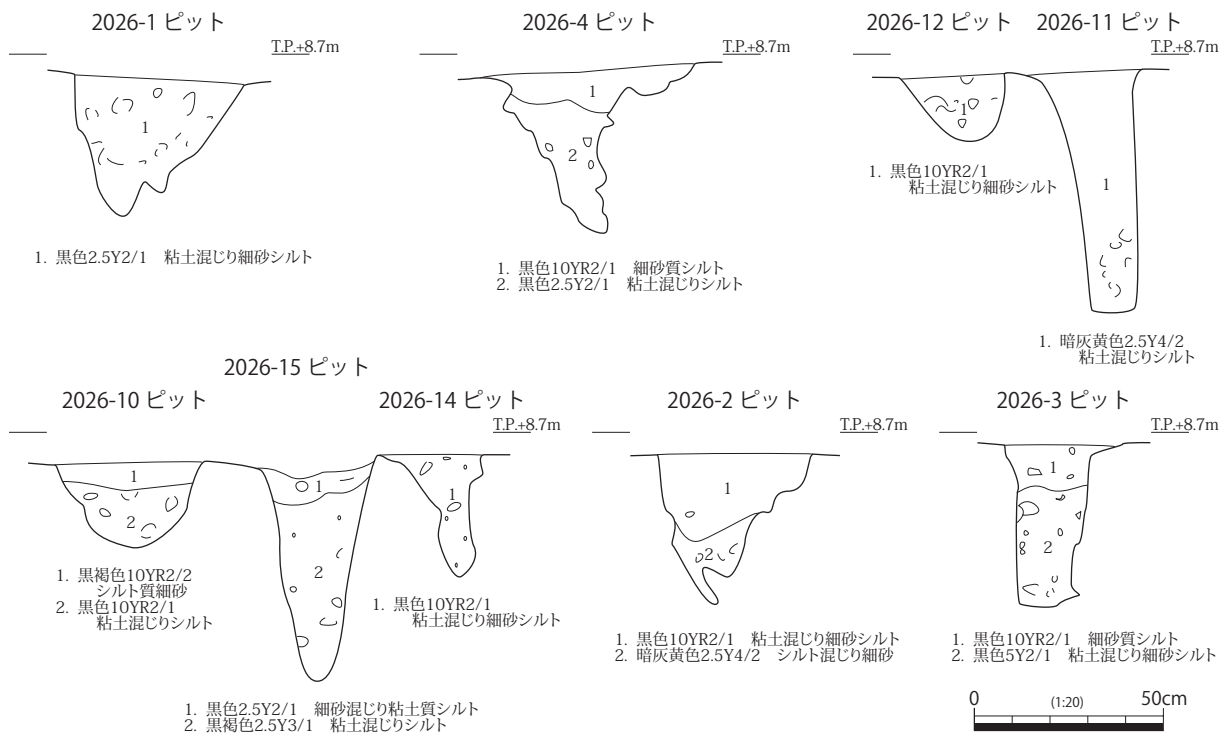


図145 竪穴住居2 平・断面図

1期目は、住居内部でピットがいくつか検出されているが、支柱穴は4基と考えられる。2025-1、2025-2、2025-4、2025-5が該当し、4本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも、平面ほぼ円形または楕円形を呈しており、残存部で径約30cm、深さ約10～40cmを測る。埋土は、黒色粘土混じりシルトである。中央部で、土坑を1基検出している。平面ほぼ円形を呈しており、径約1m、深さ約30cmを測る。下層で炭層が顕著に見られ、炉として使われたものと考えられる。

2期目の平面形もほぼ円形を呈している。規模は、検出面で最大径約5.6m、深さ約20cmを測る。埋土は、黒色シルト～極細砂が主体で、中砂・炭化物を含んでいる。貼床は確認されていない。周壁溝はほぼ全周で検出され、規模は幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面はU字形を呈する。周壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

2期目は、住居内部でピットが1基検出されている。支柱穴については不明である。2025-3ピットの平面形はやや楕円形を呈しており、径約30～40cm、深さ30cmを測る。中央部で土坑が1基検出されている。平面ほぼ円形を呈しており、直径約1m、深さ約30cmを測る。炉として使われたものといえるが、土層断面の観察記録が失われていることから、詳細は不明である。

遺物は、弥生土器が少量とサヌカイトや石器が多数出土した。582は、1期目の埋土から出土した甕で、外面上半を斜め、下半を縦ヘラミガキ調整する。内傾接合。外面スス付着。583は、2期目の中央土坑から出土した甕で、内外面を斜めヘラミガキ調整している。河内型甕であるが、口頸部が強く外反することから、畿内第Ⅱ様式でも時期は下ると考えられる。共に生駒山西麓産の胎土を持つ。

石器では、敲き石5点、石鏃未成品3点、石錐2点、中形尖頭器未成品1点、不明未成品?3点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片16点、楔形石器2点、剥片17点、石核2点、チップ10点が出土している。590は扁平な砂岩礫を用いた敲き石で、長軸一端は欠損しているが、他端部に剥離を伴う打撃痕がある。側面には線条痕が認められる。平面の平坦な部分は研磨されているものか、表面がなめらかである。他の敲き石は砂岩3点、流紋岩1点である。いずれも長軸端部に打撃痕を有するものが多いが、側面に線状痕をあわせもつものもある。584は、他の石鏃に比べ長めの平基式石鏃の未成品で、中央に厚みをもつ。

竪穴住居2 (図141・145～147、図版23・88～90・92・93)

南東端部に位置する。北に竪穴住居1、西に掘立柱建物1、柱列9・10が、南には2027土坑が位置する。竪穴住居の重複が認められ、2度建て替えをおこなっている。断面を検討した結果、周壁溝が周っているものが一番古く1期目、南西にずれていくほど新しくなり、2期目、3期目と呼ぶ。いずれも上部は削平を受けているため、かなり失われている。最も新しい3期目のものは、周壁溝を検出したに過ぎない。他に関連する遺構は検出されていない。

1期目の平面形は楕円形を呈している。規模は、検出面で最大径約5.8m、深さ約10cmを測る。埋土は、黒褐色中砂混じりシルト～細砂が主体で、炭化物を含んでいる。断面では、南西側で加工時形成層を確認した。貼床は確認されていない。周壁溝は全周しており、規模は幅10～20cm、深さ約10cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は竪穴住居とほぼ同じである。周壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットが多く検出されている。そのうち14基が柱穴として復元できた。

1期目の支柱穴は、2026-9・2026-13・2026-16・2026-18ピットで、4本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径20～40cm、深さ約30cmを測る。埋土は、黒

色粘土混じりシルトである。中央部で2026-31土坑を検出している。楕円形を呈しており、残存部で径60～80cm、深さ約30cmを測る。炉として使われたものと考えられ、底部で炭化物層を検出した。

2期目の支柱穴は、2026-8・2026-11・2026-15・2026-25ピットで、4本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約30cm、深さ約50cmを測る。埋土は、黒褐色粘土質シルトである。中央部で2026-32土坑を検出している。楕円形を呈しており、残存部で径50～90cm、深さ約40cmを測る。炉として使われたものと考えられ、底部で炭化物層を検出した。

3期目の支柱穴は、2026-3・2026-4・2026-7・2026-14ピットで、4本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～50cm、深さ20～50cmを測る。埋土は、黒色粘土混じりシルトである。中央部で2026-33土坑を検出している。楕円形を呈しており、残存部で径40～60cm、深さ約20cmを測る。炉として使われたものと考えられ、底部で炭化物層を検出した。

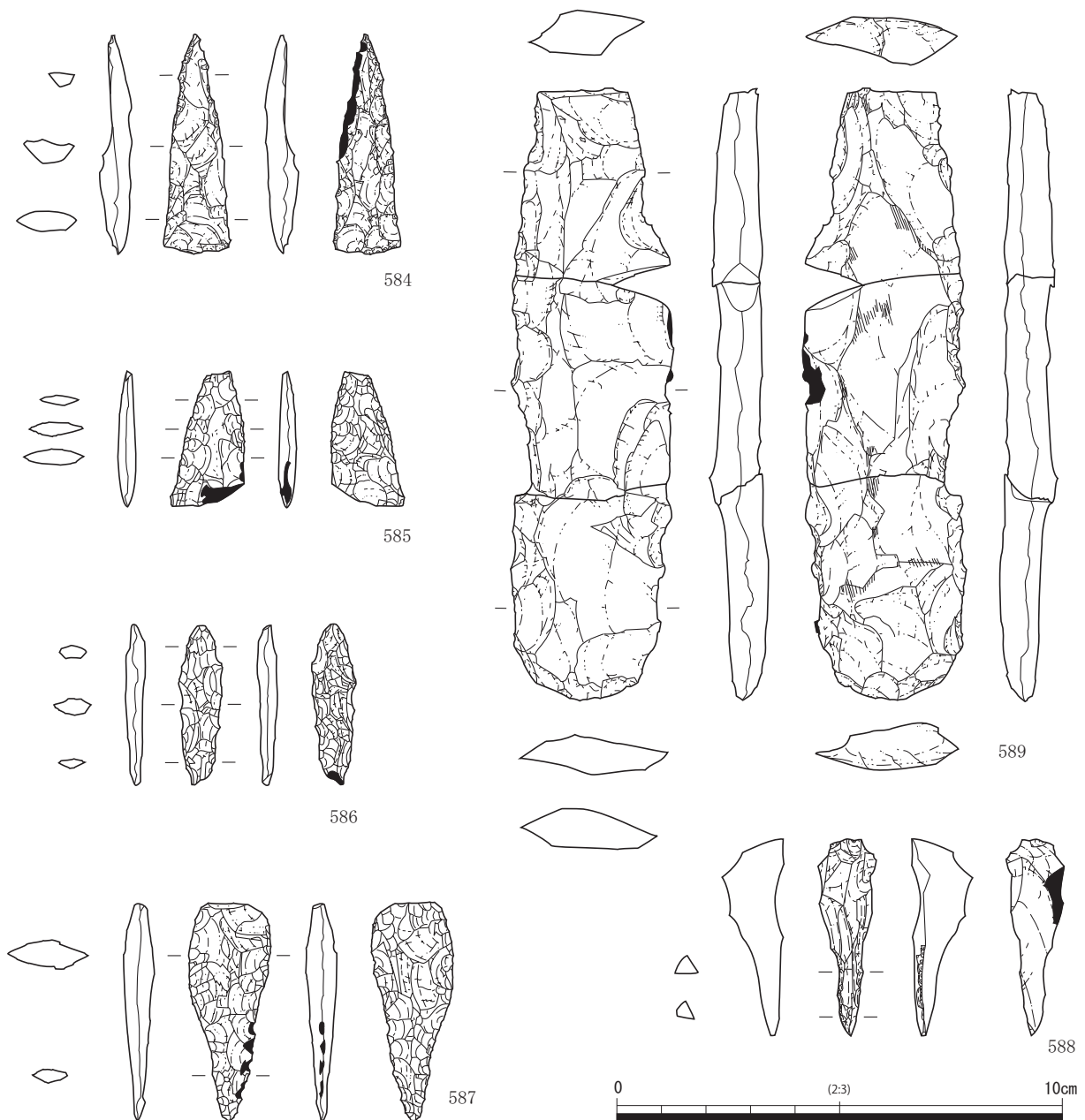


図146 竪穴住居1・2 出土遺物（石器1）

遺物は、埋土中から弥生土器が少量とサヌカイトや石器が多数出土した。

石器では、敲き石4点、石鏃5（未成品2）点、石錐4点、石槍未成品1点、石槍？未成品1点、不明未成品？1点、スクレイパー7点、二次加工のある剥片31点、剥片23点、石核1点、チップ13点が出土している。591・592は、敲き石である。長軸両端に剥離を伴う打撃痕がある。591は、棒状の礫が縦方向に割れ転石したものをを用いており、丸みを帯びた礫面の中央より一端にかけて敲打痕がみられる。上・下端部には剥離を伴う打撃痕がある。592の側面には線状痕があり、角度を変えて用いたものか、線状痕の集中した面が複数認められる。表面には敲打痕が僅かにみられ、裏面は研磨され表面がなめらかで側面寄りに研磨の稜線がある。敲き石の石材はすべて砂岩である。

585は、平基式の石鏃の先端と基部片方の欠損したものである。586～588は石錐で、588は頭部と錐部が明確であるが、他の2点は不明瞭である。587は、石鏃の可能性もある。589は、石槍の製作段階で折れたものと考えられるもので、3片が接合した。589の片面中央突出部分には、狭い範囲で数ヶ所の研磨痕が認められた。

折損後の破片は別のものに転用製作された痕跡は認められない。先端部破片は欠損している。剥片の

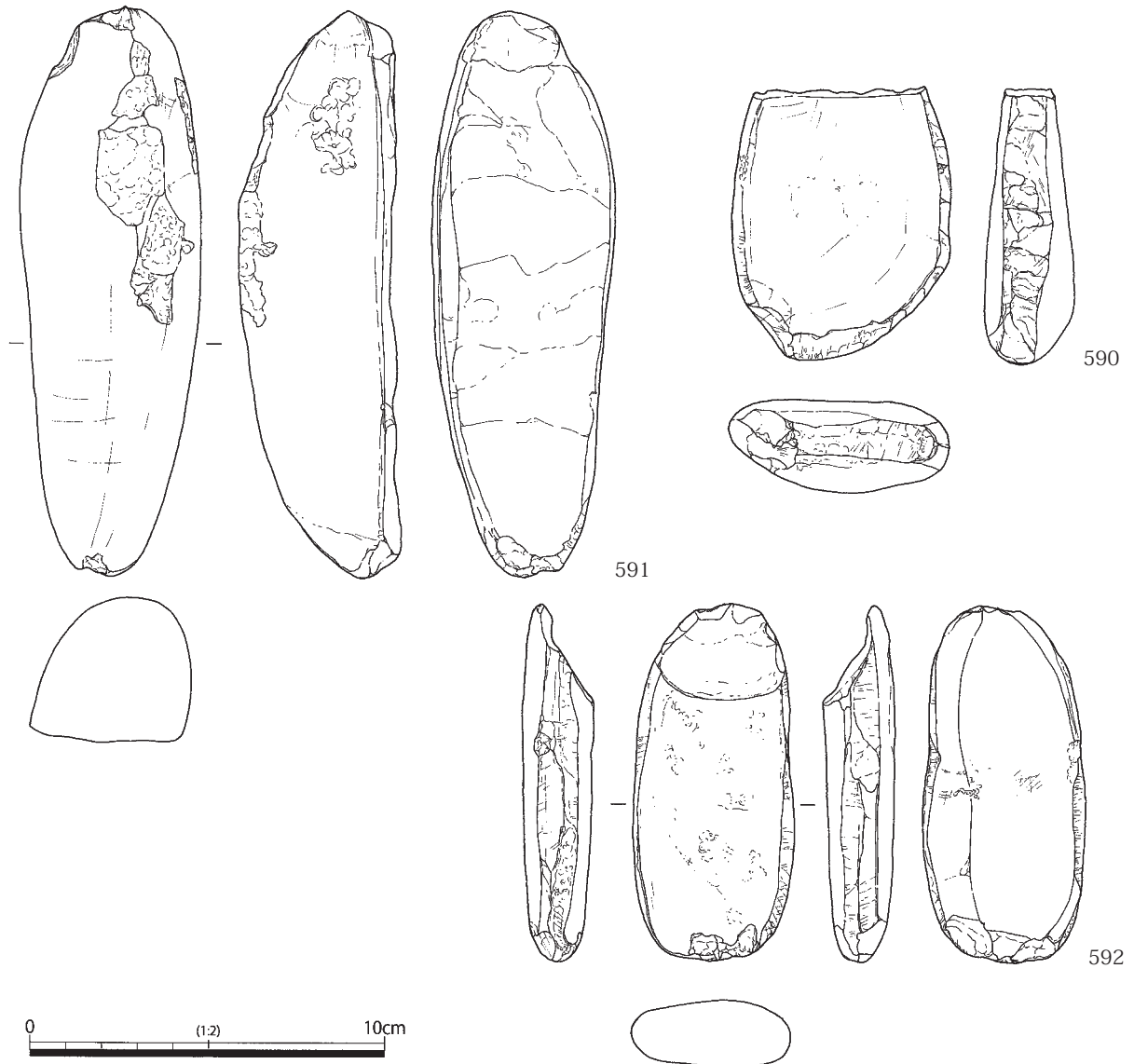


図147 竪穴住居1・2 出土遺物（石器2）

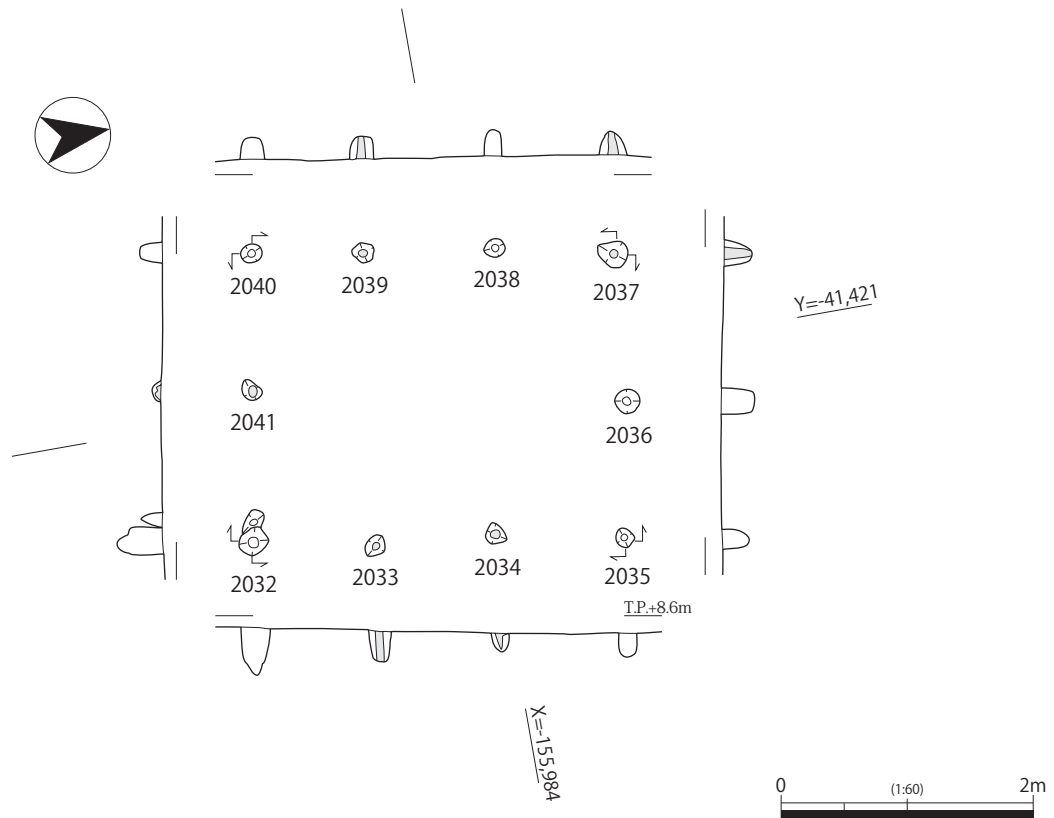


図148 掘立柱建物1 平・断面図

なかにはポイントフレイクが混じっていることから、少なくとも竪穴住居2での石槍製作がなされていたであろう事は想像に難くない。ただ、原礫からの製作かどうかは、これらの資料から推測することは困難である。

2. 掘立柱建物・柱列・ピット群

東半部の中央から東寄りに密集して検出されており、西側にはみられない。

掘立柱建物1 (図141・148)

東半部の中央やや南側で検出された。ほぼ南北棟の建物で、主軸はN-11°-Eを示す。竪穴住居2の西に位置しており、周堤の存在を考慮に入れると、同時存在は考えられない。また、掘立柱建物1の南側にかかるように柱列9があるが、掘立柱建物が建て替えられたものと考えられる。ピットの切り合い関係は、認められなかった。

建物の規模は、梁行2間(北側2.23m、南側2.3m)、桁行3間(西側2.87m、東側2.96m)、床面積は約6.67㎡である。柱間寸法は、南側の梁間が西から1.1m、1.2m、北側が西から1.17m、1.08mである。東側の桁行が南から0.99m、1.05m、1.04m、西側が南から0.89m、1.04m、0.94mである。掘方の平面形は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。検出面で、深さ7~37cmを測り、穴底は円形である。柱痕跡は、2033・2034・2037・2039・2041ピットで認められた。

竪穴住居や土坑などの遺構群がみられる部分と、西側の2100流路の落ち込みの境を画するような位置で、柱列を数条検出した。確実に集落域と流路部分を画しているものとは断言できないが、この柱列を境に遺構の密度が異なっている状況がみられる。

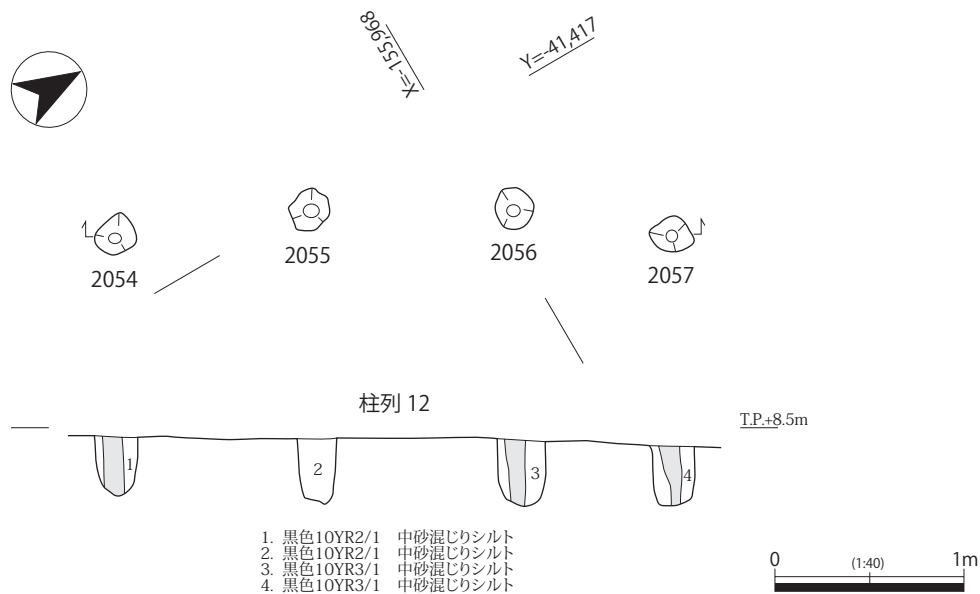
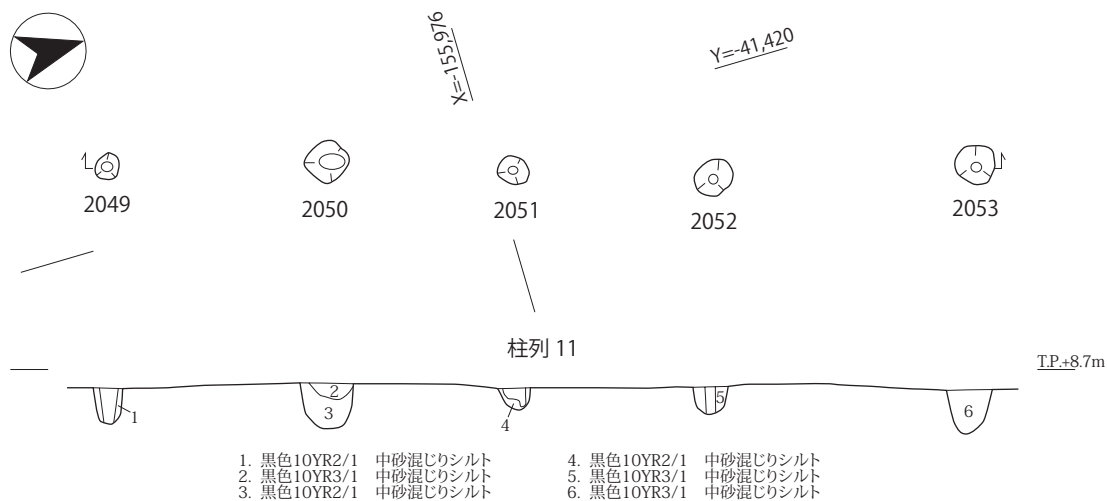
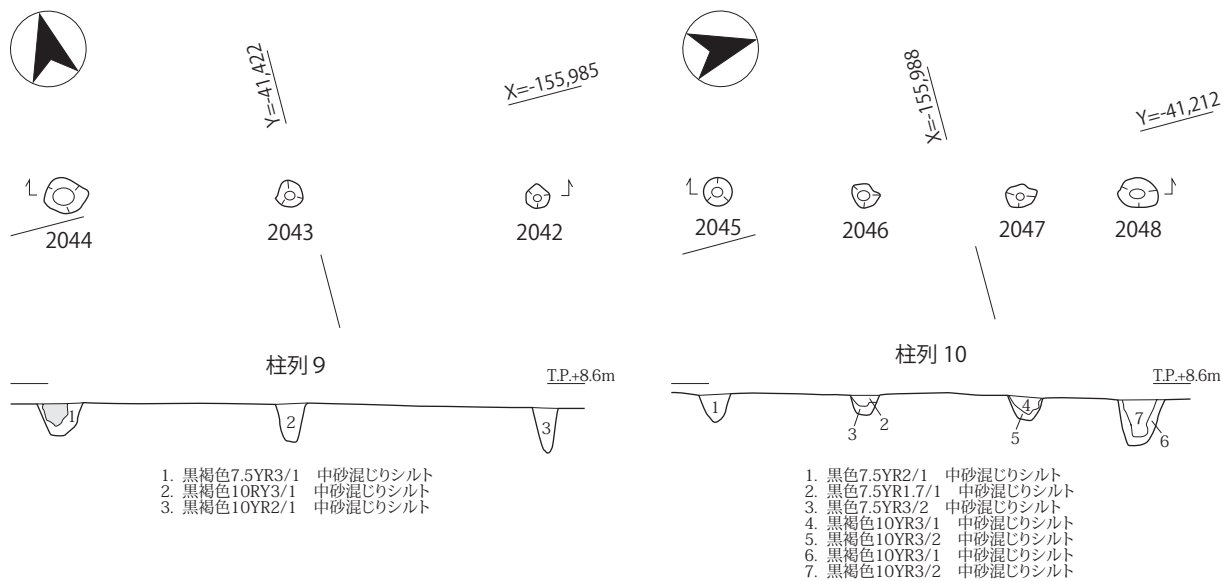


図149 10区柱列 平・断面図

柱列9 (図141・149)

掘立柱建物1の南で検出され、東西方向に3基のピット(2042・2043・2044ピット)が並んだ状況で検出された。掘立柱建物1の南側の柱列とほぼ同じ方向である。また、柱間寸法もほぼ同じであることから、ピットの重複関係はないが、いわゆる柵列と違い、掘立柱建物1の建て替えによるものと考えられる。ただ、建て替えによる他のピットは検出されておらず、前後関係は不明である。埋土は、黒褐色中砂混じりシルトが基本である。

柱列10 (図141・149)

東半部の中央南寄りで検出された。掘立柱建物1の南側に位置しており、南北方向に4基のピット(2045・2046・2047・2048ピット)が並んだ状況で検出された。埋土は、黒色から黒褐色中砂混じりシルトが基本である。柱列9との関係はわからないが、位置から先に述べたような建て替えの掘立柱建物を構成していることも考えられる。あるいは、竪穴住居2の西側に位置しており、柵列として集落を画する位置にあたる可能性もあるため、性格を特定することはできない。

柱列11 (図141・149)

東半部のほぼ中央で検出された。南北方向に5基のピット(2049・2050・2051・2052・2053ピット)が並んだ状況で検出された。埋土は、黒色中砂混じりシルトが基本である。一部、柱根の痕跡が確認できるものもみられる。西側の2100流路に向かって下がる落ち込みの境に沿った位置である。意図的にこの位置に並べて設置した柵列と考えることができ、集落を画するものといえる。

柱列12 (図141・149)

東半部のほぼ中央北寄りで検出された。ほぼ南北方向に4基のピット(2054・2055・2056・2057ピット)が並んだ状況で検出された。埋土は、黒色中砂混じりシルトが基本である。一部、柱根の痕跡が確認できるものもみられる。柱列11と同様に、西側の2100流路に向かって下がる落ち込みの境に沿った位置である。柱列11からの一連の柵列の可能性が高いが、両者の間に2029土坑が位置しており、さらに竪穴住居1に伴う2058溝もこの位置を通る。集落から2100流路に向かう出入口のような存在であったことも考えられる。

柱列に関しては、柵列のように連なる状況で検出されていないことから、断定することはむずかしい。ただ、10区東半部で検出された柱列は、断片的であるが、西側の2100流路に向かって下がる落ち込みの境に沿って並んでいることから、柵列の存在の可能性は高いものと考えられる。

4046ピット (図141)

北東端部の第9層上面で検出された。規模は、径0.32m、深さ0.14mで、黒褐色粗～細砂混じり砂質シルトを埋土とする。

4050ピット (図141)

東端部やや南寄りの第9層上面で検出された。東端のみを検出し、残存長0.5mを測る。

4049ピット (図141)

東端部ほぼ中央の第9層上面で検出された。東西は切られているが、南北1m、深さ0.4mを測る。弥生土器の底部が出土している。

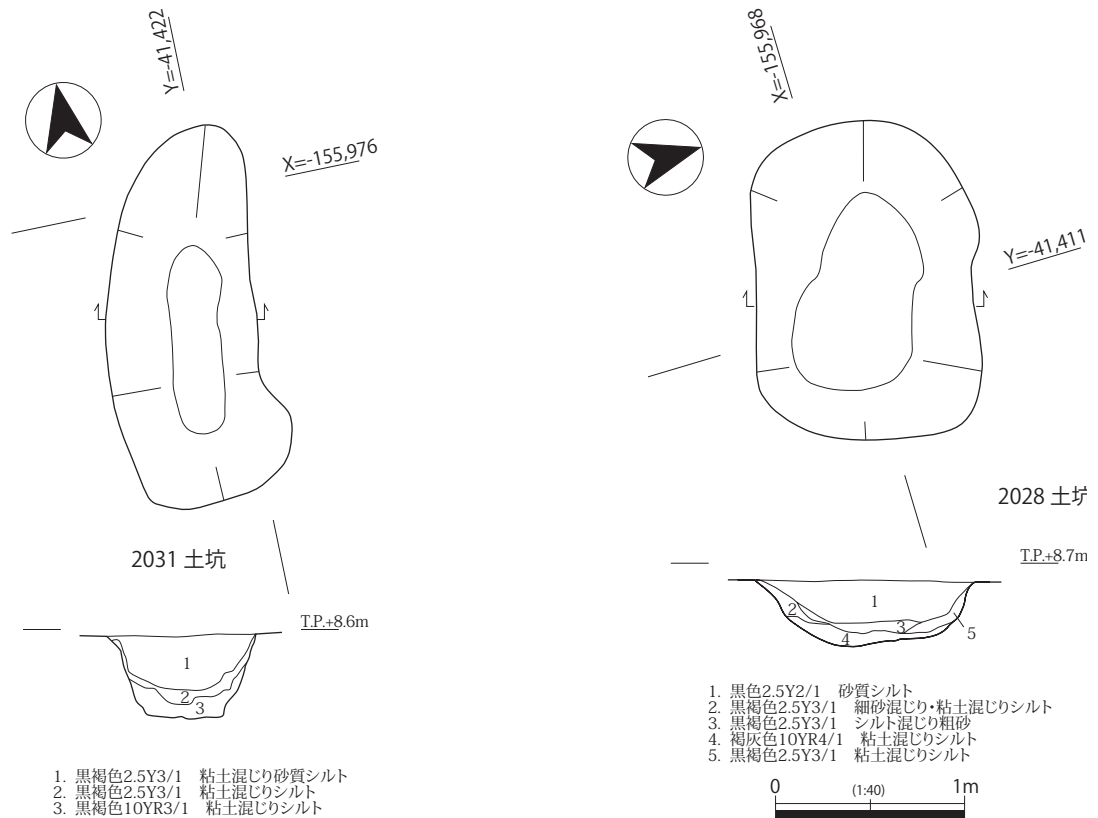


図150 2028・2031土坑 平・断面図

4051ピット (図141)

南西端部に位置する。規模は、径0.13m、深さ0.1mの小さなピットで、黄灰色細砂混じり粘質シルトを埋土とする。

3. 土坑

土坑も竪穴住居や掘立柱建物などの分布と同様に、東端部のみで検出された。

2028土坑 (図141・150・152)

東端部やや北寄り検出された。東西方向が長い隅丸方形を呈しており、長辺約1.7m、短辺約1.1m、深さ0.4mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層は黒色砂質シルト、下層は黒褐色粘土混じりシルトが基本である。

593は甕で、口縁部が短く外反するタイプである。外面縦ハケ後、斜めヘラミガキ、内面をヘラミガキ調整する。外面全体にススが付着している。

2029土坑 (図141・152)

東半部のほぼ中央北寄りで検出された。柱列11と12の間に位置しており、柱列を切るかたちになっている。ただ、重複関係は不明であるため、両者の関係はわからない。平面形は不定形で、長軸約2.7m、短軸約1.5m、深さ約0.4mを測る。埋土は、黒褐色粘土混じりシルト質細砂である。

594～596は甕である。594は小片で、ヘラミガキが僅かに残り、外面と口縁部内面にススが付着する。595は小型甕で、摩滅が著しい。生駒山西麓産の胎土を持つ。596は、外面を斜めの小刻みなハケ後一部ヘラミガキ。内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ。外傾接合。外面にススが付着する。597・598は甕の底部で、表面は剥離する。

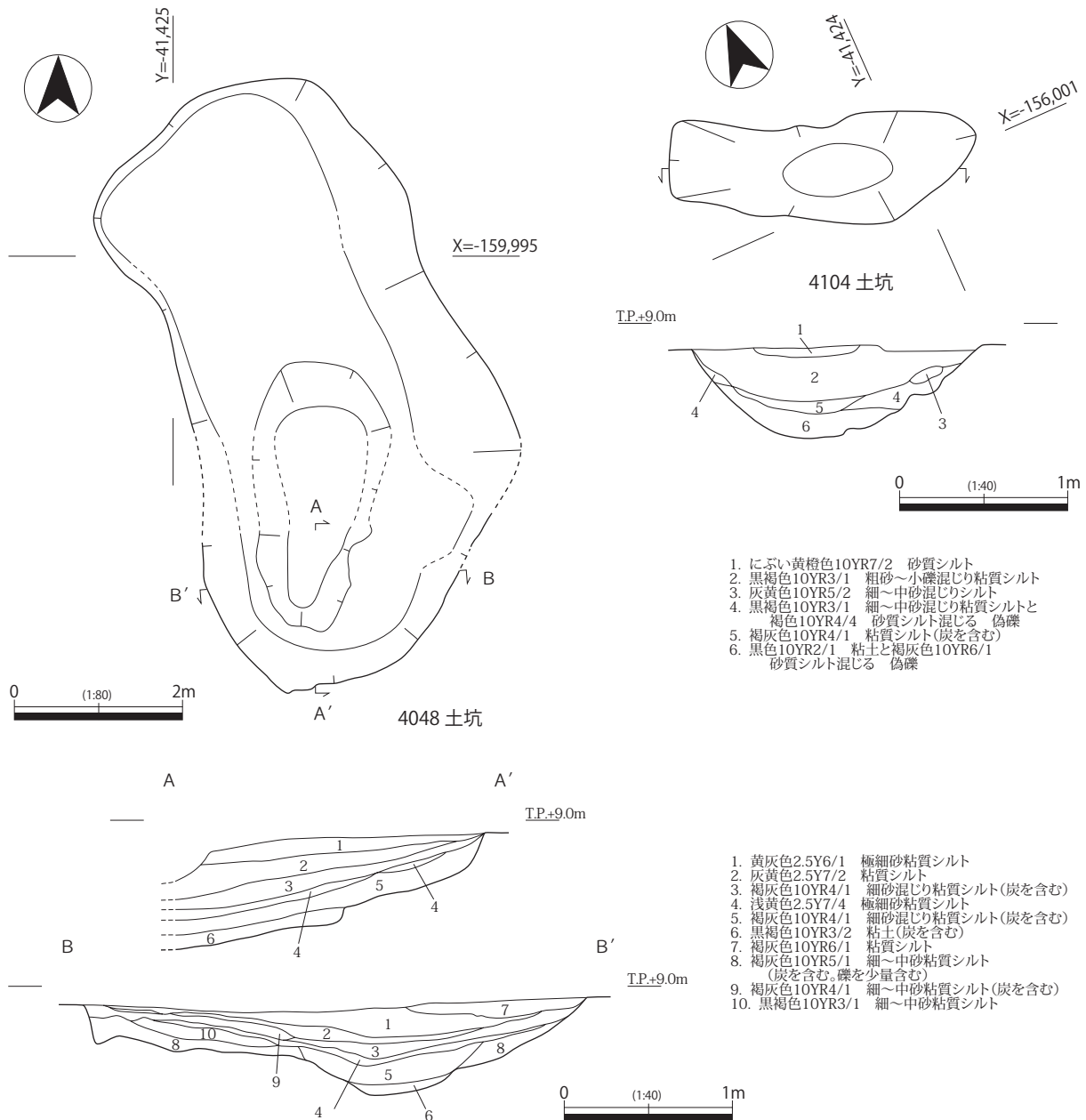


図151 4048・4104土坑 平・断面図

2031土坑 (図141・150・152、図版92)

東半部のほぼ中央で検出された。柱列11の西側に位置する。平面形は南北に長く、長軸約2.0m、短軸約0.8m、深さ約0.8mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層は黒褐色粘土混じり砂質シルト、下層は黒褐色粘土混じりシルトである。

599は無頸壺で、櫛描直線文(6条/1.2cm)を施し、文様間に横へらミガキを加える。内面はへらミガキが残る。

石器では、扁平片刃石斧1点、スクレイパー2点、楔形石器1点、剥片2点が出土している。600は砂岩製の扁平片刃石斧で、三宅西遺跡出土扁平片刃石斧2点のうちの1点である。基部・刃部片方の角が欠損しており、基部上端面は斜めに研磨されている。太型蛤刃石斧の破片等を転用・再加工した可能性が考えられる。刃面の裏面にあたる1側面角は面取りされている。

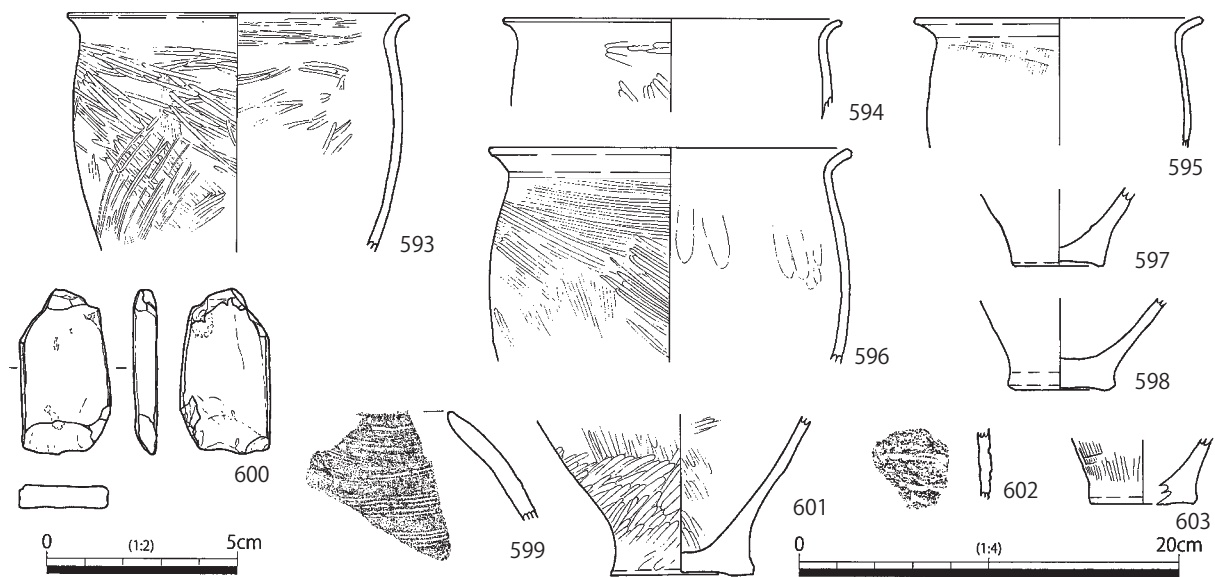


図152 2028・2029・2031・4047・4104土坑 出土遺物

2027土坑 (図141)

南東端部で検出された。平面は円形を呈しており、径約1.3m、深さ約0.3mを測る。埋土は、4層ほどに分かれるが、基本は黒色シルトである。円形であるが、深くならないことや堆積状況から、井戸にはならないものと考えられる。

4104土坑 (図141・151・152、図版24・84)

南東端部に位置する。細長い不整形円形を呈し、長さ1.84m、幅0.5m、深さ0.55mを測る。断面は船底形を呈し、埋土下半部は、偽礫が混じる黒色粘土と炭粒を含む褐灰色シルト、上半部は黒褐色小礫・粗砂混粘質シルトである。上半部から弥生土器の底部、混入と考えられる縄文土器片を出土する。

601は甕の底部で、内外面ヘラミガキ調整する。内面に炭化物付着。生駒山西麓産の胎土を持つ。602は沈線と縄文が認められ、縁帯文土器の一例と考えられる。縄文後期の北白川上層3式期から元住吉山I式の所産であろう。

石器では、二次加工のある剥片2点、剥片10点が出土している。

4112土坑 (図141、図版24)

南東端部に位置する。4104土坑の東側から検出された浅い土坑である。平面楕円形で、長さ1.15m、幅0.7m、深さ5cmである。

4108土坑 (図141)

南東端部に位置する。4104土坑の東側から検出された浅い土坑である。平面楕円形で、長さ0.7m、幅0.4m、深さ8cmを測る。埋土は、黒褐色中・細砂混じり粘質シルトで、底面に炭層が広がる。

4048土坑 (図141・151)

東半部の中央南寄りに位置する。第9層上面で検出された。不定形で全長7.2m、幅3.3m、深さ0.65mを測る。断面は皿状を呈し、2段に下がる。最下部は黒褐色粘土で炭粒、サヌカイトの剥片を含む。中部には薄く浅黄色極細砂混粘質シルトがあり、上部は褐灰～黄灰色粘質シルトがレンズ状に堆積する。弥生土器が出土した。

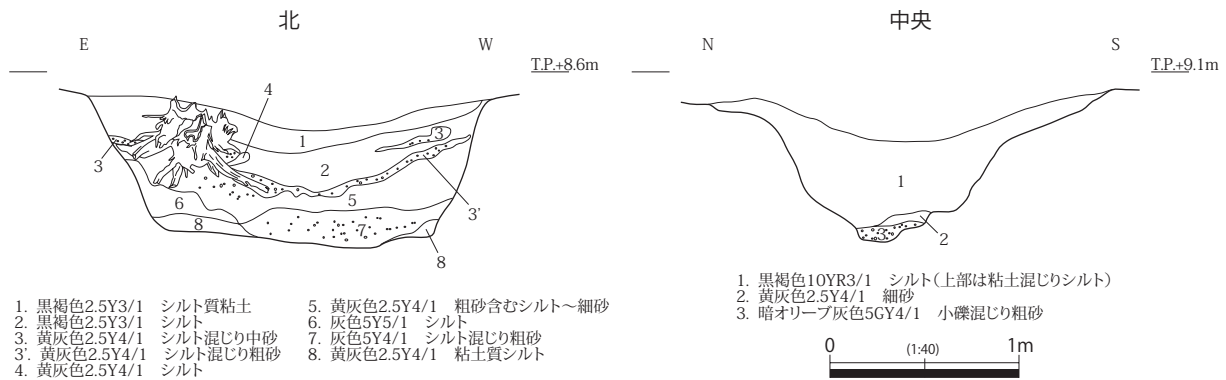


図153 2100流路 断面図

4047土坑 (図141・152)

東端部ほぼ中央に位置する。第9層上面で検出された。東半のみを検出し、長さ0.53m、深さ0.13m、埋土は黄灰色粗～細砂混じりシルトで、弥生中期の土器・炭を含む。

603は、外面ハケを施した甕の底部である。

4. 溝・流路

10区では、弥生時代に単独で存在する溝は検出されていない。前にも述べたが、調査区のほぼ中央部を比較的規模の大きな2100流路が縦断しており、この流路に向かって西側へ遺構面が下がっている。

2100流路 (図141・153～155、図版22・87・89)

調査区のほぼ中央部を、南西から北東方向に直線的に延びる流路である。幅は、南部で約2mであるが、中央部から北部にかけて幅が広がっており、約12mまで広がる。この部分が水溜りのような状況であったことがわかる。粘土質の堆積がみられ、土器などの遺物もこの部分でまとまって出土した。この

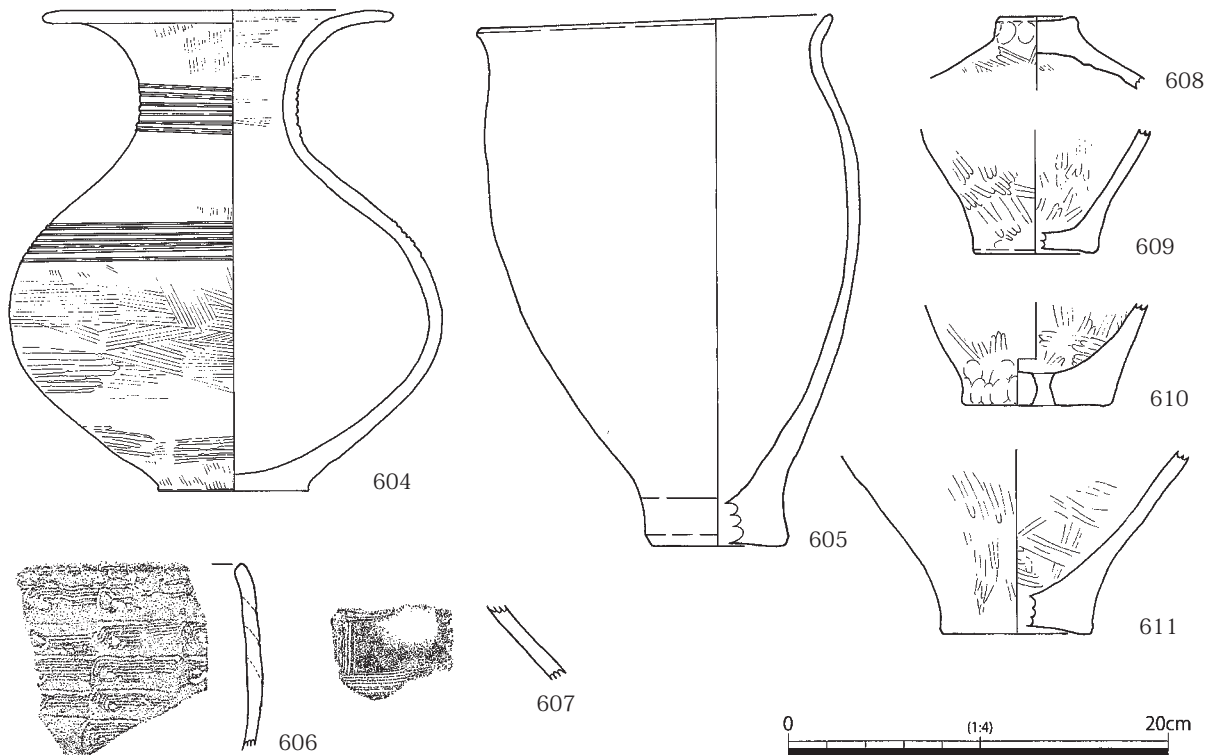


図154 2100流路 出土遺物 (土器)

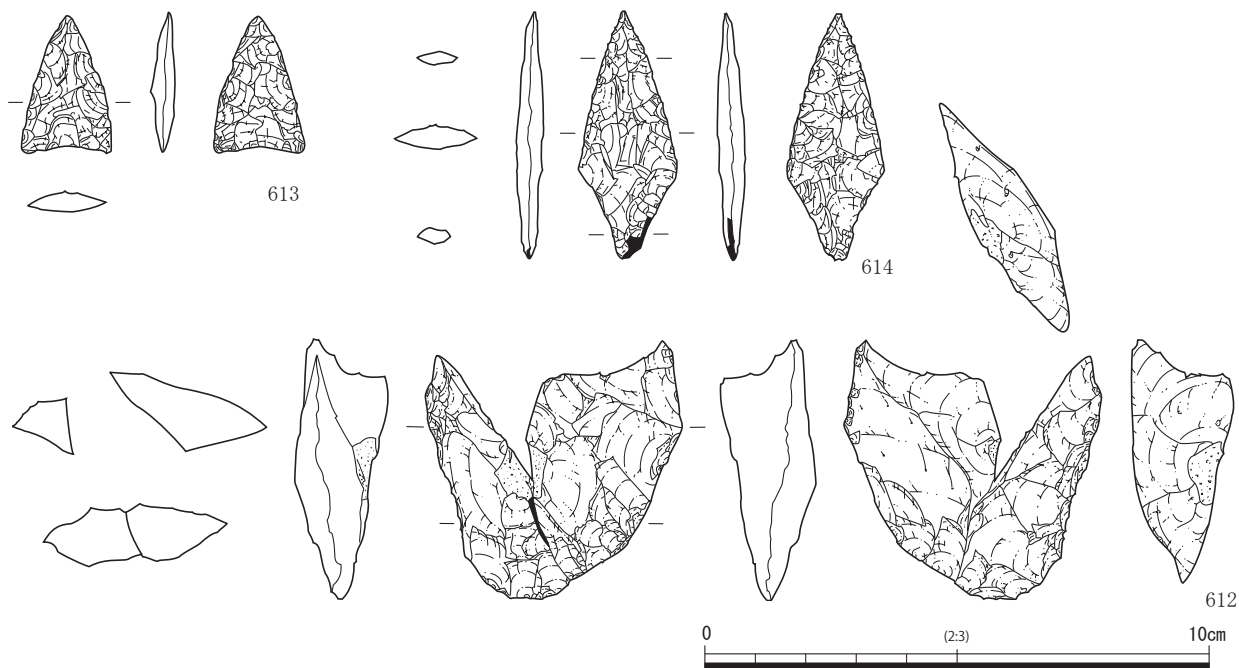


図155 2100流路 出土遺物（石器）

流路に向かって西側へ遺構面が下がっている。自然流路であるが、南部が直線的であることから、人為的に一部加工された可能性も考えられる。

604は広口壺で、頸部に6条、体部上半に7条の沈線を巡らす。河内1-3様式である。605は丈高の甕で、口頸部は緩やかに外反し、分厚い底部を持つ。剥離のため調整不明である。606は鉢で、口縁部はやや内湾し、端部を丸く収める。櫛描直線文（9条/1.4cm）を5帯以上巡らし、その上から縦一列に弧状文を加える。内面へラミガキ調整する。外傾接合。生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。607は壺の体部で、櫛描直線文（9条？/1.3cm）を縦横方向に施し、区画内をへらミガキする。内面はナデ調整である。608は蓋で、外面へらミガキ調整する。610は、焼成前に一穴を穿つ甕の底部である。609・611は甕の底部で、611は外傾接合。609・610は、生駒山西麓産の胎土を持つ。

この遺構からはヤナギの流木が出土した。AMS年代測定の結果、弥生時代前期を示す値が得られている。

石器では、石鏃未成品？1点、中型尖頭器未成品？1点、接合資料の石槍未成品？1点が出土している。612は、2片が接合したもので、上部は中央部で大きく割れて欠損しているが、両側辺から下部にかけての縁辺は、両面側へ剥離調整が施されている。これは剥離作業の際、中央部の約1cm近い大きさの鉤物の所で割れを生じたようである。石槍か何か大きめの石器を製作する段階で割れたものと思われる。

第7e層出土遺物（図155～157、図版88・92・93）

第7e層出土土器としては、615がある。口縁下端部に押捺突帯を巡らした広口壺で、剥離のため調整不明。生駒山西麓産系の胎土である。

ここでの石器の記述に関しては、10区における第7e層出土品だけではなく、第7層より上位層から出土した混入品も合わせて報告する。

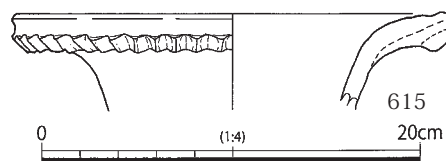


図156 10区第7e層 出土遺物（土器）

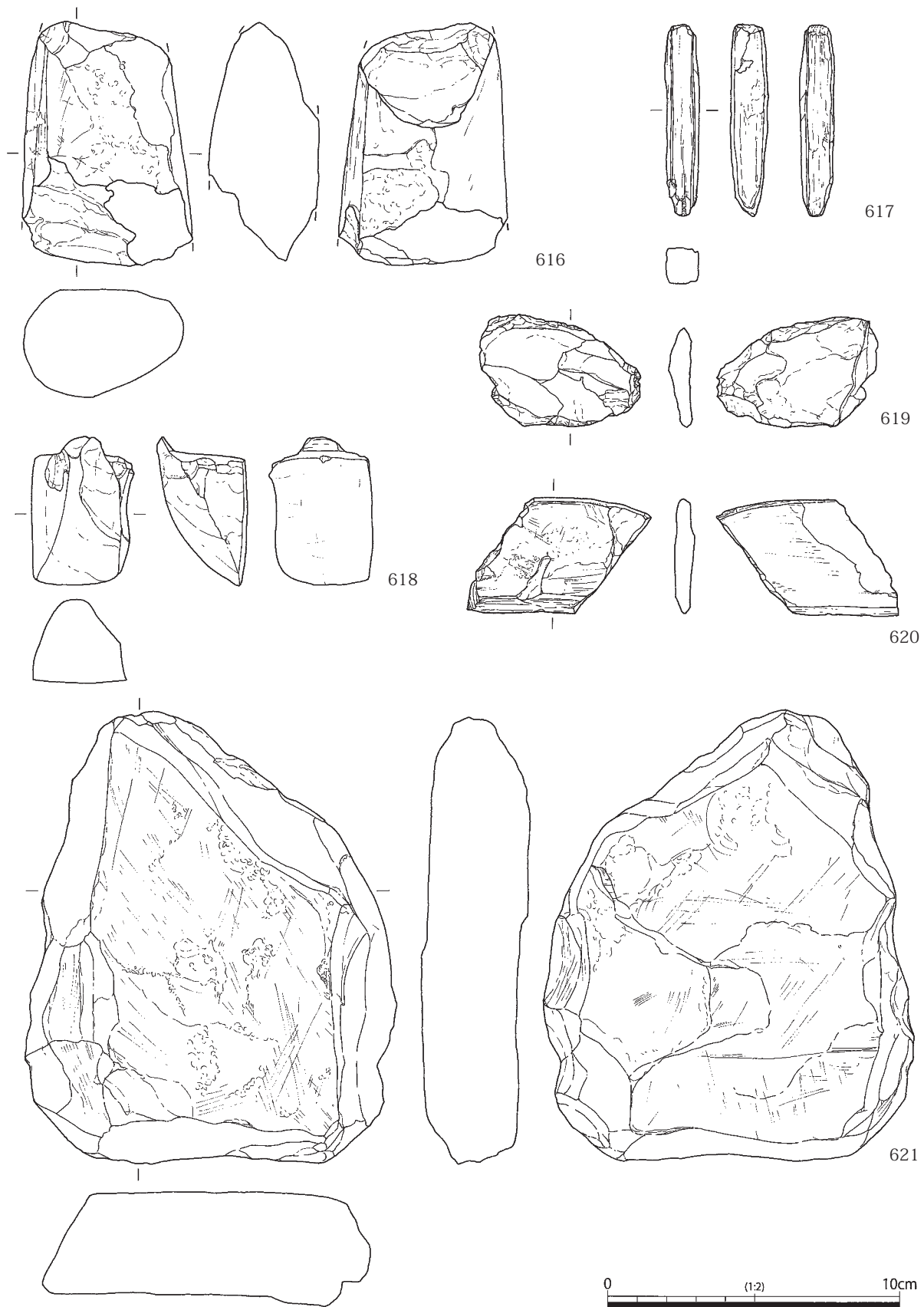


图157 10区包含層 出土遺物 (石器)

第7e層からは、柱状片刃石斧2点、石庖丁2点、敲き石4点、台石1点、石鏃18（未成品？12）点、石錐3（未成品1）点、中型尖頭器未成品9点、石槍未成品1点、スクレイパー13（？3）点、楔形石器3点、二次加工のある剥片71点、剥片50点、石核7点、チップ11点が出土している。618は、柱状片刃石斧の刃部破片であり、被熱し表面が荒れている。刃部角は、片方が円みをもち、破損後再研磨されたものと思われる。石材は、安山岩？である。617は完形の小型柱状片刃石斧で、かなり風化し片側面は剥離している。石庖丁は、620が直線刃の片刃の中央部破片である。619は、剥離成形段階の未成品で端部が残る。背部には線状打撃痕がある。石庖丁は、2点ともに結晶片岩製である。621は、板状の極細粒砂岩製であり、平らな両面には研磨痕、打撃痕が認められることから台石としたが、砥石にも使用されたものと思われる。敲き石は図化していないが、4点とも砂岩製である。末端部、平面に敲打痕がみられるものが各1点、両側面に線状打撃痕を有するものが2点ある。

613は、基部底辺が僅かに窪むが、平基式の範疇に入る石鏃である。614は、茎の突出した突基有茎式石鏃である。逆刺が発達せず、全体形が尖基式に近い形状をなす。

第7層からは、サヌカイト製の石鏃5（未成品3）点、石錐2点、スクレイパー5点、不明未成品2点、二次加工のある剥片27点、調整石器7点、剥片21点、石核4点、チップ4点が出土した。

第6層からは、混入品であるが、太型蛤刃石斧が1点、サヌカイト製石器が石鏃未成品1点、中形尖頭器未成品1点、二次加工のある剥片、剥片、石核など16点出土した。太型蛤刃石斧は、砂岩製である。616の基部、刃部は欠損しており、上下端ともに剥離を伴う打撃痕があり、一見もろいようであるが、敲き石に転用され、エッジは摩滅している。

b. 04-1区（図158、図版25）

調査区のほぼ中央を東西に走る道路の北側の中央部である。10区と11区の間で先行調査した部分である。

調査区は現状地盤で、東側の水田区画よりも数10cmの段を有して低くなっている。戦前の航空写真などを見ると、大部分は古い南北方向に流れる流路に起源すると思われる溜池状の凹地に該当し、調査区の北側で行われた松原市教育委員会による試掘調査でも、同じ流路の水成層が見つかった。また、2004年度に行った確認調査でも、今回の調査範囲は流路で削られ、層序の不整合が見られた。

北東部と南端部以外は流路内に位置し、古い地層の遺存する可能性は低いと考えられたことから、①流路内で古い包含層が遺存している部分があるか、②この流路はどの時代に機能していたか、③流路埋没後の土地利用はどのようであったか、に観点を置いて調査した。その結果、流路外である南端部で、弥生時代中期の柱穴・土坑や中世の南北堤状遺構が検出された。ここでは、弥生時代の遺構について述べる。いずれも南端部で見つかった。

1006掘立柱建物：径30cmほどの柱穴4基からなる、1.2m四方の1間×1間の建物である。狭い調査区での検出であるため、広がり是不明である。柱穴1基から、弥生時代中期の甕・壺破片が出土した。

1008土坑：北側を流路で削られているため、全容は不明であるが、楕円形を呈しているものと考えられる。短軸が約0.8mの土坑で、弥生土器片が出土した。このほかには、遺物は見つからなかったものの、平面形は不定形で、長軸が2mほどの1013・1014土坑が検出された。

調査区の大半が、中世流路内に位置したことから、遺構の検出は少なかった。しかし、南端部で弥生時代の遺構がまとまって検出され、その周辺の包含層からは、弥生土器やサヌカイト片が集中して出土

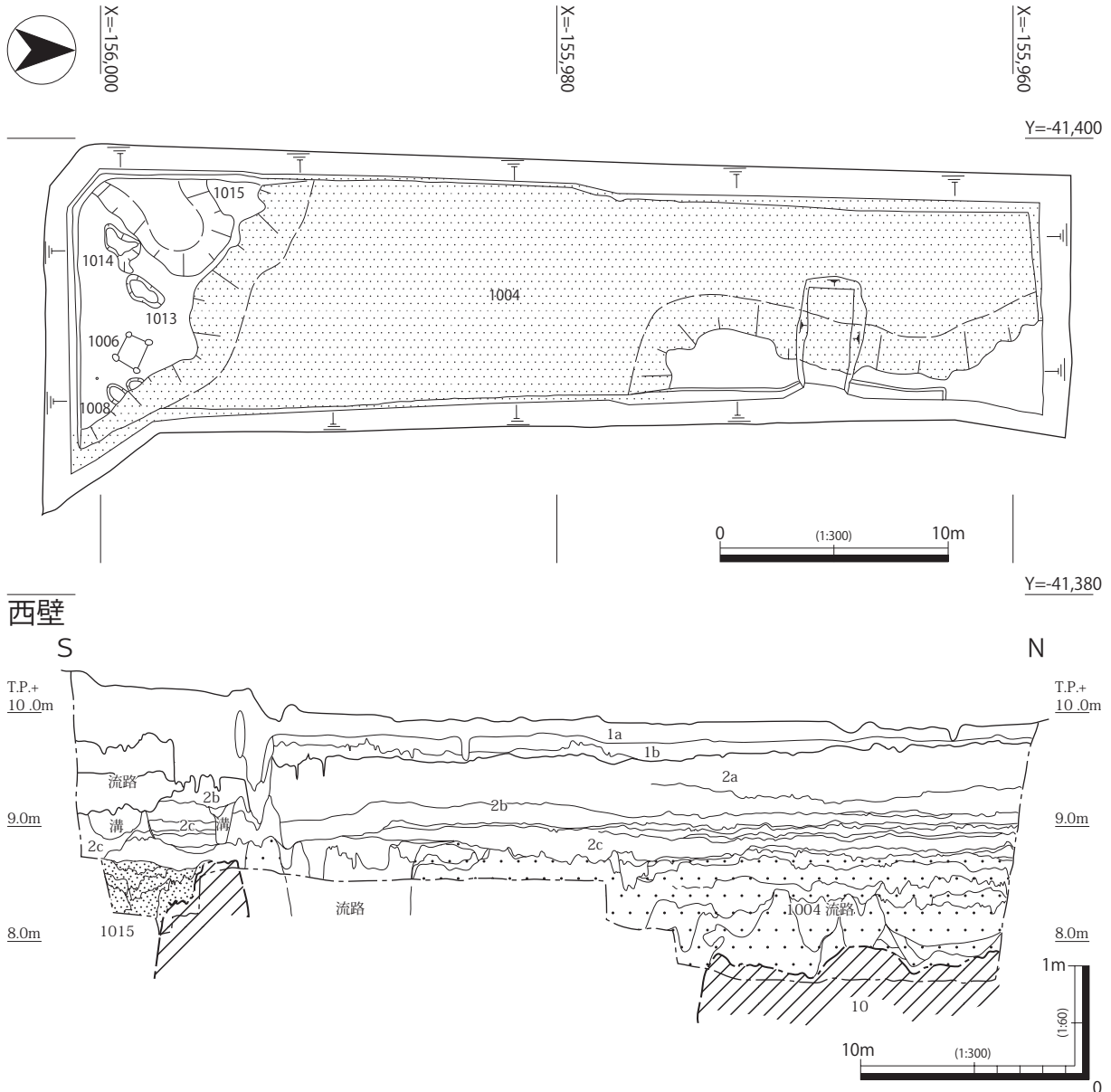


図158 04-1区 弥生時代 遺構平面図・西壁断面図

した。なお、調査区の大半を占める1004流路は、南から北方向に流れる2410流路の続きであり、完掘はできなかったが、他の調査区で中世の遺物が出土している。

c. 11区 (07-1調査3トレンチ)

調査区のほぼ中央を東西に走る道路の北側の東半部である。南側と東側の道路拡張部分が、07-1調査3トレンチにあたる。西側の10区からの遺構の集中が続いており、西半部で竪穴住居や掘立柱建物、土坑などがまとまって検出された。

弥生時代以前と考えられる、第8層上面では、竪穴住居3の周辺で、石鏃や剥片サヌカイトチップなどが出土している。

10区と同様に、第7e層下面でまとまって遺構が検出された。かなり遺構の重複が著しく、建物の建て替えなども頻繁であったことがうかがわれる。竪穴住居や掘立柱建物、ピット、土坑などが多く検出されている。

11区



Y=41,380

Y=41,360

Y=41,340

Y=41,320

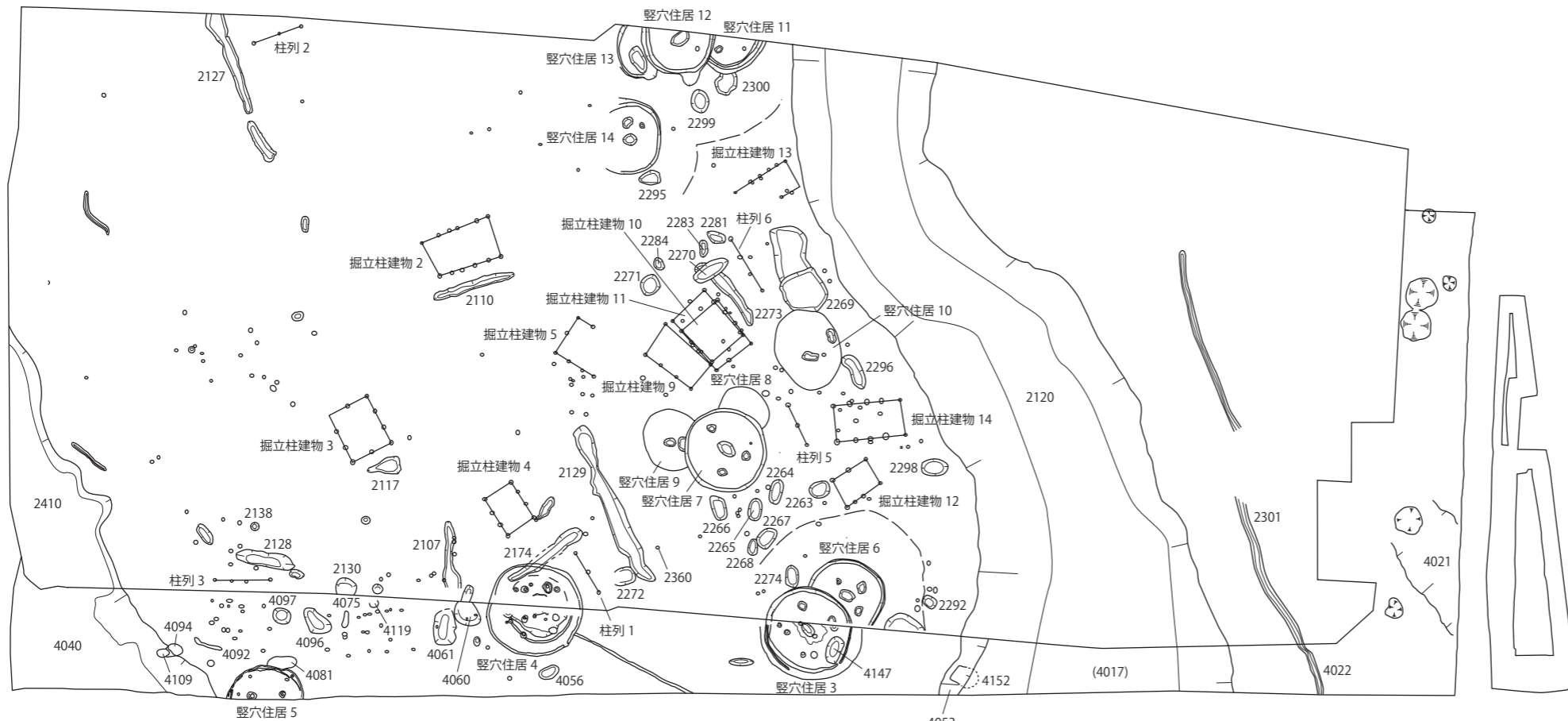
Y=41,300

X=-155,960

X=-155,980

12区

X=-156,000



07-1 調査3 トレンチ

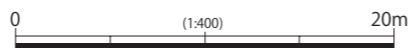


図159 11区 弥生時代 遺構平面図

1. 竪穴住居

竪穴住居3（図159～161・170・171・173、図版27・32・85・88・89・94・95）

中央東寄りの南端部に位置する。円形プランである。壁溝に3回の切り合いが認められ、ほぼ同じ位置で建て替えが行われたと見られる。壁溝内側で径5.1～5.25m、壁の肩で径6.8mを測る。肩から床面までの深さは0.35mである。床には、厚さ3cmの明黄褐色シルトによる貼床がなされる。肩から壁溝まで水平距離が30～70cmあり、壁面は緩やかに斜めに下がる。こうした壁面形状は、中期前葉段階の竪穴住居の特徴と見られる。埋土は3層に分かれ、下層は黒褐色細粒砂混じりシルトで、弥生土器片・炭化物を多く含み、中層は暗褐色中・細粒砂混じりシルト、上層は暗灰黄色シルトで、竪穴埋没時の残った中央の凹みに堆積したものである。

床面中央には、4150土坑がある。楕円形で船底形の断面を呈し、長径0.95m、幅6.05m、深さ0.45mを測る。下層は、数枚からなる黒色細粒砂混じり粘土で炭化物、焼土粒を多く含む。中層は、黒褐色細粒砂混じりシルトで弥生土器を少し含み、上層は灰黄褐色細粒砂質シルトで、竪穴住居の埋土最下層が落ち込んだようになっている。4150土坑の南部からは、甕の破片がまとまって出土している。4150土坑の主軸の延長上には、肩に接して2本のピット（4149・4151ピット）が認められる。径20～25cm、深さ22～30cmを測り、いわゆる松菊里式ピットである。このピットを含む幅1.4m、長さ2.3mの範囲の床面には炭層が広がり、4150土坑が火炉として使われ、その灰を掻き出した範囲と考えられる。

炭層からは、弥生土器片、石核1点、剥片9点、チップ70点が出土している。4150土坑からは弥生土器、スクレイパー1点、石鏃1点、石核3点、剥片68点、チップ928点が出土した。

主柱穴は、9ヶ所検出された。このうち、4144、4143、2276-1、2276-2ピットは古い時期の主柱穴と想定される。4144ピットは、上端の径27cm、深さ55cm、柱径9cmである。4142、4155、2276-4、4142ピットは掘方の径35cm、深さ63cm、柱痕跡は径22cmを測る。いずれも4本柱に復元できる。柱間隔は2.2～3.0mである。4144ピットからは、弥生土器片、スクレイパー1点、石核1点、剥片3点が出土している。

壁溝は幅10cm、深さ10cmである。南西部で3回の切り合いが認められる。中間の4145溝からは石鏃1点、剥片1点が出土している。

639は埋土出土の甕で、口頸部は短く、体部が張る形態である。摩滅のため調整不明。橙色を呈し、結晶片岩を含む。640は、床面から出土した体部が算盤状を呈した壺で、内面下半部に炭化物が厚く付着する。胎土にシャモットを含み、灰白色を呈することから搬入品の可能性が高い。同一個体の体部片が、竪穴住居3より東へ6m離れた4053溝から出土している。埋土からは、642～645の甕の底部が出土した。中央土坑である4150土坑からは、641の長頸広口壺の頸部が出土した。櫛描直線文（10条／1.1cm）を巡らし、文様帯間をヘラミガキする。644・641は、生駒山西麓産の胎土を持つ。

石器では、扁平片刃石斧1点、敲き石3点、台石1点、石鏃15（未成品6）点、石鏃か中型尖頭器未成品1点、石鏃8（未成品1）点、中型尖頭器未成品2点、中型尖頭器？未成品2点、不明未成品1点、石小刀1点、スクレイパー12点、二次加工のある剥片98点、楔形石器3点、剥片82点、石核3点、チップ1595点が出土している。剥片の中にはポイントフレイクと思われるものを1点含む。

662は、上端部が欠損した凝灰岩の扁平片刃石斧である。片面は丁寧に研磨され、もう一方の面が割れ面をやや雑に研磨しており、側面の仕上げも雑である。662は、太型蛤刃石斧の破片を転用、再加工した可能性が高い。刃部には刃線と直交する線状の使用痕がみられる。663は、片面が平坦、裏面は打

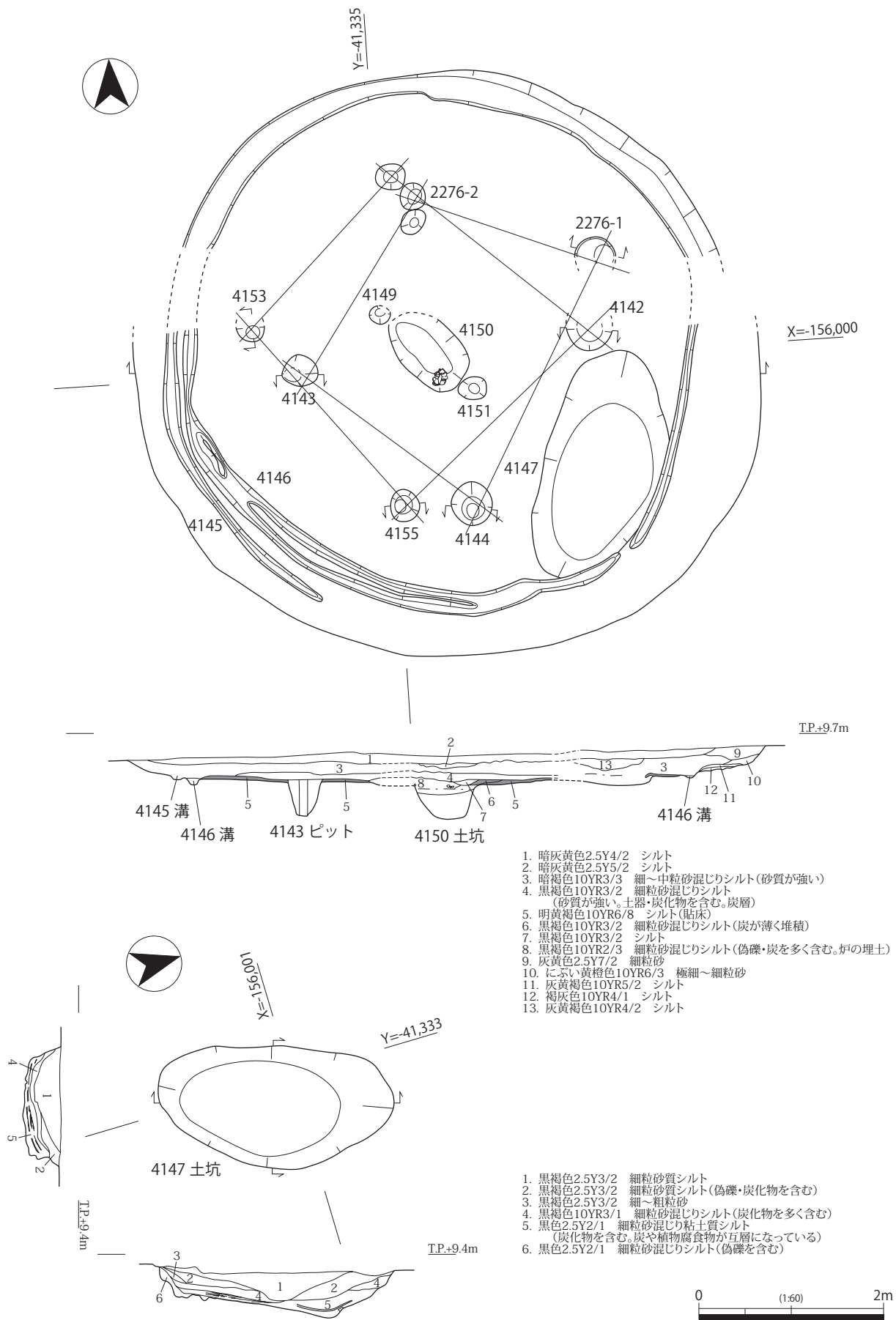
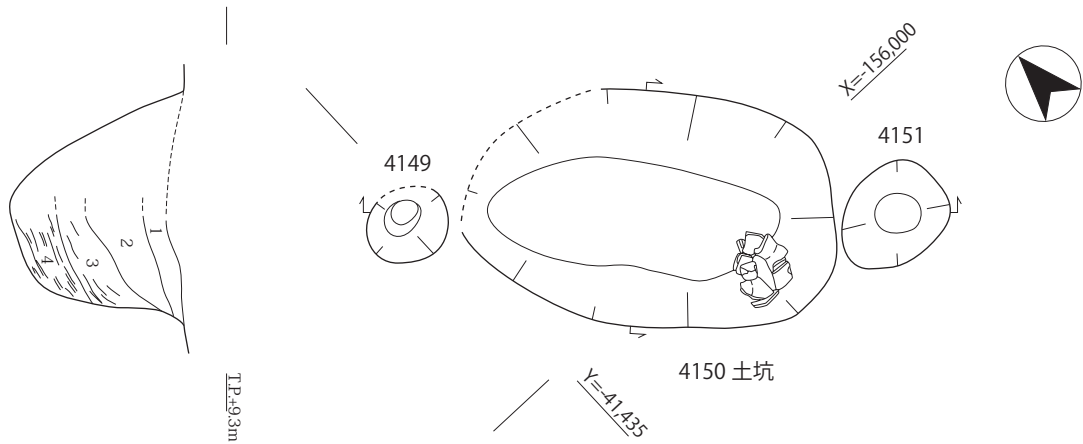
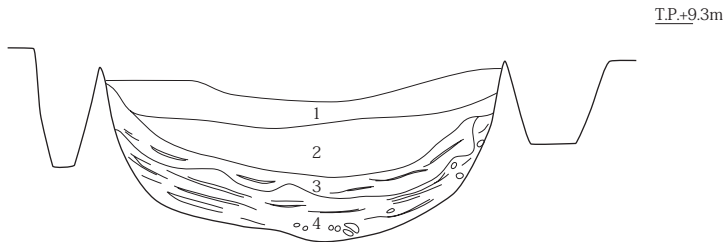


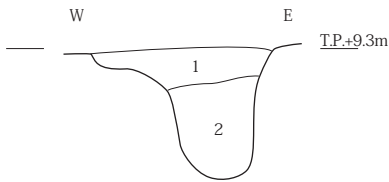
図160 竪穴住居3 平・断面図(1)



1. 灰黄褐色10YR5/2 細粒砂質シルト(埋土)
2. 黒褐色10YR3/1 細粒砂混じりシルト
3. 黒色2.5Y2/1 粘土質シルト(小偽礫・炭を含む)
4. 黒色2.5Y2/1 細粒砂混じり粘土(偽礫・炭を含む)

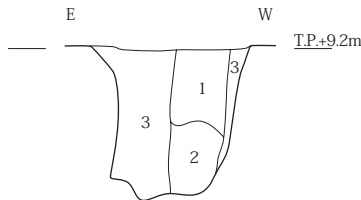


2276-1 ピット



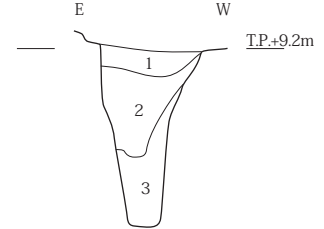
1. 黒褐色10YR3/1 細砂～中砂
2. 黒褐色10YR3/1 細粒

4143 ピット



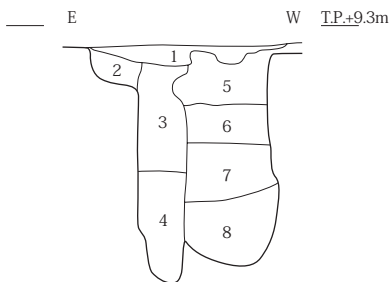
1. 黒褐色10YR3/2 細粒砂混じりシルト(柱痕跡)
2. 黒色10YR2/1 極細粒砂混じりシルト(偽礫を含む。柱痕跡)
3. 灰黄褐色10YR4/2 シルト(大小偽礫を多く含む。掘方の埋土)

4144 ピット



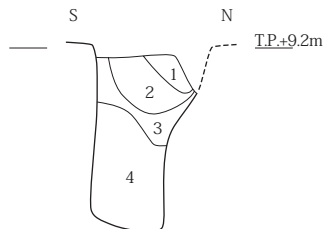
1. オリーブ褐色2.5Y4/3 シルト(大小偽礫を多く含む。柱痕跡)
2. 黒褐色2.5Y3/2 粘土質シルト(大小偽礫を多く含む。柱痕跡)
3. 黒褐色2.5Y3/1 極細粒砂粘土質混じりシルト(柱痕跡)

4142 ピット



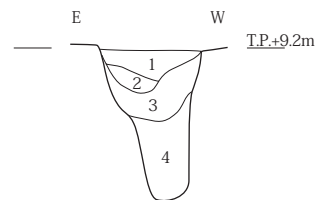
1. 暗灰黄色2.5Y4/2 細砂(極小偽礫を含む)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3 細砂(偽礫を含む)
3. 黄灰色2.5Y4/1 細砂混じりシルト(偽礫を含む。柱痕跡)
4. 黒褐色10YR3/1 粘土(柱痕跡)
5. 灰黄褐色10YR4/2 シルト(小偽礫を多く含む)
6. 暗灰黄色2.5Y5/2 細砂質シルト(大小偽礫を多く含む)
7. 暗灰黄色2.5Y4/2 粘土質シルト(大小偽礫を多く含む)
8. 灰黄色2.5Y6/2 シルト(中小偽礫を多く含む)

4153 ピット



1. 褐灰色10YR5/1 細粒砂
2. 黒褐色10YR3/1 細粒砂混じりシルト(中小偽礫を多く含む)
3. 黒褐色2.5Y3/2 細粒砂混じりシルト(偽礫を少量含む)
4. 黒褐色2.5Y3/1 粘土質シルト

4155 ピット



1. 灰黄褐色10YR4/2 シルト混じり細粒砂
2. 褐灰色10YR5/1 シルト
3. 黒褐色2.5Y3/1 粘土質シルト
4. 褐灰色10YR4/1 粘土質シルト(偽礫を含む)



図161 竪穴住居3 平・断面図(2)

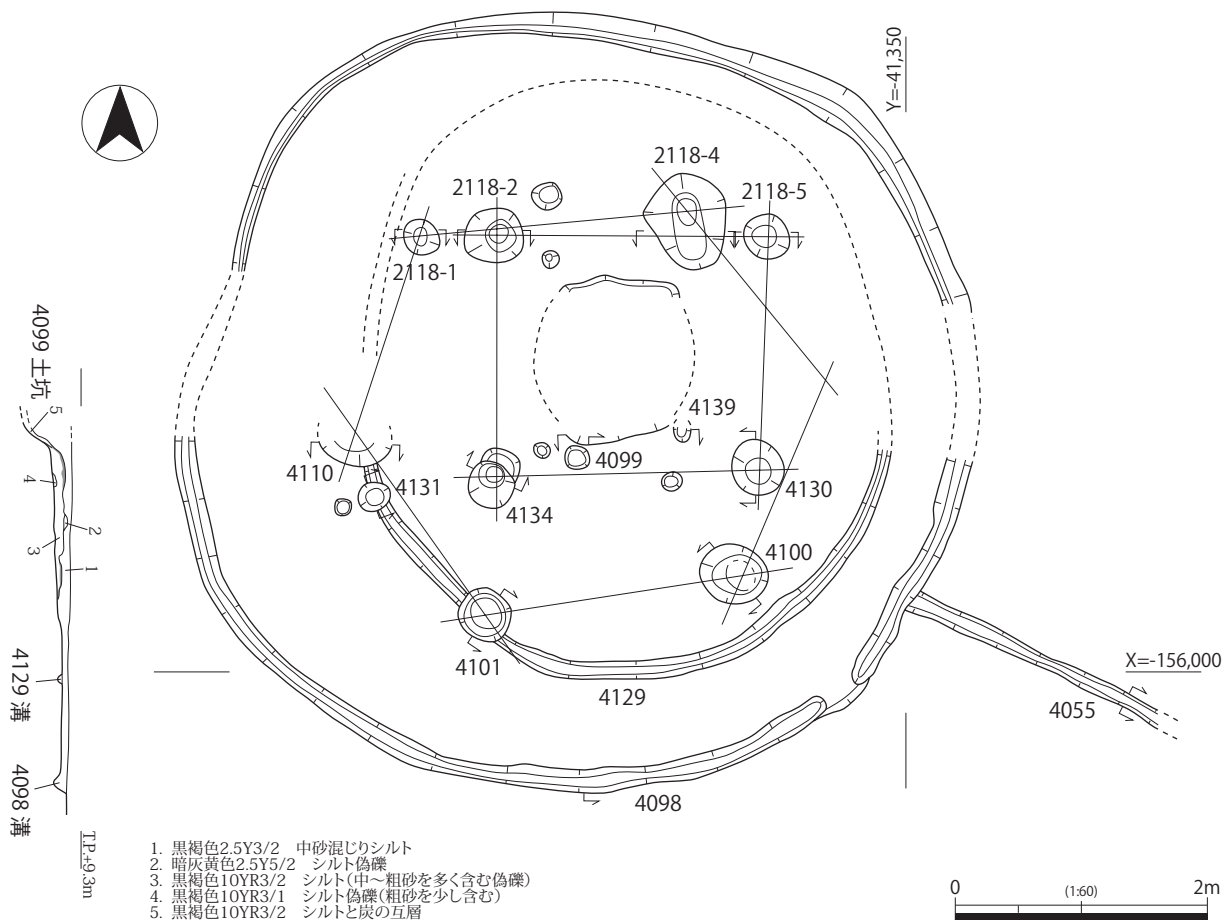


図162 竪穴住居4 平・断面図 (1)

ち欠いた後、最も突出した部分を敲打した砂岩の台石で、平坦面には研磨痕と打撃痕が少し認められる。側面および裏面の一部には、研磨痕がある。敲き石は図化していないが、3点ともに扁平礫を用いており、側面に敲打痕や線条打撃痕がみられる。石材は、砂岩2点、結晶片岩1点である。

646～650は、石鏃である。646・647は円基式、648は基部底辺が僅かに窪んだ平基式の石鏃未成品である。649・650の側辺には、鋸歯状剥離がみられる。651・652は石錐であり、651は頭部が欠損しており、錐部と頭部の区別が明瞭なものかどうかは不明である。2点ともに錐部両側縁は摩滅している。

<4147土坑> (図159・188)

床面の東南部には、竪穴住居に先行する遺構として、4147土坑がある。不整楕円形を呈し、長径2.55m、短径1.32m、深さ0.5mを測る。底面は南に向かって斜めに上がっている。埋土は4層に分かれ、底から約10cmまでは黒色細粒砂混じり粘土質シルトで、薄い炭層を1～2枚挟む。中部は黒褐色細粒砂質シルトで、炭化物、偽礫を含む。上部は深さ25cmまで、灰黄褐色シルトがレンズ状に堆積する。埋土上面に壁溝が掘られている。

694～699は、畿内第Ⅱ様式である。石器では、敲き石が3点、石鏃4(未成品1)点、石錐2点、石小刀未成品1点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片26点、楔形石器1点、剥片25点、チップ1点出土している。出土遺物に関しては、土坑の項で詳述する。

竪穴住居4 (図159・162・163・170・172・174、図版32・85・89・91・95)

中央西寄りの南端部に位置する。円形プランで1回拡張が行われる。第7e層上面より掘りこまれるが、

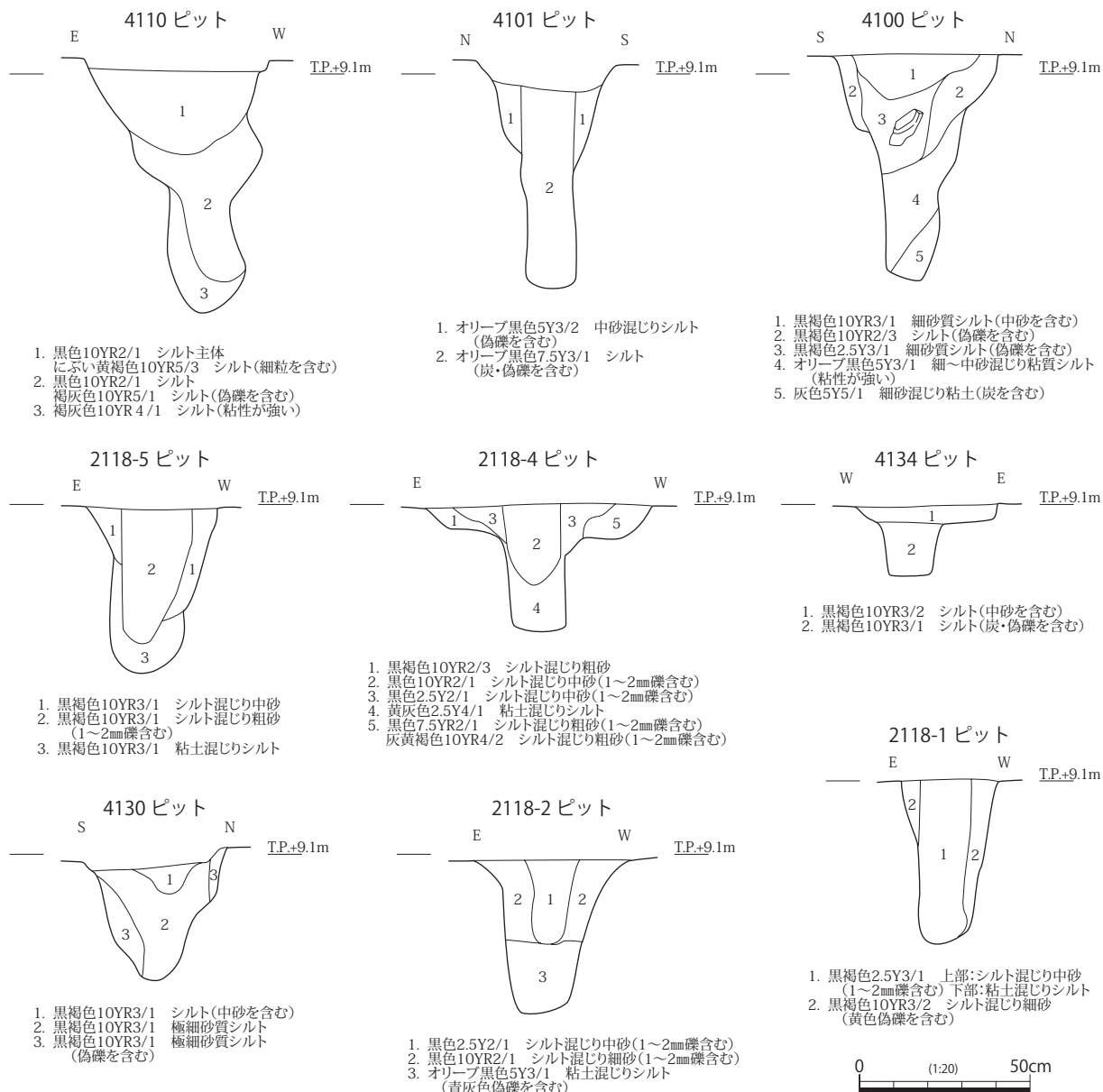


図163 竪穴住居4 平・断面図(2)

第9a層及び第10層上面ではじめて検出できた。埋土は上部が黒褐色小礫混シルト、下部が黒褐色小礫混シルトで、いずれも土器片を含む。深さ15cmである。北側は削平をうけており、詳細は不明である。

4099土坑は中央土坑であるが、側溝で2分され、南北両端が幅20cmずつ残るのみである。深さ30cm、黒褐色シルトと炭層の互層となる。南北1.35m、東西1.2mに復元される。この周囲には、幅約50cmでドーナツ状に炭層が広がる。竪穴住居の中央部分は約7cm窪み、貼床がなされる。

1期目は、壁溝である4129溝の外側で測って径4.2mである。4129溝は、幅12~15cm、深さ4cmを測る。この段階は2118-2、2118-5、4130、4134ピットが主柱穴と考えられ、4本柱の建物と推測される。4130ピットは、径40cm、深さ37cm、柱の径は約15cmと推定される。掘方の上部には、黄灰色シルトの小偽礫を詰めている。4134ピットは、径18cm、深さ20cmで周囲を浅く窪め、黄灰色シルトの小偽礫を詰めている。4130・4134ピット芯々間の距離は2.1mである。この他、中央土坑周辺では径6~10cm、深さ約5cmのピットを4ヶ所検出している。

2期目は、壁溝である4098溝の外側で測って径6.3mである。4098溝は、幅15cm、深さ6cmで東南

部の一部が長さ30cm途切れている。この段階は2118-1、2118-4、4100、4101、4110ピットが主柱穴と考えられ、6本柱に復元される。4101ピットは1期目の4129溝を切っている。径40cm、深さ65cm、柱痕跡は径15cmである。4100ピットは、径48cm、深さ67cm、柱痕の径は15cmと推定される。抜き取った跡があり、その窪みに弥生土器の甕底部が落ち込んでいる。4110ピットは、側溝にかかるが、径52cm、深74cmを測る。柱を抜き取った痕跡がある。4100・4101ピットでは、掘方の上部の周囲に黄灰色シルトの小偽礫を詰めている。4100・4101ピット間は2.08m、4101・4110ピット間は1.9m離れる。この他の小穴として、4131ピットは4129溝を切り、径19cm、深さ18cmである。弥生土器の小片が出土した。

4110ピットのすぐ西南部の床面から弥生土器の甕1個体、4101ピットの南でも鉢1個体が床面直上

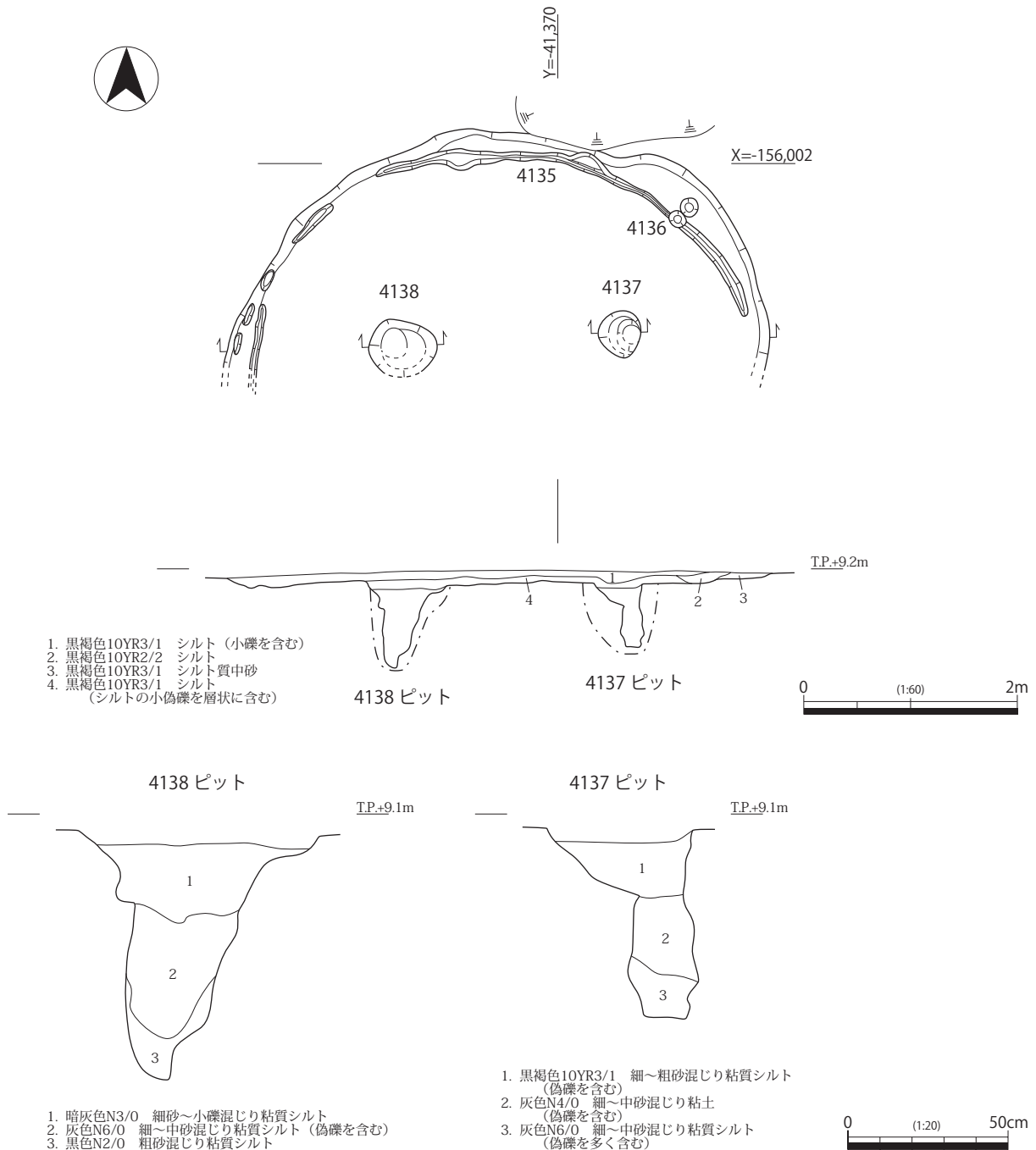


図164 竪穴住居5 平・断面図

から出土した。いずれも新しい住居に伴う遺物である。また、埋土は殆ど残っていなかったが、底部4点（内2点生駒山西麓産）、櫛描文のある体部を含む弥生土器の小片、スクレイパー2点、石鏃1点、石核1点、剥片7点が出土した。また、貼床内からスクレイパー1点、剥片1点が出土した。

また、2期目の壁溝に接続する4055溝がある。南東へと直線的に伸びる。8.5mを検出した。幅20cm、深さ12cmである。排水溝とみられるが、底面の標高は住居と接する付近でT.P.+9.102m、南壁でT.P.+9.218mを計り、やや北（住居側）に下がる。弥生土器片、剥片1点を含む。

622は4110ピット西南部の床面直上より出土した、ほぼ完形に復元される甕で、口径16.2cm、高さ25.5cmを測る。口頸部は短く外反し、僅かに張る丈高の体部を持ち、底部は薄く上げ底となる。外面にヘラミガキを残し、河内形甕である。外面下半は赤変、内面に炭化物が付着。623は甕の小片で、口縁端部は面を持ち、外面を縦ハケ調整した大和あるいは摂津型甕である。624～628は、底部である。624は底が薄く、底面と見込み部が未調整である。627は、形態的に蓋の可能性もある。622・624は生駒山西麓産の胎土で、624には粗粒の角閃石を含む。626は、4100ピットから出土した甕の底部で、やや上げ底である。これらの出土土器の器形的特徴から、2期目の堅穴住居は、中期前葉と考えられる。

敲き石1点、石錐1点、スクレイパー7点、二次加工のある剥片17点、剥片14点、チップ4点が出土している。664は、チャート亜円礫長軸一端に片面側に剥離を伴う敲打痕があり、一端は平坦面をなす。660は、頭部と錐部が区別された石錐で、錐部先端のエッジが摩滅している。661は、表面右側辺に二次加工が施されており、剥片素材の石核として持ち運ばれた可能性が考えられる。裏面は、最終剥離面のままである。打点は自然面である。長さ16.8cm、幅12.5cm、厚さ2.8cm、重さ573.19gである。

堅穴住居5（図159・164・171、図版88）

南西端部に位置し、南半分が調査区外となるため、北半分を検出した。円形を呈しており、径5.2～5.3mで検出されたピットは2基であるが、4本柱に復元される。掘り込み面は第7e層内と考えられるが、第10層上面で検出した。埋土は黒褐色小礫混シルトで、深さ8cmである。床面はほぼ平坦で、中央部には、黒褐色シルトに灰黄褐色シルトブロックを薄い層状に含む厚さ5cmの貼床が認められる。壁のやや内側に幅8～10cm、深さ4～7cmの4135溝を巡らすが、西部では断続的に残る。

主柱穴は2ヶ所検出された。4137ピットは径45cm、深さ58cm、柱の径は約15cmと推定される。弥生土器甕口縁1点が出土した。4138ピットは、長径75cm、短径50cm、深さ77cmである。床に接する部分には、黄灰色シルトの小ブロックを詰めている。いずれも上部がすり鉢状に窪み、4138ピットでは下層が縞状に乱れていることから、柱を抜き取ったものと考えられる。4137・4138ピット芯々間の距離は2.2mである。復元される主柱穴の南北距離は、約1.8mである。この他、壁溝を切る4136ピット（径15cm、深さ12cm）とその北に接するピットがある。

床面上から、弥生土器広口壺口頸部1点とサヌカイト石核1点が出土している。埋土から、弥生土器口縁部を含む小片、石核2点、剥片6点が出土している。

このほか、4137ピットからは、石小刀1点、剥片3点、石核2点が出土している。653は、石小刀基部と考えられるものである。先端部が欠損しており、不明であるが、基部両側辺の稜線が尖頭器のように均整がとれておらず、平面形は一側辺が外湾気味である。

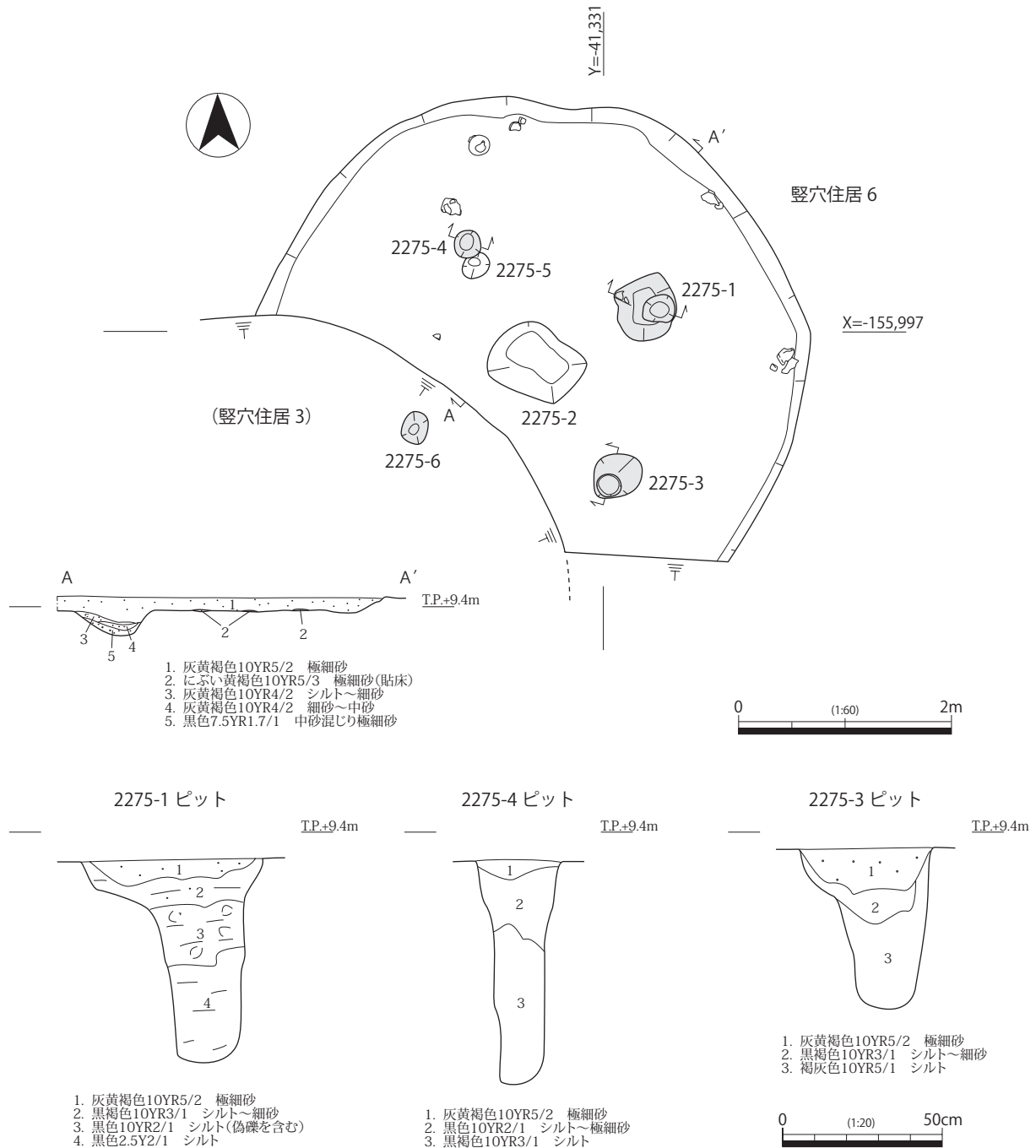


図165 縦穴住居 6 平・断面図

縦穴住居 6 (図159・165・170・171、図版27・85・90)

中央東寄りの南端に位置する。南に縦穴住居 3 が位置し、これに切られている。西には 2274 土坑が、東には 2292 土坑が位置する。北には掘立柱建物 12・14 が、北西には縦穴住居 7・8・9 が位置する。縦穴住居の建て替え重複はなく、単独で検出されている。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形はほぼ円形を呈している。規模は、検出面で最大径約 5.2m、深さは約 10cm を測る。埋土は、灰褐色極細砂が主体である。貼床は、断面にて部分的に確認した。壁溝は検出していない。

この縦穴住居の周囲には、幅約 3m の範囲で、部分的に偽礫状の土が多く入っているのが平面にて確認され、他とは違った様相を呈していた。厚みはほとんどないが、人為的に客土された可能性がある。

住居内部では、ピットが多く検出されているが、主柱穴はそのうち4基と考えられ、2275-1、2275-3、2275-4、2275-6ピットが該当する。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約20～70cm、深さ約50～70cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

中央部で土坑を1基検出している。2275-2土坑は、平面楕円形を呈しており、残存部で径約60～80cm、深さ約40cmを測る。炉として使われたものであり、土坑底部で炭層が顕著に認められた。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量と、サヌカイト製石器やチップが多量に出土した。

631はほぼ完形の無頸壺で、体部上半は強く内湾する。底部は厚く重量がある。外傾接合。摩滅が著しい。632は、大型の鉢あるいは甕と考えられ、下膨れの体部に外面縦ハケ調整する。外面にスガが付着する。633は甕蓋で、頂部は窪み、外面ヘラミガキ調整する。畿内第I様式の可能性がある。

石器では、石錐未成品1点、中型尖頭器4（未成品2）点、石槍1点、スクレイパー7点、二次加工のある剥片38点、楔形石器1点、剥片58点、石核1点、チップ266点が出土している。658は、石槍の先端部のみ残存する。

竪穴住居7（図159・166・170・171・174、図版28・85・88・89・95）

中央やや南東寄りに位置する。北には竪穴住居8、西には竪穴住居9があり、それぞれを切っている。南には、2263・2264・2265・2266・2267・2268土坑が位置する。東には、掘立柱建物12・14が位置する。北には、掘立柱建物9・10・11が位置する。北東には、竪穴住居10が位置する。

平面形はほぼ円形を呈している。上部は削平を受けているため、かなり失われている。規模は、検出面で最大径約5.8m、深さは約10cmを測る。埋土は、灰黄褐色細砂～極細砂が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は全周しており、規模は幅約15cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は、灰褐色極細砂～シルトである。

住居内部では、ピットが多く検出されているが、主柱穴はそのうち5基と考えられる。2277-2、2277-3、2277-4、2277-5、2277-6ピットが該当し、5本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約40～80cm、深さ約60～80cmを測る。埋土は、黒褐色細砂混じりシルトであり、偽礫を含む。

中央部で土坑1基と、その長軸方向にピットを2基検出している。2277-1土坑は平面楕円形を呈しており、残存部で径70～100cm、深さ約30cmを測る。炉として使われたものといえるが、炭層はあまり顕著には認められなかった。ピットはどちらもほぼ円形を呈しており、径約20cmを測る。深さは約20cmである。松菊里型住居と考えられる。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量と、サヌカイト製石器やチップなどが多量に出土した。638は小型の鉢で、丈高である。外面は縦ハケ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整する。底部は上げ底で指頭圧痕が残る。

石器では、敲き石1点、砥石1点、石鏃未成品1点、石錐1点、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片24点、楔形石器1点、剥片32点、石核1点、チップ204点が出土している。665は、砂岩製砥石である。片面の大半が欠損しているが、平らな両面に線条の研磨痕が残る。片面角寄りに径約4cm、深さ約1cmの敲打による窪みがあり、研磨面の残る平坦面には僅かに打撃痕もみられる。敲き石は図化していないが、砂岩の扁平礫周縁に打撃痕がみられる。

656は、円基式の基部角がやや角張る形態をなした未成品である。657は、石錐の頭部が欠損して不明であるが、頭部と錐部が明確なタイプのものかと推測する。

竪穴住居 8 (図159・166・170、図版28)

中央やや南東寄りに位置する。南に竪穴住居7が位置し、これに切られる。西には、竪穴住居9が位置する。東には、柱列5が位置する。北には掘立柱建物9・10・11が、北東には竪穴住居10が位置する。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形はほぼ円形を呈している。規模は、検出面で最大径約3.6m、深さは約10cmを測る。埋土は、灰黄褐色極細砂が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は全周しており、規模は幅約10cm、深さ約10cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は、竪穴住居の埋土とほぼ同じである。壁溝内部からは、東側で数ヶ所にわたって杭の痕跡が確認された。壁構造をもったものと考えられるが、上部構造を復元できるまでには至らなかった。

住居内部では、中央部で土坑1基と、その長軸方向にピットを2基検出している。2278-1土坑は平面楕円形を呈しており、残存部で径約60～80cm、深さ約50cmを測る。炉として使われたものであり、炭層が顕著に認められる。2278-2と2278-3ピットは主柱穴であり、2本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径20～30cm、深さ50～60cmを測る。埋土は、黒褐色極細砂混じりシルトである。形状から、松菊里型住居と考えられる。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。637は、壺の底部で平底、摩滅が多いが外面へラミガキが部分的に残る。

石器では、石錐未成品1点、スクレイパー1点、剥片3点が出土している。

竪穴住居 9 (図159・166・170、図版28)

中央やや南東寄りに位置する。東に竪穴住居7が位置しており、これに切られる。北東には、竪穴住居8が位置する。北には、掘立柱建物9・10・11が位置する。南には、2129溝、2272土坑が位置する。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形はほぼ円形を呈している。規模は、検出面で最大径約4.3m、深さは約10cmを測る。貼床は確認されていない。壁溝は全周しており、規模は幅約20cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は、竪穴住居の埋土とほぼ同じである。壁溝内部からは、3ヶ所で杭の痕跡が確認された。壁構造をもったものと考えられるが、上部構造を復元できるまでには至らなかった。

住居内部では、中央部で土坑1基と、その長軸方向にピットを2基検出している。2279-1土坑は平面楕円形を呈しており、残存部で径40～70cm、深さ約30cmを測る。炉として使われたものであり、炭層が顕著に認められる。2279-2と2279-4ピットは主柱穴であり、2本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～60cm、深さ40～60cmを測る。埋土は黒褐色極細砂であり、偽礫を含む。他に関連する遺構は検出されていない。形状から、松菊里型住居と考えられる。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。629は、頸部の短い広口壺である。櫛描直線文(6条/0.9～1.1cm)を巡らす。口縁端部は破損する。630は壺の底部で、外面にへラミガキを施す。

竪穴住居10 (図159・167)

中央部やや東寄りに位置する。北に2269土坑、東に2296土坑が位置する。南西には、竪穴住居7・8・9が位置する。西には、掘立柱建物9・10・11が位置する。竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。上部は削平を受けているため、かなり失われており、残りが非常に悪い。

平面形は楕円形を呈している。規模は、検出面で最大径約5.5m、深さは約5cmを測る。埋土は、に

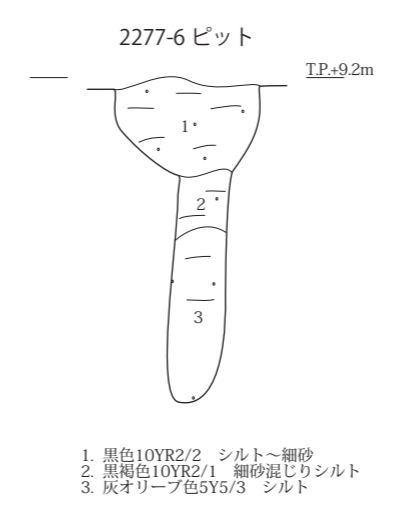
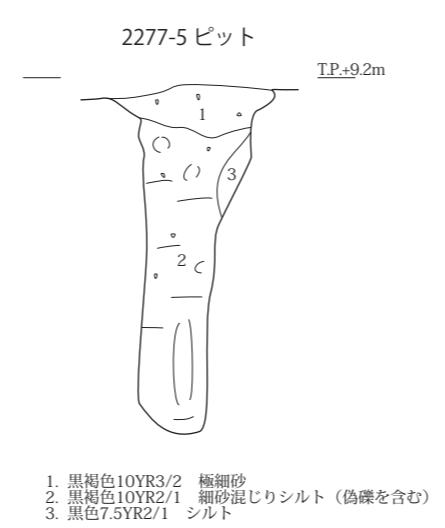
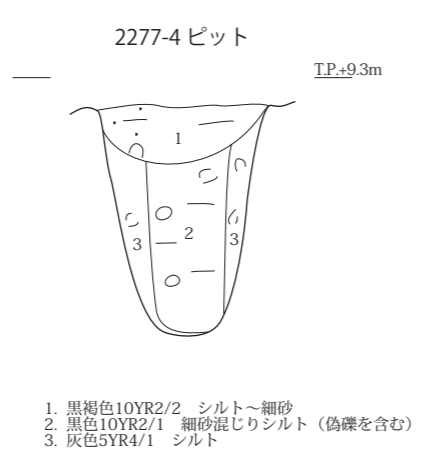
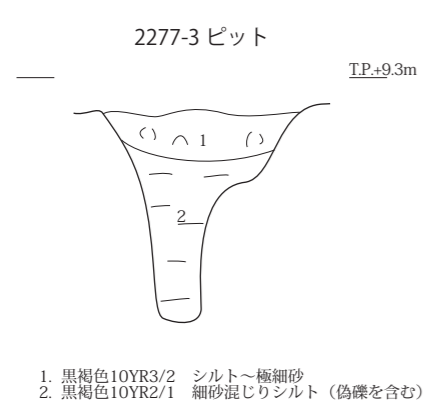
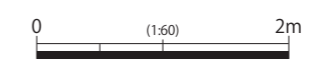
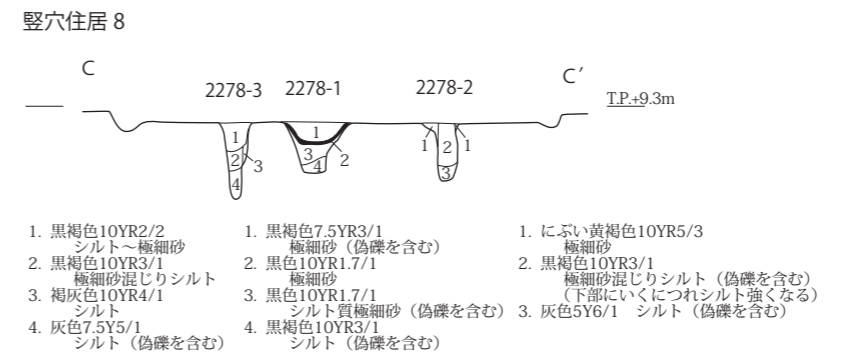
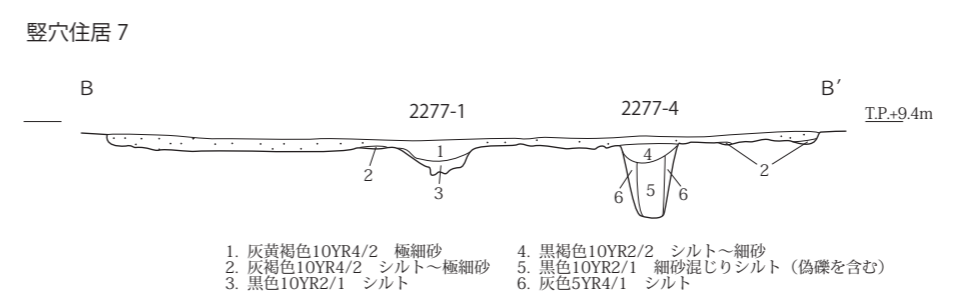
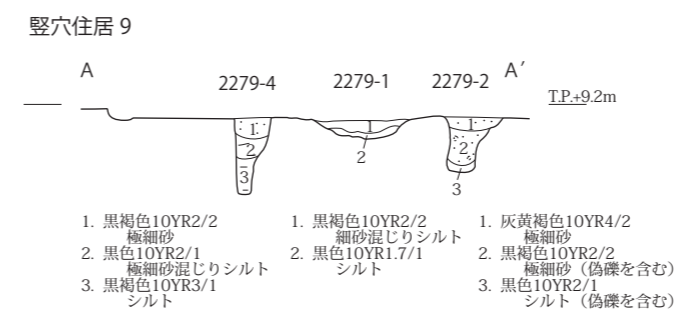
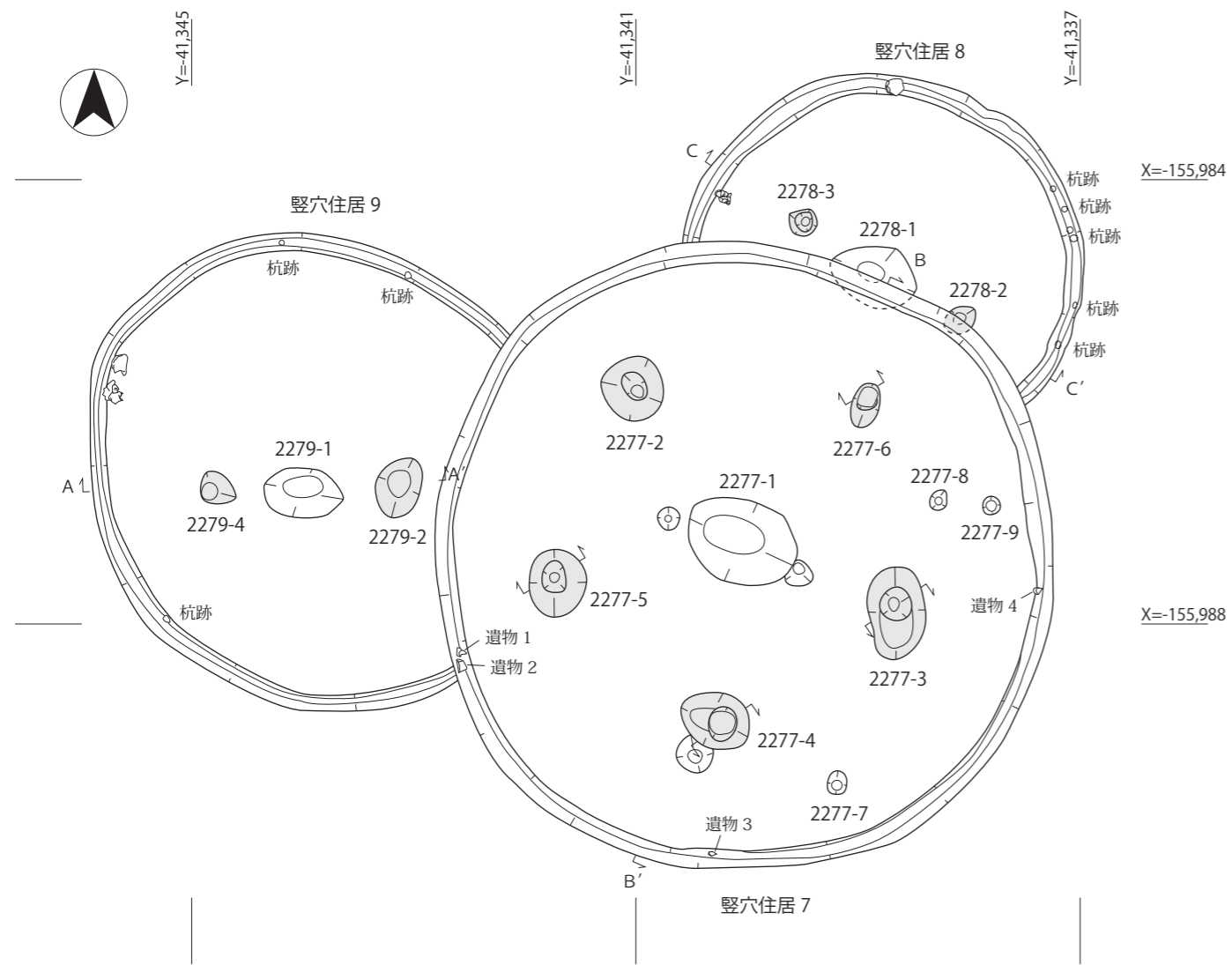


図166 竪穴住居 7～9 平・断面図

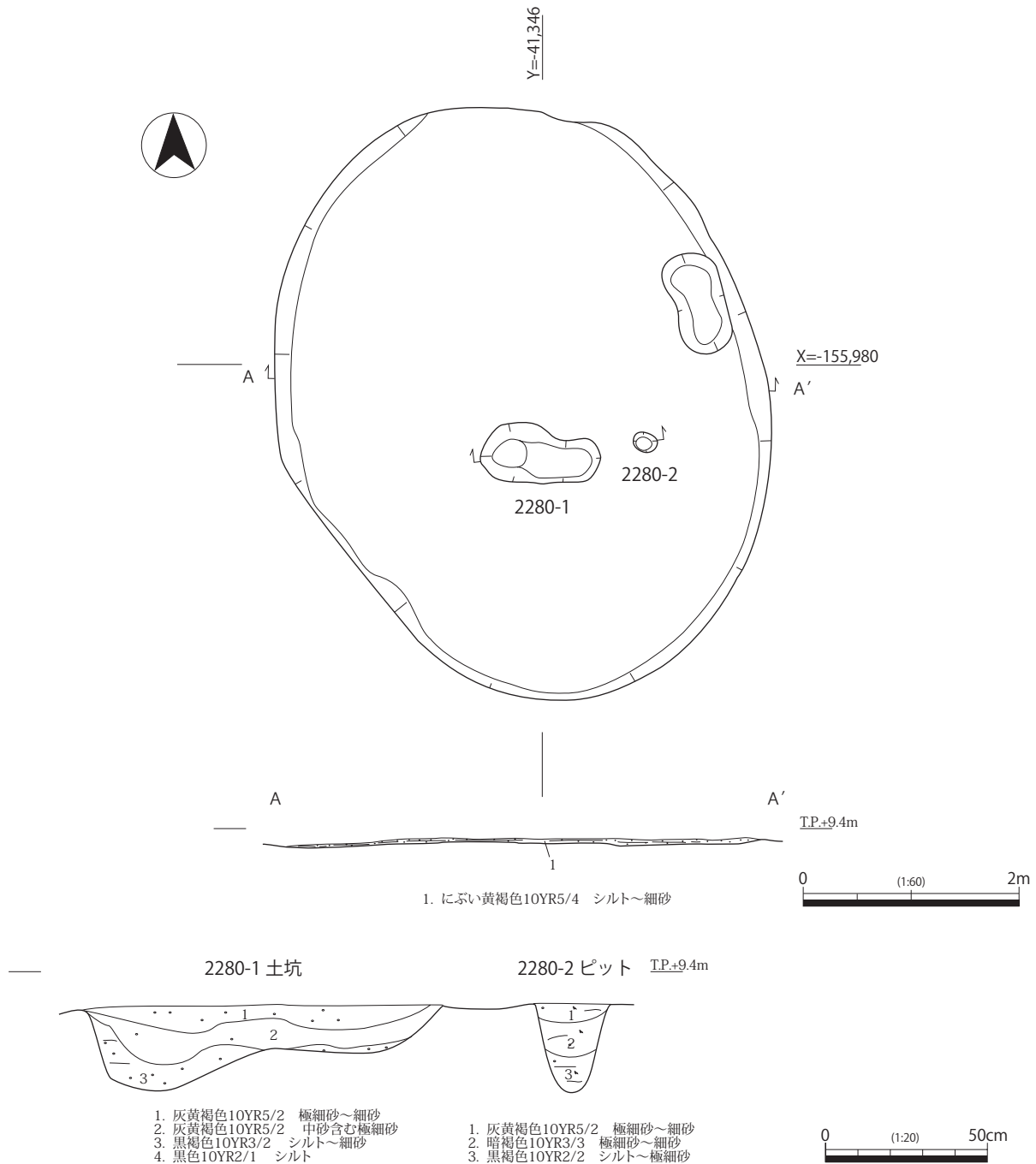


図167 竪穴住居10 平・断面図

ぶい黄褐色細砂～シルトが主体である。貼床は確認されておらず、壁溝は検出されていない。

住居内部では、ピットが1基(2280-2ピット)検出されているが、主柱穴かどうかは不明である。中央やや南寄り、土坑を1基検出した。2280-1土坑は、平面楕円形を呈しており、残存部で径60～110cm、深さ約30cmを測る。炉として使われたものといえるが、炭層は顕著に認められなかった。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

竪穴住居11 (図159・169・171、図版28・88)

中央東寄りの北端部に位置する。西に竪穴住居12が位置し、これに切られる。さらに西には、竪穴住居13が位置する。南には、2300土坑が位置するが、これとは切り合いもなく、竪穴住居12のように、

竪穴住居と一連のもの可能性もある。さらに南には、掘立柱建物13が位置する。竪穴住居は1/4程度検出した。上部は大きく削平を受けている。

平面形はほぼ円形を呈している。規模は、検出面で最大径復元約6m、深さ10cmを測る。埋土は、灰黄褐色極細砂が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は、竪穴住居のやや内側で検出されており、規模は幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は、暗褐色極細砂～シルトである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットが2基検出されているが、主柱穴は2292-1と2292-2ピットの2基であり、復元すると4本柱の竪穴住居になると考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約20～50cm、深さ約60～70cmを測る。埋土は、黒褐色シルトである。2292-1ピットからは、クヌギの柱根が出土した。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量、サヌカイト製石器が多量に出土した。

石器は、石鏃2点、石錐1点、スクレイパー5点、二次加工のある剥片4点、剥片14点、石核2点、チップ1点が出土している。654・655は石鏃である。654の基部は、欠損のため尖基式かどうかは不明である。655は、先端部が欠損し、裏面には大剥離面を留め、片面両側辺に鋸歯状剥離がみられる。

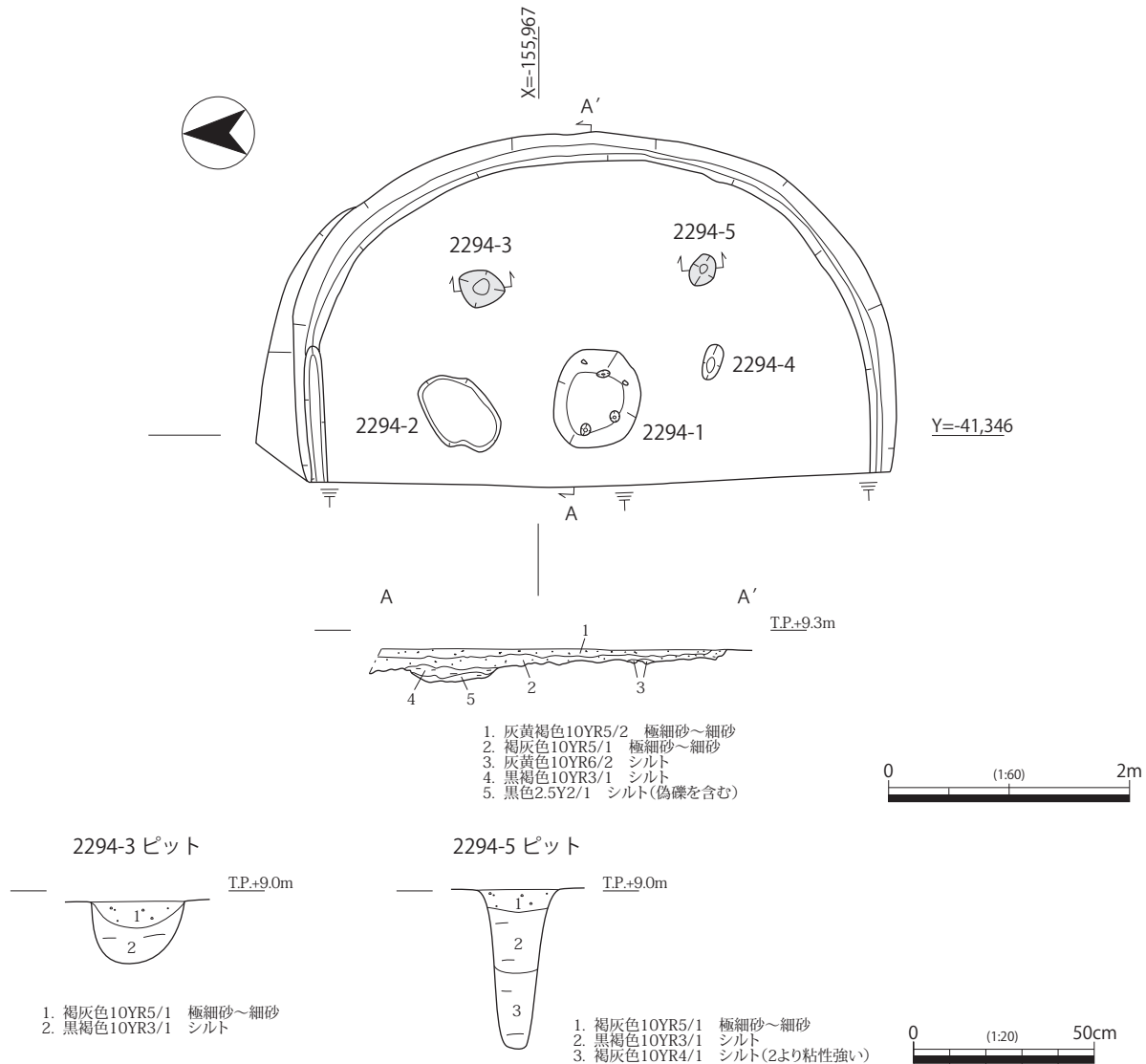


図168 竪穴住居14 平・断面図

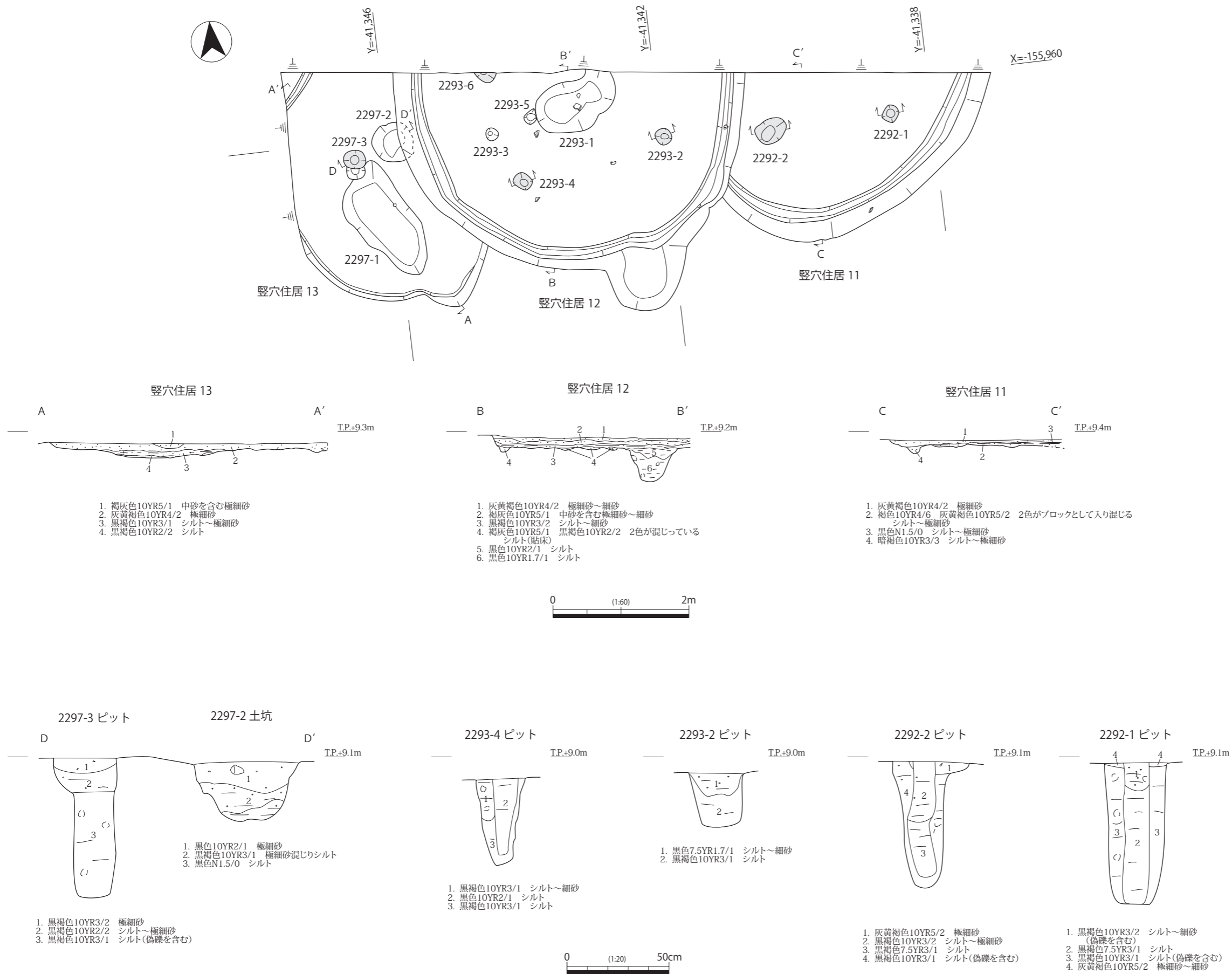


図169 竪穴住居11～13 平・断面図

竪穴住居12 (図159・169~171、図版28・88)

中央東寄りの北端部に位置する。東に竪穴住居11が、西に竪穴住居13が位置し、それぞれを切る。南に2299土坑が、南西には竪穴住居14が位置する。竪穴住居は半分のみ検出した。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

この竪穴住居の周囲には、竪穴住居6で見られたように、幅約3mの範囲で、部分的に偽礫状の土が

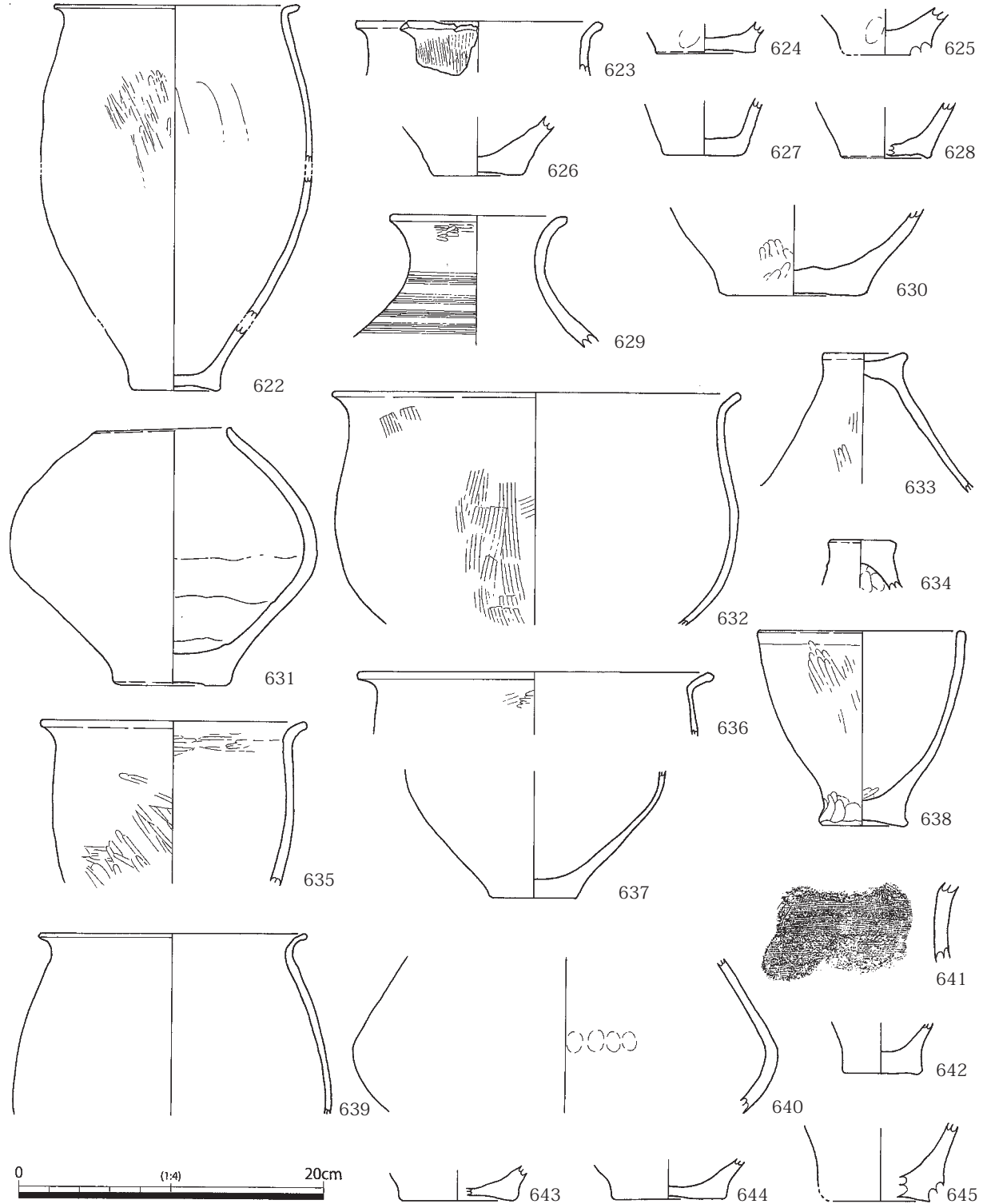


図170 11区竪穴住居 出土遺物 (1) 土器

入っているのが平面にて確認された。この部分は硬度も低く、水を含むとすぐにやわらかくなる土質であった。この部分は、厚みはほとんどないが、人為的に客土された可能性がある。

平面形はほぼ円形を呈しているが、南側に土坑が付く。これは入口の痕跡とも考えられたが、周壁溝も巡るため、断定するには至っていない。規模は、検出面で最大径約5.2m、深さは約20cmを測る。埋土は、灰黄褐色細砂～極細砂が主体である。貼床は断面で確認された。壁溝は検出されており、規模は幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面はU字形を呈し、埋土は褐灰色細砂である。壁溝内部からは、杭

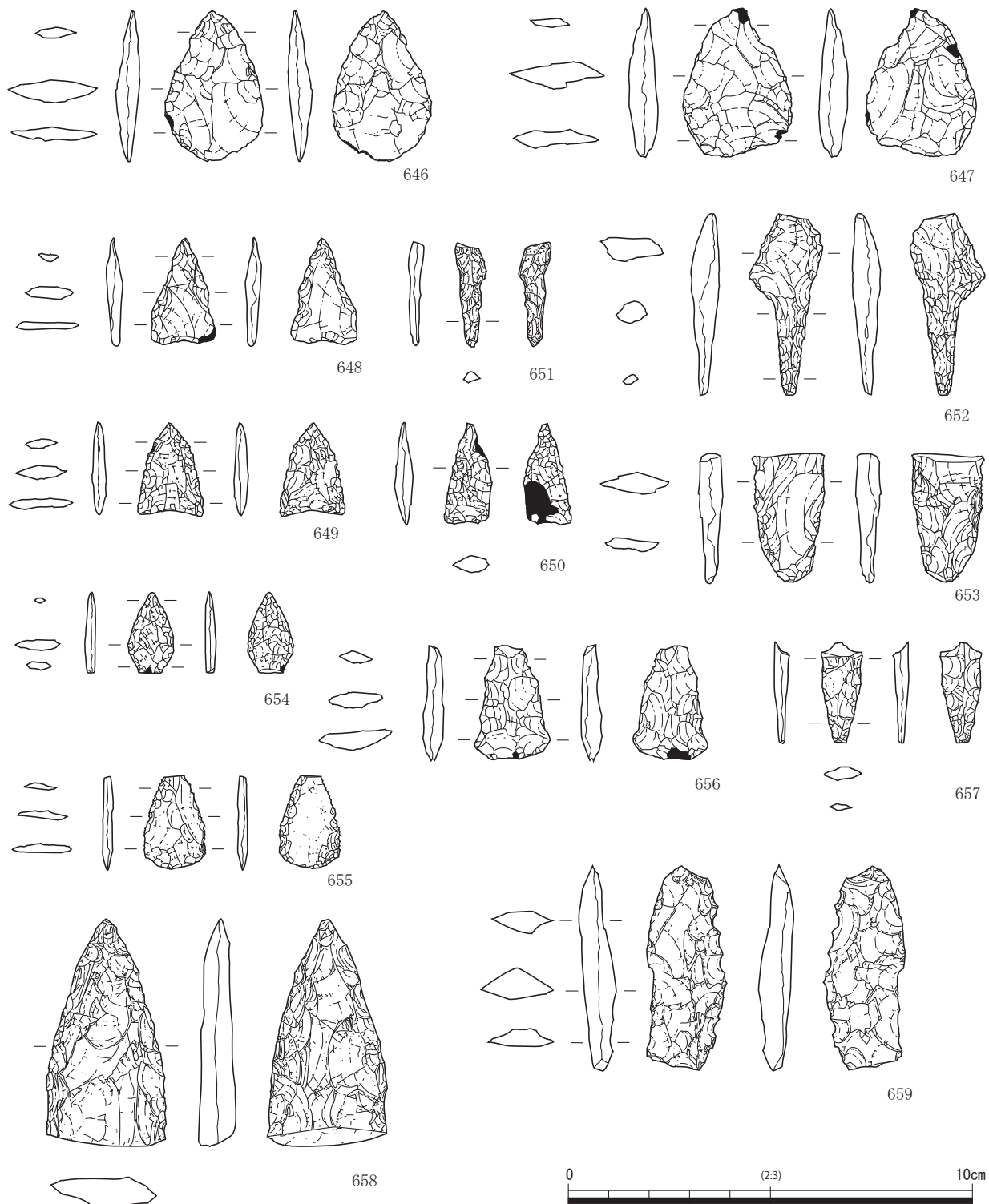


図171 11区竪穴住居 出土遺物 (2) 打製石器 1

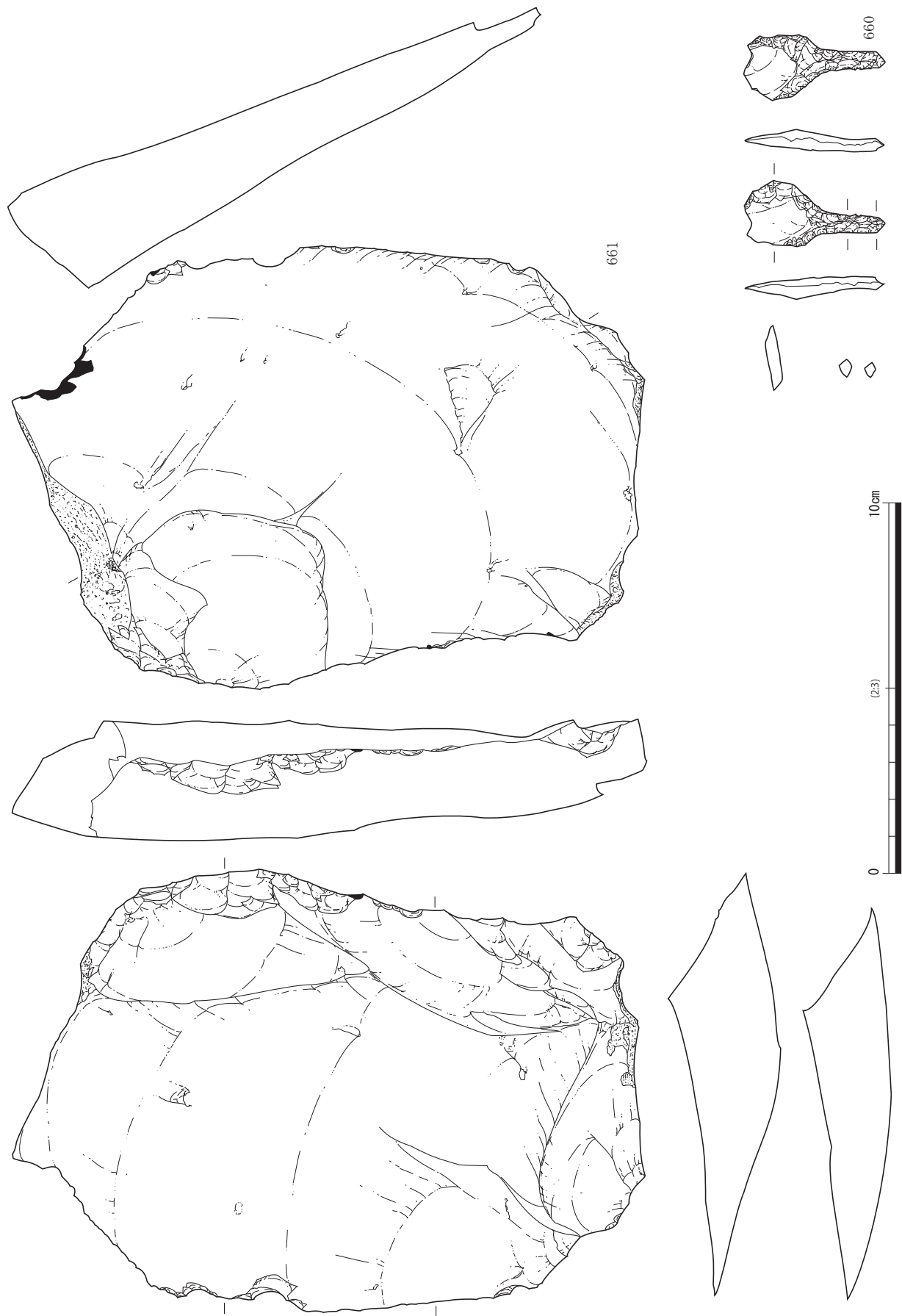


图172 11区竖穴住居 出土遺物 (3) 打製石器 2

の痕跡は確認されていない。

住居内部ではピットが多く検出されているが、支柱穴はそのうち3基であり、2293-2、2293-4、2293-6ピットが該当する。復元すると4本柱の竪穴住居になると考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約30cm、深さ約20~40cmを測る。埋土は黒褐色細砂~シルトである。

中央部で土坑を1基検出している。2293-2土坑は平面楕円形を呈しており、西側にピットが1基(2293-5ピット)付随する。土坑は残存部で径約80~130cm、深さ約50cmを測る。炉として使われたものといえるが、炭層は顕著に認められなかった。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。635・636は、甕である。635は、外面ヘラミガキ調整し、河内型甕である。厚くススが付着する。636は小片であるが、生駒山西麓産の胎土を持つ。634は、甕蓋である。

659は、一見石鏃のようであるが、片方の側辺が直線的で、もう片方の側縁が外湾している点から、石小刀ではないかと推測する。

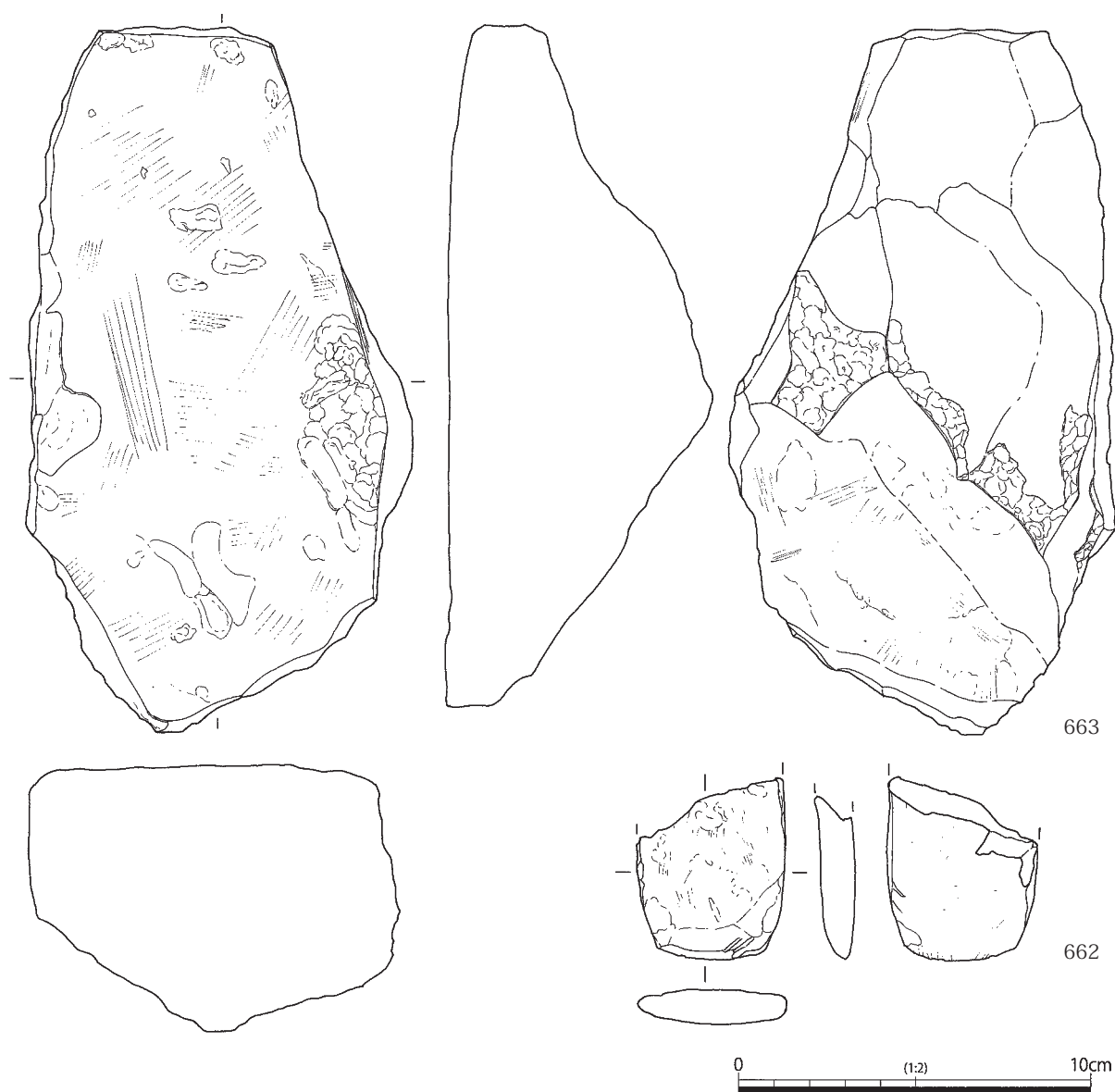


図173 11区竪穴住居 出土遺物(4) 磨製石器1

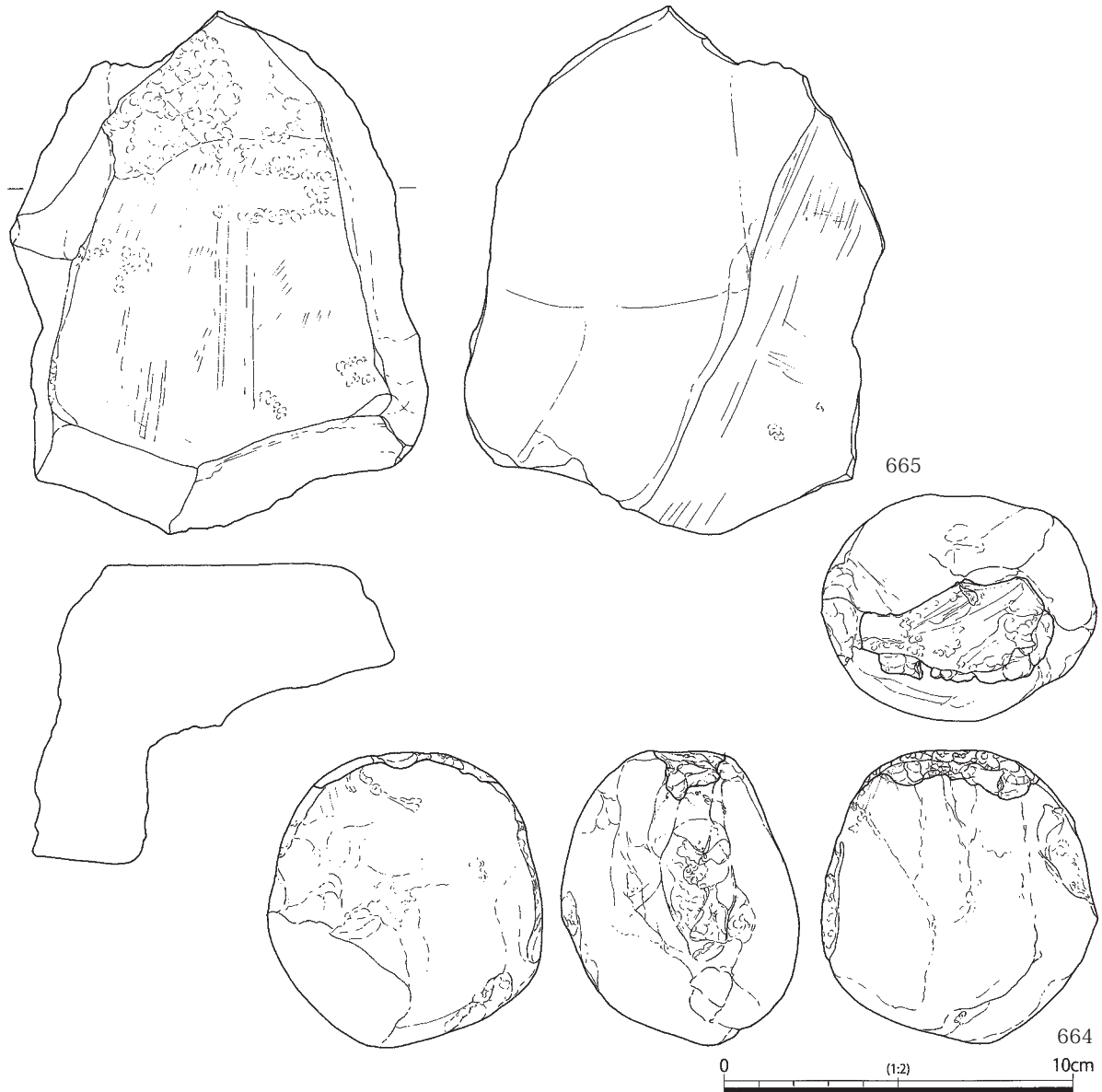


図174 11区竪穴住居 出土遺物 (5) 磨製石器 2

竪穴住居13 (図159・169)

中央東寄りの北端部に位置する。東に竪穴住居12が位置し、これに切られる。さらに東には竪穴住居11が、南には竪穴住居14が位置する。竪穴住居は全体の1/4程度を検出した。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形は不整円形を呈している。規模は、検出面で最大径復元約4.1m、深さは約10cmを測る。埋土は、灰黄褐色極細砂が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は北西角で検出されており、規模は幅約10cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈する。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットが検出されているが、支柱穴はそのうち2297-3ピットで、復元すると2本柱の竪穴住居になると考えられる。平面円形を呈しており、残存部で径約30cm、深さ約70cmを測る。埋土は、黒褐色シルトである。

中央部で土坑を1基検出している。2297-2土坑は平面ほぼ円形を呈しており、残存部で径約60cm、深さ約30cmを測る。炉として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層は見られない。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

竪穴住居14 (図159・168、図版28)

中央東寄りの北側に位置する。北側に、竪穴住居11・12・13が位置する。南には2295土坑が、東には掘立柱建物13が位置する。竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。竪穴住居は東側半分のみ検出した。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

この竪穴住居の東側周囲には、竪穴住居6・12でみられたように、幅約3mの範囲で、部分的に偽礫状の土が入っているのが平面にて確認された。この部分は硬度も低く、水を含むとすぐにやわらかくなる土質であった。厚みはほとんどないが、人為的に客土された可能性がある。

平面形はほぼ円形を呈している。規模は、検出面で最大径約5.3m、深さは約20cmを測る。埋土は、灰黄褐色細砂～極細砂が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は検出されており、規模は幅約20cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈する。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットが多く検出されているが、支柱穴はそのうち2294-3と2294-5ピットで、復元すると4本柱の竪穴住居になると考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約30～40cm、深さ約20～50cmを測る。埋土は、黒褐色シルトである。

中央部で土坑を1基検出している。2294-1土坑は、平面やや楕円形を呈しており、残存部で径約70～90cm、深さ約10cmを測る。炉として使われたものといえるが、炭層は顕著に認められなかった。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

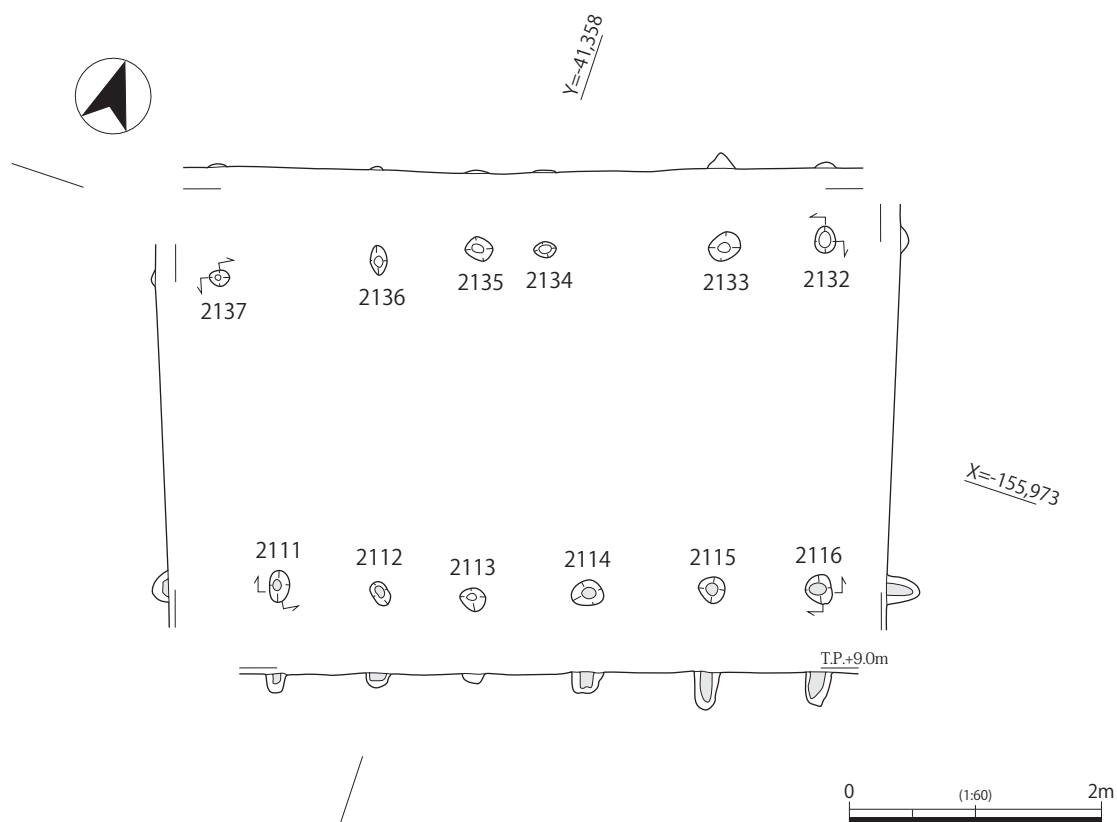


図175 掘立柱建物2 平・断面図

2. 掘立柱建物

掘立柱建物 2 (図159・175)

中央部やや西寄りに位置する。地形に直交する南西―北東棟の建物で、主軸はN-70°-Eを示す。2110溝が南側に付随する。

建物の規模は、梁間1間(西側2.47m、東側2.75m)、桁行5間(北側4.81m、南側4.31m)、床面積は約11.96㎡である。但し、梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、西側の梁間が2.47m、東側が2.75mである。南側の桁行が、西から0.8m、0.75m、0.9m、1.0m、0.86m、北側が東から0.8m、1.41m、0.55m、0.78m、1.27mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、一部楕円形もある。断面形はU字形を呈する。掘削深度は7~30cm。南側のものが全体に深い。北側のものについては上部が10cm程度削平されたためである。穴底は円形である。柱痕跡は、南側の2111・2112・2114・2115・2116ピットで認められた。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物 3 (図159・176)

西半部の中央やや南寄りに位置する。地形に平行する南東―北西棟の建物で、主軸はN-29°-Wを示す。

建物の規模は、梁間2間(北側復元2.38m、南側2.92m)、桁行3間(西側復元3.42m、東側3.58m)、床面積は復元約10.07㎡である。但し、北西角のピットは側溝に切られて欠損している。柱間寸法は、南側の梁間が西から1.45m、1.48m、北側が西から1.43m(復元)、1.4mである。西側の桁行が、北から1.12m(復元)、1.22m、1.06m、東側が南から1.2m、1.21m、1.16mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は5~23cmで、穴底は円形である。柱痕跡は、

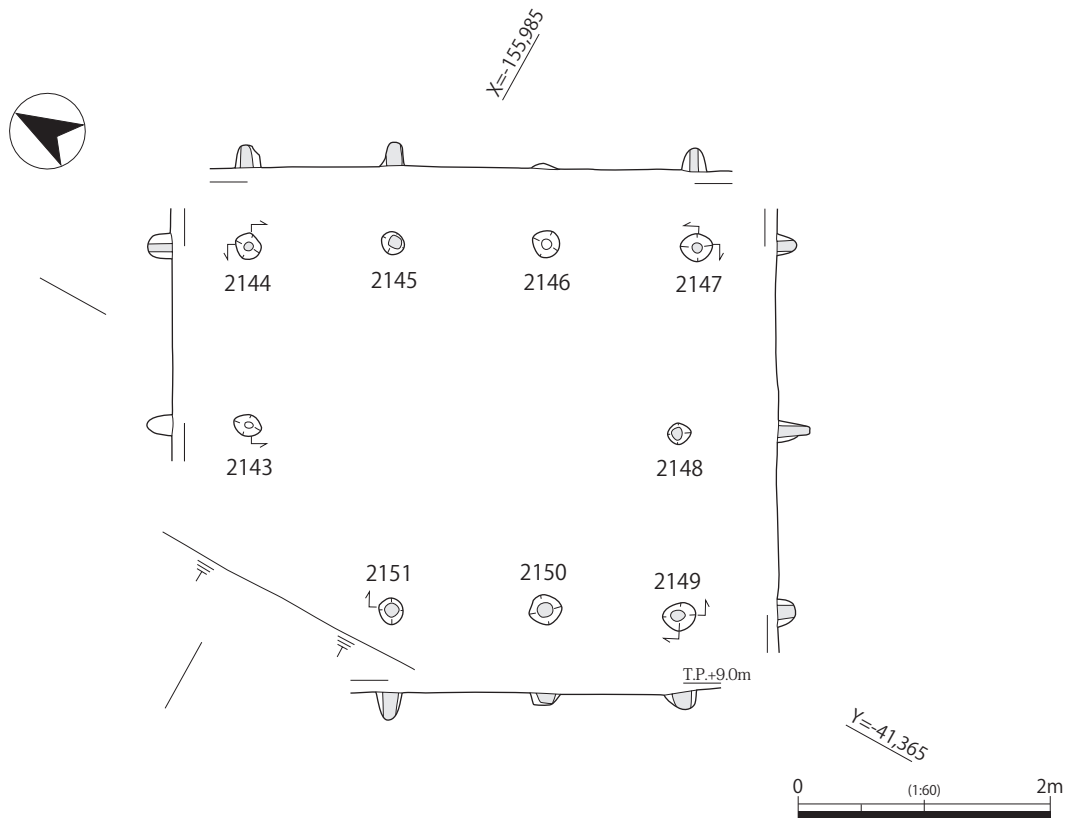


図176 掘立柱建物 3 平・断面図

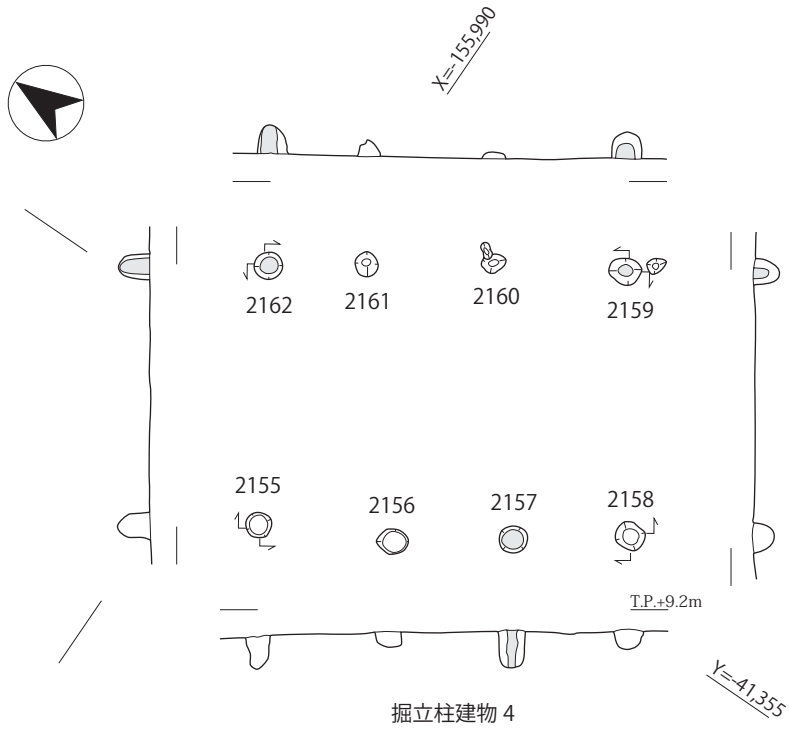


图177 掘立柱建物 4・5 平・断面图

2144・2145・2147・2148・2149・2150・2151ピットで認められた。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物4 (図159・177、図版26)

中央やや西寄りの南側に位置する。地形に平行する南東―北西棟の建物で、主軸はN-34°-Wを示す。少し離れるが、南東側に位置する2174溝が、平行して延びていることから、この掘立柱建物に付随する可能性も考えられる。

建物の規模は、梁間1間(南側2.1m、北側2.08m)、桁行3間(西側2.95m、東側2.82m)、床面積は約6.02㎡である。但し、梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、南側の梁間が2.1m、北側が2.08mである。西側の桁行が、南から0.94m、0.94m、1.08m、東側が、南から1.05m、1.01m、0.77mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は5～30cmで、穴底は円形である。柱痕跡は、2157・2159・2162ピットで認められた。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物5 (図159・177)

ほぼ中央部に位置する。地形に平行する南東―北西棟の建物で、主軸はN-59°-Wを示す。

建物の規模は、梁間2間(西側2.8m、東側復元2.87m)、桁行3間(南側3.11m、北側復元3.0m)、床面積は復元約10.99㎡である。但し、建物東半のピットは側溝に切られて欠損している。柱間寸法は、西側の梁間が、南から1.51m、1.28mである。南側の桁行が、西から1.07m、1.12m、0.9m、北側が1.17mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形である。断面形はU字形を呈する。掘削深度は6～25cmで、穴底は円形である。柱痕跡は、認められなかった。

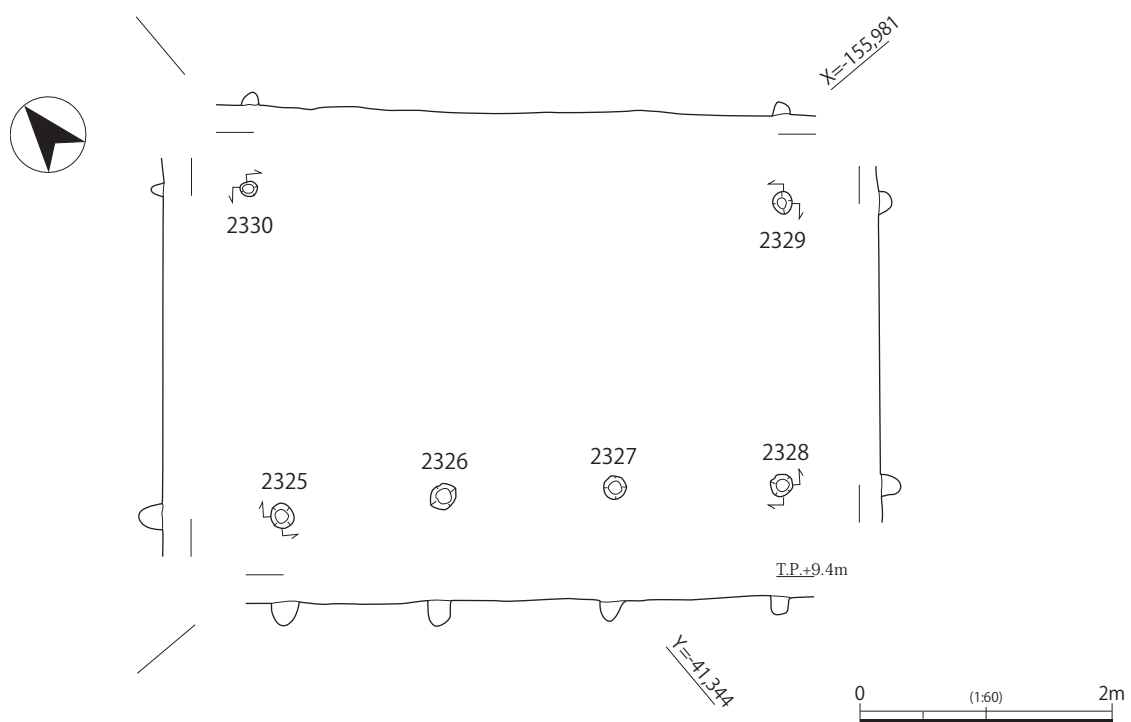


図178 掘立柱建物9 平・断面図

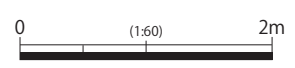
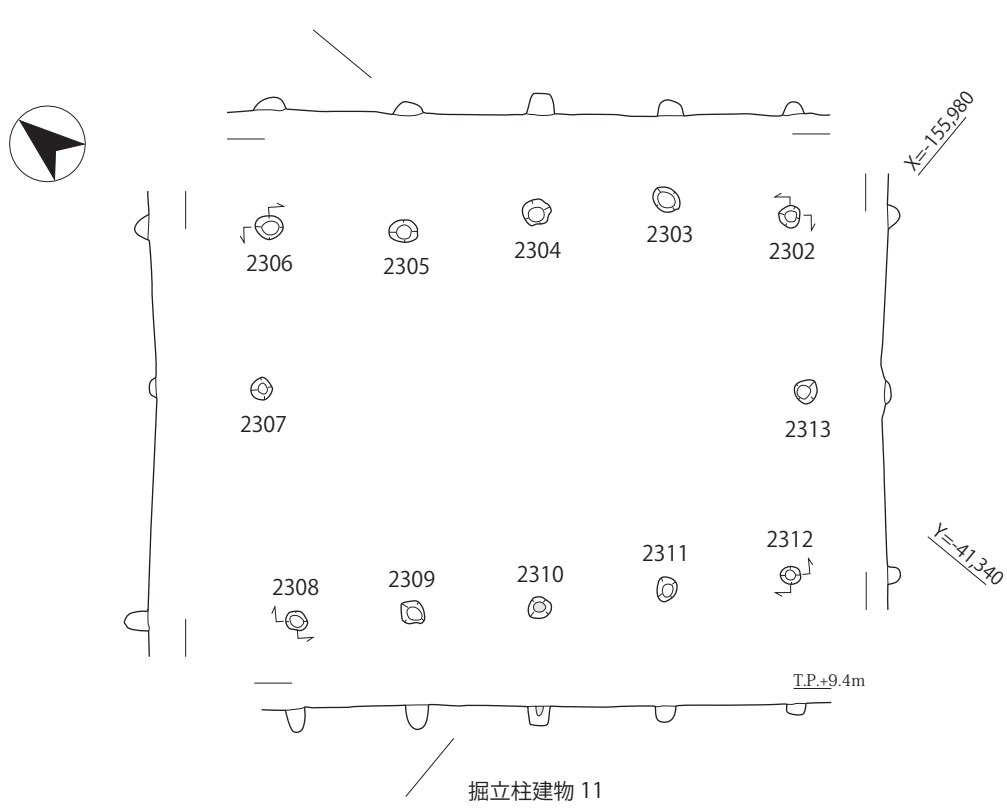
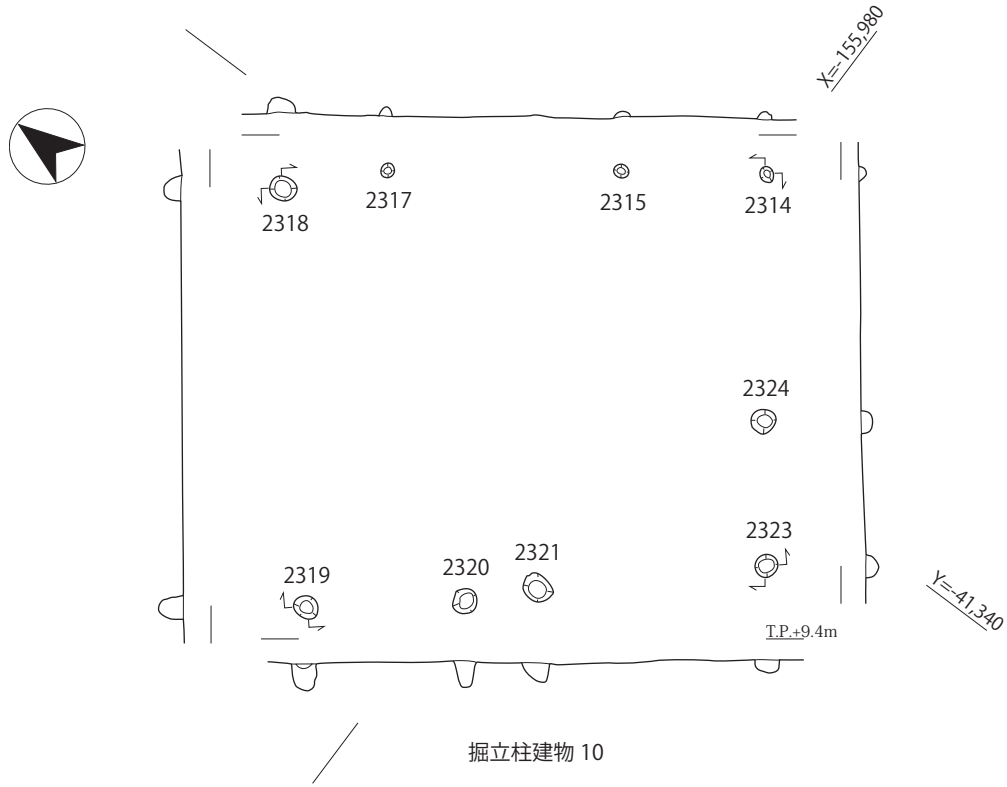


图179 掘立柱建物10・11 平・断面图

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物9 (図159・178、図版29)

中央やや東寄りに位置する。地形に平行する南東—北西棟の建物で、主軸はN-51°-Wを示す。後述の掘立柱建物10・11が東に位置する。南には、竪穴住居7・8・9が位置する。北には、2271土坑と2284土坑が位置する。

建物の規模は、梁間1間(西側2.6m、東側2.23m)、桁行3間(南側3.99m、北側4.25m)、床面積は約9.6㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、西側の梁間が2.6m、東側が2.23mである。南側の桁行が、東から1.33m、1.36m、1.3m、東側が、3間で4.25mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は12~20cmで、穴底は円形である。柱痕跡は、認められなかった。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物10 (図159・179、図版29)

中央やや東寄りに位置する。地形に平行する南東—北西棟の建物で、主軸はN-38°-Eを示す。後述の掘立柱建物11と切り合っており、掘立柱建物10の方が新しい。掘立柱建物11をやや南に移して、掘立柱建物10が建てられたものと考えられる。西には掘立柱建物9が、東には竪穴住居10が位置する。南には竪穴住居7・8・9が位置する。

建物の規模は、梁間2間(南側3.1m、北側3.32m)、桁行3間(西側3.65m、東側3.38m)、床面積は約11.9㎡である。但し、北側の梁間の中央ピットは検出されていない。柱間寸法は、南側の梁間が、西から1.14m、1.96m、北側が2間で3.32mである。西側の桁行が、北から1.25m、0.58m、1.82m、東側が、北から0.84m、1.85m、1.14mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は5~24cmで、穴底は円形である。柱痕跡は、認められなかった。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物11 (図159・179、図版29)

中央やや東寄りに位置する。地形に平行する南東—北西棟の建物で、主軸はN-40°-Eを示す。掘立柱建物10と切り合っており、掘立柱建物10の方が新しい。掘立柱建物11をやや南に移して、掘立柱建物10が建てられたと考えられる。北東側に2273溝が位置するが、掘立柱建物11に付随する可能性も考えられる。西に掘立柱建物9が、東に竪穴住居10が位置する。南には竪穴住居7・8・9が位置する。

建物の規模は、梁間2間(北側3.12m、南側2.85m)、桁行4間(西側3.93m、東側4.14m)、床面積は約12.06㎡である。柱間寸法は、南側の梁間が西から1.45m、1.4m、北側が西から1.85m、1.28mである。西側の桁行が、北から0.93m、0.98m、1.02m、0.98m、東側が北から1.06m、1.05m、1.02m、0.98mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は5~20cmで、穴底は円形である。柱痕跡は、2310ピットで認められた。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物12 (図159・180)

中央東寄りの南側に位置する。地形に直交する南西—北東棟の建物で、主軸はN-56°-Eを示す。西には2263土坑が、北には掘立柱建物14が、東には2298土坑がそれぞれ位置する。

建物の規模は、梁間1間(西側2.08m、東側1.89m)、桁行3間(北側2.8m、南側2.89m)、床面積は約5.6㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、西側の梁間が2.08m、

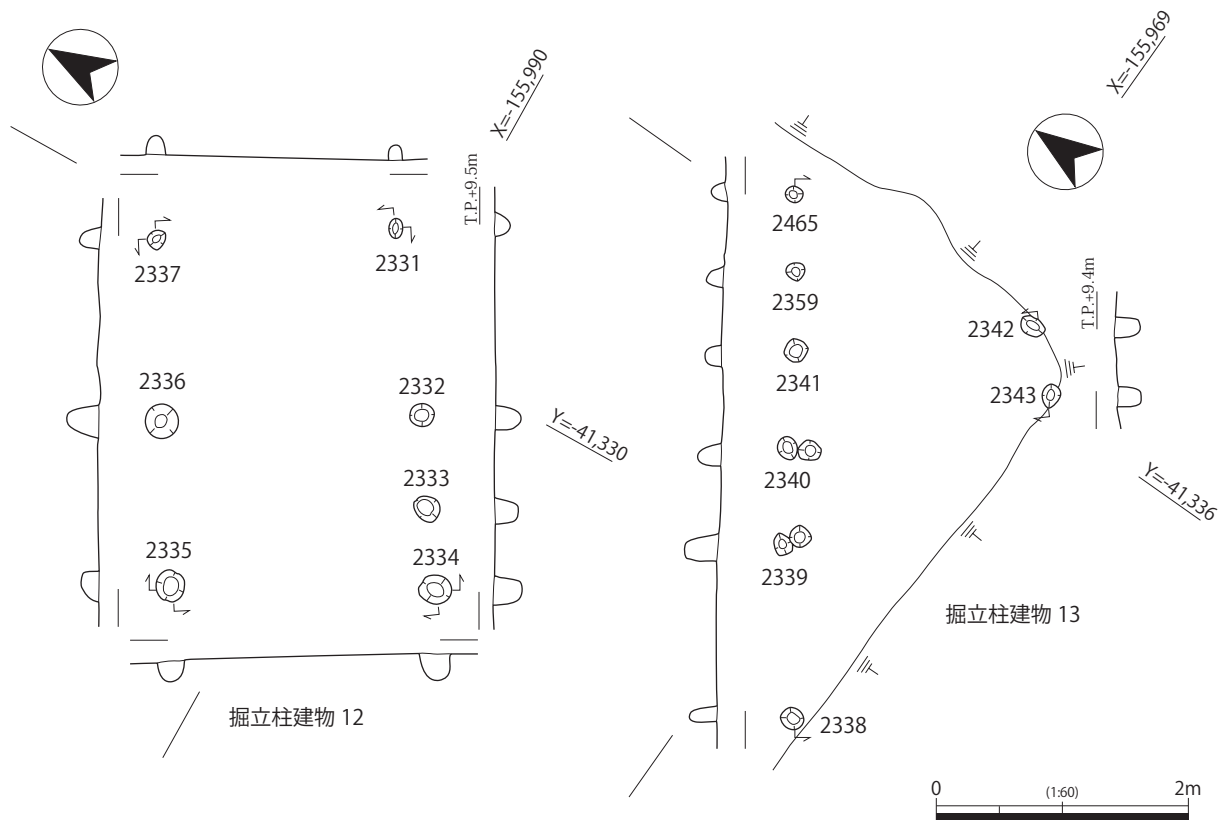


図180 掘立柱建物12・13 平・断面図

東側が1.89mである。北側の桁行が、西から1.34m、1.46m、南側が、西から0.66m、0.72m、1.51mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は13～32cmで、穴底は円形である。柱痕跡は認められなかった。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物13 (図159・180)

中央東寄りの北側に位置する。地形に直交する南西－北東棟の建物で、主軸はN-52°-Eを示す。但し、南西角のピットは側溝に切られて欠損している。

建物の規模は、梁間1間(西側復元2.27m、東側復元1.83m)、桁行5間(北側4.15m、南側復元4.16m)、床面積は約8.5㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、西側が復元2.27m、東側が復元1.83mである。北側の桁行が、東から0.62m、0.63m、0.78m、0.69m、1.43m、南側が一ヶ所0.55mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は11～26cmで、穴底は円形である。柱痕跡は認められなかった。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

掘立柱建物14 (図159・181)

中央東寄りの南側に位置する。地形に直交するほぼ東－西棟の建物で、主軸はN-85°-Eを示す。北には2296土坑が、南には掘立柱建物12が位置する。

建物の規模は、梁間1間(東側2.6m、西側2.59m)、桁行4間(北側4.63m、南側4.76m)、床面積は約12.2㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、西側の梁間が2.59m、東側が2.6mである。南側の桁行が、東から1.36m、1.11m、0.99m、1.3m、北側が、東から1.2m、1.08m、1.21m、1.14mである。柱穴の掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。

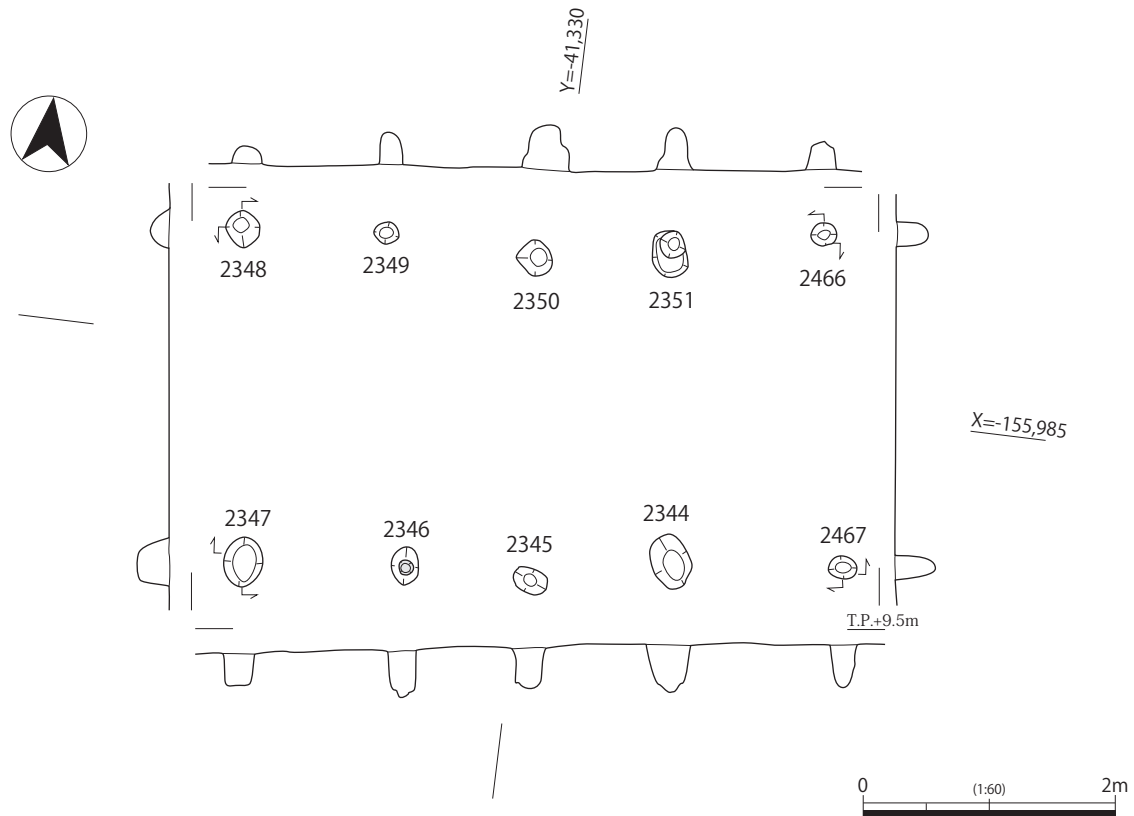


図181 掘立柱建物14 平・断面図

掘削深度は、15～38cm。穴底は円形で、一部柱痕の部分にはさらに一段窪んでいた。柱痕跡は、2346ピットで認められた。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

3. 柱列・ピット群

東半部の竪穴住居や土坑などの遺構群が密集している部分と、西半部で、ピット群の中から柱列を数条復元した。東半部の柱列に関しては、ピットの密集度が著しいことから、調査時には数本の柱列を復元したが、整理段階で可能性が低いと考えられたため、西半部の柱列のみを報告することとする。

柱列1 (図159・182)

中央やや西寄りの南端部で検出された。南南東から北北西方向に3基のピット(2163・2164・2165ピット)が並んだものとして、復元されたものである。2174溝をはさんで北西に掘立柱建物4が位置する。掘立柱建物4の主軸方向とほぼ同じ方向であるが、柱間寸法は異なっており、関係は不明である。埋土は、オリーブ黒色中砂～シルトが基本である。いずれも柱痕跡が認められる。

柱列2 (図159・182)

北西端部で検出された。西南西から東北東に3基のピット(2152・2153・2154ピット)が並んだものとして、復元されたものである。近接して掘立柱建物はみつかっておらず、西側に直交する方向の2127溝が位置する。埋土は、オリーブ黒色シルトが基本で、灰色偽礫を含む。2154ピットで柱痕跡が認められる。

柱列3 (図159・182)

南西端部で検出された。ほぼ東西方向に3基のピット(2139・2140・2141ピット)が並んだもの

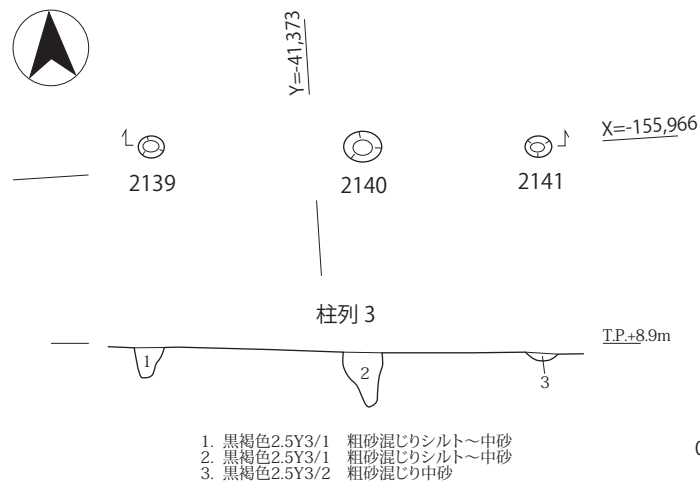
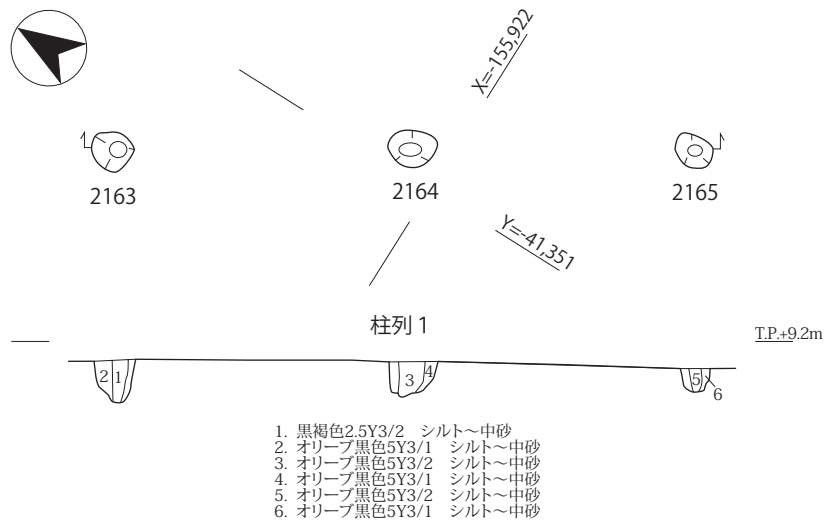


図182 11区柱列 平・断面図

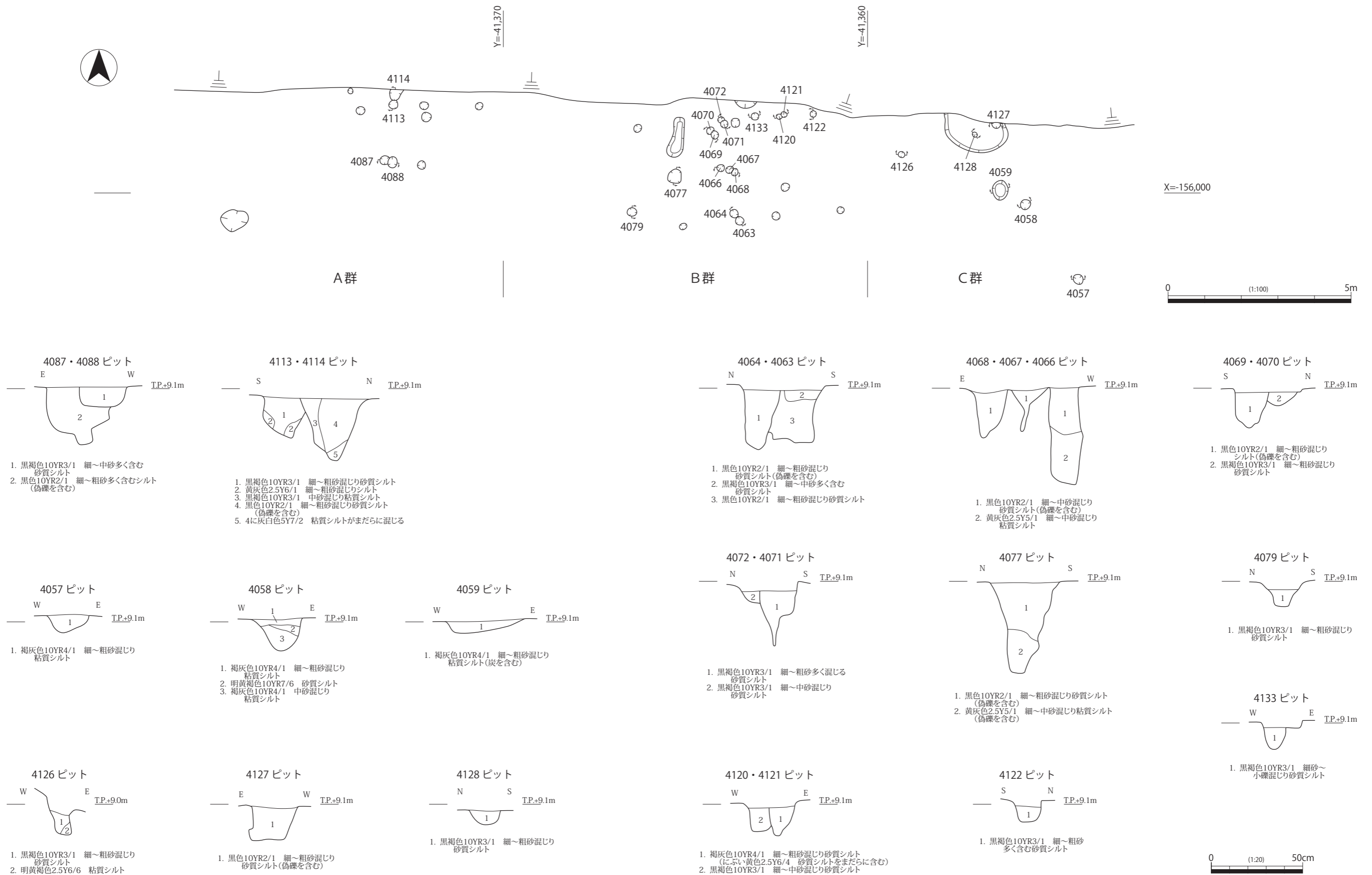


図183 11区ピット 平・断面図

として、復元されたものである。北側にほぼ平行して2128溝が位置しており、その北側に2138ピットがある。復元はできなかったが、掘立柱建物の一部で2128溝が雨落ち溝の可能性はある。埋土は、黒褐色粗砂混じり中砂～シルトが基本である。柱痕跡は確認できなかった。

ピット群 (図159・183、図版32)

南西端部に位置する、竪穴住居5の北側にピット群がある。竪穴住居5から見て北西の一群(A群)、北東の一群(B群)、西側の一群(C群)に分けられる。北側でも続きと考えられるピット群があるが、調査の工程上、側溝が縦断していることから、いずれも建物としての復元が困難である。

A群は、西側の一群で、10基のピットがある。4114、4088ピットは、掘方の径35cm、深さ30～35cmとしっかりしており、柱当たりが認められる。その他は径20～25cm、深さ15～20cmである。一回の切り合いが認められる。北側で検出されたピットと組み合って、柵あるいは建物の壁面となる可能性がある。

B群には、21基のピットがある。明確な柱当たりは認められない。4077、4066ピットは掘方の径に対して深さ50cmとかなり深く、4063、4064ピットも30cmを越える。その他は、掘方の径が20cm以下で、深さ10～20cmである。4067、4071ピットのように先端が細くなるものがある。1回の切り合いが認められる。4071、4066、4063ピットのように少し西に振った南北軸、およびそれに直交する4069、4133、4122ピットのような東西軸が想定できなくもないが、建物としては構成しにくい。4077(76)ピットからは、粗い刷毛目を施した甕の破片、4079、4120・4121ピットから弥生土器片を出土している。

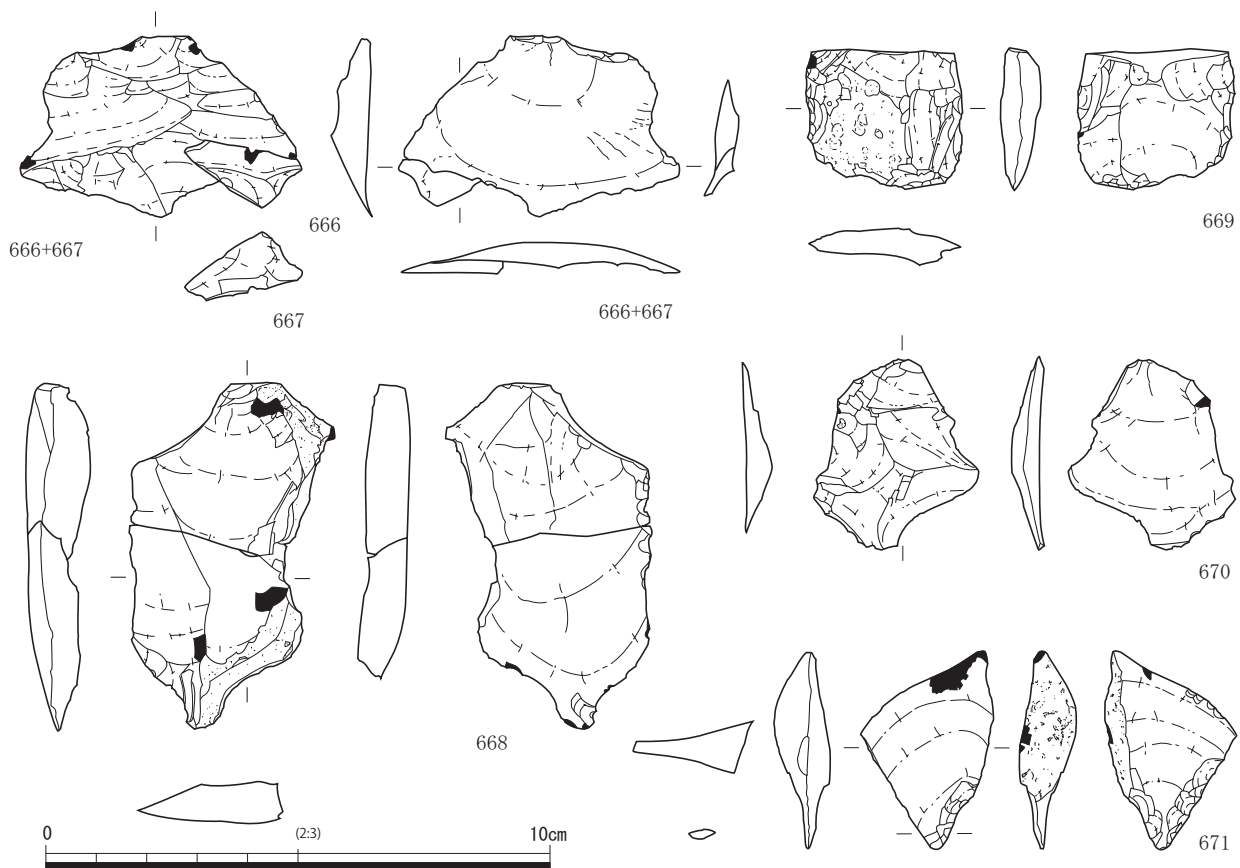


図184 2360ピット 出土遺物

C群は、6基あるがまとまりは少ない。4126、4127、4128ピットは土坑底面で検出され、土坑に伴うものか、切り合いを持つかは不明である。4127ピットは、径25cm、深さ20cmを測るが、他の2基は小型である。4057、4058、4059ピットは、径40～20cmの浅い土坑状を呈す。

2360ピット (図159・184)

中央南端部に位置しており、2129溝の南端部の東にある。周囲でピットは多く検出されているが、掘立柱建物を復元することはできなかった。サヌカイトがまとまって出土したことから、サヌカイトの埋納ピットの用途も考えられる。

サヌカイトの石器のみ16点出土した。内訳は、中型尖頭器の未成品1点、石錐未成品1点、二次加工のある剥片が7点、剥片が7点である。669は、上半が折れ欠損し、片面に自然面を留める中型尖頭器未成品と思われるものである。667の剥片は、666の二次加工のある剥片の末端側背面に接合した。668は、二次加工のある剥片が中央部で横方向に折れたものが接合した。その折れ面は凸凹しており、通常見かける折れ面とは異なるが、被熱によるものであろうか。670は剥片であるが、背面側に4方向からの剥離が見られることから、ポイントフレイクの可能性があると思われる。但し、打点の所に口唇状の突出部が見られず、剥片が大きく湾曲していないため、ポイントフレイクでは無い可能性もある。671は、側面に自然面を残し、打点を除去して錐部を作り出した石錐の未成品と考えられるものである。

4109ピット (図159)

4040流路の肩部で検出した。不整形円形を呈しており、長さ0.8m、幅0.6mを測る。中央に径0.2mの円形の窪みが見られ、柱穴の可能性が高い。埋土は、黒褐色粘質シルトである。

4. 土坑

土坑も、他の遺構と同様に中央部に集中しているが、竪穴住居との重複はほとんどない。密集して検出されているが、土坑間の重複関係もあまりみられないことから、時期差がないことを示しているものといえる。

4094土坑 (図159・185・187)

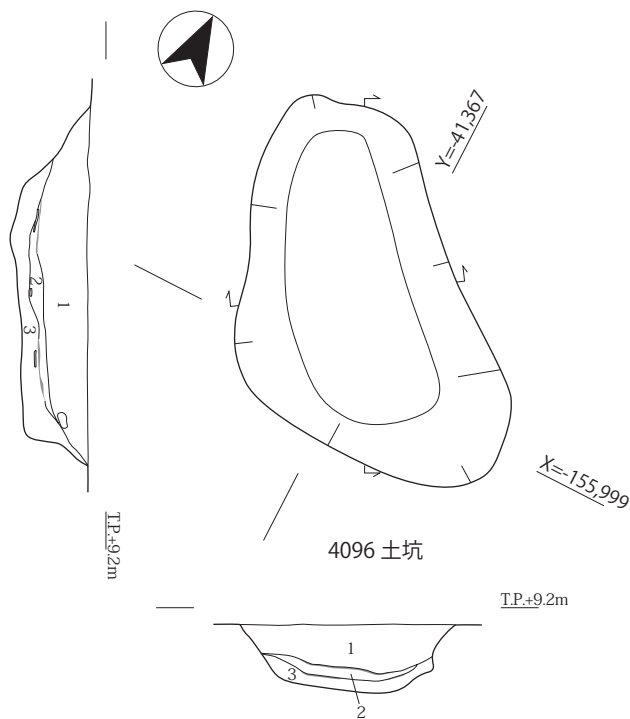
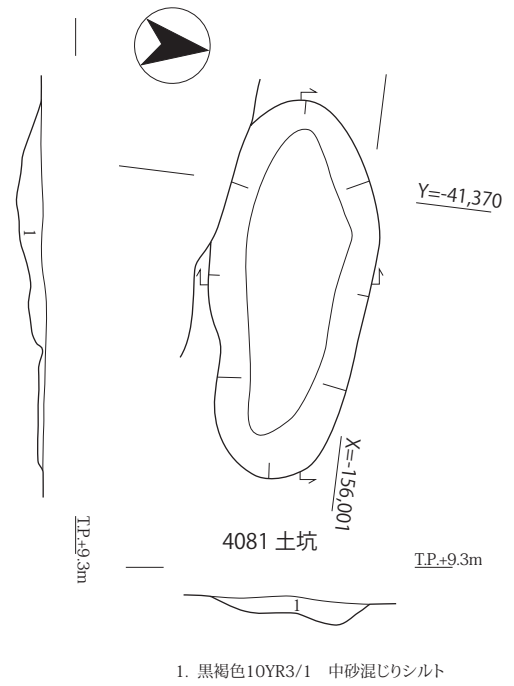
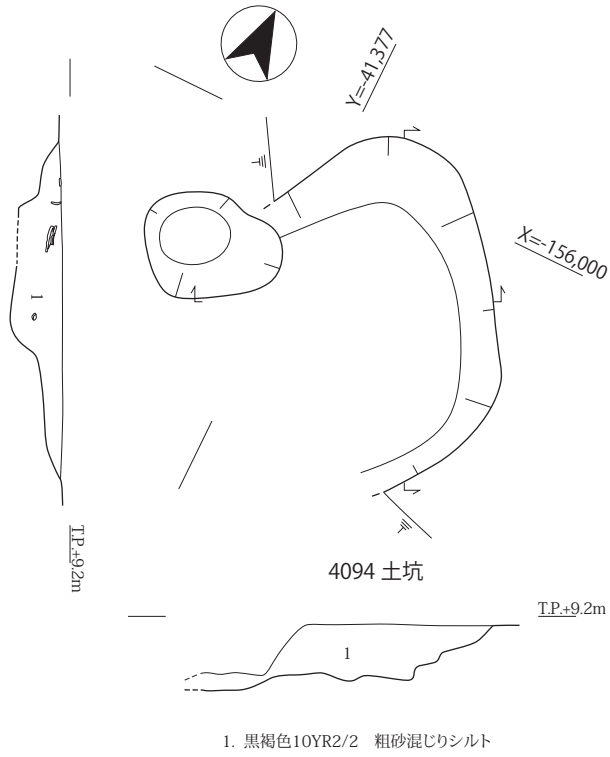
南西端部に位置する。西部を4040流路に切られているが、不整形長方形を呈すと考えられる。長径1.9m、短径約1.2m、深さ0.3mを測る。底面には凹凸がある。埋土は、黒褐色シルトである。

弥生土器が出土した。672は広口壺の小片で、口縁部が大きく開き、端部に直立する面を持つ。673は、甕の蓋の可能性がある。石器では、石核1点、剥片1点、石核・剥片各1点を出土した。

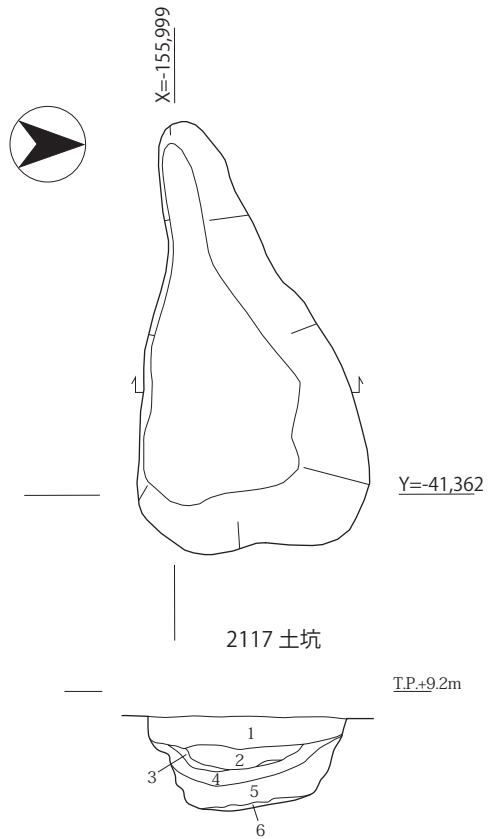
4081土坑 (図159・185・187、図版32)

南西端部に位置する。掘り込み面は第7e層中にあるが、第8層上面で検出した。楕円形を呈し、皿状に窪む。長径1.97m、短径0.8m、深さ0.13mを測る。竪穴住居10を切る。埋土は、黒褐色シルトである。

埋土上面より約15cm上で検出された弥生土器(広口壺口頸部)は、本来この土坑に伴った可能性がある。壺は中期初頭である。678は、口径29cmに復元される大型の広口壺である。口頸部は直立した後、緩く外反し、端部は肥厚して面を持つ。摩滅が著しいが、頸部に櫛描直線文の痕跡を認める。畿内第Ⅱ様式でもやや新しい段階であろう。生駒山西麓産の胎土を持つ。



1. 褐灰色10YR4/1 細～粗砂混じり粘質シルト (偽礫を含む)
2. 褐灰色7.5YR6/1 中砂混じり粘土
3. 黒褐色10YR3/1 細～粗砂混じり粘質シルト (炭を含む)



1. 黒褐色10YR2/2 粗砂混じり細砂
2. 黒褐色10YR2/3 粗砂混じりシルト～細砂 (炭化物を多く含む)
3. 黄褐色2.5Y5/6 細砂 偽礫層
4. 黒色5Y2/1 中砂混じりシルト～細砂
5. 黒色2.5Y2/1 粗砂混じりシルト～中砂
6. 黒色2.5Y2/1 シルト



図185 11区土坑 平・断面図 (1)

4096土坑 (図159・185・187)

西半部の中央南端部に位置する。2130土坑の南西側で、4075土坑の西側に隣接する。西側には4097土坑が隣接している。不整形を呈し、長さ2.2m、幅1.3m、深さ0.42mを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は、上半部が黒褐色粘質シルトに偽礫を含み、中部がレンズ状に堆積した褐灰色粘土で、層の上面と下面に薄く炭層を含み、下部は黒褐色粘質シルトである。

弥生土器の甕口縁部1点、底部1点、弥生前期の削り出し突帯をもつ壺の口縁などを出土した。680は、1条の沈線を施した削出凸帯をもつ畿内第I様式の壺の体部である。遺構への混入であろう。681～683は甕で、681は体部が張る形態を呈し、斜めヘラミガキを施す。内面に炭化物が付着する。灰白色を呈すことから搬入品と考えられる。685は壺の底部、684は甕の底部である。畿内第II様式である。石器では、石核1点、剥片2点が出土した。

2117土坑 (図159・185・187)

西半部の中央やや南寄りに位置する。平面形は不整形を呈し、長さ約2.3m、幅0.4～1.2m、深さ約0.5mを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は、上半部が黒褐色粗砂混じり細砂、下部が黒色中砂～シルトが主体である。上層の下面に炭化物を多く含む。

675は小片だが大型の甕である。674は小型の甕で、体部は厚く口縁が僅かに外反するのみ。外面横ヘラミガキ、口縁部は横ハケ、内面は摩滅で不明である。内傾接合。676は甕の底部で、底面に指頭圧痕を残す。677は、壺の底部と推測され、生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。

2130土坑 (図159・187)

西半部の中央南端部に位置する。南半部を土層確認トレンチで掘り下げたため、不明であるが、楕

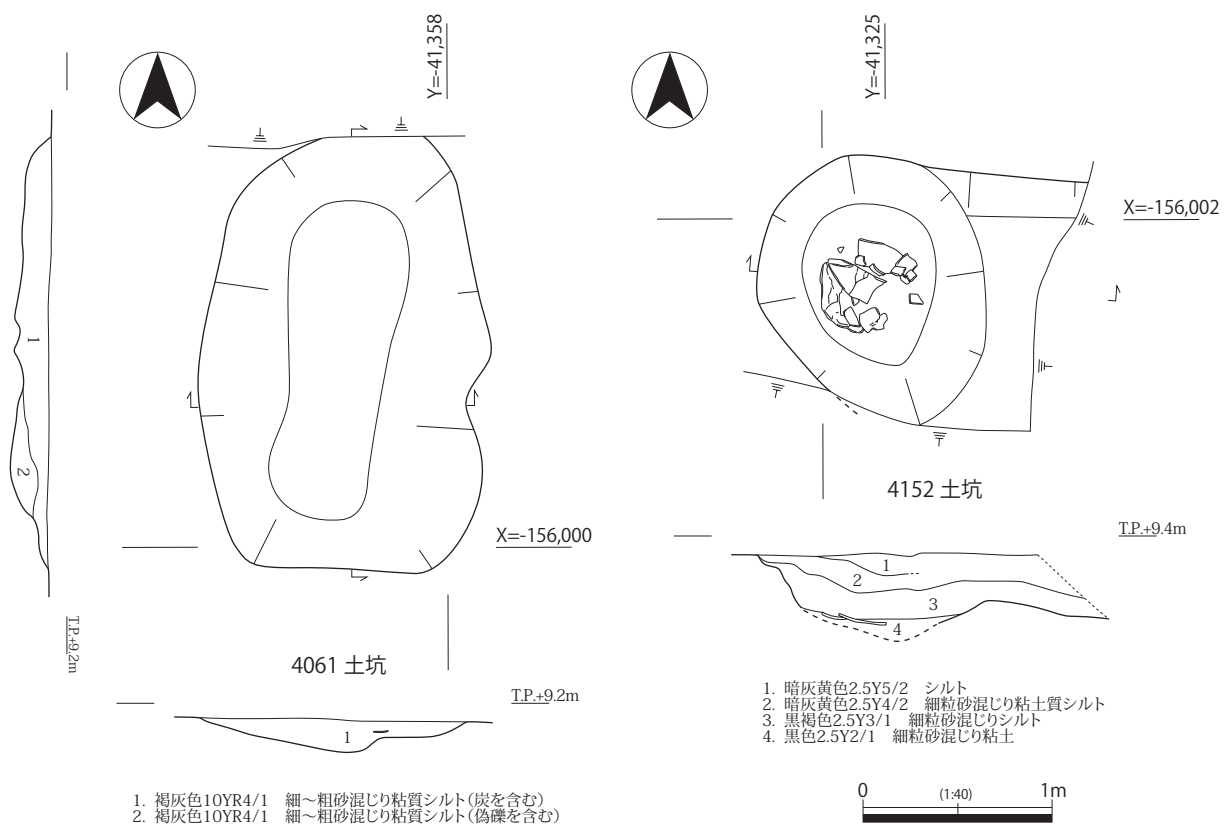


図186 11区土坑 平・断面図 (2)

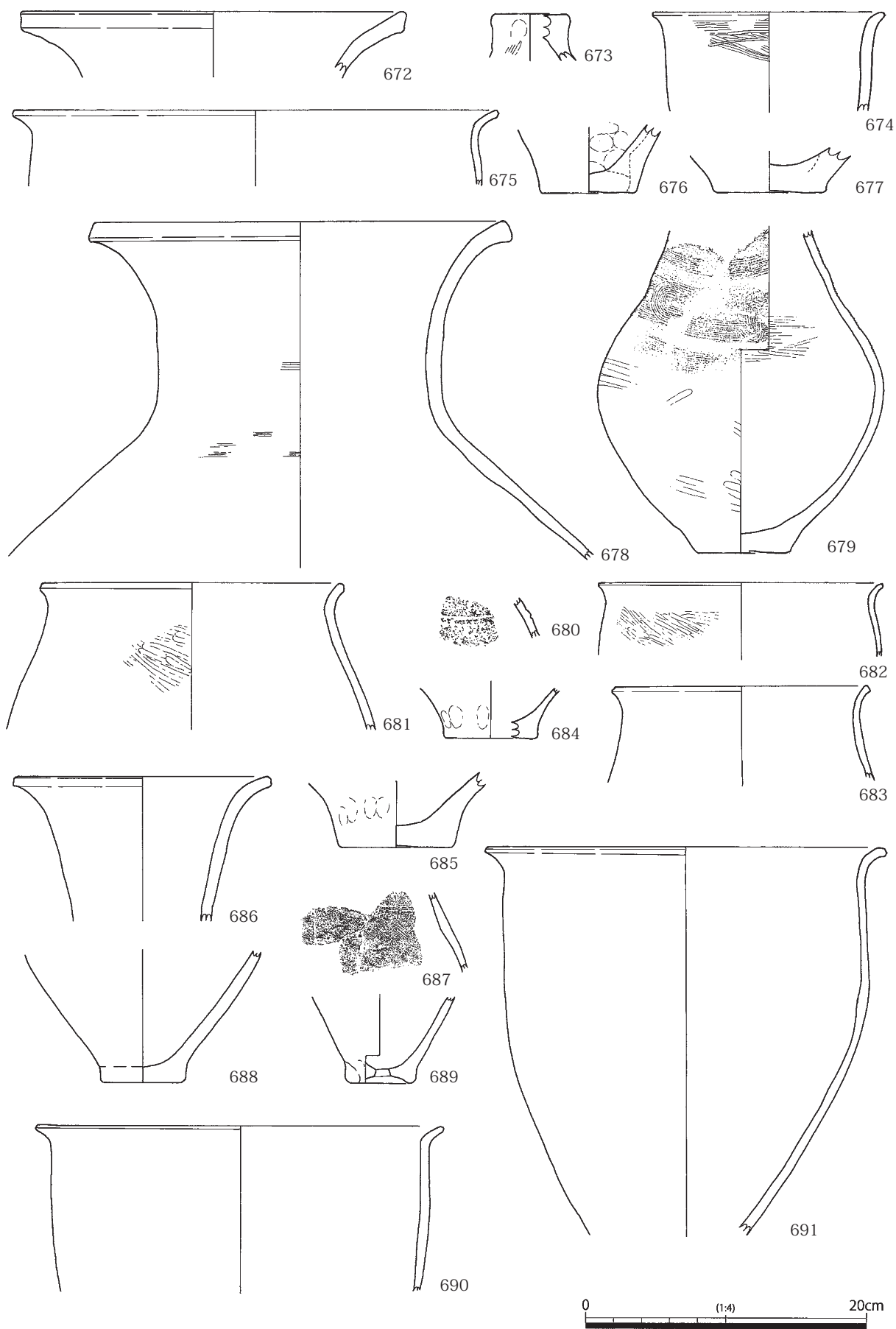


图187 11区土坑 出土遗物 (1) 土器 1

円形を呈するものと考えられる。残存長で南北方向約0.55m、東西方向約1.35m、深さ約10cmである。埋土は、黒褐色粗砂混じり中砂～シルトである。

679は長頸広口壺で、横位の櫛描直線文（8条／1.5cm）の2帯を繋ぐようにS字形の扇状文を付加して疑似流水文としている。櫛描文間はヘラミガキを巡らす。体部外面はヘラミガキ、内面も一部ヘラミガキ調整する。外面の一部に黒色物質が塗布されている。

2266土坑（図159・187）

中央やや南東寄りに位置する。竪穴住居7の南に隣接している。竪穴住居3と7の間でまとまって土坑が検出されており、そのうちの1基である。平面形は楕円形を呈しており、長軸約1.7m、短軸約0.9m、深さ約20cmである。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色礫混じり細砂～シルト、下層は黒褐色細砂～シルトである。

686は、長頸広口壺であろう。口頸部がラッパ状に開き、摩滅が著しいが櫛描文らしき痕跡が認められる。生駒山西麓産の胎土を持つ。

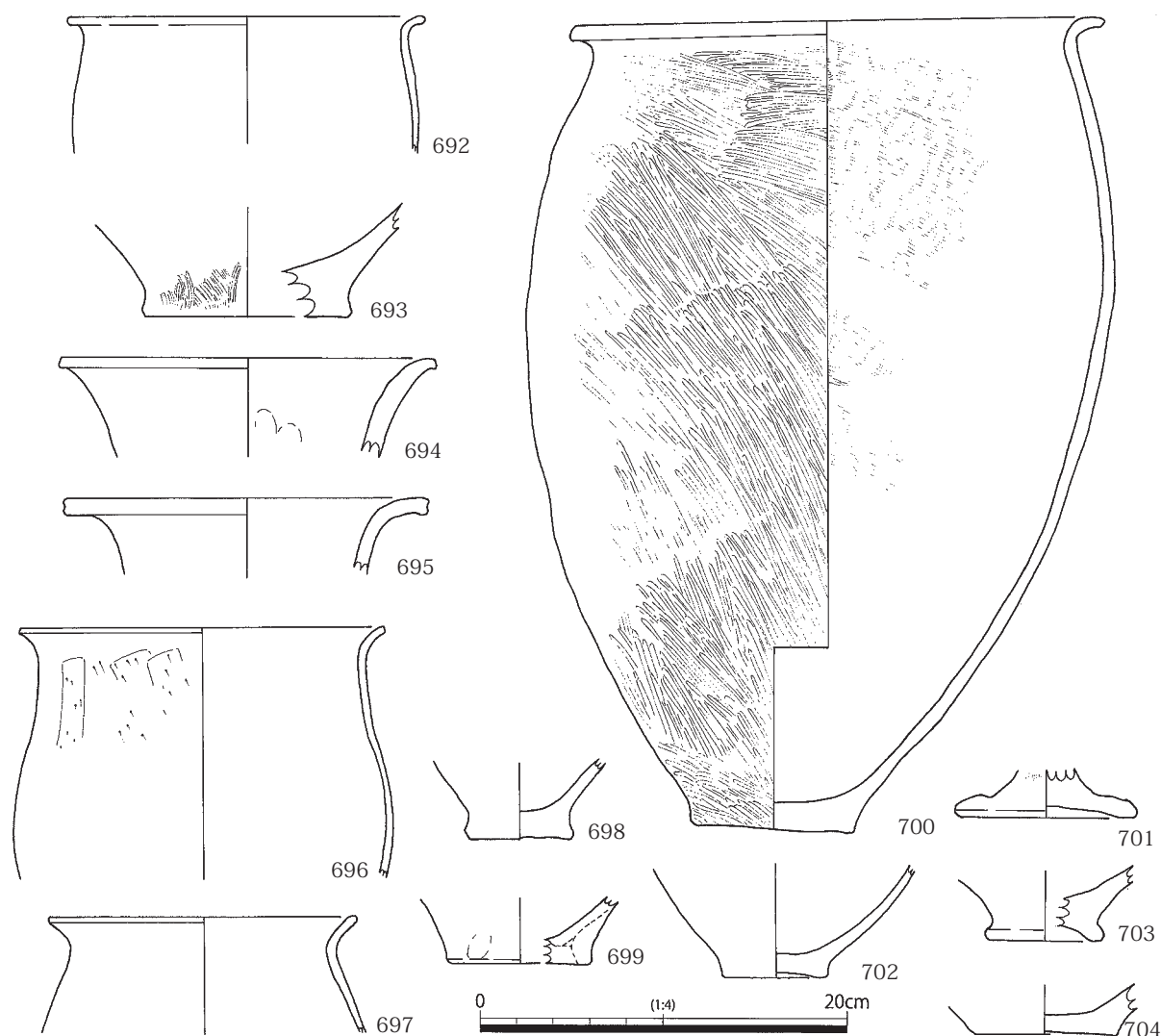


図188 11区土坑 出土遺物（2）土器2

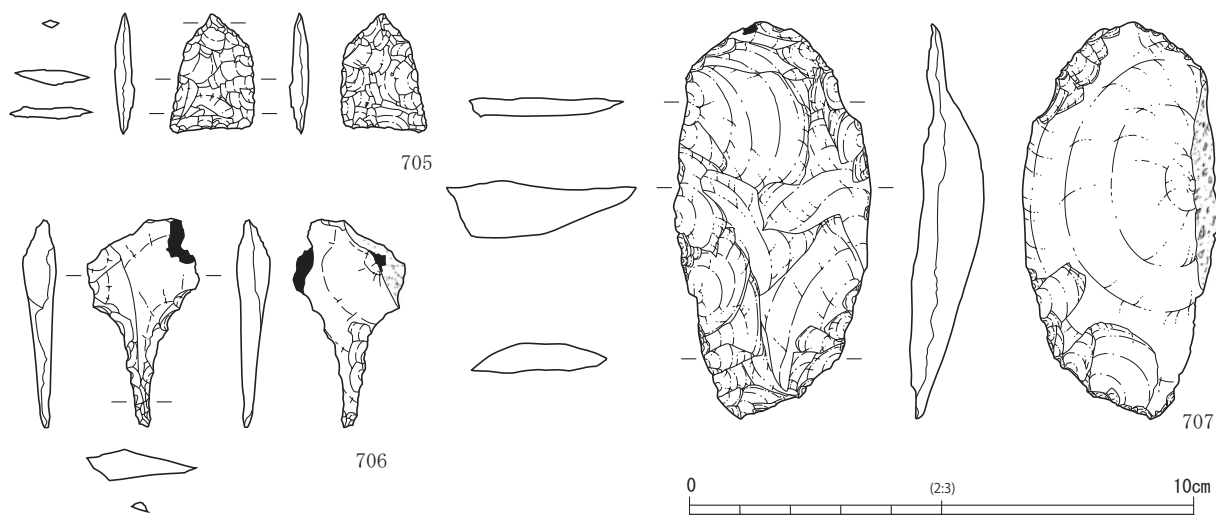


図189 11区土坑 出土遺物(3) 石器 1

2270土坑 (図159・187、図版29)

中央やや東寄りに位置する。2273土坑を切っている。掘立柱建物11の北側に隣接する。竪穴住居14と掘立柱建物10・11の間でまとまって土坑が検出されており、そのうちの1基である。平面形は楕円形を呈しており、長軸約2.7m、短軸約1.0m、深さ約10cmである。

687は壺の体部で、櫛描簾状文(7条/9mm、ピッチ2~3mm)と波状文を巡らす。畿内第Ⅲ様式に下る可能性もある。

石器では、二次加工のある剥片1点、楔形石器1点、剥片2点、チップ3点が出土している。

2273土坑 (図159・187、図版29)

中央やや東寄りに位置する。北側で2270土坑に切られている。掘立柱建物10・11の北東側に沿うように隣接する。平面形は溝状を呈しており、長さ約5.4m、幅約1.0m、深さ約10cmである。

南端部でまとまって弥生土器が出土した。691は大型の甕で、口縁は緩く外反し、端面は丸みをもつ。剥離のため調整不明である。生駒山西麓産の胎土を持つ。

石器では、スクレイパー2点、二次加工のある剥片1点、剥片1点、チップ1点が出土している。

2296土坑 (図159・187)

中央部東側に位置する。竪穴住居10の東側に隣接する。平面形は溝状を呈しており、長さ約2.4m、幅約0.8m、深さ約10cmである。

688は甕の底部で平底、調整不明だが、内面に炭化物が残る。

2283土坑 (図159・187)

中央やや東寄りに位置する。2270・2273土坑の北側に隣接する。平面形は楕円形を呈しており、長軸約1.1m、短軸約0.6m、深さ約10cmである。

689は甕の底部で、焼成前に一孔を穿つ。

2268土坑 (図159・187)

中央やや南東寄りに位置する。竪穴住居3と7の間でまとまって検出されている土坑のうちの1基である。2267土坑の西側に隣接する。平面形は楕円形を呈しており、長軸約1.0m、短軸約0.6m、深さ約15cmである。埋土は、黒褐色細砂混じりシルトである。

690は甕で、口縁部がく字形に外反する。剥離のため調整不明である。生駒山西麓産の胎土を持つ。

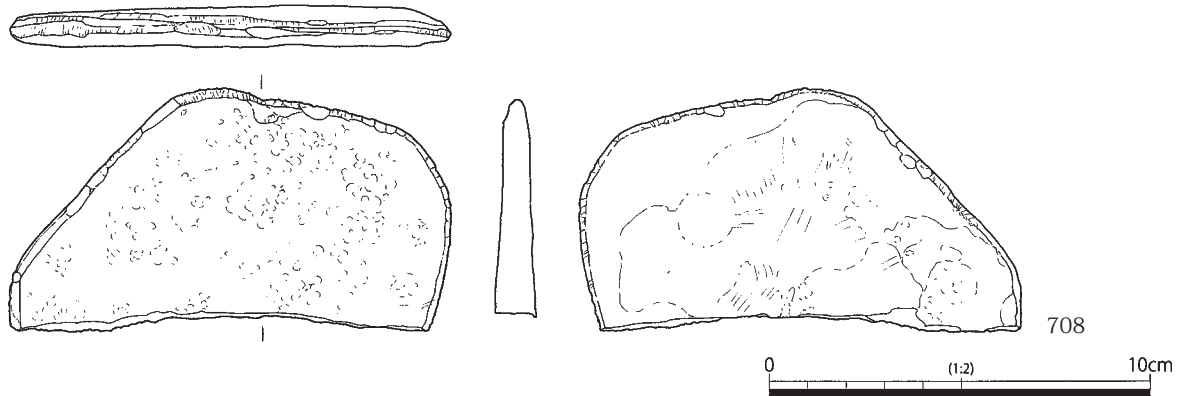


図190 11区土坑出土遺物（4）石器2

4061土坑（図159・186・188）

中央西寄りの南端部に位置する。4060土坑の西側に隣接する。不整長方形を呈し、長径1.88m、短径1.42m、深さ0.2mを測る。底面には凹凸がある。埋土は、黒褐色シルトで炭粒を含み、下部の一部に偽礫が見られる。底面には凹凸がある。

弥生土器の底部及び、面取りした口縁部を含む小片を出土した。692の甕は、口縁端部を下へ折り曲げるように肥厚させる。生駒山西麓産の胎土を持つ。693は壺の底部で、外面ヘラミガキ調整する。

4147土坑（図159・188～190、図版85・88～90・95）

竪穴住居3に先行する遺構として、4147土坑がある。平面形は不整楕円形を呈している。遺構の詳細については、竪穴住居3の項で述べている。

694・695は広口壺の口縁で、695は端部が下方にやや下がり、直立する端面は凹線状に窪む。生駒山西麓産の胎土である。696の甕は、頸部が直線的で外面をヘラケズリ調整し、胎土に結晶片岩片を含む紀伊形である。この他、9条/1.2cmの櫛描直線文を施す鉢の上半部が出土している。畿内第Ⅱ様式である。

石器では、敲き石が3点、石鏃4（未成品1）点、石錐2点、石小刀未成品1点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片26点、楔形石器1点、剥片25点、チップ1点が出土している。708は、扁平な礫混じり砂岩礫の平坦面に打撃痕、周縁に角度の異なる面をなす線状打撃痕がみられる。一辺は割れており、元々の全体の大きさは不明である。708は、平坦面の打撃痕から敲き石としての用途とともに、台石としても機能した可能性が考えられる。他に図化していないが敲き石として、線状打撃痕のみられる砂岩1点、線状打撃痕および敲打痕のみられる花崗斑岩が1点ある。

705は、基部底辺が極僅かに窪む平基式の石鏃であり、平面形態が左右対称ではない。706は、頭部と錐部の区別が明確な石錐であり、両面には大剥離面を留める。707はスクレイパーであり、刃部は縁の約2/3に剥離調整を施している。背部には自然面、裏面に大剥離面を留める。

4152土坑（図159・186・188、図版85）

中央やや東寄りの南端部で、第9a層掘り下げ後に検出された。溝状の土坑で、西側が円形に深くなり、底から土器が出土した。埋土は、黒褐色シルトである。

700は、大型の甕で約半分が残存し、口径29.0cm、高さ45.1cmを測る。口頸部は短く外反し、体部は僅かに張りを持つ。平底である。体部外面は斜ヘラミガキを密に施し、内面上半はハケ調整し、口頸部はヨコナデ調整で端部を丸く仕上げる。体部外面の一部に炭化物が付着する。702は甕の底部で、やや

上げ底になる。703は鉢の底部、701は外側へ大きく張り出した形状で、高杯あるいは鉢になると考えられ、生駒山西麓産の胎土を持つ。

石器では、スクレイパー1点、石核1点、剥片7点、チップ13点が出土している。

4075土坑 (図159・188)

西半部の中央南端部に位置する。2130土坑の南側で、4096土坑の東側に隣接する。溝状を呈しており、長さ1.2m、幅0.42m、深さ0.15mを測る。埋土は、黒褐色粘質シルトで偽礫を含む。

704は壺の底部で、外面に棒状工具の圧痕、内面板ナデ痕が残る。他に櫛描文を施した小片が出土している。畿内第Ⅱ様式である。

4056土坑 (図159)

中央西寄りの南端部に位置する。竪穴住居5の南側に隣接する。楕円形を呈し、長径1.33m、短径0.8m、深さ0.09mを測る。浅く窪む。埋土は、黒褐色粘質シルトである。弥生土器の小片を出土した。

4060土坑 (図159)

中央西寄りの南端部に位置する。竪穴住居4の西側に隣接する。北部は土層観察用トレンチで削られるが、不整円形を呈していると考えられる。長さ1.8m、深さ0.1mを測り、浅くレンズ状に窪む。底面には凹凸がある。埋土は黒褐色シルトである。

4119土坑 (図159)

西半部の中央南端部に位置する。4075土坑の東側にあたるが、北部は土層観察用トレンチで削られる。弧状を呈し、幅0.6m以上、深さ0.31mを測る。壁は急に落ち、底面は平坦である。埋土は、上半部が黒褐色砂質シルトで、炭層、土器片、サヌカイト片を含む。下部は偽礫を含む。

櫛描直線文(6条/1.2cm)を施す弥生土器の小片、サヌカイト剥片2点、チップ67点を出土した。畿内第Ⅱ様式である。

4097土坑 (図159)

西半部の中央南端部に位置する。4096土坑の西側に隣接する。楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.07m、深さ0.18mを測る。底面には凹凸がある。埋土は、黒褐色粘質シルトである。

遺物は、小さな窪み底をもつ弥生土器の底部、石核1点が出土した。

5. 溝・流路

全体に溝の検出は少ない。流路に取り付くような溝はみられず、流水のための溝は検出されていないといえる。東半部では、集落域の東限を示すような大規模な流路が検出されている。

2128溝 (図159・192)

西半部の南側に位置している。柱列3の北側にあり、東西方向に延びる。掘立柱建物の雨落ち溝とも考えられるが、ピットはあまり検出されておらず、はっきりしない。検出面で、長さ約4.0m、幅約0.8m、深さ10~15cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂混じり中砂~シルトで、炭化物を含む。

709は広口壺で、口縁端部が肥厚し、下端部に押捺突帯文を巡らす。剥離のため調整不明である。710は壺の底部で、摩滅が著しいが、内面に炭化物痕を残す。共に、生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。

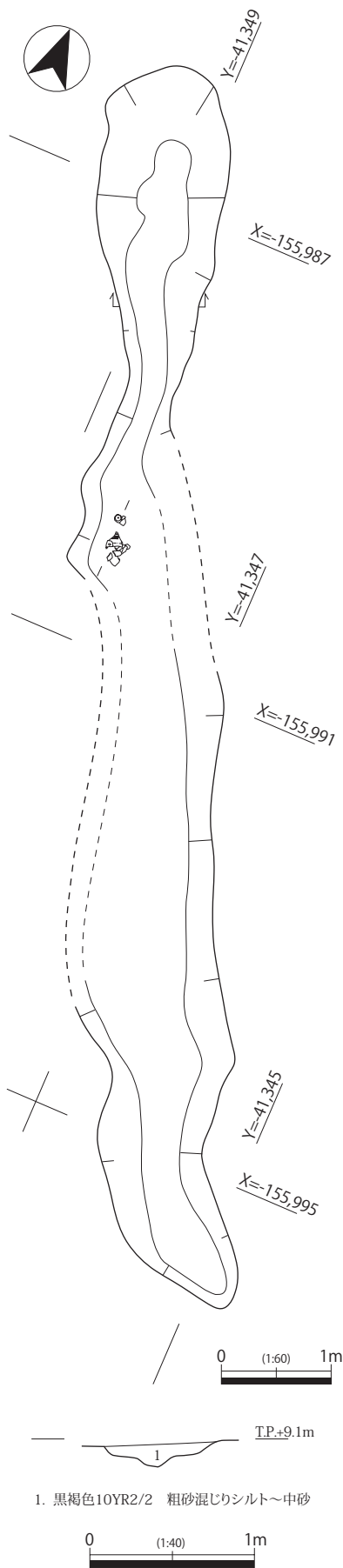


図191 2129溝 平・断面図

2107溝 (図159・192・193、図版88)

中央西寄りの南端部に位置している。竪穴住居4の西側にあり、南北方向に延びる。南側は、土層観察用トレンチで削られている。検出面で、長さ約4.2m、幅0.5～1.2m、深さ10～20cmを測る。

711は甕で、摩滅が著しい。生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。石器では、石鏃1点、二次加工のある剥片5点が少量出土している。725は、平基式の中央が浅く外湾した平面形をなす。

2301(4022)溝 (図159・192)

東半部の2120流路の東側に位置している。第9c層上面に構築される。流路とほぼ平行に延びている。断面はU字形を呈しており、幅0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は、黒褐色シルトである。

712は甕蓋である。頂部は凹み、つまみの基部には指頭圧痕が残る。摩滅が著しい。

2127溝 (図159・192)

西半部の北端部に位置する。南南東から北北西に向かって延びており、北側は調査区外に及ぶ。検出面で、長さ約10.4m、幅0.6～1.2m、深さ約25cmを測る。埋土は、2層に分かれており、上層は黒色中砂～シルト、下層はオリーブ黒色中砂～シルトである。

713は甕の底部で、僅かに上げ底で内面に指頭圧痕を認める以外剥離のため調整不明である。714・715は底部である。いずれも剥離で調整不明だが、715には、内面に僅かにヘラミガキが残る。

2129溝 (図159・191～193、図版89)

中央部南寄りに位置する。南南東から北北西に向かって延びている。検出面で、長さ約9.0m、幅0.4～1.2m、深さ約15cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂混じり中砂～シルトである。

中央部で弥生土器が出土した。716は長頸広口壺である。口頸部は緩やかにカーブした後、外反する。摩滅が著しいが、櫛描簾状文(7条)の痕跡がある。717は壺の体部で、櫛描直線文と連続扇形文に近い波状文を巡らす。718は甕で、やや長胴で外面に板ナデ上を一部ヘラミガキする。内面摩滅。719は甕の底部と考えられ、内外両面から貫通しない小孔をあける。717・719は生駒山西麓産の胎土で、719は粗粒の角閃石を含む。

石器では、石鏃2点、石錐1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片2点、チップ4点が出土している。726は、石錐の頭部と錐部が明確なものである。錐部先端のエッジは摩滅している。

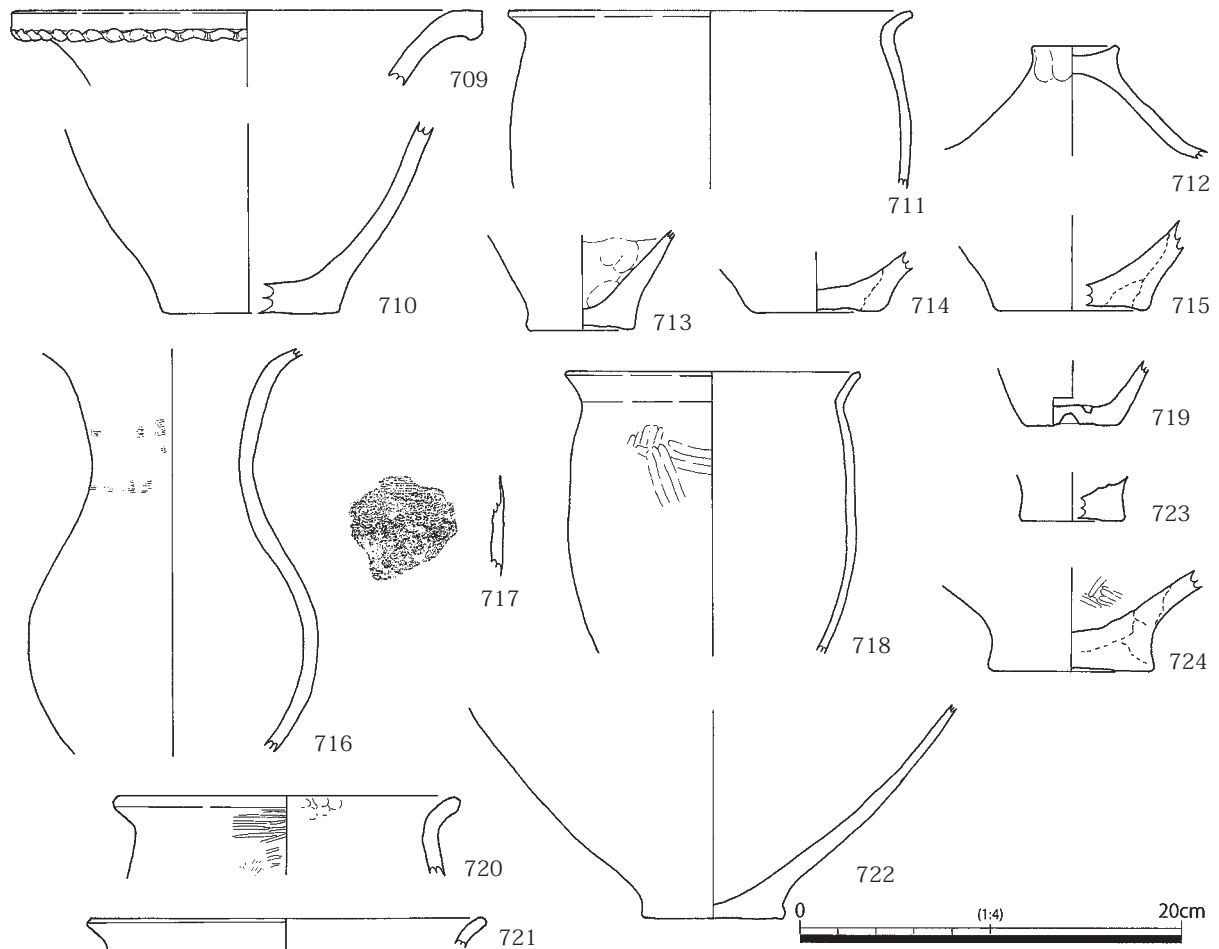


図192 11区溝 出土遺物 (土器)

2110溝 (図159・192)

中央部やや西寄りに位置する。掘立柱建物2の南柱通りの南側約0.7m離れた部分で、平行して延びている。規模が大きいが、掘立柱建物の雨落ち溝とも考えられる。検出面で、長さ約6.1m、幅0.5~0.7m、深さ約20cmを測る。埋土は、2層に分かれており、上層は黒褐色粗砂混じり細砂、下層は黒色中砂混じり細砂~シルトである。

720・721は甕の小片で、720は厚味があり、外面縦ハケ、口縁部は横ヘラミガキ調整をする。722は壺の底部である。723は小型の甕の底部で、生駒山西麓産の胎土を持つ。724は壺の底部で、内面にヘラミガキを残す。

4092溝 (図159)

南西端部に位置する。4094土坑の東側に隣接している。検出面で、長さ1.9m、幅0.2mを測る。埋土は、黒褐色粘質シルトである。

4053溝 (図159)

中央やや東寄りの南部で検出された。4017流路の西側肩部にあり、平行して走る。検出面で、幅3~4mの溝状の凹みである。調査区の南端では二又に分かれる

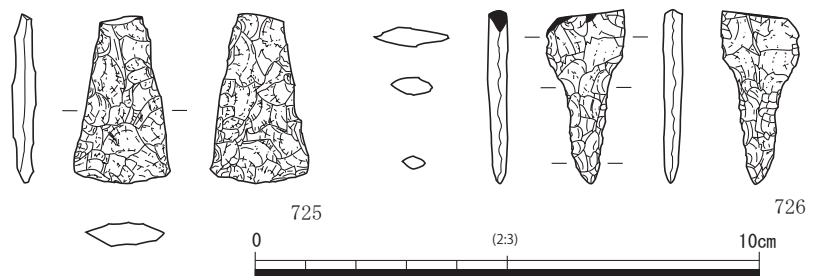


図193 11区溝 出土遺物 (石器)

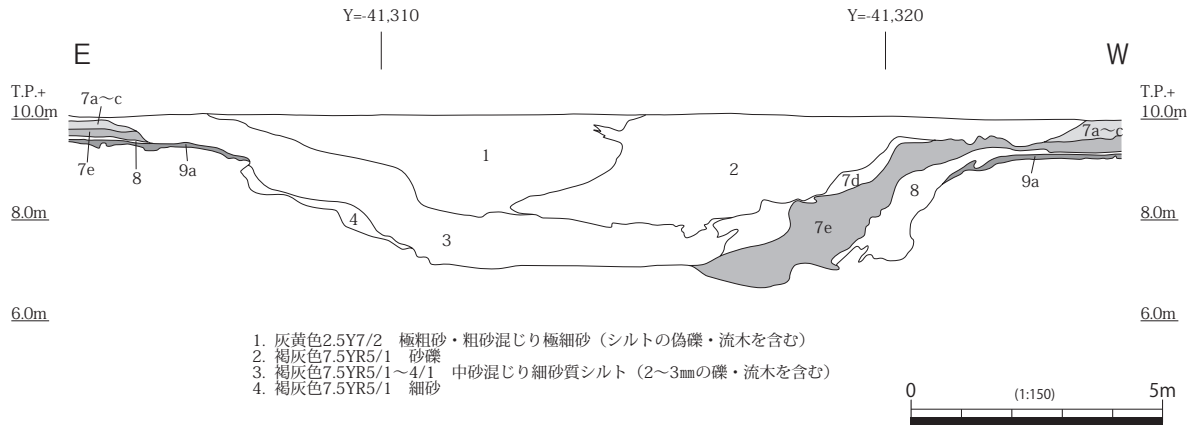


図194 2120流路 断面図

ようである。第7e層を埋土としている。竪穴住居3出土の図170-640と同一個体の壺の体部が出土している。石器では、スクレイパー1点、剥片3点が出土している。

4021溝 (図159)

南東端部で検出された。第10層内に形成された流路埋没後の上面にある浅い溝状の凹みである。南東から北西に延びているが、調査区東半部では検出していない。検出面の規模は、幅4~5m、深さ6cmで、第7e~9a層が落ち込んでいる。土器片が出土した。

2120流路 (図159・194~196・199、図版84・86・89)

調査区東半部を南南東から北北西方向に延びる大規模な自然流路である。検出面で、幅13.8m、深さ約3mを測る。第4層下面に肩を持ち、埋土上面には、部分的に第4層が堆積する。第6層により大部分が埋まっている。流路の両肩には、堤防状の盛り上がり認められる。縄文晩期から弥生時代中期前葉及び、古代の流路が重なっており、最終堆積は平安時代以前と考えられる。

西斜面の途中には、本流に平行して走る幅約1.5mの浅い溝状の凹みが一部認められる。

以下、出土遺物を時期別にまとめて述べる。

(縄文晩期土器)

727~731は縄文晩期の土器で、727・730は長原式である。727は、上部が内湾気味に開く深鉢で、口縁部に小D字形の刻み目凸帯を巡らす。外面縦、内面横方向の条痕がある。730は口縁が内傾する深鉢で、口縁端部よりやや下がって小O字形刻み目凸帯を巡らす。729は平底で、外面に縦の条痕、内面は横方向のミガキ調整を行い、外面にススが付着する。731は尖り底で、外面をケズリ調整する。728は外面縦、後横方向のケズリ調整し、ススが付着する。内面はナデており、白色物質が付着する。以上の中で、727~729、731は生駒山西麓産の胎土を持ち、727・731は粗粒の角閃石を含む。

(畿内第I様式)

732~739は、広口壺である。733は、頸部の段と沈線間を凸帯状に見せ、その上には棒状刺突文を縦2~3回と横1回に繰り返して施す。口縁部に穿孔が認められる。735は、頸部に2条の沈線を巡らす。732は、口縁が大きく開き、頸部に刻み目凸帯を一条巡らす。734は、口縁端部に一条の沈線と縦に刻み目を施す。ハケ調整が残り、外面には黒色物質を塗布する。736はほぼ完形であるが、ゆがみが著しい。口縁端部に1条、頸部に3条、体部に5条の沈線を巡らす。体部は横へラミガキ調整する。口縁部に穿孔する。738は頸部に3条以上、体部に2条以上の沈線を巡らす。739は、体部に布目圧痕文を施す貼り付け凸帯を6条巡らし、黒色物質を塗布している。737・736は生駒山西麓産の胎土を持つ。

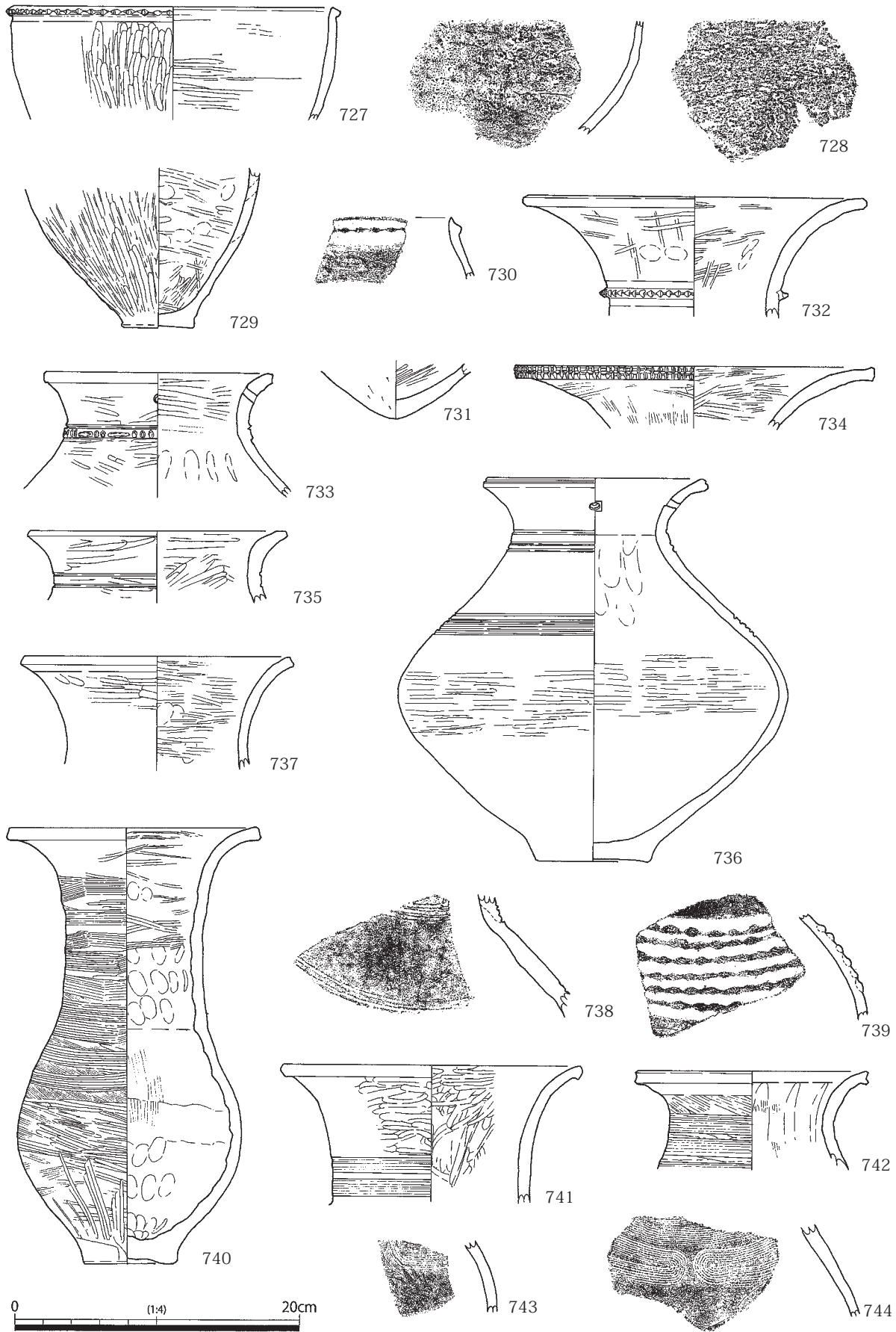


图195 2120流路 出土遺物 (1)

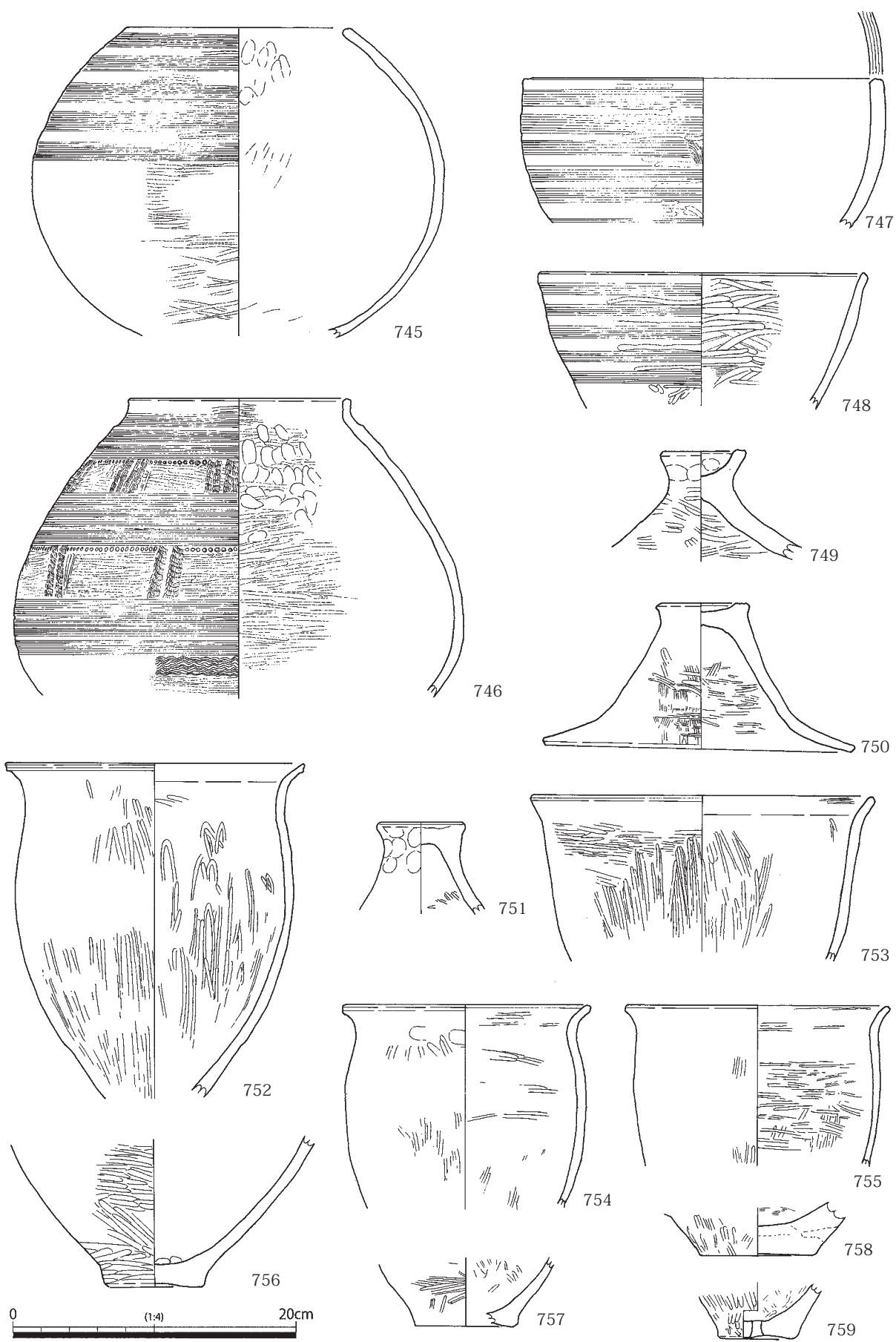


图196 2120流路 出土遺物 (2)

(畿内第Ⅱ様式以降)

740・741は、長頸広口壺である。740はほぼ完形で、やや粗雑な櫛描直線文(9条/11mm)を9帯重ねる。口縁端部は面を持つ。外面は斜めハケ後、施文後、櫛描文間に1条ずつヘラミガキを加える。内面は接合痕がよく残り、指オサエとハケ調整、頸部上半から口縁部はヘラミガキ調整する。底面はやや上げ底となる。黒色物質ないしススが付着する。741は、頸部に櫛描直線文(8条/11mm)を施し、内外面ともヘラミガキ調整する。742は頸部が短い形態で、口縁端部は窪んだ面をなす。櫛描直線文(8条/13mm)を巡らす。頸部内面にススが付着する。743は、櫛描流水文を施す破片である。744は、間隔の揃った櫛描直線文(9条/14mm)にC形反転部をもつ流水文が認められる。741・742・744は、生駒山西麓産の胎土を持つ。

745・746は、無頸壺である。745は、櫛描直線文(10条/13mm)を5帯巡らす。櫛原体の条線の間隔や太さは不揃いである。外面は横ヘラミガキ、内面には平滑に仕上げられる。内傾接合。746は、口縁部が短く直立する形である。櫛描直線文(9条/12mm)3帯を一組として3組施し、その間を縦に櫛描簾状文(8条/10mm)で繋ぐ。上位と中位の櫛描文帯の下端には列点文、下位の櫛描文帯の下端には連続扇形文に近い波状文(9条/幅14.5mm)が施される。櫛原体の条線間隔や太さはよく揃っている。文様帯間は、丁寧な横ヘラミガキ調整し、内面ヘラミガキ調整で平滑に仕上げられる。生駒山西麓産の胎土を持つ。

747・748は、鉢である。747は、体部に櫛描直線文(8条/20mm)を6帯以上巡らし、文様間にヘラミガキを巡らす。櫛描文端を下方に折り曲げ、下部とつなげている部分がある。口縁端は水平で面をなし、櫛描直線文(3~4条分)を巡らす。748は外傾する形で、櫛描直線文(8条/11mm)を5帯巡らし、文様間に1条のヘラミガキを加える。内面は密にヘラミガキする。生駒山西麓産の胎土である。749~751は、甕蓋である。749は、頂部が深く窪む形で、内外面ともヘラミガキする。750は、完形である。頂部は少し凹み、外面はハケ後一部ヘラミガキ、内面ヘラミガキ調整する。裾部内面にススが付着する。751は、つまみ部の外面に指頭圧痕が顕著である。752~755は、甕である。752は、体部がほとんど張らない細長い形で、口縁は緩く外反し、端部を強くヨコナデして沈線状に窪ませる。内外面共に縦ヘラミガキ調整する。体部上半にススが付着する。754は、外面ヘラミガキ調整し、内面斜めの板ナデ、外面にはススが付着する。753は鉢形で、口縁が折れて僅かに外反する。全体をヘラミガキ調整する。755は、口縁部が短く外反し、やや肥厚するタイプである。外面はススが厚く付着し、調整不明、内面は横ヘラミガキ調整する。756~759は、底部である。いずれもやや上げ底である。756は、外面ヘラミガキ、内面板ナデ。757は、底面をヘラケズリ調整する。759は、焼成前に1孔を開ける。生駒山西麓産の胎土を持つ。

また、コナラなどの大きな流木が大量に出土した。

石器では、敲き石2点、台石?1点、石錐1点、中型尖頭器未成品2点、スクレイパー5点、二次加工のある剥片8点、剥片1点、石核2点が出土している。792は、頭部と錐部の境が不明瞭な石錐である。一見、石鏃の未成品であるが、1側面に自然面を留め厚みをもつため石錐とした。礫石器は図化していないが、敲き石2点は砂岩製で、長軸端部および両側面に打撃痕がある。台石?は破片が出土している。石材は、流紋岩か凝灰岩質流紋岩である。

第7e層出土遺物(図197~201、図版84・87・89~91・94・95)

760~762は長原式の深鉢である。760は、僅かに外反する口頸部を呈し、口縁端部よりやや下がっ

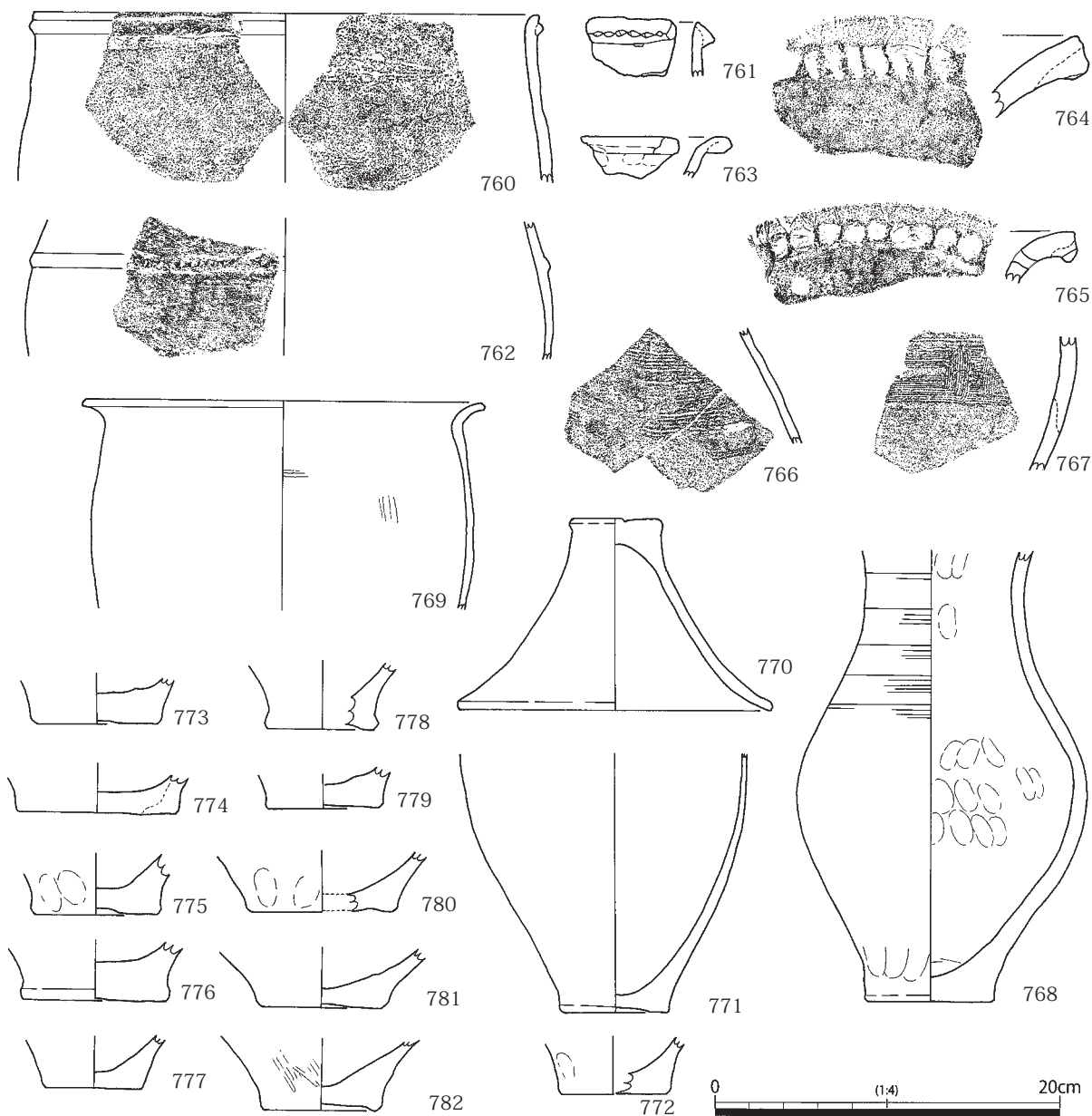


図197 11区第7e層 出土遺物（土器）

た場所に低い突帯を貼り付ける。生駒山西麓産の胎土を持つ。761は、口縁端部に小O字形刻みを施した断面三角突帯を貼り付ける。762は、頸胴部界に小D字形刻み目を施した断面蒲鉾形の凸帯をもつ。外面にススが付着する。

763は外傾の鉢の口縁部で、端部を下に折り返し玉縁形を作り出す。剥離が著しい。朝鮮半島の影響を受けた遺物であろう。生駒山西麓産の胎土を持つ。

764・765は広口壺で、指圧痕文の刻み目を施す。765は、口縁部に穿孔が認められる。いずれも生駒山西麓産の胎土を持ち、765は粗粒の角閃石を含む。766は壺の体部で、櫛描直線文（6条/12mm）を3帯以上巡らす。櫛原体の条線はかなり太い。768は、長頸広口壺である。摩滅が著しいが頸部に櫛描直線文が圧痕となって残る。生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。767は鉢で、櫛描直線文（11条/13mm）2帯を直線で縦につなぐことで流水文を描く。縦線間はナデ消していない。外面は横ヘラミガキ、内面は下部がハケ、上部はヘラミガキ調整する。外傾接合で、生駒山西麓産の胎土を持つ。

769は襖で、摩滅が著しい。生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。770は襖蓋で、裾部内面にス
 スが付着する。771～782までの12点は、底部である。782は外面へラミガキ調整する。779は紀伊形
 襖の底部で、胎土に結晶片岩を含む。摩滅のため調整が観察できないものが多い。773・774・777・
 781は生駒山西麓産の胎土を持つ。

この他に、櫛描直線文をもつ破片が数点出土している。

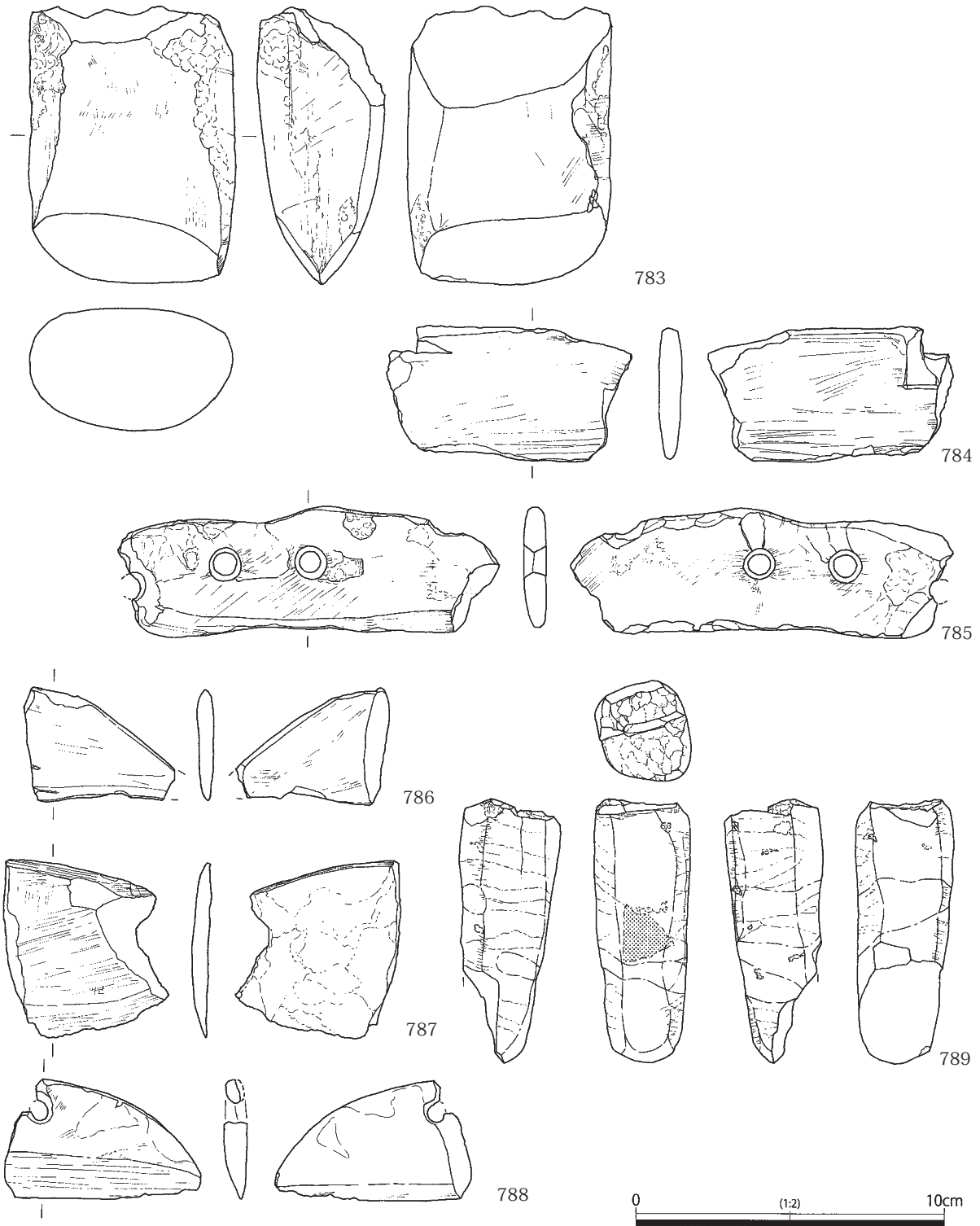


図198 11区包含層 出土遺物（石器1）

第7e層からは、太型蛤刃石斧1点、石庖丁5点、敲き石4点、石鏃16（未成品12）点、石錐7（未成品1）点、中型尖頭器未成品17点、石槍9（未成品8）点、石小刀（未成品1）点、スクレイパー94（？4）点、不明9（未成品8）点、楔形石器11（？3）点、二次加工のある剥片159点、剥片153点、石核29点、チップ14点が出土している。剥片の中には、ポイントフレイクと思われるものを2点含む。783は、太型蛤刃石斧の頭部欠損したものである。刃部は再研磨され、刃線が片側に大きく湾曲する。体部の敲打痕は製作段階のものと考えられる。上端破損部は、敲き石として転用されたものか、割れ口のエッジが潰れている。左側面には打撃痕がある。石材は凝灰岩である。784・786・788は、直線刃の片刃の石庖丁であり、いずれも石材は結晶片岩である。784は被熱し、表面は荒れ、背部には極僅かに線状打撃痕がある。788の裏面は、紐孔から背方向にかけて摩滅し浅く窪み、裏面全体に光沢を帯び

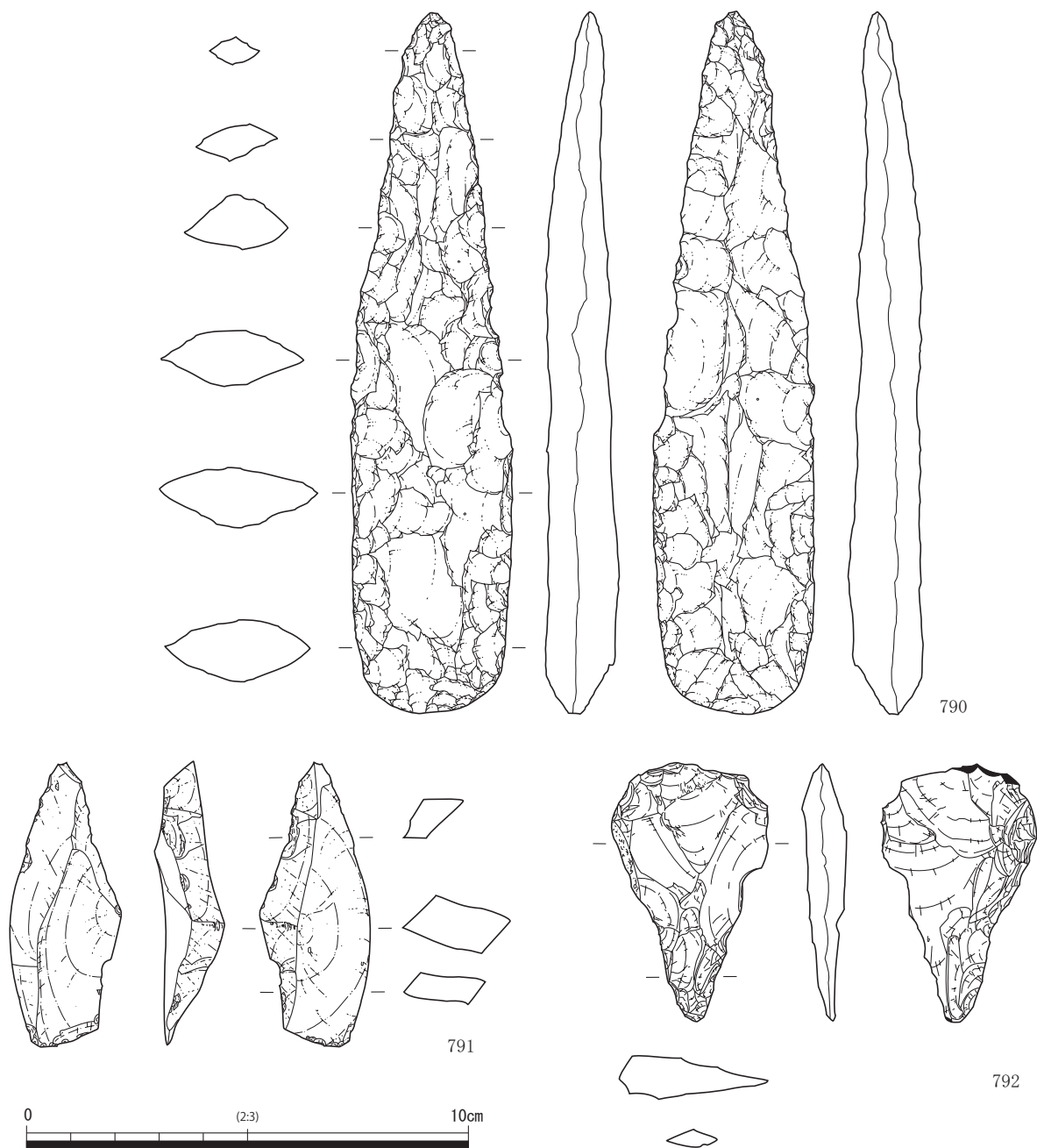


図199 11区包含層ほか 出土遺物（石器2）

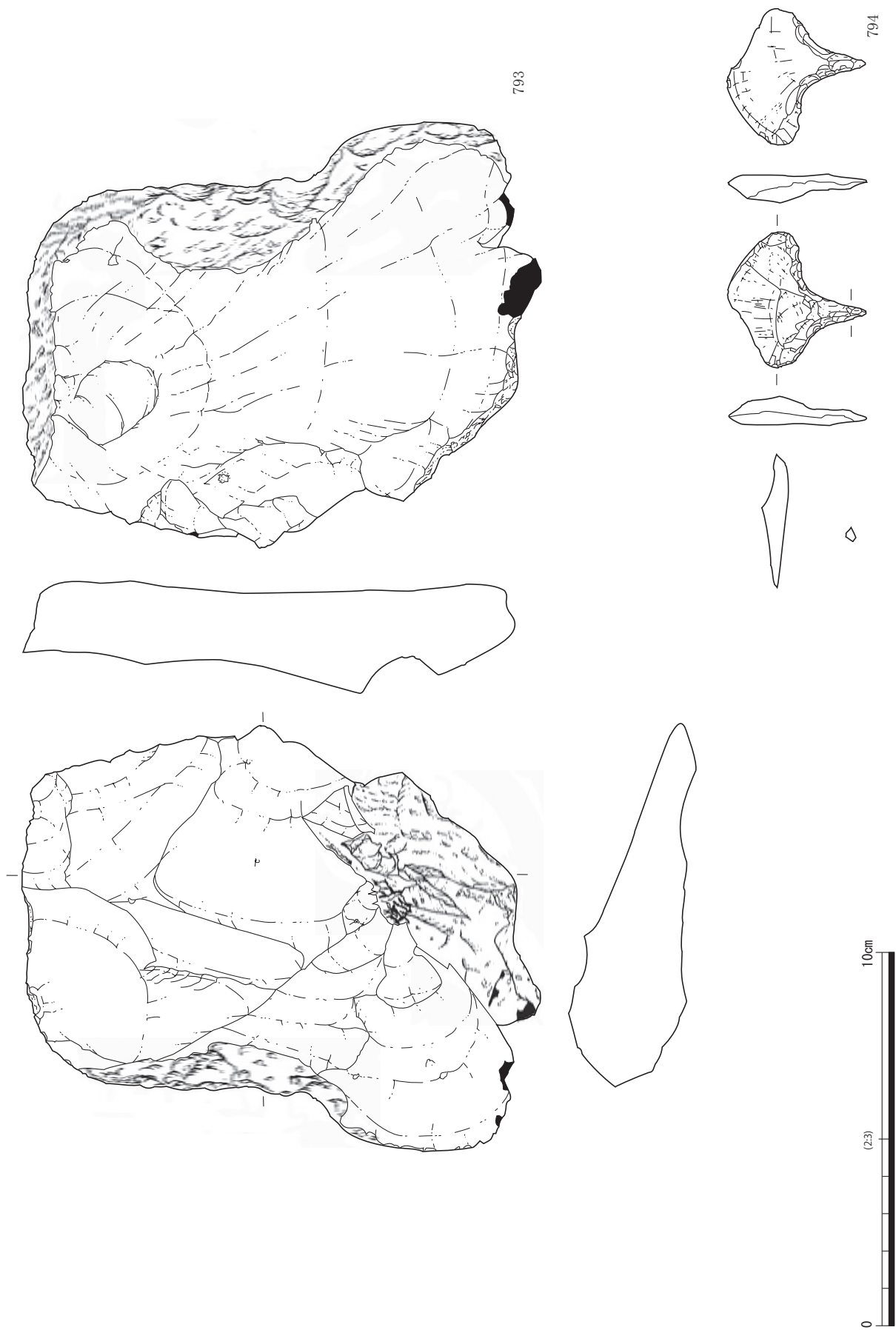
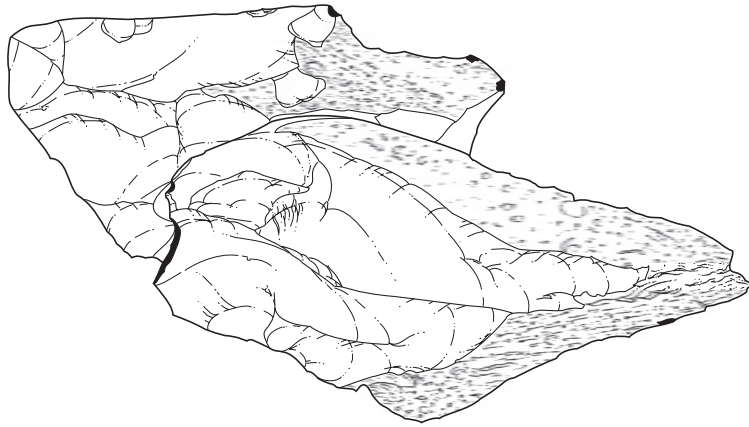


图200 11区包含层 出土遗物 (石器3)



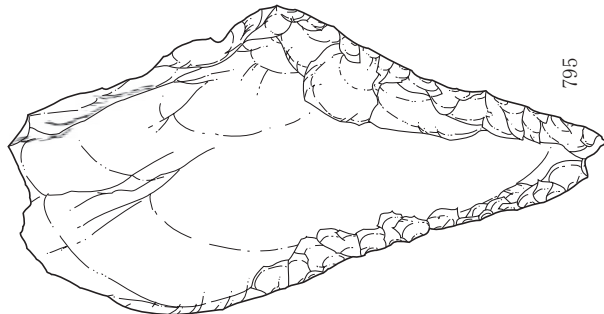
796



795+796



795



795



る。787は、杏仁形態の石庖丁の表面が剥落した破片である。刃部は片刃か両刃か不明である。残存面には、長軸方向の研磨痕が残る。石材は泥質片岩である。他に、裏面が剥落し被熱した可能性のある体部破片が1点あり、石材は泥質片岩か。789は、柱状の砂岩礫を用いた敲き石ないし磨り石である。一端は割れ、他端は敲打痕が顕著である。両側面および側面角には、線条の打撃痕があり、一面の中央には赤色物質が僅かに付着している。図化していない敲き石は全て砂岩製で、一端に敲打痕、側縁に線状打撃痕をもつものが2点、平面に敲打痕、縁に線状打撃痕をもつものが1点である。この他に剥落痕のある流紋岩が2点あるが、加工痕かどうかは不明である。

790は、完形の石槍である。基底部から基部両側辺は並行し、そのエッジは擦り落とされ鈍い。基底部から基部両側辺にかけて丁寧な作りであるが、先端部へむけて剥離は粗く、側縁の稜線は基部と比較してジグザグ状をなす。これら剥離の精粗ができた理由として、側縁が欠損したのち、再加工した可能性が考えられる。794は、頭部の大きい石錐である。頭部には大きく大剥離面が残る。793は、長さ14cm強、幅11cm、厚さ3cmの板状を呈した剥片である。周縁に自然面を留める。背面は3方向の側面から剥離されており、腹面は長軸端からの打撃による大剥離面が残る。795・796は、接合資料である。長軸片方周縁に自然面を留める。自然面を1回剥いだ面を打点として剥片を取り、同じ場所を打面調整した後、さらにもう一枚の剥片を剥いている。それぞれの剥片は、主要剥離面側へ連続した剥離を施したスクレイパーである。

第7d層から、石庖丁1点、中形尖頭器未成品1点、スクレイパー10点、二次加工のある剥片13点、剥片6点、石核3点が出土している。785の石庖丁は、片刃の直線刃半月形態であり、刃面の左端破損部に3つ目の紐孔がある。中央部の2孔間には、かすかに紐ずれがみられる。両端部は欠損し、背部・刃部には剥離を伴う線状打撃痕が顕著である。両面ともに両端部寄りに敲打痕がみられ、背部・刃部の線状打撃痕とともに転用痕と考えられる。石材は、結晶片岩である。

第7a～c層からは、石鏃1点、石錐未成品1点、中形尖頭器未成品1点、スクレイパー4点、楔形石器1点、二次加工のある剥片12点、剥片8点、石核2点が出土している。

第4～7c層からは、石槍未成品？1点、剥片1点、第6層からは、二次加工のある剥片1点が出土。第4～6層から、スクレイパー1点、二次加工のある剥片2点、第3～6層からは、石錐1点、二次加工のある剥片1点、剥片1点が出土している。近世耕土層からは、791の翼状剥片が出土している。全体に風化が認められる。

d. 12区

調査区のほぼ中央を東西に走る道路の北側の東端部である。西側の11区と里道をはさんで東側の調査区である。調査範囲が、地表面で南北約13m、東西約4.5mと、非常に狭い範囲の調査であることから、面的な調査はあまりできず、土層観察が主体の調査となった。西側の11区東半部では、遺構や遺物の出土が希薄になっていることから、同様に遺構や遺物は検出されなかった。

土層観察は、調査区東壁断面でおこなった。基本的には、11区との間に流路などは入っていないことから、11区東端部の土層とほぼ同一で、安定した堆積状況である。ただ、調査区の範囲が狭いことから、地表面から約2m掘り下げたところで調査を終了した。第10層までは掘削が及んだことから、第9層全体の堆積状況を観察することができた。

12区 東壁

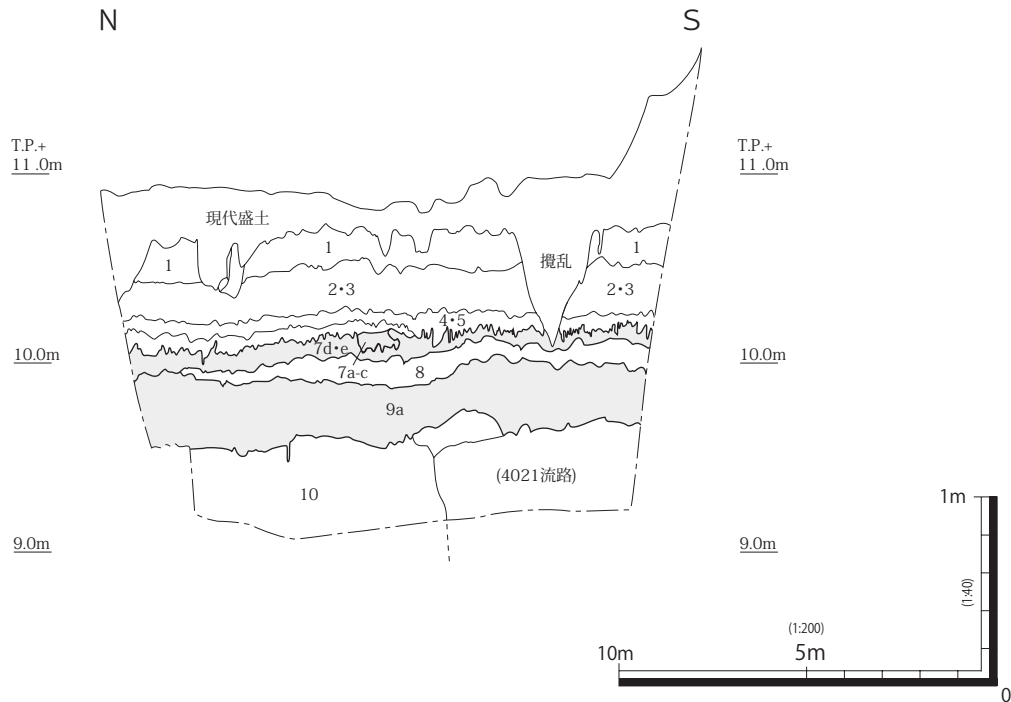


図202 12区 東壁断面図

第0層：現代の盛り土である。

第1層：現代の耕作土である。

第2・3層：中世～近世の耕作土である。

第4・5層：部分的な砂層で厚さ7cm程度である。細分は困難である。

第6層：黄灰色シルトで、マンガンの縦縞沈着物を多く含む。厚さ5～10cm程度である。北側ほど厚く、南半部ではみられない。

第7a～c層：暗褐灰色中～極細砂混じりシルトで、暗色帯を構成する。厚さ10～15cmである。

第7d・e層：黒褐色土で、厚さ10～20cmである。弥生時代中期前葉。第7層の細分は困難である。

第8層：黄灰色シルトである。

第9a層：黒褐色粘質シルトである。南側では砂質が強くなる。

第10層：オリーブ褐色～暗灰黄色中～極細砂混じりシルトである。11区では深掘り部で、横大路火山灰を含む層が検出されている。

e. 18区

調査区のほぼ中央を東西に走る道路の南側の東半部である。調査区の形状はほぼ長方形を呈しており、調査区内を大規模な流路が横断することもないため、基本層序は、北側の10区とほぼ同様の状況を示していると考えられる。ただ、後世の削平や整地の結果、第7層より上部が攪乱されていることから、遺構の分布状況は不明である。掘削による顕著な攪乱などは見られないが、ほぼ全面にわたって整地されており、弥生時代の遺構面まで及んでいるため、中央から北側では遺構が検出されなかった。北側の10区における遺構の分布状況から類推すると、多くの遺構が存在したことはあまり考えられない。ただ、10区東半部から11区、19区に広がる弥生集落を考えると、集落の広がりが18区まで及び、いくつかの

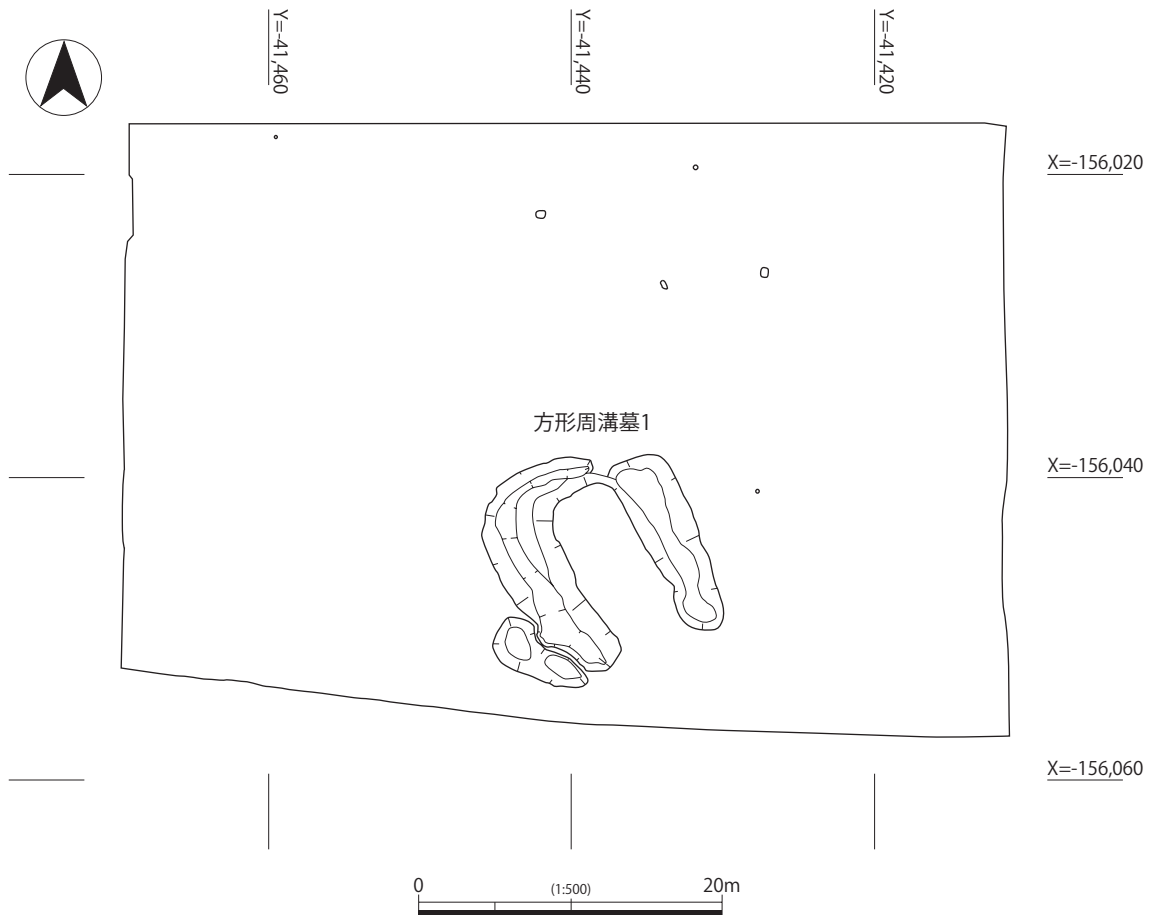


図203 18区 弥生時代 遺構平面図

遺構が存在していた可能性はあると考えられる。居住に伴う遺構はみつかっていないが、中央部で方形周溝墓と考えられる遺構が検出された。第7e層上面では、西端部で古代の流路を検出した。これについては、後に述べる。

全体に南東から北西に向かって緩やかに傾斜した地形であり、第7層の分布は調査区北半のみであった。調査では、第7a～c層を除去した第7e層の上面と下面にて遺構検出をおこなった。

調査区中央南端で、方形周溝墓1を検出した。中央部は全体的に微高地状に高まっており、周溝墓はその地形を利用して築かれたようである。さらに南側でも、小規模な周溝状の落ち込みが検出されたため、複数の周溝墓の存在も考えられたが、遺物の出土がないことや平面形状が確定できないなど、積極的な根拠がないため、現状では否定的な見解である。

方形周溝墓1（図203～206、図版34・96・101）

中央やや南寄りで検出された。南北方向に長軸を持つ長方形であり、南側を除いて周溝を巡らしている。「コ」字形の形状で、北東部では陸橋を検出した。陸橋は掘り残して整形されたものである。現状で規模は、南北方向の長軸で約14m、東西方向の短軸で約13.5m、検出面からの深さ約1m、周溝の幅3～4.5mを測る。西側の周溝がやや幅が広い。上部は削平や整地をうけているため、層位上での構築時期は特定できない。墳丘上の第7a～d層から6世紀の須恵器が検出されており、それ以前にすでに上部の削平がおこなわれていたことがわかる。主体部は検出されず、墳丘上での精査でも痕跡をみつけることはできなかった。かなりの規模で削平がおこなわれたものといえる。

周溝内からの遺物の出土は少なく、弥生土器の細片が主であったが、壺の体部下半を思わせる把手付鉢が周溝埋土の下部層から出土した。798は、広口壺である。無文で頸部が短く外反する形態。ややドーナツ底になる。摩滅のため調整不明。797は、把手付鉢で、把手は縦に細長く、基部の断面は楕円形を呈す。体部上半にやや波打った櫛描直線文（7条か／13mm）を施す。外面は横へラミガキ調整し、内面は平滑に仕上げられる。三日月形の把手の形状や櫛描文の描き方から、中期後半に出現する把手付き器種とは異なり、畿内第Ⅱ様式後半に遡る可能性が高い。

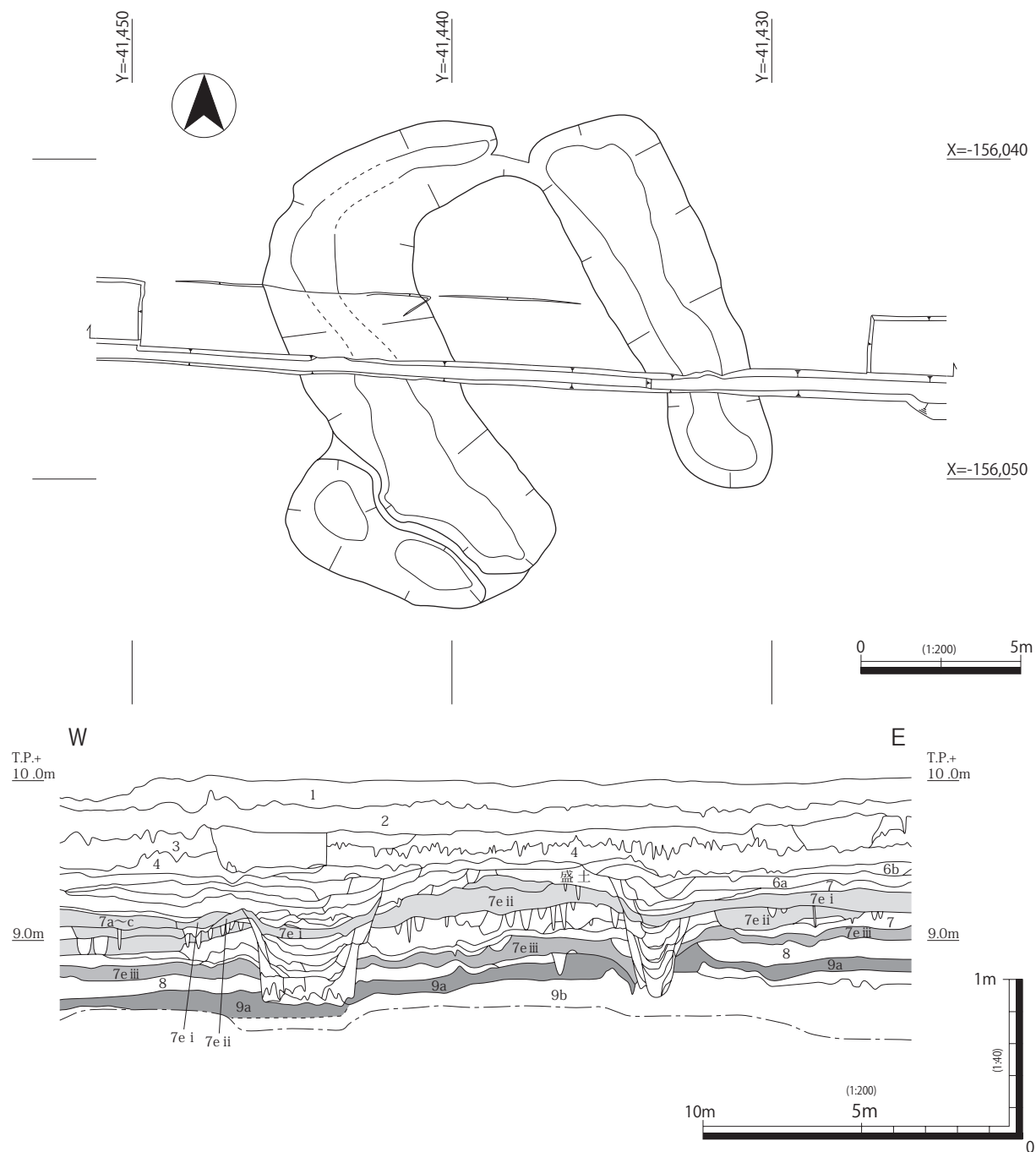
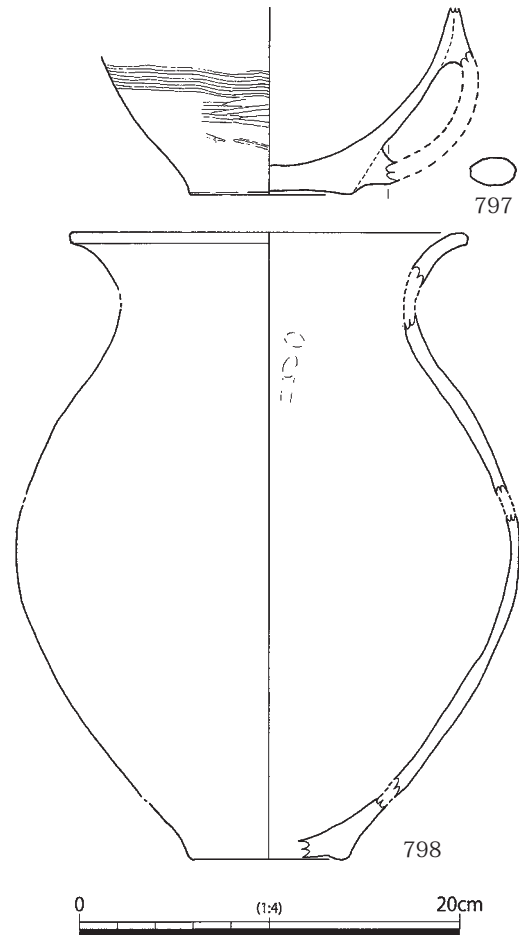


図204 方形周溝墓1 平・断面図

石器では、石鏃1点、剥片1点が出土している。799は、長めの石鏃である。先端および基部は欠損しており、不明である。

三宅西遺跡周辺で、同時期となる方形周溝墓の検出例はあまりないが、最も近い例としては、調査区から約1.5km北に位置する瓜破遺跡(UR97-19)において、2基検出されている(注)。ここで報告されている方形周溝墓801は、三宅西遺跡検出の方形周溝墓1と同様に、第7層形成以降の整地により削平されていることから、埋葬施設は検出されていない。平面形は隅丸方形であり、全長10mあまり、幅5.5~6mの規模ということで、方形周溝墓1よりはやや小さい。周溝は墳丘のそれぞれの辺に沿って設けられているが、南・東側はやや張り出しており、整った形状ではないことが推測されている。遺物の出土は少量であるが、時期は畿内第Ⅱ様式のうち古い様相を呈していると考えられている。時期差はあるものの、集落に伴う方形周溝墓の例としては類似したものと考えられる。



注 宮本康治「瓜破遺跡の調査 UR97-19次調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』(財)大阪市文化財協会 1999

図205 方形周溝墓1 出土遺物(土器)

古墳時代以降遺構および包含層出土石器(図206、図版102)

出土位置は異なるが、18区における後世の遺構および包含層出土の石器をまとめて報告する。混入

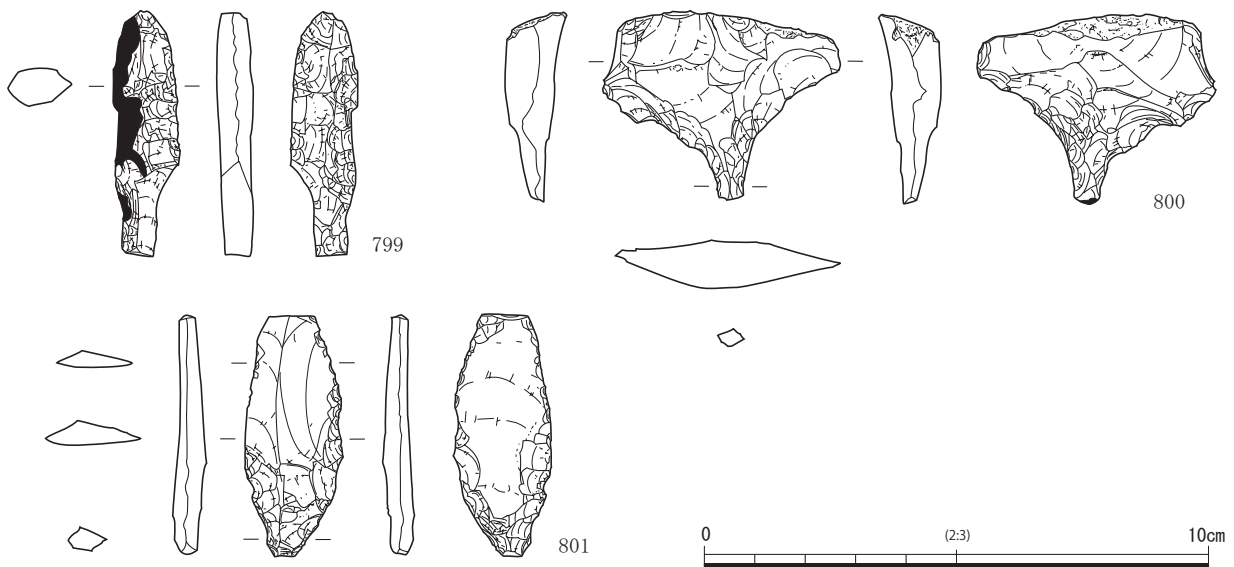


図206 方形周溝墓1、包含層 出土遺物(石器)

品であるが、後世の2003流路から、二次加工のある剥片1点が出土している。さらに、2001流路から、中型尖頭器未成品?1点、スクレイパー1点、剥片1点が出土している。

第7e層からは、中形尖頭器1点、スクレイパー1点、不明未成品1点、二次加工のある剥片4点、剥片4点、石核2点が出土している。

第6・9層から、石錐1点、中型尖頭器未成品?1点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片1点、剥片2点、石核3点が出土している。801は、両面に大きく大剥離面を留め、長軸一端に集中して両側辺からの剥離が施され、細く尖る端部に自然面が残る。石錐の未成品と考えられる。800は、頭部と錐部の区別が明確な石錐であり、錐部先端は欠損している。頭部上端面に、自然面を留める。

このほか第6層から、石鏃1点、石錐未成品?1点、中型尖頭器未成品?1点、石槍未成品?2点、不明未成品1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片7点、剥片5点、石核1点が出土している。

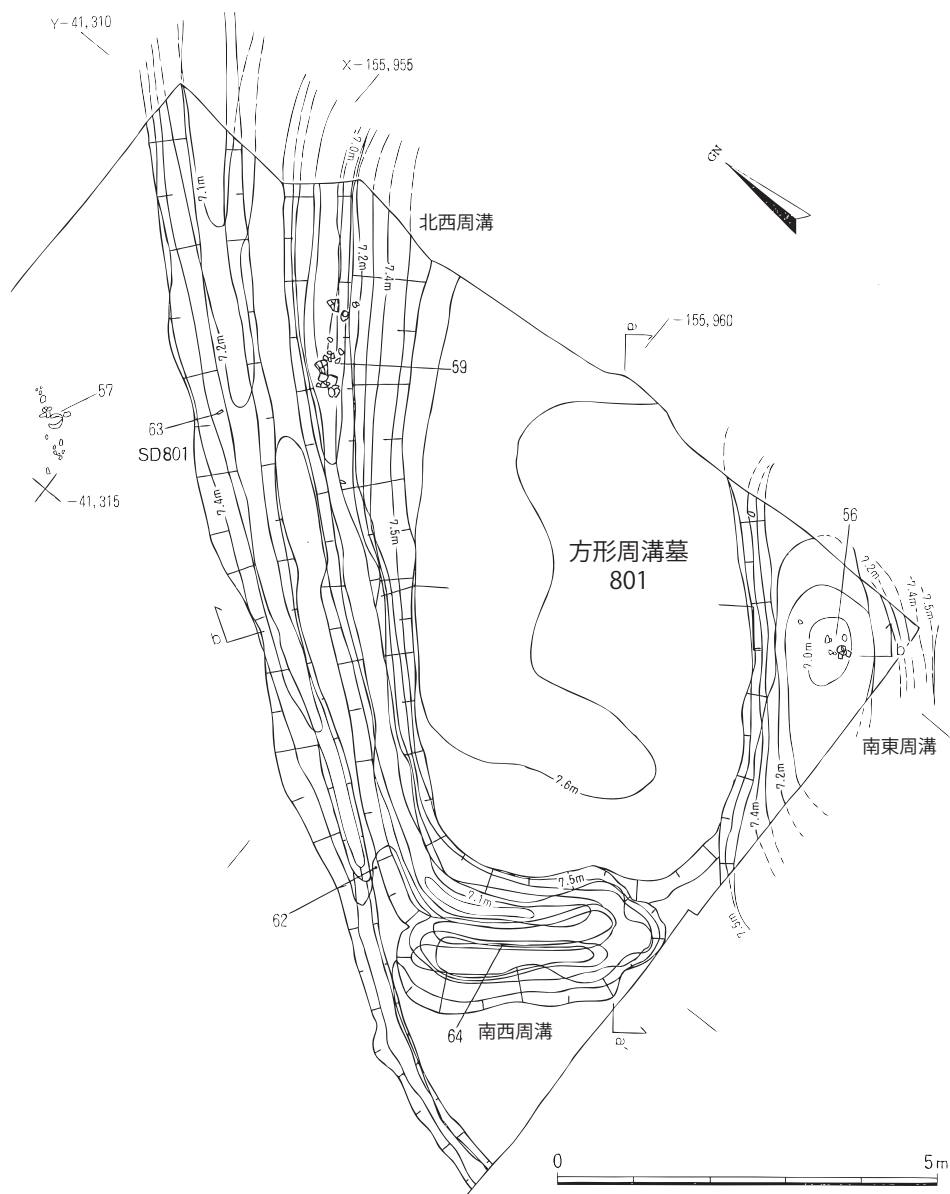


図207 瓜破遺跡(UR97-19) 方形周溝墓801 平面図 (大阪市文化財協会1999より)

f. 19区 (07-1 調査2 トレンチ)

調査範囲の東半部の東側に位置しており、東側には里道をはさんで20区と接する。最も東側に位置する20区の面積が狭いことから、三宅西遺跡東半部に広がる弥生集落の南半部のほとんどを占めている。東西方向に走る道路の南側にあたり、西側は道路をはさんで18区と接する。面積の大きい調査区であるが、工程上の制約や南側に位置する民地への進入路確保のため、調査区が細分されたことから、分割して調査をおこなっている。南西端部では、土留めの鋼矢板を打設して調査範囲を確保した。

弥生時代の遺構面である第7e層下面は、全体にわたってほぼ平坦で、竪穴住居、土坑群、柱穴群などが検出され、弥生時代中期前葉の居住域に含まれる。また、南西端部では、弥生時代前期の土坑が検出されたほか、包含層も認められる。

1. 竪穴住居

西半部で検出されており、特に西寄りに多くみられる。東半部では検出されていない。密集しているが、11区ほどの集中はなく、重複するものはあまりない。

竪穴住居15 (図208・209・221・222・245、図版37・96・101～103・126)

北西部に位置する。南には2207・2218・2219土坑が位置する。また、東側を2410流路に切られている。竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。竪穴住居は、南半分のみを検出である。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形はほぼ円形を呈しており、規模は、検出面で最大径復元約7m程度、深さ約10cmを測る。埋土は、黒褐色が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は検出されており、規模は幅20～30cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈し、埋土は、灰黄褐色細砂混じりシルトである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、粘質土が広がっている部分があったが、貼床の痕跡ではなかった。また、ピットが多く検出されているが、主柱穴はそのうち2220-2・2220-3・2220-4ピットの3基、復元すると4本柱の竪穴住居になると考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～50cm、深さ約10cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂～中砂である。

中央部で土坑を1基検出している。2220-1土坑は、平面不整形円形を呈しており、残存部で径約1.3m、深さ約10cmを測る。炉として使われたらしいが、炭層は顕著に認められない。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量、石器やサヌカイトチップなどが多量に出土した。

802は、完形の長頸広口壺である。頸部上端部で大きく外反し、口縁端部はやや面を持つ。頸部に櫛描直線文(10条/12mm)を8帯巡らす。時計回りの重なりを持つ。文様間はヘラミガキで調整されている。体部外面ヘラミガキ、内面は頸部縦ヘラミガキ、口縁部横ヘラミガキ調整で、体部には工具痕とハケが残る。頸部中頃と体部下半の2ヶ所に、焼成後の穿孔が認められる。

石器では、太型蛤刃石斧3点、敲き石1点、石鏃13(未成品5)点、石錐4点、石槍未成品1点、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー7点、石小刀未成品1点、二次加工のある剥片33点、剥片49点、石核6点、チップ155点が出土している。969は、太型蛤刃石斧の片面が剥落した刃部破片である。上下破損面突出部分には、打撃痕がある。石材は、凝灰岩である。破損面に極僅かに研磨痕がみられるが、再加工途中か。970は、太型蛤刃石斧の基部破片である。基端に打撃痕があり、基部表面は一部剥落している。石材は、砂岩である。これも969と同じく、破損面を軽く研磨しており、再加工の途中かと思

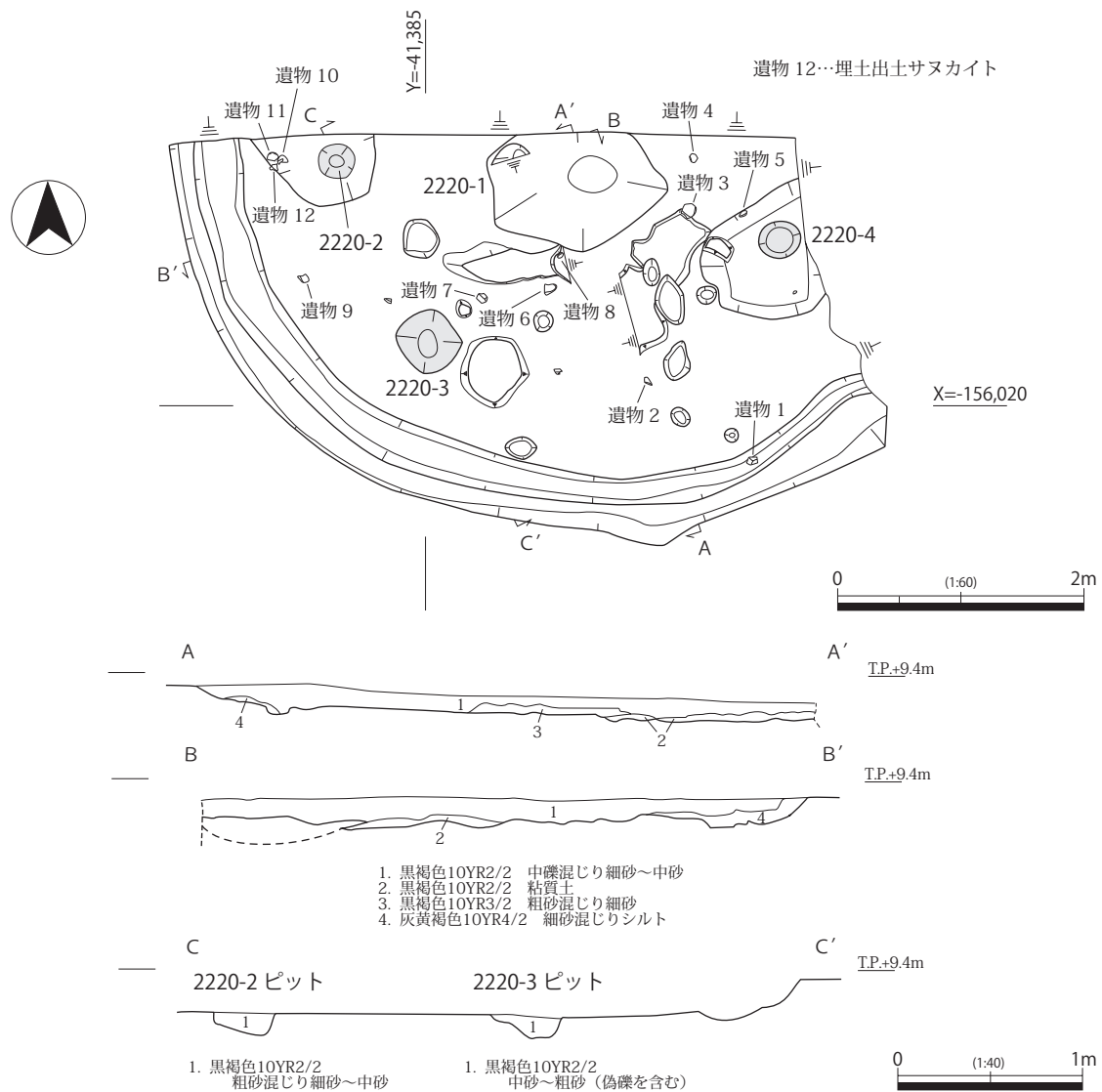


図208 竪穴住居15 平・断面図

われる。この他、花崗岩類かと思われる大型蛤刃石斧の体部細片が1点ある。敲き石は、砂岩の垂円礫が割れた角に敲打痕がある。

829～835は、石鏃である。829・831・832は平基式であり、829は両面中央に大剥離面を留める。834は尖基式、833は円基式であり、834は左右非対称の未成品と思われる。835は、基部が欠損している。831の片側辺には鋸歯状剥離がみられる。836～838は、石錐である。837・838は、錐部と頭部の境が不明瞭である。836は、錐部のみ残存したもので、錐部と頭部の区別は明瞭なタイプと思われる。839は、矩形状の3辺を剥離加工したものである。両面中央には大剥離面を留める。

竪穴住居16 (図209・210・221・222、図版37・96・101・102)

西端部に位置する。南には2237土坑、2240溝、2234・2239土坑が、東には2236・2238土坑が位置する。竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。竪穴住居は、西側と南側が削平されていることから、東半分強を検出した。また、上部も削平を受けているため、かなり失われている。

平面形は不整形円形を呈している。規模は、検出面で最大径約6m、深さは約5cmを測る。埋土は、黒褐色小礫混じり中砂～シルトが主体である。貼床は確認されていない。壁溝は検出されており、規模は幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は、竪穴住居の埋土とほぼ同じである。

19区

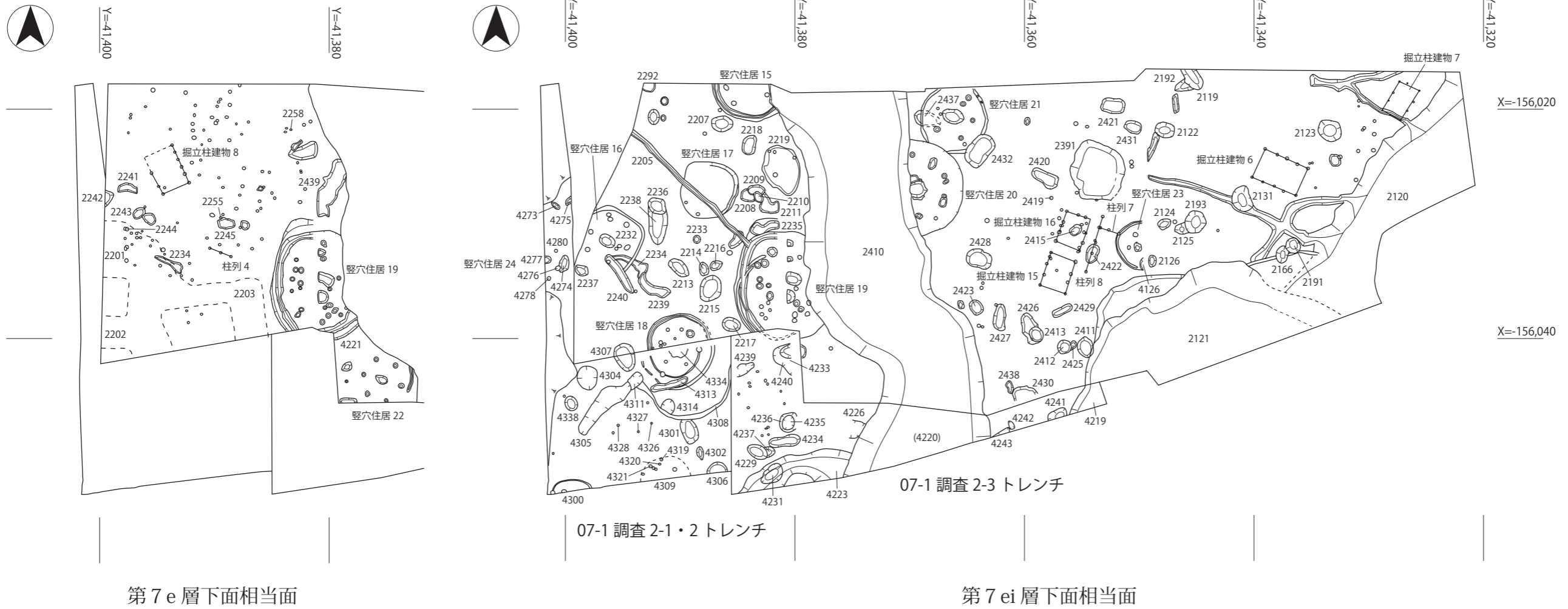


図209 19区 弥生時代 遺構平面図

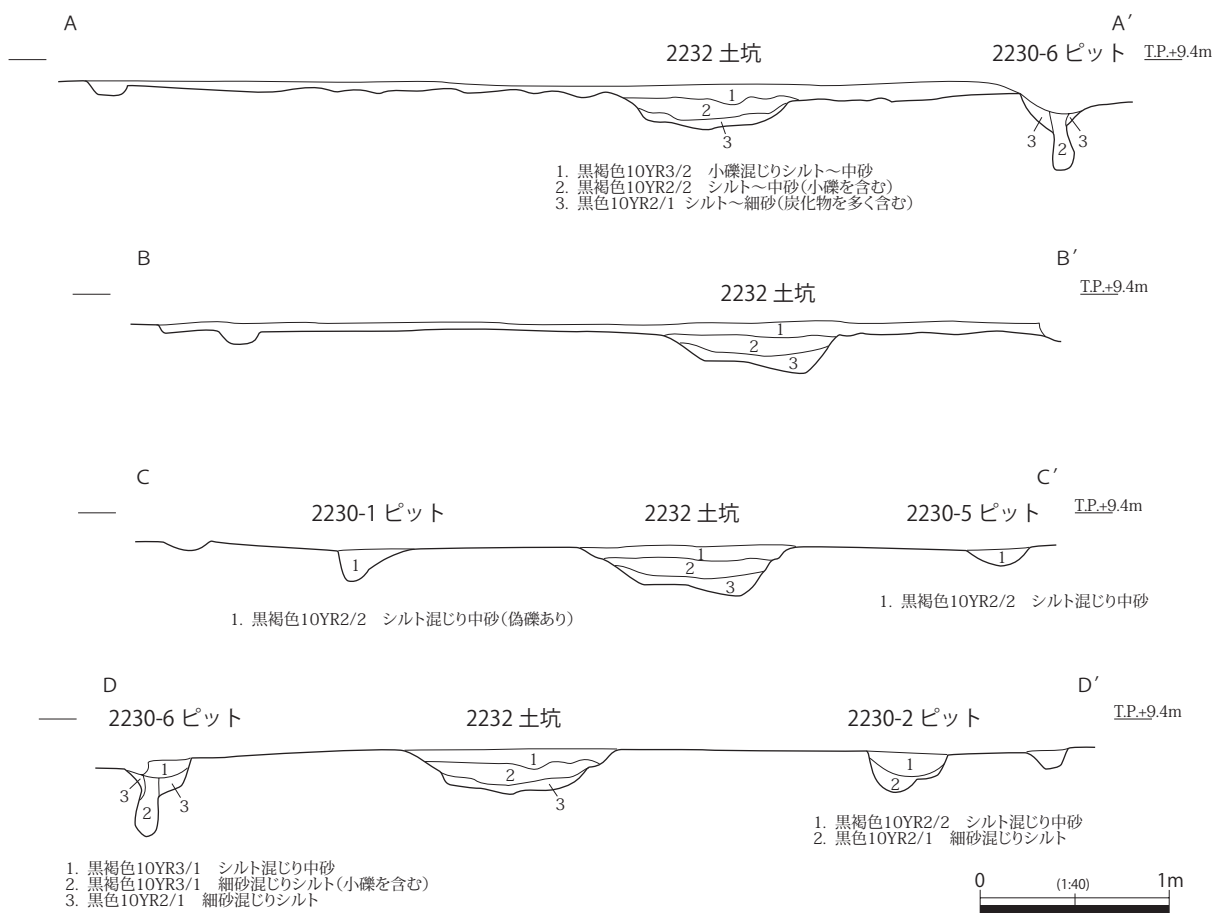
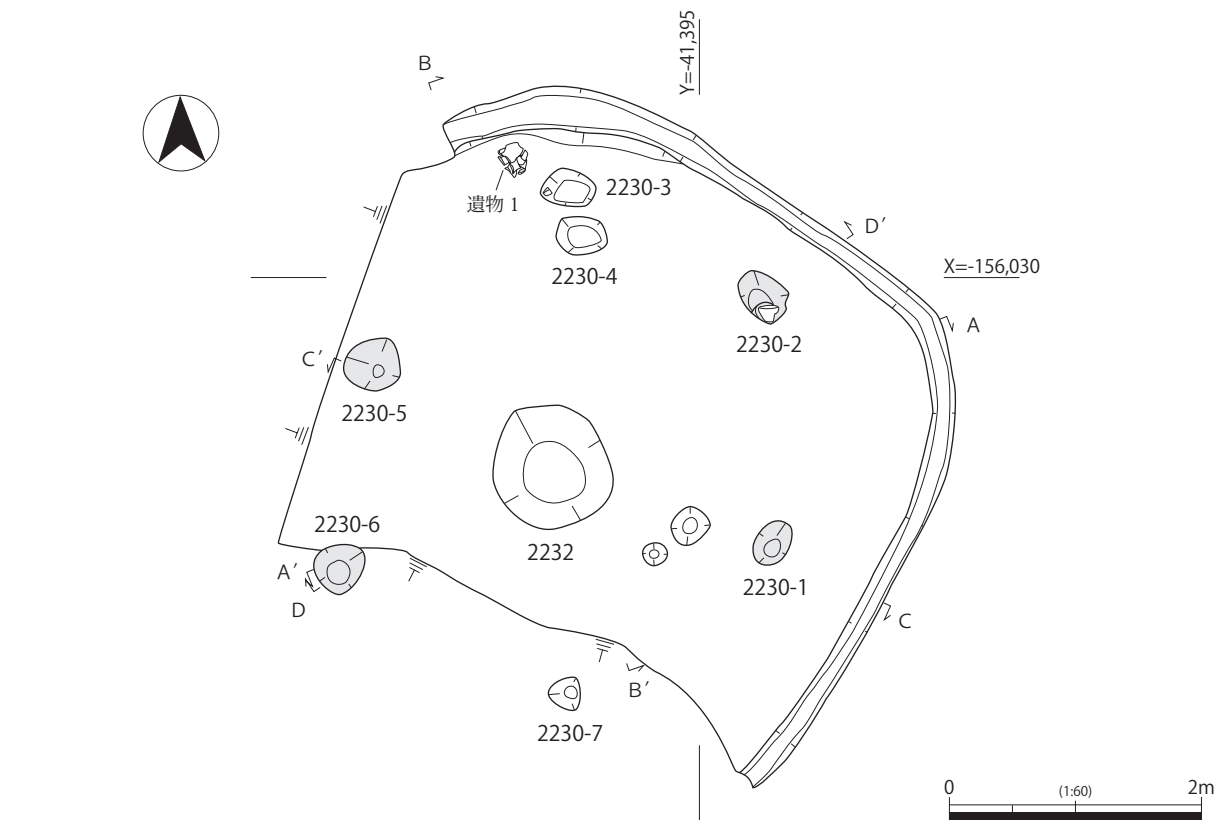


図210 竪穴住居16 平・断面図

壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットが多く検出されているが、支柱穴はそのうち4基であり、2230-1・2230-2・2230-5・2230-6ピットが該当する。4本柱の竪穴住居と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約40cm、深さ30~40cmを測る。埋土は、黒褐色シルト混じり中砂である。

中央部で土坑を1基検出した。2232土坑は、平面円形を呈しており、残存部で径約100cm、深さ約30cmを測る。炉として使われたものといえるが、炭層は顕著に認められない。

遺物は、埋土中から弥生土器やサヌカイト製石器が出土した。

803・804は、甕である。803は、体部下半が窄まり、頸部が緩やかに外反する形態である。内外面とも縦ヘラミガキし、口縁部はヨコナデ調整する。ススが付着する。804は、口頸部がく字形に外反し、端部が僅かにつまみ上げられる。内外面横ヘラミガキ調整する。生駒山西麓産の胎土を持つ。

石器では、石鏃3点、石錐1点、石槍未成品? 1点、不明未成品1点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片12点、剥片9点、チップ1点が出土している。840は凹基式、841は平基式の僅かに底辺が

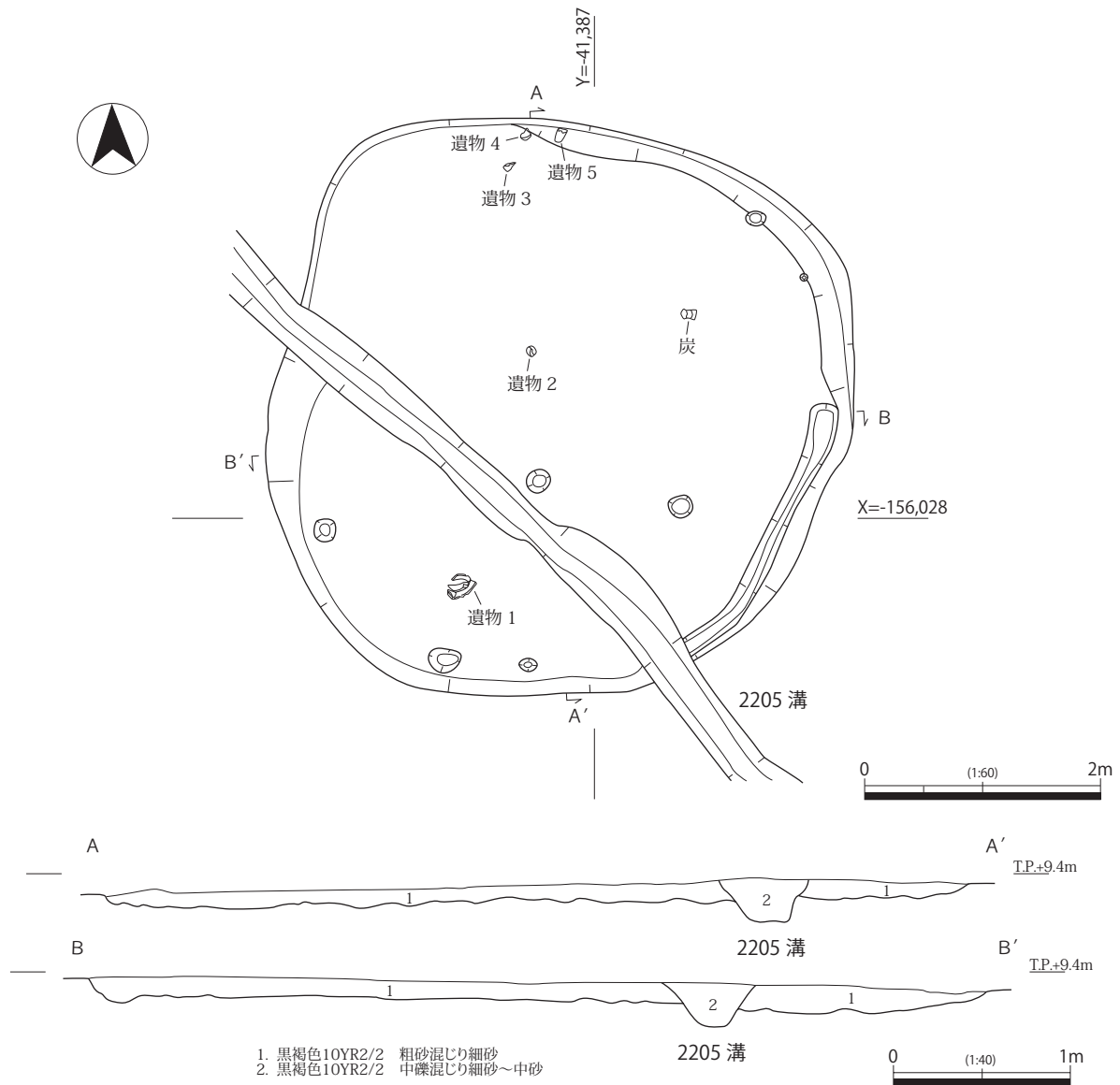


図211 竪穴住居17 平・断面図

窪んだ石鏃である。石鏃は、2点ともに先端部が欠損しており、両側辺および841は基部にも鋸歯状剥離がみられる。842は、ほぼ左右対称の均整がとれており、やや厚みをもち先端部が歪んでいる点から、石鏃よりも石錐として分類した。

竪穴住居17 (図209・211・221・222・245、図版101・102・126)

西端部に位置する。西には2236・2238土坑が、東には2208・2209・2210・2211土坑が位置す北には2207・2218土坑が、南には2233土坑が位置する。また、竪穴住居は竪穴住居19の壁溝から派生する2205溝に切られている。竪穴住居の建て替えはなく、単独で検出されている。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形は不整形円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約4.9m、深さ約10cmを測る。埋土は、黒褐色が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は南東側で一部検出されている。壁溝の規模は幅約20cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈し、埋土は竪穴住居の埋土と同じである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットがいくつか検出されているが、主柱穴は不明である。

遺物は、埋土中から弥生土器やサヌカイト製石器が出土した。

806は、壺の底部である。剥離のため、調整不明である。

石器では、太型蛤刃石斧1点、石庖丁1点、石鏃2点、石錐1点、中型尖頭器未成品2点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片6点、楔形石器1点、剥片8点、石核2点、チップ1点が出土している。967は、太型蛤刃石斧の刃部欠損したものである。割れ口には敲打痕などの転用痕跡が認められない。石材は、凝灰岩である。968は、石庖丁の体部中央破片である。刃部は、片刃の直線刃かと推定される。背部は、刃部などと同じく破損したままの状態であり、線条打撃痕を伴っていない。残存する表面は、かなり光沢を帯びる。石材は、結晶片岩である。太型蛤刃石斧、石庖丁ともに転用痕跡が無い点に特徴がある。

825・826は、石鏃である。825は凹基式、826は尖基式である。鋸歯状剥離は2点とも側辺にあり、825は基部にも認められる。827は、石錐の錐部と頭部の境がやや不明瞭なものである。錐部先端が欠損している。828はスクレイパーで、両面に大きく大剥離面を残す。一側辺だけ両面側へ連続した剥離を施し、刃部を作り出している。他側辺には、自然面を一部残す。

竪穴住居18 (図209・212・221・223・246、図版37・40・101・102・128・129)

西端部の南側に位置する。東には2217土坑が、北には2213・2214・2215・2239土坑が位置する。南で4313土坑が4312溝を切っている。円形プランで拡張が認められる。1期目は、幅7cmの細い溝(4315-A溝)が明瞭に廻り、径8mを測る。2期目は、4312溝によって径13mに復元できる。4312溝は、東側では最大幅45cm、深さ5cmと明瞭であるが、西側では不明瞭になる。さらに東側では、4312溝より約20cm外側にかけて低くなっており、円形に巡る段落ちが認められる。竪穴住居の壁面と考えることもできるが、4312溝とは同心円にならないことから、詳細は不明である。

竪穴住居のほぼ中央には、4334土坑が位置する。北側を側溝に切られるが、位置をずらして2時期が重複するようである。古い段階は西側にあって浅く残り、それを切って径90cm、深さ28cmの底の平らな円形の土坑が掘られる。埋土は黒褐色シルト混じり極細粒砂で、下層に炭化物とサヌカイトチップを多く含む。

1期目は、4335ピットと2228-2ピットを主柱穴とする2本柱、2期目は、4332・4333・4316ピット、及び2228-5・2228-9・2228-1ピットを主柱穴にする6本柱の建物に復元される。掘方の径30～

50cm、深さ40~60cmで、ほとんどのピットで柱痕跡が確認される。4332ピットは、1期目の住居の壁溝(4315-A溝)を切っている。4334土坑の西肩部には小型の4339ピットがあり、径15cm、深さ25cmを測るが、1期目に対応する。松菊里型住居になる可能性も考えられる。

竪穴住居の埋土からは、弥生土器片や石器類が出土した。805は小片であるが、口縁が直立する壺と考えられる。内外面とも摩滅している。時期は不明である。石器では、敲き石4点、石鏃未成品3点、石錐1点、二次加工のある剥片9点、スクレイパー1点、楔形石器1点、剥片17点、石核1点、チップ4点が出土している。974は、扁平な細長い砂岩礫の敲き石である。長軸両端および片面中央より少

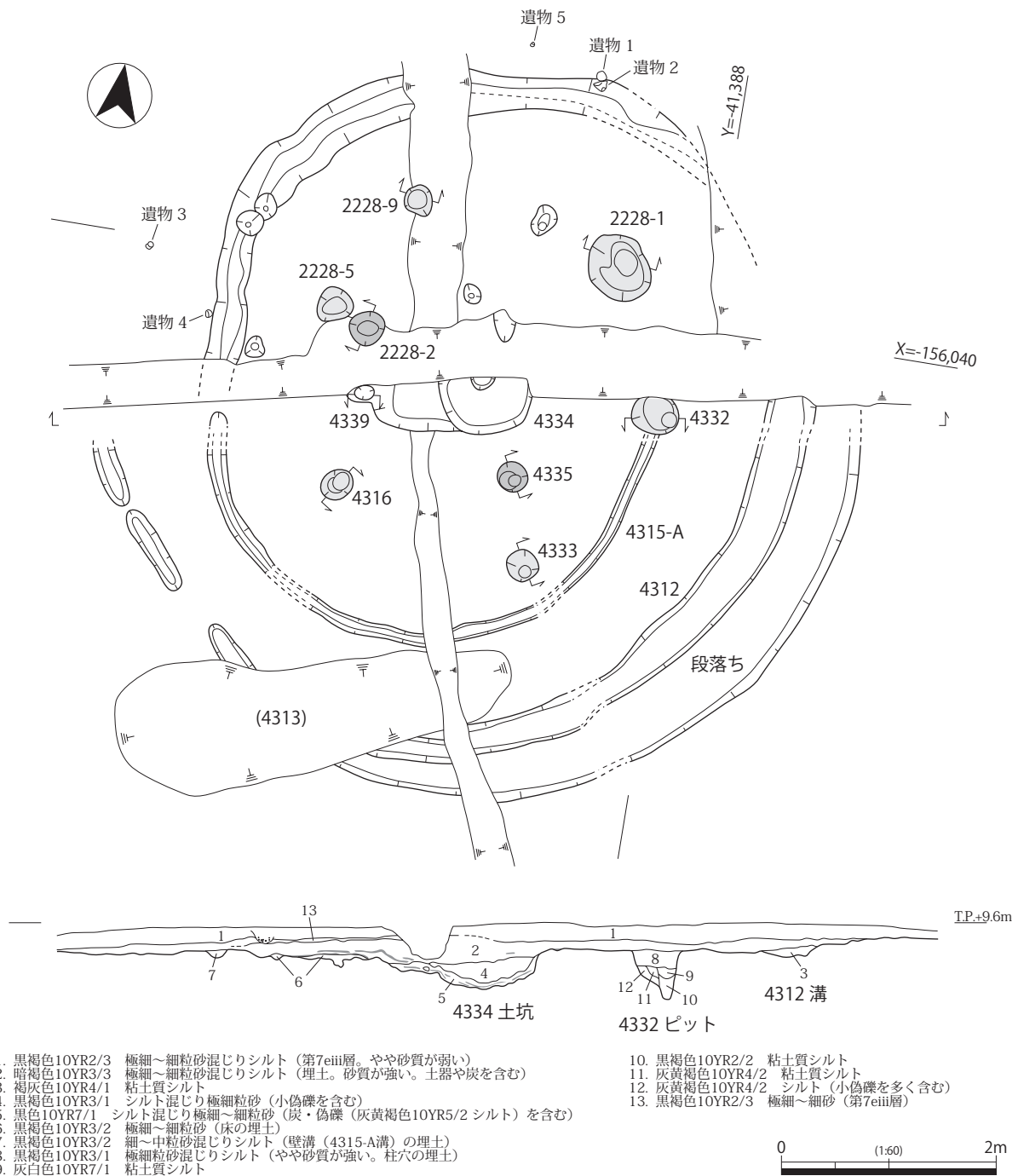


図212 竪穴住居18 平・断面図

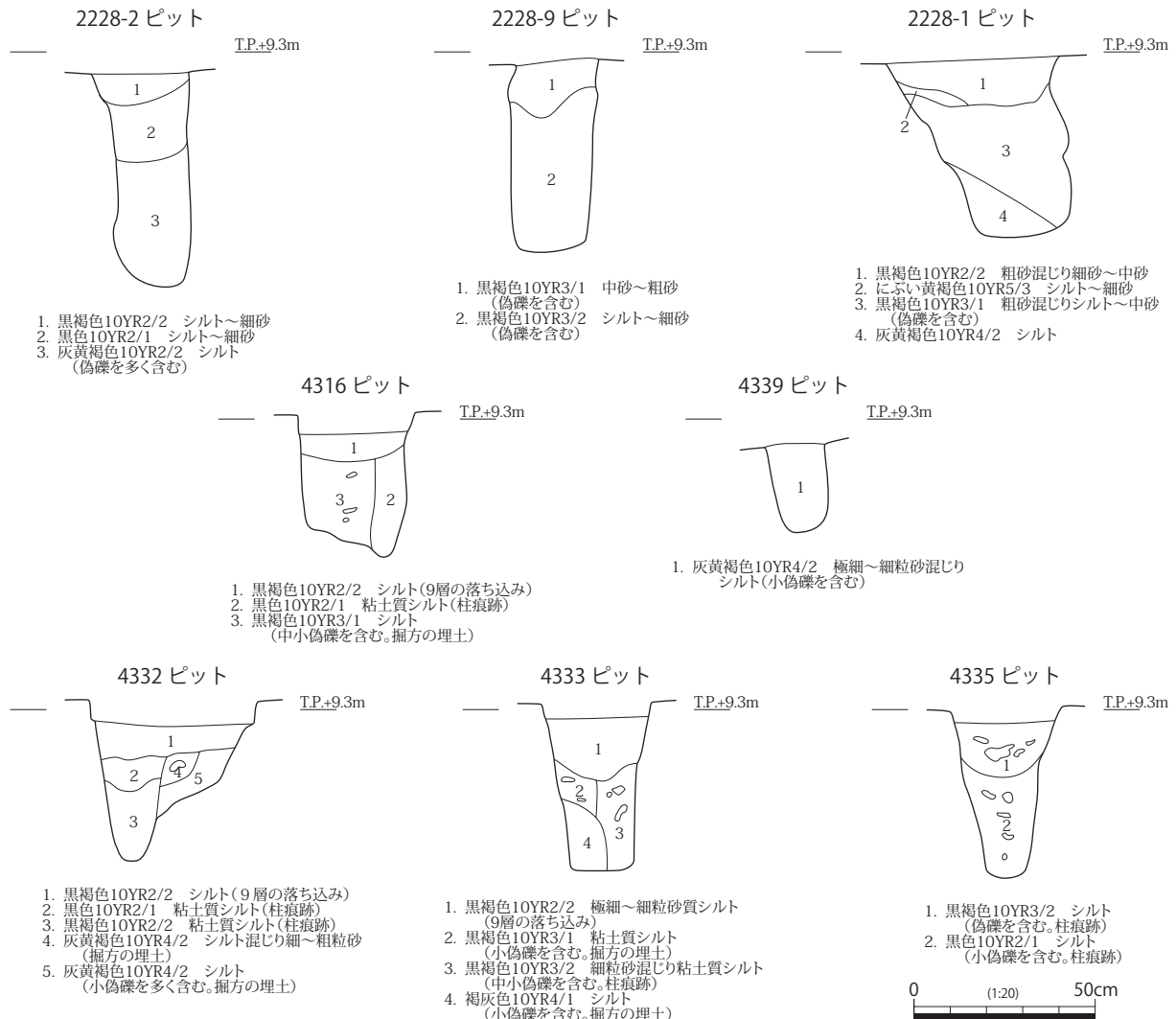


図213 竪穴住居18 ピット断面図

し端部寄りに敲打痕があり、長軸一端は敲打痕が顕著で、平坦面をなす。両側面には線状打撃痕があり、片側面に著しくみられる。973は、チャート円礫の敲击石である。長軸方向に割れた破片が接合し、一部は欠損している。打撃点付近は、敲打により凸凹が見られるが、他の表面はなめらかである。この他、図化していない敲击石には、チャート円礫の割れたもの1点、流紋岩の打撃痕と研磨痕跡のある台石が砥石の可能性もあるもの1点がある。844・846は平基式、845は平基式の石鏃未成品である。847は、頭部と錐部の区別が明確な石錐である。錐部は短めである。頭部に自然面、大剥離面を残す。

このほか、4334土坑から、櫛描文をもつ土器片、平底の甕底部2点、石器類が出土している。4316ピットから弥生土器片、4332ピットから波状文と櫛描直線文をもつ弥生土器片とチップ1点、4333ピットから、畿内第Ⅱ様式の甕の口縁部と4条の沈線と口縁端部に刻み目をもつ畿内第Ⅰ様式の甕片及び、剥片1点、4335・4339ピットからは、弥生土器片が出土している。4312溝から、弥生土器片、剥片1点が出土している。

<4334土坑> (図267、図版118・121)

石器では、石鏃5(未成品2)点、石錐2点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片20点、剥片19点、チップ1619点が出土している。1109・1110は平基式石鏃、1111は基部が極僅かに窪むが、殆ど平基式に近い石鏃である。いずれも左右対称形に近いが、1110・1111は、未成品と思われるものである。

1112・1113は、円基式石鏃である。1109・1113の両側刃、1109は基部にも鋸歯状剥離がみられる。1114・1115は、頭部と錐部が明確な錐部先端欠損した石鏃である。1114の片方側縁には、摩滅痕が少し認められる。

竪穴住居19 (図209・214・217・221・225～244・247・248、図版36・96・100・104～117・126・128・129)

西半部の中央南側に位置する。西に2213・2214・2215・2216土坑、北に2235土坑、南に4233・4240土坑が位置する。竪穴住居の重複があり、建て替えにより3時期に分かれる。

1・2期目の平面形は楕円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約9.7m、深さは約20cmを測る。上部は削平を受けているため失われている。3期目は、やや規模を縮小して、一部2条の細い壁溝をもつ。埋土は、灰黄褐色粗砂～中砂が主体である。貼床は部分的に確認されている。1・2期目の壁溝は検出されており、規模は幅約50cm、深さ約10cmを測る。断面は緩やかなU字形を呈する。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。また、北西部の壁溝から北西方向にほぼまっすぐに延びる溝(2205溝)が検出されている。竪穴住居19の排水溝と考えられるが、新旧どちらの竪穴住居に伴うものかどうかは不明である。

住居内部では、ピットが多く検出されているが、支柱穴はそのうち2期目で確認された、2231-43・2231-44・2231-45・2231-46・2231-47・2231-48・2231-49・2231-50・2231-51・2231-52・2231-53・2231-54ピットが該当すると考えられる。通常より多いことから、2時期分がまとめて検出された可能性が高いといえるが、明確には区別することはできなかった。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約20～70cm、深さ約50cmを測る。なお、1期目を検出した段階においても、多くのピットがみついているが、支柱穴を特定することができなかった。

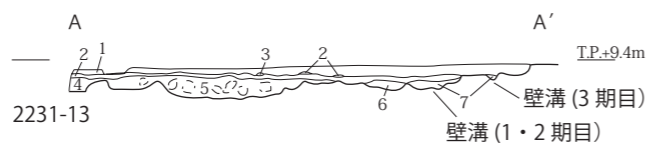
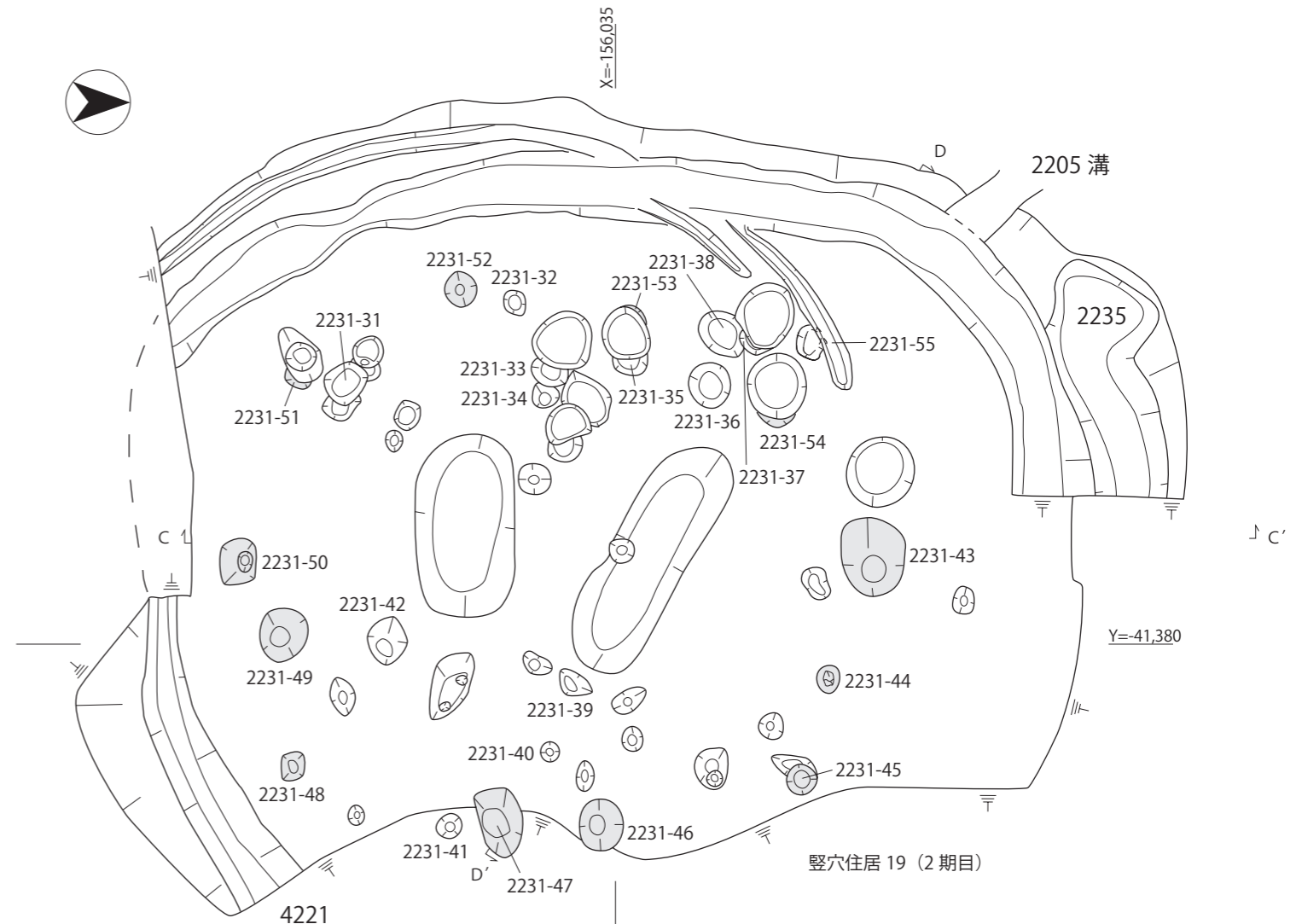
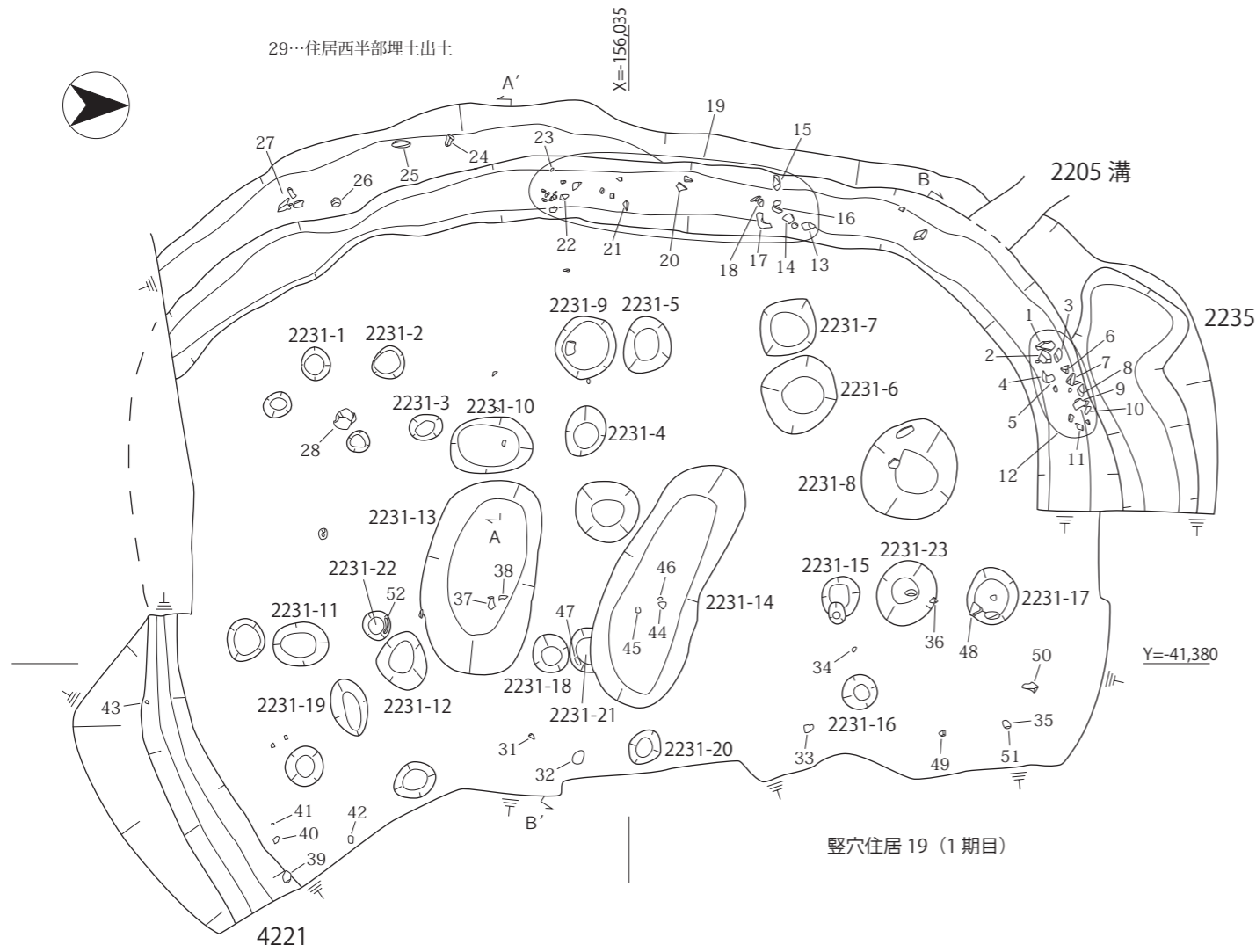
中央部では、重複した形で土坑を2基(2231-13・2231-14土坑)検出している。いずれも平面楕円形を呈しており、残存部で径約80～230cm、深さ20cmを測る。竪穴住居の中央土坑で炉として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層は見られない。竪穴住居の建て替えにより、炉が作りかえられたものと考えられるが、土坑の前後関係ははっきりしないため、どちらの竪穴住居に伴うものかは判別できなかった。

遺物は、埋土中から弥生土器やサヌカイトが多数出土した。

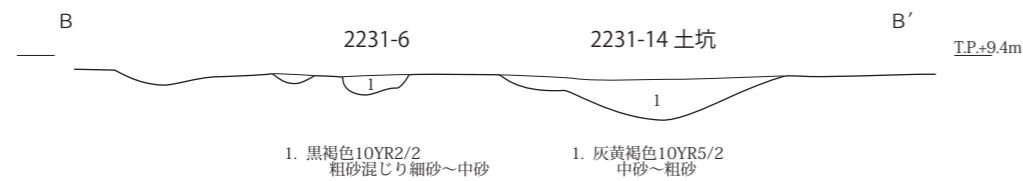
811は縄文晩期の深鉢の体部で、上半は横の条痕、下半を削り調整する。以下は、弥生土器である。808は小型の甕で、鉢形を呈している。内外面とも斜ヘラミガキ調整し、外面にスス付着。809・810は、甕である。809は大型で、口頸部は短く外湾する。部分的にヘラミガキが残る。810は器壁が厚く、口頸部は短く僅かに外反する。ヘラミガキが残る。807は甕蓋で、頂部が大きく窪む。812は壺の底部で、上げ底の縁の部分に対になる2個セットの小孔が斜めに穿たれる。813は壺の底部で、小さな上げ底を持つ。摩滅が著しい。外傾接合。814は、土製円盤である。直径4.5cm、厚さ0.7cmを測り、甕の体部片の周囲を打ち欠き、若干の研磨を施している。808・809は生駒山西麓産の胎土で、粗粒の角閃石を含む。

822は、2231-16ピット出土の柱材である。残存状況の良好なもので、残存長19.4cm、径13cmを測る。樹種は、ヤマグワである。

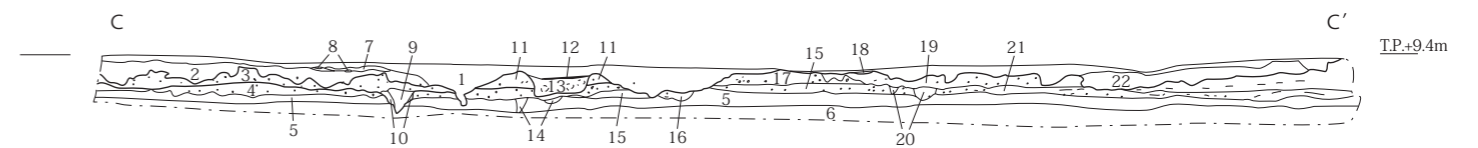
石器は、太型蛤刃石斧1点、扁平片刃石斧?1点、石庖丁3点、敲き石9点、砥石1点、台石1点、石鏃79(未成品45)点、石鏃17(未成品5)点、石鏃か中型尖頭器?8点、中型尖頭器11(未成品9)点、石槍8(未成品8)点、不明未成品?4点、スクレイパー58点、楔形石器13点、二次加工のある



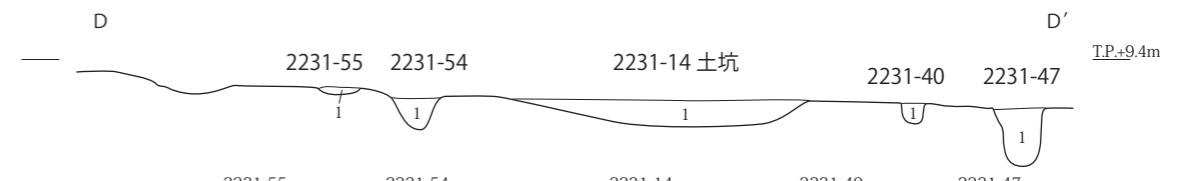
1. 灰黄褐色10YR4/2 粗砂混じりシルト～中砂
2. 褐灰色10YR4/1 粗砂混じりシルト～中砂
3. 暗灰黄色2.5Y4/2 シルト
4. 黒色10YR2/1 中砂混じりシルト～細砂
5. 黄灰色2.5Y5/1 細砂～粗砂 偽礫を含む
6. 黒褐色10YR2/2 中砂混じりシルト～細砂
7. 黒褐色10YR2/2 中砂混じりシルト～細砂 (壁溝の埋土)



1. 黒褐色10YR2/2 粗砂混じり細砂～中砂
1. 灰黄褐色10YR5/2 中砂～粗砂



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰黄褐色10YR5/2 中砂～粗砂 2. 黒褐色10YR3/1 中砂混じり細砂～中砂 3. 黄褐色10YR5/6 中砂 4. 黄灰色2.5Y4/1・黄褐色10YR5/6 中砂混じりシルト～中砂 5. 黄灰色2.5Y4/1 シルト (第9e層) 6. オリーブ灰色2.5GY5/1 シルト 7. 黒色10YR1.7/1・灰黄褐色10YR4/2 中砂～粗砂 8. 暗灰黄色2.5Y5/2 シルト 9. 黒褐色10YR3/1 細砂～中砂 10. 灰黄褐色10YR4/2 シルト～中砂 (偽礫を含む) | <ol style="list-style-type: none"> 11. 灰黄褐色10YR5/2 粗砂 12. 黒色10YR2/1 細砂～中砂 (炭化物層) 13. 黒褐色10YR2/2 中砂混じり細砂～中砂 14. にぶい黄褐色10YR5/4 細砂～中砂 (ビット埋土) 15. 暗灰黄色2.5Y5/2 細砂 16. 黒色10YR1.7/1 細砂 17. にぶい黄褐色10YR5/3 粗砂 18. にぶい黄褐色10YR6/4 細砂～中砂 19. 灰黄褐色10YR5/2 細砂 20. 黒褐色10YR3/2 細砂 21. にぶい黄褐色10YR6/4 シルト～細砂 22. 灰黄褐色10YR5/2 中砂～粗砂 |
|--|---|



- | | | | | |
|---|--|--|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黄灰色2.5Y5/1 中砂～粗砂 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色10YR2/2 粗砂混じり細砂～中砂 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰黄褐色10YR5/2 中砂～粗砂 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 黄灰色2.5Y4/1 中砂～粗砂 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色10YR2/2 粗砂混じり細砂～中砂 |
|---|--|--|---|--|

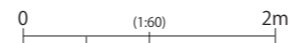


図214 竪穴住居19 平・断面図

剥片449点、剥片663点、石核63点、チップ1832点が出土している。中でも、この竪穴住居の壁溝および直上の包含層からは、石核と剥片の接合資料が得られ、弥生時代の打製石器製作技術の復元にむけての良好な一括資料といえる。

976は、凝灰岩製の大型蛤刃石斧である。壁溝から出土している。刃部は、一部を残して大きく欠損している。転用、再加工の痕跡は認められない。このほかに石斧では、図化していないが、凝灰岩製の扁平片刃石斧？1点がみつまっている。厚さ1.3cmの両面平滑に研磨された細片である。厚さから推測して、扁平片刃石斧？とした。

石庖丁は、2点図化した。977は片刃の端部破片で、石材は黒色片岩である。978は、研磨が施されていない未成品の破片であり、石材は結晶片岩か。他に、凝灰岩質結晶片岩の石庖丁のチップが1点ある。

敲き石は、チャート製4点と砂岩製5点がある。チャート製は、丸みを帯びた礫を用いている。985は、壁溝から出土している。981は、径7cmの円礫の一部分が割れ欠損しており、礫周縁に敲打痕がみられる。982・985は、チャート礫が半分に割れた状態で、982は稜に沿って複数の敲打痕跡を留める。985は、略1点に集中して敲打痕が認められる。979・980・983・984は、砂岩製の敲き石である。979は、小さな三角形の礫の角に微かに敲打痕がみられる。980は、細長く扁平な礫の両端に剥離を伴う打撃痕、両側面に線条の打撃痕が顕著な敲き石である。983は、扁平な礫の割れたもので、割れ口の突出部分に打撃痕、側面に線条の打撃痕を留める。984は、扁平でやや厚みのある石の片面と側面の一部に、敲打痕が顕著に認められる。これは両面が平らなため、石皿か砥石の破片を敲き石に転用した可能性がある。

チャートは、大きく割れているのが特徴的である。また、砂岩製の敲き石では、打撃痕に多少の剥離を伴うものがみられるが、線条打撃痕を留めるものが多い点が特徴である。サヌカイト石器製作時の荒割り段階でチャート製の敲き石を用い、二次加工の際には砂岩製の敲き石で剥離したものであろうかと推測される。986は壁溝から出土した、砂岩製の砥石である。これは直方体状の一端が欠損したもので、5面に研ぎ面が認められ、研磨により長軸方向に窪んでいる。987は、凝灰岩か流紋岩かの石材を用いた台石と思われるものである。片面が平らで、1側面は研磨され、他の周縁は割れたまま、裏面は剥離面のままである。平らな面には、打撃痕と僅かに研磨痕が認められる。

石鏃は、平基式と円基式が多く認められる。また、浅く窪んだ凹基式も少量みられる。864・868・873・883・884・887・888・890・891が壁溝から出土している。862・866～869・871・887は平基式で、887は未成品である。869・871は、基部がまっすぐよりも極僅かにふくらむが、円基式ほど突出していない。863～865は、基部が浅く窪んだ凹基式である。870・872～877は、円基式である。885・886・888・890・891・893・894は、円基式の未成品である。両面に大剥離面を留めるものが多い。885は、石錐の可能性も考えられる。889は、側縁に自然面を少し残し、腹面が大剥離面よりなる。腹面側に部分的に剥離調整が施されているだけであるが、石鏃または石錐の未成品かと思われる。879～882は、基部欠損の石鏃である。883は、先端部と基部が欠損しタイプは不明であるが、側辺が若干湾曲している点から、石小刀の可能性も考えられる。878・892は尖基式であり、892は未成品である。867の片側辺一部と870・878の両側辺には、鋸歯状剥離がみられる。

895～906は、石錐である。895・897が壁溝から出土している。895～900・902～904・906は、頭部と錐部の境が明確である。錐部の長いものと短いものがある。897は、錐部先端が欠損するが、残存する錐部両側縁は摩滅している。898～900・902は、錐部先端から両側縁にかけて摩滅している。

901は、錐部のみ残存しており、頭部は不明である。

907・908は、楔形石器である。相対する辺が階段状に剥離し、908は両側面に截断面を有する。

909～918は、スクレイパーである。909・910・912・915が壁溝から出土している。909～911は、大剥離面末端部を主に背面側へ連続して剥離し、915は主に腹面側へ剥離して刃部を形成している。914・916・917は、両面へ剥離を施して刃部をなし、917では凹刃を呈する。918は、大剥離面末端側を片面側へ部分的に剥離している。916は、背面に自然面を多く留め、腹面には主に両側縁からの剥離調整が施されている。平面形は、中型尖頭器の未成品に類似する。

919は、自然面を打点とする剥片に、ごく一部剥離が施されたものである。

920～927は、剥片である。924・927が壁溝から出土している。自然面を留めるものが多い。927は板状に剥離した剥片で、石核として使用できるのではなかろうか。

928～934は、石核である。928・929・932・933が壁溝から出土している。928は、5辺よりなる側面の3辺に平らな自然面を留め、自然面を打面としている。他の石核は、片面に大きく自然面を留め、周縁からの打撃により剥片を採取している。

935～966は、接合資料である。935～941は、7片が接合した。片面から側面にかけて自然面のため、搬入された原礫の大きさが推定できる資料である。接合資料では、長軸方向側面からの剥離により、剥片を採取している。途中、割れを生じた後も、残った大きな石核から剥片を剥離している。自然面側には、1ヶ所だけ剥離された部分があり、石材の良し悪しを確認するために試し割りした部分か。

942～944も、片面から側面にかけて自然面を留めるもので、自然面側には剥片が数枚剥離されている。片面に集中して剥片を剥離しており、打点は側面にある。935～941と942～944は、似たような大きさであり、自然面の特徴が似ている点から、同一原礫の可能性が考えられ、両石核間に何枚かの剥片を重ねると、原礫の厚さになるのではなかろうかと推測される。推定すると長さ約17cm、幅10cm、厚さ7～8cm位であろうか。

945・946も、片面から側面にかけて自然面を留め、自然面側には1ヶ所だけ剥片を採っているが、これも石質の良し悪しをみるためのものか。945・946も接合した剥片でみると、側面の自然面を打点として剥片を採取している。

949・950も片面に自然面を留め、自然面を打面にして剥片を採取している。

947・948は、やや小さめの原礫を素材とした石核で、片面は原礫面のままである。自然面を打面にして剥片を採取しているが、剥片はかなり厚手で、加工されないまま廃棄されたようである。

953・954は、細長い楕円形状の原礫の片面側を剥離しているもので、途中長軸方向の1/3あたりで折れている。折れた後は、小さい方の石核を主に長辺側である両側面からの打撃により剥離している。

951・952は、小さい原礫を素材とした石核で、片面に自然面を留める。自然面を打面にして周縁からの剥離により剥片を採取している。

958・959は、片面から一側辺にかけて自然面を留める。3片が接合した。自然面を打面にして、1小剥片を採っているが、あとの接合部は剥離作業の段階で割れを生じたものか。

955～957は、片面に自然面を留める石核である。周縁からの打撃により、自然面を剥ぐように剥片を剥離している。剥離段階で割れを生じたものか。

960～963は、大きな角礫状の原材を用いたものか、接する2辺に自然面を留める。原礫を薄く板状に割った剥片を素材としており、自然面を打面として2方向から剥離されている。

965・966は、自然面を打面として剥離した剥片が接合した。

964は、自然面が側面に残る石核である。原礫を輪切りにしたような剥片素材から剥片を剥く際に2つに割れたものか。写真図版109-1300は、ポイントフレイクと思われる剥片である。

<4221溝>

竪穴住居19の壁溝の南端部分の続きで、長さ2.2m分検出された。弥生土器片、剥片3点が出土した。

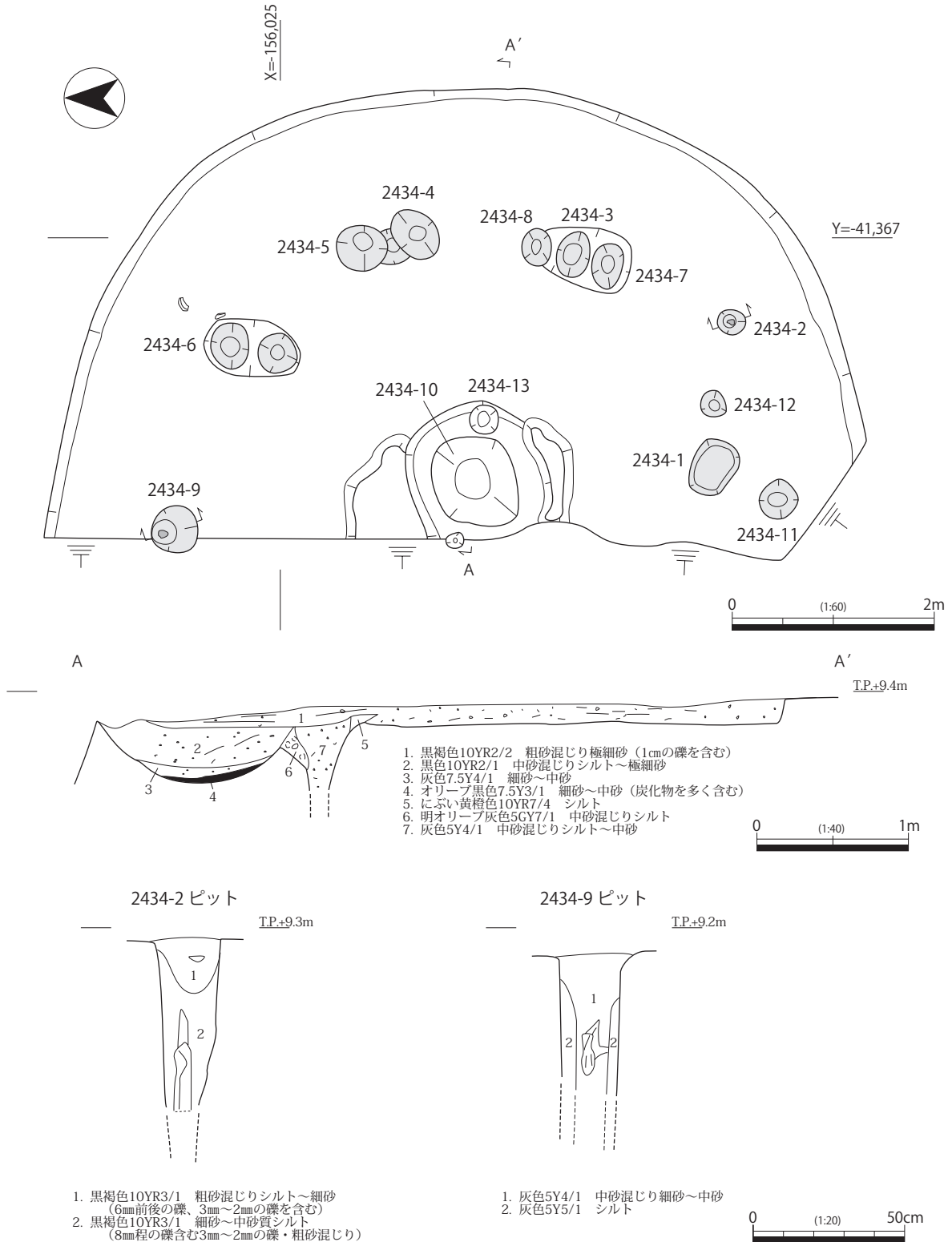


図215 竪穴住居20 平・断面図

竪穴住居20 (図209・215・217・221・224・245、図版101～103・129)

西半部のほぼ中央に位置する。北の竪穴住居21を切っている。東には2432土坑が、北には2437土坑が位置する。南東には2428土坑が位置する。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形はほぼ円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約8.2m、深さは約10cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂混じり極細砂が主体である。貼床は確認されていない。壁溝ならびに杭の痕跡は検出してい

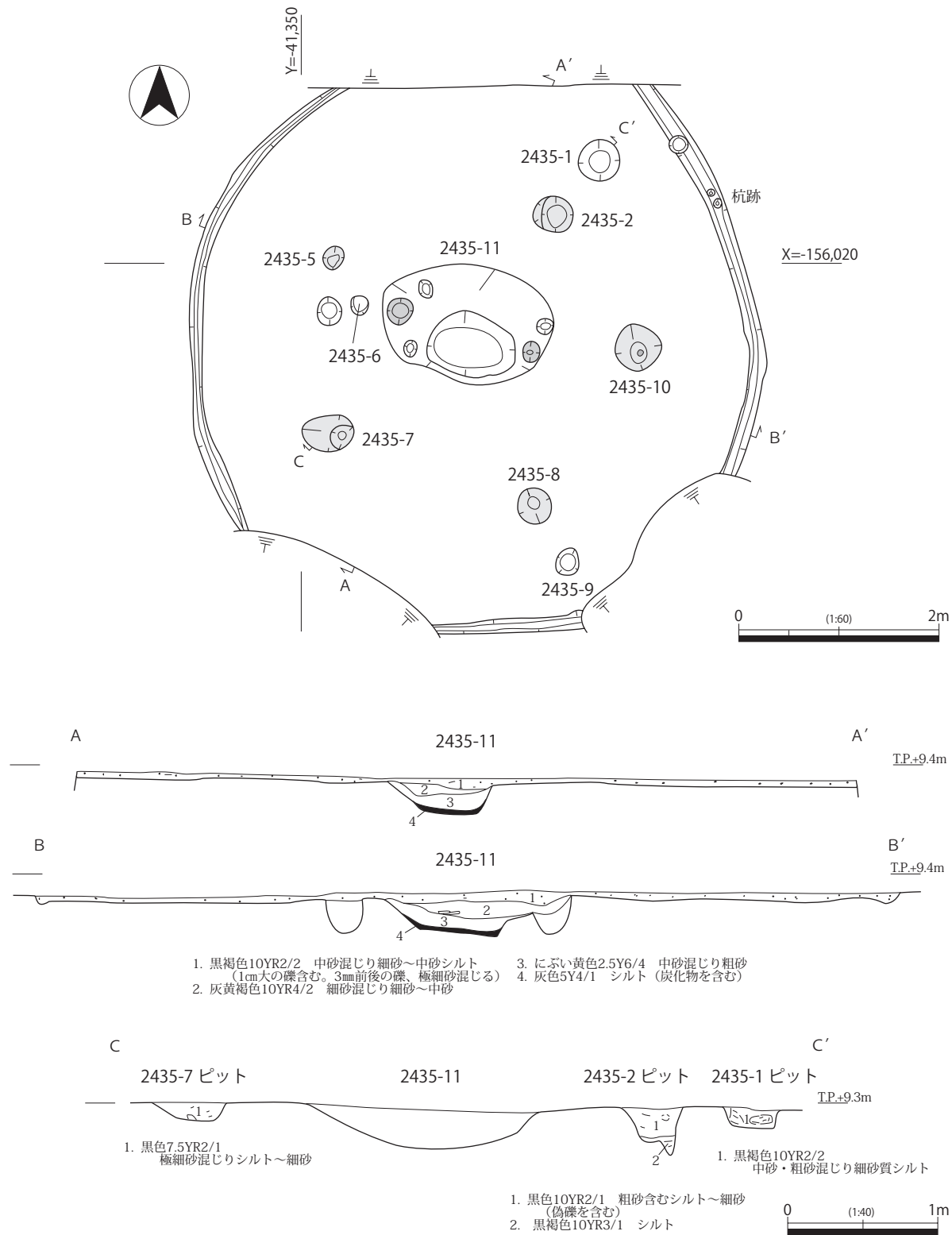


図216 竪穴住居21 平・断面図

ない。

住居内部では、ピットが多く検出されているが、支柱穴に相当するのはそのうち13基と考えられる。2434-1・2434-2・2434-3 (2434-7・2434-8が隣接)・2434-4 (2434-5ほか1基隣接)・2434-6 (ほか1基隣接)・2434-9・2434-11・2434-12ピットが該当する。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30~50cm、深さ70~80cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂混じり細砂~シルトである。2434-2・2434-9ピットからは、柱痕跡が良好な状態で出土した。このうち、2434-3 (2434-7・2434-8が隣接)・2434-4 (2434-5ほか1基隣接)・2434-6 (ほか1基隣接)のようにピットが2、3基セッ

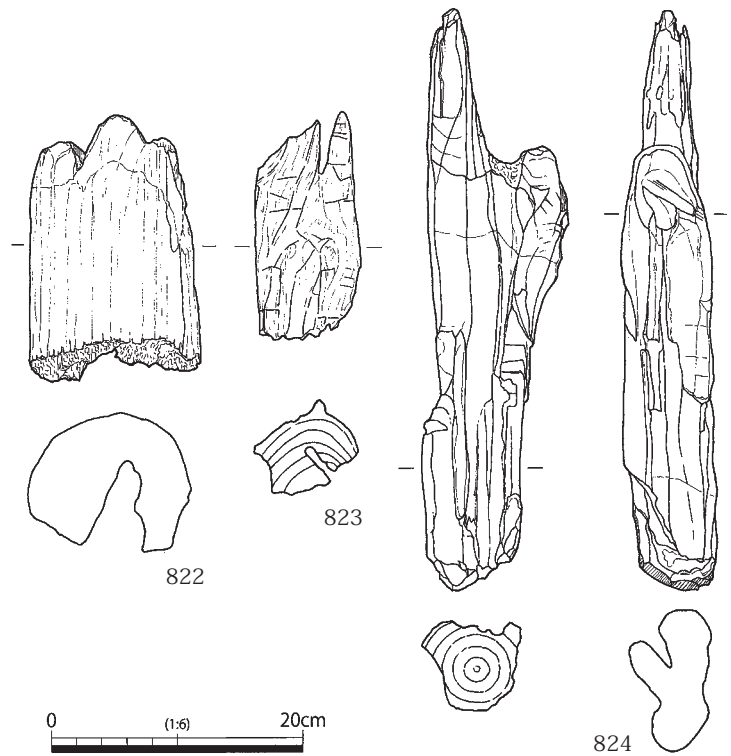


図217 19区竪穴住居 出土遺物(1)木製品

トで検出していることを考えると、2度の建て替えも考えられるが、平面でははっきりしなかった。

中央部で土坑を1基検出している。2434-10土坑は、平面ほぼ円形を呈しており、残存部で径約140cm、深さ約50cmを測る。炉として使われたものであり、土坑の底部に炭層が見られる。この周囲には、土手状に粘質土が積まれており、東に向いて開く。炉を使用する際には、東から作業をしていたと推定される。松菊里型住居の可能性がある。

遺物は、竪穴住居の埋土中から弥生土器が少量、サヌカイトが多数出土した。

815は、口縁が緩やかに外反する甕である。外面に、僅かにヘラミガキが残る。

823は、2434-9ピット出土の柱材である。残存長17.7cm、径約10cmの丸太の約1/3が残る。表面には枝を払った痕跡と、石斧による加工痕が残る。樹種はクヌギである。

824は、2434-2ピット出土の残存長45.8cm、径約10cmの柱材である。上部は枝部分を落とし、表面には微かに加工痕が残る。下端部は加工され、丸太の芯部分が残る。樹種はクヌギである。

石器は、敲き石1点、石庖丁?1点、石鏃9(未成品5)点、石錐6点、中型尖頭器1点、不明未成品?1点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片55点、剥片51点、石核2点、チップ6点が出土している。971は、扁平な三角形の砂岩礫周縁の特に2辺に、線条打撃痕が顕著に認められる。両面は浅く窪んでおり、石皿か台石としても使用された可能性がある。表面右下角には、径約2cmの浅い窪みがある。石庖丁?は、剥片が炉から出土しており、石材は安山岩?である。

851~854は石鏃で、851が平基式、853が円基式、854が凹基式、852が基部欠損のため不明である。851は、両側辺に鋸歯状剥離がみられる。855は、石槍未成品の先端部破片である。856~860は、石錐である。いずれも、頭部と錐部の区別が明瞭ではない。857は、棒状錐である。858・859の錐部先端は欠損している。860の錐部先端エッジは、摩滅している。856は、石鏃円基式の可能性も考えられるが、当遺跡出土の石鏃の場合、左右対称で側縁のラインがほぼまっすぐなものが成品の特徴であるた

め、石錐と判断した。861は、スクレイパーである。両面に大剥離面を大きく留め、一部に自然面が残る。腹面側の打点は除かれ、末端側を主に腹面側へ剥離して刃部を形成している。

竪穴住居21 (図209・216・221・222・246、図版102)

西半部の中央北側に位置する。南の竪穴住居20と南東の2432土坑に切られている。また、西部に2437土坑が位置し、これを切っている。東は遺構が検出されておらず、空地が広がっている。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形はほぼ円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約5.8m、深さは約5cmを測る。埋土は、黒褐色中砂混じり中砂～シルトが主体である。貼床は確認されていない。壁溝は検出されており、規模は幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は竪穴住居とほぼ同じである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットが多く検出されているが、支柱穴はそのうち5基と考えられる。2435-2・2435-5・2435-7・2435-8・2435-10ピットが該当する。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約30cm、深さ約30cmを測る。埋土は、にぶい黄色中砂混じり粗砂である。2435-10ピットからは、コナラの柱根が出土した。

中央部で土坑を1基検出している。2435-11土坑は、平面楕円形を呈しており、残存部で径約50～

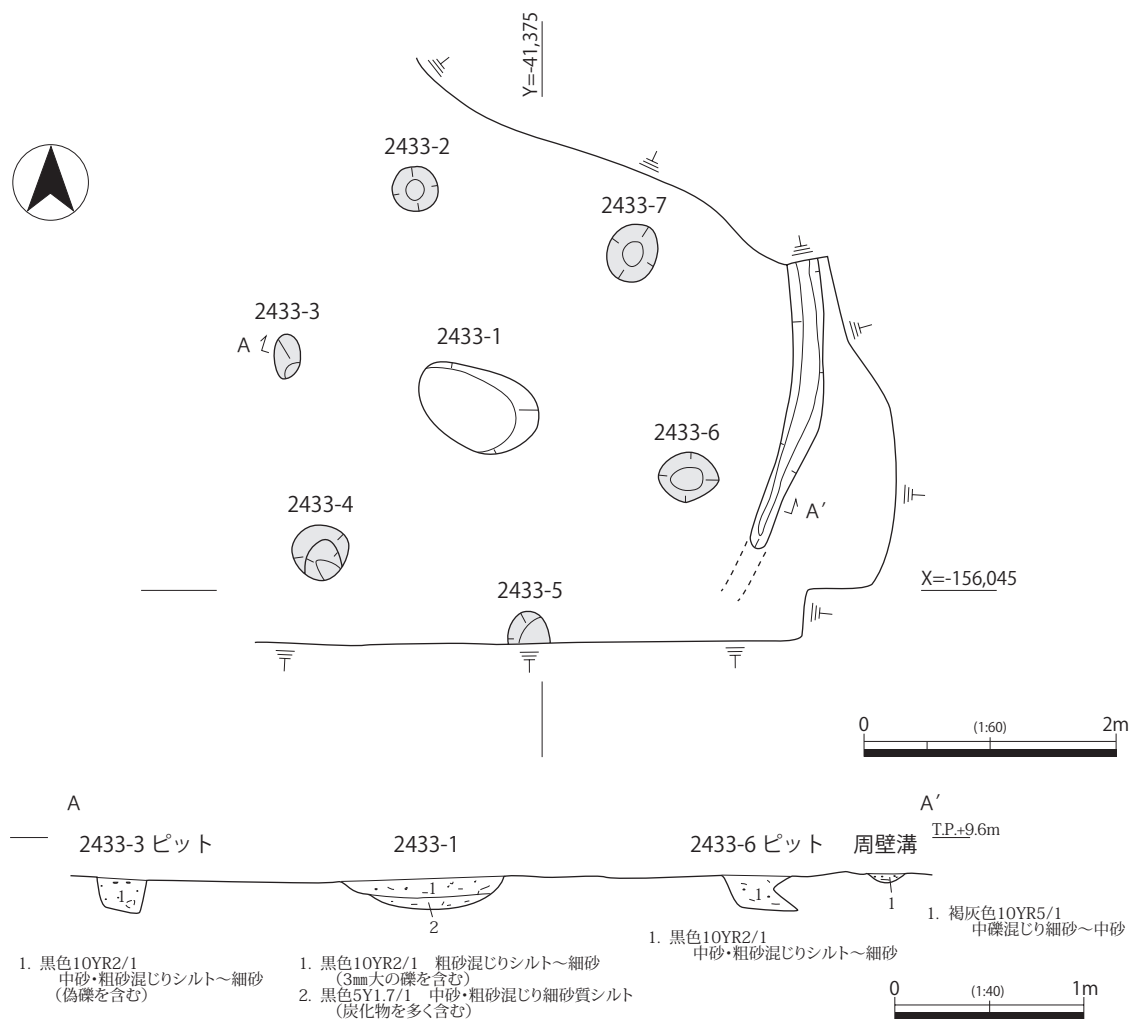


図218 竪穴住居22 平・断面図

180cm、深さ約20cmを測る。炉として使われたものといえ、土坑の底部に炭層が顕著に認められる。また、この土坑に付随して、ピットが2基、その長軸方向に位置する。松菊里型住居の可能性はある。

遺物は、竪穴住居の埋土中から弥生土器が少量、サヌカイトが多数出土した。821は、大型の甕の小片である。器壁は厚く、頸部がやや内傾した後短く外反する。820は長頸広口壺で、櫛描直線文（7条／10mm）を巡らす。櫛原体の条線は太いが、揃っている。反時計回りの重なりを持つ。

石器は、敲き石1点、石鏃か石錐未成品1点、石錐1点、石槍未成品1点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片7点、剥片17点、石核3点、チップ9点が出土している。975は、敲き石である。これは断面三角形を呈し、縁には打撃痕があり、特に下部に顕著である。975の3面のうち1面は、長軸方向の研磨痕があり、もう1面は少し研磨、残る面は割ったままの状態である。石材は、斑レイ岩である。843は、均整の取れた石錐である。両側辺中央が僅かに窪む。石鏃の可能性も考えられる。

竪穴住居22（図209・218・221、図版96）

西半部の中央南側に位置する。西には2422土坑が、北には竪穴住居19が位置する。竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。竪穴住居は平面プランがわからないほど、上部は削平を受け、かなり失われている。

平面形は円形を呈すると思われ、規模は径5m程度と推測される。深さは削平のため不明である。貼床は確認されていない。壁溝は東で一部検出され、規模は幅約20cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は、黑色中砂混じり細砂～シルトである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。上部構造を復元できるまでには至らなかった。

住居内部では、ピットが6基検出されている。2433-2・2433-3・2433-4・2433-5・2433-6・2433-7ピット

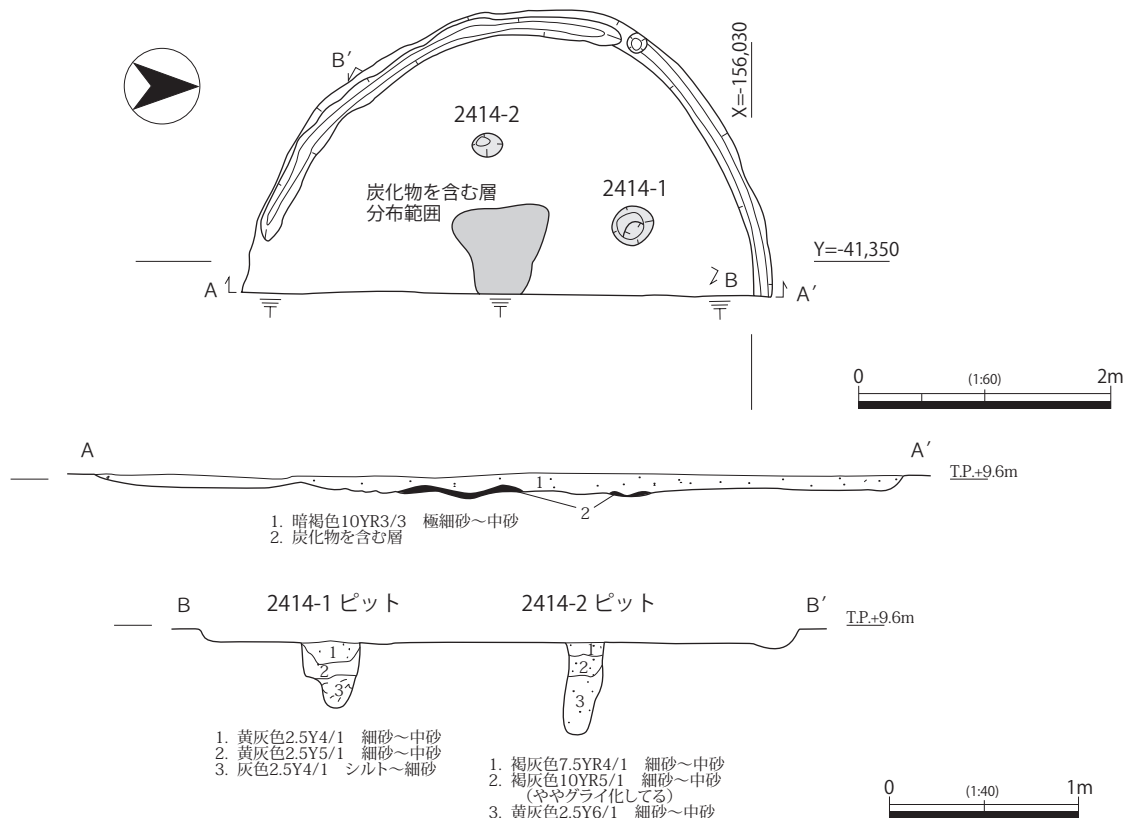


図219 竪穴住居23 平・断面図

トが該当し、支柱穴はこの6基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約40cm、深さ約20cmを測る。埋土は黒色粗砂である。

中央部で土坑を1基検出している。2433-1土坑は、平面楕円形を呈しており、残存部で径約60cm、深さ約90cmを測る。炉として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層は見られない。

遺物は、位置的に竪穴住居の埋土と考えられる包含層中から、弥生土器やサヌカイトが出土した。817は、甕である。体部上半に僅かに稜を持ち、口頸部は緩やかに外湾する。体部外面下半にヘラミガキが一部残る。底部はやや厚く、平底である。818は、817とほぼ類似した形態で、剥離が著しいが、外面下半部に僅かにヘラ削りが残る紀伊型甕である。結晶片岩を含む胎土を持つ。816は甕蓋で、器壁が厚く、頂部が窪む。内外面にススが附着する。

石器では、石鏃円基式の未成品が1点、二次加工のある剥片3点、剥片3点、石核1点が出土している。

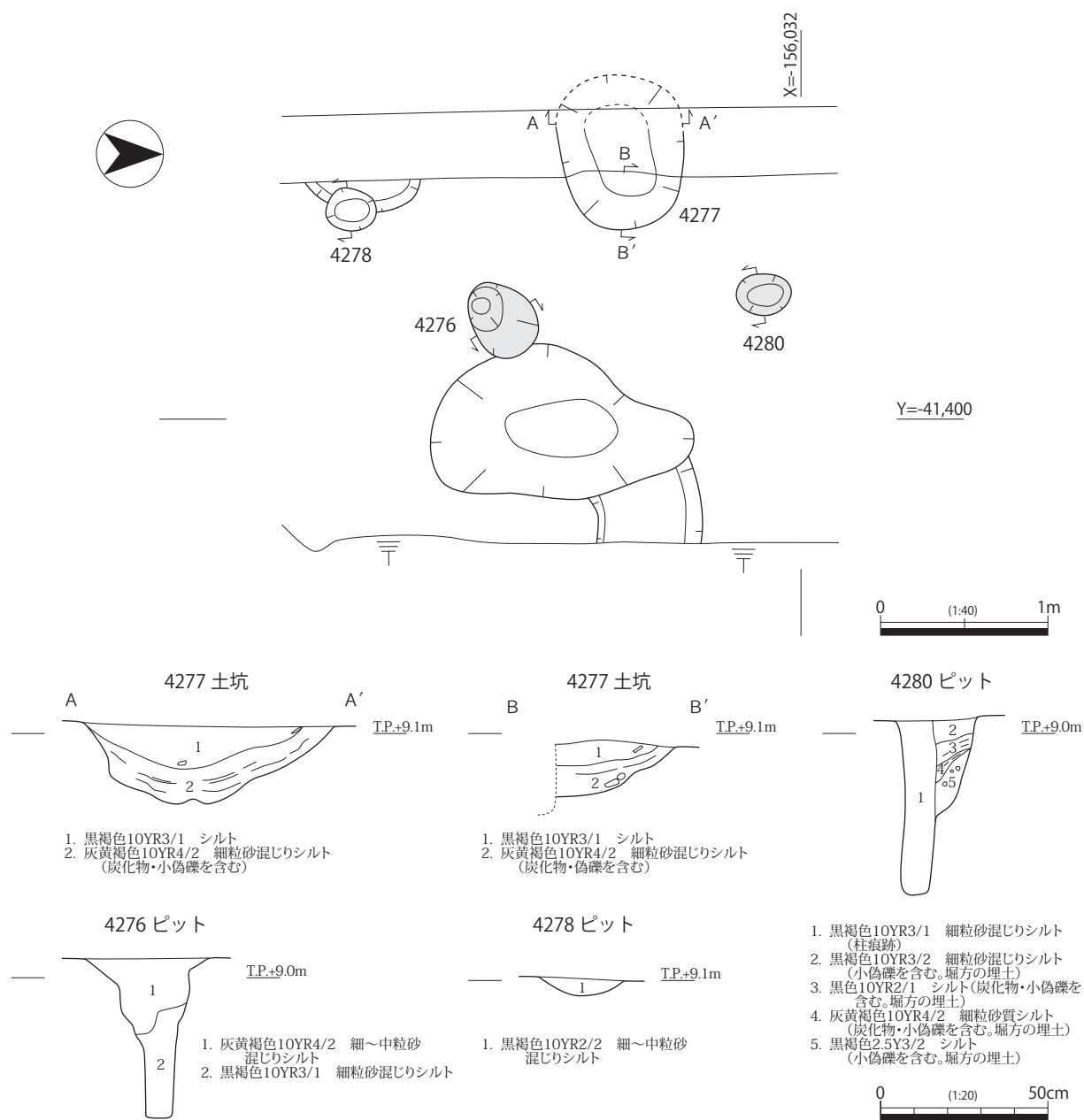


図220 竪穴住居24 平・断面図

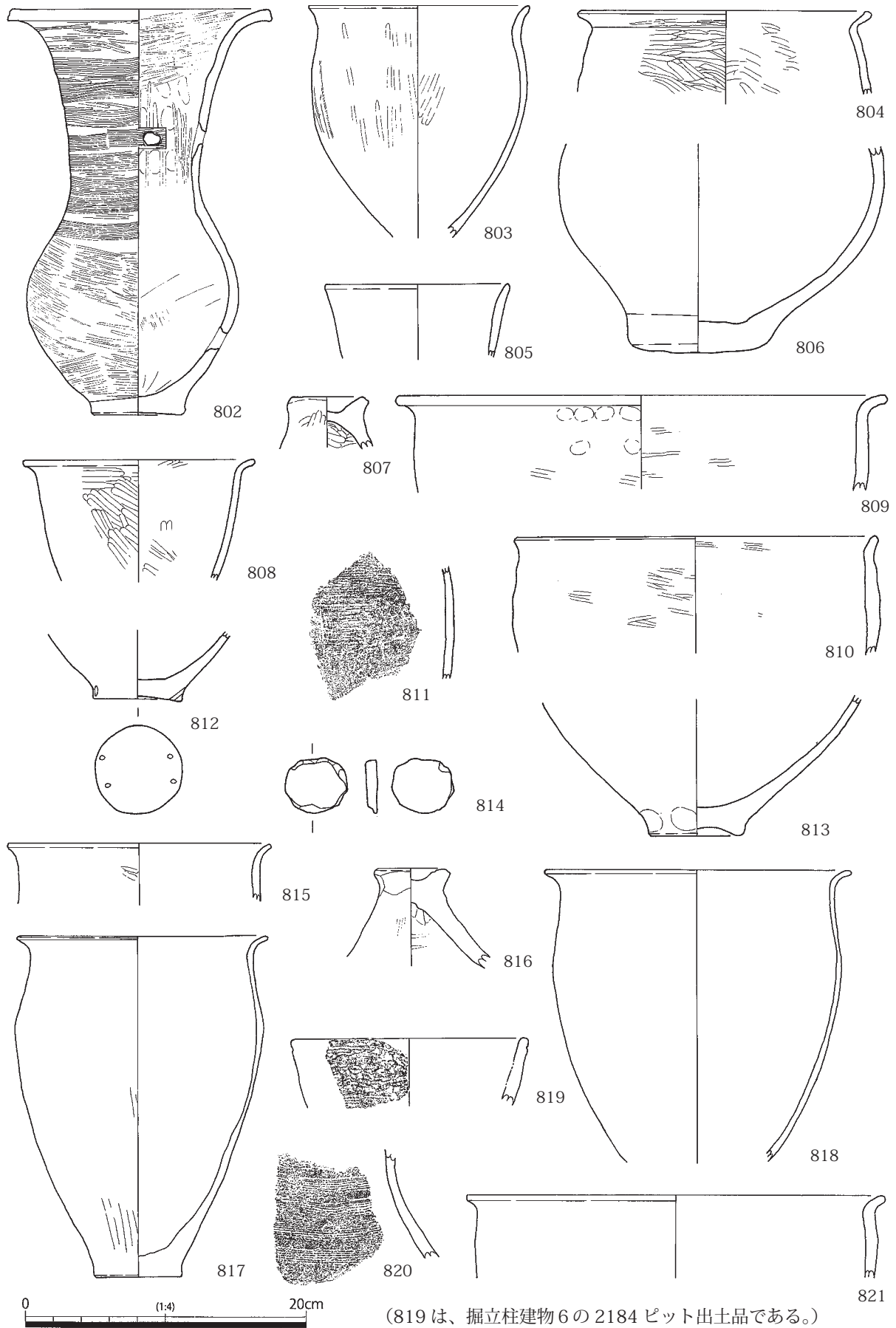


図221 19区竪穴住居 出土遺物(2) 土器

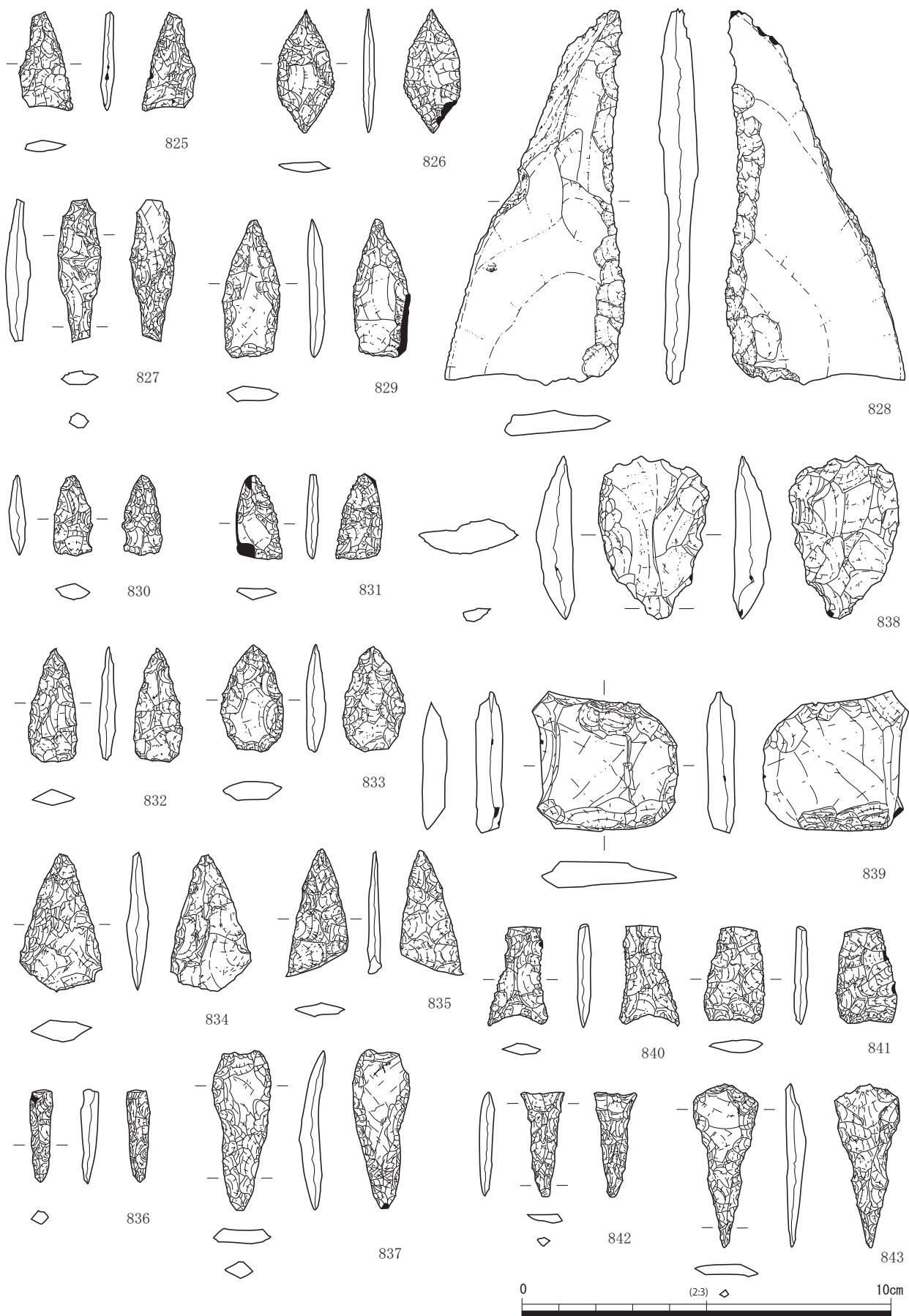


图222 19区竖穴住居 出土遗物 (3) 石器 1

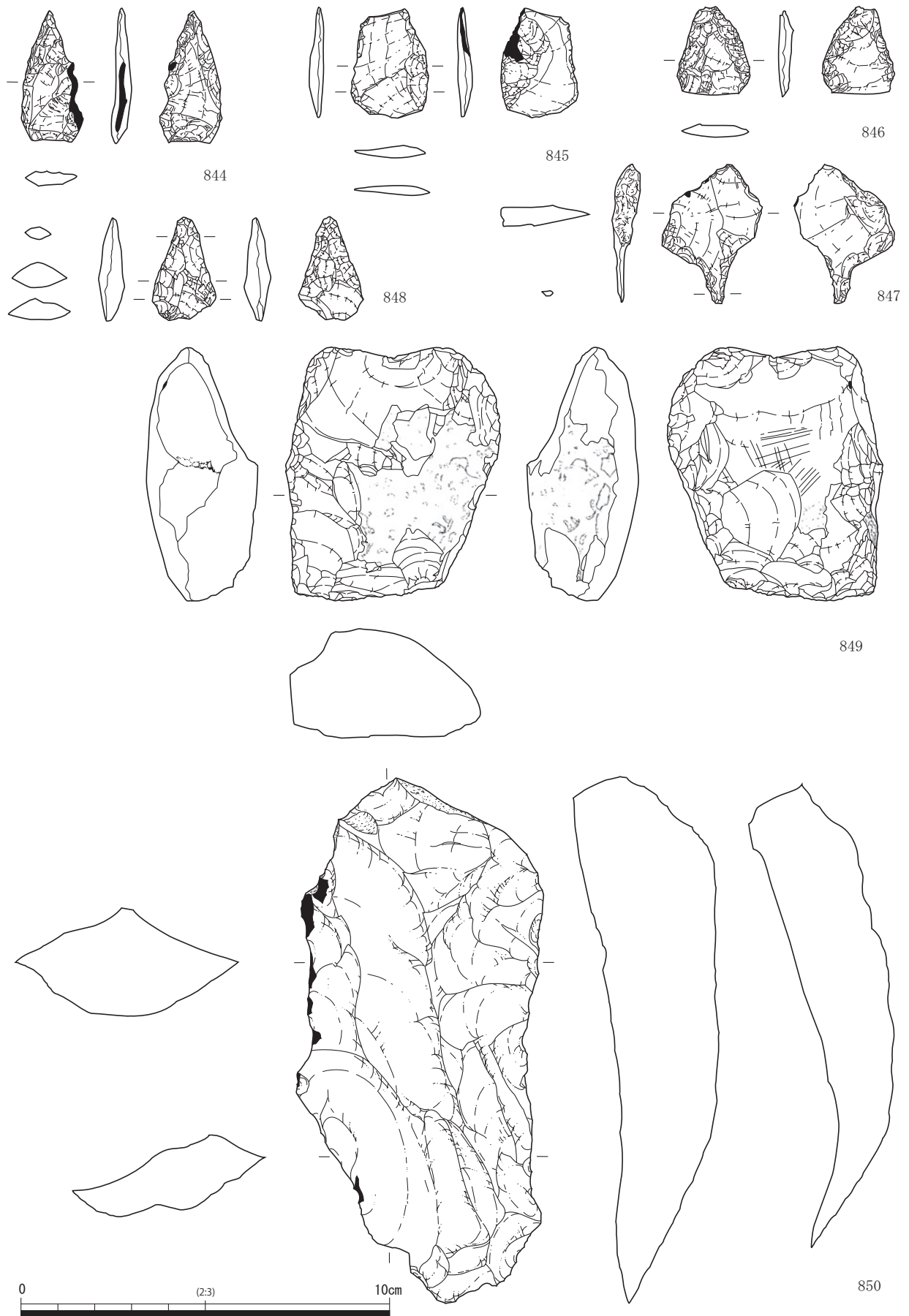


图223 19区竖穴住居 出土遗物（4）石器2

竪穴住居23 (図209・219)

ほぼ中央部に位置する。西には2415・2422土坑、柱列7が位置する。北や南には、遺構が検出されておらず、空閑地が広がっている。竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。竪穴住居は西半部のみを検出した。東半部については、部分的に炭化物を含む層を確認していたが、平面形として竪穴住居を確認することはできなかった。上部は削平を受けているため、かなり失われている。

平面形はほぼ円形を呈すると思われ、規模は検出面で、最大径約4.2m、深さは約10cmを測る。埋土は、暗褐色中砂～極細砂が主体である。貼床は確認されていない。壁溝は西半部のほぼ全体で検出され、南端の一部を除いて全周する。壁溝の規模は幅約20cm、深さ約5cmを測る。断面はU字形を呈する。埋

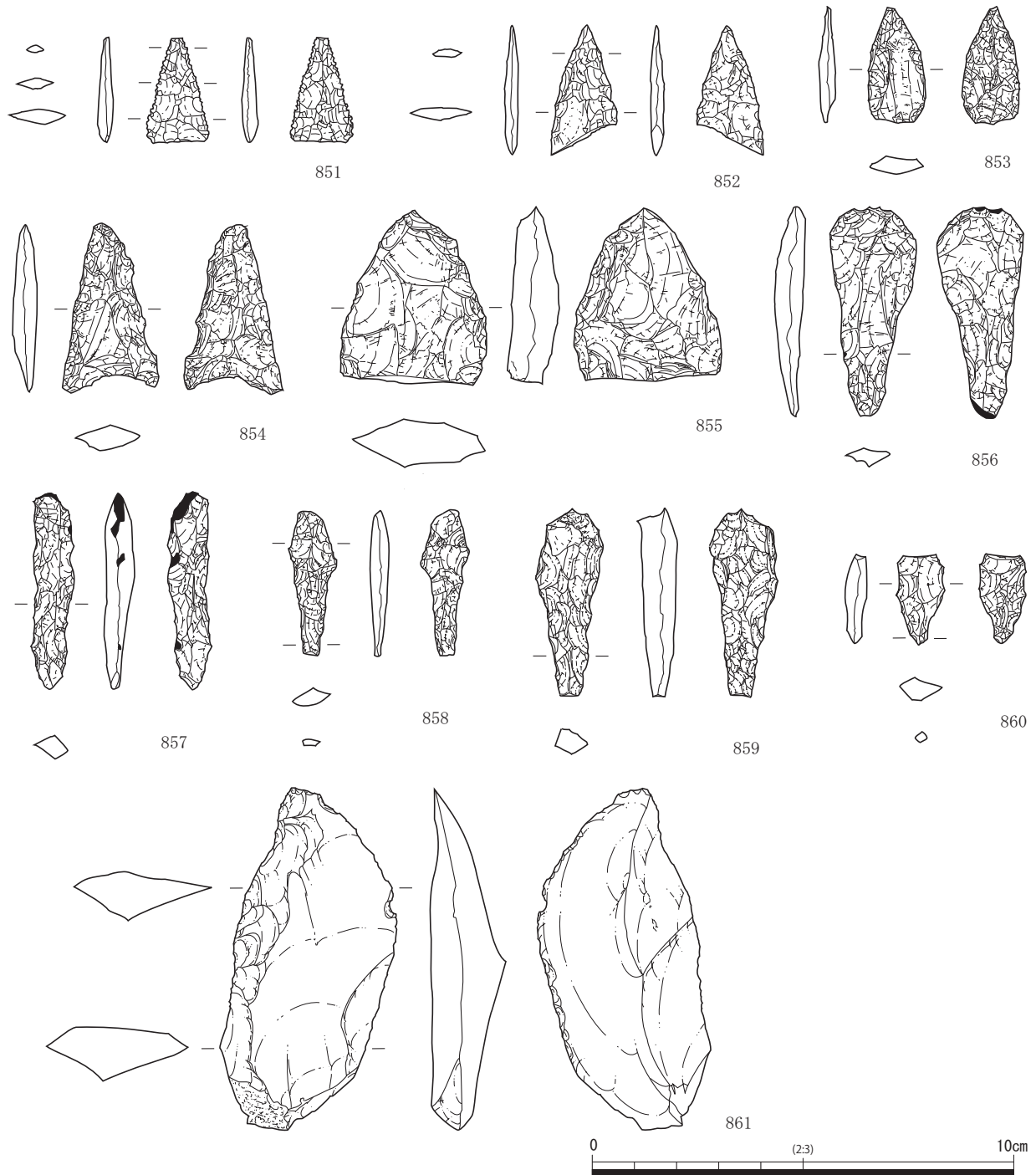


図224 19区竪穴住居 出土遺物 (5) 石器 3

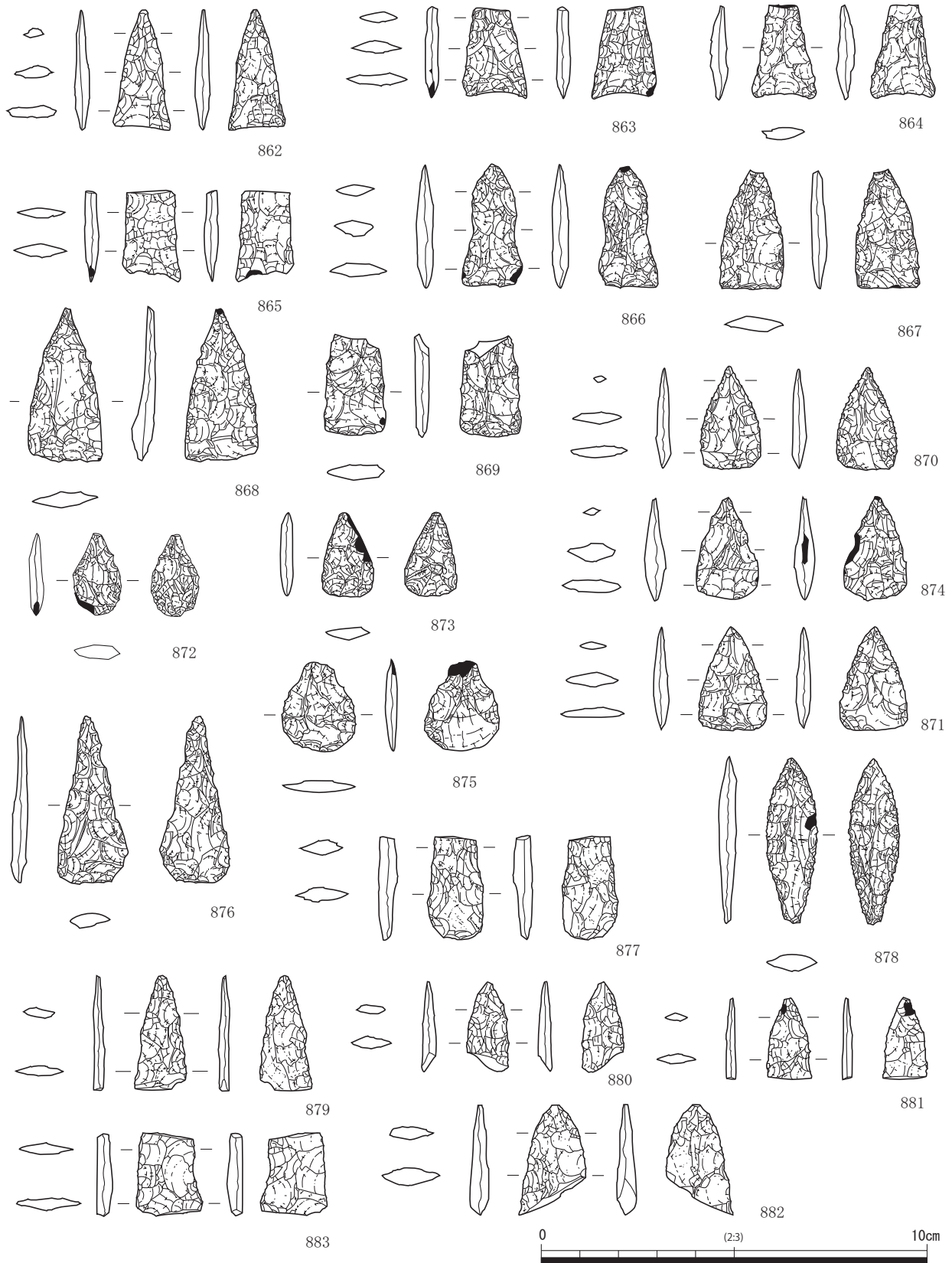


图225 19区竖穴住居 出土遗物(6)石器4

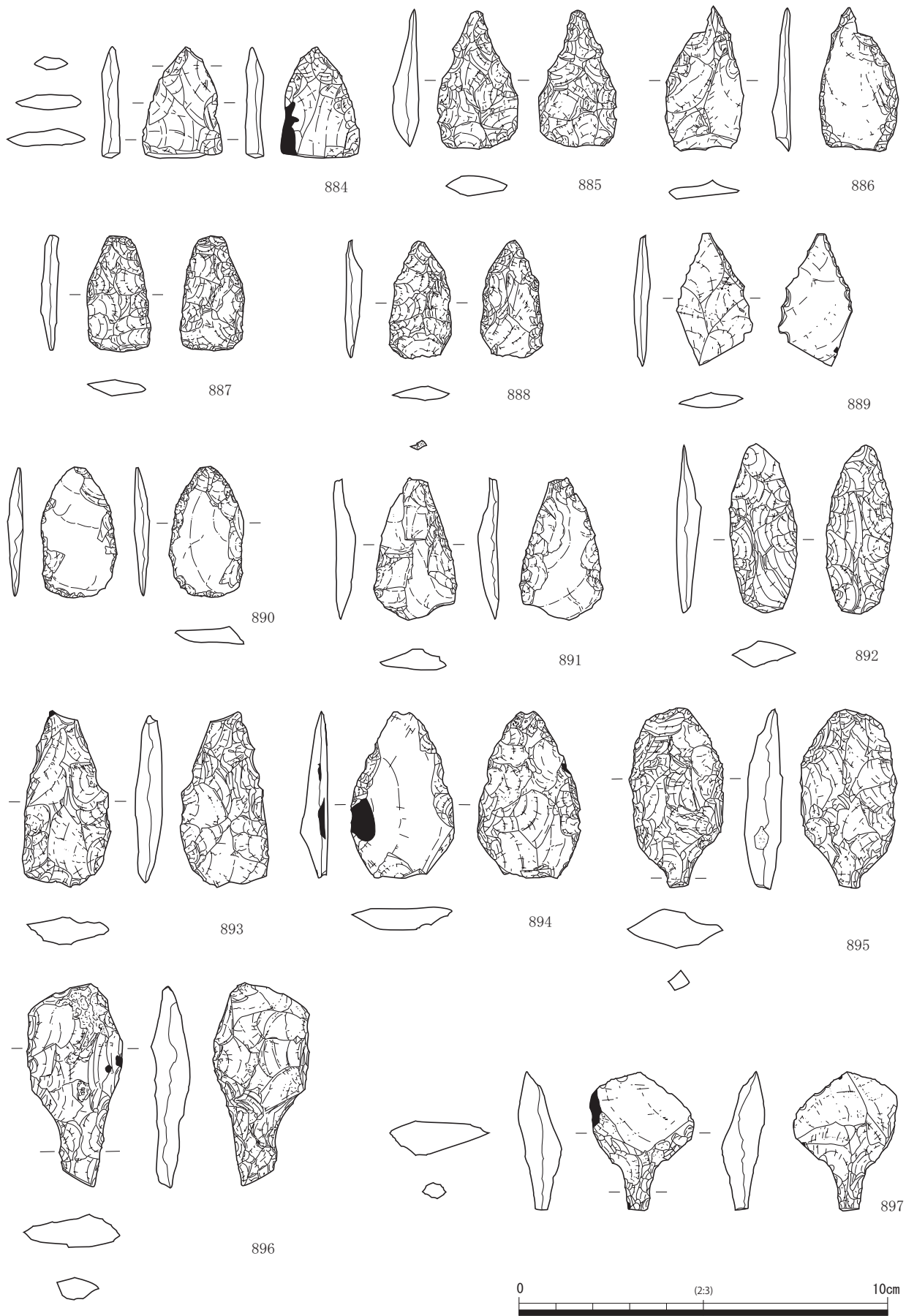


图226 19区竖穴住居 出土遗物(7) 石器 5



图227 19区竖穴住居 出土遗物(8)石器6

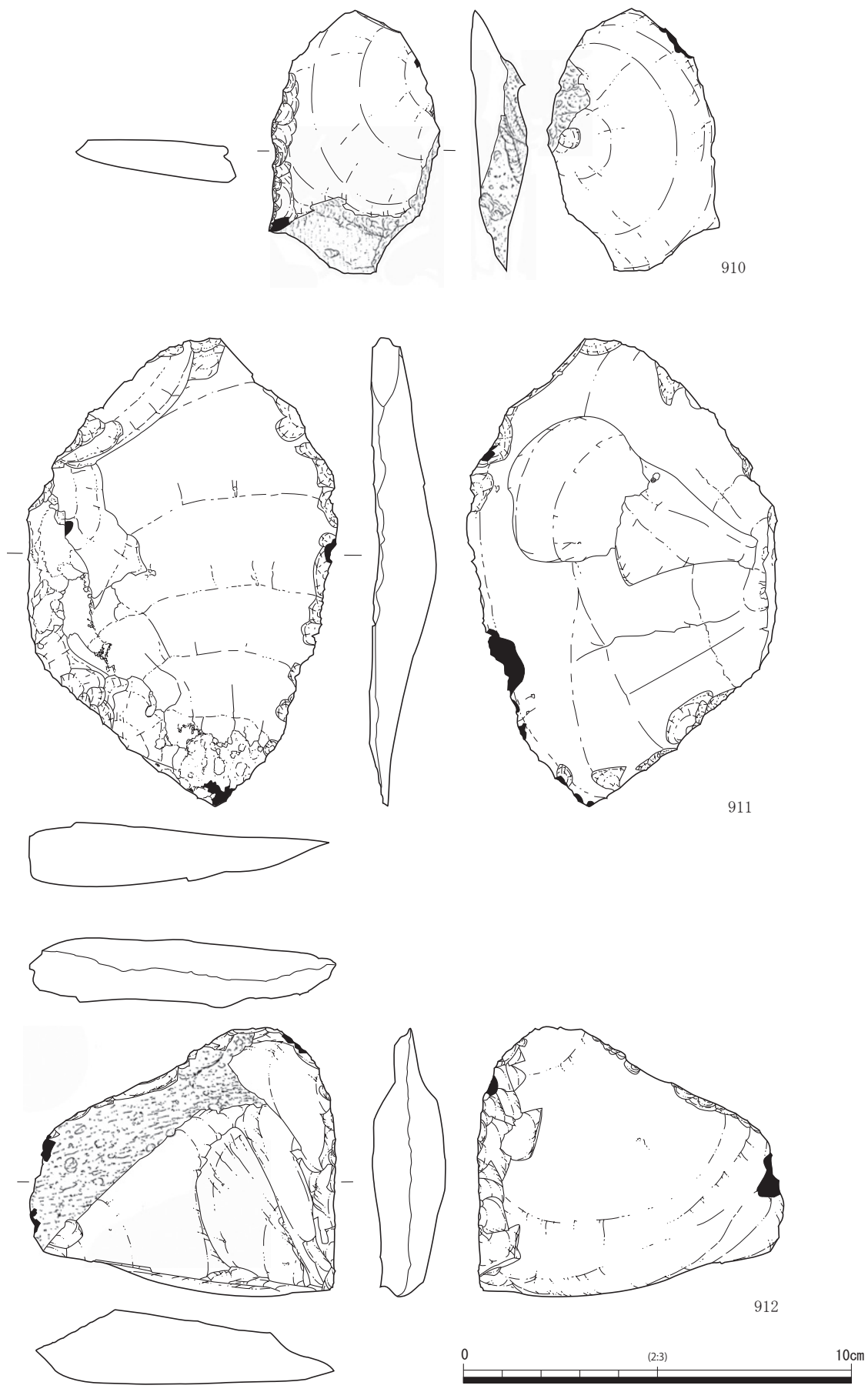


图228 19区竖穴住居 出土遺物 (9) 石器 7

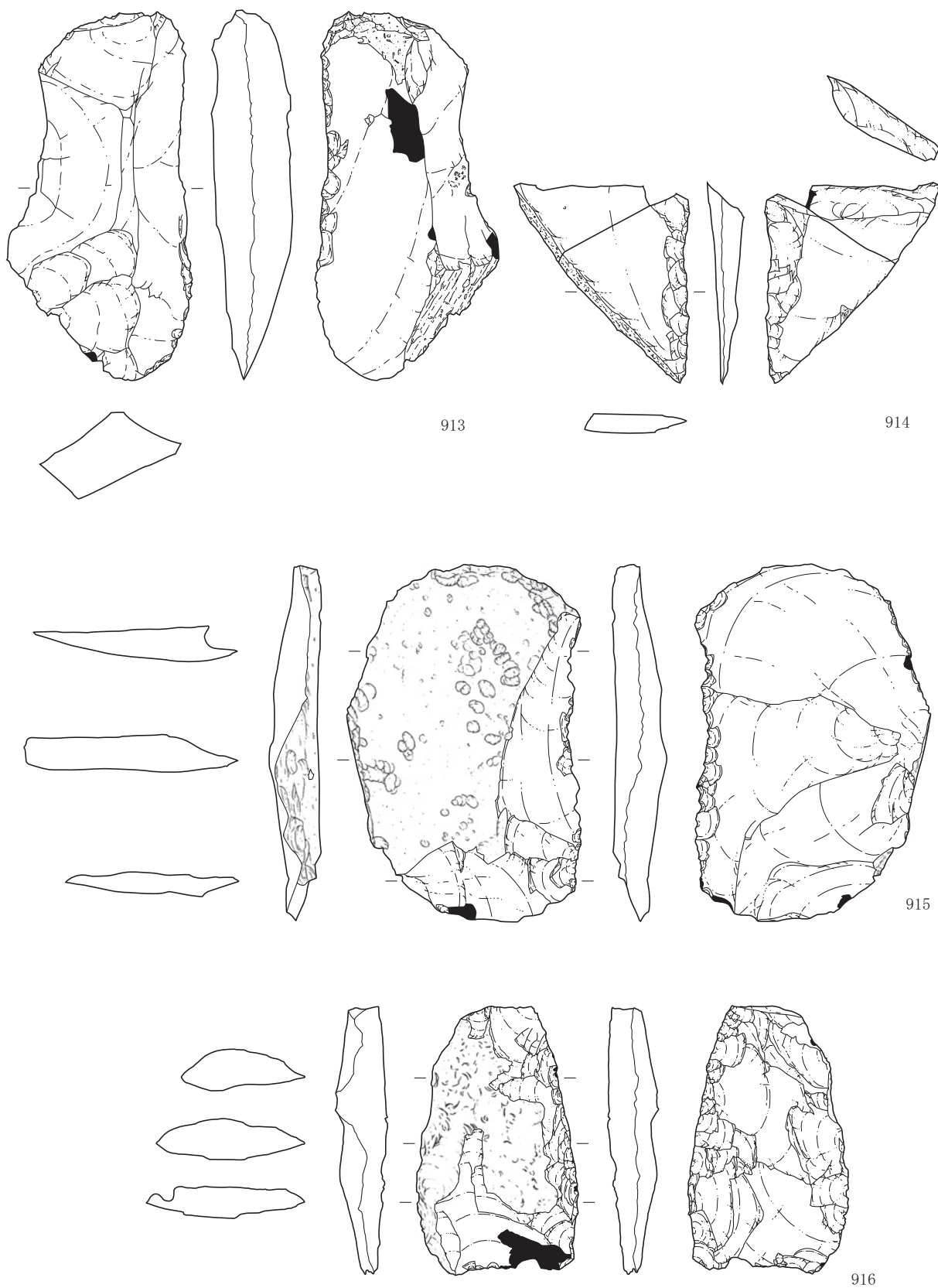


图229 19区竖穴住居 出土遺物 (10) 石器 8

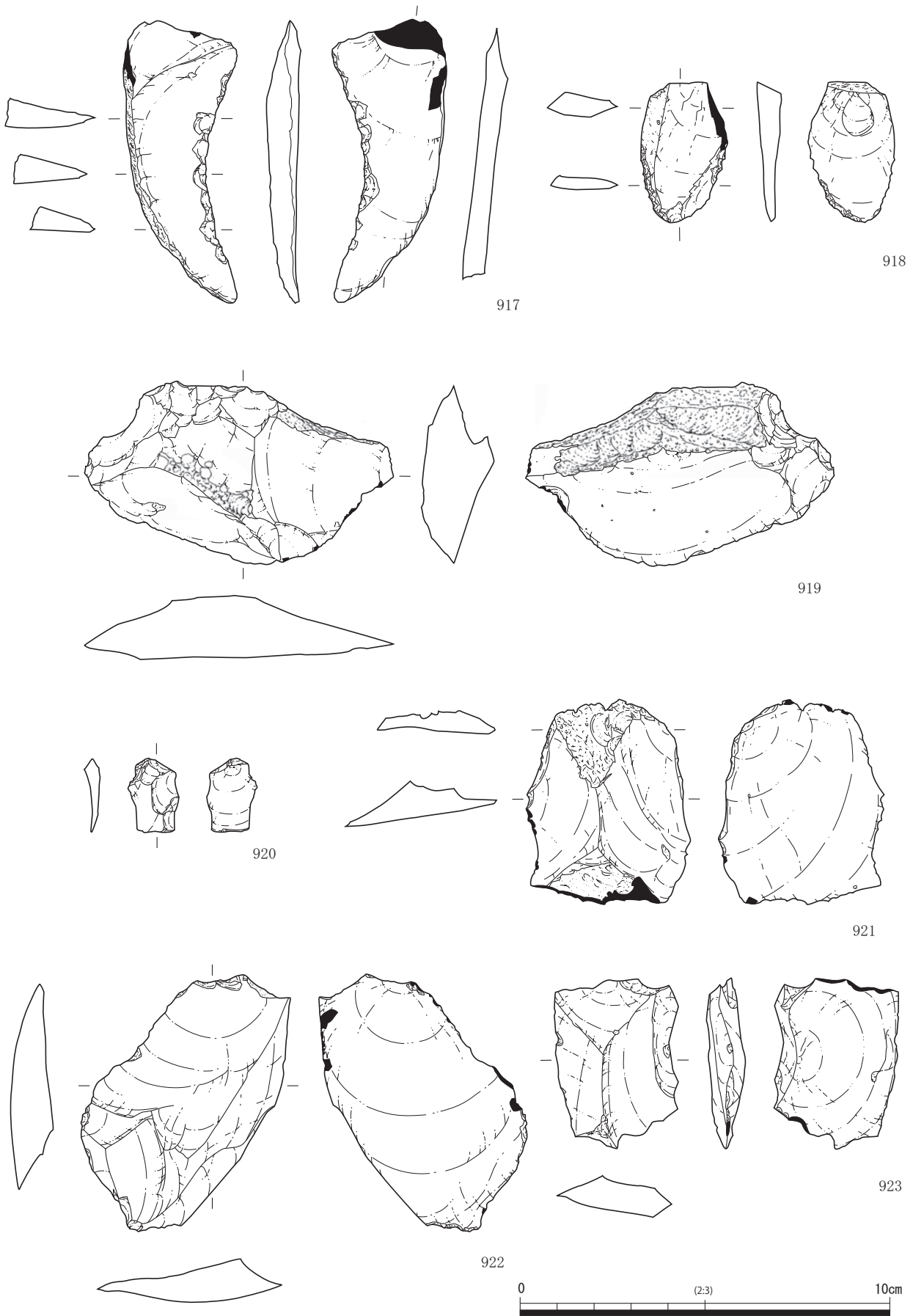


图230 19区竖穴住居 出土遗物 (11) 石器 9

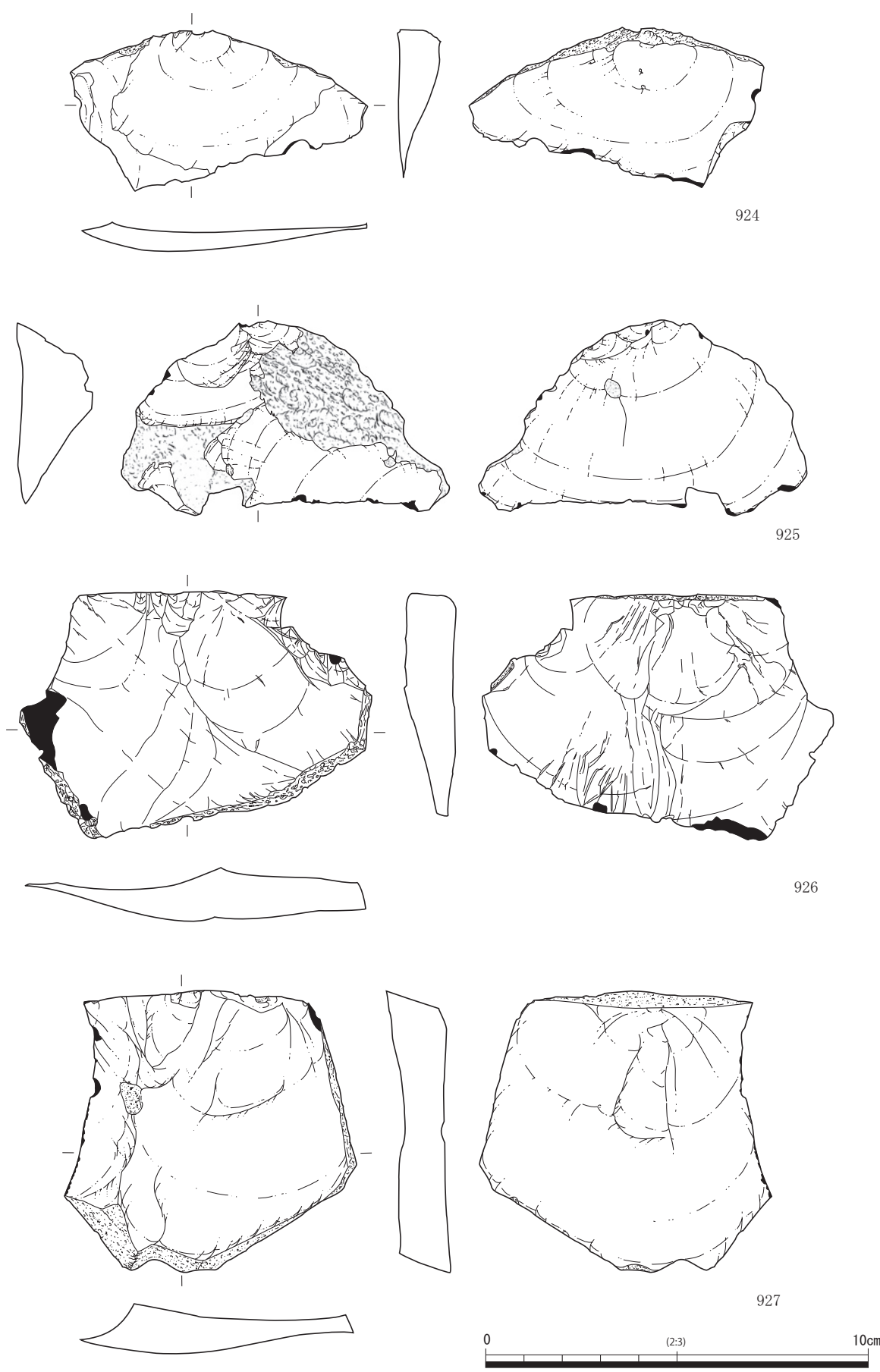


图231 19区竖穴住居 出土遺物 (12) 石器10

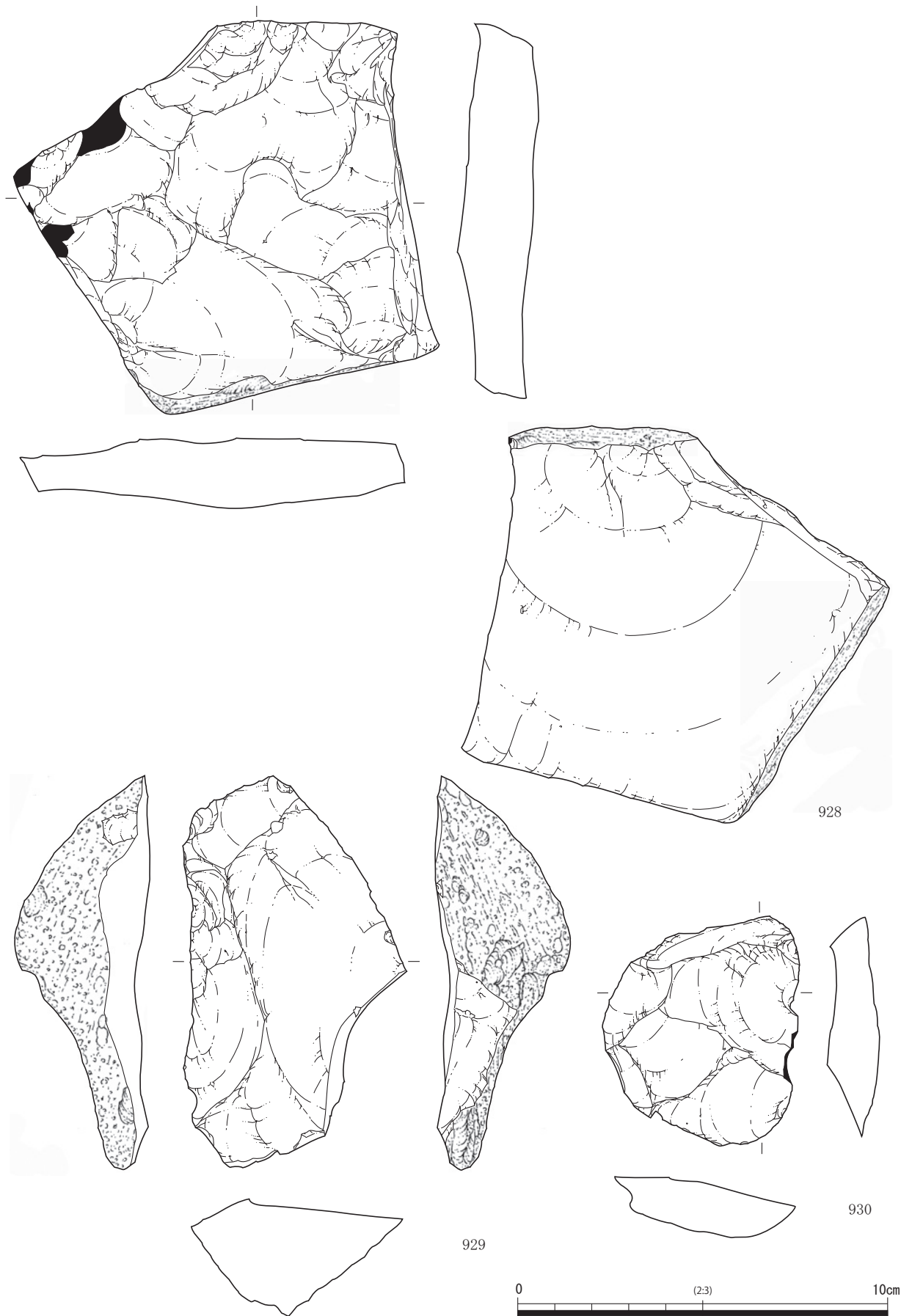
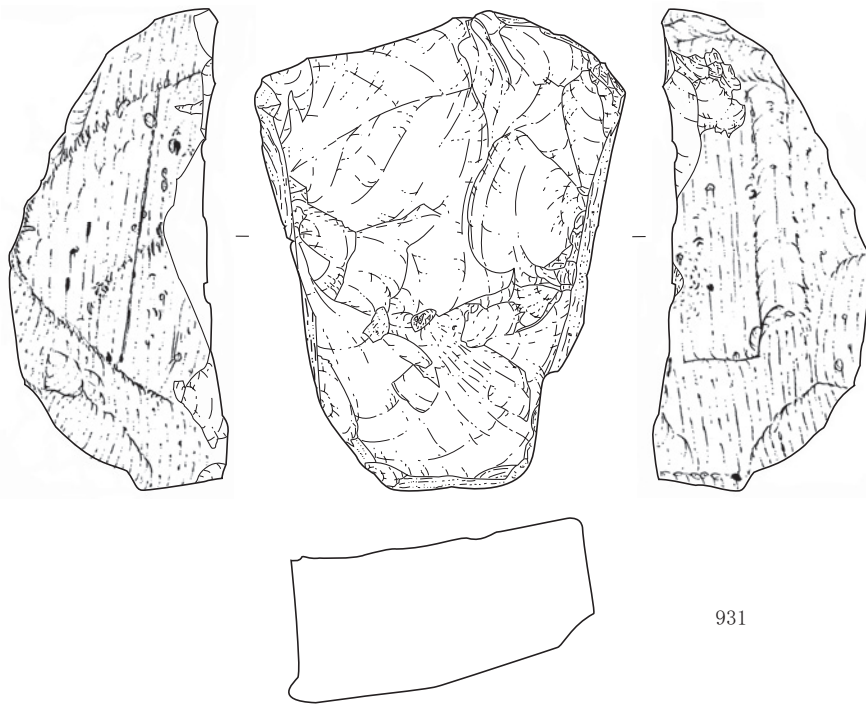
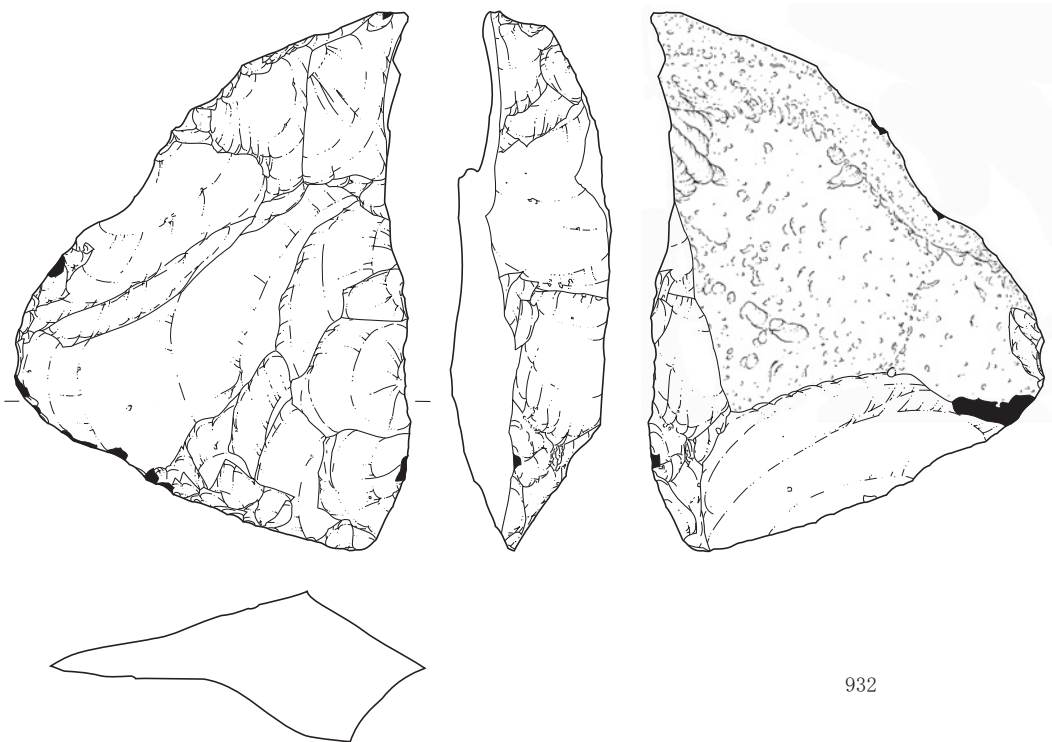


图232 19区竖穴住居 出土遗物 (13) 石器11



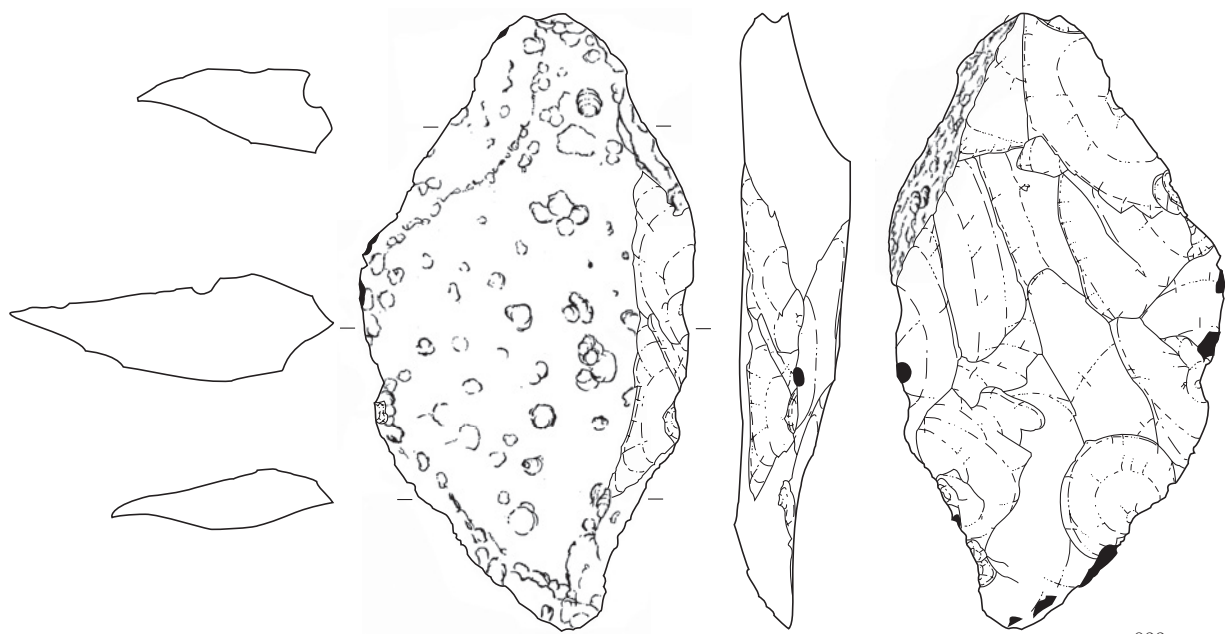
931



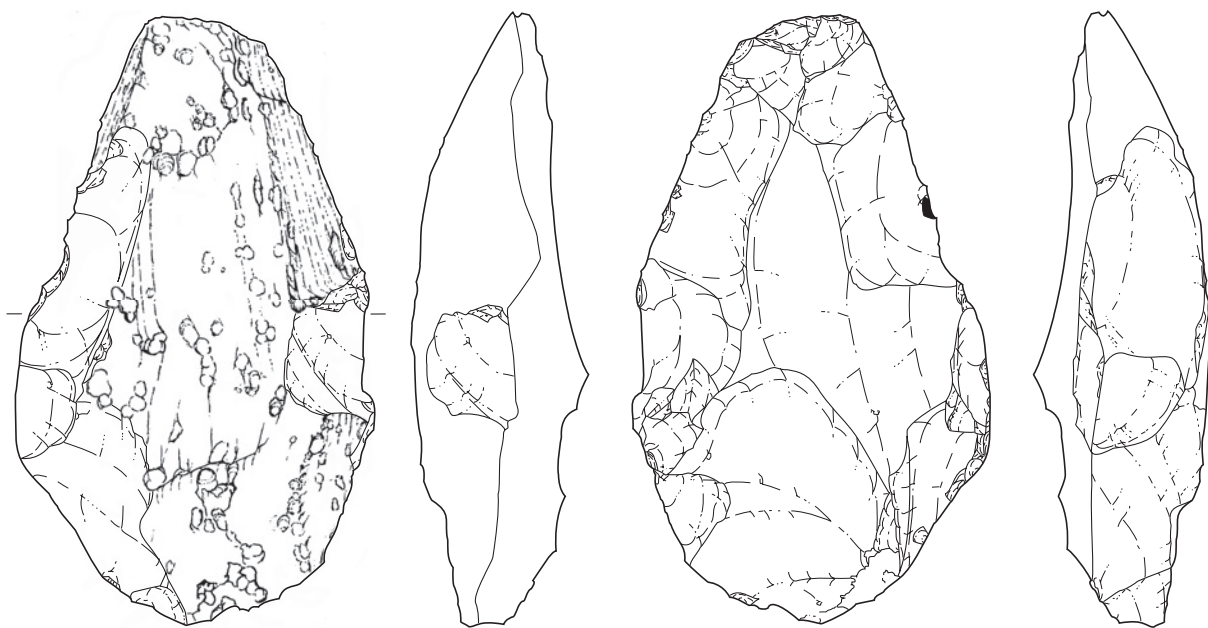
932



图233 19区竖穴住居 出土遺物 (14) 石器12



933



934



图234 19区竖穴住居 出土遗物 (15) 石器13

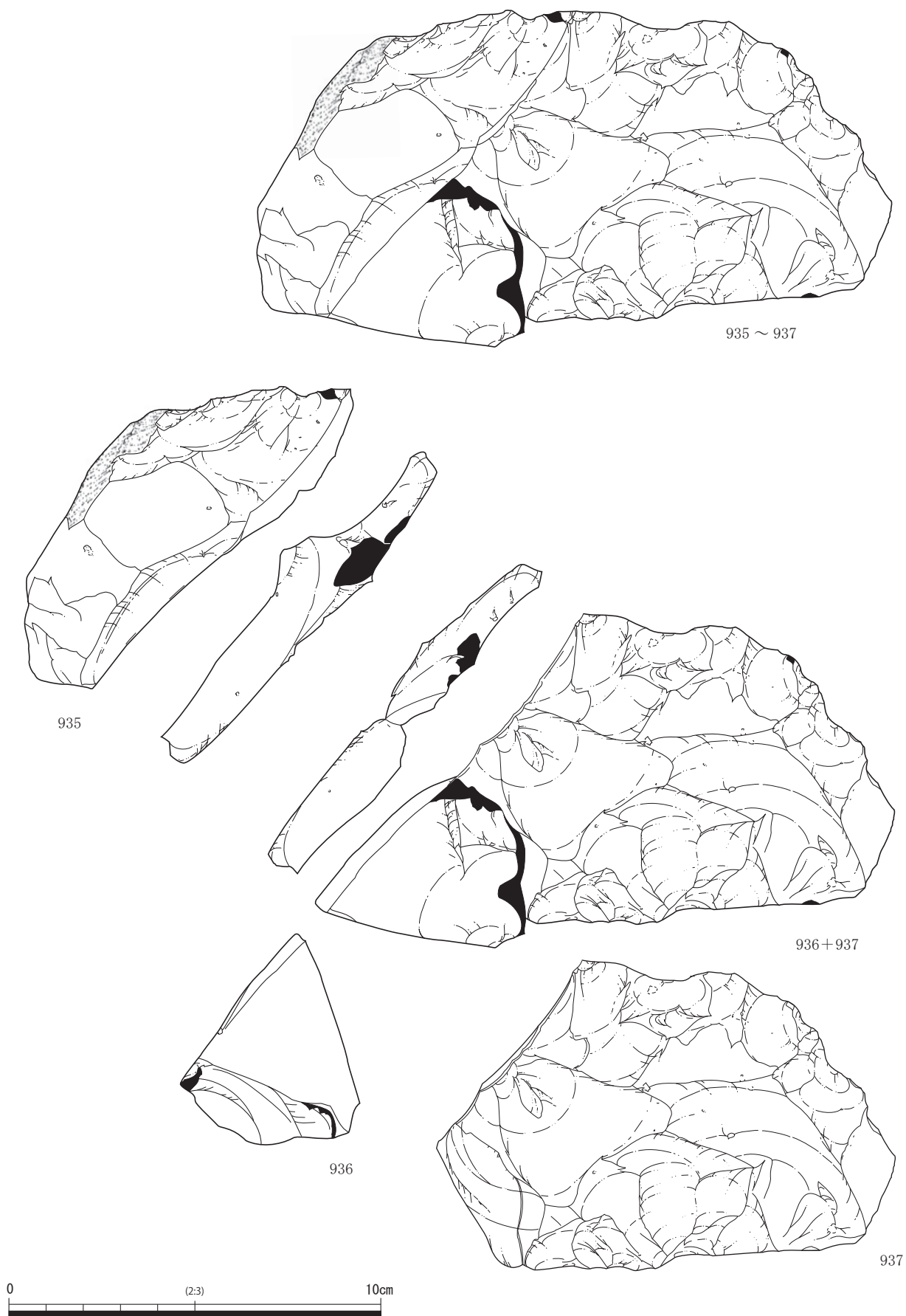


图235 19区竖穴住居 出土遺物 (16) 石器14

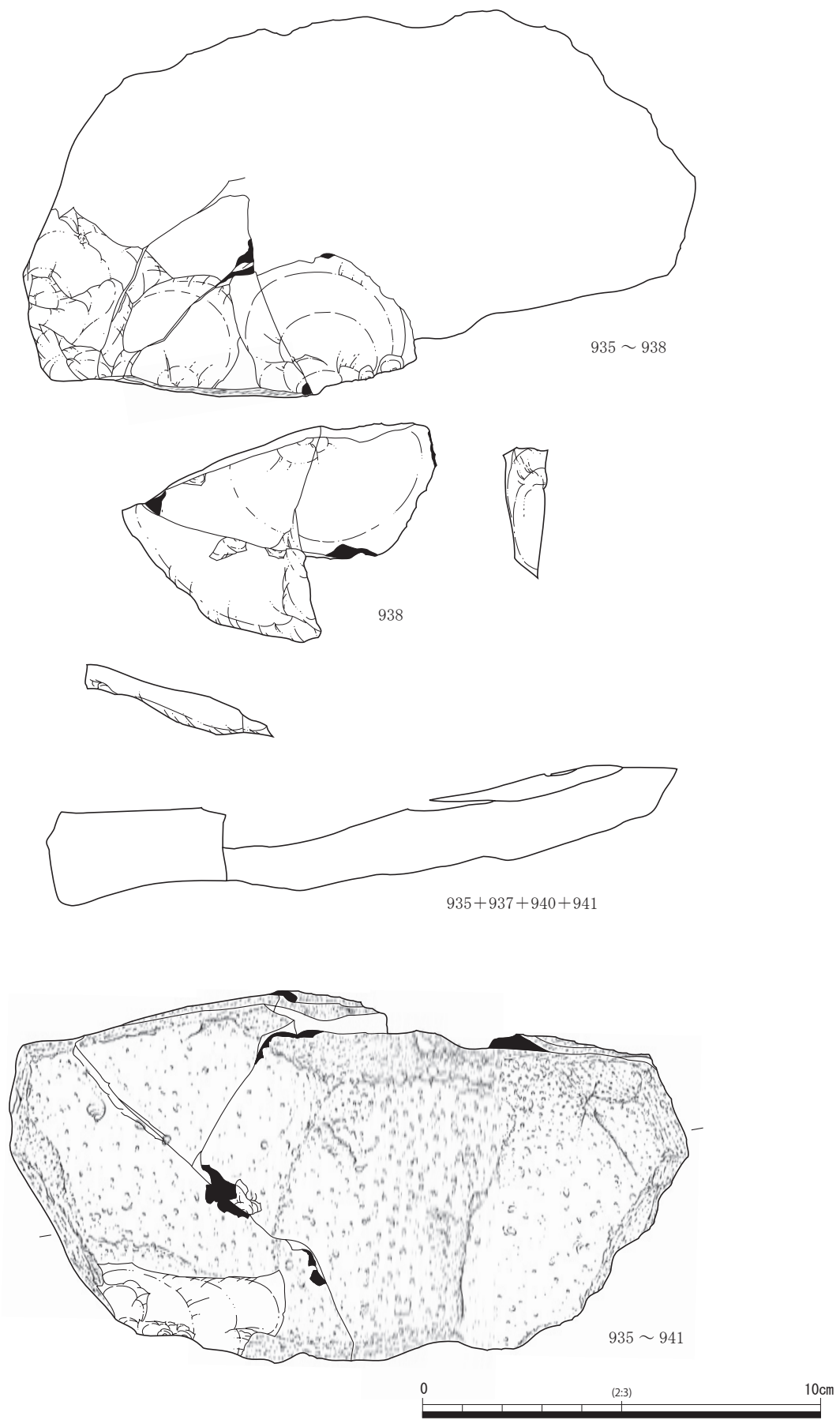


图236 19区竖穴住居 出土遗物 (17) 石器15

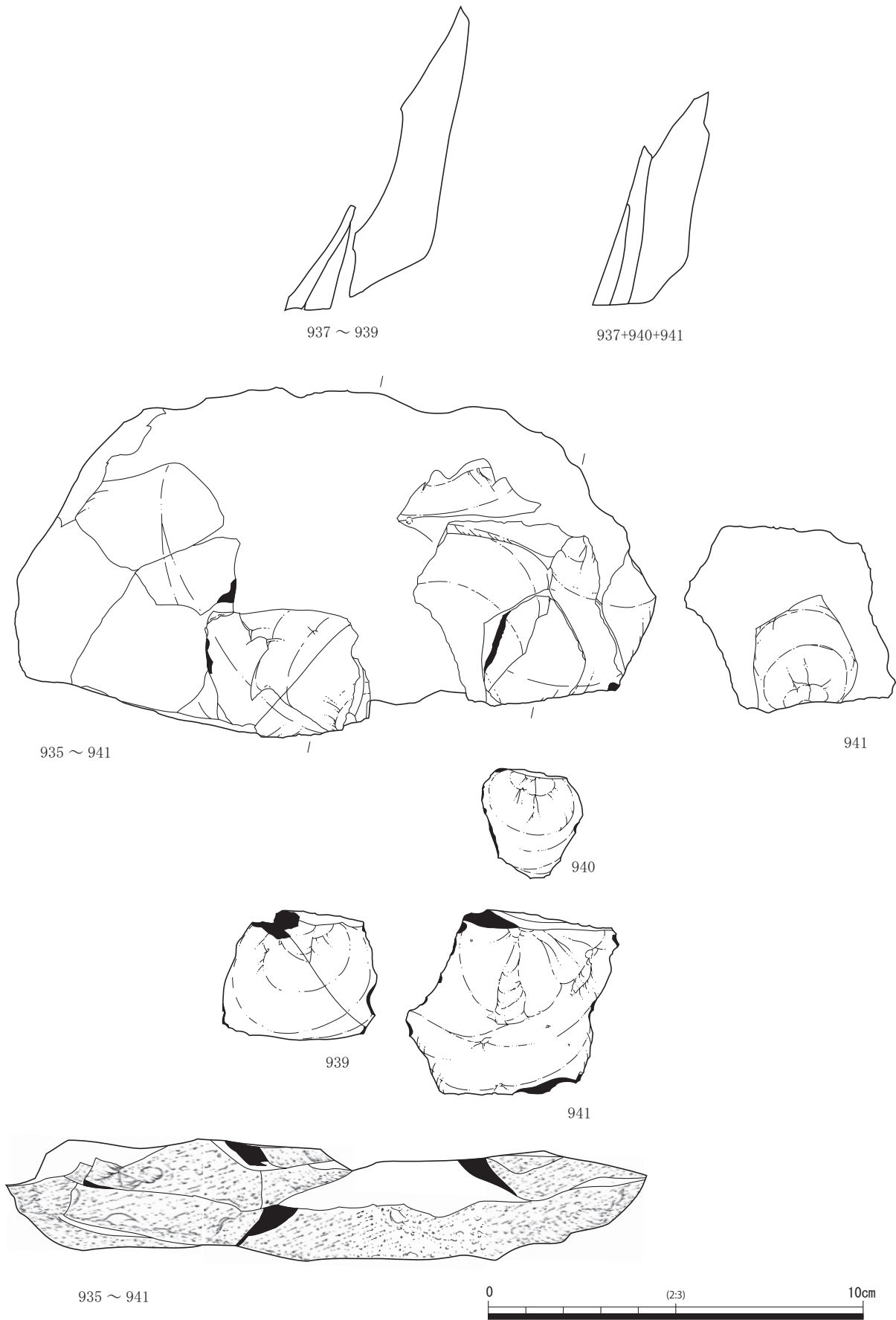


图237 19区竖穴住居 出土遺物 (18) 石器16

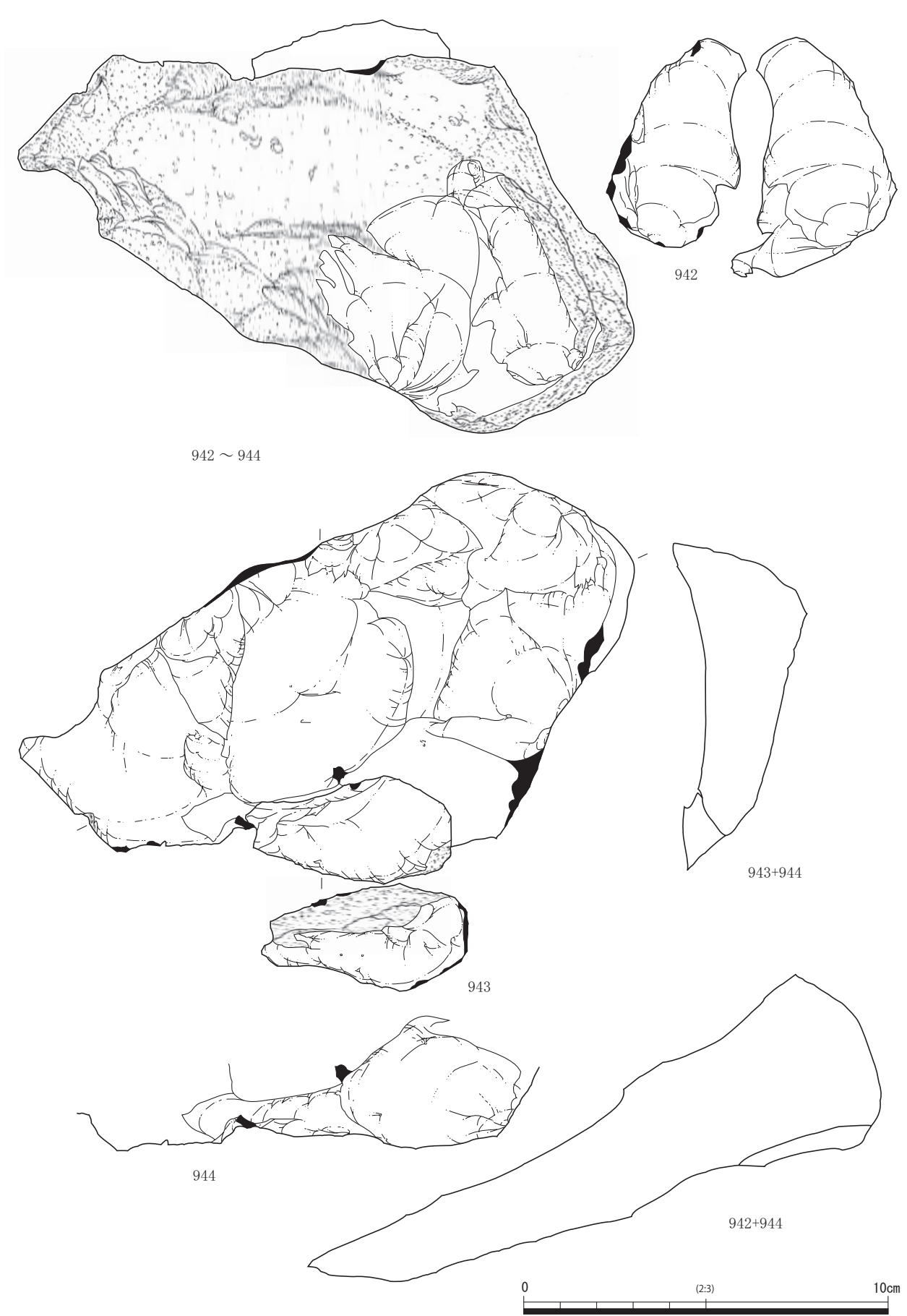


图238 19区竖穴住居 出土遗物 (19) 石器17

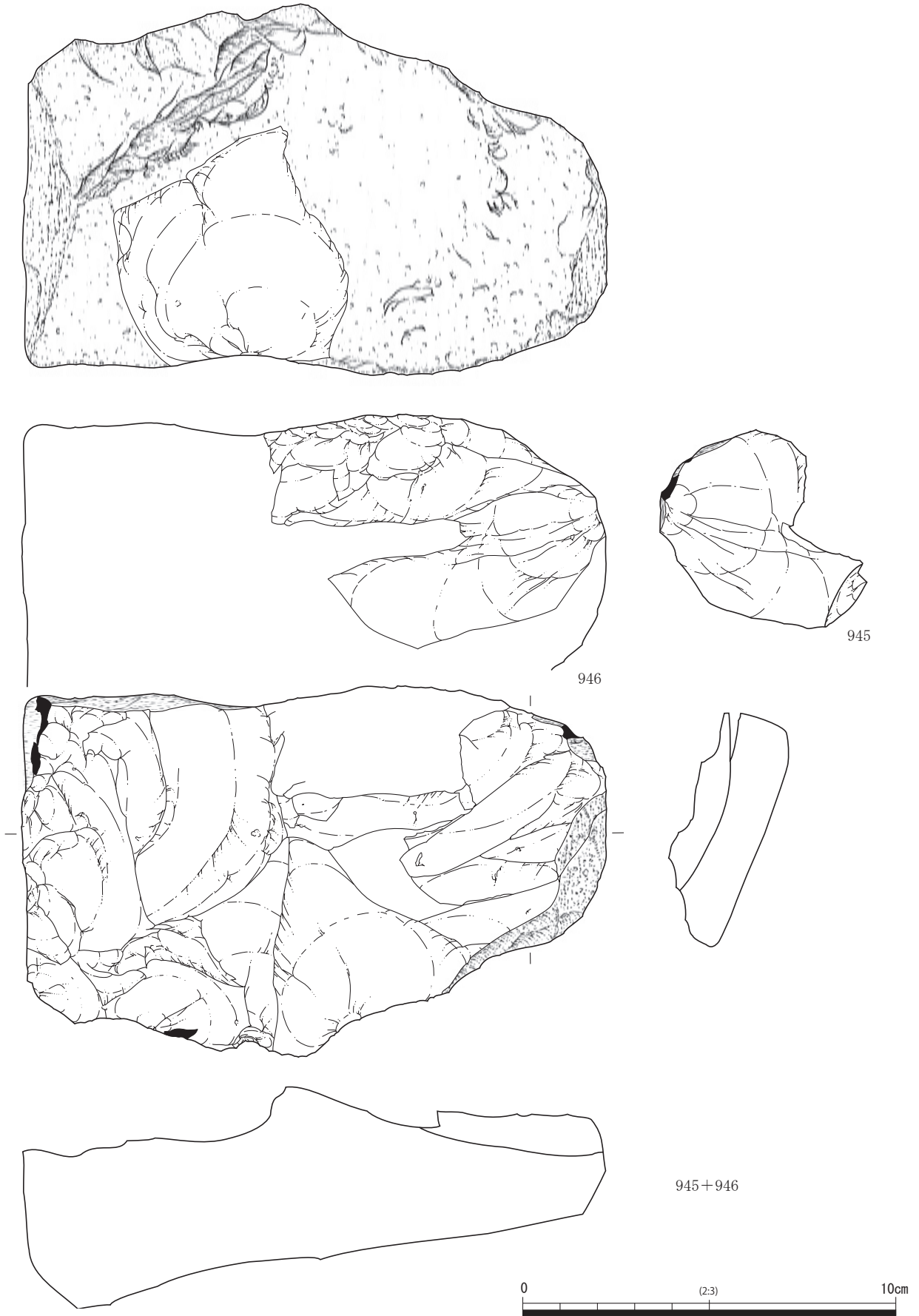


图239 19区竖穴住居 出土遺物 (20) 石器18

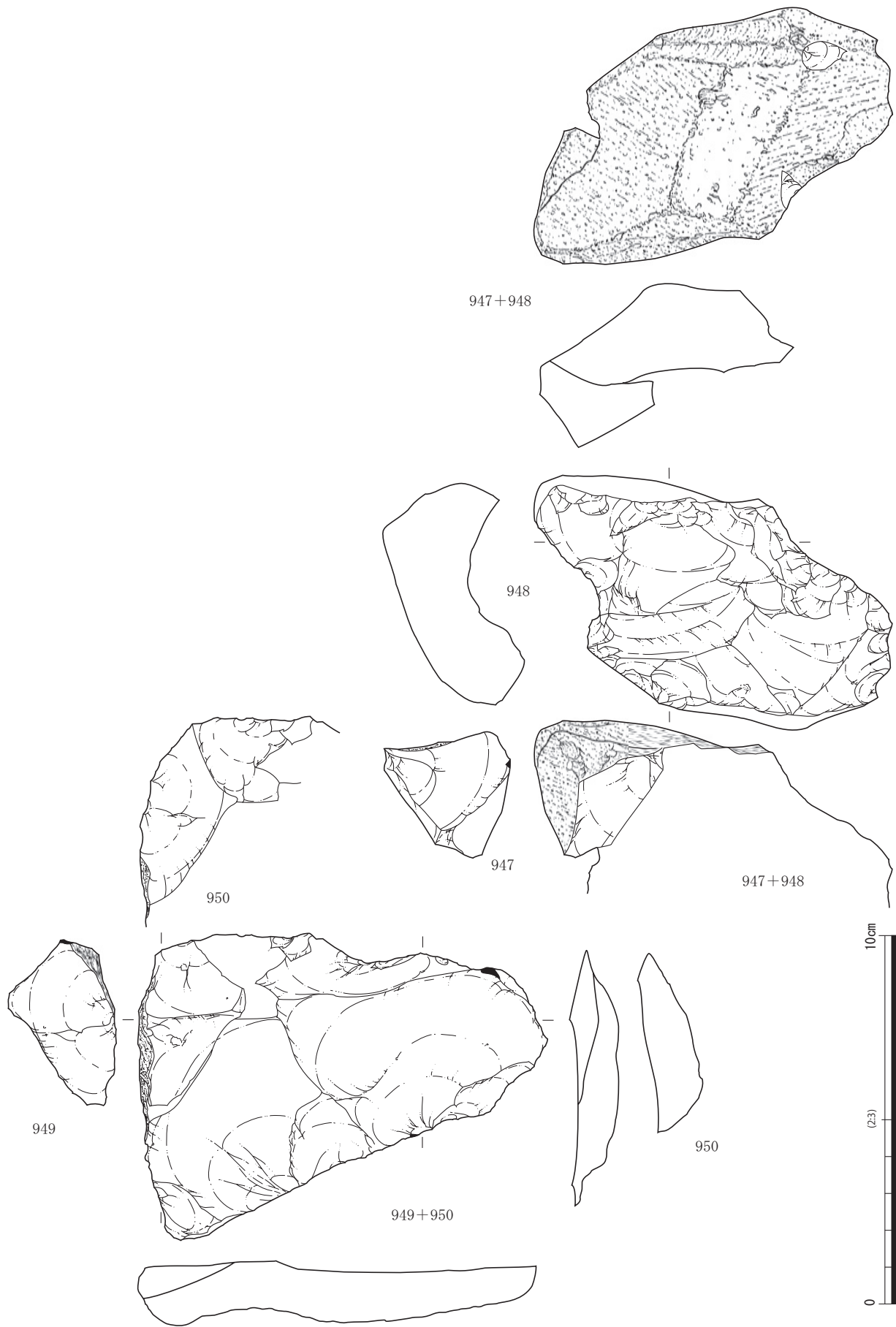


图240 19区竖穴住居 出土遗物 (21) 石器19

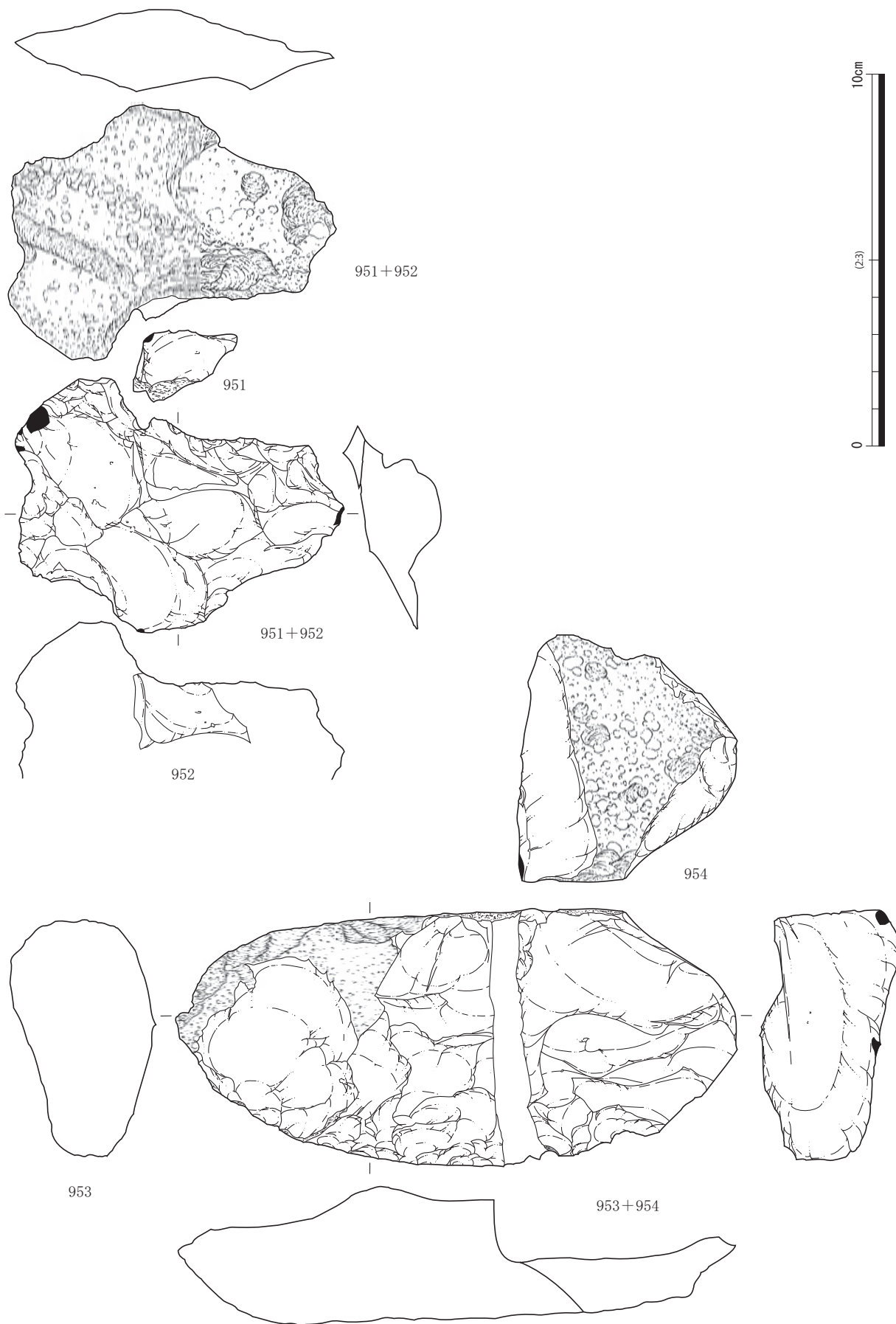


图241 19区竖穴住居 出土遗物 (22) 石器20

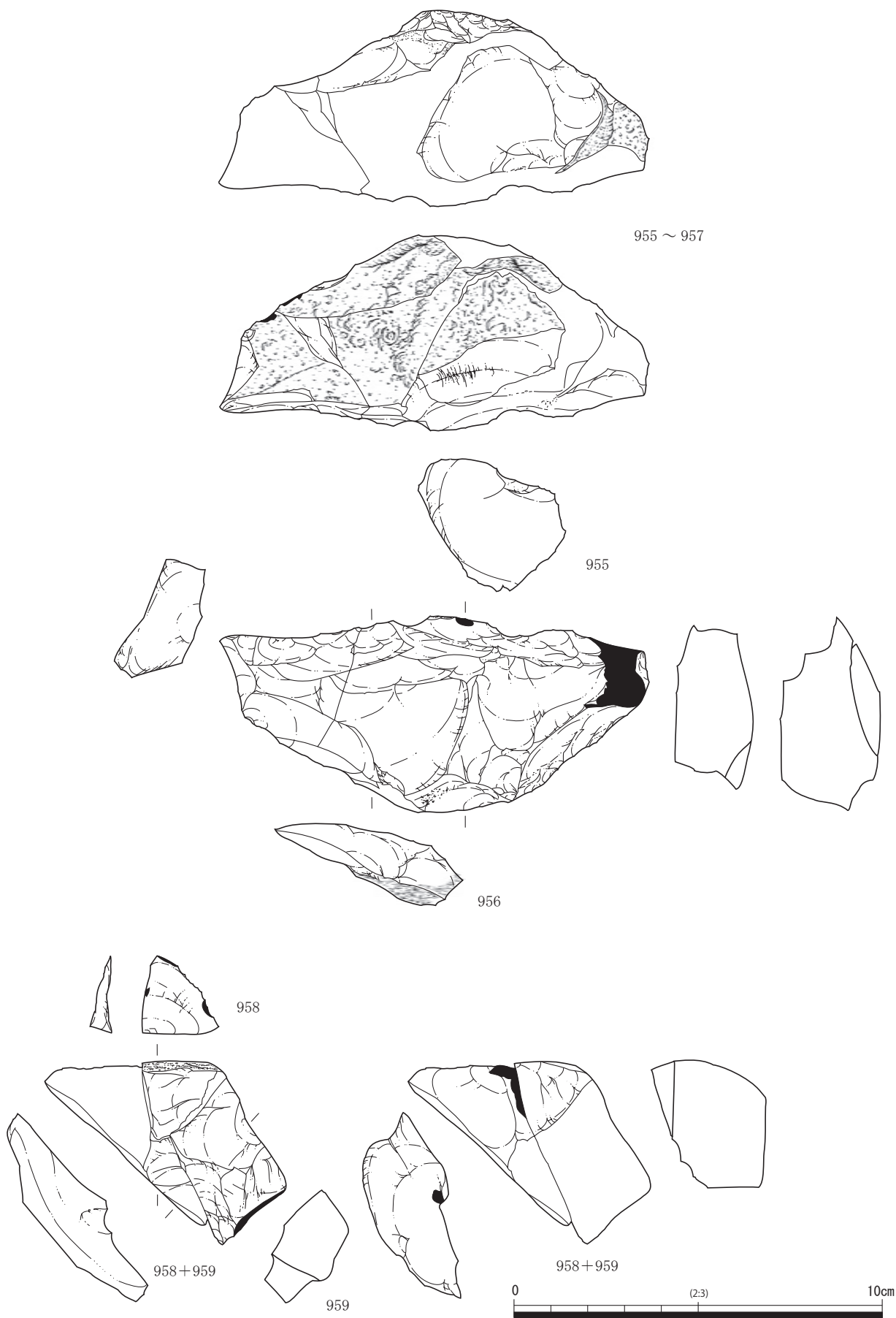


图242 19区竖穴住居 出土遺物 (23) 石器21

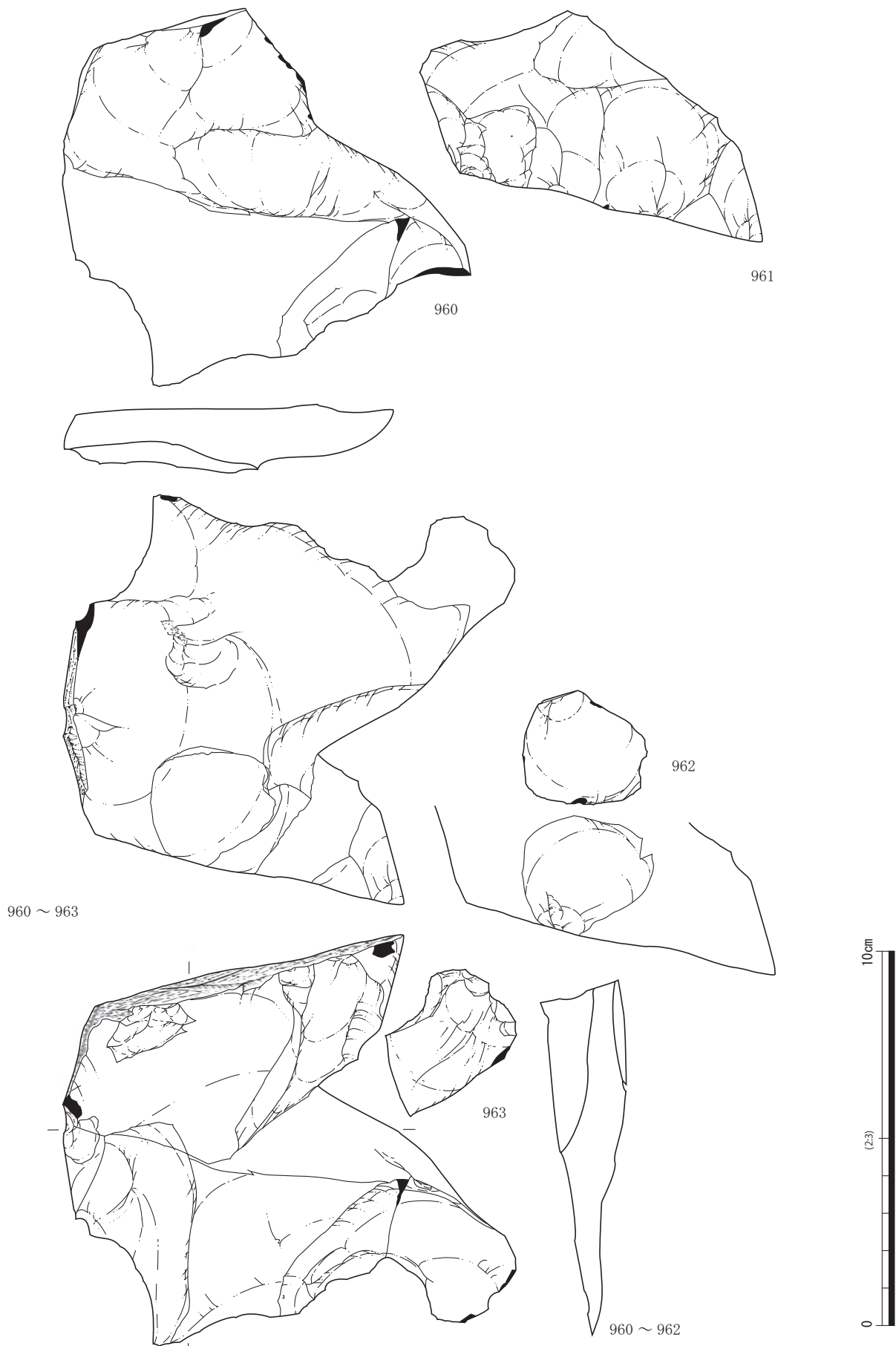


图243 19区竖穴住居 出土遺物 (24) 石器22

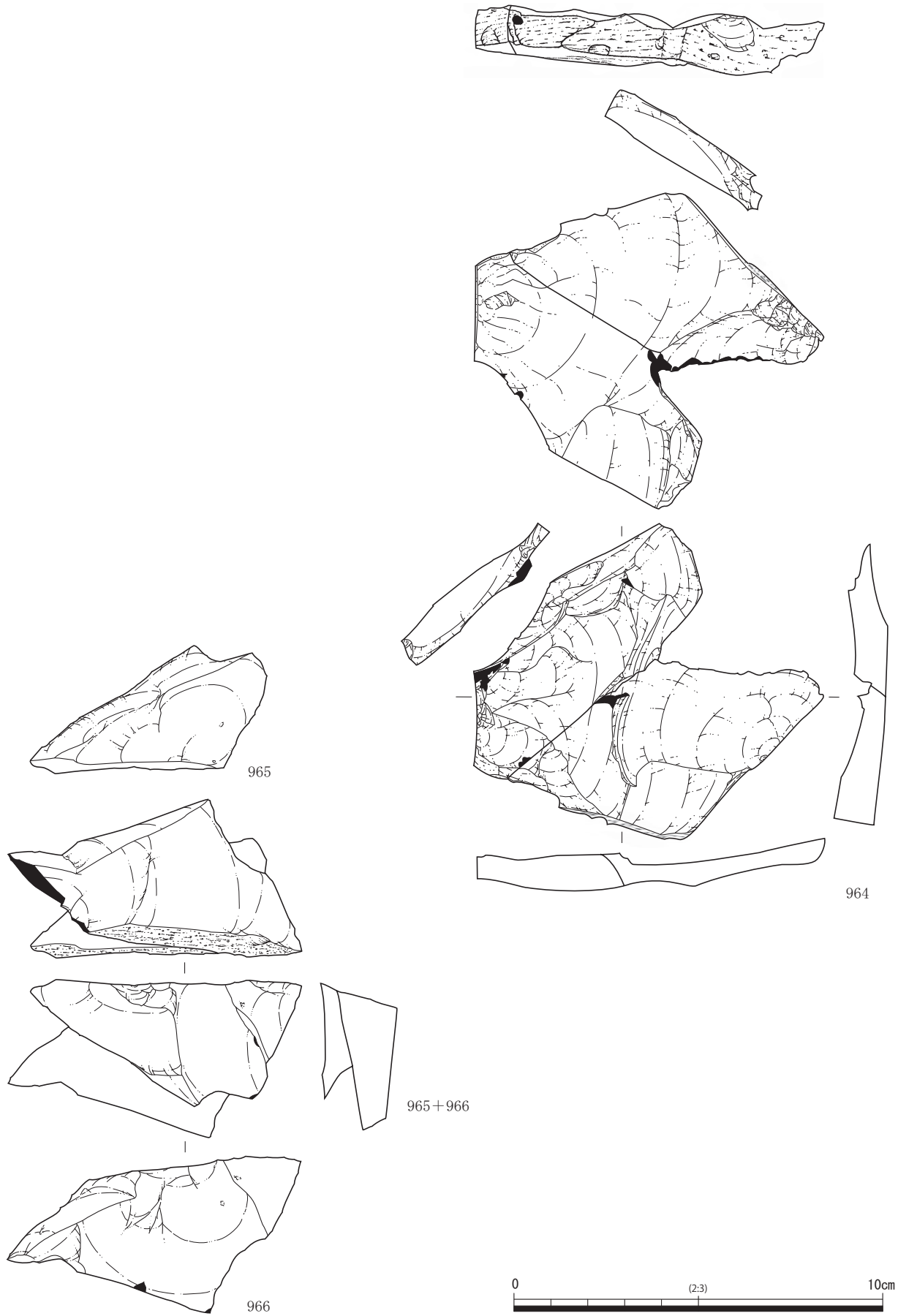


图244 19区竖穴住居 出土遗物 (25) 石器23

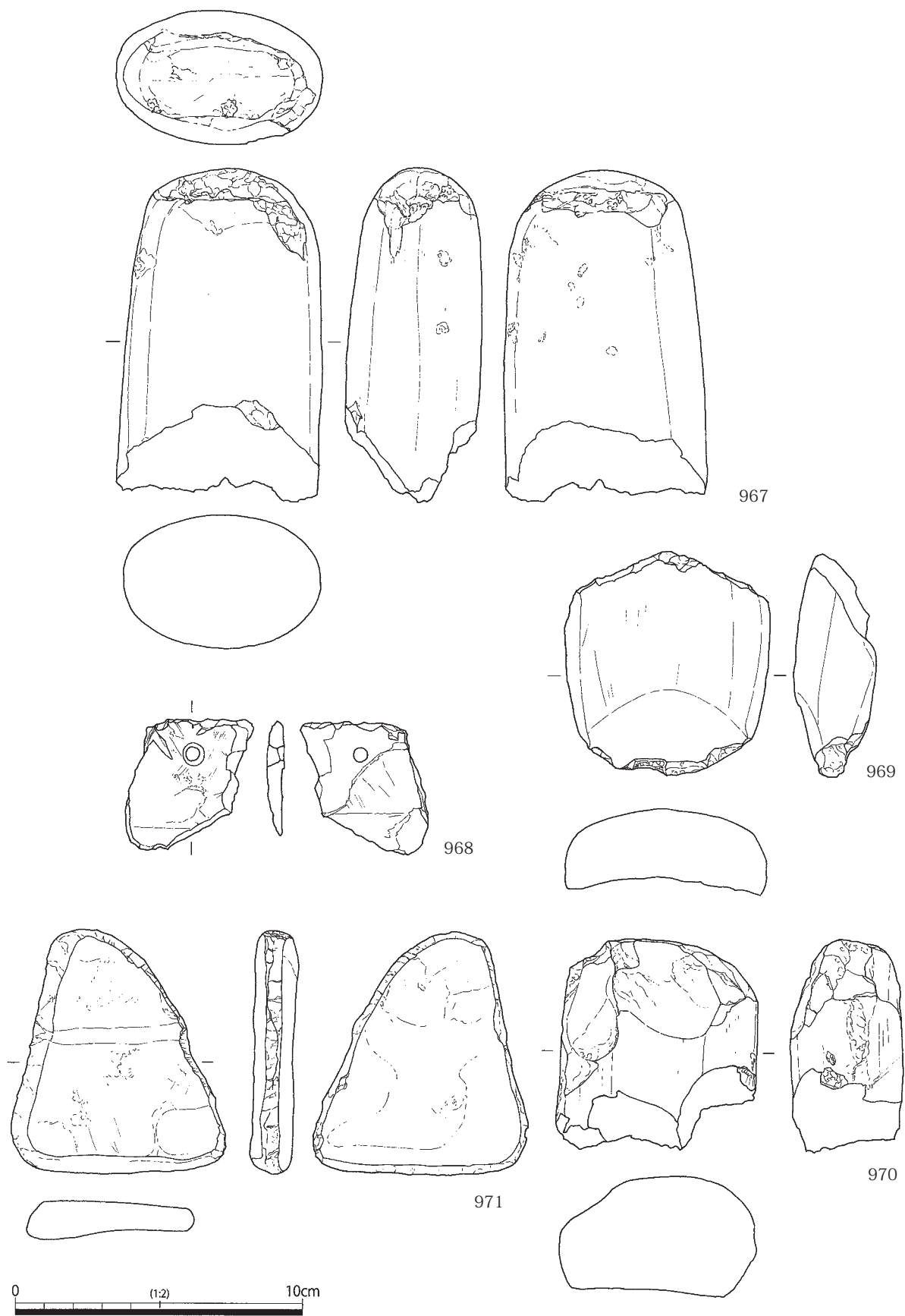


图245 19区竖穴住居 出土遺物 (26) 石器24

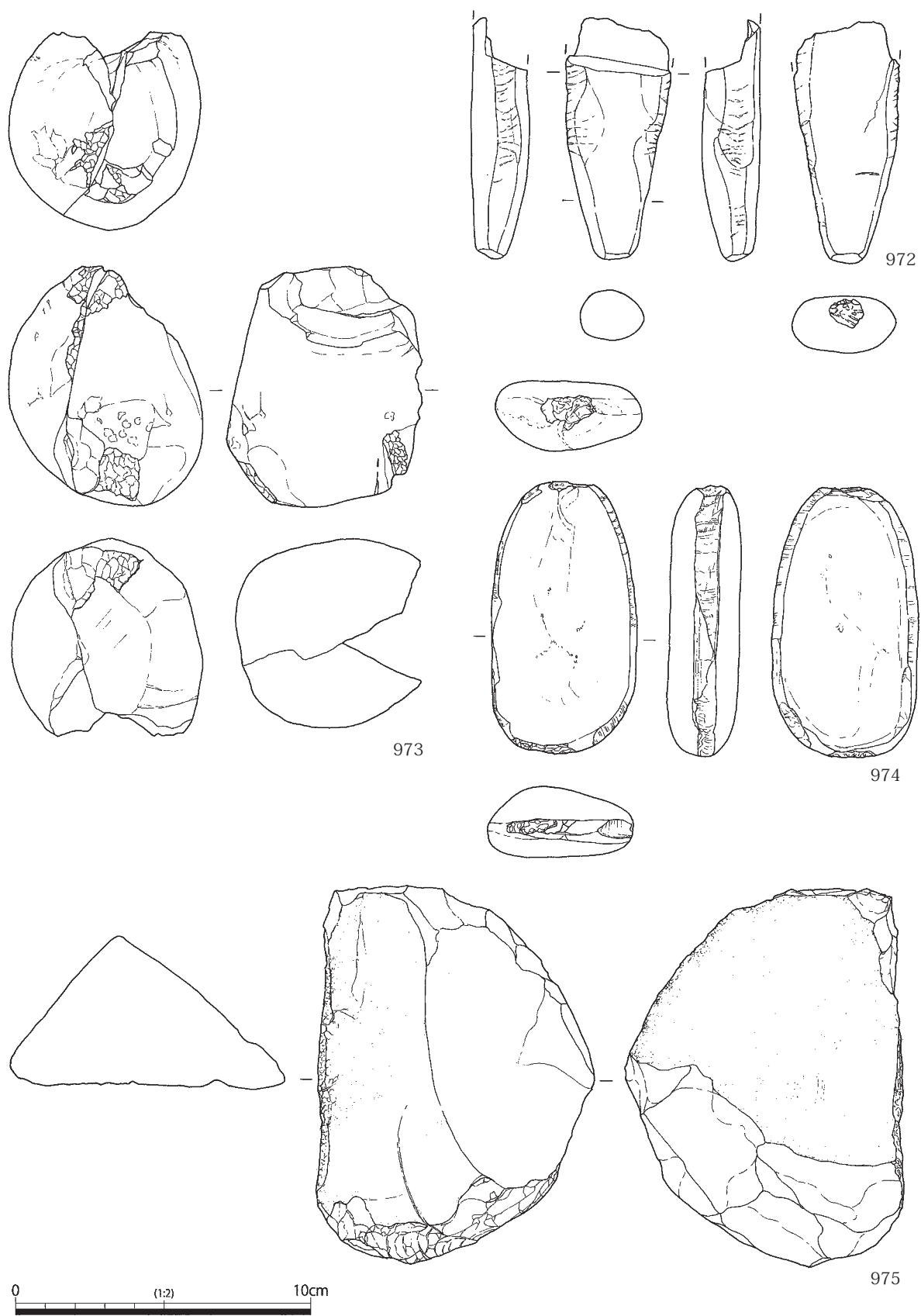


图246 19区竖穴住居 出土遗物 (27) 石器25

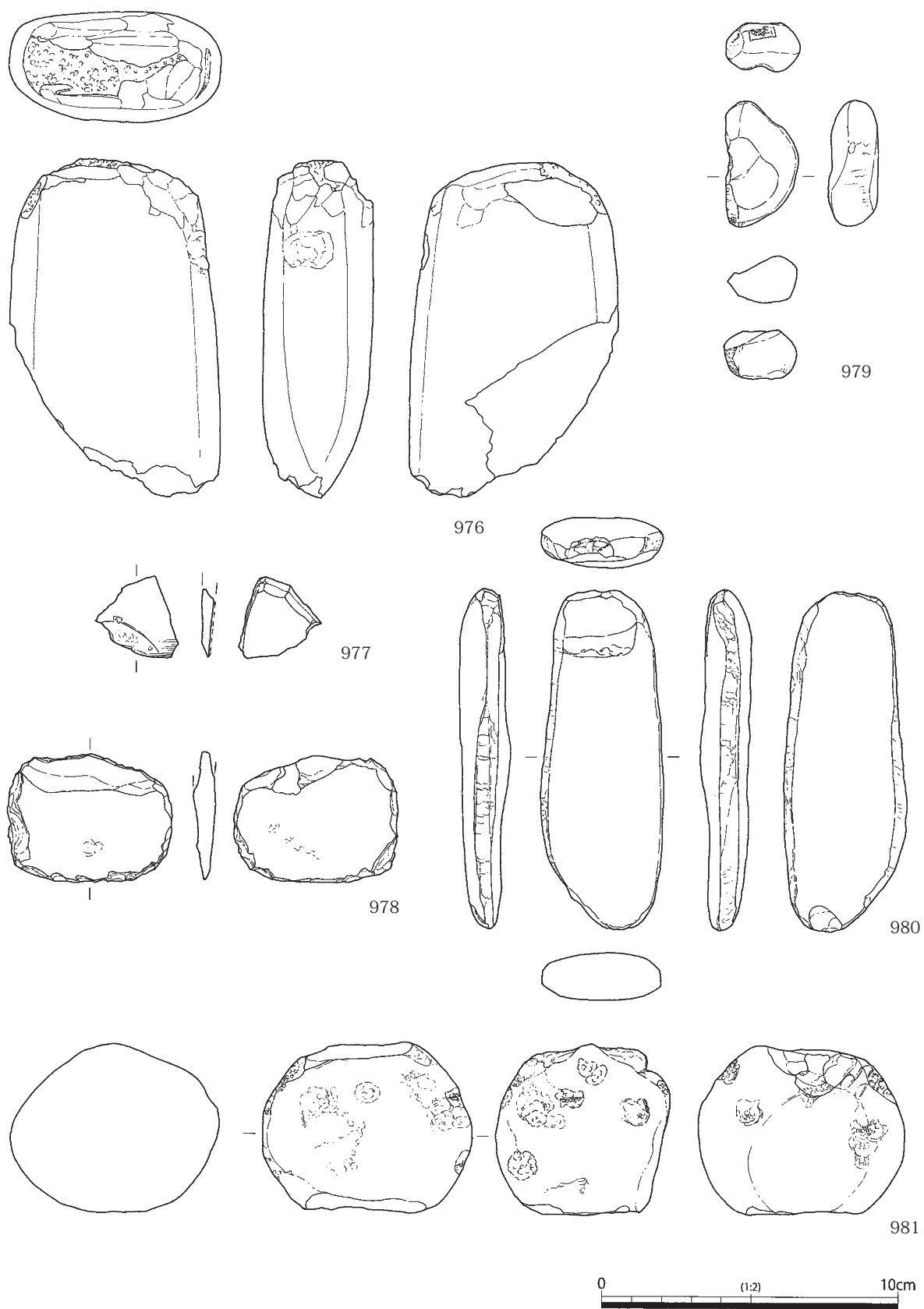


图247 19区竖穴住居 出土遺物 (28) 石器26

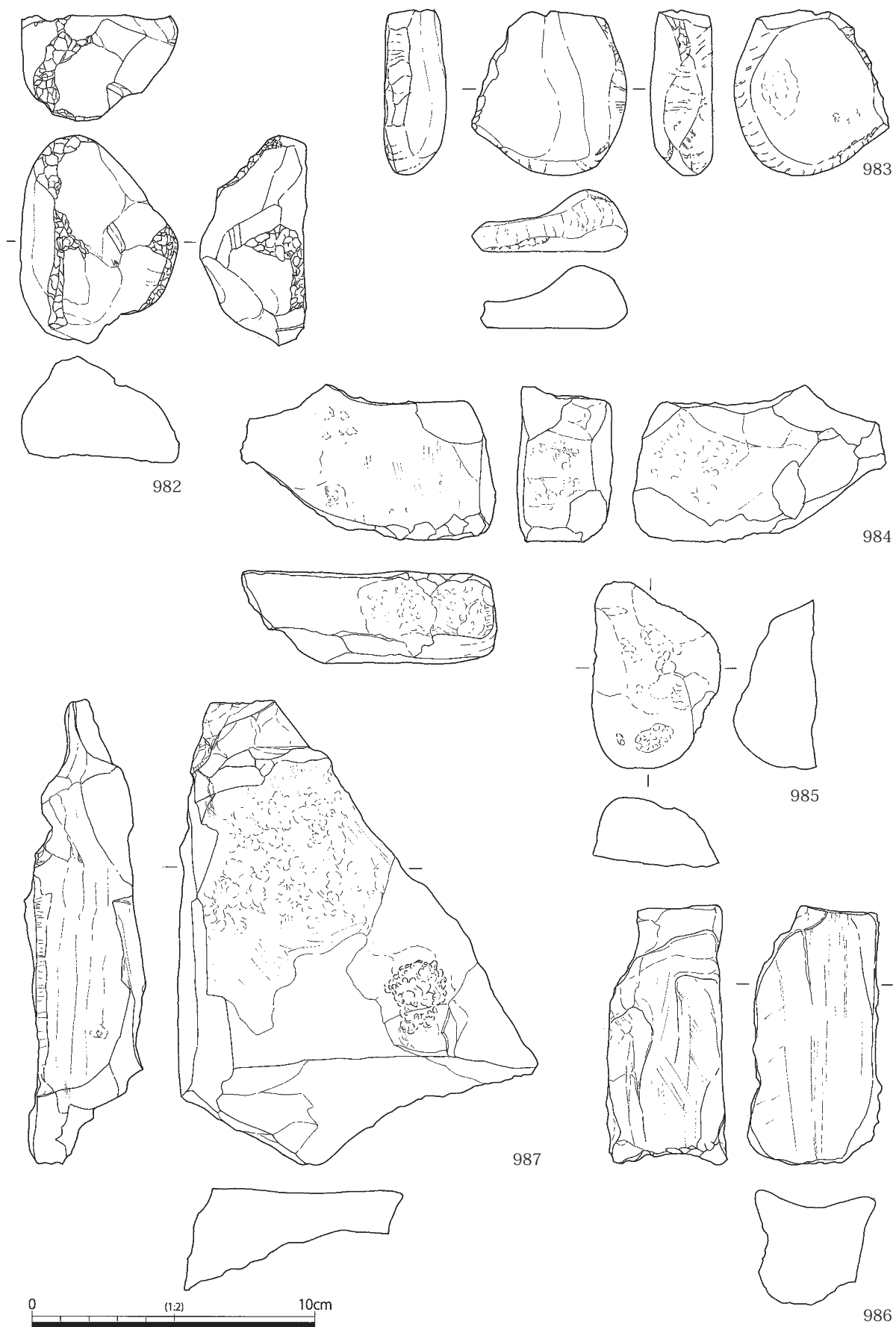


图248 19区竖穴住居 出土遗物 (29) 石器27

土は竪穴住居の埋土と同じである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

住居内部では、ピットが2基検出されている。主柱穴はその2基、2414-1・2414-2ピットが該当する。復元すると4本柱の竪穴住居になると考えられる。いずれも平面円形を呈しており、残存部で径約20～30cm、深さ約30～50cmを測る。埋土は黄灰色中砂～細砂である。

中央部で炭化物を含む層の分布を確認している。平面不定形を呈しており、残存部で径約80cm、深さは数cmである。埋土中から弥生土器が少量出土した。

竪穴住居24 (図209・220)

西端部で検出された、土坑とピットのうち、竪穴住居の中央土坑と柱穴になる可能性の高いまとまりが認められるため、実体ははっきりしないが、竪穴住居として報告する。壁溝は検出されていないが、4277土坑が中央土坑、柱痕跡が認められる4276・4280ピットが主柱穴と推測される。

<4277土坑>

西半部は調査区外に広がるため、東半部のみを検出である。楕円形を呈しており、南北幅0.74m、深さ0.23mを測る。埋土下部は、灰黄褐色細砂混じりシルトで炭化物を多く含む。

弥生土器片、石核3点、剥片10点が出土した。

<4276ピット>

長径45cm、短径37cm、深さ48cmを測る。柱痕跡は径8cmである。土師器らしい土器片が2点出土した。

<4280ピット>

長径30cm、短径25cm、深さ52cmを測る。柱痕跡は径8cmである。

4276・4280ピット間は1.6m離れており、4277土坑を中央土坑とする円形竪穴住居として復元できる可能性がある。貼床の痕跡などは確認されていない。

このほかに、南西端部で、竪穴住居の一部と考えられる4300落ち込みを検出した。大部分が調査区外のためはっきりしないが、竪穴住居の形状を呈しており、内部から柱穴と推測されるピットも1基検出されている。

埋土から、3条以上の沈線を巡らした壺頸部、底部などが出土している。弥生前期新段階に遡る可能性がある。

石器は、敲き石1点、石鏃未成品1点、楔形石器1点、剥片6点、チップ2点が出土している(図223・246、図版101・103・128)。972は、棒状砂岩礫の一端が割れ欠損したもので、他端は窄まった先端部に敲打痕がある。両側面には長軸に直交する線状痕があり、割れ面寄りには線状打撃痕に類似するが、先端部へ向けて微かに連続する線状痕については大形の錐のような用途も考えられる。848は円基式石鏃の未成品で、厚みがある。849は、矩形の片面半分は自然面を留め、上下からの打撃により剥離されている。上下の縁辺は潰れて階段状の剥離がみられるため、楔形石器とした。

2. 掘立柱建物・柱穴群

掘立柱建物は、ほぼ中央部を中心に分布しているが、竪穴住居が密集する西半部では検出されていない。また、全般的にピットの検出も少なく、建物や柱列の復元はあまりできなかった。

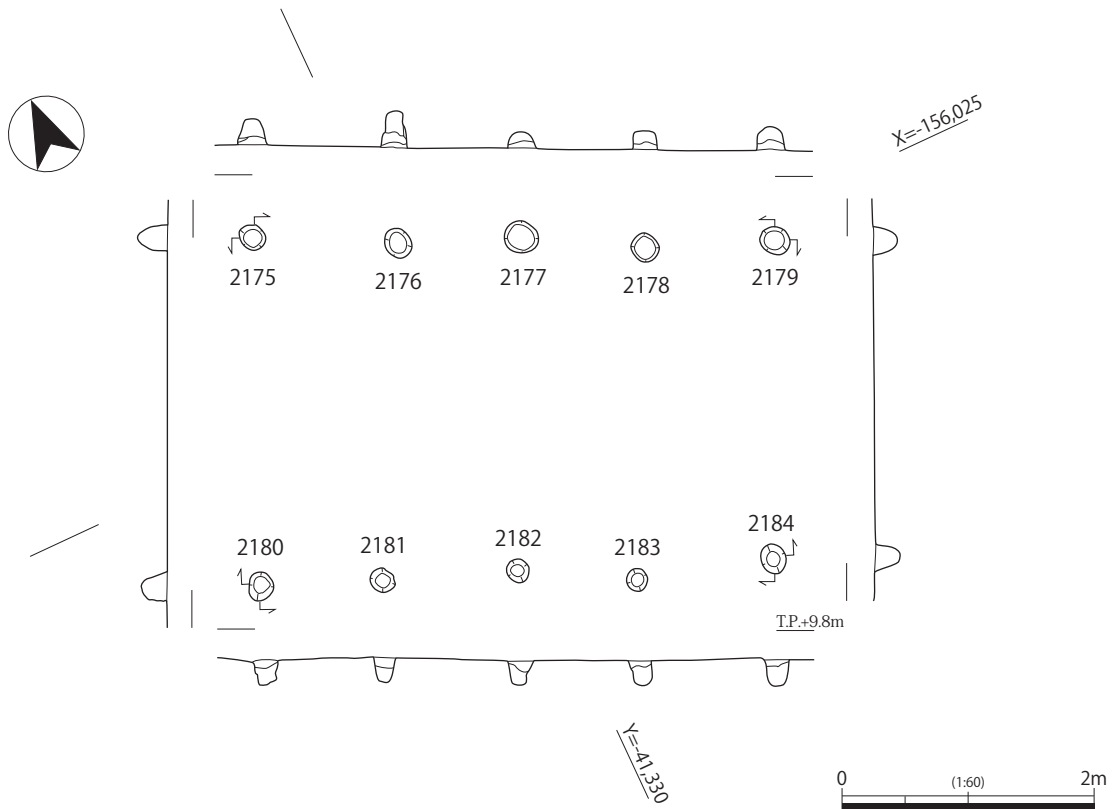


図249 掘立柱建物6 平・断面図

掘立柱建物6 (図209・249・221)

中央部東側で検出された。地形に平行する南東—北西棟の建物で、主軸はN-66°-Wを示す。周囲には、2123・2131・2166・2191土坑が存在する。

建物の規模は、梁間1間（東側2.5m、西側2.74m）、桁行4間（北側4.12m、南側4.08m）、床面積

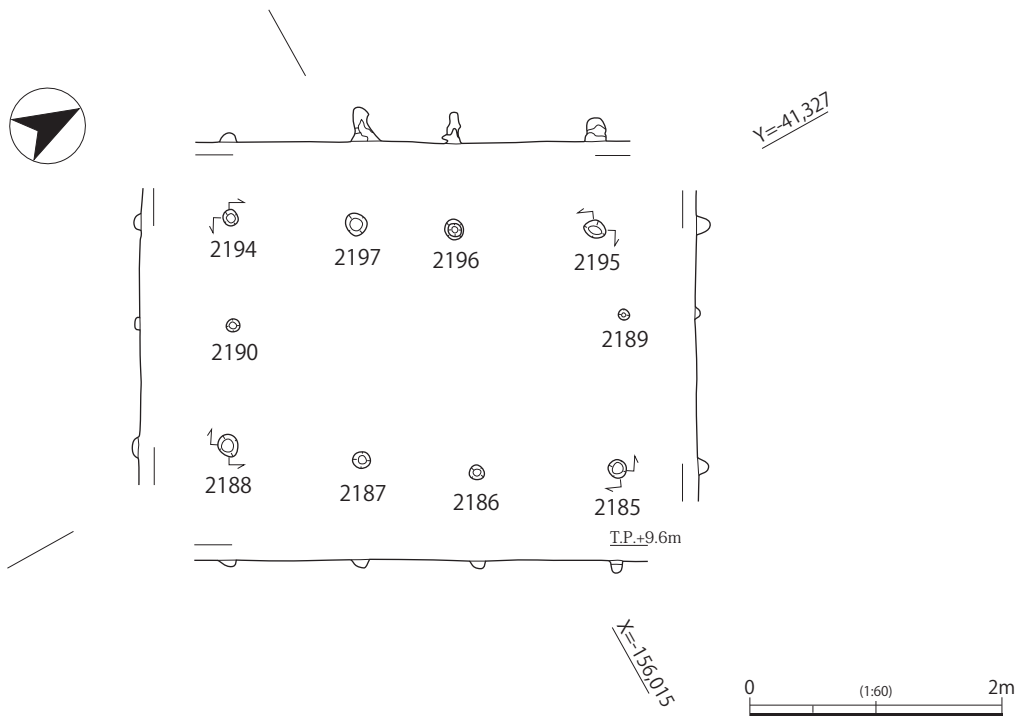


図250 掘立柱建物7 平・断面図

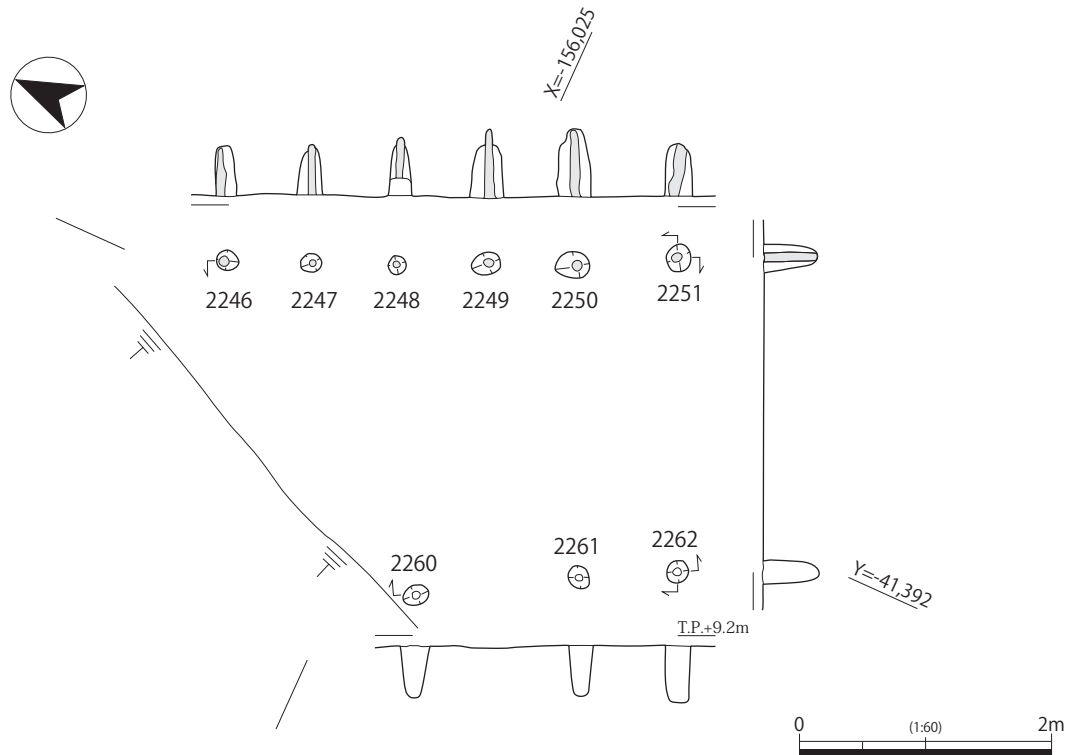


図251 掘立柱建物8 平・断面図

は約10.55㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、東側の梁間が2.5m、西側が2.74mである。南側の桁行が、西から0.97m、1.08m、0.93m、1.1m、北側が西から1.13m、0.97m、0.97m、1.05mである。ピットの掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は15～30cmで、穴底は円形である。柱痕跡は、認められなかった。

柱穴を構成する2184ピットから、弥生土器が出土している。819は外傾する小型の鉢で、櫛描簾状文（5条／11mm、ピッチ9mm）を施す。灰白色の胎土を持ち、搬入品の可能性がある。

掘立柱建物7（図209・250）

東端部で検出された。地形に直交する南西―北東棟の建物で、主軸はN-32°-Eを示す。

建物の規模は、梁間2間（南側1.8m、北側1.91m）、桁行3間（東側3.1m、西側2.91m）、床面積は約5.6㎡である。柱間寸法は、南側の梁間が、西から0.85m、0.95m、北側が西から0.65m、1.26mである。東側の桁行が、北から1.13m、0.92m、1.5m、西側が北から1.12m、0.79m、1.0mである。ピットの掘方は、ほとんど円形である。断面形はU字形を呈する。掘削深度は、5～27cmで、穴底は円形である。柱痕跡は認められなかった。

掘立柱建物8（図209・251）

西端部で検出された。地形に平行する南東―北西棟の建物で、主軸はN-27°-Wを示す。西には、2241・2242・2243土坑が位置する。

建物の規模は、梁間1間（南側2.48m、北側復元2.75m）、桁行5間（復元西側3.6m、東側3.6m）、床面積は約9.4㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。北西角のピット2基は、上位の水路に切られて欠損している。柱間寸法は、南側の梁間が2.48m、北側が復元2.75mである。西側の桁行が、南から0.78m、1.31m、東側が南から0.8m、0.7m、0.75m、0.66m、0.69mである。ピットの掘方は、ほとんど円形である。断面形はU字形を呈する。掘削深度は40～55cm、穴底は円形である。

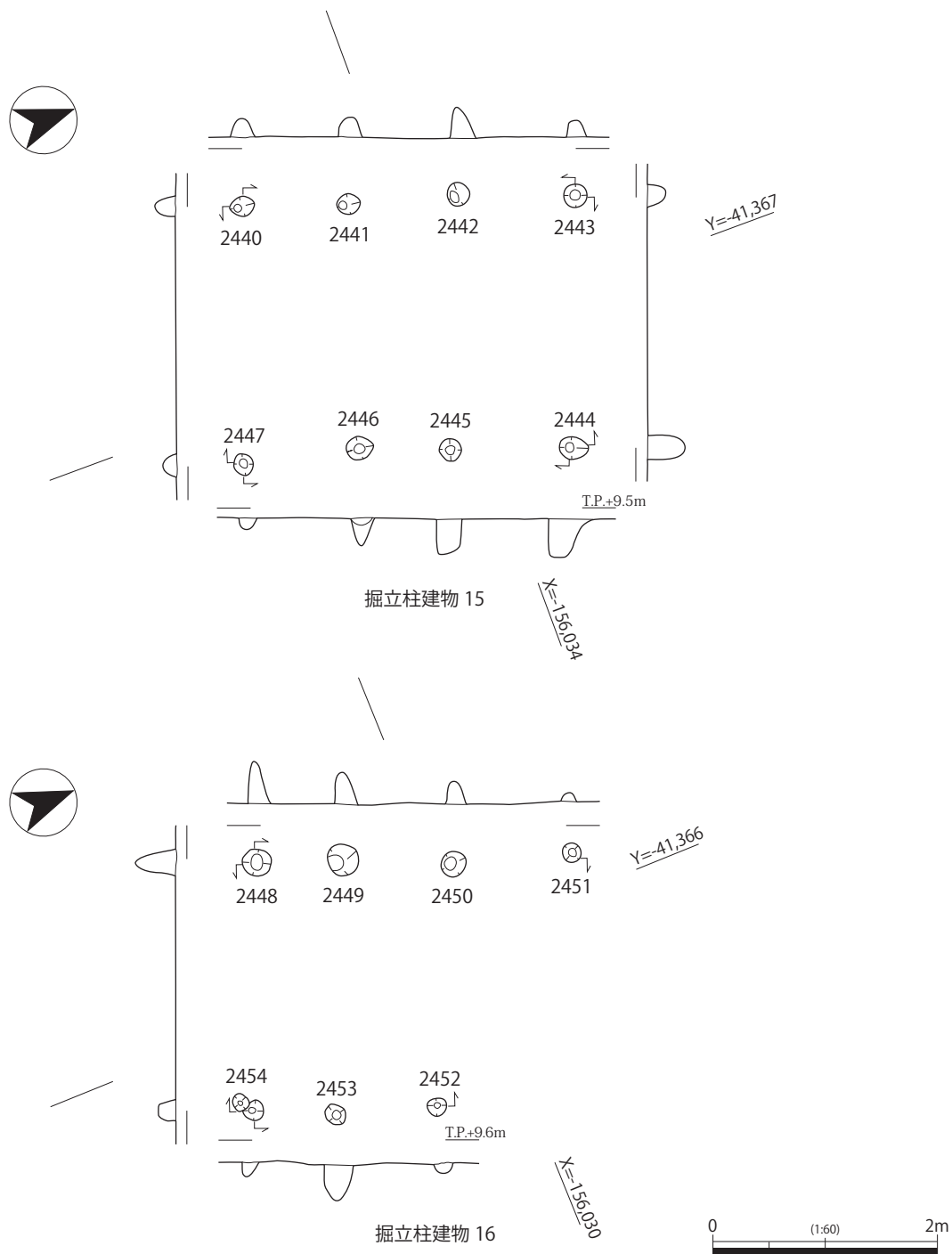


図252 掘立柱建物15・16 平・断面図

柱痕跡は、2246・2247・2248・2249・2250・2251ピットで認められた。断面を詳細に調査できなかったが、ピットの深さから考えて、2260・2261・2262ピットにも柱痕跡があったと思われる。

掘立柱建物15 (図209・252)

中央部やや西側で検出された。地形に直交する南西―北東棟の建物で、主軸はN-19°-Eを示す。北には、ほぼ主軸を同じくする掘立柱建物16が並ぶ。南には、2429土坑が位置する。

建物の規模は、梁間1間(南側2.27m、北側2.2m)、桁行3間(東側2.91m、西側2.95m)、床面積は約6.5㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、南側の梁間が2.27m、北側が2.2mである。西側の桁行が、北から1.07m、0.95m、0.93m、東側が北から1.07m、0.8m、



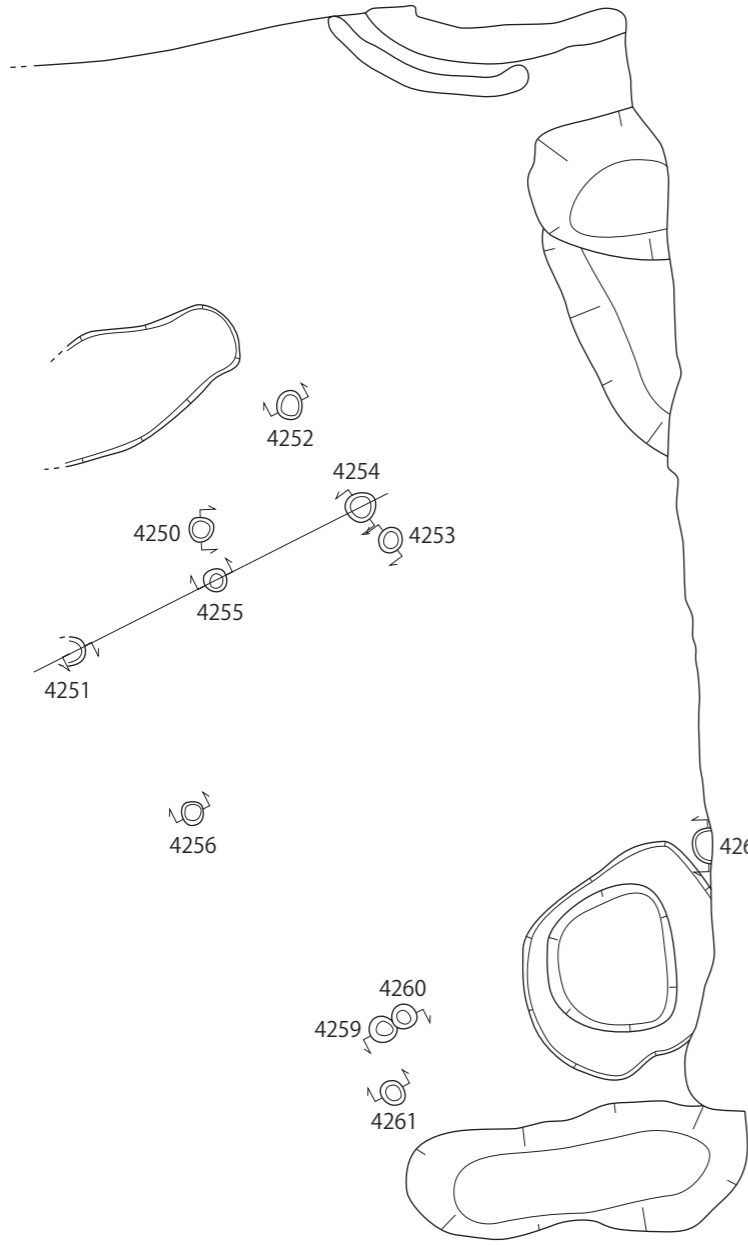
Y=-41,385

Y=-41,380

X=-156,040

X=-156,045

X=-156,050

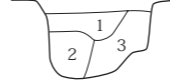


4251 ピット TP.+9.5m



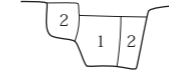
- 1. 褐灰色10YR4/1 シルト混じり細砂

4254 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒褐色10YR2/2 細砂混じりシルト
- 2. 黒褐色10YR3/1 細砂混じりシルト (小礫を含む)
- 3. 褐色10YR4/4 小礫質シルトブロック土

4255 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒色10YR2/1 細砂質シルト
- 2. 黒褐色10YR3/2 細砂質シルト

4250 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒色10YR2/1 中砂混じりシルト (小礫含む)
- 2. 黒褐色10YR3/2 細砂質シルト

4252 ピット TP.+9.5m



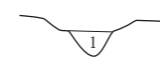
- 1. 黒色10YR2/1 中砂混じりシルト
- 2. 1と灰黄褐色10YR4/2 シルト質細砂のブロック土

4253 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒褐色10YR2/2 細砂混じりシルト
- 2. 黒褐色10YR3/2 細砂混じりシルト
- 3. 黒色10YR2/1 細~中砂混じりシルト (偽礫を含む)

4256 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒色10YR2/1 細砂質シルト

4260 ピット 4259 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒褐色10YR2/2 細砂混じりシルト
- 2. 黒褐色10YR3/1 細砂混じりシルト

4261 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒褐色10YR2/2 細砂混じりシルト

4263 ピット TP.+9.5m



- 1. 黒褐色10YR2/2 細砂質シルト

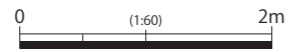


図253 19区柱列、ピット 平・断面図

1.04mである。ピットの掘方は、ほとんど円形で、断面形はU字形を呈する。掘削深度は、7～34cmで、穴底は円形である。柱痕跡は認められなかった。

掘立柱建物16（図209・252）

中央部やや西側で検出された。地形に直交する南西―北東棟の建物で、主軸はN-21°-Eを示す。南には、ほぼ主軸を同じくする掘立柱建物15が並ぶ。東側には、ほぼ主軸を同じくする柱列8があり、掘立柱建物15と合わせて2棟の掘立柱建物に平行して並んでいる。

建物の規模は、梁間1間（南側2.19m、北側復元2.17m）、桁行3間（西側2.83m、東側復元2.83m）、床面積は復元約6.2㎡である。梁間の間隔が広いことから2間の可能性も考えられる。柱間寸法は、南側の梁間が2.19m、北側が復元2.17mである。西側の桁行が、北から1.08m、0.85m、0.9m、東側が南から0.75m、0.88m、復元1.2mである。ピットの掘方は、ほとんど円形である。断面形はU字形を呈する。掘削深度は、8～38cmで、穴底は円形である。柱痕跡は認められなかった。

このほかに、掘立柱建物は復元できなかったが、西半部西寄り部分と中央部でピットが比較的多く検出されている。この中で、掘立柱建物15・16の東柱列から約1m離れた位置で、ほぼ平行にピットが並ぶ柱列8を復元した。なお、柱列8にほぼ直交する柱列7も復元でき、両方で掘立柱建物を構成する可能性も考えられる。

また、南西端部の07-1調査2-2トレンチでも、ピット群が検出されている。いずれも組み合わせは明瞭ではないが、掘立柱建物の一部の可能性がある。

<4326・4327・4328ピット>（図209）

いずれも07-1調査2-2トレンチで検出したピットで、掘方の径30～35cm、径15cmの柱痕跡をもつ。

<4319・4320・4321ピット>（図209）

いずれも07-1調査2-2トレンチで検出したピットで、3基のピットは近接している。掘方は径25cmで、径10cmの柱痕跡をもつ。4320ピットから、剥片1点が出土した。4321ピットからは、弥生土器片が出土した。

竪穴住居19の南側にあたる、土坑の空白地域（07-1調査2-3トレンチ）にもピット群が分布する。（図253）組み合わせは明瞭ではないが、西南西に主軸を持つ柱列、あるいは建て替えのある南北9m、東西5mの北北西に主軸を持つ掘立柱建物を想定できなくもない。

柱列の場合は、4254・4255・4251ピットを結んで長さ2.55m、2間程度に復元できる。ピットは径18～27cm、深さ7～25cmで、4255ピットは径10cmの柱痕跡を残す。

この他の4252・4250・4253・4256・4263・4260・4259・4261ピットは、径15～20cm、深さ10～25cmと小型で比較的浅く、黒褐色中・細砂質シルトを埋土としている。4260・4259ピットは近接しているが、切り合いをもつものは見られない。

3. 土坑

中央部から西半部にかけて、ほぼ全域に分布している。楕円形を呈しているものが多く、遺物量も比較的多い。井戸と考えられるものはあまりみられない。なお、東端部で検出された2191土坑の底面では、形成時の加工痕を確認することができた（図版39）。

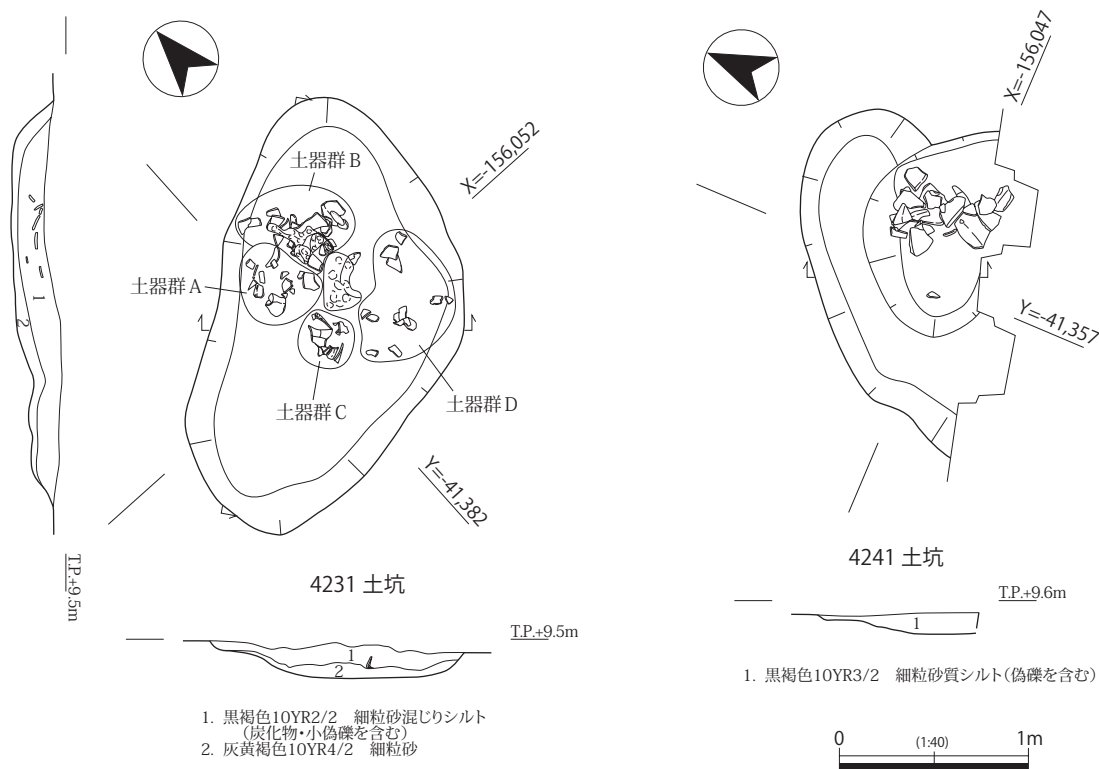


図254 4231・4241土坑 平・断面図

4231土坑 (図209・254・255・270、図版41・130)

西半部南端に位置する。上部は、第7e層上面からの4223溝に削られている。略三角形を呈し、長さ2.43m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。底面は西側で浅くなる。埋土上部は、黒褐色細粒砂混じりシルトで弥生土器片を多く含み、下部は薄い灰黄褐色細粒砂となる。中央部には、多数の土器片と加熱を受けた土塊が集中する。土塊は、大きいもので長さ30cm、幅15cm、厚さ10cmあり、土塊の周りに甕の上半部が取り巻く出土状況から、甕(989)が土塊の容器として使われていた可能性も考えられる。

988は大型の広口壺で、短い口頸部を持つ形態である。器壁は薄く、焼け歪みが大きい。口径29cm、高さ49cmに復元される。頸部と体部と頸部の境界に、やや離れた2条一組の沈線を巡らす。畿内第I様式新段階である。989は大型の甕で、口頸部は短くL字状に外反する。頸部に3条の沈線を巡らし、口縁端部には刻み目を施す。990は、甕の底部である。

石器では、石庖丁1点、敲き石1点、石鏃未成品1点、二次加工のある剥片2点、剥片1点、チップ43点が出土している。1152は、刃面の裏面が剥落した細片で、全体形は不明である。石材は、流紋岩質?である。1153は、扁平な棒状礫の両側面に剥離を伴う、線状打撃痕が顕著な砂岩製の敲き石である。長軸両端の一端は微かに、他端は少しの線状打撃痕があり、平面も両端寄りに線状打撃痕がみられる。

2411土坑 (図209・255、図版35・97)

中央部南寄りに位置する。平面形は楕円形を呈しており、長軸約1.8m、短軸約1.3m、深さ0.6mを測る。埋土は、3層に分けられる。1層は灰黄褐色細砂、2層は黄灰色中砂、3層は灰色中砂～細砂である。3層から弥生土器がまとまって出土した。

991は広口壺で、頸部がのびるb形態を呈す。5条以上の沈線を巡らし、外面を横へラミガキ調整する。992は完形の広口壺で、頸部に7条の沈線を巡らす。口縁端部は丸みを持つ。摩滅が著しい。

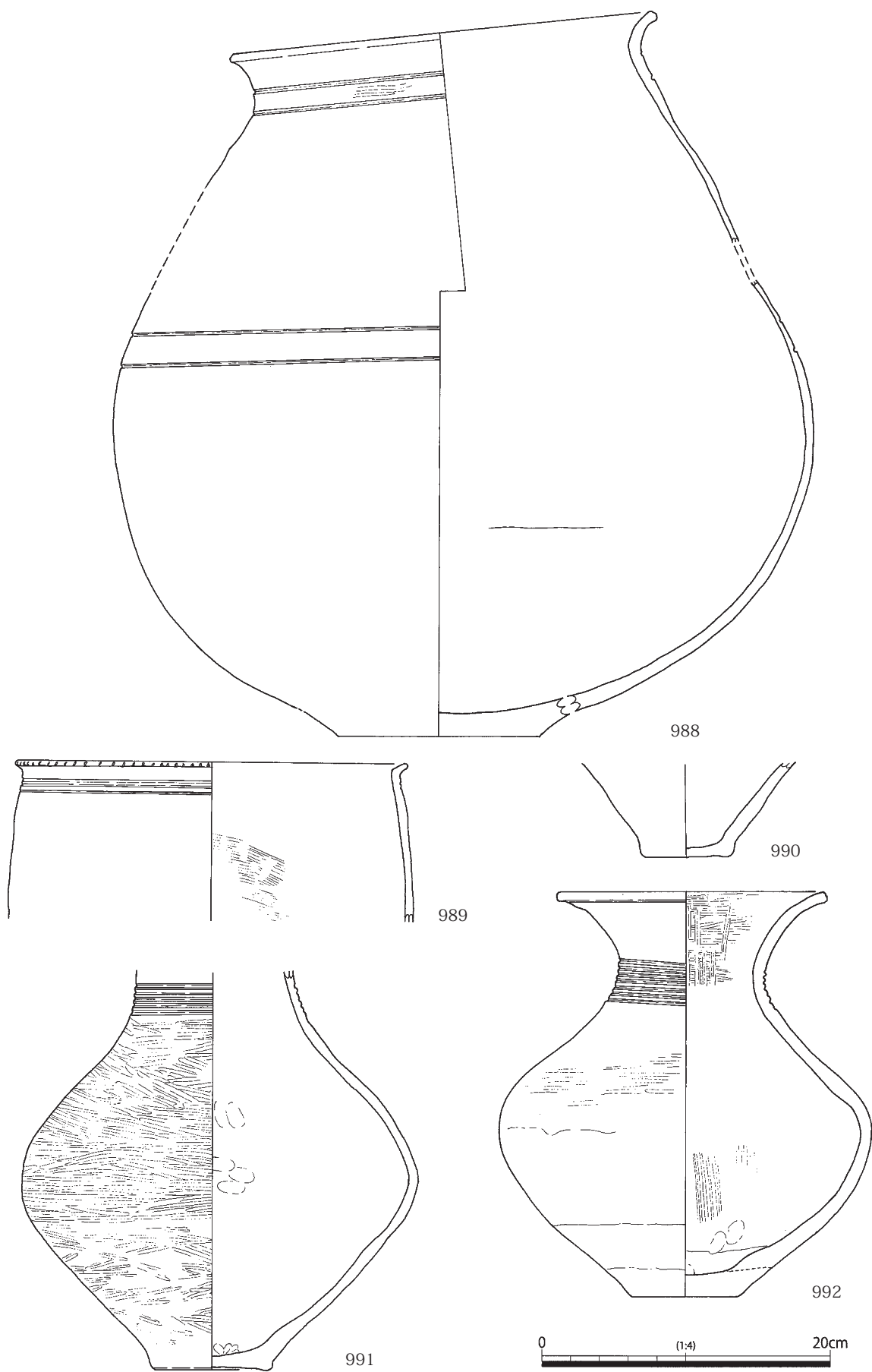


图255 19区土坑 出土遗物（弥生前期土器1）

4241土坑 (図209・254・256、図版41・99)

中央部西寄りの南端部に位置する。南側は調査区外に広がる。平面形は不整形で、幅約1.5m、深さ0.13mを測る。底部の南寄り有一段深く楕円形に落ちこみ、そこから弥生土器が重なって出土している。埋土は、黒褐色シルトである。

993は、口径40cmに復元される大型の壺で、頸部に幅の広く低い凸帯を巡らす。凸帯の上下は強く横ナデし、くぼませる。体部外面は横ヘラミガキ。994は甕で、3条の沈線を巡らし、口縁に刻み目を持つ。体部外面は、斜めハケ後一部ヘラミガキする。995は完形の小型の鉢で、口径14.2cm、高さ11.0

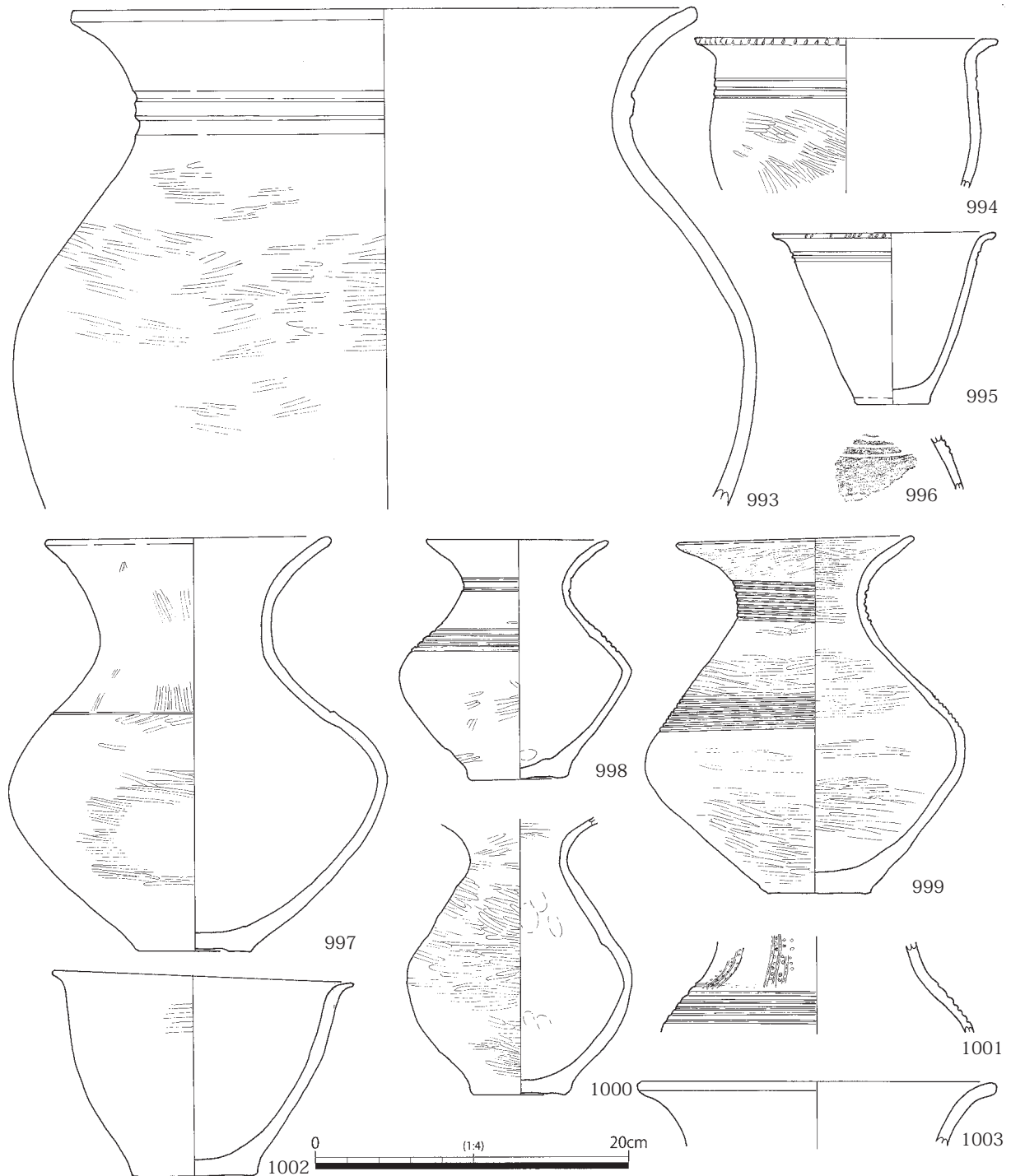


図256 19区土坑 出土遺物 (弥生前期土器2)

cmを測り、逆三角形を呈す。頸部に、2条の沈線と口縁に不規則に刻み目を施す。996は壺の体部で、段の下部に2条の沈線を加える。これらの土器群は河内Ⅰ-3様式に相当する。

4242土坑 (図209)

中央部やや西寄りの南端部に位置する。西側で4243土坑と接する。長さ0.9m、幅0.5m、深さ約0.1mの楕円形の浅い土坑である。埋土は、灰黄色細粒砂混シルトである。

4243土坑 (図209)

南壁にかかるが、長さ1.3m以上、幅0.3m以上、深さ約0.1mの方形の隅をもつ浅い土坑である。埋土は、灰黄色細粒砂混シルトである。

2430土坑 (図版209・256、図版35・97・98)

中央部西寄りの南端部に位置する。南側が調査区の側溝にかかっているため、平面形ははっきりしないが、楕円形を呈するものと考えられる。現状で、南北方向約1.9m、東西方向約4.0m、深さ0.6mを測る。埋土は、3層に分けられる。1層は灰色粗砂混じり中砂～シルト、2層は灰色細砂～中砂、3層は灰色中砂～細砂である。3層から弥生土器がまとまって出土した。

997～1000は、広口壺である。997は完形で、体部上半に僅かに段を残す。体部は横ヘラミガキ、頸部は縦ヘラミガキ調整する。998は、完形で小型、頸部に2条、体部上半に5～6条の沈線を巡らす。999は完形で、頸部に7条、体部上半に9条の沈線を巡らす。外面全体を横ヘラミガキ調整する。1000は小型で、段の痕跡を留める。外面全体に横ヘラミガキを施す。1001は小片であるが、体部上半に5条の沈線を巡らし、頸部に縦向けに4条の沈線と沈線間に列点文を施した文様を等間隔に施す。胎土は、チャートを含む灰白色を呈し、搬入品と考えられる。1002は、口縁が外反する完形の鉢である。口縁部がやや波打つ。剥離が著しい。これらの土器群は、沈線が多条化しつつも、板付式の伝統を引くa形態をとどめることから、河内Ⅰ-3様式に該当すると考えられる。

2207土坑 (図209・256)

北西部に位置する。竪穴住居15の南西部で隣接する。平面形は楕円形を呈しており、長径約1.8m、短径約1.4m、深さ約20cmを測る。埋土は、黒褐色シルトが主体であるが、下層は粘性が強くなり、炭化物を含む。

弥生土器や石器が出土した。1003は広口壺の口縁部で、内傾接合痕が認められる。畿内第Ⅰ様式である。石器では、二次加工のある剥片が1点出土している。

2215土坑 (図209・263・266、図版119・121～123)

西部に位置する。竪穴住居19の西側に隣接している。平面形は楕円形を呈しており、長径約2.5m、短径約1.8m、深さ約40cmを測る。埋土は黒褐色シルトが主体であるが、下層は粘性が強くなり、黒色度が増す。

1005・1006は広口壺の口縁で、いずれも小片である。1005は、内外面ヘラミガキ調整し、外傾接合。1006は器壁が厚い。1007は倒鐘形の甕で、口頸部が緩く外反する。内外面ともヘラミガキする。1008・1009は、甕の底部である。

石器では、敲き石1点、石鏃6（未成品2）点、石錐2点、中型尖頭器未成品2点、不明未成品？2点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片49点、楔形石器2点、剥片67点、石核2点、チップ18点が出土している。敲き石は礫混じり砂岩製で線状打撃痕をもつ。

1088は尖基式、1089は円基式、1090・1091は、刳りの浅い凹基式石鏃である。1088・1091の両

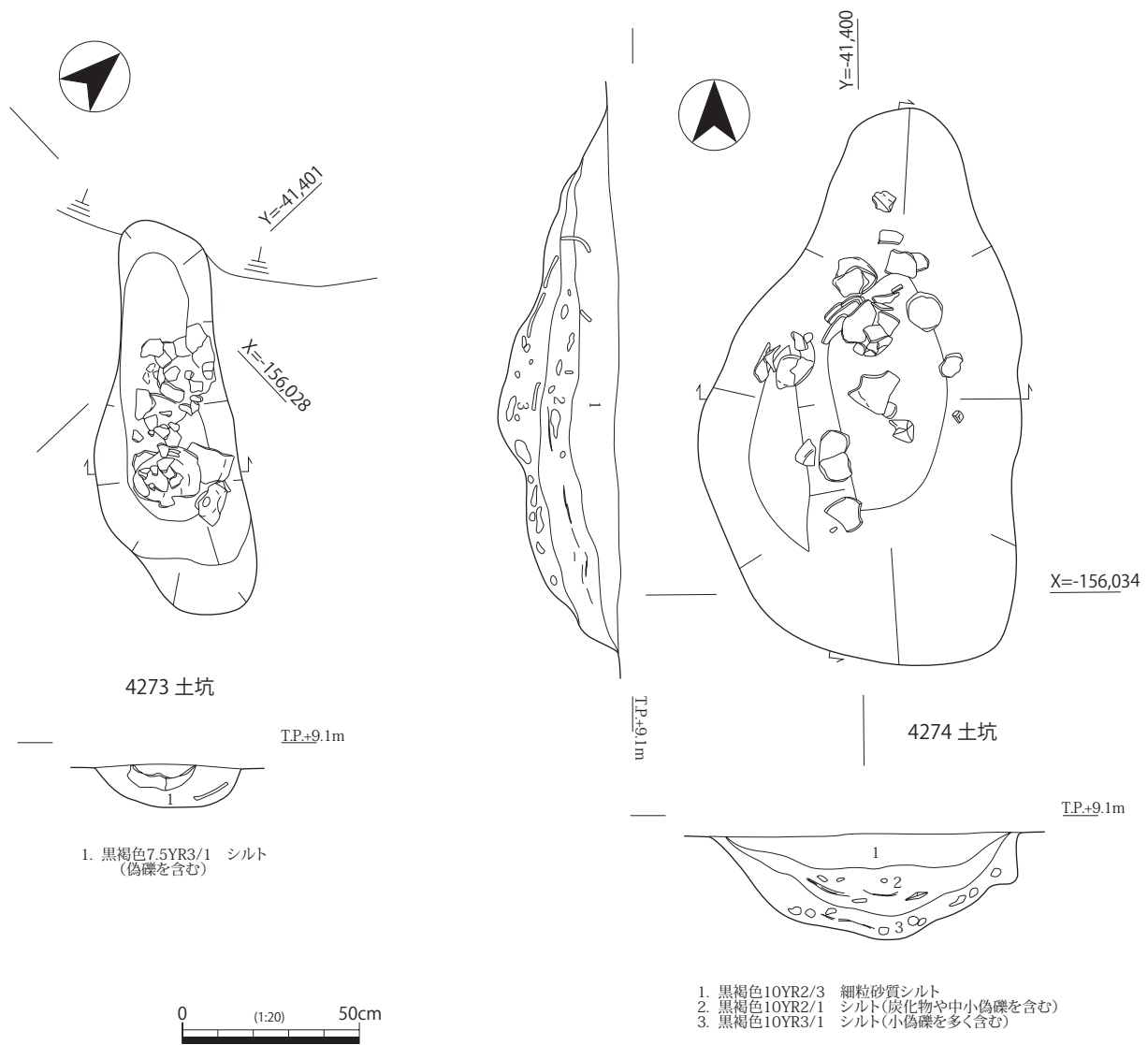


図257 4273・4274土坑 平・断面図

側辺には、鋸歯状剥離がみられる。1092は、中央部で真横に割れた中型尖頭器未成品である。製作段階での折れか。第8層出土破片と接合した。1093は、頭部が小さめで左右対称に近いが、頭部と錐部が明確な石錐である。錐部先端は摩滅している。1094は、木の葉形中型尖頭器の平面形態に類似するが、腹面の打点周辺が剥離され、エッジが潰れているため、スクレイパーであると考えられる。

2238土坑 (図209・263)

西部に位置する。竪穴住居16の東側に隣接している。北側を2236土坑に切られる。2236土坑は、平面楕円形を呈しており、埋土は黒褐色シルトが主体である。2238土坑は、南北方向に長い形状で、長軸約4.0m、短軸約1.5m、深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色シルトが主体であるが、下層は粘性が強くなる。

2238土坑から、弥生土器や石器が出土した。1010は紀伊型甕の底部で、結晶片岩を胎土に含む。

石器では、石鏃1点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片7点、楔形石器? 1点、剥片5点、石核2点が出土している。

4273土坑 (図209・257・263、図版40・99)

西端部に位置しており、北側が中世の河川(4201流路)によって削られる。東側に4275土坑がある。

溝状を呈し、長さ1.13m、幅0.4m、深さ0.13mを測る。断面はU字状を呈す。埋土は黒褐色シルトで、土坑の中央部から弥生土器が集中して出土している。人為的に埋められている。

1012は、ほぼ完形の小型の無頸壺である。口径8.2cm、高さ17.7cmで、体部は強く内湾した後、口縁部が短く直立する。器面の摩滅が著しいが無文と推測される。1013・1014は、甕の底部である。畿内第Ⅱ様式。石器は、スクレイパーが1点出土している。

4275(2242)土坑 (図209・258・267、図版118)

西端部に位置している。楕円形を呈し、全長1.3m、幅0.6m、深さ0.17mを測る。断面はU字状を呈す。埋土は3層に分かれ、上層の黒褐色シルトには、弥生土器片や炭化物、サヌカイト片が多く、中・下層は灰黄褐色で偽礫が混じる。人為的に埋められている。

石器では、石鏃2点、二次加工のある剥片3点、剥片4点、チップ260点が出土している。1103は、削りの浅い凹基式の石鏃であり、両側縁は中央よりやや上部より屈曲し、ほぼ平行に基部にいたる。

2218土坑 (図209・263)

北西部に位置する。竪穴住居15の南部で隣接する。平面形は楕円形を呈しており、長径約1.5m、短径約0.9m、深さ約30cmを測る。埋土は、3層に分かれており、上層は灰黄褐色シルト、中層は黒色シルト、下層は黒褐色シルトである。

1011は、倒鐘形の甕である。外面縦へラミガキ、内面ハケ状のナデ調整を施す。ススが付着する。

石器では、二次加工のある剥片4点、剥片3点、石核1点、チップ7点が出土している。

2209土坑 (図209・271、図版130)

北西部に位置する。竪穴住居17の東部で隣接する。土坑が4基重複しており、2208・2211土坑を切り、2210土坑に切られている。平面形は不整楕円形を呈しており、長軸約1.5m、短軸約0.8mである。

石器では、敲き石1点が出土している。1158はチャート円礫で、ほぼ相対する位置に打撃痕があり、その部分から割れを生じている。敲打部分の表面は荒れており、他の表面はなめらかである。

2210土坑 (図209・263・266・271、図版119・130)

北西部に位置する。竪穴住居17の東部で隣接する。土坑が4基重複しており、その中でもっとも新しい。2209・2208・2211土坑を切っている。平面形は楕円形を呈しており、長径約1.0m、短径約0.7mを測り、比較的小規模である。

1015は甕で、器壁は厚く、口縁が緩やかに外反する。内外面へラミガキ調整し、外面下半にススが付着する。

石器では、敲き石1点、石鏃1点、二次加工のある剥片16点、剥片16点、石核2点、チップ4点が出土している。1154は扁平な砂岩礫で、周縁に線条打撃痕がみられる。一部剥離しているが、線条打撃痕に伴うものか。剥離後の鋭い切れ口にも、線条打撃痕がみられる。1085は、基部が一部欠損しているが、尖基式石鏃かと思われる。1086は、重複する2208・2209・2210・2211土坑の土層確認面畦から出土の尖基式石鏃である。

2211土坑 (図209・266、図版118)

北西部に位置する。竪穴住居17の東部で隣接する。土坑が4基重複しており、直接的には2209・2210土坑に切られている。不整形で、東側が調査区境界部分であるため、全容ははっきりしない。

石器では、石鏃未成品1点、石錐2点、石槍未成品1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片11点、剥片16点、チップ6点が出土している。1087は、円基式石鏃の未成品である。腹面に大きく大剥離面

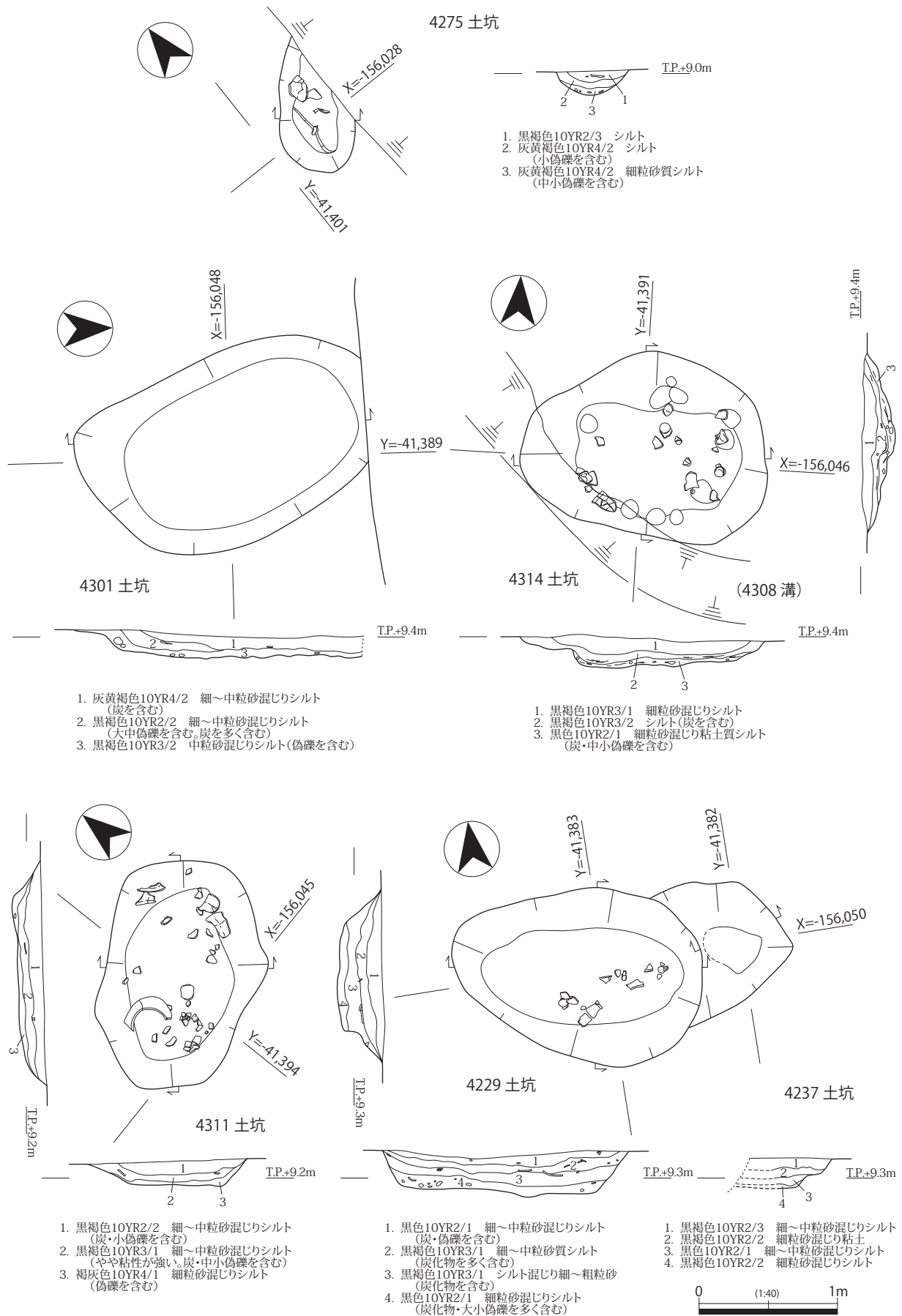


図258 19区土坑 平・断面図(1)

を留め、先端の角度はやや鈍い。

4274土坑 (図209・257・263、図版40・99)

西端部に位置する。周囲に土坑が多く密集している。やや細長い不整形円形を呈し、長さ1.57m、幅0.92m、深さ0.3mを測る。断面はU字状で、南西斜面は2段に落ちる。埋土は黒褐色シルトで3層に分かれ、中・下層に薄い炭層と土器片を含み、下層は偽礫が混じる。人為的に埋められている。

土坑中央の中・下層から弥生土器、石器、剥片類がまとめて出土した。1019は鉢で、口縁がほぼ直立し、端部は丸みを持つ。不揃いの波打った櫛描直線文(7条/1cm)を2帯巡らす。体部外面は、ヘラミガキ調整する。1016は、甕蓋である。1017は甕の小片で、器壁は厚く、口縁が短く外湾する。外傾接合。口縁外面にススが付着する。1018は甕で、体部外面をヘラミガキ調整し、内面は板ナデ調整する。1020は小さな凹み底をもつ甕で、内面板ナデ痕が残る。1016・1018は生駒山西麓産の胎土で、粗粒の角閃石を含む。

石器では、石鏃1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片2点、剥片6点、チップ3点が出土している。

2235土坑 (図209・266、図版118)

北西部に位置する。竪穴住居19の北側で近接するが、重複関係ははっきりしない。平面形は不定型で、東西方向が長い形状である。東側は、調査区の境界部分であるため、不明である。検出面で東西約2.3m、南北0.8m前後、深さ約20cmである。埋土は、人為的なもので、灰黄褐色粗砂～中砂である。

石器は、石鏃6(未成品4)点、中型尖頭器未成品1点、楔形石器2点、二次加工のある剥片17点、剥片22点、チップ2点が出土している。1098は尖基式、1099は平基式石鏃である。1098の両側辺には、鋸歯状剥離がみられる。1097は、円基式石鏃の未成品であり、大剥離面を両面に留める。

2234土坑 (図209・266、図版118)

西部に位置する。竪穴住居16の南東側にあり、重複関係ははっきりしないが、これに切られているものと考えられる。平面形は不定型で、東西方向が長い形状である。検出面で東西約2.7m、南北0.4～0.7m、深さ約10cmである。

石器は、石鏃2点、二次加工のある剥片1点、剥片6点が出土している。1095・1096は、石鏃である。1095は基部欠損するが、細身の尖基式であろうか。1095の両側辺には、鋸歯状剥離がみられる。1096は、円基式である。

4302土坑 (図209)

南西端部に位置する。大部分が第7e層上面の4287溝で削られ、東部のみが残る。深さ0.15mを測り、埋土下部は黒褐色細砂混じりシルトで、弥生土器片を含む。

4301土坑 (図209・258・263・267、図版119)

中央を第7e層上面の4287溝で削られるが、長径2.2m、短径1.3m、深さ0.2mを測る、楕円形の土坑である。底部は平坦で、埋土下部は黒褐色中・細砂粒混じりシルトからなり、弥生土器片、炭粒を多く含む。偽礫を含む。

1021・1022は、甕である。1021は小型で、口縁がラッパ状に開き、体部下半をヘラ削り調整する紀伊型甕であるが、胎土には結晶片岩を含まない。1022は、生駒山西麓産の胎土を持つ。1023は、蓋のつまみの部分である。

石器では、石鏃未成品1点、スクレイパー1点、不明未成品1点、二次加工のある剥片3点が出土し

ている。1104は、剥片周囲から両面側へ剥離を施し成形途中のものであり、厚みがまだとれておらず、基部成形も主に片面側に剥離されているだけであるが、石鏃未成品と思われる。

4311土坑 (図209・258・263・267、図版40・118)

南西部に位置する。南側で4305土坑と隣接するが、新旧関係ははっきりしない。平面形は不整円形を呈し、長径1.63m、短径1.15m、深さ0.18mを測る。底部はほぼ平坦である。埋土は3層に分かれ、上半部は黒褐色中・細砂混じりシルトで、壺体部の大きな破片など弥生土器片を多く含む。下層は、褐灰色細砂混じりシルトで偽礫を含む。

1024は、壺の口縁部である。1025は甕で、口縁が緩やかに外反する。摩滅が著しい。共に生駒山西麓産の胎土を持ち、1024は粗粒の角閃石を含む。畿内第Ⅱ様式である。

石器では、石鏃3（未成品1）点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片10点、剥片19点、チップ485点が出土している。1107は削りの浅い凹基式、1108は円基式である。2点ともに小ぶりで、両面中央に大きく大剥離面を留め、他の石鏃と比較して粗いつくりである。

4314土坑 (図209・258・263・268、図版119・121)

南西部に位置する。平面形は不整円形を呈し、長径1.8m、短径1.32m、深さ0.22mを測る。底面は起伏があり、周囲に径10cm前後の小穴が並ぶ。南西側で4308溝に切られる重複関係があるが、4308溝は浅いため、4314土坑はほとんど影響を受けていない。埋土は3層に分かれ、下層は黒色細粒砂混じり粘質シルト、中層は黒褐色シルトで共に炭層や弥生土器片を含む。

1026～1029は甕で、外面を斜めヘラミガキ調整するものが多い。1026は、生駒山西麓産の胎土を持つ。種子が多数出土した。

石器では、石鏃4（未成品1）点、石槍未成品1点、石錐1点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片10点、楔形石器1点、剥片41点、チップ1062点が出土している。1119は、平基式石鏃である。1121は円基式石鏃であり、逆刺の片方が角張り、厚みを持つため未成品と思われる。1122は、頭部と錐部の明確な石錐である。頭部上端に自然面を留める。1120は、石槍未成品の先端部で、折れたものと思われる。

4313土坑 (図209・259・265・268、図版122・123)

南西部に位置する。竪穴住居18の南側で、壁溝である4312溝を切っている。重複関係から、竪穴住居18より新しい土坑である。長楕円形を呈し、長さ3.04m、最大幅1.2m、深さ0.3mを測る。底面は浅く窪み、周囲に小穴状の凹みが見られる。埋土は3層に分かれ、下部は黒色細粒砂混じりシルトで炭層や土器片、偽礫を含み、部分的にその下に偽礫を含む黄灰色細砂混じり粘質シルトがある。東端から、比較的大きな甕の破片が集中して出土している。

1083は、口縁端部が下方に折れ曲がる形態の壺である。頸部に櫛描直線文がわずかに残る。1082は、口縁が緩やかに外反する小型の甕で、外面はヘラミガキ調整する。いずれも畿内第Ⅱ様式のやや新しい段階であろう。また、1084は、頸部に4条以上の沈線を巡らした壺で、畿内第Ⅰ様式新段階の所産であるが、混入と考えられる。

石器では、敲き石2点、石鏃未成品1点、中型尖頭器未成品？1点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片11点、剥片19点、チップ28点が出土している。剥片の中には、ポイントフレイクを1点含む。敲き石は、2点ともに敲打痕がみられ、石材は流紋岩、砂岩の各1点である。

1129は、中型尖頭器の未成品であり、両面中央には大剥離面を大きく残し、片側面に自然面を留める。

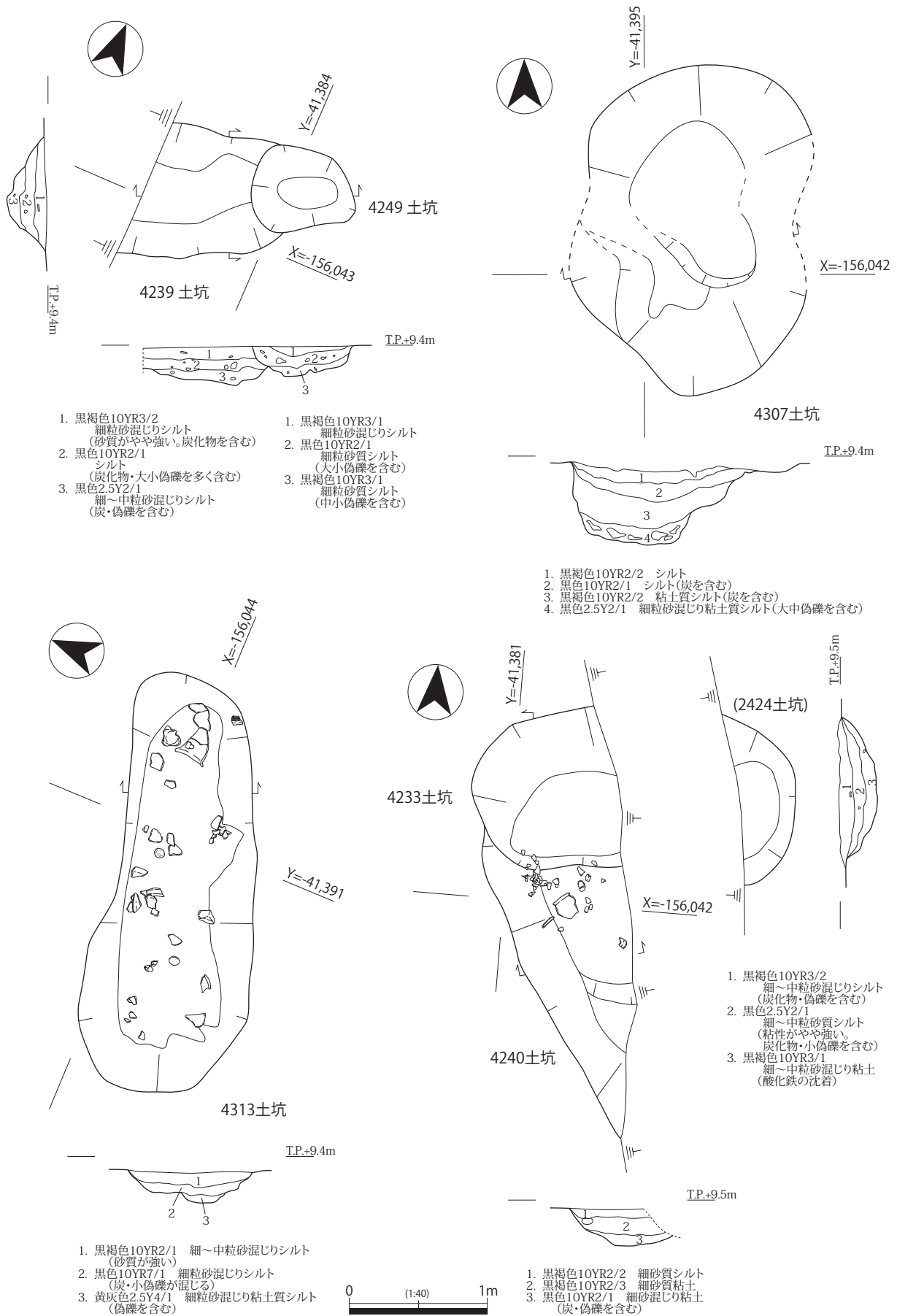


図259 19区土坑 平・断面図 (2)

1130は、背部に自然面を留めるスクレイパーである。原礫の角を打点として剥片を作り出し、腹面には大きく大剥離面を残し、剥片末端側を両面に剥離して刃部を形成している。刃部一端よりに摩滅がみられる。

4237土坑 (図209・258・263)

南西端部に位置する。周囲に土坑が密集している。4229土坑に切られ、一部しか残存しないが、深さ0.2mを測り、埋土は黒～黒褐色中・細粒砂混じりシルトからなる。

1030は甕の小片で、口縁部が短く外湾する。1031は甕の底部で、赤変する。生駒山西麓産の胎土を持つ。この他、やや粗な櫛描文をもつ土器片が出土している。

4229土坑 (図209・258・264)

南西端部に位置する。4237土坑を切っている。平面形は歪な楕円形で、長さ1.83m、幅1.25m、深さ0.33mを測る。底部はほぼ平坦である。埋土は4層に分かれ、黒～黒褐色の中・細粒砂シルトからなり、各層とも弥生土器片・炭化物が多く、最下層は地山の偽礫を多く含む。埋土上面は浅く窪み、灰褐色シルトが堆積する。土器は南東部にかたまっている。

1045～1049は甕の小片で、口縁が緩く外反する。1045・1048は、外面にヘラミガキが残り、河内型甕である。1050は鉢の体部上半で、櫛描直線文(11条/1.5cmらしいが、明瞭な部分は上半6条のみ)を施す。1051・1052は甕の底部である。1047・1049は生駒山西麓産の胎土で、1049は粗粒の角閃石を含む。

石器では、石錐1点、二次加工のある剥片2点、剥片3点、チップ10点が出土している。

4226土坑 (図209)

南西端部に位置する。両端が削られているが、幅1.5m、深さ0.15mを測る、略円形の浅い土坑である。底面には起伏が認められる。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、偽礫を多く含む。

4239土坑 (図209・259・263)

南西部に位置する。東半部が残存するが、東端は平面楕円形の4249土坑に切られている。溝状に長く、幅0.95m、深さ0.28mを測る。埋土は3層に分かれ、黒～黒褐色細粒砂質シルトから成る。

1032は広口壺で、端面を強く横ナデすることで凹線状に窪ませる。生駒山西麓産の胎土で、粗粒の角閃石を含む。畿内第Ⅱ様式でも時期がやや下る可能性がある。石器では、スクレイパー2点、二次加工のある剥片1点、剥片4点、チップ3点が出土している。

4306土坑 (図209)

南西端部に位置する。南壁にかかるが、長さ1.6m、深さ0.1mの半円形の輪郭を持つ浅い土坑である。底面に不規則な凹凸をもつ。埋土は、黒色細粒砂混じり粘土質シルトである。

弥生土器の甕底部が2点出土した。

4307土坑 (図209・259・264・267、図版99・118)

南西部に位置する。平面形は楕円形で、全長2.5m、幅0.9m、深さ0.6mを測る。断面は、上部がラッパ状に開き、下半が筒状にすぼまる。形状から井戸の可能性が高い。上半部は黒～黒褐色シルト、下層は黒色細砂混じり粘質シルトで偽礫を多く含み、完形に近い弥生土器を出土している。

1033は、下層から出土した頸の太短い無文の広口壺である。1035は、結晶片岩を含む甕である。1036は壺の底部で、やや上げ底で外面をヘラミガキ調整する。1034は長頸広口壺で、口径19.7cm、高さ35cmに復元される。口縁部は上部が折れ曲がるように外反し、やや肥厚した端面には櫛描直線文を

施し、下端に細かい刻み目を密に加える。体部上半から頸部にかけて、やや波打った櫛描直線文（8～9条／1.5～1.7cm）を10列巡らす。体部に施された2列は一部を重ねて描かれ、やや空白をおいて、頸部にはほぼ等間隔に描かれる。2203・4308溝から同一個体の口縁部(図272-1165)が出土している。1033・1034・1036は、生駒山西麓産の胎土を持ち、1033・1036は、粗粒の角閃石を含む。

石器では、石鏃3点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片16点、剥片32点、石核6点、チップ353点が出土している。1105は凹基式、1106は円基式の石鏃である。1105の両側辺、基部には鋸歯状剥離がみられる。1106は、先端部が欠損している。

4309落ち込み(図209・264)

南西端部に位置する。規模は、東西4.5m、南北2.0m以上、深さ0.1mの略円形の浅い落ち込みで、南側は調査区外へ続く。第9d層上面の高まりの上に形成されている。黒色粗～極細粒砂混シルトを埋土とする。1037は甕の底部で、破損状況から穿孔が行われていた可能性がある。

4304落ち込み(図209・264)

南西部に位置する。幅1.7m、深さ約10cmの略円形の浅い落ち込みである。

弥生土器、剥片1点が出土した。1038は、甕の底部である。

4234土坑(図209・260・265・268・270、図版100・119・127・131)

南西端部に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長さ2.9m、最大幅1.05m、深さ0.2mを測る。底面は船底状で、西に浅くなる。埋土は3層に分かれ、上層は黒褐色細粒砂質シルト、中層は灰黄色細粒砂質シルトで、弥生土器や炭化物を多く含み、下層は薄く、暗褐色細粒砂からなる。土器片は土坑の両端にかたまっており、石庖丁の破片が中央部から出土している。

1053・1054は甕で、口縁が短く外反し、体部がやや張る形態である。1057は長胴の壺、1058・1059は甕蓋である。端部にススが付着する。1055は、底部である。内面に炭化物が厚く付着する。1056は、土器片の周囲を打ち欠いて若干研磨を加えた土製円盤で、径5.3cmを測る。

石器では、石庖丁1点、敲き石1点、石鏃1点、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー2点、剥片3点、チップ71点が出土している。1150は、片刃の直線刃半月形態の石庖丁である。被熱によるものか、表面は荒れている。背部・刃部に、長軸と直交する打撃痕がある。石材は、緑色片岩である。一端と背部が欠損し、その部分に線条打撃痕がみられる。1151は敲き石である。乳棒状の砂岩礫で、末端に敲打痕、側面には線条打撃痕がみられる。1128は、小ぶりで先端部の角度が大きく、基部の削りが明確な凹基式石鏃である。

4233土坑(図209・259・265)

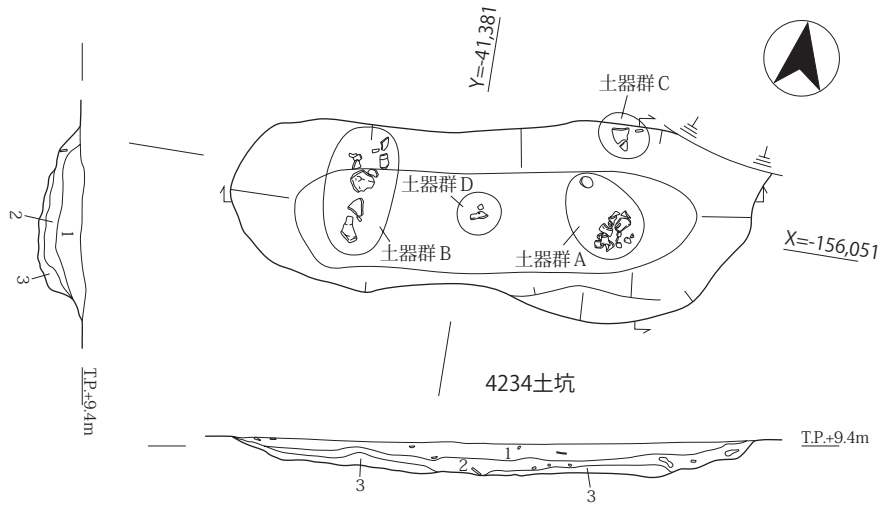
南西部に位置する。平面形は楕円形で、全長1.9m、幅1.2m、深さ0.28mを測る。埋土は3層に分かれ、黒～黒褐色中・細粒砂混じりシルトから成る。南側で4240土坑を切る。

1060は、口縁が緩やかに外反する甕である。

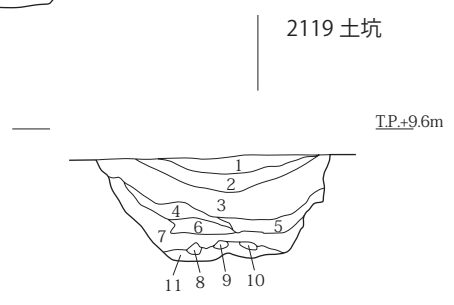
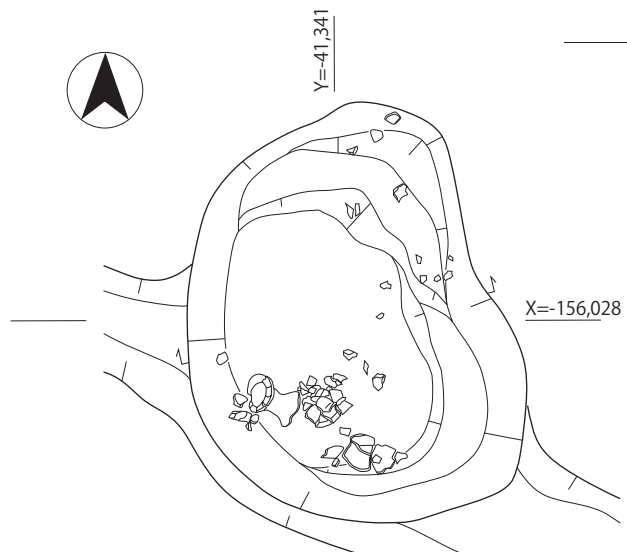
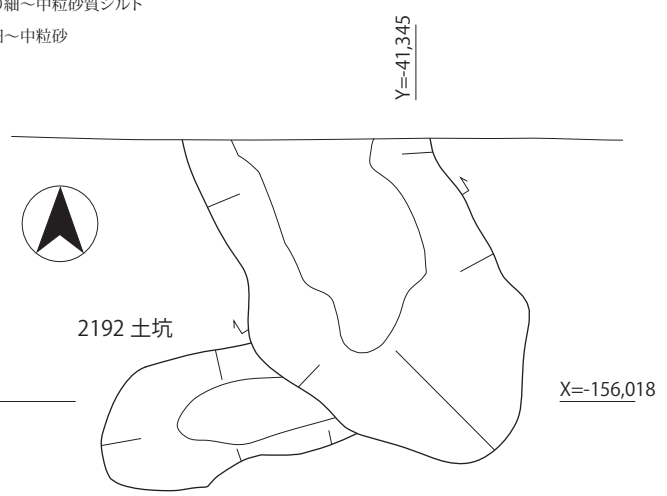
石器では、敲打痕のある砂岩製の敲き石1点、石槍未成品1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片11点、剥片4点、チップ8点が出土している。

4240土坑(図209・259・265・271、図版130)

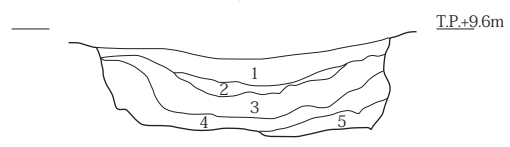
南西部に位置する。西半部が残存し、北側は4233土坑に切られ、南は側溝内で終わる。平面形は楕円形で、深さ0.26mを測る。埋土は、黒～黒褐色細粒砂シルト～粘土で、下層は偽礫を含み、粘質が強い。中層から、弥生土器片が集中して出土している。



1. 黒褐色10YR3/2 細粒砂質シルト(炭化物を含む)
2. 灰黄褐色10YR4/2 シルト混じり細～中粒砂質シルト(炭化物・大小偽礫を多く含む)
3. 暗褐色10YR3/3 シルト混じり細～中粒砂



1. 黒褐色10YR3/1 シルト～細砂
2. 褐灰色10YR4/1 中砂混じりシルト～細砂
3. 黒褐色7.5YR3/1 中礫混じり細砂～中砂
4. 黒褐色10YR3/1 細砂～中砂(炭化物を多く含む)
5. 黒色10YR2/1 細砂～中砂
6. 黒褐色10YR3/1 細砂～中砂
7. 黒色2.5Y2/1 細礫混じり中砂
8. 灰黄褐色10YR4/2 シルト(偽礫を含む)
9. 褐灰色10YR4/1 シルト(偽礫を含む)
10. 黄灰色2.5Y4/1 シルト(偽礫を含む)
11. 灰色5Y4/1 中砂～粗砂



1. 暗褐色7.5YR3/3 シルト(粗砂～極粗砂が混じる)
2. 黒褐色7.5YR3/1 シルト(粗砂・炭化物が少量混じる)
3. 黒褐色5YR3/1 シルト(粗砂・偽礫が多く混じる)
4. 黒色10YR2/1 シルト(ラミナが認められる)
5. 褐灰色10YR4/1 シルト

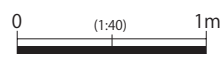


図260 19区土坑 平・断面図 (3)

1062は口縁がやや内湾する鉢で、均一な櫛原体による櫛描直線文（11条／1.2cm）を4帯以上施し、文様間をヘラミガキする。1063は無頸壺の可能性があるが、摩滅が著しい。1065は、外面を斜めヘラミガキする河内形の甕である。1064は甕の口縁部、1066は甕の底部である。1065・1066は、生駒山西麓産の胎土で、粗粒の角閃石を含む。畿内第Ⅱ様式である。

石器では、敲き石2点、石鏃未成品2点、石錐2（未成品1）点、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー4点、二次加工のある剥片10点、剥片18点、石核2点が出土している。1156は敲き石である。凝灰岩の棒状礫で、長軸一端に敲打痕、平坦面をもつ側面の中央より少しずれた位置に線条打撃痕がある。もう1点の敲き石は、チャートの垂円礫が半分に割れたもので、敲打痕がみられる。

4235土坑（図209・265）

南西端部に位置する。平面形は略円形の浅い土坑で、最大長1.96m、深さ0.12mを測る。埋土は、黒褐色細砂質シルトである。

弥生土器が出土した。1061は小型の甕の底部であるが、蓋になる可能性もある。底部には、木葉圧痕が部分的に残る。畿内第Ⅱ様式である。

4305土坑（図209・271、図版130）

南西端部に位置する。竪穴住居18の南西にあり、土坑4311の南西に隣接する。平面形は、溝状に伸びており、ゆるく曲がる形状である。長さ5.7m、幅1.7m、深さ0.15mを測る。底面はほぼ平坦で、埋土は、黒褐色中・細砂混じりシルトで、弥生土器、炭粒を含む。

壺の口縁部、櫛描直線文を施した壺体部、壺の底部など畿内第Ⅱ様式の土器が出土した。石器では、敲き石1点、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片2点、剥片4点、石核2点が出土している。1157は、敲き石である。扁平な礫混じり砂岩礫の割れたもので、片側面に線条打撃痕がみられる。

4338土坑（図209）

南西端部に位置する。4305土坑の西側に隣接する。平面形は楕円形で、長径1.3m、短径1.0m、深さ10cmを測り、埋土は、黒褐色中・細砂混じりシルトである。

2437土坑（図209・271、図版130）

中央部西寄りの北端部に位置する。竪穴住居21の西半部にあり、これに切られている。平面形は楕円形を呈しており、検出面で長径約2.4m、短径約1.2m、深さ20～40cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色粗砂混じり細砂、下層は黒色中砂～シルトである。

石器では、敲き石1点が出土している。1155は、上下端部に敲打痕があり、裏面は割れて剥がれているチャート製の敲き石である。

2428土坑（図209・264）

中央部西寄りに位置する。竪穴住居20の南東、掘立柱建物15の西側に隣接している。平面形はほぼ楕円形を呈しており、長径約2.0m、短径約1.4m、深さ約20cmを測る。埋土は、2層に分かれており、上層は黒褐色粗砂混じり中砂～シルト、下層は黒色粗砂混じり中砂～シルトで炭化物を多く含む。

弥生土器が出土した。1044は大型の甕で、口縁端部を折り返すように成形する。外傾接合。

石器では、スクレイパー2点が出土している。

2391土坑（図209・267、図版118）

中央部やや北寄りに位置する。竪穴住居23の北側に隣接するが、他の遺構よりも上層で検出されて

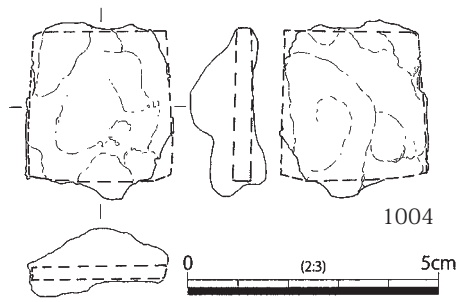


図261 2122土坑 出土遺物
(鉄製品)

おり、出土遺物は、弥生中期でも後半の時期に属すると思われる。平面形は隅丸方形で、一辺4m前後、深さ約0.8mである。

石器は、石鏃1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片2点、剥片2点が出土している。1100は、本遺跡出土の数少ない突基有茎式石鏃である。

2122土坑 (図209・261・262・265・268・270、図版119・121・122・127・131)

中央部やや北寄りに位置する。平面形は楕円形を呈しており、検出面で長径約1.4m、短径約1.2m、深さ約0.5mを測る。埋土は8層に分かれ、1層は褐灰色細砂～シルト、2層は黒褐色中砂混じり細砂～シルト、3層は黒褐色中礫混じり細砂～中砂、4層は灰黄褐色中砂、5層は黒色中砂～細砂で炭化物を多く含む。6層は黒色粗砂～中砂、7層は黒褐色シルト～中砂で炭化物を多く含む。8層は黄灰色中礫混じり中砂～細砂である。6・7層は機能時の形成層と考えられる。1～3・5層は別の遺構の埋土の可能性もある。

1067は、甕の口縁部の小片である。

石器では、石庖丁1点、砥石1点、石鏃3点、石錐1点、石小刀2点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片17点、剥片27点、チップ287点が出土している。1147の石庖丁は、研磨前の敲打痕が紐孔付近等に残る。石材は、結晶片岩か。直線刃半月形態の刃部、背部ともに剥離を伴う線条打撃痕のみられるものである。当遺跡出土の石庖丁では、線条打撃痕の顕著なものはあまり多くないのが特徴である。砂岩製の砥石が1点出土している。1123は円基式石鏃で、両面中央に大剥離面を大きく残す。1124は、平基式石鏃である。1124の両側辺には、鋸歯状剥離がみられる。1127は、左右対称形の頭部と錐部が明確な石錐である。1125は、内側に突起を2つもつ石小刀であり、両面中央に大きく大剥離面を留める。1126は中型尖頭器に似るが、長軸方向に湾曲しており、片側辺が直線的、もう一方の側辺が僅かに湾曲している点から、石小刀の可能性が考えられる。

このほかに鉄斧が1点出土している。1004の鉄斧は、長さ3.5cm、幅2.9cm、厚さ1.4cm、重さ14.9gの短冊状である。全面錆で覆われているが、厚さ0.4cmと推測される。鍛造鉄斧の可能性があり、大きさは鍛造鉄斧の破片再利用品に近い。畿内第Ⅱ様式土器と共に出土しているが、出土状況が明確ではないため混入品の可能性もある。

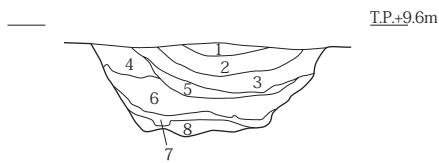
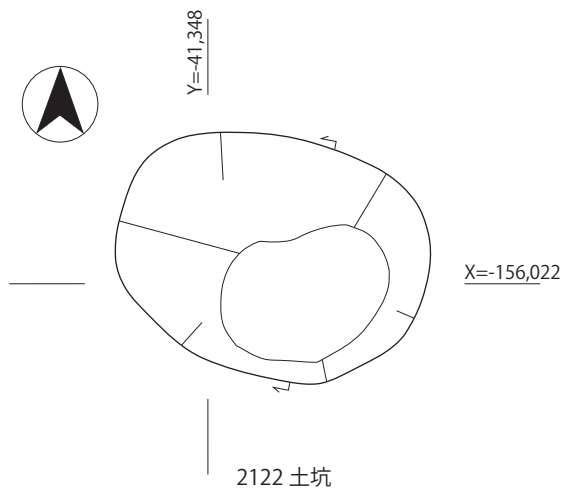
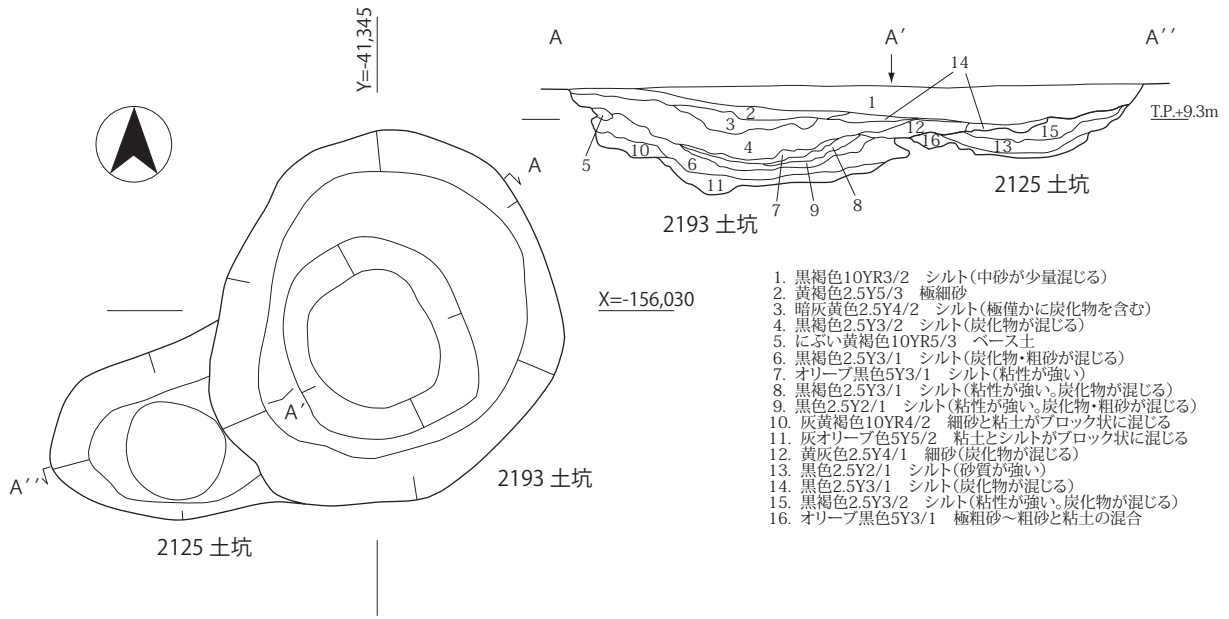
(注) 畿内第Ⅱ様式の段階で日本に鍛造鉄斧は存在しない。古い出土例では、大阪府茨木市東奈良遺跡出土の中期前半以前の鑄造ノミや、神戸市西区新方遺跡出土の鑄造鉄斧がある。

2125土坑 (図209・262・265、図版39)

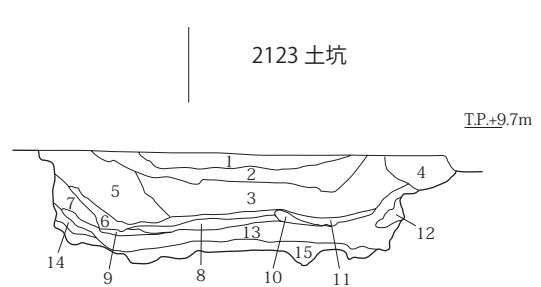
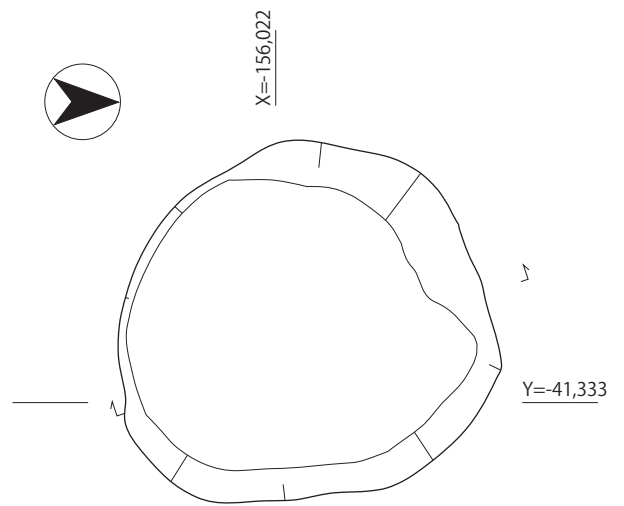
中央部やや東寄りに位置する。東側を2193土坑に切られている。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。検出面で、長径約1.3m、短径約1.0m、深さ約40cmである。埋土上部は削平されているが、残存する下部は3層に分かれる。1層は、黒褐色シルトで炭化物を多く含む。2層は黒色シルト、3層はオリーブ黒色粗砂混じり粘土である。

1068は甕の底部で、薄く、外面が剥離している。内面にススが付着する。畿内第Ⅲ様式に下る可能性もある。

石器では、石鏃2(未成品1)点、二次加工のある剥片13点、楔形石器1点、剥片14点、石核2点、チップ174点が出土している。



1. 褐灰色10YR4/1 シルト～細砂
2. 黒褐色10YR3/2 中砂混じりシルト～細砂
3. 黒褐色10YR3/1 中礫混じり細砂～中砂
4. 灰黄褐色10YR4/1 中砂
5. 黒色2.5Y2/1 細砂～中砂(炭化物を多く含む)
6. 黒色2.5Y2/1 中砂～粗砂
7. 黒褐色10YR3/1 シルト～中砂(炭化物を多く含む)
8. 黄灰色2.5Y4/1 中礫混じり細砂～中砂



1. 黒褐色2.5Y3/1 細砂混じりシルト
2. 黄灰色2.5Y4/1 細砂混じりシルト
3. 黒褐色2.5Y3/1 粗砂混じり細砂
4. 黒褐色2.5Y3/1 中砂～粗砂混じり極細砂
5. 暗灰黄色2.5Y5/1 シルト
6. 黒褐色2.5Y3/1 中砂～粗砂混じりシルト
7. オリーブ灰色5Y3/2 極細砂
8. 黒色10YR7/1 細砂混じりシルト
9. 黒色2.5Y2/1 粗砂混じりシルト
10. 黒色5Y2/1 シルト
11. 黒褐色2.5Y3/1 極粗砂混じりシルト
12. 黄灰色2.5Y4/1 極粗砂混じりシルト
13. 黒色7.5Y2/1 シルト
14. 黒褐色2.5Y3/1 中砂～粗砂混じり極粗砂
15. オリーブ黒色5Y3/1 シルト

図262 19区土坑 平・断面図(4)

2193土坑 (図209・262・267、図版39・118)

中央部やや東寄りに位置する。西側で2125土坑を切っている。平面形は、不整楕円形を呈しており、検出面で長径約2.0m、短径約1.8m、深さ約0.5mを測る。埋土は、かなり細分化されるが、おおむね4層に分けられる。1層(土層図2層)は黄褐色極細砂が主体、2層(土層図3・4層)は暗灰黄色シルトと黒褐色シルトで炭化物を含む。3層(土層図6～9層)は、黒褐色系シルトが主体で粘性が強く、炭化物を含む。4層(土層図10・11層)は、灰黄褐色細砂と灰オリーブシルトで、偽礫を含む。

石器は、敲き石1点、石鏃3(未成品1)点、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片13点、剥片31点、石核4点、チップ192点が出土している。敲き石は砂岩製で、平面に敲打痕がある。1116は、円基式の基部を浅く削ったような形状の凹基式石鏃である。

2438土坑 (図209・270)

中央部西寄りの南端部に位置する。2430土坑の北西に隣接している。不整楕円形を呈しており、長径約1.2m、短径約0.6m、深さ約15cmを測る。埋土は、黒色粗砂混じりシルトである。

石器は、石庖丁が1点のみ出土している。1149は体部破片で、刃部は裏面が剥落して詳細不明、石材は結晶片岩である。

2119土坑 (図209・260・265・267、図版121)

中央部北端部に位置する。南側で2192土坑を切っている。北側は調査区外に広がる。平面形は楕円形を呈しているものと考えられる。検出面で、長軸約2.0m、短軸約1.2m、深さ0.5mを測る。埋土は、おおむね6層に分けられる。1層(土層図1層)は黒褐色細砂～シルト、2層(土層図2層)は褐灰色中砂混じり細砂～シルト、3層(土層図3層)は黒褐色中礫混じり中砂～細砂である。4層(土層図4～6層)は黒褐色中砂～細砂が主体、5層(土層図7層)は黒色細礫混じり中砂で機能時に形成された層である。6層(土層図11層)は、灰色粗砂～中砂で上面に偽礫を含む。

1069は甕で、口縁端部が短く立ち上がり、内面に横ハケを施す。口頸部外面にススが付着する。紀伊型甕で、結晶片岩を含む。1070は広口壺の口縁で、外傾接合。1071は底部で、畿内第I様式の可能性がある。

石器では、搬入された石材である、結晶片岩と紅簾石石英片岩各1点、石鏃3(未成品1)点、石錐2点、中型尖頭器未成品1点、不明未成品?1点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片28点、剥片55点、石核2点、チップ248点が出土している。結晶片岩、紅簾石石英片岩は、片面のみ研磨痕がみられるが、用途は不明である。1117は棒状の石錐であり、錐部先端は欠損している。

2192土坑 (図209・260・265・267・270、図版127)

中央部北端部に位置する。東側を2119土坑に切られている。平面形は楕円形を呈しているものと考えられる。検出面で、長軸約1.2m、短軸約0.7m、深さ0.5mを測る。埋土は、黒褐色シルトが主体で、上部に炭化物を多く含む。

1077は甕の底部で、焼成前の一孔を穿つ。生駒山西麓産の胎土で、粗粒の角閃石を多く含む。1078は、口縁部がラッパ状に外反する長頸広口壺で、剥離が著しい。この他、簾状文を施した土器片が出土している。

石器では、石庖丁1点、敲き石2点、石鏃3(未成品1)点、石錐2点、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片11点、剥片33点、石核1点、チップ123点が出土している。1148は、端部が一部欠損するが、長方形の片刃の石庖丁である。紐孔の付近には、穿孔前か不明だが敲打痕跡

を残す。紐孔の一つは、下部に2ヶ所の穿孔途上の痕跡が残る。端部には、1ヶ所に紐孔の痕跡が小さく残る。刃部は、両面側へ剥離しているが、刃部を再生させている途中のものかと思われる。石材は、緑色片岩である。敲き石は、石材がチャート、石英斑岩で、敲打痕がある。石鏃は、1118が凹基式で、その両側辺には鋸歯状剥離がみられる。他に平基式1点、尖基式基部と思われる未成品1点がある。

2420土坑 (図209・265)

中央部やや西寄りに位置する。掘立柱建物16の北西側に隣接する。平面形は不整楕円形を呈しており、長軸約2.3m、短軸約0.9m、深さ約20cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂混じり細砂質シルトで、下部に炭化物を多く含む。

1081は、甕の小片である。

石器では、石鏃未成品1点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片1点、剥片1点が出土している。

2415土坑 (図209・265・267、図版118)

中央部やや西寄りに位置する。掘立柱建物16の中央部に位置しており、ピットとの重複はないが、検出面の違いから、掘立柱建物16より新しい。さらに、2420土坑の南東、竪穴住居23の西側にあたる。平面形は楕円形を呈しており、長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約25cmを測る。埋土は、黒褐色中砂～細砂混じりシルトで、下部に炭化物を多く含む。

1079は倒鐘形の甕で、体部外面をヘラミガキ調整する。

石器では、石鏃3点、二次加工のある剥片3点が出土している。1101は円基式、1102は、平基式中央基部が少し下方に突起した形態をなす石鏃である。1102は、厚みがあるため、未成品の段階で放棄されたものか。

2421土坑 (図209・265)

中央部北端部に位置する。平面形は不整楕円形を呈しており、検出面で長軸約2.0m、短軸約1.1m、深さ約20cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂混じり細砂質シルトで、下部に炭化物や偽礫を多く含む。

1080は、裾部が突出する甕の底部である。外面にススが付着する。

石器では、二次加工のある剥片1点、剥片3点、石核1点が出土している。

2123土坑 (図209・262・265・269・270、図版119・121～123・127)

東半部の中央部北東側に位置する。掘立柱建物6の北東側にあり、掘立柱建物7との中間にあたる。平面形は、不整円形を呈しており、径1.9m前後、深さ約0.5mである。埋土は、かなり細分化されるが、おおむね4層に分けられる。1層(土層図1・2層)は、黒褐色細砂混じりシルトで、下部(土層図2層)は黄灰色細砂混じりシルトである。2層(土層図3～11層)は、黒褐色粗砂混じり細砂が主体で、暗灰黄色シルトを含んでおり、下部(土層図6～11層)は黒色細砂混じりシルトで炭化物を含む。3層(土層図13・14層)は黒色シルトで、機能時に形成された層である。4層(土層図15層)は、オリーブ黒色シルトで偽礫を含む。

1072・1073は紀伊型甕で、結晶片岩を含む。1074は大型の甕で、口縁が折れ曲がるように下がる。外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヘラミガキ調整する。1075は甕蓋である。端部を上下に拡張する。内面にススが付着する。1076は小型の鉢で、口縁部に外に折り曲げ、端部の上下に刻み目を施す。また、折り曲げた内面には細かく櫛状工具で外側へ向かって規則的になでる。体部は丸みを持ち、粗い縦ハケ調整を施す。焼成は良好で堅く締まる。搬入品の可能性がある。他に、簾状文を施した土器片が出土している。

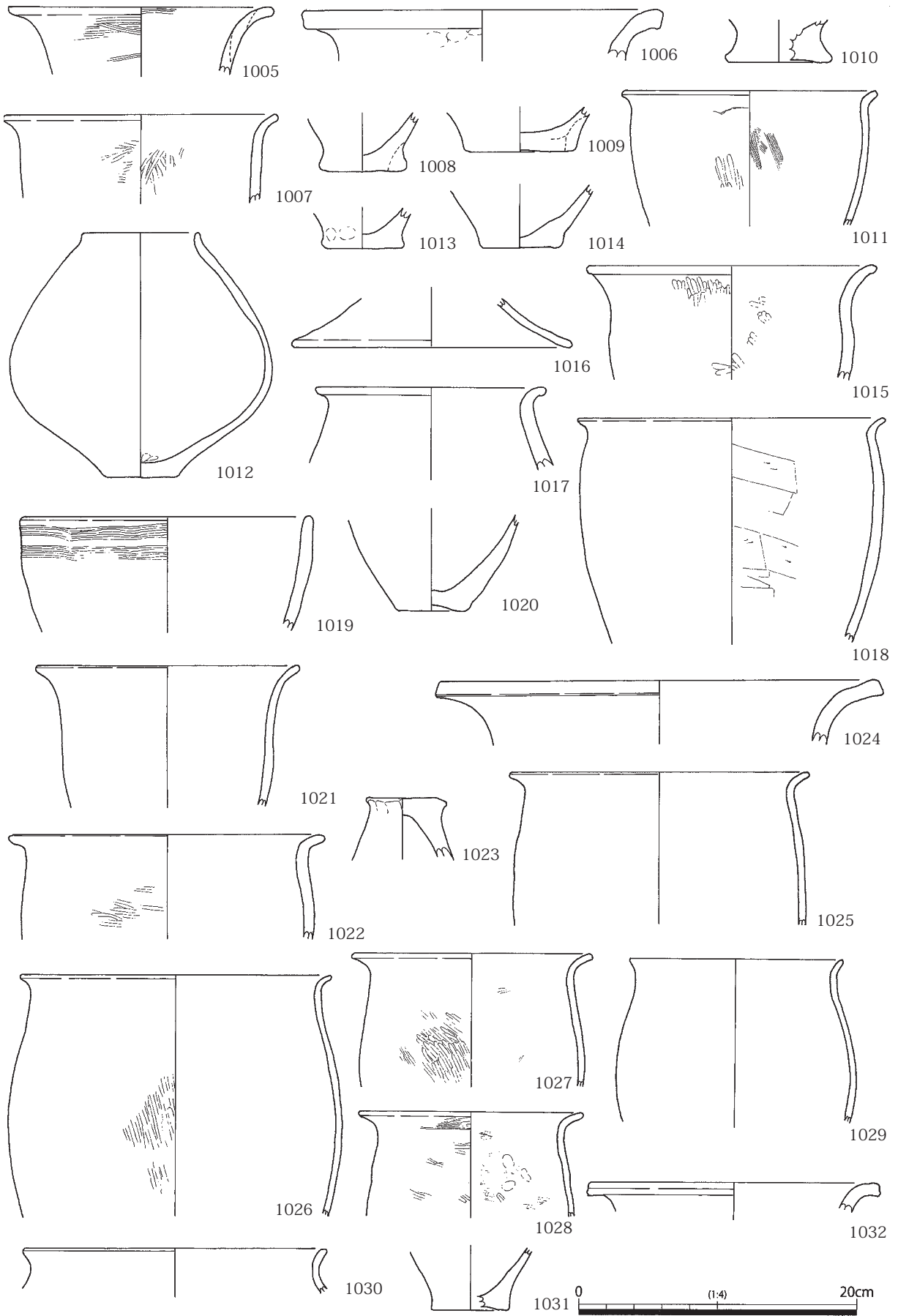


图263 19区土坑 出土遗物 (弥生中期土器 1)

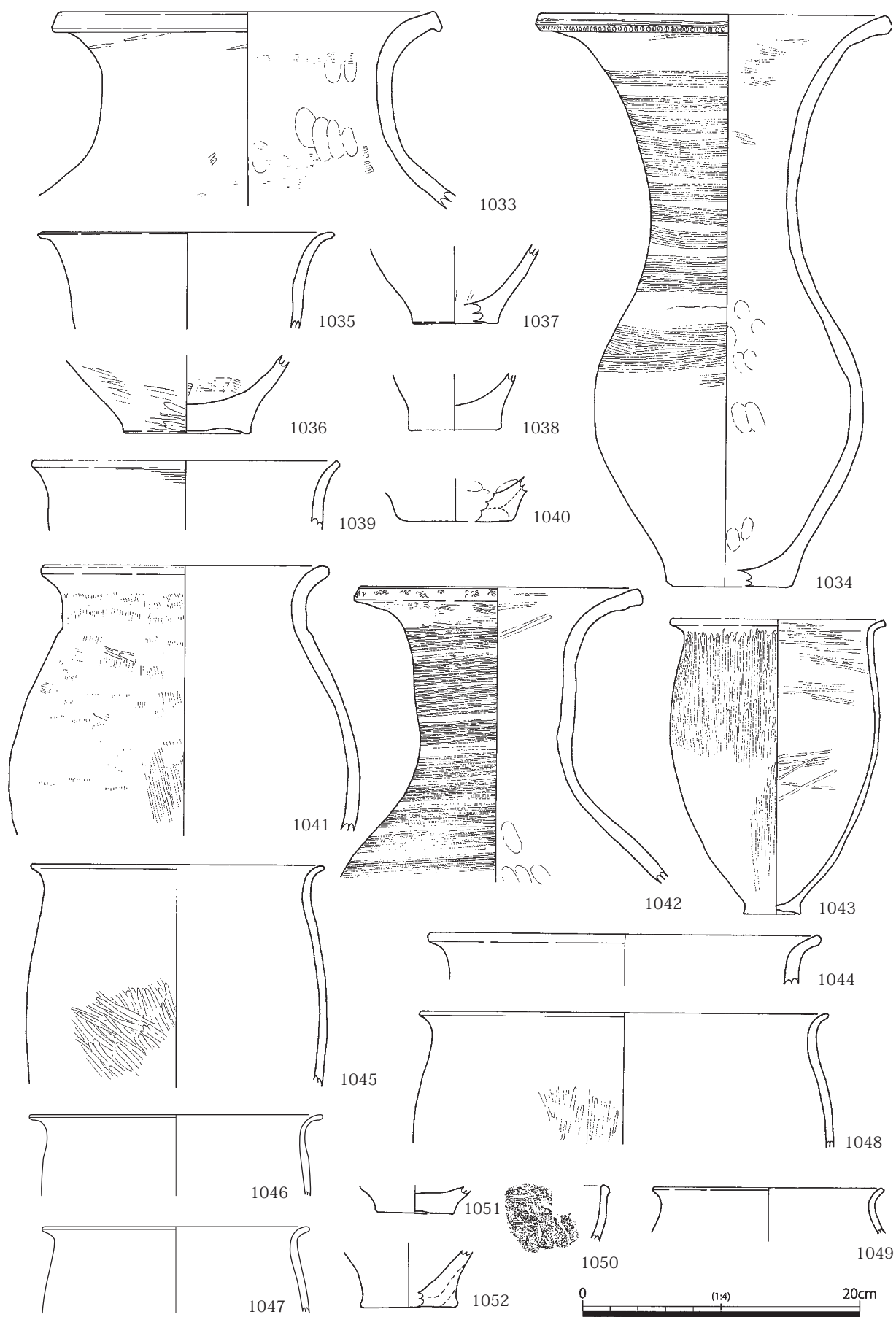


图264 19区土坑 出土遗物（弥生中期土器2）

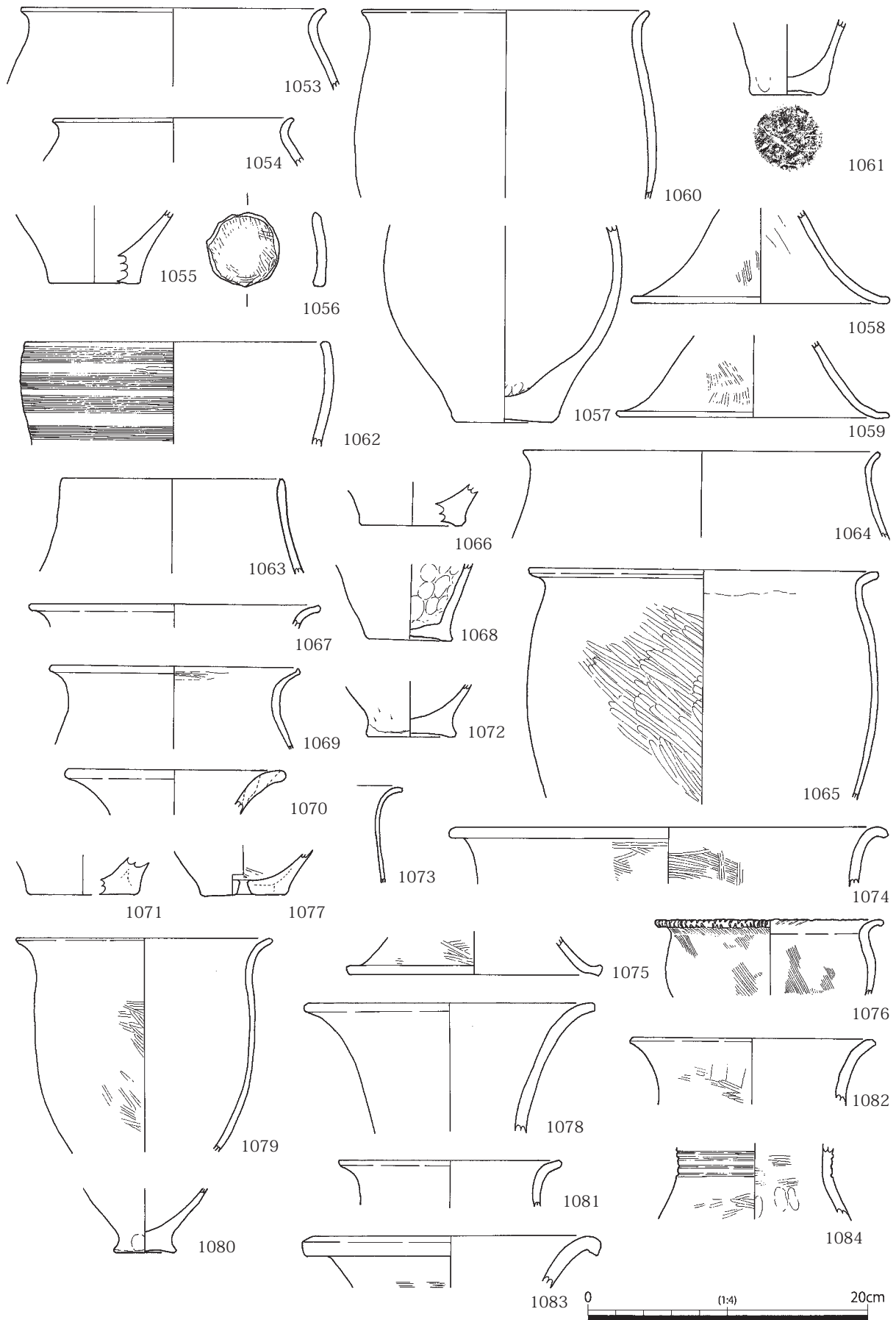


图265 19区土坑 出土遗物 (弥生中期土器3)

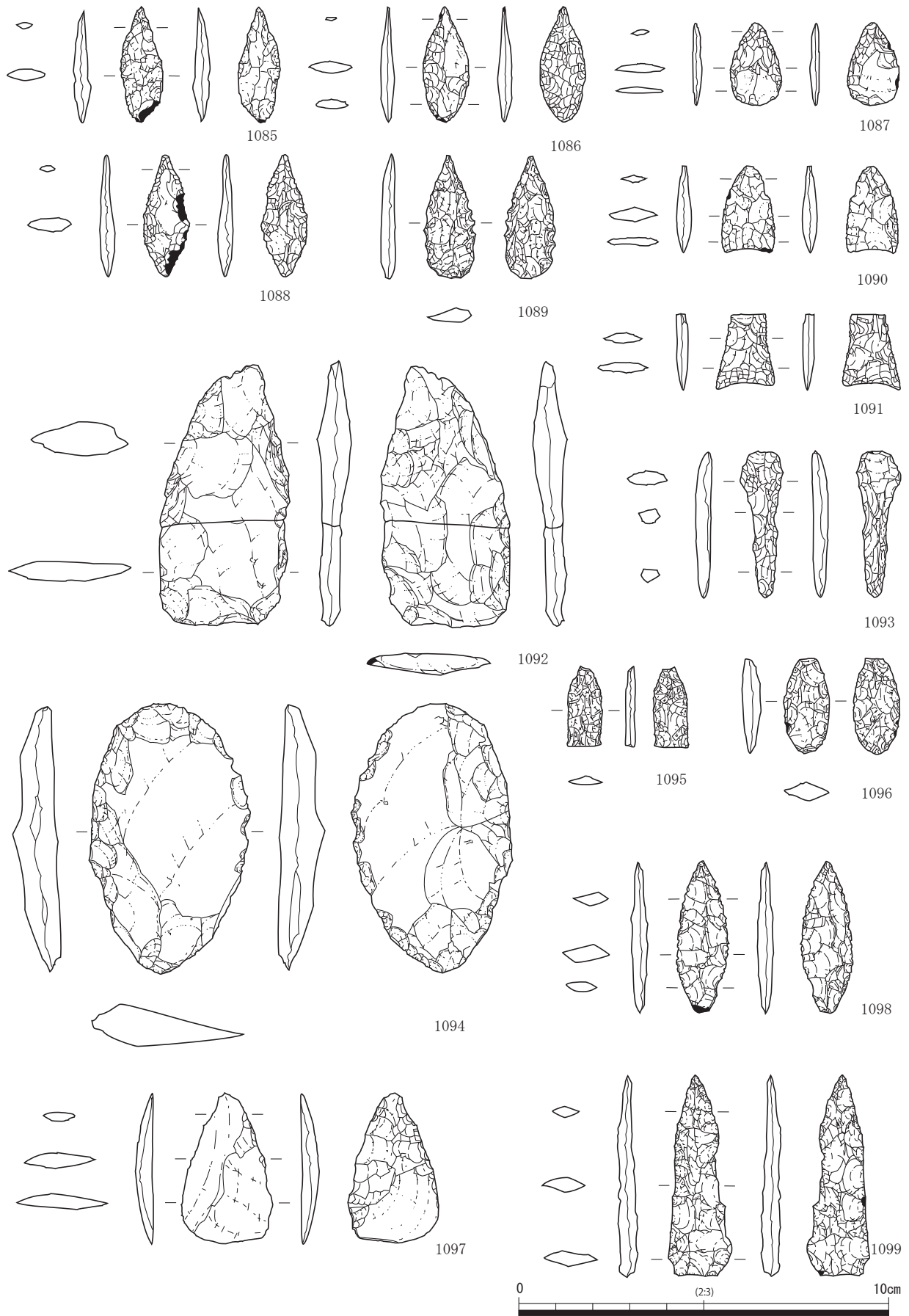


图266 19区土坑 出土遗物 (打製石器 1)

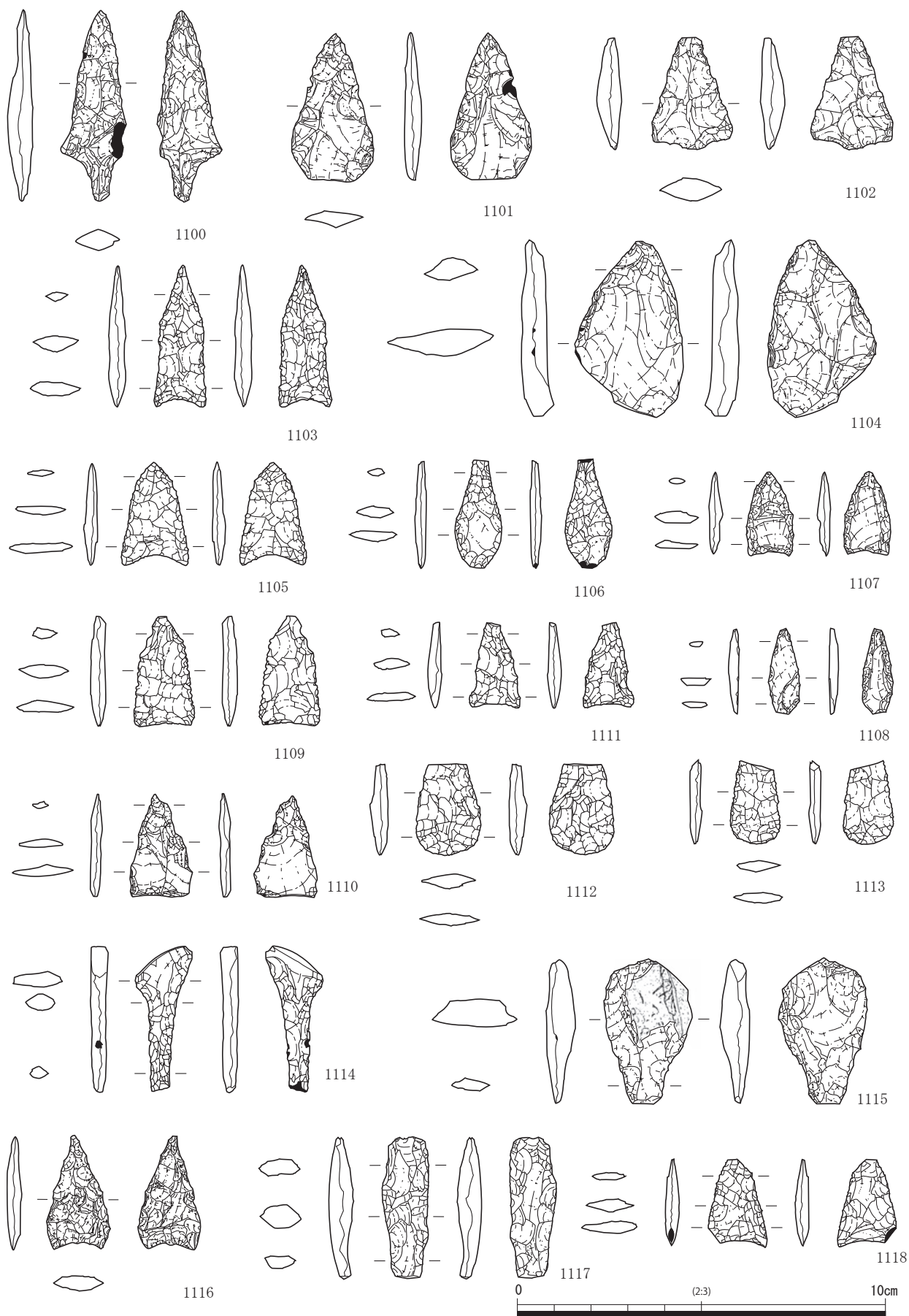


图267 19区土坑 出土遗物 (打製石器 2)

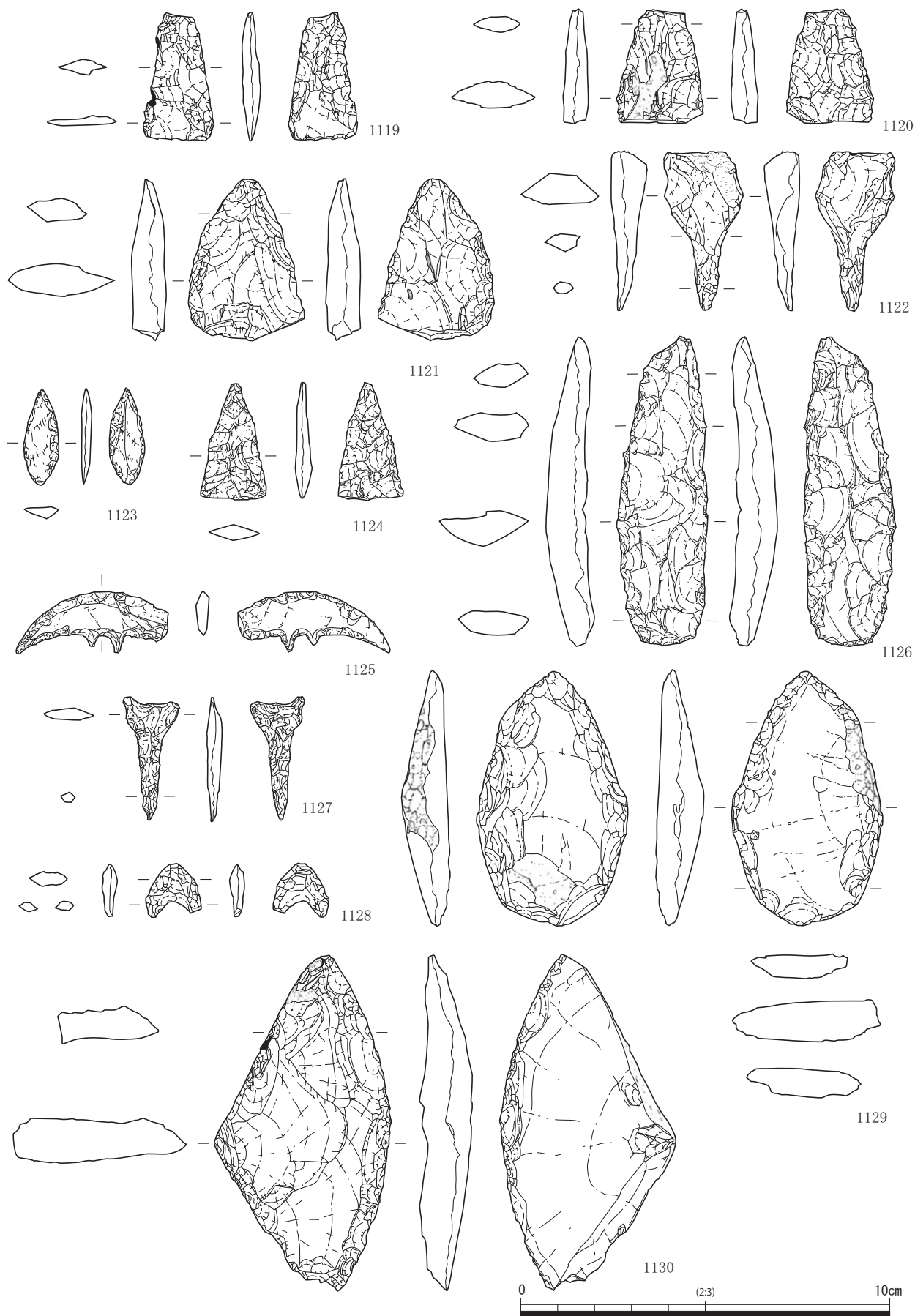


图268 19区土坑 出土遺物 (打製石器 3)

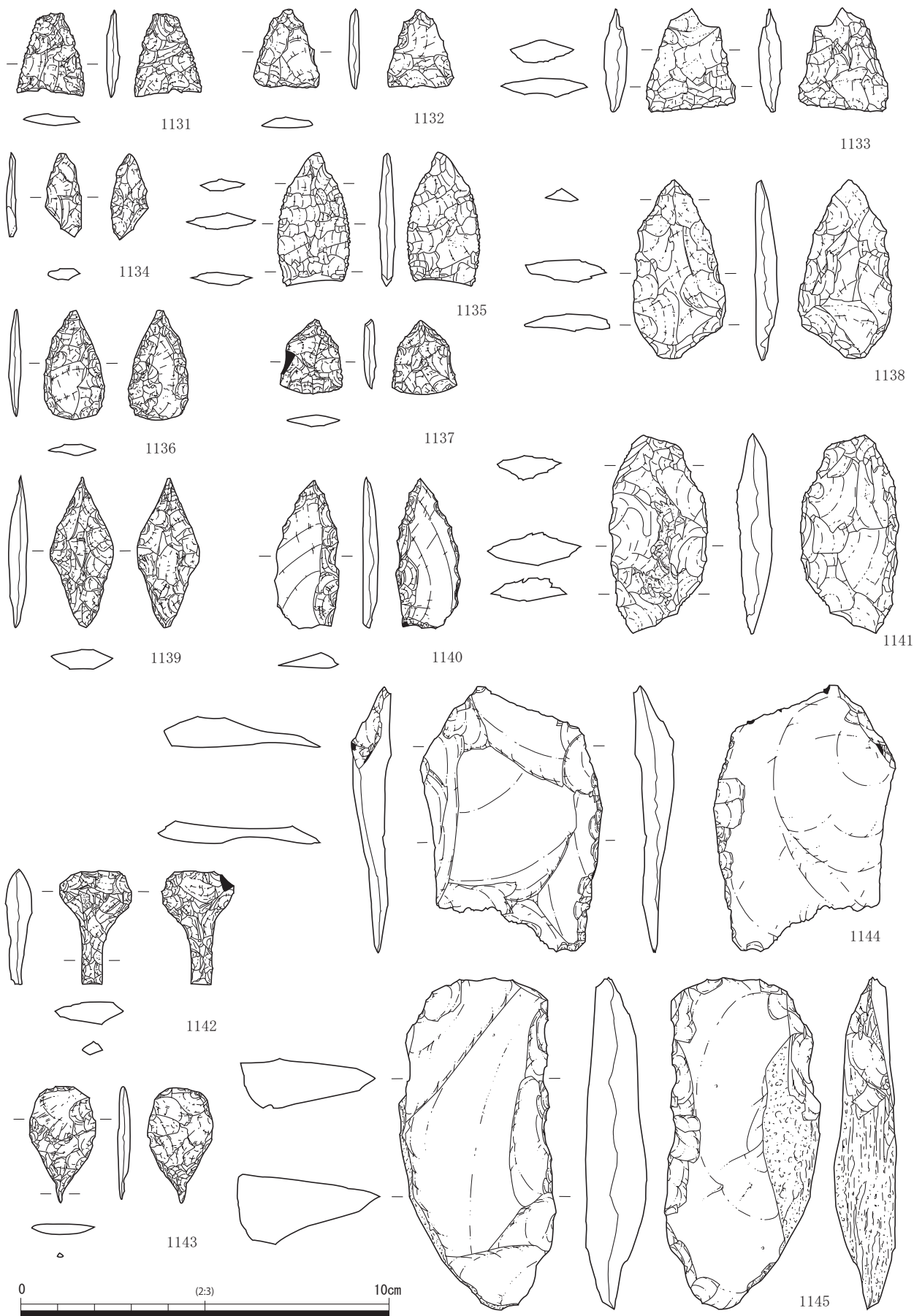


图269 19区土坑 出土遗物 (打製石器4)

石器では、石庖丁1点、敲き石1点、搬入された石英1点、石鏃20（未成品10）点、石鏃か石錐未成品1点、石錐6（未成品2）点、中型尖頭器未成品1点、石槍未成品1点、中型尖頭器か石槍未成品2点、スクレイパー 11点、二次加工のある剥片102点、剥片86点、石核5点、チップ2506点が出土している。剥片の中にはポイントフレイクと思われるものを1点含む。1146の石庖丁は、両刃ぎみ片刃の杏仁形態である。長軸方向に緩く湾曲している。紐孔が1つ僅かに残る。刃面のある平面左側は、研

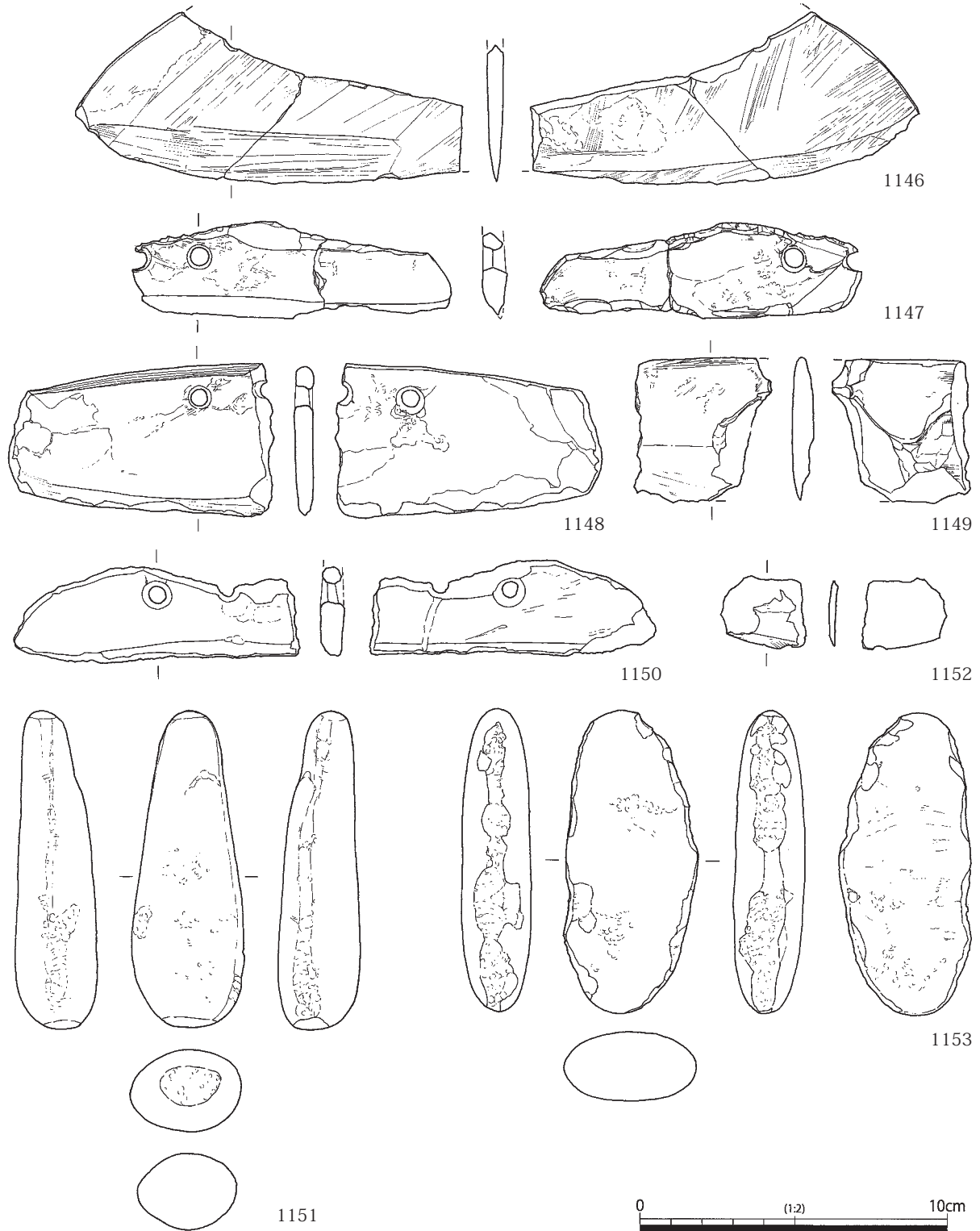


図270 19区土坑 出土遺物（磨製石器1）

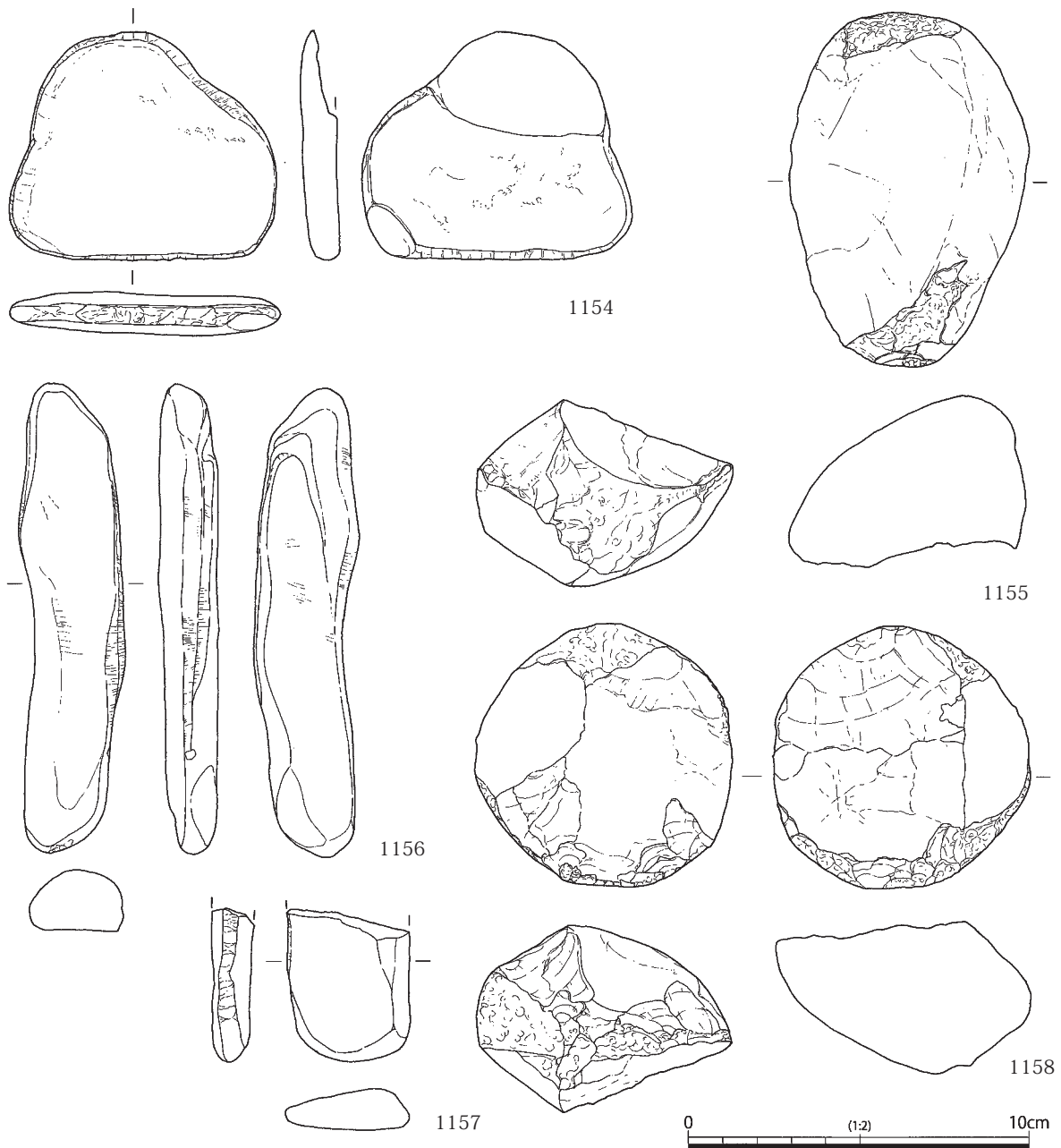


図271 19区土坑 出土遺物（磨製石器2）

磨痕が薄れており、使用により摩滅したと考えられる。石材は、結晶片岩である。敲き石は砂岩製で、縁に線状打撃痕がある。

1131は、平基式の基部が極僅かに窪んだ形態で、1132・1133は平基式の石鏃である。1132・1133は作りが粗く、1133は厚みが残るため未成品と思われる。1137は、平基式石鏃の基部が僅かに外湾した形で、五角形状をなす。1136は円基式、1139は尖基式の石鏃である。1140は両面に大きく大剥離面を残し、打点側の辺は両面側へ剥離し、剥片末端側は腹面側に剥離している。平面形から円基式の未成品かと思われるが、小型のスクレイパーの可能性も考えられる。1134・1135は、基部が欠損している。1138は、石鏃より一回り大きく周縁からの剥離も粗いため、石鏃未成品と思われる。1131・1135の両側辺、および1131の基部には鋸歯状剥離がみられる。1141は、背面中央に自然面を残し、周縁から両面側へ剥離を施しており、中型尖頭器未成品と思われるものであるが、周縁のエッジ

が鋭いため、スクレイパーの可能性も考えられる。1142・1143は石錐である。1143は、頭部が大きく錐部が細く小さい。1142は略左右対称形をなし、頭部と錐部の区別が明確な錐部の長いものである。1144・1145は、剥片末端側に両面側へ剥離して刃部を形成したスクレイパーである。1145は、背部に自然面を留める。1144は金山産の可能性はある。

2131土坑 (図209・260・264、図版39・97)

東端部に位置する。掘立柱建物6の南西に隣接している。平面形はほぼ楕円形を呈しており、長径約2.2m、短径約1.2m、深さ約40cmを測る。埋土は、おおむね3層に分かれており、上層(土層図1層)は暗褐色シルト、中層(土層図2・3層)は黒褐色シルトで炭化物が混じる。下層(土層図4・5層)は黒色シルトで、ラミナが認められる水成層である。

弥生土器がまとまって出土した。1039は甕の小片で、口縁が僅かに外湾する。1040は、底部である。1041は、短頸の広口壺である。長円形の体部に短く直立する頸部を経て、口縁部は短く外反する。体部から頸部に縦の粗なハケ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。1042は、長頸広口壺である。頸部は筒状に立ち上がる。体部上半から頸部に櫛描直線文(14条/1.7cm)を巡らし、文様間にヘラミガキを巡らす。口縁端部は面を持ち、櫛描波状文を巡らす。1043は、完形の甕である。やや上げ底で、外面は縦ヘラミガキ、内面は横ヘラミガキ調整する。体部下半は、火熱により剥離する。1040・1042・1043は、生駒山西麓産の胎土を持ち、1040は粗粒の角閃石を含む。これらの土器は、畿内第Ⅱ様式でも新しい段階に相当する。

石器では、中型尖頭器未成品1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片10点、剥片32点、チップ121点が出土している。廃棄土坑と称された遺構であるが、他の土坑出土遺物と比較しても、取り立てて特徴的なものは認められない。

4. 溝・流路

4308溝 (図209・272)

南西端部に位置する。幅0.3~0.4m、深さ5~7cmの浅い溝である。新しい段階の竪穴住居18の壁溝

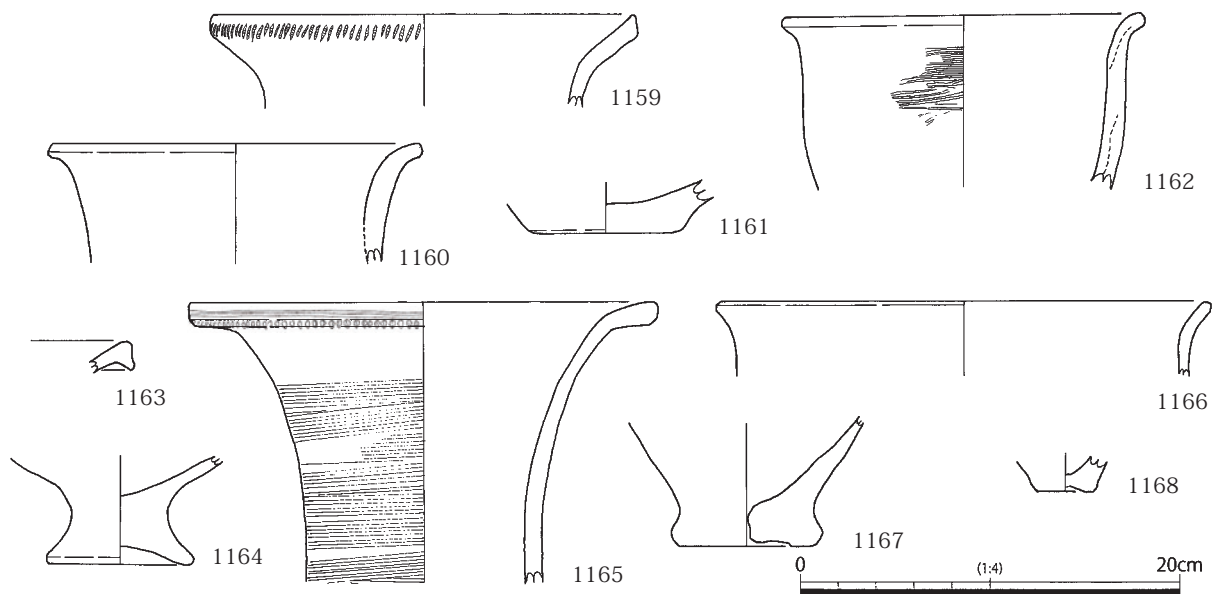


図272 19区溝 出土遺物(土器)

である4312溝から60～85cm離れて、南側を取り巻くように略円形に巡る。当初、竪穴住居18に重なる大型の竪穴住居の壁溝を想定したが、対応するピットが全く認められないことから否定される。両者の関係は不明である。4314・4301土坑を切っており、4311土坑に切られる。炭化物、弥生土器片を多く含む。

1160は壺の口縁、1161は壺の底部である。他に、4307土坑出土の長頸広口壺(1034)と接合する破片がある。

石器では、石槍未成品? 1点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片1点、剥片6点、石核1点、チップ3点が出土している。

4223溝 (図209・272)

西半部中央の南端部に位置する。南向きに円弧を描く溝で、東端は2410流路に流れ込む。延長8.5m以上、幅1.5～2.5m、深さ0.13m～0.45mを測り、断面U字形を呈す。西側は調査区外に続く。埋土下部には、暗灰黄色シルト質粘土が認められ、東部は滞水状態にあったと考えられる。第7e層上面で検出されており、埋土上部には第7d層が堆積する。

1159は、口縁端部に細かい刻目を施す広口壺の小片である。時期的に、基盤である第7e層からの混入の可能性はある。

2205溝 (図209・272)

西半部西側に位置しており、南東から北西方向にほぼまっすぐに延びる。竪穴住居17を切っている。竪穴住居19の壁溝から派生しているものと考えられ、排水溝と推測される。ただ、竪穴住居19のどの時期に伴うものであるかは、判別できなかった。検出面で幅約40cm、深さ10cm前後である。

弥生土器が出土した。1162は、小型の鉢である。摩滅が多いが、外面横ハケが残る。内傾接合である。石器では、二次加工のある剥片8点、剥片4点が出土している。

南西端部の第7e層上面において、周溝の形状を示す溝状の落ち込みを検出した。18区で方形周溝墓が検出されていることから、同様に方形周溝墓が存在するものと考え、調査時に方形周溝墓の周溝として掘削をおこなった。ただ、精査の結果、周溝とした溝に囲まれた部分で明確な盛土が確認されなかったことや、溝の底部から下層の遺構が現われたことなどから、方形周溝墓の可能性は低いものと考えられる。そのため、ここでは、周溝とした溝状遺構を溝や落ち込みとして述べることにする。周溝とした溝内やこの溝に囲まれた高まり部分からは、多くの弥生土器や石器が出土した。いずれも第7e層内の包含層出土の可能性も考えられるが、遺物の出土位置を、溝内と高まり部分に分けて報告する。

2201溝 (図209・272～274、図版120・121・127)

西端部に位置する。南北方向約3.5m、東西方向約1.5mの方形の高まりのまわりを巡るかたちで、検出されたものである。単独で完結するものではなく、東側の溝は二股に分かれ、一方は南下し、一方はさらに東に延び、新たな方形の高まりを残してこれを巡るかたちで、南下する。北側の溝は、4274土坑に切られている。

北側の溝は、検出面で幅2.9m前後、深さ約40cmである。東側は、検出面で幅約2.5m、深さ約50cmで、規模がやや大きくなる。埋土の上層は、第7d層の水成堆積層が落ち込む。溝の機能時の堆積層は、黒褐色細粒砂質シルトが主体で、炭化物や土器を含む。

1163は、高まり部分から出土したもので、壺の口縁部である。端部は下に突出し、端面に波状文ら

しい痕跡が認められる。生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。

石器では、石庖丁2点、石鏃4（未成品2）点、石錐2（未成品1）点、中型尖頭器未成品3点、石槍未成品1点、不明未成品？2点、スクレイパー6点、二次加工のある剥片28点、楔形石器1点、剥片25点、石核7点、チップ8点が出土している。

1170は、溝内から出土した石庖丁の一端破片で、片刃である。両面ともに剥落し、詳細は不明である。1171は、高まり部分から出土した。厚さ1.5cmの石庖丁の剥離成形段階の半分が残存し、杏仁形態の未成品かと思われる。1170・1171ともに、石材は結晶片岩である。他に図化していないが、流紋岩と思われる石庖丁細片が出土している。これらのことから、石庖丁の素材をどのような形で搬入したかは不明であるが、少なくとも三宅西遺跡内で、剥離成形段階以降の石庖丁の仕上げ加工をした可能性が高いといえる。

1172・1176・1177は溝内から、1173～1175は、高まり部分から出土したものである。1172は、平基式石鏃の基部が極浅く窪んだ形態であり、両側辺に鋸歯状剥離がみられる。1173は平基式の、先端部と基部片側が欠損している。1174は、円基式石鏃である。1175・1176は、頭部と錐部の境が不明瞭な石錐で、錐部には摩滅が見られる。1176は、頭部と錐部の境が不明瞭な石錐であり、錐部先端のエッジは僅かに摩滅している。1177は、頭部と錐部の境がやや明瞭な石錐で、錐部先端は欠損している。

2202溝（図209・272・274、図版120）

南西端部に位置する。南北方向約1.2m、東西方向約1.8mの方形の高まりの北東部を巡るかたちで、検出されたものである。単独で完結するものではなく、東側の溝は北からの2201溝がさらに南に延びている。2201溝より肩部はゆるやかである。用途は不明である。

北側の溝は、検出面で幅2.7m前後、深さ約20cmである。東側は、検出面で幅約3.2m、深さ約20cmで、規模がやや大きくなる。埋土の上層は、第7d層の水成堆積層が落ち込む。溝の機能時の堆積層は、黒褐色細粒砂質シルトが主体で、炭化物や土器を含む。

1164は、溝内から出土したもので、鉢の底部である。生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を含む。

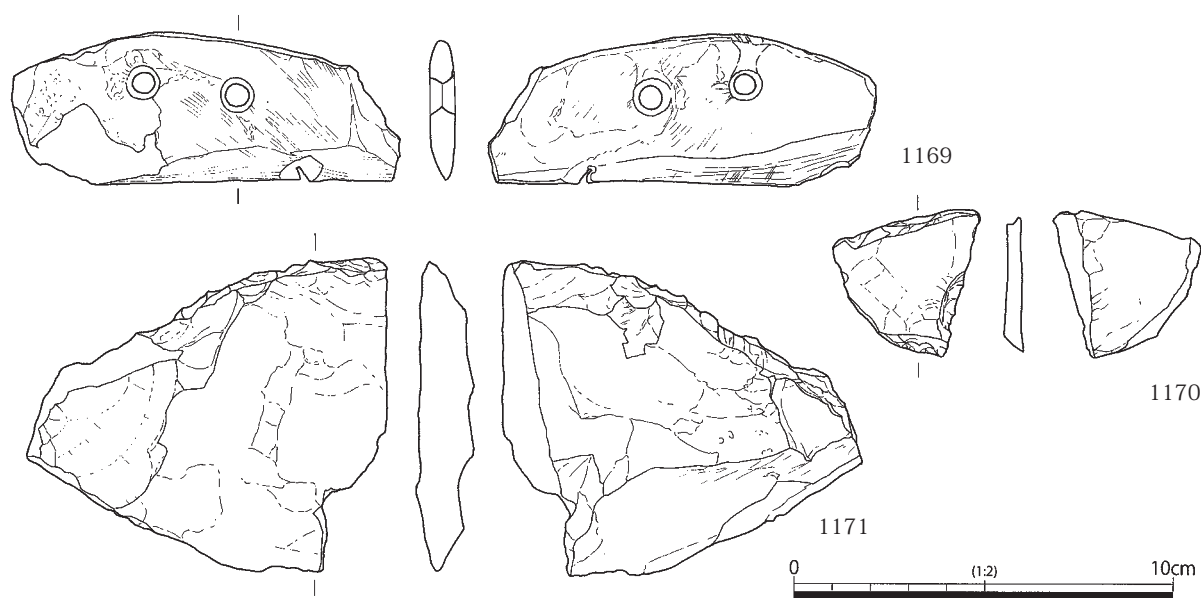


図273 19区溝 出土遺物（磨製石器）

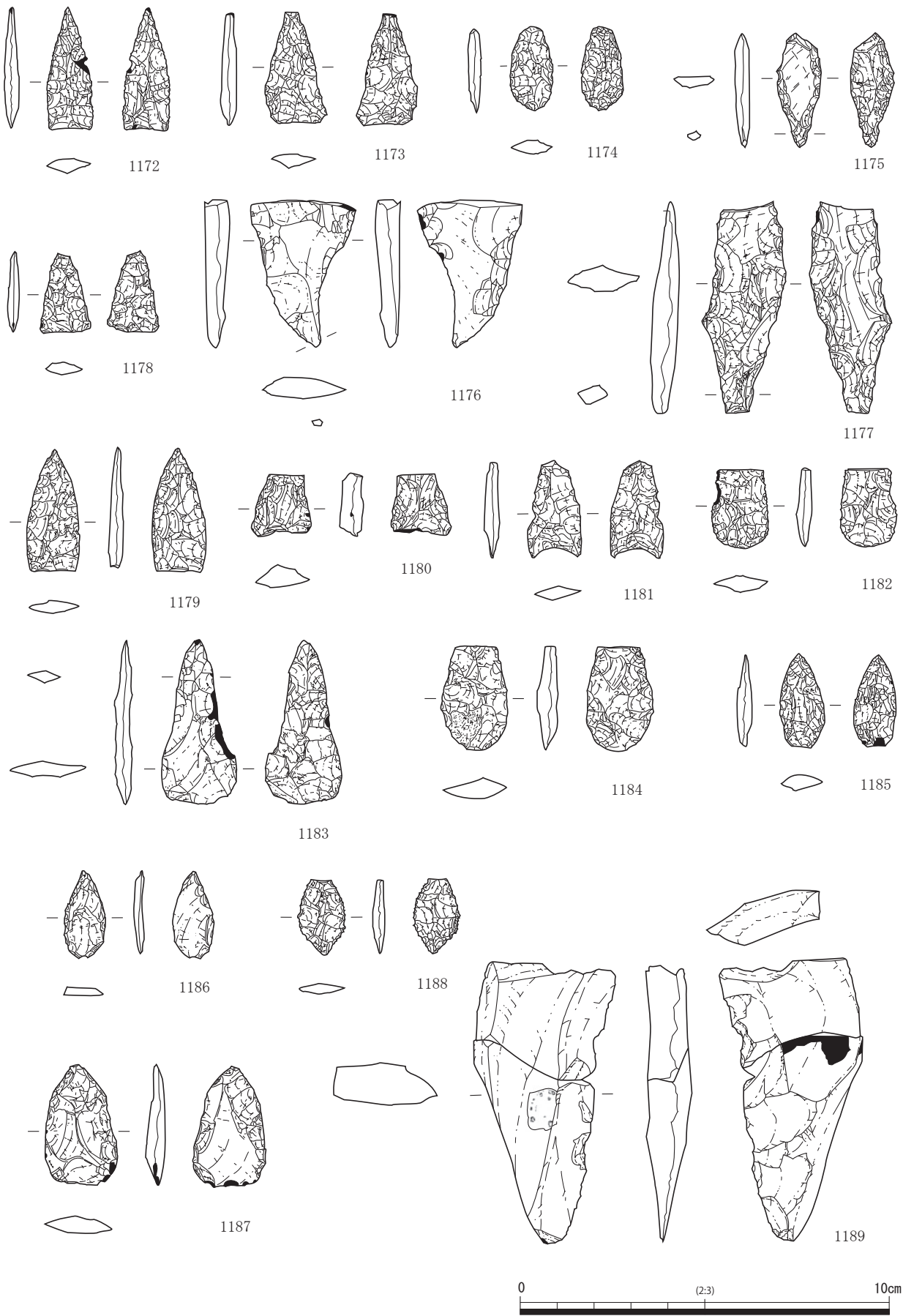


图274 19区沟出土遗物 (打製石器)

石器では、石鏃3（未成品2）点、石錐1点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片39点、剥片12点、石核3点、チップ5点が出土している。剥片の中には、ポイントフレイクを1点含む。1178は、溝内から出土した平基式石鏃で、先端部が欠損している。

2203溝（図209・272～274、図版120・123）

南西端部に位置する。溝が巡る高まりの南側は調査区境界のためはっきりしなかったが、07-1調査で、西側の溝の続きと東に折れた南側の溝に相当する場所に、灰黄色シルトが溝状に極浅く堆積していたものの、東側の溝へは続かないことから、溝状に巡る可能性は少ない。

当初は、南北方向約4.0m、東西方向約6.0mの方形の高まりの北側と東側を巡るかたちで、検出されたものである。単独で完結するものではなく、北側の溝は西からの2201溝がさらに東に延びている。2201溝より肩部はゆるやかである。

北側の溝は、検出面で幅1.6m前後、深さ約30cmである。東側は、検出面で幅約1.5m、深さ約25cmで、溝の規模がやや小さくなる。機能時の堆積層は、黒褐色細粒砂質シルトが主体で、炭化物や土器を含む。

1165・1167は溝内から、1166・1168は、高まり部分から出土したものである。1165は長頸広口壺で、口縁部が折れ曲がるように外反し、櫛描直線文（8条/13mm）を重ねながら施す。土坑4307出土の1034と同一個体の壺の口縁部破片が出土している。1166は、大型の甕の口縁部である。1167は底部で、中央に一孔を穿つ。剥離のため調整不明。1168は、かなり小型の甕の底部である。

※1165と1034は、同一個体であると考えられる。

石器では、石庖丁2点、敲き石1点、石鏃10（未成品8）点、石錐2（未成品1）点、中型尖頭器5（未成品4）点、石槍未成品1点、スクレイパー6点、二次加工のある剥片55点、楔形石器2点、剥片59点、石核3点、チップ25点が出土している。1169・1183・1189は溝内から、1179～1182・1184～1188は、高まり部分から出土したものである。1169は一端が欠損しているが、ほぼ完形に近く残存する泥質片岩製の石庖丁である。刃部稜線が刃線と平行でない点と、裏面の刃部稜線が端にむかって少し上がりぎみである点から、片刃で杏仁形態のものが、刃部研ぎなおしにより直線刃になったであろうと推定できる。裏面には、紐孔から背側へ伸びる紐擦れの痕跡がある。長軸方向に裏面側へ湾曲し、裏面左端寄り体部は、左上-右下方向に摩滅し窪んでいる。他に石庖丁剥片は2点出土しており、割り段階の未成品である。石材は、凝灰岩質片岩か。敲き石は、扁平な砂岩礫の両側面と平面に微かに敲打痕がある。

1180・1181は凹基式、1183は円基式、1188は尖基式石鏃である。1179は、基部が欠損している。1180・1183・1187は未成品である。1189は、剥片の腹面側の打点周辺を剥離して鋭い刃部を作り出したスクレイパーである。写真図版124-1301は、ポイントフレイクと思われる剥片である。

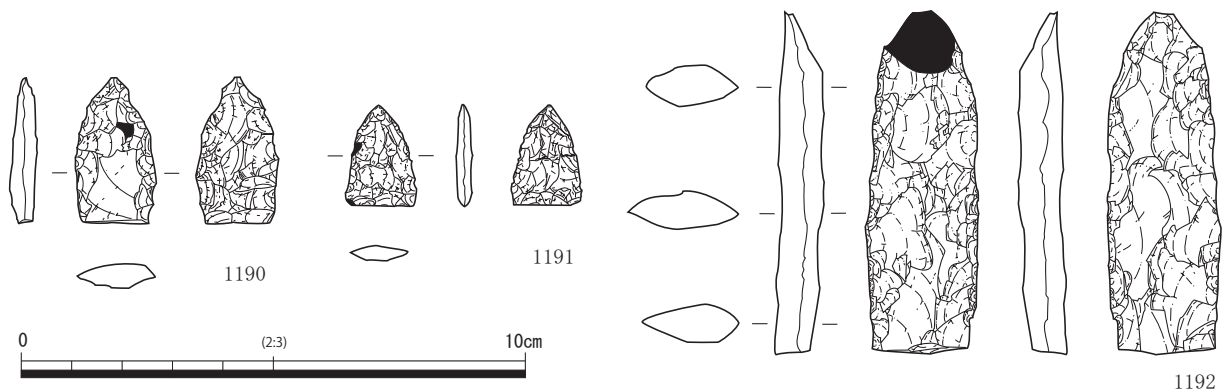


図275 2121・2410流路 出土遺物（打製石器）

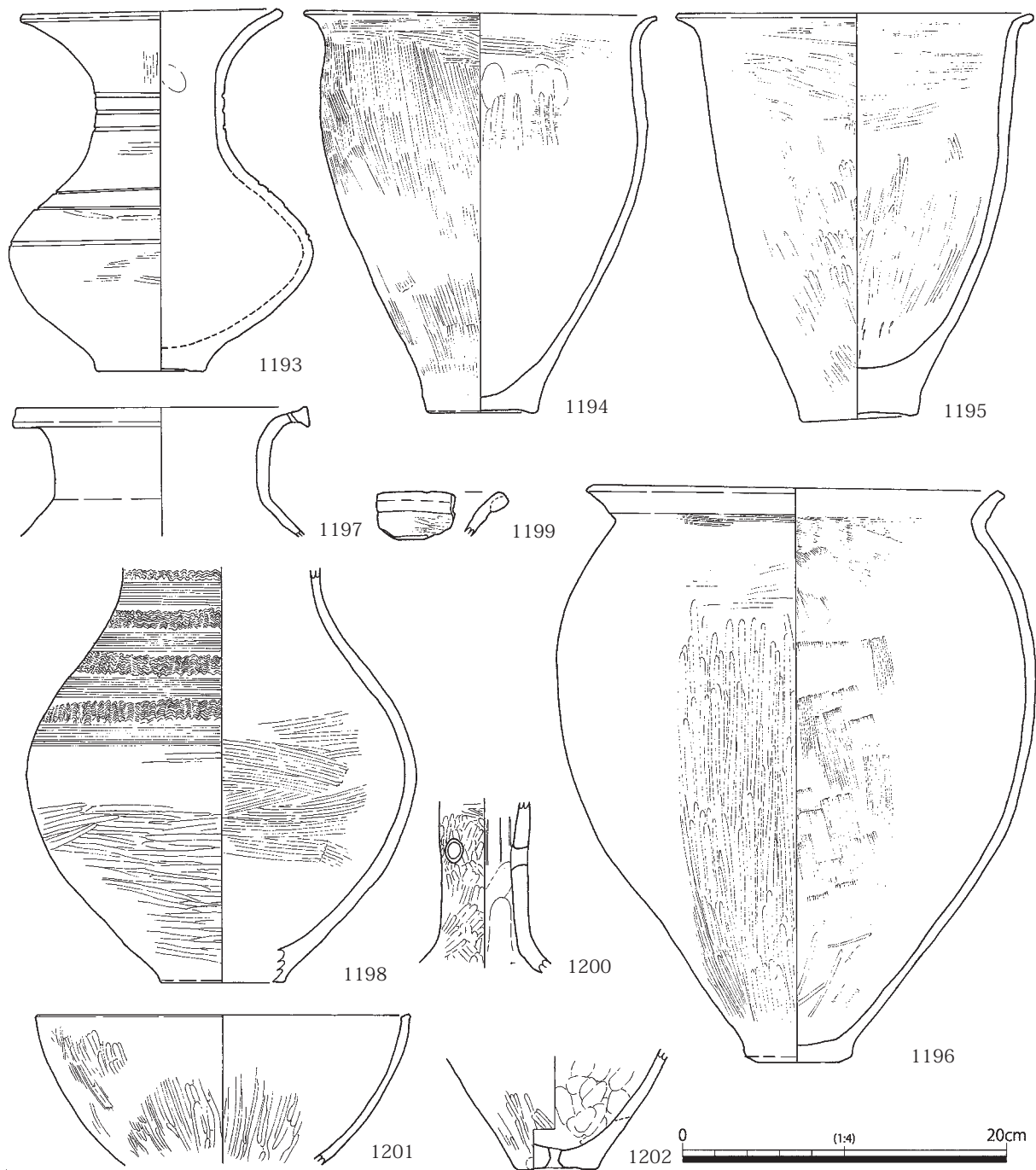


図276 2120・2121流路 出土遺物（土器）

2121(4219)流路（図209・275・276、図版99・100・120）

中央部南端部で検出された流路である。流路本体は、調査区外の南側を東西方向に流れているものと考えられ、その北肩の一部を検出している。第7 eiii層上面より切り込み、埋土上部に第7 ei・ii層がのることから、弥生中期前葉以前の所産と考えられる。検出面で、幅7.8m以上、深さ1.7m以上を測る。埋土は、流水堆積のため錯綜しているが、基本的には灰黄褐色極粒砂～細礫である。

遺物は、この流路を切って合流する2120流路と混在して取り上げたため、時期幅が認められる。1193は、畿内第Ⅰ様式新段階の広口壺である。丈高で頸部と体部上半に、やや間隔を置いた3条の沈線を施す。1194・1195は、畿内第Ⅱ様式の完形の甕である。1194は、体部外面を縦ハケ、口縁部を

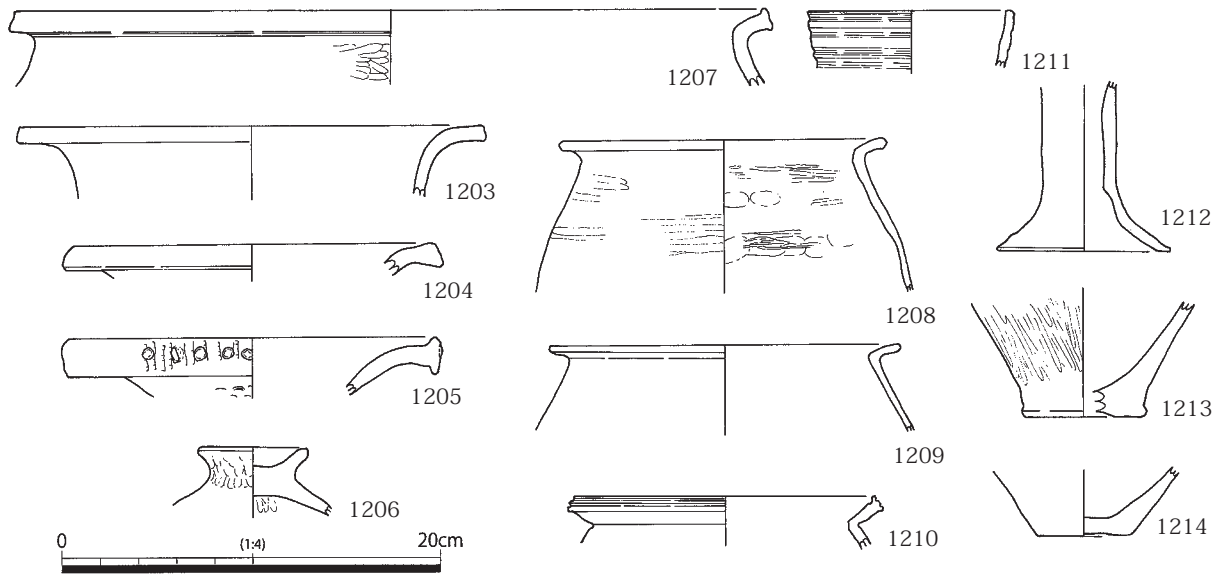


図277 2410(4220)流路 出土遺物 (土器)

横ハケする。生駒山西麓産の胎土で、粗粒の角閃石を含む。1195は、口縁が短く外反し、内外面とも弱くハケ調整する。底部が厚く、重量がある。1196は、畿内第IV様式の完形の甕で、口縁がく字形に外反し、体部は丸みを持つ。外面下半は縦ヘラミガキ、内面はハケ調整する。底部周縁は摩滅する。1199は小型の鉢で、口縁端部が折り返して扁平な玉縁状を呈することから朝鮮系無文土器と考えられるが、生駒山西麓産の胎土を持つ。1197は無文の広口壺で、頸部が短く直立し、端部が上下に拡張する。紐孔を有す。1198はやや長頸の広口壺で、櫛描直線文と波状文を交互に施す。1201は椀型の高杯の杯部で、端部は平坦である。ヘラミガキ調整する。以上3点は、畿内第III～IV様式である。1200は筒状の脚部を持つ高杯で、畿内第IV様式後半であろう。1202は底部穿孔する甕である。

石器では、石鏃1点、二次加工のある剥片1点が出土している。1190は、石鏃の基部欠損したものである。

2410(4220)流路 (図209・275・276、図版120・122)

東半部のほぼ中央を南北方向に流れる、自然流路である。11区の2010流路と一連のものであるが、11～19区間で古墳以降の流路と合流している。検出面で、幅9.0～11.5m、深さは2.0mを測り、底部は一部で確認したのみである。流路が埋没した後に第7d層が堆積している。埋土は流水堆積のため錯綜しているが、基本的には灰色極粒砂～細礫である。

11区では、縄文時代の遺物も出土しているが、ここでは弥生土器が出土している。

1211は、水差形土器の可能性のある小片で、凹線文を4条巡らす。1203～1205は、広口壺である。1203は無文、1205は口縁端部が上下に拡張し、簾状文を巡らした後、小さな円形浮文を貼り付ける。畿内第IV様式である。1207～1210は、甕である。1207は大型で、口縁端をつまみ上げ、外面ヘラミガキ調整する。1208・1209は、口縁端部が丸みを持ち、外面ヘラミガキ調整する河内形の甕である。生駒山西麓産の胎土で、粗粒の角閃石を含む。畿内第IV様式である。1210は、頸部はく字形に鋭く外反し、口縁端部をつまみ上げ、2条の凹線文を巡らす。1206は、頂部が窪む蓋である。1212は円筒状の高杯の脚部で、裾部は肥厚せず、刻み目の痕跡と考えられる列点文を施すことから、畿内第V様式初頭に比定される。生駒山西麓産の胎土を持つ。1213・1214は甕の底部である。他に、タタキ調整を施す畿内第V様式の甕の口縁部と底部が出土している。

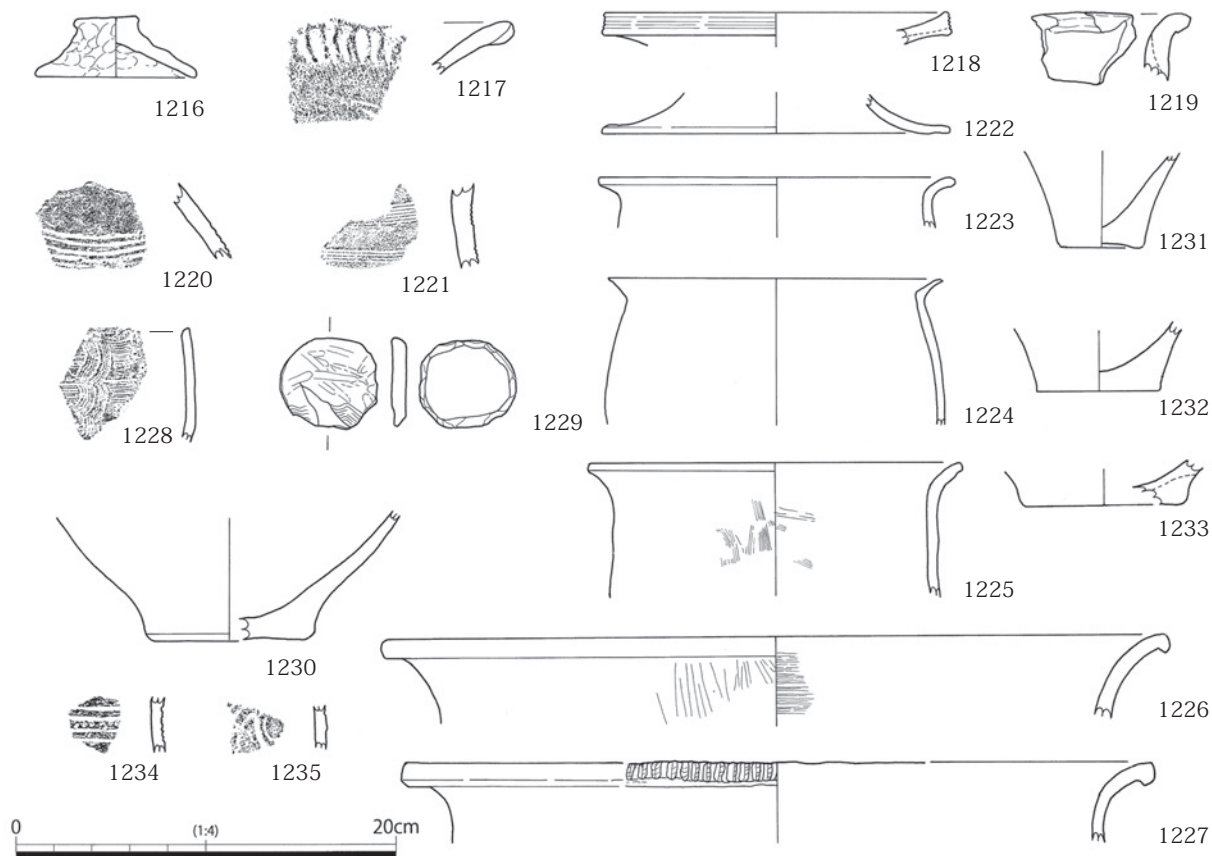


図278 19区第7d～9a層（弥生時代以前） 出土遺物（土器）

石器では、敲き石3点、石鏃4（未成品3）点、石錐1点、石槍1点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片27点、楔形石器1点、剥片21点、石核5点、チップ4点が出土している。敲き石は砂岩製のものが2点、花崗斑岩？が1点である。砂岩製のものは、1点が扁平な礫の両側辺に打撃痕を有し、もう1点は平面に打撃痕を有することから、台石の可能性もある。花崗斑岩？は敲打痕かと思われる痕跡を有する。1191は平基式石鏃であり、両側辺には鋸歯状剥離がみられる。1192は、中型尖頭器の先端および基部の欠損したものである。

第7e層出土遺物（図278～284、図版84・99・100・120・124～127・131）

第7e層出土の土器(1216～1234)のうち、1216・1217は第7ei層、1218・1220・1221・1224・1231～1233は第7eiii層から、1227は第7d～e層から出土している。

1216はほぼ完形のミニチュアの蓋で、頂部を除き指頭圧痕が顕著に残り、手捏ねで作られたものと思われる。1217は壺の口縁部で、下方にやや拡張した部分に線状の深い刻み目を施す。生駒山西麓産の胎土で粗粒の角閃石を多く含む。1218は壺の口縁で、拡張した端面に櫛描直線文（4条/0.8cm）を巡らす。1219は甕または鉢の上半部の小片で、残存箇所では上端を短く外へ折り曲げるように整形し、朝鮮系無文土器との関連を推測させる。1220は壺の体部で、5条以上の沈線を連ねている。畿内第I様式新段階である。1221は壺の頸部で、流麗な櫛描直線文（6条/1.3cm）を巡らす。1222は甕蓋で、内面にススが付着する。生駒山西麓産の胎土を持つ。1223～1227は、甕である。1225は、外面に細かい縦ハケ調整、内面には横ハケ後一部ヘラ磨きを施す。外面にススが付着する。1226は、大型の甕で摩滅が著しいが、外面に粗い縦ハケ、内面にも同様の横ハケ調整を行う大和形甕である。1227も摩

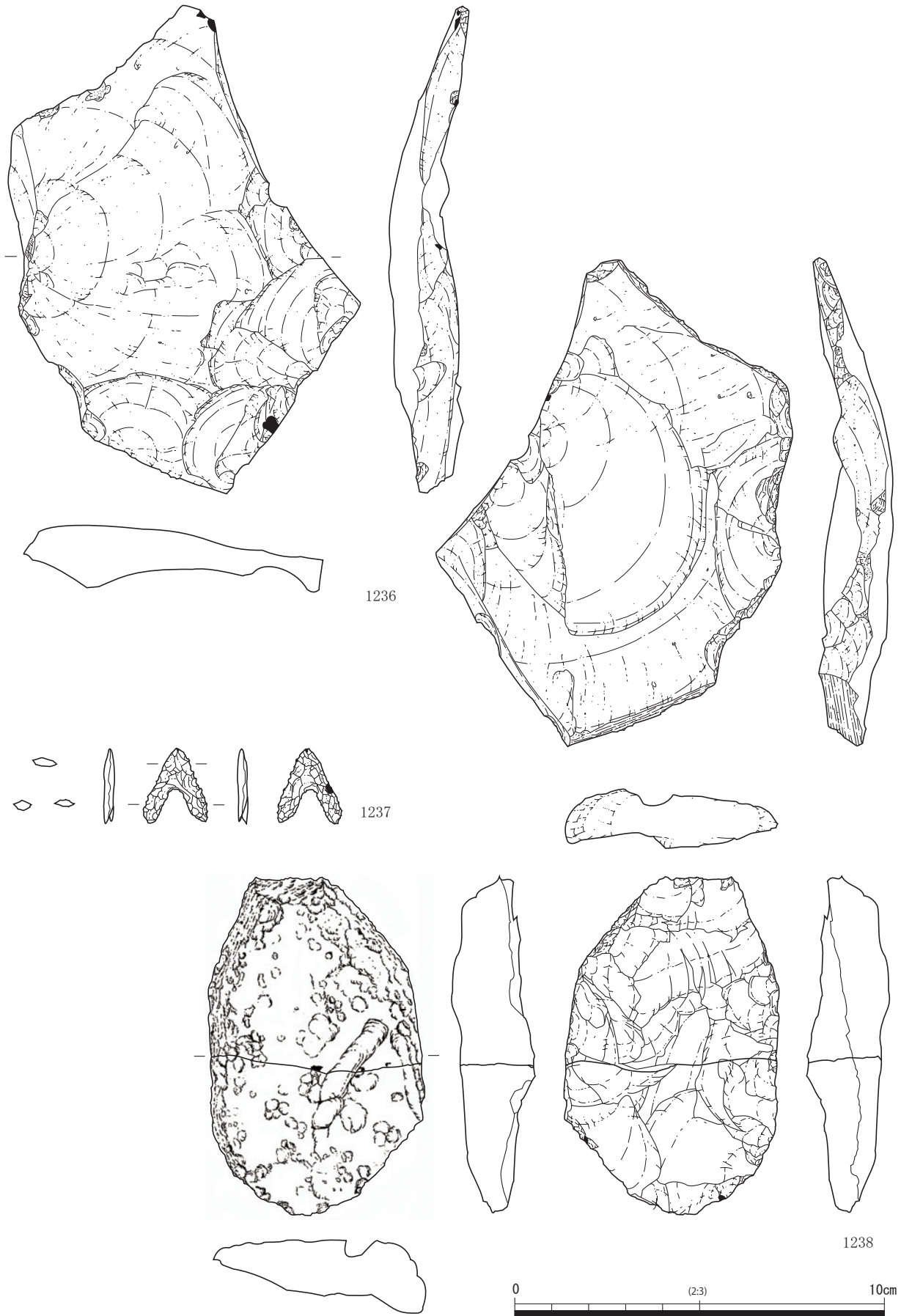


图279 19区第4・7d~e層（弥生時代以前）出土遺物（打製石器1）

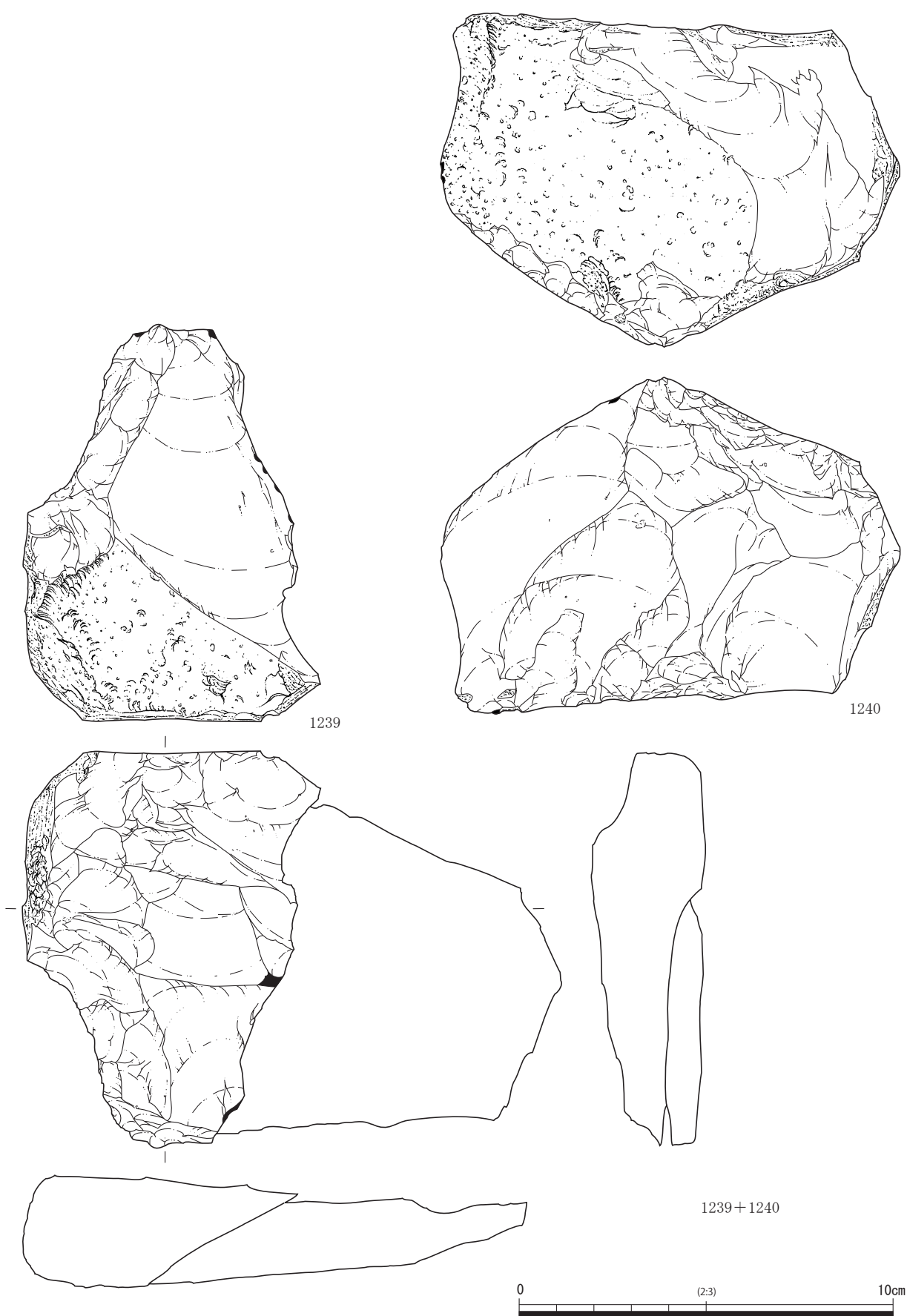


图280 19区第4·7d~e層 (弥生時代以前) 出土遺物 (打製石器2)

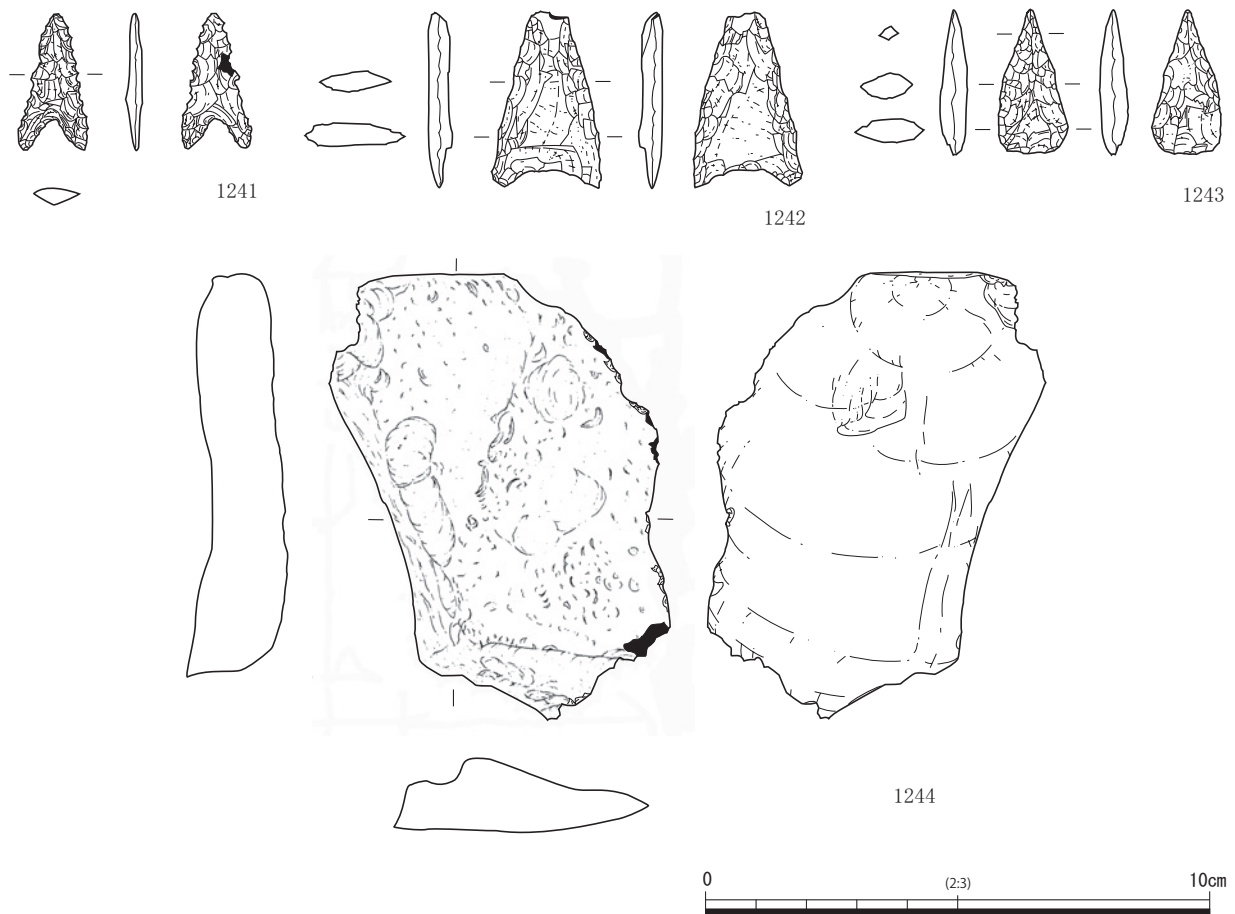


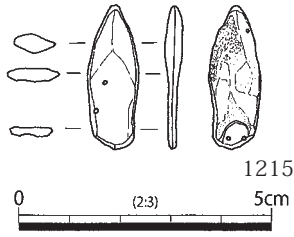
図281 19区第7d～e層（弥生時代以前） 出土遺物（打製石器3）

滅が著しいが、口縁端部に櫛原体による刻み目を施す。1228は鉢の上半部で、櫛描直線文（10条／幅1.4cm）上に弧文を縦に連ねる。生駒山西麓産の胎土を持つ。1229は土製円盤で、周囲を打ち欠いた後、若干研磨する。元の土器に描かれた櫛描波状文が残る。1230は、平底の壺底部である。1234は甕の頸部で、4条の沈線とその間の一部に刺突列点文を施している。畿内第Ⅰ様式新段階である。1231～1233は、底部である。1231は、体部外面が赤変している。なお、包含層出土の弥生土器は、畿内第Ⅱ様式が大半を占め、これに畿内第Ⅰ様式新段階及び、1221、1229など若干新しい要素のものが加わる。なお、畿内第Ⅰ様式新段階の資料は、19区南西部の第7eiii層に多く見られる。

1235は、第9a層から出土した土器の細片で、摩滅が著しいが、弧状に沈線を施し、縄文後期中葉（北白川上層3期から元住吉山Ⅰ式に比定される。

石器は、第7e～9a層から、石庖丁13点、敲き石18点、石鏃92（未成品43）点、石錐26（未成品6）点、石鏃か中型尖頭器未成品1点、中型尖頭器未成品18（？3）点、石槍11（未成品9）点、石槍か中型尖頭器未成品2点、石小刀3（未成品1）点、不明10（未成品？6）点、スクレイパー138（？6）点、楔形石器18（？3）点、二次加工のある剥片582点、剥片812点、石核74点、チップ320点が出土している。

1246～1252は、石庖丁である。1250が杏仁形態、1251・1252が長方形態、1246～1249が直線刃半月形態である。1247は、裏面が浅く窪んでおり、磨き残しの部分がみられる。1248は略完形で、紐孔が中央部より若干偏り、一端が鎌状に幅が狭い。裏面右端寄り体部には、研磨前の敲打痕が残る。裏面は、紐孔より左側の体部から背部にかけて摩滅している。1248の背部には、剥離を伴う線状打撃



痕がある。1249・1251・1252の背部・刃部には、線条打撃痕が認められ、刃部は剥離を伴う。1253・1254は、石庖丁未成品である。1254は剥離成形段階、1253は裏面が剥落して不明であるが、表面には研磨面が残り、研磨途中のものと思われる。他に石庖丁では、研磨途中の破片や割れ破片を研磨途中と思われるものが3点出土しており、石材は全て結晶片岩である。

図282 19区第7d~e層
出土遺物（銅製品）

1255・1256は、敲き石である。1255は、扁平な砂岩礫の一端が割れ欠損しており、他端に剥離を伴う線条打撃痕、両側面には線状打撃痕がみられる。1256は、黒雲母花崗岩の円礫の上下端部に剥離を伴う打撃痕、両面の

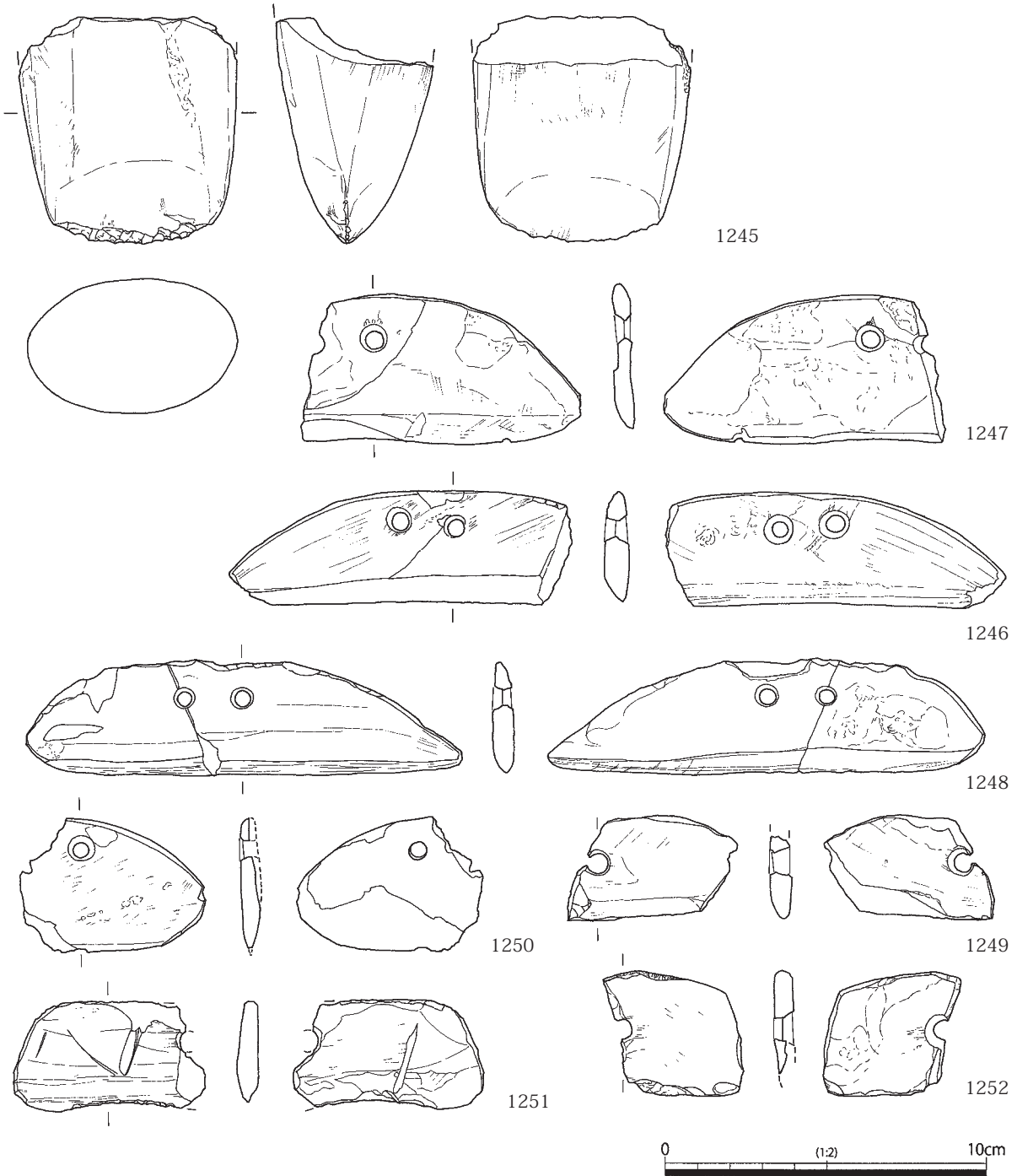


図283 19区第7d~e層（弥生時代以前）
出土遺物（磨製石器1）

一部と両側面には溝状に横方向に窪む打撃痕がみられる。片側面の打撃痕は、横方向に溝状に窪む。図化していない敲き石18点の石材は、砂岩12点、凝灰岩1点、凝灰岩? 1点、流紋岩1点、花崗斑岩? 1点、黒雲母花崗岩1点、チャート1点である。

1241は、基部の抉りの明確な凹基式石鏃であり、形態は縄文時代の石鏃に類似する。1241の両側辺には、鋸歯状剥離がみられるが、剥離の間隔は他の鋸歯状剥離と比べて広い。1242は、削りの浅い凹基式石鏃で、先端部は欠損している。1243は、円基式石鏃である。1244は、背面が自然面、腹面が大剥離面よりなる剥片である。1239・1240は、接合資料である。約15cm×11cmの大きさの原礫長軸側面から打撃を与えて剥離している。剥離後は、剥片からさらに剥離を施している。1240は、一辺に自然面側へ連続した剥離を施し、鋭い刃部をなすスクレイパーに加工されている。1236は、9cm×13cmの二次加工のある大きい剥片である。剥片末端側からは背面側へ細かい剥離が、腹面側にはやや大きめ



図284 19区第7d~e層（弥生時代以前） 出土遺物（磨製石器2）

の剥離がみられる。

第7d～e層からは、太型蛤刃石斧1点、石庖丁1点、敲き石3点、石鏃未成品1点、中型尖頭器未成品3点、石小刀?1点、スクレイパー8点、二次加工のある剥片33点、剥片24点、石核5点、チップ2点のほか、銅鏃1点(1215)が出土している。1245は、閃緑岩を石材とした太型蛤刃石斧である。基部は欠損しており、刃部には、片面側へ剥離がみられる。1246は、結晶片岩を石材とした直線刃半月形態で、一端が欠損している。裏面左側の体部には、研磨前の敲打痕がみられる。裏面には、紐孔から背方向にのびる摩滅痕がみられ、浅く窪む。敲き石は図化していないが、砂岩礫3点のうち1点は、両端部に敲打痕がみられる。

1215は銅鏃で、長さ2.9cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ2.6gを測る。表面の遺存状態が悪く、茎の無い形態である。表面には所々に鬆が入る。先端部に厚みを持ち、基部側に薄い。片面先端部に、鉄分?の付着がみられる。

第7d層からは、石庖丁1点、敲き石2点、搬入された石材2点、石鏃39(未成品30)点、石鏃?1点、石錐12(未成品5)点、中型尖頭器未成品4点、石槍6(未成品5)点、スクレイパー54点、楔形石器11(?1)点、二次加工のある剥片239点、剥片266点、石核37点、チップ77点が出土した。石庖丁は、流紋岩製で細片のため詳細不明である。敲き石は、2点とも砂岩製である。1点は敲打痕があり、もう1点は被熱し表面が荒れているが、かすかに敲打痕がある。搬入されたと思われる石材には、石英1点、小さい板状の結晶片岩1点がある。

1238は、片面が自然面、もう一方の面が剥離面よりなる石核である。中央で2つに割れたものが、接合した。長さ9cm、6cmのやや小さめの原礫の周縁から剥離を施している。

第4層から、混入品であるが、石鏃が出土している。1237は、基部の線りが大きい凹基式石鏃であり、縄文時代でも古い時期のものである。

3. 古墳時代以降の遺構・遺物

10～12区および18～20区に関しては、ほぼ全域にわたって、後世の削平や整地により攪乱をうけていることから、上部の包含層は失われており、遺構面も残存状況はよくない。このため、古墳時代以降の遺構や遺物の検出は、弥生時代に比べると、希薄である。

a. 10区(07-1調査1トレンチ)

古墳時代以降の遺構面として、第7a～c層上面で遺構を検出した。中世以降は、耕作地として利用されていたものと考えられ、居住に関する遺構は検出されていない。遺物出土量も全体に少ない。弥生時代と異なり、東半部では遺構の検出は少なく、西半部では土坑や溝がみられる。また、南西端部では、第7a～c層上面でピットが数基検出されており、建物は復元できなかったものの、掘立柱建物が存在した可能性が考えられる。

4043ピット(図285)

南西端部に位置する。西に4044流路があるが、周囲からはピットが検出されておらず、単独の検出である。検出面で平面はほぼ円形で、径0.25m、深さ約5cmを測る。柱痕跡は確認されなかった。

遺物は、須恵器片が出土している。



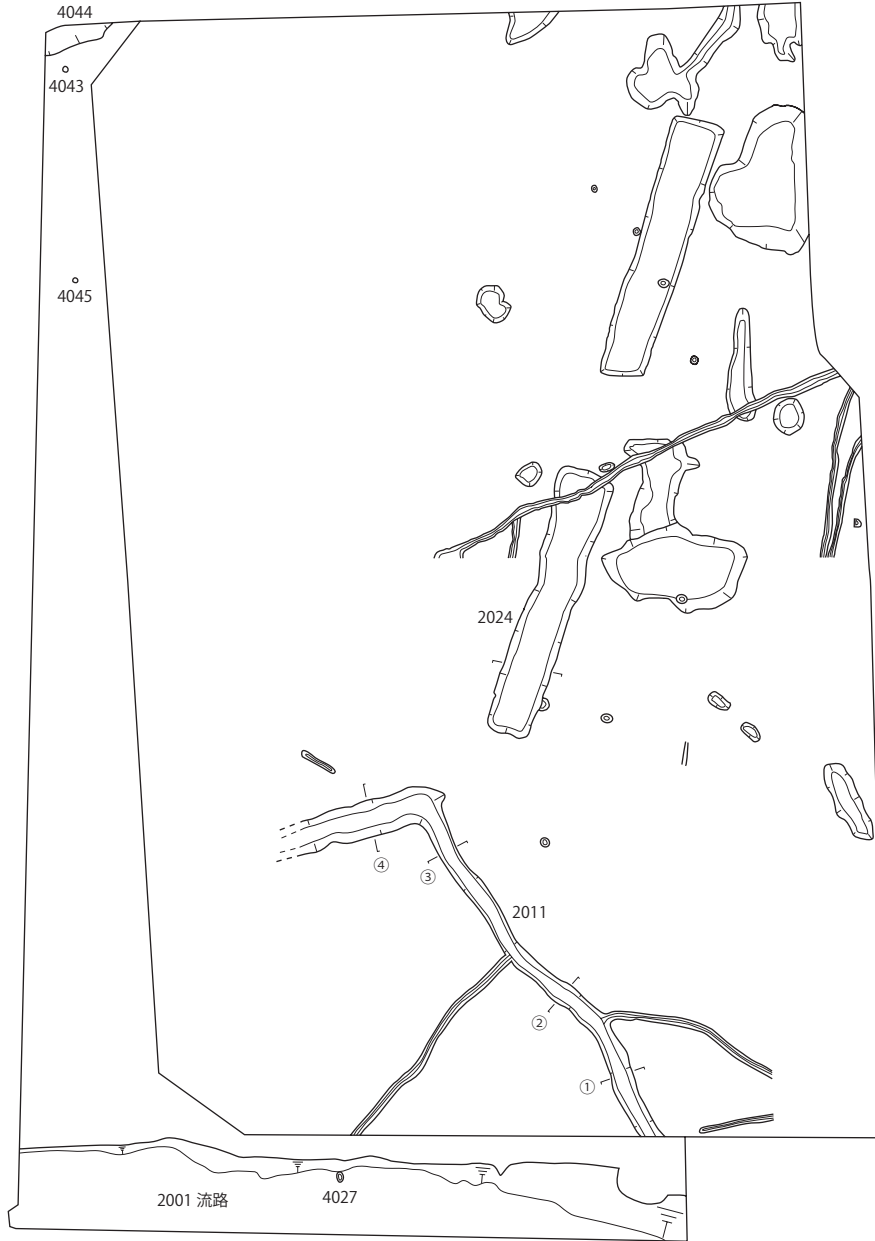
X=156,000

10区

X=155,980

X=155,960

Y=41,470



Y=41,450

Y=41,430

Y=41,410

07-1 調査1 トレンチ



図285 10区 古墳時代以降 遺構平面図

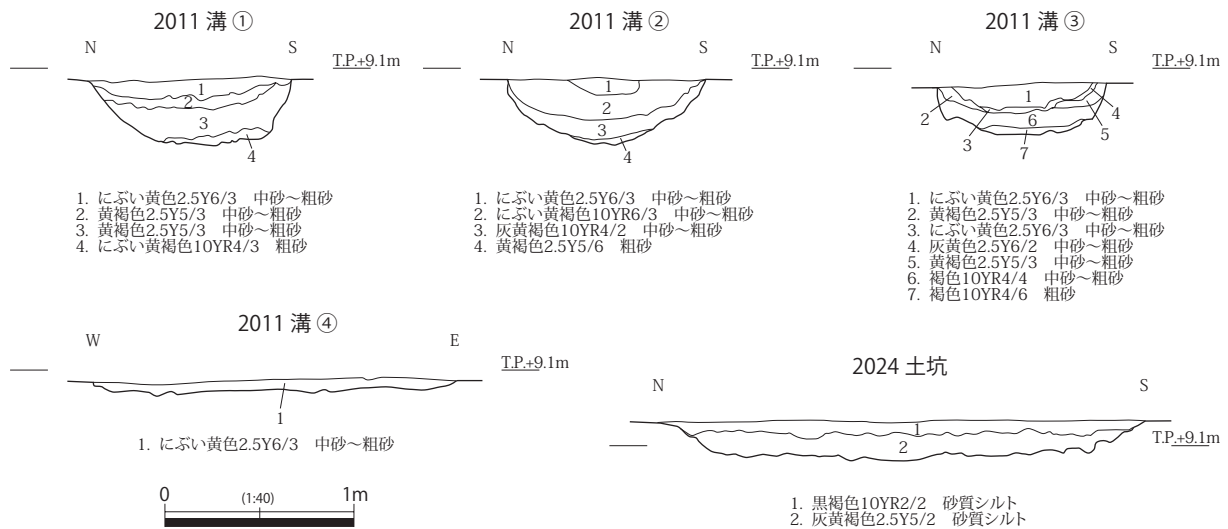


図286 2024土坑・2011溝 断面図

4045ピット (図285)

南西端部に位置する。西に4043ピットがあるが、約11m離れており、関連性は認められない。周囲からはピットが検出されておらず、単独の検出であるといえる。検出面で、平面はほぼ円形で、径0.25m、深さ0.1mを測る。柱痕跡は確認されなかった。黄灰色細砂質シルトを埋土とする。

4027ピット (図285)

東端部に位置する。第7a～c層上面で検出された。大部分が削平されており、東端部がわずかに残存している。東側には、現代まで続く南北方向の2001流路が隣接している。方形の掘方を持っており、検出面で一辺0.85m、深さ0.45m、柱痕跡径0.22mを測る。柱痕跡が認められるが、周囲からはこのような形状のピットは検出されておらず、建物は復元できない。

2024土坑 (図285・286、図版22)

ほぼ中央部に位置する。第7d層上面で検出された。平面形は、東西方向に長い長方形の溝状を呈しており、現状で長辺約13.5m、短辺約2.5m、深さ約0.2mを測る。西側に同形状の土坑があり、関連性がうかがわれるが、性格は不明である。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色砂質シルト、下層は灰黄褐色砂質シルトである。図化できるような遺物は出土していない。

2011溝 (図285・286、図版24)

東半部に位置する。第7a～c層上面で検出された。南から北方向に延び、途中で北東方向へ曲がり、11区へ向かうが、11区では確認できなかった。10区と11区の間を南北方向に流れる流路につながるものと考えられる。現状で、幅1.0～1.9m、深さ0.1～0.4mを測る。南半部は浅く、北にいくほど深くなる。

埋土は2層に分かれ、上層はにぶい黄色中砂～粗砂、下層はおおむね黄褐色中砂～粗砂である。底部

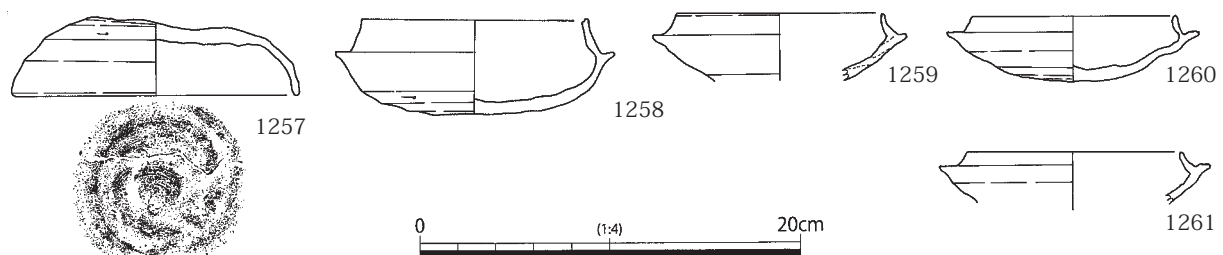


図287 10区第4層 出土遺物

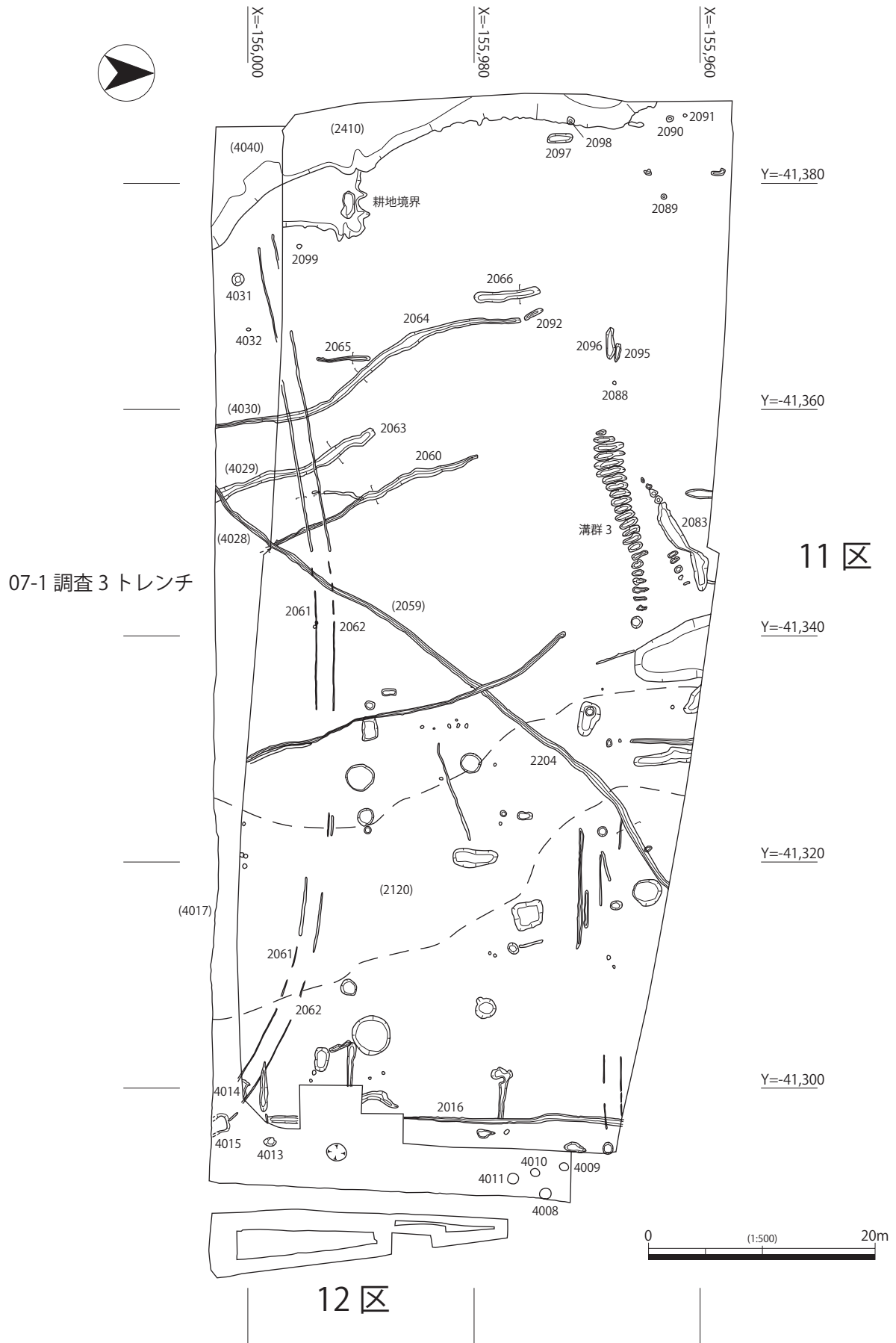


図288 11区 古墳時代以降 遺構平面図

に褐色粗砂が堆積している部分も認められる。図化できるような遺物は出土していない。

4044流路 (図285)

南西端部に位置する。第7a～c層上面で検出された。南西端部で東肩部分を検出したのみである。灰色中～細砂混じり粘質シルトを埋土としている。18区の2003流路と同じ層位にあり、2003水路が本調査区より西側にあることを推測させる。9区の東端部においても、南北方向の流路が錯綜しており、一連の自然流路の一部と考えられる。

第4層出土遺物 (図287、図版132)

第4層は中世の耕作土層と考えられ、古墳時代の包含層ではないが、混入品と思われる遺物の中に比較的残りの良い状態の須恵器蓋杯がみられたので、図化している。遺物は、攪乱を受けているため安定しておらず、新しいものでは近現代の瓦、唐津焼碗が、古いものでは弥生時代中期(畿内第Ⅲ～Ⅳ様式)の土器片、古墳時代の須恵器、土師器、埴輪片などが出土している。

包含層より古墳時代中～後期の須恵器が出土している。1257は須恵器の杯蓋で、TK43型式に該当する。1258～1261は、須恵器の杯身で、1258はTK208型式、他の3点(1259～1261)はTK209型式に該当する。

b. 11区 (07-1調査3トレンチ)

古墳時代以降の遺構面として、第7a～c層上面で遺構を検出した。10区と同様に中世以降は、耕作地として利用されていたものと考えられ、居住に関する遺構は検出されていない。遺物出土量も全体に少ない。東半部で土坑や溝などが検出されているが、遺構の密集は少なく、西半部ではほとんど遺構がみられない。ピットもほとんど検出されておらず、掘立柱建物が存在した可能性も低い。これに対し、耕作に関する遺構は多くみられ、鋤溝や溝などは多く検出されている。

鋤溝 (図288)

西側で部分的に残存する。方位に合うかたちで、南北～東西方向に延びるものと、不定方向に延びるものがある。

耕地境界 (図288)

南西端部に位置する。すでに廃絶して埋没しているが、4040流路跡にほぼ重なる位置では、近世の水田耕作土である第2層が、南北方向に直線的に垂直に段を持って落ち込んでいる。西側が下がっている。耕地の境界を示すものと考えられる。

4031土坑 (図288・289、図版132)

南東端部に位置する。平面形はほぼ円形で、径1.1m、深さ0.6m、断面U字形を呈す。最下層に掘削時の埋土があり、その上に偽礫、炭化物、土器片を含む黒褐色シルトがある。

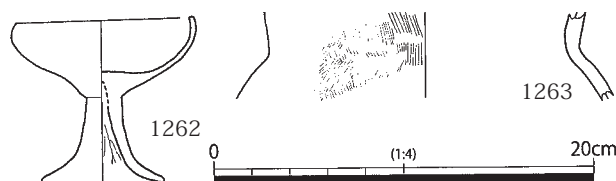


図289 4031土坑 出土遺物

古墳時代中期の土師器が少量出土している。1262は、完形の土師器の椀形高杯で、口径9.4cm、高さ8.7cmを測る。杯部は内湾し、脚部には透かし孔が無く、内面には絞り目が残る。橙色を呈す。辻編年Ⅳ～Ⅴ期に相当し、5世紀末～6世紀初頭に比定される。1263は、明瞭な

縦ハケを施す甕の頸部である。頸部の屈曲は緩く、外面にハケ目が施されている。これらの特徴から、布留式土器でも新しい段階にあたる。

2061・2062轍（図288、図版31）

南部に位置しており、やや弧を描いて、東西方向に延びる。第7a～c層上面で検出された。西半部で、南南東から北北西方向に平行して延びる。2060・2063・2064溝を切っている。幅約10cm、深さ約10

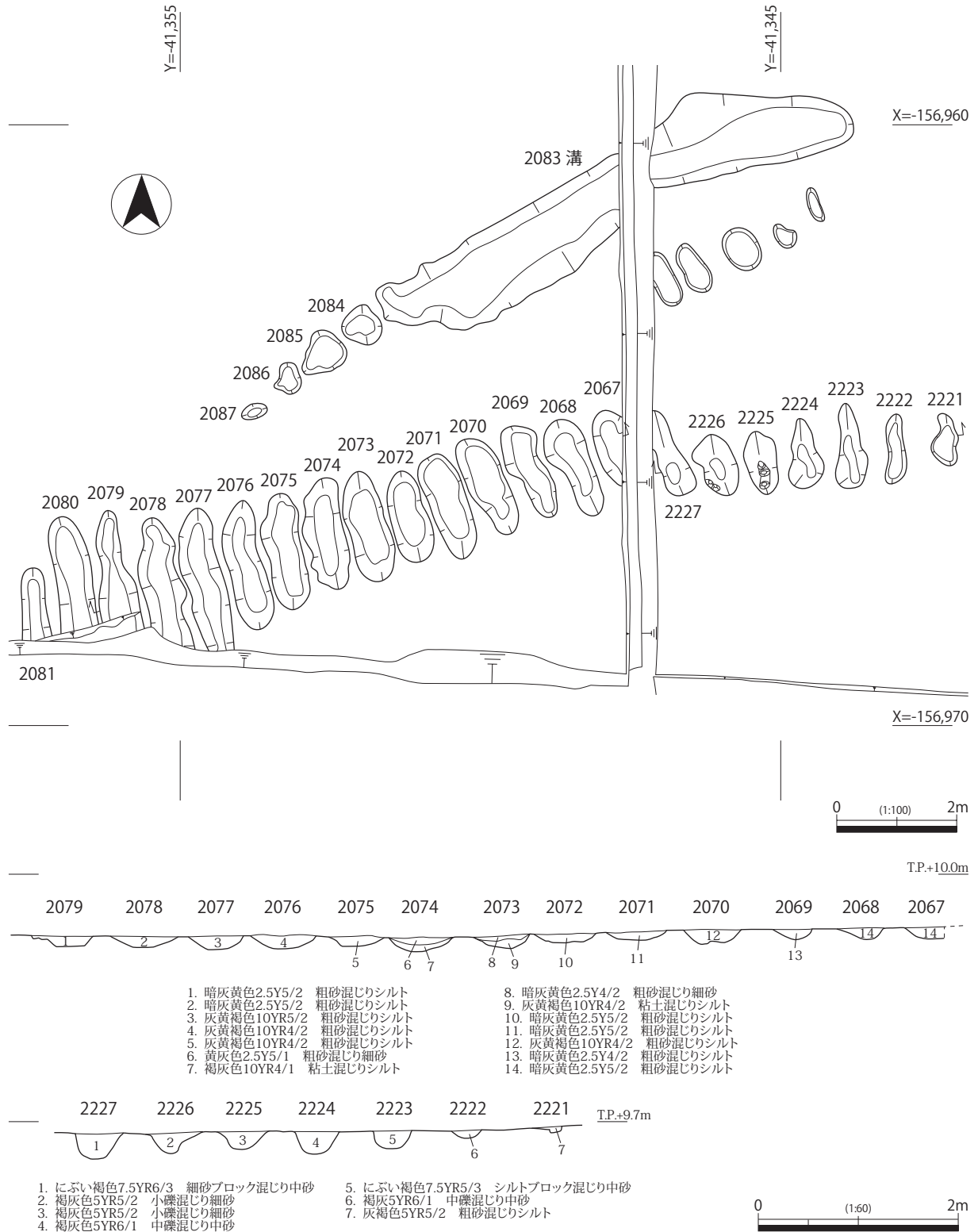


図290 溝群（波板状遺構）3 平・断面図

cmの細い溝で、溝芯々間で1.5mの間隔で2条が平行して走るものである。

埋土は、褐色粗砂混じり細砂である。古代のものと考えられる。

2204(2059・4028)溝 (図288)

南西端部に位置する。南西から北東方向に延びる。ほぼ平行に走る2060・2063溝を切っている。断面U字形で、幅0.25～0.4m、深さ13cmを測る。

埋土は、灰色シルト混じり粗～中粒砂で、黒褐色シルトが偽礫として混じる。

2063(4029)溝 (図288、図版31)

南西端部に位置する。南南東から北北西に延びる。2061・2062轍と2204溝に切られる。断面は浅いU字形で、幅0.5～1.0m、深さ10cmを測る。埋土は、暗灰黄色シルト混じり粗～中粒砂で、黒褐色シルトが偽礫として混じる。

2064(4030)溝 (図288、図版31)

南西端部に位置する。南南東から北北西に延びる。2061・2062轍に切られる。断面はU字形で、幅0.4m前後、深さ18cmを測る。

埋土は、最下層が黒褐色化するが、大半は暗灰黄色細粒砂混じりシルトで水成堆積層である。

溝群3 (波板状遺構) (図288・290、図版30)

中央部北寄りに位置する。第7d層上面で検出された。長さは一定しておらず、幅約0.4m、深さ約0.2mの短い溝が並列するもので、東西方向に延びており、約16mの長さで確認された。すぐ北側に平行して同様の短い溝群を検出しているが、関係は不明である。これらの溝は、西から東に行くに従って長軸は短くなっており、東端の短いものは円形のピット状を呈する。溝群1とは異なり、長く延びる溝は含まれていない。他の地区で検出された、溝群 (波板状遺構) と同様のもので、道路に関する路面下の基礎部分と考えられる。

遺構の形成された時期については、確定できる遺物を伴わないため詳細は不明であるが、7区や15～17区の状況から、庄内式期を中心とする時代のものである可能性が高い。

埋土は、褐灰色細砂や中砂からなり、小礫などを含む。加工時の堆積層であると考えられる。

2120(4017)流路 (図159・288)

東半部の中央を南北方向に流れる、自然河川である。幅13.8m、深さ2m以上である。弥生時代の項で、

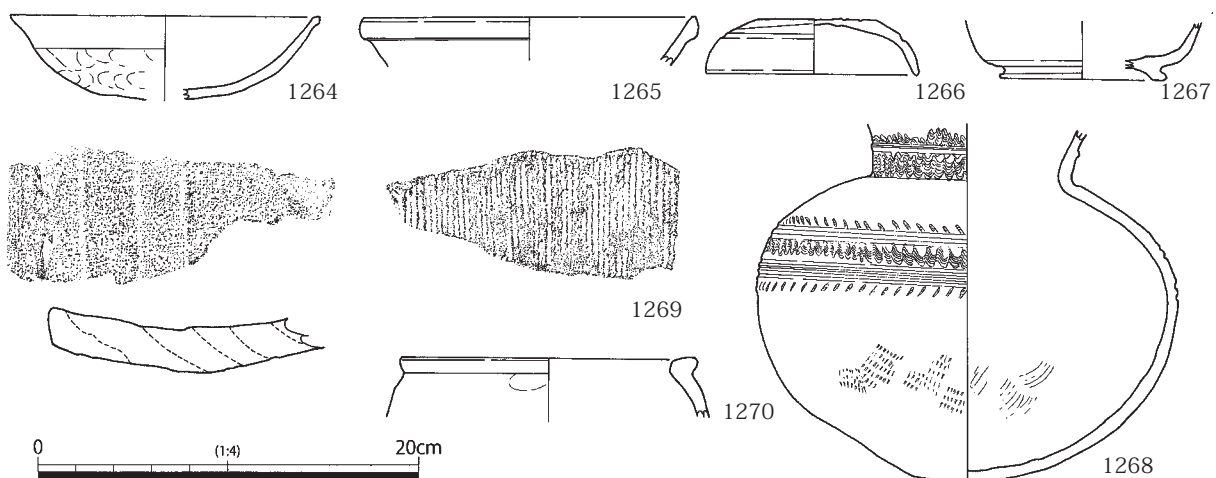


図291 11区包含層 (古墳時代以降)、4040流路 (1270) 出土遺物

遺物も含めて詳細を述べたが、第4層下面に肩を持ち、埋土上面には部分的に第4層が堆積する。第6層形成と同時に堆積した時期がある。

弥生時代前・中期の土器片などが出土している（図276）。最終堆積は、平安時代以前と考えられる。

2410(4040)流路（図288・291、図版32）

南西端部に位置する。東側肩部を検出した。現代まで残る、10区と11区の間を南北方向に流れる流路の一部と考えられる。時期によって、流路や規模が変化しているが、現道で分断され、細かい変遷をたどることはできなかった。

遺物では、土師器が少量出土している。1270は、中世の土師質羽釜口縁部である。口縁部は小さく折り曲げており、外面には指頭圧痕が僅かにみられる。菅原編年の河内型羽釜Bで、13世紀のものであろう。

第3層下面では、条里の坪界に相当する南北に延びる里道が、ちょうどトレンチ幅に収まっている。現代から中世までの重なりが見られるが、その基底には、南北に幅0.5m、高さ6cmの畦畔がある。現里道よりかなり小規模で、西側に偏っている。この畦畔より西側では、水田面が数cm低くなる。

中世後半～近世の井戸が、5基検出された。4010・4011井戸は第2層中から、4008・4009・4013井戸は第3層途中で検出された。平面は円形で、壁面はほぼ垂直かややえぐられている。径は、小さいもので0.7m、大きいもので1.7mあり、底面まで掘り下げていないが、深さ1m以上で、粗いブロック土によって埋め戻される。条里型地割りの坪界付近に集中的に構築されたと考えられる。

古墳時代以降包含層出土遺物（図291、図版132）

第3～4層から第7d層出土までのものをまとめた。いずれも包含層より出土した。1265は第3層、1267は第4層、1266・1268は第7a～c層、1264は第7d層、1269は第4～6層出土である。

1264は土師器杯で、体部外面には指頭圧痕が多く残り、口縁は強くヨコナデする。1265は、断面蒲鉾形の口縁をもつ白磁碗で、福建省系。白磁Ⅳ-1a期（11世紀末～12世紀初頭）であろう。1266は

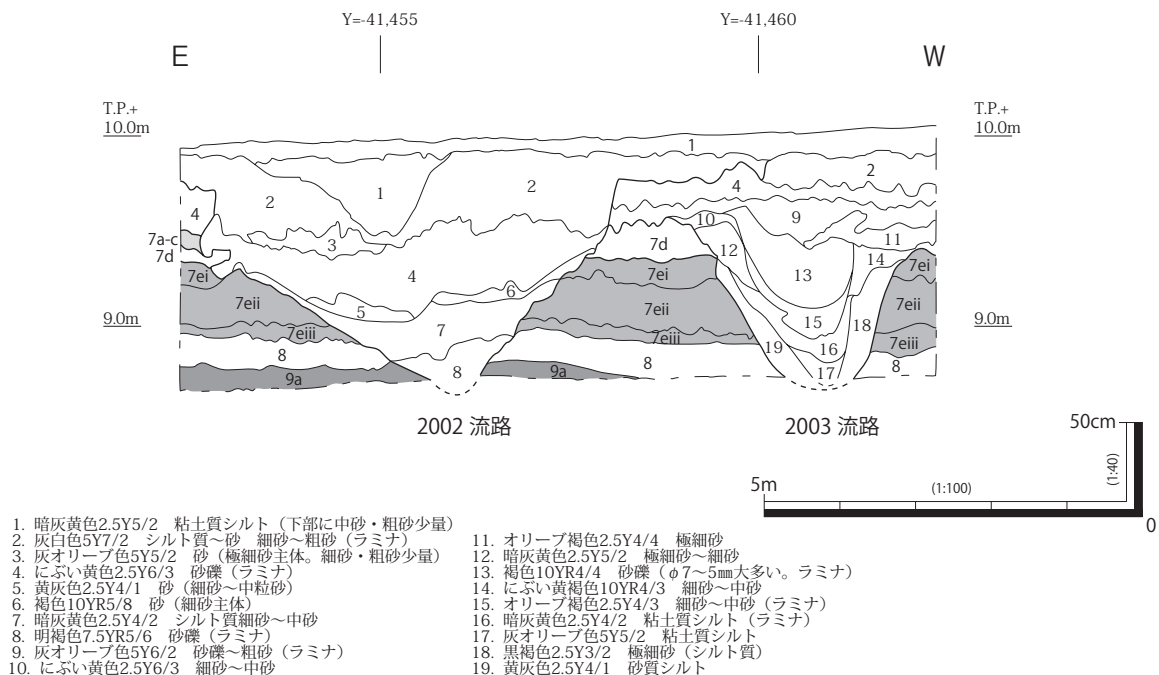


図292 2002・2003流路 断面図

須恵器の杯蓋で、TK43～TK209型式に該当する。第7a～c層の時期幅におさまる。1267は、ハ字状の高台を持つ須恵器の杯身で、飛鳥Ⅳ期であろう。1268は須恵器の壺で、頸部に低い突帯と波状文、体部に2条の浅い沈線と櫛描波状文・列点文を巡らす。内面は大部分ナデ消すが、当て具痕が僅かに残る。初期須恵器と考えられる。1269は平瓦で、布目痕を残す。

c. 18区

第7a～c層上面において、古代以降の流路を3条検出した。いずれも南北方向に伸びており、東端部で2001流路、西端部で2002・2003流路が位置する。これ以外に、遺構は検出されていない。

2001流路 (図294)

南側の07-2調査区や北側の11区や04-1区でも検出されており、ほぼ南北方向にまっすぐに流れる流路である。現在でもややかたちを変えて残っており、地割りの基準にもなっている流路である。上限ははっきりしないが、現代まで存続していたことが判明している。

2002流路 (図292～294、図版132)

西端部で検出され、南南東から北北西へほぼまっすぐに伸びている。調査区外の北西部にあたる17区北東端部で、西肩の一部がみつかった(3523流路)ことから、さらに北側は9区の2362流路に合流するものと考えられる。しかしながら、9区の2362流路は多くの流れが重複していることから、流路の先を特定することはできなかった。2003流路を切っている。第4層上位から掘り込まれており、断面がV字形を呈していることから、人為的な溝の可能性もある。上層までラミナがみられ、人為的な埋戻し土が確認されていないことから、最終的には自然埋没で終焉したものと考えられる。

遺物は、土師器や須恵器のほか、牛の骨・歯、馬の骨などが出土した。1271は、土師器の高台付きの皿である。内面に螺旋状の暗文を施す。1274・1275は、大型の土師器の杯で低い高台が付き、外面

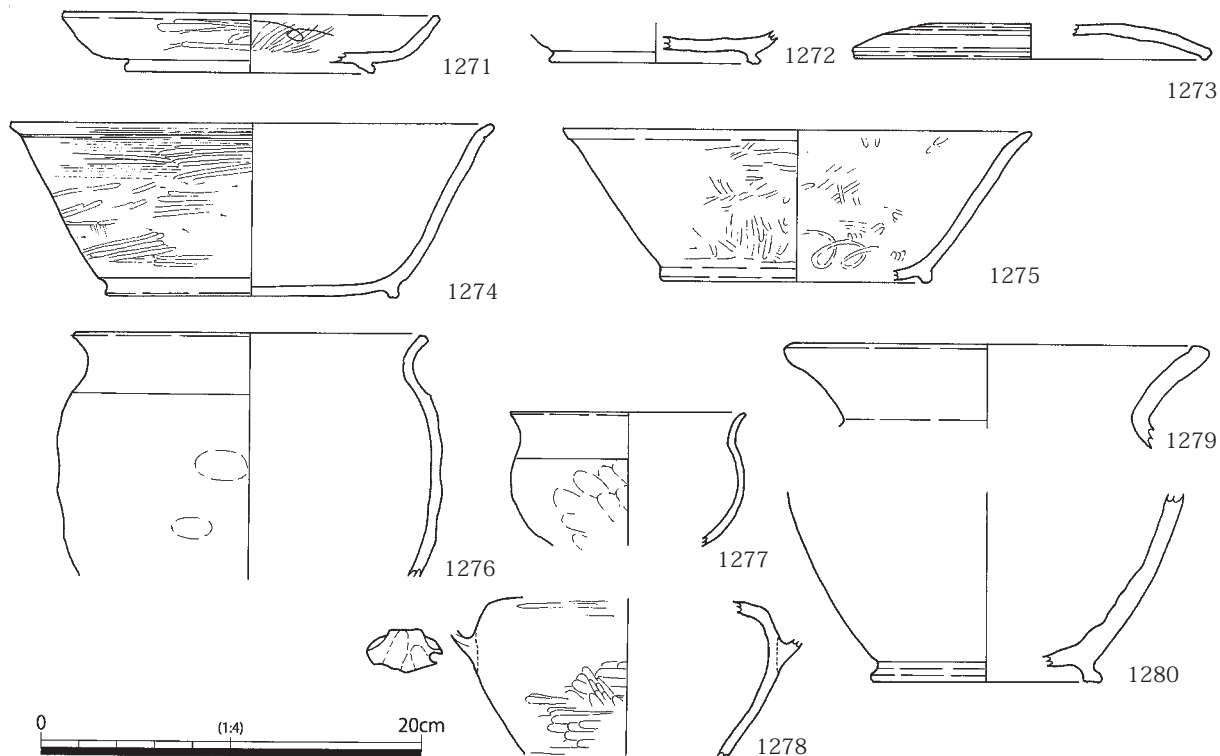


図293 2002流路 出土遺物

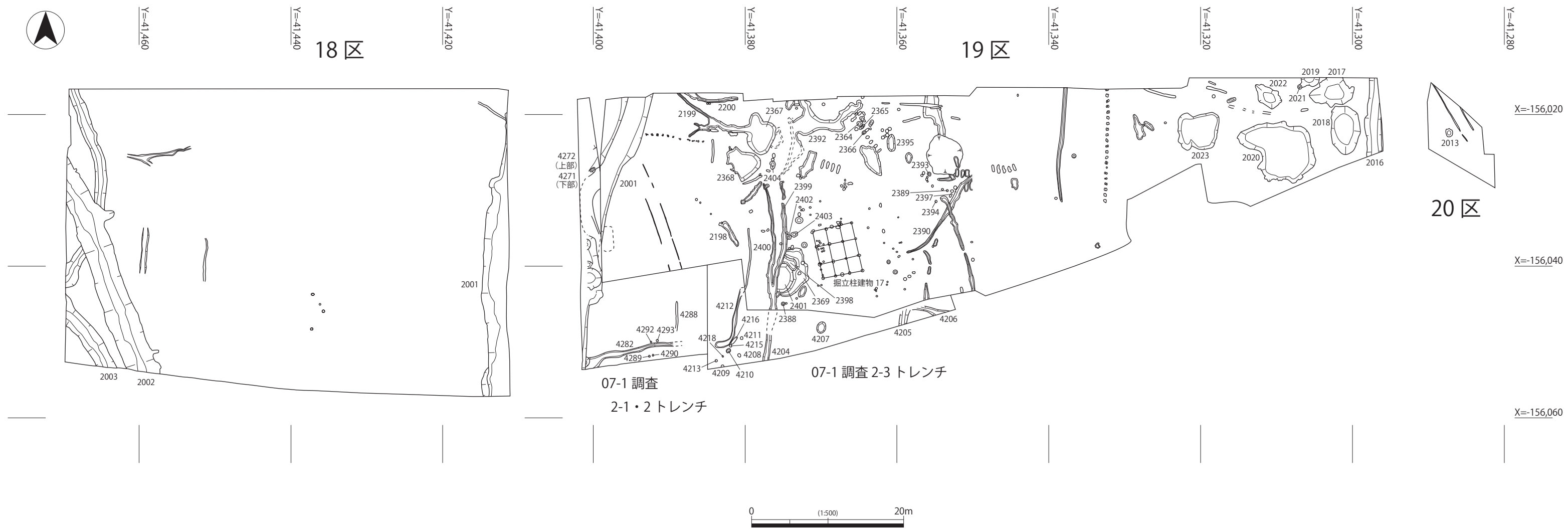


図294 18~20区 古墳時代以降 遺構平面図

は密にヘラミガキする。1276・1277は、土師器の甕で、口頸部と体部との間に稜を作り、外面に指オサエが多く残る。1278は、土師器の把手付短頸壺である。

1272・1273・1279・1280は、須恵器である。1272は高台付の杯身、1273は杯蓋、1279は甕の口縁部、1280は壺の底部である。これらは平城Ⅲ～Ⅳ期に比定される。

2003流路 (図292・294)

西端部で検出された。南西端部では南東から北西に延びるが、調査区外へ出た後、調査区内に戻り、弓なりにカーブした後にさらに北西方向に向かい、調査区外へ延びる。2002流路と同様に北側ははっきりしないが、9区の2258溝に合流する可能性も考えられる。ただ、9区では多くの流路が重複していることから、特定することはできなかった。掘り込み面ははっきりしない点があるが、第7a～c層下面からは掘り込まれていることが確認できる。人為的な改変を受けている可能性はあるが、もとは自然流路であったと考えられる。2002流路と同様に、上層までラミナがみられ、人為的な埋戻し土が確認されていないことから、最終的には自然埋没で終焉したものと見える。2003流路が埋没した後の自然流路が、2002流路のもとになったことも考えられよう。

遺物は、ほとんど出土していないため、時期は確定しないが、2002流路出土遺物が関係しているとすれば、奈良～平安時代には機能していたものと考えられることができる。

d. 19区

古墳時代以降の遺構は、西半部でまとまって検出されたが、耕作に伴う溝が主体である。また、不定形の土坑やいわゆる波板状遺構と考えられる短い溝の溝群が、形ははっきりしないものの、複数みつがっている。総柱の掘立柱建物17が検出されているが、ほかには掘立柱建物は復元できなかった。東端部では、古代以降の土坑がまとまって数基検出された。この部分では、建物は検出されていない。全体に遺物量は少ない。

掘立柱建物17 (総柱建物) (図294・295)

西半部の中央やや南側で検出された、総柱の建物である。地形に平行する南東―北西棟の建物で、主軸はN-13°-Wを示す。

建物の規模は、梁間3間(南側5.34m、北側5.22m)、桁行3間(西側6.3m、東側6.58m)、床面積は約34㎡である。梁間中央にそれぞれ棟持柱と思われる柱が付随する。柱間寸法は、最も南側の梁間が、西から1.72m、1.86m、1.76m、内側の梁間が、西から1.84m、1.74m、1.72m、もっとも北側が、西から1.74m、1.83m、1.65m、内側が西から1.86m、1.72m、1.7mである。最も西側の桁行が、南から1.9m、2.3m、2.1m、内側が南から2.0m、2.3m、2.15m、もっとも東側が、南から2.08m、2.3m、2.2m、内側が南から2.0m、2.3m、2.25mである。

柱穴の掘方は、ほとんど円形である。断面形は扁平なU字形を呈する。掘削深度は、8～32cm。穴底は円形である。柱痕跡は、2385ピットで認められた。

古墳時代～古代に相当すると考えられる、第7a～c層下面において、南西端部でピットや溝、轍などの遺構がまとまって検出された。

ピット群 (図294・298)

南西端部の4282溝の周辺で、ピットがまとまって検出されたが、建物としては復元できない。4292

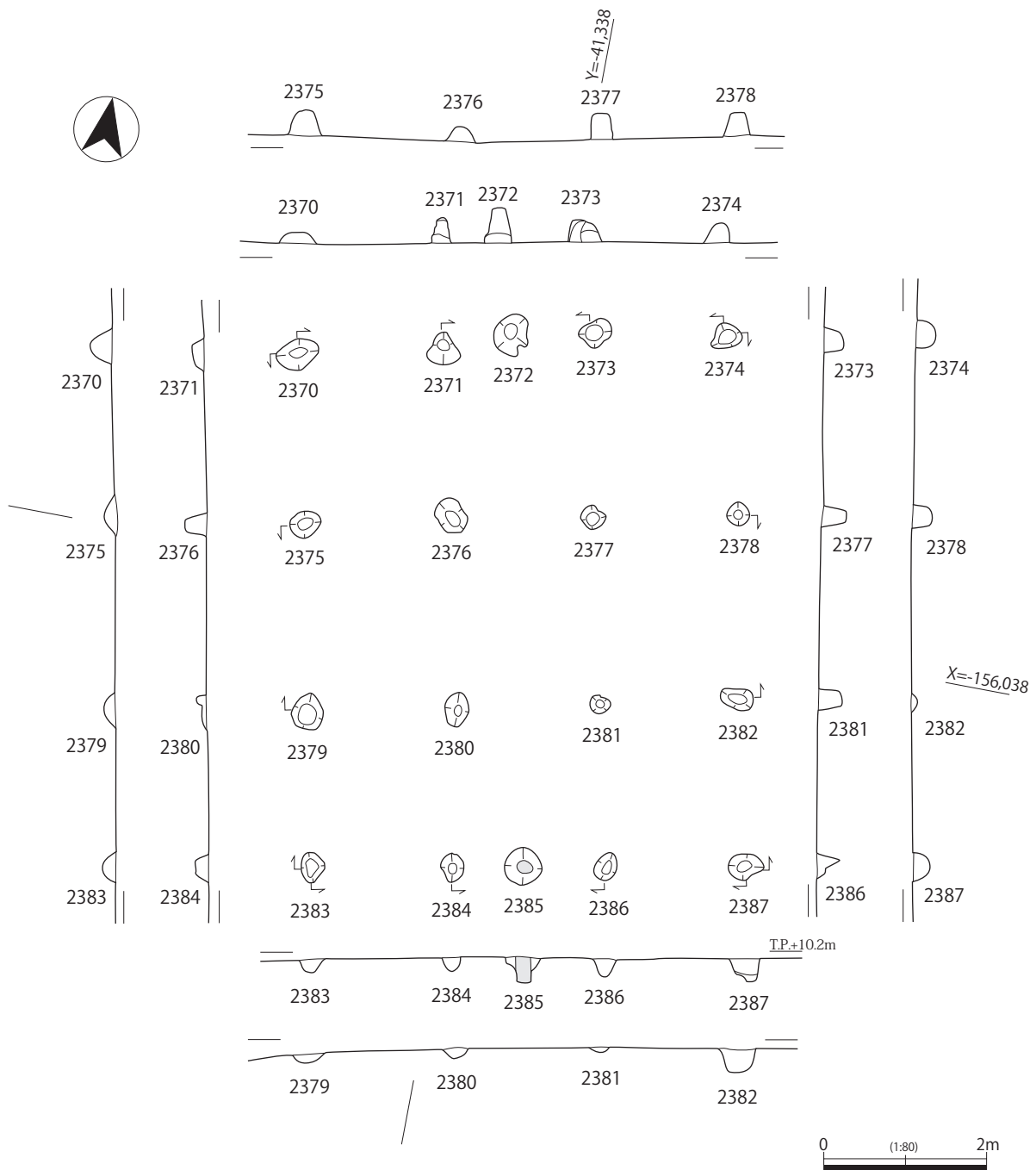


図295 掘立柱建物17（総柱建物） 平・断面図

と4289ピット、4293と4290ピットは対になる可能性がある。

これらのピット群から東へ約8m離れた部分で、柱痕をもつピットが6基みつまっている。掘方は円形で、一辺35～45cm、深さ10～20cm、柱痕は径10～15cmである。柱痕跡は黒褐色系の土で、掘方埋土はオリーブ褐色、暗灰黄色などを呈す。いずれも上部が削平されていると考えられる。

東側では、4211・4215・4208ピットが約0.7m離れて直角に並び、掘立柱建物の隅になる可能性がある。4211・4215ピットからは、土師器片が出土している。西側では、4209ピットと4213ピットが並び、東側と方向を揃える。

4208・4209ピットから土師器片が出土している。1281は、4208ピット出土の大型の土師器有段高杯である。杯部が外反する。布留式後半と考えられる。

4218ピットは径0.2mを測り、土師器片が出土している。

4210土坑 (図294)

4212溝が南端部で西へ曲がる部分のすぐ南に隣接する。4218ピットの北東に位置する。平面は円形を呈しており、径0.52m、深さ0.47mを測る。埋土は黒褐色土で、3層に分かれ、下層は粘土となり、中層は偽礫で、高杯の口縁を含む土師器片が出土している。

4207土坑 (図294)

中央西寄りの南端部に位置する。下層の4220流路の埋土である砂礫層中に掘られる。平面形は楕円形で、長径1.6m、短径1.25m、深さ0.27mを測る。底面は起伏を持つ。埋土は黄褐色シルトである。

4282溝 (図294)

南西端部の南辺で、ほぼ東西方向に延びる。西側の調査区境界部分は途中で切れるが、その先に位置する南北方向に延びる4212溝と一連のものと考えられる。現状で、幅0.5～1.0m、深さ4～11cmを測り、浅いU字形を呈している。西側ほど広くなる。埋土は、黒褐色土である。土師器片が出土している。

4212溝 (図294)

南西部に位置する。南北方向に延びており、南端部で西に曲がり途切れる。検出長8m、幅0.3～0.7m、深さ4～6cmの浅い溝である。埋土は、黒褐色土である。この溝の西側には、幅1.5m前後の浅い溝状の落ち込みが続く。遺物は、土師器片が出土している。

4216溝 (図294)

4212溝の南東に隣接する。4212溝に沿って伸びる小溝で、長さ1.3m、幅0.35mを測る。

遺物は、土師器片が出土している。

4204溝 (図294)

4212溝から約5m離れた東側で、南北方向に延びる溝である。延長約3mを検出した。断面U字形を呈し、幅0.65m、深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黄色シルト混じり粗～細粒砂である。

遺物は、土師器の甕口縁や高杯脚部が出土し、高杯は小型で内面絞り目を持つことから、辻編年4段階に比定できる

4205溝 (図294)

ほぼ中央の南端部に位置する。4206溝と直交しているが、関連性は不明である。断面U字形の溝で、幅1.1m、深さ0.26mを測る。埋土は黄褐色～灰黄褐色中・細粒砂で、流水堆積をしている。

4206溝 (図294)

ほぼ中央の南端部に位置する。4205溝と直交しているが、重複関係は不明である。浅い溝で、幅0.6～0.8m、深さ5cmを測る。埋土は、灰オリーブ色細粒砂質シルトである。

2399溝 (図294・298、図版132)

西半部のほぼ中央を南北方向に延びる溝で、南端部で2400溝と二股に分かれている。延長約11mを検出した。幅0.5～0.8m、深さ約10cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂混じり細砂である。

1282は須恵器の杯身で、TK43型式に該当する。

2369土坑 (図294・298)

西半部のほぼ中央の南端部に位置する。不定形で、2401土坑や2398土坑、2399溝などに切られている。規模は、南北方向約6.0m、東西方向約2.0m、深さ約10cmを測る。埋土は、暗灰黄色中砂混じり極細砂である。

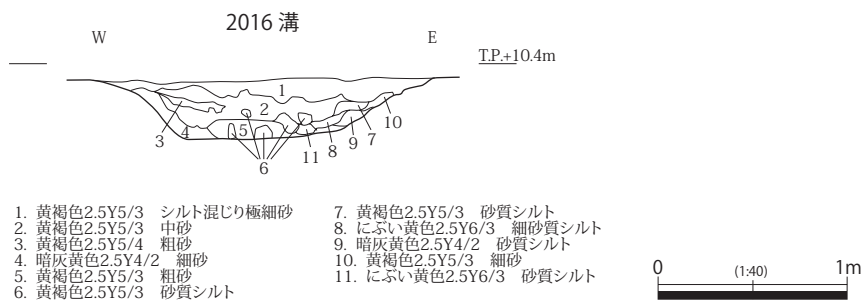
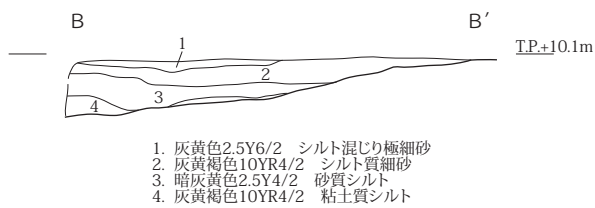
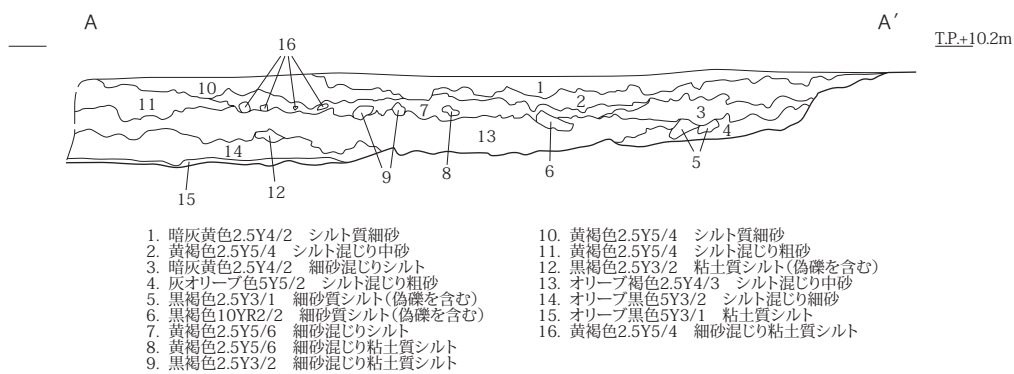
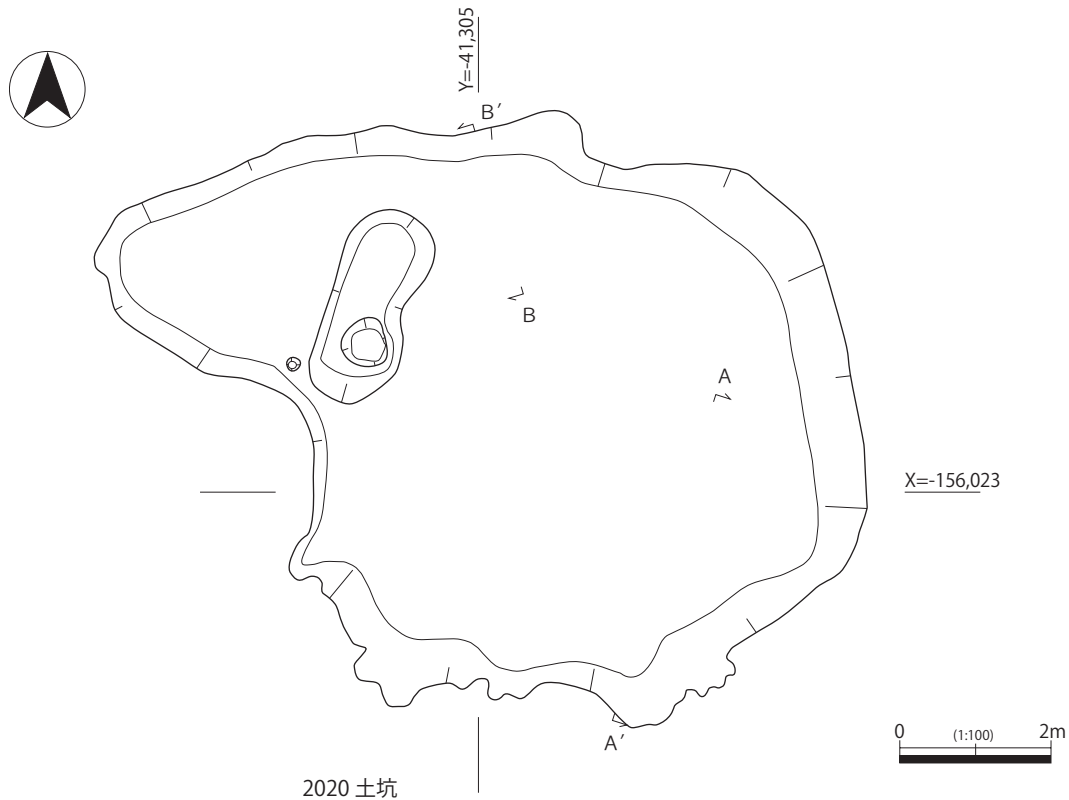


図296 2020土坑・2016溝 平・断面図

遺物は、須恵器杯が2点出土した。1283は、2399溝出土の破片と接合した。MT85～TK43型式に該当する。

2020土坑（図294・296、図版43）

東端部に位置する。周囲で、大型の土坑がまとまって検出されている。不定型で北西部がやや延びた形状である。規模は、東西方向最大10.5m、南北方向約7.5m、深さ約0.5mを測る。人為的に埋められているため、埋土は一定しないが、下層はオリーブ褐色シルト混じり中砂が主体で、底部に粘土が堆積している。図化できるような遺物は出土していない。

2016溝（図294・296・298、図版132）

東端部の19区と20区を分かち里道に沿って、南北方向に延びる溝である。幅約1.8m、深さ約30cmを測る。埋土はほぼ3層に分かれ、上層は黄褐色シルト混じり極細砂、中層は黄褐色中砂が主体で砂質偽礫が混じる。下層は、黄褐色粗砂が主体で暗灰黄色細砂が混じる。

遺物は、土師器と須恵器が出土している。1284は土師器の杯身で、内面に放射状暗文、底面に格子状暗文を施す。平城Ⅲ期であろう。1285は須恵器の高杯蓋で、つまみを付す。古墳時代後期中～後葉の所産で、1284より遡る。

西半部では、中世の耕作面に相当すると考えられる第4層下面において、溝や鋤溝を主体とした遺構がまとまって検出された。

南北方向に伸びる浅い鋤溝群が検出された。検出面で、長さ1.3～9.3m以上、幅は10～30cmである。鋤溝の一つと考えられる、南北方向に延びる4288溝からは、青磁片が出土している。

西半部では、約20cmの南北方向の段をもって西側が下がる。耕地の境界に相当する。中央部から東側は地形がやや高くなり、鋤溝の方向にばらつきが認められる。また、轍の可能性のある、緩やかにカーブするものも認められる。13世紀頃であろう。

西端部では、18区との間にある近現代まで存続する南北方向の流路の東肩がみられるが、その下面から中世の流路の一部が検出された。土層断面の観察によって、近世に中世の流路を人為的に埋めた状況が確認された。

4271流路（図294・297、図版40）

18区と19区の間には、ほぼ南北に延びる幅約15mの谷状地形がある。このほぼ中央に位置する中世後期の流路である。調査区内では、S字形に蛇行しながら南南西から北北東に続き、その東斜面を北西端部で検出した。本来の肩の位置は不明である。検出面からの深さ1.1m、谷状地形の肩部に残る第3層上面からは1.75mを測る。川底の砂礫層より瓦質三足羽釜を出土したことから、15世紀代に比定される。南側では、水流による洗掘の跡と推測される播り鉢状の凹みが3ヶ所見られ、最大で径3.0m、深さ0.5m、小さなもので径約1.2m、深さ約0.4mを測り、底にはラミナを伴う黄灰色シルトが堆積する。

流路の埋土上部には、暗灰黄色シルトが堆積し、さらに、偽礫を大量に含む厚さ0.5mのシルト層によって東斜面が埋め立てられる。これは、流路の整形と谷底の耕地化を図った盛土工事の跡と考えられる。偽礫は径5～15cmと粗く、堅く締まっており、上部では幾分細くなる。その供給源は第9層（黒褐色シルト）及び第10層（灰黄色シルト）と見られ、整地に際して周囲を大きく掘削したと考えられる。偽礫層からは焼締め陶器片が出土した。

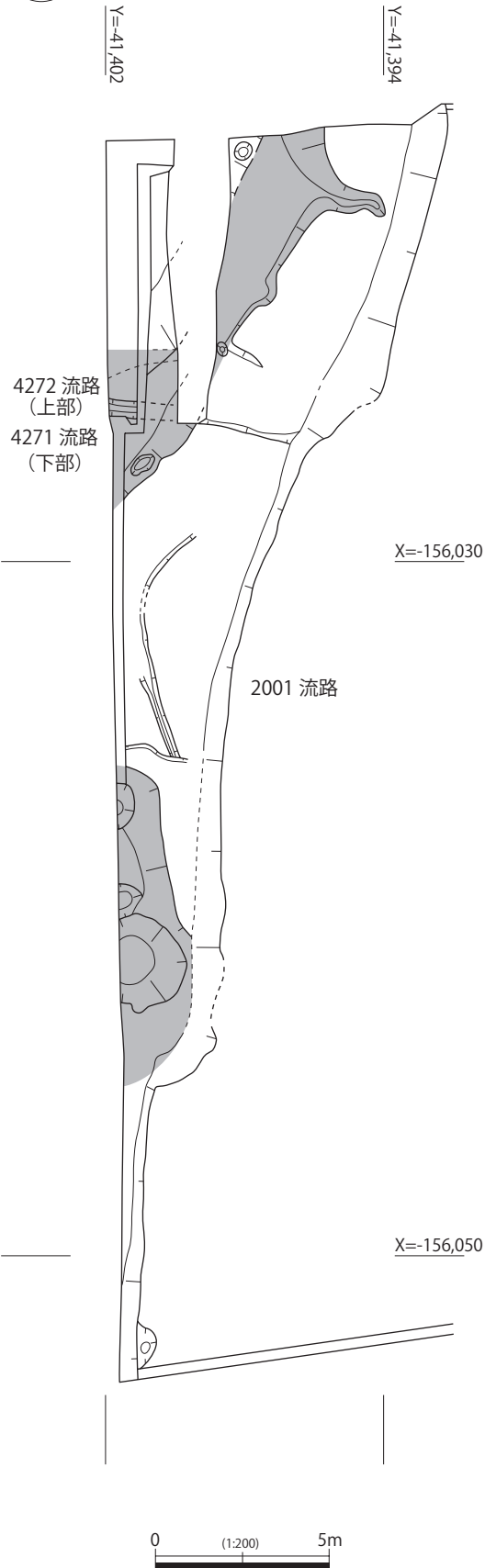


図297 4271・4272流路 平面図

4272流路 (図294・297・298)

4271流路の偽礫層上面には、東西方向に幅35cm、深さ15cmの小溝が掘られ、この溝を境に南北で段差を持つ灰色砂質シルトがほぼ水平に広がる。これは、耕地化を示すと見られ、灰色砂質シルトから染付磁器、志野らしき底部片が出土することから、16世紀頃に比定される。その後、谷部が偽礫層によって一気に埋められ平坦化するが、その過程で谷状地形の東肩に沿って、幅3～4m、深さ0.3～0.6mの直線的な流路が作られる。これを4272流路とする。埋土は、にぶい黄色中・細砂である。埋土上面には、近世中～後期の耕作土である、第2層が堆積する。南西端部に位置する。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、近世染付が出土した。1286は、小型の瓦器椀である。底部欠損のため詳細は不明であるが、器高が低く、内面の暗紋が途切れながら圏線状に2～3条巡り、見込みの暗紋が見られない点から、和泉型瓦器椀のIV-2～3と思われる。外面に指押さえが残り、14世紀の所産であろう。

古墳時代以降包含層出土遺物 (図298、図版132)

古墳時代以降の包含層からの遺物としては、第3b層から1292・1294・1295、第4層から1288・1289・1293・1296、第7a～c層からは1290・1291が出土している。1287は、第4～6層から出土した。

1287～1291は、須恵器である。1287は杯蓋で平城Ⅱ～Ⅲ期、1288は杯身でTK207型式に該当する。1289～1291は、樽形甗である。この内、1290・1291は第7a～c層の堆積時期におさまるが、他は下層からの混入である。

1292は和泉型の瓦器椀である。1293は、白磁皿の小片である。1294は灰味の釉をかけた青磁碗で、内面には釉剥ぎがまわる。高台の内側は施釉されず、回転ヘラケズリ痕が残る。14世紀の所産と考えられる。1295・1296は鎬をもつ蓮弁文青磁碗で、それぞれI5a、I5b式に該当し、13世紀前半の所産と考えられる。1292～1296は、第3b～4層の堆積時期を示す。

e. 20区

調査範囲の南東端部に位置する調査区で、里道により

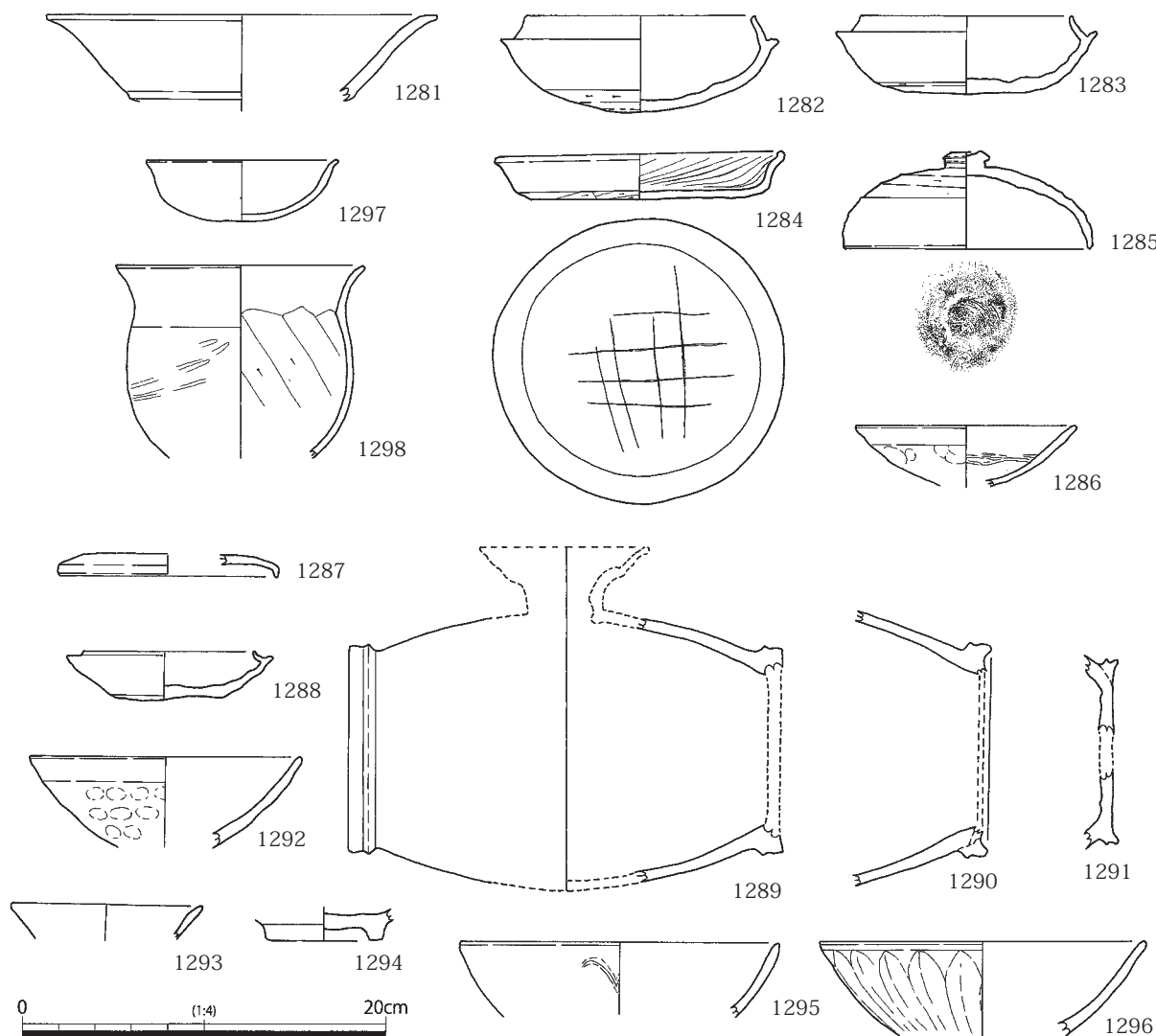


図298 19・20区 遺構、包含層（古墳時代以降） 出土遺物

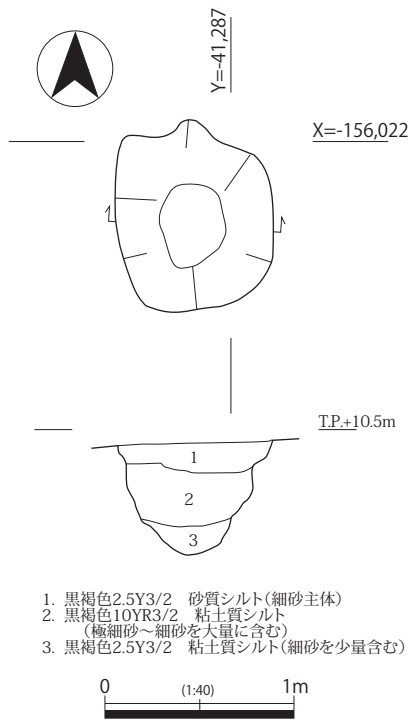
分断されていることから、範囲は狭い。遺構の検出は少ないが、中世の遺構面と推定される第4層下面で、ほぼ平行する溝状遺構を2条検出した。規模は、幅20cm、深さ10cm程度で、轍状のものと考えられる。

また、第7a～c層からは飛鳥時代の遺物が主に出土し、それを除去した7d層上面では、土坑を検出した。西側の19区では、土坑群の時期は明らかにできなかったが、古代のある時期に窪地を埋め立て、平坦化させたと考えられる。20区の土坑からは、飛鳥時代の遺物が出土した。

2013土坑（図294・298・299、図版43・132）

ほぼ中央に位置する。平面形は不整円形を呈しており、径0.8～0.9m、深さ約0.6mを測る。埋土は、黒褐色シルトが主体であり、細砂の混入状況により、3層に分けられる。上層の方が細砂が多く含まれている。下層は細砂の量が少なくなり、粘性が強くなる。

遺物は、須恵器や土師器が少量出土した。須恵器は図化していないが、TK209～217の杯が1点ある。1297は土師器の小型の杯で、底面はやや丸みを持ち、口縁端部は短く外反する。摩滅により暗文の有無は不明。1298は土師器の甕で、口頸部をヨコナデ、体部外面はハケ、内面は斜め板ナデ調整を行う。両者とも6世紀後半から7世紀の所産であろう。



1. 黒褐色2.5Y3/2 砂質シルト(細砂主体)
2. 黒褐色10YR3/2 粘土質シルト
(極細砂～細砂を大量に含む)
3. 黒褐色2.5Y3/2 粘土質シルト(細砂を少量含む)

図299 2013土坑 平・断面図

f. 07-1 調査4トレンチ

04-2 調査で未調査であった、18区の東南隅にあたるごく狭い範囲の調査を07-1 調査で、4トレンチとして実施した。範囲は、一辺約4mである。

南・東西辺に鋼矢板を打設し、第3層上面まで機械掘削し、第3層下面、第7a～c層上面・下面、第7e層上面・下面、第9a層上面、第10層上面までの7面を検出した。空撮は行っていない。

(層序)

東半分が流路にあたるため、西半分で土層を観察した。第1層は、現代の耕作土。第2層は近世の耕作土で、厚さ7cm。第3層は中世の耕作土で、厚さ50cm。下部には、第7a～c層起源の偽礫を含む灰黄色シルトがある。第7d層は、厚さ5cm。第7e層は、細分が可能である。第7ei層は暗灰色シルトで、厚さ5～10cm、第7eii層は黄灰色粘土質シルトで、厚さ22cm、その下には厚さ15cmの黒褐色～黒色シルトがあり、土器の微細片を含んでおり、第7eii～8層と考えられる。第7e層上面はT.P.+9.07m、下面はT.P.+8.7mである。第10層は、黄褐～灰白色の粘土シルト～粘土である。

4401(2001)流路 (図300)

南北に伸びる流路をトレンチ東半分で検出した。18区の続きにあたる。4期の流路が重なっており、いずれも西側の肩と斜面を検出した。最も新しいものは、近年まで存在した農業用水路である。その下には、第3層上面より切り込む近世の流路があり、深さ1.05m、幅2.9m以上を測る。埋土は浅黄・黄褐色シルトで、下部に灰黄色細砂層があり、染付け磁器が出土している。さらに、第7d層上面から切り込む流路があり、深さ0.85mで浅黄色シルトを埋土とする。遺物は出土していないが、層位的に古墳～古代であろう。第10層も東に向かって下降しており、先行する河川が想定される。07-1 調査2-1・2トレンチ、及び18区の所見からは、全体の幅は20～25mあったと推定される。

地割れ痕

流路西肩部の第7eii層上面で検出された。流芯に平行して南北に伸びる。断層面は東側に僅かに傾いた小規模な正断層で、第9c～e層上面では東側が約6cm沈下する。全体の深さ45cm、幅2cmを測る。07-2 調査でも確認されている。

g. 07-2 調査 (図300・301)

本体工事に付随する、「一般府道住吉八尾線外の建設工事に伴う今井戸川取水施設整備工事」に先立って、実施した調査である。調査区は、18区の南東端部と接しており、上記工事で追加されたものである。18区と19区を画する南北方向の道路に沿ったかたちで、四周を鋼矢板による土留めを施した後、トレンチ調査を行った。07-1 調査4トレンチの南側につながる、南北方向に長い調査区である。

本調査地の基本層序は、以下の通りである。

- 第0層：現代盛土である。
- 第3層：にぶい黄色砂混じりシルトからなる中世の耕作土とみられる。
- 第7a～c層：黒褐色細粒砂混じりシルト～シルトからなる暗色帯構成層である。シルトの強い上部と砂質の強い下部に細分される。
- 第7d層：黄褐色砂礫からなる水成堆積層である。
- 第7e～9層：オリーブ褐色シルトからなる第9e層と、暗灰黄色粘土質シルトからなる第8層、黒色シルトからなる第9a層に細分される。第9e層は、弥生時代の暗色帯構成層であると考えられる。
- 第10層：明黄褐色シルトからなる上部と暗灰黄色粘土質シルトからなる下部の2層に細分される。

本調査の結果、18区および07-1調査で検出した、中世～近世の流路(2001流路)を検出した。流路からは近世以降の染付などの陶磁器が少量出土したのみである。流路以外の部分では、弥生時代の暗色帯構成層である第9層を検出したが、本層内での遺構・遺物の存在は希薄であった。第9層内で、地震による地すべり痕が認められ、断面で土層のずれを観察することができる。

調査当初、18区で確認された弥生時代の方形周溝墓の続きが確認されると考えられていたが、調査区の大部分は流路であり、それらの遺構群を確認することは出来なかった。

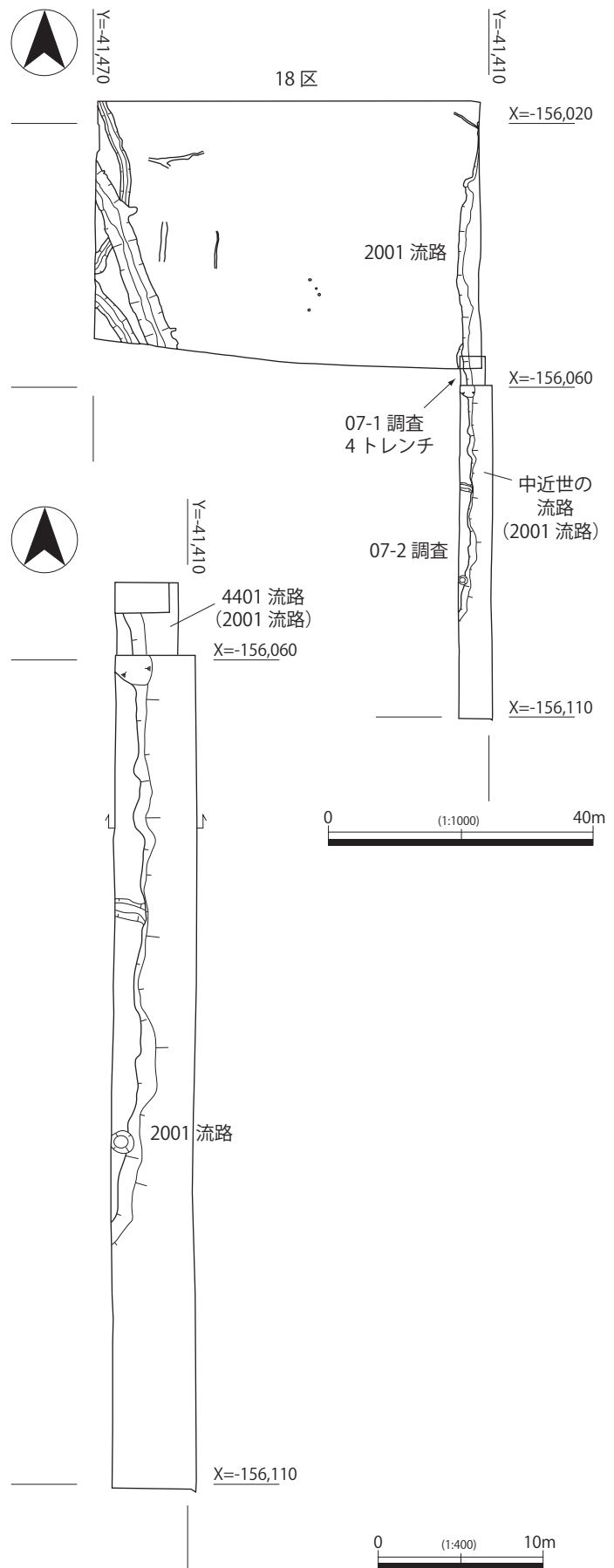


図300 07-1調査4トレンチ、07-2調査 配置図・平面図

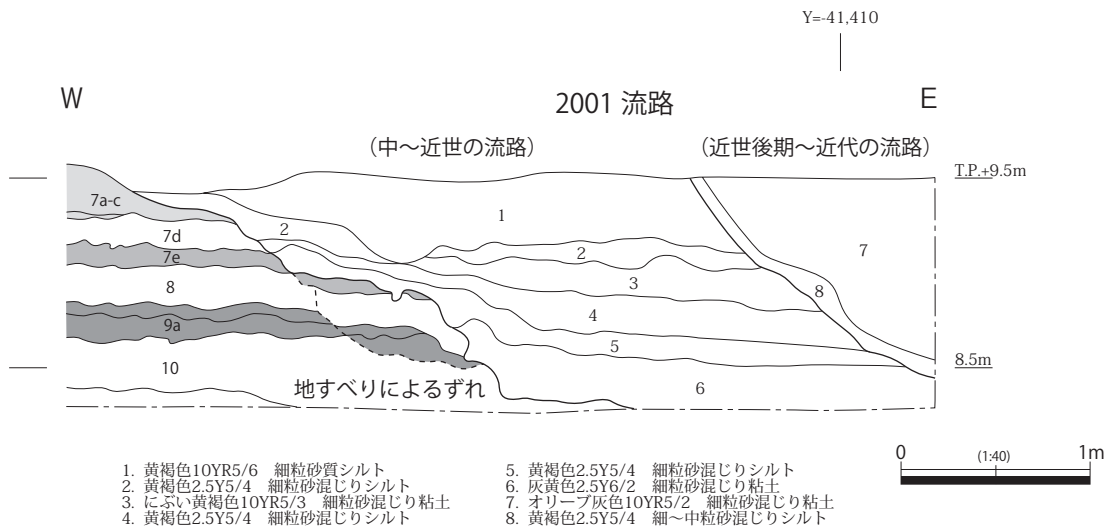


図301 07-2調査 流路断面図

4. 小結

最後に、明確な時代差は認められないが、19区南西端部における、弥生時代相当の第7e層上面の状況を簡単に述べておく。

第7e層上面は、第7d層下層の砂礫層が堆積する時点で削平を受け、全体にゆるやかな起伏を持つ。また、南西端部にあたる07-1調査2-2トレンチ南辺から北へ幅1m、東西約6mの範囲で、約15cmの高まりが認められる。これは、07-1調査2-3トレンチの道状の高まりに続く位置に当たる。この高まりの北裾に沿って、東西方向に幅約2mの浅い溝状の凹みがある。また、その北側には長さ約4m、幅1.5mの浅い不定形の落ち込みがあり、第7d層堆積時の流水による洗掘の跡と考えられる。

今回みつかった調査区東端部を占める弥生集落は、三宅西遺跡では今まで確認されておらず、竪穴住居が30棟以上まとまって検出されたことは、大きな成果である。これらの竪穴住居の中には、「松菊里型住居」と考えられる形状のものも認められることから、他地域との交流も考えられよう。さらに、集落内（特に竪穴住居内）から多量のサヌカイト剥片類が出土しており、接合資料も多くみつかったことから、石器製作の場としての集落の役割を知ることができる。今回は、一部の竪穴住居で精査してサヌカイト剥片類を細かく集めてみたが、想像以上に接合資料がみられたことから、竪穴住居におけるサヌカイト類の検出には細かい精度が求められることを痛感した。今後は、このような問題意識を持って、調査に臨む必要性を感じるようになった。

また、この弥生集落は、時期が弥生時代中期前葉を中心とし、あまり長期にわたって存続していないことも特徴的である。北側には、大規模な弥生遺跡である瓜破遺跡が営まれていることから、なんらかの関係があったものと推測される。調査地からあまり離れていない地点で検出されている方形周溝墓（UR97-19調査区）なども、18区の方形周溝墓1との関連性がうかがわれるものである。現在はまだ、具体的な状況はわかっていないが、今後、周辺での遺跡の状況が明らかになると、瓜破遺跡との関連性も判明していくものと考えられる。

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第189集

三宅西遺跡

—遺構・遺物編—

一般府道住吉八尾線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2009年 3月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地